



にし かわ め      せきむかい に  
**西川目・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書**

県営ほ場整備事業二子地区関連遺跡発掘調査





西川目・堰向Ⅱ遺跡遠景

(▼堰向Ⅱ遺跡 △西川目遺跡)



遺跡周辺と北上川との位置

北上川



西川目遺跡・水田跡



西川目遺跡・近世墓 (SZ05)



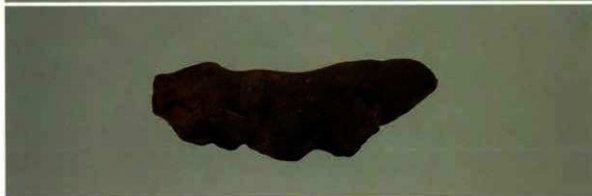
堀向Ⅱ遺跡 SI18 竪穴住居跡（焼失）



同 須恵器大甕出土状況



縁袖陶器 (塚向Ⅱ・SI26B)



歯型つき土製品 (塚向Ⅱ・SI16)

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのごさされております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれその土地とともにある埋蔵文化財との調和も求められるところであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の事前の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は県営ほ場整備事業二子地区に関連して平成15年度に発掘調査された北上市西川目・堰向Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものであります。今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡を中心とする多くの遺構が見つかり、当時の大集落の一部であったことが明らかとなりました。とくに、廂付の孤立柱建物跡などの稀少な遺構や硯や緑釉陶器といった特徴的な遺物の出土から、平安時代の拠点的な集落であったと言えると思います。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時にその保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県北上地方振興局農林部農村整備室、北上市立埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 合 田 武

## 例 言

- 1 本書は岩手県北上市二子町西川目66ほか<sup>いかりてほんけんきたかきしふたごまちにしがわみ</sup>ほかに所在する西川目遺跡<sup>にしがわみ</sup>と同南田8ほか<sup>おみなた</sup>に所在する塚向Ⅱ遺跡<sup>むかむかいて</sup>の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は「原宮ほ場整備事業」に伴って行われた緊急発掘調査である。
- 3 発掘調査は岩手県北上地方振興局農林部農村整備室の委託を受け（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査に関わる期間・面積は以下の通りである。  
発掘調査 西川目遺跡：平成15年4月9日～平成15年7月11日  
面積 2,000㎡  
塚向Ⅱ遺跡：平成15年7月14日～平成15年11月19日  
面積 3,200㎡  
整理作業 西川目遺跡：平成15年11月1日～平成16年3月31日  
塚向Ⅱ遺跡：平成15年11月1日～平成16年3月31日
- 5 現地調査は西澤正晴と小針大志が担当した。整理作業及び本書の執筆は西澤正晴・小針大志が担当し、編集は西澤正晴が行った。
- 6 遺構写真は西澤・小針が、遺物写真は福土昭夫（当センター写真技師）が撮影した。
- 7 本書で用いる方位は座標北を示す。レベル高は海拔である。
- 8 遺物番号は種別にかかわらず、連番を付した。写真図版に示した番号は本文中の遺物番号に対応する。
- 9 土層・遺物の色調は『標準上色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。
- 10 調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 調査にあたり以下の機関・方々の協力、敬示を得た。  
伊藤博幸 稲野祐介 岩田 崇 及川真紀 大波賢一 小田島知世 小田島龍一 鹿野里絵 岩島武史  
佐藤良和 杉本 良 高橋龍見 北上市教育委員会

# 目次

巻頭写真

序

例言

## 序章 調査の概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査経過	6
第4節 普及活動	8
第5節 遺跡の環境	9

## 第I章 西川I遺跡

第1節 調査の概要	19
第2節 基本層序	19
第3節 調査内容	22

## 第II章 堀向II遺跡

第1節 調査の概要	111
第2節 基本層序	115
第3節 調査内容	116

## 第III章 分析

第1節 テフラ分析	269
第2節 プラント・オパール分析	277
第3節 樹種同定	286
第4節 炭化種実の同定	289
第5節 出土遺物の形状と組成からみた堀向II遺跡における鉄器製作活動について	295

## 第IV章 考察

第1節 出土土器の年代的位置づけ	308
第2節 検出遺構について	315
第3節 掘立柱建物跡について	320

第V章 総括 .....327

観察表 .....329

## 挿図目次

第 1 図	遺跡位置	1	第 37 図	SI04 出土遺物 (10)	41
第 2 図	グリッド配置図	2	第 38 図	SI05 竪穴住居跡	43
第 3 図	周辺の地形及び調査区的位置	3	第 39 図	SI05 掘りかた	44
第 4 図	遺構の掘削	6	第 40 図	SI05 出土遺物 (1)	45
第 5 図	井戸の精査	6	第 41 図	SI05 出土遺物 (2)	45
第 6 図	作業状況	7	第 42 図	SI06 竪穴住居跡	46
第 7 図	実測作業	7	第 43 図	SI07 竪穴住居跡	48
第 8 図	土器洗浄	8	第 44 図	SI07 カマド	49
第 9 図	調査参加者	8	第 45 図	SI07 出土遺物 (1)	50
第 10 図	地形図	10	第 46 図	SI07 出土遺物 (2)	51
第 11 図	二子地区周辺の遺跡	12	第 47 図	SI09 竪穴住居跡	52
第 12 図	周辺の遺跡 (2)	13	第 48 図	SI09 出土遺物 (1)	53
第 13 図	A 区遺構配置図	20	第 49 図	SI09 出土遺物 (2)	54
第 14 図	B 区遺構配置図	21	第 50 図	SI09 出土遺物 (3)	55
第 15 図	SI01 竪穴住居跡	22	第 51 図	SI10 竪穴住居跡	56
第 16 図	SI01 掘りかた	23	第 52 図	SI10 掘りかた	56
第 17 図	SI01 カマド	24	第 53 図	SI10 カマド	57
第 18 図	SI01 出土遺物	25	第 54 図	SI10 旧カマド	58
第 19 図	SI02 出土遺物 (2)	25	第 55 図	SI10 出土遺物	59
第 20 図	SI03 竪穴住居跡	27	第 56 図	SB01 竪立柱建物跡	60
第 21 図	SI03 掘りかた	27	第 57 図	SB02 竪立柱建物跡	61
第 22 図	SI03 カマド	28	第 58 図	SB03 竪立柱建物跡	64
第 23 図	SI03 出土遺物	29	第 59 図	SB04・05・06 竪立柱建物跡	65
第 24 図	SI04 竪穴住居跡	30	第 60 図	SD01・02・03 溝跡	68
第 25 図	SI04 カマド	31	第 61 図	SI04 溝跡	69
第 26 図	SI04 遺物出土状況	31	第 62 図	SD05 溝跡	70
第 27 図	SI04 旧カマド	32	第 63 図	SK05 出土遺物	71
第 28 図	SI04 出土遺物 (1)	32	第 64 図	SK01・02・03・05	72
第 29 図	SI04 出土遺物 (2)	33	第 65 図	SE01・02・03 井戸跡	73
第 30 図	SI04 出土遺物 (3)	34	第 66 図	ピット出土遺物	74
第 31 図	SI04 出土遺物 (4)	35	第 67 図	ピット位置図 (1)	75
第 32 図	SI04 出土遺物 (5)	36	第 68 図	ピット位置図 (2)	76
第 33 図	SI04 出土遺物 (6)	37	第 69 図	ピット位置図 (3)	77
第 34 図	SI04 出土遺物 (7)	38	第 70 図	SF01 水山跡	78
第 35 図	SI04 出土遺物 (8)	39	第 71 図	A 区水田跡断面	79
第 36 図	SI04 出土遺物 (9)	40	第 72 図	近世墓群	81



第73区	SZ01 墓塚跡	82	第111区	SI01 出土遺物(3)	120
第74区	SZ01 出土遺物	82	第112区	SI02 竪穴住居跡	120
第75区	SZ02 墓塚跡	83	第113区	SI03 竪穴住居跡	121
第76区	SZ02 墓塚跡 出土遺物	84	第114区	SI03 カマド	122
第77区	SZ03 墓塚跡	85	第115区	SI03 B 竪穴住居跡	123
第78区	SZ03 出土遺物	86	第116区	SI03 B カマド	124
第79区	SZ03 出土棺材	87	第117区	SI03 出土遺物(1)	125
第80区	SZ04 墓塚跡	88	第118区	SI03 出土遺物(2)	126
第81区	SZ04 出土遺物	89	第119区	SI03 出土遺物(3)	126
第82区	SZ04 出土棺材	90	第120区	SI04 竪穴住居跡	127
第83区	SZ05 墓塚跡	91	第121区	SI04 掘りかた	128
第84区	SZ05 出土遺物	92	第122区	SI04 出土遺物	128
第85区	SZ05 出土棺材	93	第123区	SI05 竪穴住居跡	129
第86区	SZ06 墓塚跡	95	第124区	SI05 掘りかた	130
第87区	SZ06 出土遺物	95	第125区	SI05 カマド	131
第88区	SZ06 出土棺材	96	第126区	SI05 旧カマド	132
第89区	SZ07 墓塚跡	97	第127区	SI05 出土遺物	132
第90区	SZ07 出土遺物	98	第128区	SI06 竪穴住居跡	133
第91区	SZ07 出土棺材	99	第129区	SI07 竪穴住居跡	134
第92区	SZ08 墓塚跡	100	第130区	SI07 掘りかた	134
第93区	SZ08 出土遺物	100	第131区	SI07 出土遺物	135
第94区	SZ09 墓塚跡	101	第132区	SI08 竪穴住居跡	135
第95区	SZ09 出土棺材	102	第133区	SI08 掘りかた	136
第96区	SZ09 出土遺物	103	第134区	SI08 カマド	137
第97区	SZ10 墓塚跡	104	第135区	SI08 出土遺物	138
第98区	SZ10 出土遺物	104	第136区	SI09 竪穴住居跡	138
第99区	SZ 不明遺物	105	第137区	SI09 掘りかた	139
第100区	遺構外出土遺物(1)	106	第138区	SI09 カマド	140
第101区	遺構外出土遺物(2)	107	第139区	SI09 出土遺物(1)	141
第102区	埴向Ⅱ遺跡A区遺構配置区	111	第140区	SI09 出土遺物(2)	141
第103区	B区遺構配置区	112	第141区	SI10 竪穴住居跡	142
第104区	C区遺構配置区	113	第142区	SI10 掘りかた	143
第105区	D区遺構配置区	114	第143区	SI10 出土遺物	143
第106区	SI01 竪穴住居跡	116	第144区	SI11 竪穴住居跡	144
第107区	SI01 掘りかた	117	第145区	SI11 掘りかた	145
第108区	SI01 カマド	118	第146区	SI11 カマド	146
第109区	SI01 出土遺物(1)	119	第147区	SI11 出土遺物	147
第110区	SI01 出土遺物(2)	119	第148区	SI12 竪穴住居跡	148

第149図	SI12 掘りかた	149	第187図	SI23 竪穴住居跡	181
第150図	SI12 カマド	150	第188図	SI23 出土遺物	182
第151図	SI12 出土遺物	151	第189図	SI24 竪穴住居跡	183
第152図	SI13 竪穴住居跡	151	第190図	SI24 掘りかた	183
第153図	SI13 掘りかた	152	第191図	SI24 出土遺物	184
第154図	SI14 竪穴住居跡	153	第192図	SI25 竪穴住居跡	185
第155図	SI14 掘りかた	154	第193図	SI25 掘りかた	185
第156図	SI14 カマド	155	第194図	SI25 カマド	186
第157図	SI14 遺物出土状況	155	第195図	SI25 出土遺物	186
第158図	SI14 出土遺物	156	第196図	SI26 竪穴住居跡	189
第159図	SI15 竪穴住居跡	157	第197図	SI26 竪穴住居跡断面図	190
第160図	SI15 掘りかた	157	第198図	SI26 カマド	191
第161図	SI16・17 竪穴住居跡	158	第199図	SI26 旧カマド	193
第162図	SI17 掘りかた	159	第200図	SI26 掘りかた	195
第163図	SI16 出土遺物(1)	159	第201図	SI26 出土遺物(1)	196
第164図	SI16 出土遺物(2)	159	第202図	SI26 出土遺物(2)	197
第165図	SI17 出土遺物	159	第203図	SI26 出土遺物(3)	198
第166図	SI18 竪穴住居跡	160	第204図	SI26B 竪穴住居跡	199
第167図	SI18 出土炭化材	161	第205図	SI26B 掘りかた	200
第168図	SI18 遺物出土状況	162	第206図	SI26B 遺物出土状況	201
第169図	SI18 出土遺物(1)	163	第207図	SI26B 出土遺物(1)	202
第170図	SI18 出土遺物(2)	164	第208図	SI26B 出土遺物(2)	203
第171図	SI18 出土遺物(3)	165	第209図	SI26B 出土遺物(3)	203
第172図	SI19 竪穴住居跡	168	第210図	SI26・26B 出土遺物(4)	203
第173図	SI19 掘りかた	168	第211図	SI27 竪穴住居跡	204
第174図	SI19 出土遺物	169	第212図	SI27 掘りかた	205
第175図	SI20 竪穴住居跡	170	第213図	SI27B 竪穴住居跡	205
第176図	SI20 掘りかた	171	第214図	SI27 出土遺物	205
第177図	SI20 カマド	172	第215図	SI28 竪穴住居跡	206
第178図	SI20 出土遺物(1)	173	第216図	SI28 竪穴住居跡ピット断面図	206
第179図	SI20 出土遺物(2)	173	第217図	SI28 掘りかた	208
第180図	SI21 竪穴住居跡	174	第218図	SI28 カマド	209
第181図	SI21 掘りかた	175	第219図	SI28 旧カマド	210
第182図	SI21 出土遺物	176	第220図	SI28 出土遺物	211
第183図	SI22 竪穴住居跡	177	第221図	SI29 竪穴住居跡	212
第184図	SI22 掘りかた	178	第222図	SI29 掘りかた	213
第185図	SI22 カマド	179	第223図	SI29 出土遺物	213
第186図	SI22 出土遺物	181	第224図	SI30 竪穴住居跡	214

第225図	SI30 掘りかた	215	第253図	SD 出土遺物	250
第226図	SI30 カマド・旧カマド	216	第254図	SD05 溝跡	250
第227図	SI30 出土遺物	217	第255図	SD06 溝跡	251
第228図	SI30 出土遺物(2)	217	第256図	SD07・08 溝跡	251
第229図	SI31 竪穴住居跡	229	第257図	SI09 溝跡	252
第230図	SI32 竪穴住居跡	220	第258図	SE01・02 井戸跡	254
第231図	SI33 竪穴住居跡	220	第259図	SE01 出土遺物	254
第232図	SI38 竪穴住居跡	221	第260図	SI33 出土遺物	256
第233図	SI38 掘りかた	221	第261図	SI35 出土遺物	256
第234図	SI39 竪穴住居跡	223	第262図	ビット位置図(1)	257
第235図	SI39 掘りかた	224	第263図	ビット位置図(2)	258
第236図	SI39 出土遺物	224	第264図	ビット位置図(3)	259
第237図	SH03 出土遺物	225	第265図	ビット位置図(4)	260
第238図	SB01・02 掘立柱建物跡	226	第266図	ビット位置図(5)	261
第239図	SB03 掘立柱建物跡	227	第267図	ビット位置図(6)	262
第240図	SK02 出土遺物	229	第268図	ビット位置図(7)	263
第241図	SK04 遺物出土状況	230	第269図	ビット位置図(8)	264
第242図	土坑(SK) 平面図	232	第270図	ビット位置図(9)	265
第243図	土坑(SK) 平面図(2)	234	第271図	遺構外出土遺物(1)	266
第244図	土坑(SK) 平面図(3)	236	第272図	遺構外出土遺物(2)	267
第245図	土坑(SK) 平面図(4)	238	第273図	遺構外出土遺物(3)	268
第246図	土坑(SK) 平面図(5)	243	第274図	遺構外出土遺物(4)	268
第247図	土坑出土遺物	244	第275図	杯の分類	308
第248図	SK09 出土石器	245	第276図	甕の分類	309
第249図	SD01・02 溝跡	247	第277図	各遺跡の住居規模	315
第250図	SD03 溝跡	248	第278図	住居方位	316
第251図	SD03 出土遺物	248	第279図	岩手県内掘立柱建物の諸例	322
第252図	SD04 溝跡	249			

## 表 目 次

第1表	土器組成表	312	第9表	西川目遺跡Pit観察表	341
第2表	岩手県内の掘立柱建物跡集成	321	第10表	堰向II遺跡土器観察表	346
第3表	西川目遺跡土器観察表	331	第11表	堰向II遺跡陶磁器観察表	356
第4表	西川目遺跡陶磁器観察表	333	第12表	堰向II遺跡金属製品観察表	357
第5表	西川目遺跡木製品観察表	334	第13表	堰向II遺跡石器観察表	357
第6表	西川目遺跡金属製品観察表	334	第14表	堰向II遺跡Pit観察表	358
第7表	西川目遺跡石器観察表	336	第15表	堰向II遺跡土製品観察表	366
第8表	西川目遺跡土製品観察表	336			

## 写 真 図 版 目 次

- |   |  |
|---|--|
| <p>写真図版1-1 西川目遺跡遠景①(南から)</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 西川目遺跡遠景②(西から)</p> <p>写真図版2 西川目遺跡A区(南から)</p> <p>写真図版3 西川目遺跡B区</p> <p>写真図版4-1 基本土層</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 作業風景</p> <p>写真図版5-1 A区調査前状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 B区北調査前状況</p> <p style="padding-left: 40px;">3 B区南調査前状況</p> <p>写真図版6-1 SI01 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI01 南北土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI01 東西土層断面</p> <p>写真図版7-1 SI03 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI03 東西土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI03 南北土層断面</p> <p>写真図版8-1 SI03 カマド完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI03 カマド土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI03 掘りかた</p> <p>写真図版9-1 SI04 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI04 東西土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI04 南北土層断面</p> <p>写真図版10-1 SI04 カマド検出状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI04 旧カマド完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI04 遺物出土状況</p> <p>写真図版11-1 SI05 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI05 東西土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI05 南北土層断面</p> <p>写真図版12-1 SI07 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI07 南北土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI07 東西土層断面</p> <p>写真図版13-1 SI07 ビット1</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI07 ビット2</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI07 カマド周辺遺物出土状況</p> <p>写真図版14-1 SI07 カマド完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI07 カマド土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">3 SI07 カマド袖断ち割り</p> | <p>写真図版15-1 SI09 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">2 SI09 土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI09 遺物出土状況</p> <p>写真図版16-1 SI10 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI10 土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI10 カマド完掘状況</p> <p>写真図版17-1 SI10 カマド土層断面(南北)</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI10 カマド土層断面(東西)</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI10 カマド袖断ち割り状況</p> <p>写真図版18-1 SI10 旧カマド</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SI10 旧カマド土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SI10 カマド遺物出土状況</p> <p>写真図版19 A2区完掘</p> <p>写真図版20-1 SB02 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SB02 柱配置状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SB02 整地層断面</p> <p>写真図版21-1 SB02 柱穴断面(1)</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SB02 柱穴断面(2)</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SB02 柱穴断面(3)</p> <p>写真図版22-1 SB01 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SB03 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SB04・05・06 完掘状況</p> <p>写真図版23-1 SE01 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SE01 土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SE02 完掘状況</p> <p>写真図版24-1 近世墓群</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SZ01 完掘状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 3 SZ01 土層断面</p> <p>写真図版25-1 SZ02・03 棺検出状況</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SZ02・03 掘りかた</p> <p style="padding-left: 20px;">3 SZ03 遺物出土状況</p> <p>写真図版26-1 SZ02 土層断面</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SZ02 遺物出土状況</p> <p style="padding-left: 20px;">3 SZ03 棺検出状況</p> <p>写真図版27-1 SZ04 棺検出状況①</p> <p style="padding-left: 20px;">- 2 SZ04 棺検出状況②</p> |
|---|--|

- 3 SZ04 掘りかた  
 写真図版28-1 SZ05 棺検出状況①  
 - 2 SZ05 棺検出状況②  
 - 3 SZ05 遺物出土状況  
 写真図版29-1 SZ05 上層断面  
 2 SZ05 掘りかた  
 - 3 近世墓群完掘状況  
 写真図版30-1 SZ06 棺検出状況①  
 - 2 SZ06 棺検出状況②  
 - 3 SZ06 上層断面  
 写真図版31 1 SZ07 棺検出状況①  
 - 2 SZ07 棺検出状況②  
 - 3 SZ07 土層断面  
 写真図版32-1 SZ09 棺検出状況①  
 - 2 SZ09 棺検出状況②  
 3 SZ07・09 検出状況  
 写真図版33 A区水田跡 (SF01)  
 写真図版34-1 A区水田跡 (SF01)  
 - 2 A区水田跡断面  
 写真図版35-1 堰向II遺跡遠景 (東南より)  
 - 2 堰向II遺跡遠景  
 写真図版36 A区全景 (西から)  
 写真図版37 B区全景 (北から)  
 写真図版38 C区全景 (北から)  
 写真図版39 1 B区調査前状況①  
 - 2 B区調査前状況②  
 - 3 C区調査前状況  
 写真図版40-1 SI01 完掘状況  
 - 2 SI01 上層断面  
 - 3 SI01 カマド  
 写真図版41-1 SI02 完掘状況  
 - 2 SI02 完掘状況  
 3 SI03 土層断面  
 写真図版42-1 SI03 カマド①  
 - 2 SI03 カマド②  
 - 3 SI03 カマド土層断面  
 写真図版43-1 SI03B完掘状況①  
 - 2 SI03B完掘状況②

- 3 SI03 旧カマド断面  
 写真図版44-1 SI04 完掘状況  
 - 2 SI04 東西土層断面  
 - 3 SI04 南北土層断面  
 写真図版45 1 SI05 完掘状況  
 - 2 SI05 東西土層断面  
 - 3 SI05 南北土層断面  
 写真図版46-1 SI05 カマド完掘状況①  
 - 2 SI05 カマド完掘状況②  
 - 3 SI05 カマド土層断面  
 写真図版47-1 SI05 旧カマド  
 - 2 SI01 完掘状況  
 - 3 SI06 土層断面  
 写真図版48-1 SI07 完掘状況  
 - 2 SI07 東西土層断面  
 - 3 SI07 南北土層断面  
 写真図版49-1 SI08 完掘状況  
 - 2 SI08 土層断面  
 - 3 SI08 掘りかた  
 写真図版50-1 SI08 カマド完掘状況  
 2 SI08 カマド土層断面  
 - 3 SI08 カマド軸断ち割り  
 写真図版51-1 SI09 完掘状況  
 - 2 SI09 土層断面  
 - 3 SI09 掘りかた  
 写真図版52-1 SI09 カマド完掘状況  
 - 2 SI09 土層断面  
 - 3 SI09 カマド軸断ち割り  
 写真図版53 1 SI10 完掘状況  
 - 2 A区東検出状況  
 - 3 SI11 検出状況  
 写真図版54-1 SI11 検出状況  
 - 2 SI11 東西土層断面  
 - 3 SI11 南北土層断面  
 写真図版55-1 SI11 カマド完掘状況  
 - 2 SI11 カマド土層断面①  
 3 SI11 カマド土層断面②  
 写真図版56-1 SI11 カマド軸断ち割り

	- 2	SI11 掘りかた①
	- 3	SI11 掘りかた②
写真図版57-1	1	SI12 完掘状況
	- 2	SI12 土層断面
	- 3	SI12 カマド
写真図版58-1	1	SI13 完掘状況
	- 2	SI13 土層断面
	- 3	SI13 掘りかた
写真図版59-1	1	SI14 完掘状況
	- 2	SI14 土層断面
	- 3	SI14 遺物出土状況
写真図版60-1	1	SI15 完掘状況
	- 2	SI15 南北土層断面
	- 3	SI15 東西土層断面
写真図版61-1	1	SI16・17 完掘状況
	- 2	SI16・17 東西土層断面
	- 3	SI16・17 南北土層断面
写真図版62-1	1	SI18 検出状況
	- 2	SI18 完掘状況
	- 3	SI18 土層断面
写真図版63-1	1	SI18 遺物検出状況①
	- 2	SI18 遺物検出状況②(東から)
	- 3	SI18 遺物検出状況③(北から)
写真図版64-1	1	炭化材出土状況
	- 2	長嶺瓶出土状況
	- 3	須恵器大甕出土状況
写真図版65-1	1	SI19 完掘状況
	- 2	SI19 南北土層断面
	- 3	SI19 東西土層断面
写真図版66-1	1	SI20 検出状況
	- 2	SI20 完掘状況
	- 3	SI20 土層断面
写真図版67-1	1	SI20 カマド
	- 2	SI20 カマド土層断面
	- 3	SI20 カマド煙道断面
写真図版68-1	1	SI20 遺物出土状況
	- 2	SI20 掘りかた①
	- 3	SI20 掘りかた②

写真図版69-1	1	SI21 完掘状況
	- 2	SI21 東西土層断面
	- 3	SI21 南北土層断面
写真図版70-1	1	SI21 掘りかた
	- 2	SI21 釘跡検出状況
	- 3	SI21 伊跡完掘状況
写真図版71-1	1	SI22 完掘状況
	- 2	SI22 土層断面
	- 3	SI22 掘りかた
写真図版72-1	1	SI22 カマド完掘状況
	- 2	SI22 カマド土層断面(東西)
	- 3	SI22 カマド土層断面(南北)
写真図版73-1	1	SI23 完掘状況
	- 2	SI24 完掘状況
	- 3	SI24 土層断面
写真図版74-1	1	SI25 完掘状況
	- 2	SI25 土層断面
	- 3	SI25 掘りかた
写真図版75-1	1	SI25 カマド
	- 2	SI25 カマド煙道
	- 3	SI25 カマド土層断面
写真図版76-1	1	SI26 検出状況
	- 2	SI26 完掘状況
	- 3	SI26 掘りかた
写真図版77-1	1	SI26 土層断面①
	- 2	SI26 土層断面②
	- 3	SI26 土層断面③
写真図版78-1	1	SI26 カマド
	- 2	SI26 カマド断ち割り
	- 3	SI26 旧カマド
写真図版79-1	1	SI26 B 完掘状況
	- 2	SI26 B 土層断面
	- 3	SI26 B 掘りかた
写真図版80-1	1	SI26 B 遺物出土状況①
	- 2	SI26 B 遺物出土状況②
	- 3	SI26 B ナベ出土状況
写真図版81-1	1	SI27 完掘状況
	- 2	SI27 土層断面

- 3 SI27B 完掘状況  
写真図版82- 1 SI28 完掘状況  
- 2 SI28 土層断面  
- 3 SI28 掘りかた  
写真図版83 1 SI28 カマド①  
- 2 SI28 カマド②  
- 3 SI28 カマド袖断ち割り  
写真図版84- 1 SI29 完掘状況  
- 2 SI29 掘りかた  
- 3 SI30 完掘状況  
写真図版85- 1 SI30 カマド完掘状況  
2 SI30 カマド土層断面  
- 3 SI38 完掘状況  
写真図版86- 1 SI38 カマド土層断面  
- 2 SI39 完掘状況  
- 3 SI39 掘りかた  
写真図版87- 1 SE01 完掘状況  
- 2 SE01 土層断面  
- 3 SE02 完掘状況  
写真図版88- 1 SB01 完掘状況  
- 2 SB02 完掘状況  
- 3 SB03 完掘状況  
写真図版89- 1 SD01・02 完掘状況  
- 2 SD03 完掘状況  
- 3 SD04 完掘状況  
写真図版90- 1 SD05 土層断面  
- 2 SD06 土層断面  
- 3 SD07・08 完掘状況  
写真図版91- 1 SK04 土層断面  
- 2 SK04 下層遺物出土状況  
- 3 SK04 上層遺物出土状況  
写真図版92 1 SK20 土層断面  
- 2 SK27 遺物出土状況  
- 3 SK29 完掘状況  
写真図版93- 1 D区南全景（南から）  
- 1 D区北全景（北から）  
写真図版94 SI01 出土土器①  
写真図版95 SI01 出土土器②

写真図版96 SI02 出土土器  
写真図版97 SI04 出土土器  
写真図版98 SI04・05 出土土器  
写真図版99 SI05 出土土器②  
写真図版100 SI07 出土土器  
写真図版101 SI07 ②・09 出土土器  
写真図版102 SI10 出土土器  
写真図版103 Pit・遺構外出土遺物  
写真図版104 土鍔  
写真図版105 SZ03 出土棺材  
写真図版106 SZ04 出土棺材  
写真図版107 SZ05 出土棺材  
写真図版108 SZ06 出土棺材  
写真図版109 SZ07 出土棺材  
写真図版110 SZ09 出土棺材  
写真図版111 金属製品  
写真図版112 銭貨  
写真図版113 近世墓（SZ）出土鉄釘  
写真図版114 SI01 出土土器  
写真図版115 SI03 ①出土土器  
写真図版116 SI03 ②出土土器  
写真図版117 SI04・05 出土土器  
写真図版118 SI08・09・11 出土土器  
写真図版119 SI14 出土土器  
写真図版120 SI18 出土土器①  
写真図版121 SI18出土遺物②  
写真図版122 SI18・SI19 出土土器③  
写真図版123 SI18 出土土器④  
写真図版124 SI20・21 出土土器  
写真図版125 SI22・23・24・25 出土土器  
写真図版126 SI26 出土土器①  
写真図版127 SI26 出土土器②  
写真図版128 SI26 出土土器③  
写真図版129 SI26 出土土器④  
写真図版130 SI26B 出土土器①  
写真図版131 SI26B 出土土器②  
写真図版132 SI26B 出土土器③  
写真図版133 SI28 出土土器①

写真図版134 SI28 出土土器②  
写真図版135 SI29・30 出土土器  
写真図版136 SI33・35・39 出土土器  
写真図版137 SK 出土土器①  
写真図版138 SK 出土土器②  
写真図版139 SD04・SE01・遺構外出土遺物

写真図版140 遺構外出土遺物  
写真図版141 出土鉄製品  
写真図版142 SI26B 出土陶硯  
写真図版143 出土土製品  
写真図版144 出土石器



## 序章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経過

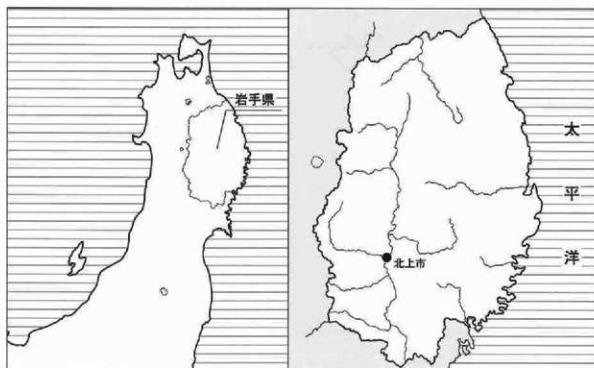
西川目及び堰向Ⅱ遺跡は、ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）二子地区の施工に伴い、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、北上市二子町地内の200haの地区で、現況の水田は昭和27～29年にかけて10a区画に整備されたもの耕作道は2～3mと狭小で小用水路はほとんどが土水路で漏水し、小排水路は水路底が浅く排水不良により湿田化し、営農の大型機械化、耕地の汎用化、さらには農地の流動化、生活環境の向上など高生産性農業を阻害している。それらの阻害要因を除去し、土地利用型農業の生産性の向上を図るために農地を集団化し近代農業の中心となりうる担い手が農業生産を効率的かつ安定的に担い、新時代農業構造の確立に資することが肝要であり、生産基盤の整備と生活環境の一体整備を実施することとして、平成8年度に新規採択されたものである。

本事業の施工に係わる埋蔵文化財の取扱については、ほ場整備事業主体の北上農村整備事務所（現北上地方振興局農林部農村整備室）が、平成14年11月21日付け北農整第506号で県教育委員会に試掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教育委員会では、平成14年11月28日付け教生第1260号でその旨の回答があり、発掘調査が必要となった。これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団に発掘調査を委託することになった。

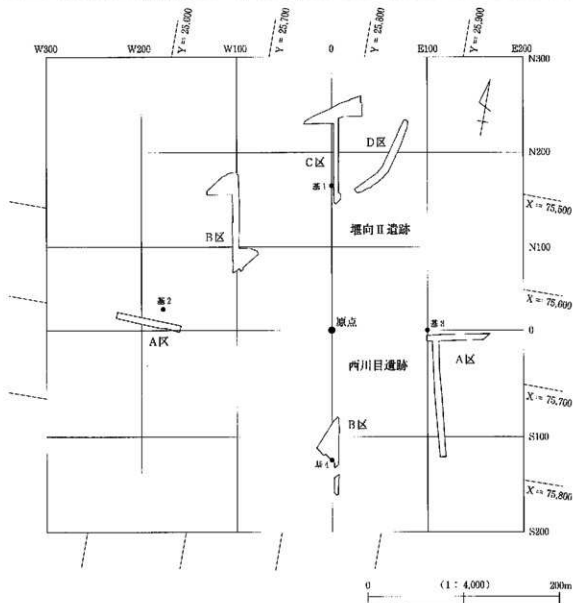
（北上地方振興局農林部農村整備室）



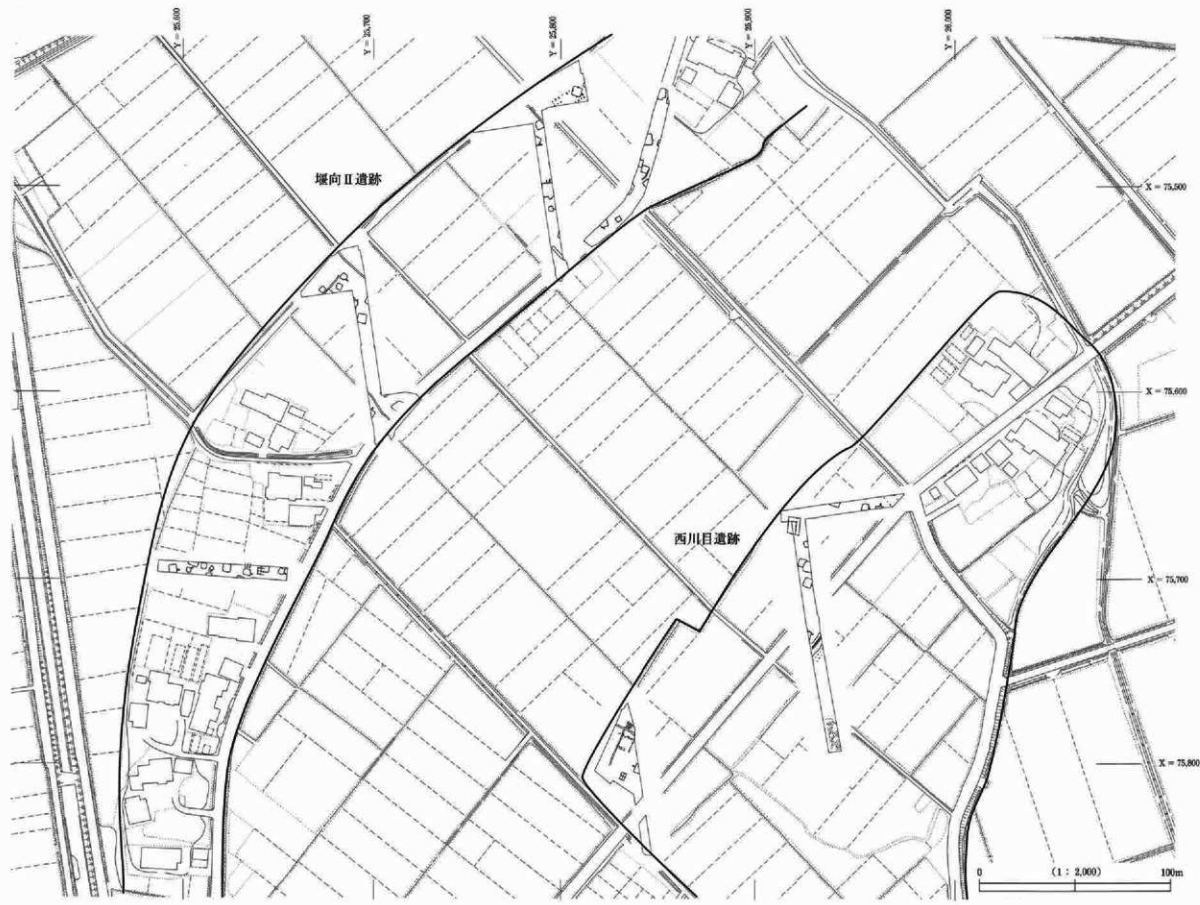
第1図 遺跡位置

## 第2節 調査の方法

グリッドの設定 調査を行うにあたって、遺構の位置や遺物の出土地点を正確に把握するためグリッドの設定を行っている。調査は西川目遺跡のあと引き続いて堰向II遺跡についても行う予定であったため、共通のグリッドを設定した。各遺跡はほぼ整備事業に伴う道路や水路建設予定地であったため、非常に細長い調査区であり、また、それぞれの調査区が正方位に乗らないため国家座標をそのまま基準とする事が困難であった。そのためグリッドの軸は調査区の方角を基準とし、2遺跡のほぼ中間地点である排特2号水路予定地中央を原点として、最小1m×1mのグリッドを設定した。したがって、座標北より約11°西へ触れることとなる(第2図)。グリッド名は原点からの方向と距離を使用した。例えば、N10W10なら原点から北へ10m、西へ10mの地点のグリッドである。各グリッド北西端をそのグリッド名としている。また、国家座標に対応させるための基準点を4カ所、補助杭を8カ所に各調査区付近に打設した。基準杭の打設は測量業者に依頼



第2図 グリッド配置図



第3図 周辺の地形及び調査区の配置

している。成果については以下の通りである。なお、座標今回世界測地系を使用している。

基本杭 1	X = 7530.8317	Y = 25790.0081	H = 63.963
基本杭 2	X = 75695.2454	Y = 25635.5280	H = 64.446
基本杭 3	X = 75671.6709	Y = 25915.6709	H = 63.567
基本杭 4	X = 75814.7049	Y = 25838.5881	H = 63.454

**試掘** 本調査に先立ち試掘を行っている。試掘は岩手県教育委員会生涯学習文化課により前年度に行われているが、層序・土質・遺構の密度や状態を把握するために再度行った。幅1m、長さ2mほどのトレンチを各調査区に計21カ所入れ、人力で行った。その結果、表土である現耕作土直下に遺構検出面が存在すること、遺構の密度が当初予想より多くなること、部分的に遺構が削平されていることなどが予想された。また、西川目遺跡においては、一段低い部分（A区南端部分）には水田耕作土可能性があることが確認できた。そのため、試掘後に分析業者に依頼してプラント・オパール分析を依頼した（結果については第Ⅲ章参照）。

**表土掘削** 試掘の結果、遺構検出面までは約20～30cmの深さしかないことが判明しているが、調査期間・予算が非常に限定されているため、重機（バックホウ）を使用することにより作業の効率化を図った。重機の使用にあたり、検出面まで浅いことから調査員の監督のもと、遺構に影響が及ばないよう最大限に留意した。

**遺構検出・精査** 検出作業にあたっては人力による作業に頼った。鍬などを使用して遺構の確認を行ったのちに、移植こてを使用して掘り下げている。遺物の取り上げは写真撮影や微細図作成の後に竹筵などを使用して行っている。遺構の掘り下げはおもに2分法や4分法を適宜使い分けて、土層を観察しながら進めた。上層の把握が困難な場合については適宜サブトレンチを入れ、理解に心がけている。完掘後は記録を取ったのちに、断ち割りを行い、掘りかたや貼床の状況を再確認している。

**遺構の命名** 検出された遺構については以下の記号を使用して略称している。

竪穴住居跡：SI	掘立柱建物跡：SB	土坑：SK	溝跡：SD	樁跡：SA
ピット（小穴）：Pit（遺構内のピット：ピット）	水田跡：SF	不明遺構：SX		

**記録の作成** おもに、遺構検出時、土層断面、遺物出土状況、遺構完掘時には、写真撮影・実測図の作成を行っている。写真撮影は基本的に8×7版カメラを使用し、フィルムはモノクロを使用しているがカラーも適宜使用している。また、補助としてデジタルカメラを使用した。調査終了時にはセスナによる航空写真の撮影も行っている。実測作業は、基本的に1/20縮尺で平面・断面図の作成を行っているが、一部（遺物出土状況・カマドなど）については1/10などの縮尺で図化している。

**確認調査** 調査地点が隣接するため、本調査と同時に確認調査も行った。確認調査は、工事によって掘削が及ばない、つまり遺構が破壊されない部分について行っている。具体的には西川目遺跡のA区の一部、塚向Ⅱ遺跡のD区の一部である。ここで検出された遺構については基本的に、検出作業を行った後に遺構の位置や範囲の図化と写真撮影を行った後に調査を終了している。なお、遺構の一部が本調査区に及んでいる場合は精査を行っている。そのため、確認調査区の範囲にある遺構でも本調査を行った遺構がある。また、塚向Ⅱ遺跡D区については、岩手県教育委員会生涯学習文化課、委託者、当センターとの協議の上、工事予定の深度が深く及ぶ部分についてはのみ本調査、及ばない部分は確認調査を行っている。したがって、D区につい

ては変則的に本調査区と確認調査区が入り組んだ状況となっている。

**整理作業** 野外調査の終了後ただちに室内整理作業を行っている。出土した遺物や図面類の整理、報告書の作成に向けた作業である。現場で作成した図面類は、点検・合成を行ったのちに第2原図を作成した。遺物類は、洗浄後、記名、接合、復元作業を経て、実測に移る。作成された各図面類はその後製図、版組を行った。また遺物については写真撮影を行った後に版組みをしている。室内整理作業は3月31日をもって終了した。

### 第3節 調査経過

#### 西川目遺跡

野外調査は4月9日より開始した。調査区は2つの地区に別れていたため調査順に東からA区・B区と命名した。A区はさらに市道により2カ所に分断されている。そのため東西の区域をA1区、南北の区域のうち市道より北をA2区、南側をA3区と呼称することにした。調査はA区より開始する。

4月中旬 調査の開始。試掘、機械掘削、検出作業を行う。A1・2区については、Ⅲ層である黒褐色土がよく残存しているため、遺構堆積土との区別が難しく、検出には困難を要した。検出はA1区東側からはじめ、西側、A2・3区の順に進めた。

4月下旬 A区の1回目の遺構検出作業が終了し、B区の検出を行う。A区では住居跡、ピットが多数検出され、灰白色火山灰が含まれる住居跡なども確認できた。これによって、時期が大まかながら判断し得るようになる。

5月上旬 B区の1回目の検出作業が終了し、遺構数がほぼ確定する。遺構精査の前に、遺構の集中が予想されるA1区東側や検出が困難であったA3区を中心に再検出を行っている。A3区は遺構が検出されている面よりも地形的に一段下がっている場所であり、水田跡の検出が期待される場所である。したがって、壁際に側溝を掘り、断面の把握を試みた。その結果、火山灰が粒子状の含まれる土層が堆積しており、削平を受けているものの水田耕作土の可能性が認められた。肉眼観察では確定できないので業者に依頼し、土壌分析を行っている。中旬よりA1区の遺構の精査を開始する。

5月下旬 竪穴住居跡を中心に精査を行い、併行してB区の再検出も行った。その結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。また、集落の境界も判明している。

6月上旬 A区の遺構はほぼ完掘状態にあったが、A1区と2区との境界部分に、崩付きと思われる掘立柱建物跡が検出された。調査区内では一部のみであったため、範囲を広げて確認を行っている。いっぽうで、



第4図 遺構の掘削



第5図 井戸の精査

B区の精査を本格的に開始している。近世の掘立柱建物跡や近世墓は重複が多く、精査が困難であった。また、近世墓には、棺材が良好に残存していたため、調査に時間を要している。ここまでで、すべての遺構に調査が進んだため、9日に航空写真撮影を行っている。

6月下旬 A・B区とも竪穴住居跡のカマドの断ち割りを行っているが、主体はA3区の低地部分とB区の近世墓の精査である。前者では、擬似畦畔と思われる痕跡が確認されることから水田跡であると判断された。後者の調査は引き続き精査と図面作成をあわせて行っている。28日には雨天のなか現地説明会を行っている。

7月上旬 調査も終盤となったが、委託者との協議の結果、調査予定区内に存在する市道部分については、遺構の広がり予想されることから、調査を行うこととなった。

近世墓の調査は最後まで残ったが、7月11日をもって全て終了し、塚向Ⅱ遺跡へ移動した。

#### 塚向Ⅱ遺跡

塚向Ⅱ遺跡は当初3カ所の調査区に別れており、西側からA・B・C区と命名した。その後、B・C区の南端部分について面積の増加が行われ、さらに、調査終盤にもう1カ所の調査区が増加された(D区)。したがって、合計4カ所の調査区に分割して、調査を行うこととなる。調査は開場整備工事の優先順にB区より開始した。

7月上旬 試掘から調査を開始した。調査区が3カ所に分かれていたため、トレンチの数が多くなった。合計20本を各調査区に入れている。その結果、土層堆積は西川目遺跡と同様であることが判明したが、遺構の密度が高いことわかり、調査の難航が予想された。

7月下旬 試掘の後、重機による表土掘削を行い、検出作業を始めた。表土の厚さが薄いため、削平されている部分が多く、重機による掘削も浅くならざるを得ず、人力で掘り下げた部分が多かった。検出をはじめると試掘の結果以上に遺構が密集していることが判明した。遺構は削平を受けているものの、比較的良好に残存していることが予想された。遺構数が多く見込まれたため、まず全体の検出作業を行い、そののちに今後の調査日程を考えることとした。

8月上旬 引き続き検出作業を行った。C区はとくに削平されている部分が多く、検出作業に時間を要した。また、C区北側は斜面になっているため、Ⅲ層が残存していた。念のためその面上で検出作業を1度行い遺構の有無を確認した後に、再度重機によりⅢ層を除去した。盆休み前までには遺構数がほぼ確定した。

8月下旬 遺構の精査をB区の竪穴住居跡より開始する。竪穴住居跡の精査は比較的順調に進んだ。SI03竪穴住居跡は規模がやや大きく遺物の大量出土し、カマドも2基確認している。当初単独の住居跡



第6図 作業状況



第7図 実測作業

と考えており、貼り床とおぼしき部分を掘り下げたところ、拡張前の住居跡であることが判明した。調査したカマド2基のうち1基はこの拡張前の住居跡に伴うものと考えられる。

9月上旬 竪穴住居跡以外の遺構の精査に着手する。B区には柱穴跡は約400基検出されたため、主体はこの精査であった。その後、一部の作業を残しA区へ移動した。

9月下旬 A区の精査を中心に作業を行っている。SI18は焼失住居跡であり大量の遺物が出土し、なかでも須恵器・大甕が割れているが良好に残存していた。A区からは合計13軒の住居跡が検出された。30日にはB区の部分終了確認を行っている。その際に協議が行われ、B・C区の面積追加とあわせてD区を追加することが決められた。ただし、当初は全て確認調査という方向で話が進められている。

10月上旬 作業の主体はB区の面積増加部分の調査であり、終了後C区へ移動している。A区は図面を中心に作業が残存した。C区はもっとも削平を受けていた区域であり、床面だけの住居跡なども確認されている。C区の遺構のうちSI26は1辺が約7m四方と予想され、調査区内にはいずれの隅角部分も検出されない大形の住居跡である。そのため、全体を把握するため時間を要した。

10月下旬 A区の図面作業が継続し、いまだ作業が残っている。主体はC区遺構精査であり、いずれもほぼ完掘状態にはあった。SI26はその下層にもう1軒住居跡が重なっており、調査は引き続き行われた。

11月上旬 C区の精査と併行してD区の表土剥ぎを行った。D区は今回の調査においてはもっとも削平を受けている場所であった。確認調査の予定であったが、部分的に工事で削平される箇所があることが判明し、急速本調査を行うこととなった。検出の結果は竪穴住居跡が10軒のほか、土坑・溝跡・Piが確認された。このうち竪穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑跡4基を精査した。削平が大きく、比較的早く調査が終了している。C区はSI26の大形住居跡が残っていたが、D区の調査が終了する頃には、目処がついた。11月19日をもって全ての作業が終了し、撤収した。

#### 第4節 普及活動

各発掘現場においては、一般の見学者の要請があれば随時見学を受け入れており、今年度についても、調査中より地元の方々をはじめ多くの見学者をえた。そのほか新聞各紙においても調査状況や調査成果が発表されている。また、このほか調査の成果を広く発表するために、現地での説明会を行っている。いずれも県民の多数の参加を得ている。日程及び参加者数は下記の通りである。

現地説明会	西川目遺跡	6月26日	参加者 60名
	塚向II遺跡	10月18日	参加者 70名



第8図 土器洗浄



第9図 調査参加者

## 第5節 遺跡の環境

### 1. 地理的環境

西川目遺跡・堰向Ⅱ遺跡は北上市二子町西川目66ほかに所在する。北上市は、北は花巻市、南は胆沢郡金ヶ崎町、東は江刺市・和賀郡東和町、西は和賀郡湯田町と接し、面積は437.55km<sup>2</sup>、人口は約93,000人（平成15年7月現在）と県内では盛岡市に次ぐ人口規模を有する中核都市である。北上市は、近世以降、北上川を利用した水運によって南北に通じ、西は山羽平鹿郡に通じるという地理的条件から交通の要衝であり、宿場町・北上川の商港として栄えてきた。旧北上市、和賀町、江釣子村が合併した現在でも、国道4号と国道107号が交差し、また東北自動車道秋田線の開通によって、太平洋側と日本海側を結ぶ物流の中継地としての役割を担っている。

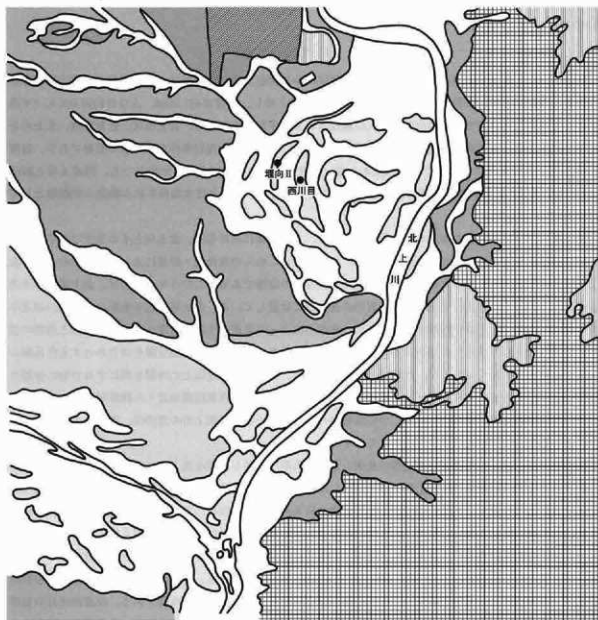
北上市周辺は岩手県域を南流する北上川の中流域、北上盆地にあたるが、北上川とその支流は岩手県内においては様々な扇状地・段丘を形成している。北上盆地はこれらの扇状地・段丘によって構成され、東は北上山地、西は奥羽山脈に挟まれた南北約90kmに及ぶ帯状の盆地である。このうち北上市は、北上盆地のほぼ中央、北上川とその最大の支流である和賀川の合流点に位置している。北上市周辺地形は、盆地のほぼ中央を北上川と北上川河谷平野が南北に縦断し、それらによって東部の小起伏山地を含む丘陵地域と西部の扇状地性の台地群の二つに大きく区分されている。東部は北から連続する物見山丘陵をはじめとする各丘陵が北上川付近まで大きく拡がるが、西部では台地が卓越し、最低でも3段以上の時期を興にする台地に分類されている。この西部の台地では下位段丘が最も広く拡がり、これは西部山間地近くの開析扇状地と北上川沿いの旧谷底平野が段丘化したものの二つの性格から成り立っている。北上市の遺跡は、東部北上川沿いの丘陵や西部の中位・下位段丘に多く分布している。

両遺跡の所在する二子地区は北上市の北東、北上川右岸に位置し、東を北上川、三方が村崎野段丘をはじめとする中位段丘に囲まれた北上川沿いに発達した谷底平野にあたる。二子地区付近の谷底平野は北上川の現流路によって挟まれており、現河床との比高は約3mと大きく段化している。二子地区はその地形に北上川の旧流路の痕跡を残し、また、北上川の旧流路によって形成された自然堤防を多く残す。この自然堤防上には多くの遺跡が分布し、両遺跡も二子地区の他の遺跡同様、このような自然堤防上に立地している。両遺跡は、北上川の西方2km、JR東日本村崎野駅の南東1.3kmに位置する。現在の二子地区の土地利用を概観すると、自然堤防上は宅地として、北上川の旧流路は水田として利用される傾向がある。両遺跡付近の地形は、概ね西の中位段丘から東の北上川に向かって緩やかに標高を減じるが、先に述べた自然堤防の存在により、その微地形においては起伏に富んだ様相を呈している。現状で両遺跡の立地する自然堤防は、西川目遺跡が南北約600m、東西が最大で約200m、堰向Ⅱ遺跡が南北約700m、東西約90mの範囲で拡がり、現地表面での標高は西川目遺跡が62.2m～63.5m、堰向Ⅱ遺跡が63.2m～64.65mである。遺跡の周囲に存在する低地との比高差は西川目遺跡が2.5m、堰向Ⅱ遺跡が1m～1.5mで、南北に概ね平坦な面が続くのに対して、東西にやや急傾斜な落ち込みがみられる。発掘調査段階での両遺跡付近の旧地形は、以前のほ場整備等によりやや改変しているものの、山区境や田面の高低差によってある程度推定することが可能であった。

### 2. 歴史的環境

北上市内には、登録遺跡数が467遺跡（平成14年3月現在）あり、このうち西川目遺跡・堰向Ⅱ遺跡が所在する二子地区には33遺跡が分布している。前節で述べたように、二子地区に分布する遺跡の多くは北上川





第10図 地形図

の旧流路によって形成された自然堤防上に立地しているが、そのほとんどは近年の分布調査によってその存在が確認されたもので、発掘調査によって遺跡の内容が明らかとなったものは少ない。そのため、ここでは二子地区の周辺地域を若干含めて述べることにしたい。

二子地区では縄文～古墳時代の遺跡の密度が希薄である。発掘調査が行われ、縄文時代の遺物が出土した遺跡としては野田Ⅰ遺跡・中居俵Ⅱ遺跡・二子城坊館遺跡・二子城白鳥館遺跡があげられる。野田Ⅰ遺跡では縄文時代晩期の、中居俵Ⅱ遺跡では縄文時代前期・中期・後期・晩期の土器片、石器が出土しているが、いずれも遺構外からの出土であった。また、二子城坊館遺跡の発掘調査では、土坑から縄文時代早期の土器・石器が、二子城白鳥館の詳細分布調査ではトレンチから縄文時代早期の土器・石器がそれぞれ出土している。どの遺跡でも竪穴住居跡は確認されていない。このように二子地区の縄文時代の集落遺跡の状況は不明であり、様相は必ずしも明らかとはいえない。二子地区の周囲では北上川左岸に八天遺跡・臥牛遺跡、和賀川の扇状地に九年橋遺跡が所在し、また、台地上にも多くの遺跡が知られるのとは対照的である。弥生時代についても縄文時代同様、不明であり、僅かに下川端や野田出土の弥生時代前期の土器片が知られるのみである。古墳時代には下川端・野田・舟越出土の土師器、中村出土の鉄製品が報告されている。付近には古墳群の存在は不明ではあるが飯坂町成田出土とされる方頭大刀がある。北上市域では古墳時代から奈良時代にかけて江釣子周辺に集落が営まれ、古墳群の造営がみられるが、現段階では二子地区には同時期に比定できる集落遺跡は知られていない。

二子地区では縄文～古墳時代の状況に対して奈良・平安時代には遺跡数の増加が顕著であり、発掘調査を行った遺跡のほとんどがこの時期に比定される。中居俵Ⅱ遺跡では平安時代の竪穴住居跡6軒が調査され、近接する野田Ⅱ遺跡では平安時代の竪穴住居跡1軒が調査された。秋子沢遺跡は二次にわたって発掘調査が行われた。第1次調査では9軒、第2次調査では7軒の竪穴住居跡が調査され、土師器・須恵器・鉄製品などが出土している。また、第1・2次調査とも竪穴住居跡内からは緑釉陶器が出土している。これは岩手県内では初めての出土として注目された。また、発掘調査による出土ではないが、中村遺跡出土の土師器が報告されている。

中・近世の遺跡としては、和賀氏の室町期の木城とされる二子城跡（飛騨城跡）と周囲に配置された白鳥館・坊館・加賀館などの居館があり、部分的にはあるが発掘調査が行われている。二子地区の周辺には、明確な時期は不明ながら、南に小島輪館跡、北上川左岸に黒岩城跡などの中世城館も分布している。これらの中世城館以外では墳墓成いは塚の分布がみられる。五輪塚遺跡は伝承で中世和賀氏の墳墓とされ、測量調査の結果、東西61×南北35mの長方形を呈し一重～二重の堀を有することが判明した。また、これに隣接した塚の可能性を持つ高まりも確認されている。上川端塚群は8基以上の塚が現存し、試掘調査の結果、土葬墓が含まれることが判明している。塚群中の他の塚についても土葬墓あるいは火葬墓の墳墓である可能性が指摘されている。近世に位置付けられる遺跡は、現状では明らかになっていないが、西方に二子一里塚があり、奥州街道の名残を今に伝えている。

今回の発掘調査の結果、西川目・塚向Ⅱ遺跡は平安時代の集落跡が主体であることが明らかとなった。そのため、次に古代和我郡にほぼ相当すると考えられる北上市域内の奈良・平安時代の集落遺跡について概観することにした。なお、ここで述べる遺跡の年代・遺構の性格などについては基本的に各報告書に従っている。

岩崎台地遺跡は9世紀初頭から11世紀中葉まで継続する集落跡とされる。時期差はあるものの竪穴住居跡117軒、掘立柱建物跡16棟が確認され、鉄製品・小銀治関連遺物の出土も比較的多い。上鬼柳Ⅲ・Ⅱ遺跡で





第12図 周辺の遺跡(2)

は竪穴住居跡22軒、工房跡1軒、掘立柱建物跡12棟、窯跡3基が確認され、概ね9世紀末～10世紀代の集落跡と考えられている。特筆すべき遺物としては卑書土器（土師器）や鉄製品のほか、二彩・緑釉・灰釉陶器があげられる。

下位段丘及び自然堤防上の遺跡としては、下谷地B遺跡・猫谷地遺跡・本宿羽場遺跡がある。下谷地B遺跡では明確な遺構は確認されていないものの、297点（小片を含む）の卑書土器が出土しており、9世紀代から10世紀代にかけての遺跡とされる。猫谷地遺跡は江釣子古墳群に隣接する集落跡で時期的には漸統的ではあるが古墳時代～奈良・平安時代までの竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡1棟が調査されている。本宿羽場遺跡では竪穴住居跡15軒のほか土器溜り2基が調査され、8世紀半ば～10世紀までの継続した年代が与えられている。中位段丘上には藤沢・新平遺跡などが所在する。藤沢遺跡は数度にわたり調査が行われ、竪穴住居跡49軒以上、掘立柱建物跡3棟以上が調査されている。竪穴住居跡内にいわゆるロクロピットが確認されたものや焼成遺構があり、生産と関わった集落跡と理解されている。また、竪穴住居内から緑釉・灰釉陶器が出土している。新平遺跡は古代駅家に推定され、竪穴住居跡数軒が調査されている。黒書土器（土師器）・須恵器などが出土している。

北上川右岸の上川岸Ⅱ遺跡は9世紀～10世紀代の集落跡とされ、竪穴住居跡25軒が調査されている。隣接する牡丹畑遺跡では竪穴住居跡7軒が調査され、8世紀～9世紀初頭と9世紀後半以降の年代が与えられている。北上川左岸では、立花南遺跡で竪穴住居跡8軒が調査され8世紀後半と9世紀前半の年代が与えられている。横町遺跡では竪穴住居跡77軒が調査され、8世紀末葉～9世紀後半の年代が与えられているが、9世紀後半のものが主体を占める。

このようにみると、北上市域の奈良・平安時代の集落遺跡は、岩崎台地遺跡群・鬼柳遺跡群の所在する和賀川右岸の夏油川との合流点付近から北上川との合流点付近にかけて、藤沢遺跡・新平遺跡をはじめとする和賀川左岸（江釣子～飯豊）周辺、上川岸遺跡・牡丹畑遺跡や対岸の横町遺跡などの和賀川と北上川の合流点以北の低地付近、二子地区周辺の大きく4つの小地域に区分することができる。このような区分は当然、発掘調査の有無・調査面積などによる調査上の粗密の可能性もあるが、地形的要素や「拠点的」と捉えることができる遺跡の分布状況から現状では妥当と考えられる。各小地域では細かな点で遺跡の消長は異なるが、大きくは8世紀代に集落が出現し、9世紀代に発展、10世紀前半にはほとんどの集落が廃絶するものといえる。また、「拠点的」な集落遺跡には施釉陶器の出土もみられ、古代和我郡と律令政府との関わりを窺い知ることができる。

〔参考文献（本章分）〕

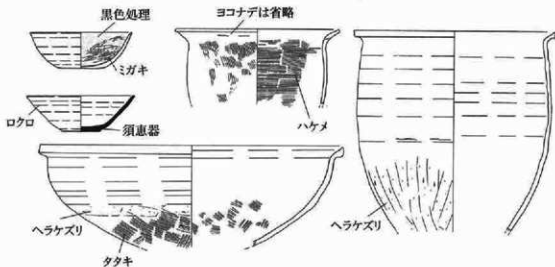
- 斎藤洋ほか1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XVI（狹谷地遺跡）』岩手県文化財調査報告書第71集 岩手県教育委員会
- 尾野・三上ほか1982『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XVII（北上地区）』岩手県文化財調査報告書第72集 岩手県教育委員会
- 伊東格ほか1992『上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書 東北横新自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第161集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 平月進ほか1985『新平遺跡発掘調査報告書 広域農道整備事業北上地区4号関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第91集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 菅原弘太郎ほか1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第34集 岩手県教育委員会
- 高橋與右衛門ほか1995『岩手各地遺跡群発掘調査報告書 東北横新自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 杉本・安藤ほか1995『北上遺跡群（1993・1994年度）』舞川第・本宿羽場 北上市埋蔵文化財調査報告書第19集 北上市教育委員会
- 山本・野野ほか1991『二子地区遺跡群細分布調査報告書』北上市文化財調査報告書第65集 北上市教育委員会
- 稲野裕介・堀野彰子1989『牡丹畑遺跡（1988年度）』北上市文化財調査報告書第55集 北上市教育委員会
- 稲野裕介・大塚賢一ほか1999『横町遺跡（古代・中世層）』北上市埋蔵文化財調査報告書第38集 北上市教育委員会
- 稲野裕介・堀野彰子1989『藤沢遺跡（1988年度）』北上市文化財調査報告書第54集 北上市教育委員会
- 稲野裕介・堀野彰子1989『藤沢遺跡（Ⅱ）（1989年度）』北上市文化財調査報告書第58集 北上市教育委員会
- 稲野裕介・堀野彰子1993『藤沢遺跡（Ⅲ）（1989年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第13集 北上市教育委員会
- 大塚賢一1999『藤沢遺跡Ⅴ（1997・98年度）（遺構編）』北上市埋蔵文化財調査報告書第37集 北上市教育委員会
- 吉田充 2000『中居俣Ⅱ遺跡発掘調査報告書 二子地区ほ場整備』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第362集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 岩島武史2002『立花南遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第49集 北上市教育委員会
- H山・土田1939『北上山地の地形学的研究 Ⅰ・Ⅱ、西岸段丘 B、北上川及び馬瀬川の河岸段丘』学術研究報告第22（財）斎藤報恩会
- 板橋勲 1959『岩手県江釣子村新平遺跡発掘概報 古代駅家所在地』『岩手大学学芸部研究年報』第15巻 岩手大学学芸学部
- 1977『二子城跡発掘遺跡調査報告書』北上市文化財調査報告書第21集 北上市教育委員会
- 柳嶋丈ほか1976『北上山系開発地土地分類基本調査 北上』岩手県企画開発室（北上山系開発）
- 菊池啓治郎1968『北上市二子町秋子沢遺跡調査報告（第1次）』『北上市史』第1巻原始・古代（1）北上市
- 板井清彦・玉口晴雄1968 北上市二子町秋子沢遺跡調査報告（第2次）『北上市史』第1巻原始・古代（1）北上市
- 沼田誠吾治1968『北上市出土土師器考 北上川中流域を中心として』『北上市史』第1巻原始・古代（1）北上市
- 北上市 1968『北上市史』第1巻原始・古代（1）

## 凡 例

- 1 記載は、遺構の位置・重複関係、検出面、平面形・規模・方位、堆積土、壁・床の状況、諸施設、遺物の順に記載している。
- 2 遺構は原則的に1/50で掲載している。獨立柱建物跡も竪穴住居跡と規模の比較を重視したため、同一縮尺で掲載している。なお、住居カマド部分の拡大は1/25である。断面図は基本的に平面図に対応させている。
- 3 使用した網掛け処理は下記の通りである。



- 4 遺物の観察表は章末に掲載している。
- 5 住居の方位は基本的に北方向を0°としそこから西や東に何度触れているかを計測した。計測箇所は平行している対辺をもつ壁であり、平面形が歪なものについては対辺の midpoint を結ぶ線を方位としている。
- 6 本書で使用する用語のうち「竪穴住居跡」という語はカマドがある竪穴の遺構は居住用であるという仮定のもとで呼称しているだけであって、本来にはその機能は不明であるため一般的な名称である竪穴建物跡とすべきものである。ここでは、便宜的、通例的に従来のように竪穴住居跡と呼称している。
- 7 遺物実測図における調整技法の表現は下図の通りである。なお、本書では指によるナデ調整の表現は省略している。土器・石製品実測図は1/4縮尺で、石製品・土製品・鉄製品については1/2・1/4縮尺、木製品は1/8縮尺を基本的には使用している。
- 8 本書において、ピット (Pit) と呼称する遺構はいわゆる柱穴状の小穴のことである。柱痕が残存するもの (柱穴) と残存しないものがあり、これらを含めてピット (Pit) としている。なお、住居内のものについてはピット (カタカナ)、単独のものはPit (英字) として便宜的に区別している。
- 9 本書で灰白色粒、灰白色火山灰と記載するものについては、一部のみを分析 (同定) したにすぎないが、十和田 a のテフラ (To-a) と判断している。
- 10 遺構の項にある時期については I～II期の呼称を使用しているが、第四章第1部で詳細は触れている。



にし かわ め 遺 跡  
西 川 目 遺 跡





## 第 I 章 西川目遺跡

### 第 1 節 調査の概要

西川目遺跡は、北上川西岸（右岸）に位置する自然堤防上に立地する。遺跡が所在する二子地区これまでは付近においては調査があまり行われておらず、今回のほ場整備の計画によって新たに発見された遺跡である。本調査に移行する前年には岩手県教育委員会生涯学習文化課による試掘調査によって、平安時代の遺跡であることが判明していた。今回の調査は緊急調査ではあるが、これらの集落の実体解明という目的も合わせもっている。

調査区は大きく分けて 2 箇所に分かれている。東側より A・B 区と呼称している。A 区は、ほ場整備に伴う支道第 54 号支道と支道第 51 号支道建設予定地である。幅が 7 m、長さが南北に 130 m、東西に 70 m であり、L 字形に直角に東に曲がっている。この調査区は、遺跡がのる自然堤防上を縦断する形に位置しており、一部が自然堤防下の低地部分にも及んでいる。この低地部分より水田跡の可能性の高い遺構が検出されている。

自然堤防上からは平安時代を中心とする遺構が確認され、とくに廂がつく獨立柱建物跡の検出は特筆すべき遺構となっている。一部が調査区外に延びるがおおよその内容の確認は可能であった。また、いくつかの竪穴住居跡からは十和山 a テフラの堆積が確認されている。

B 区は A 区の西 100 m の地点に位置し、排特 2 号水路と 205 区山面の切上のともなう削平のために設定された調査区である。遺跡がのる自然堤防の縁辺に立地している。調査区の形状は、上記 2 つの工事予定地が複合するため不整形な形状を呈している。南北に 80 m、東西 6 m の長方形の先端に底辺 26 m の三角形が合わさったものである。調査区の北側は緩斜面になっており、そのまま低地部分に移行すると考えられる。検出遺構としては、古代に属する柱式獨立柱建物跡や竪穴住居跡などがあるが、主体は近世に属する遺構である。とくに、近世墓塚は、棺材が残存するなど貴重な資料を提供している。

検出された遺構の総数は、A・B 区合わせて竪穴住居跡 9 軒、獨立柱建物跡 6 棟、土坑 5 基、ピット 252 基、溝跡 5 条、墓塚 10 基がある。

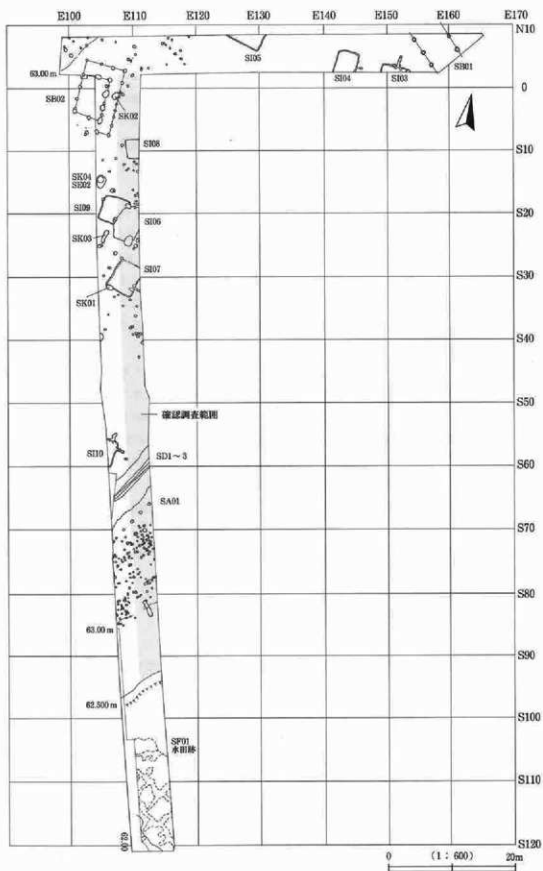
調査の結果、平安時代を主体とする集落跡と近世に属する建物跡、墓塚からなる複合遺跡であることが判明している。

### 第 2 節 基本層序

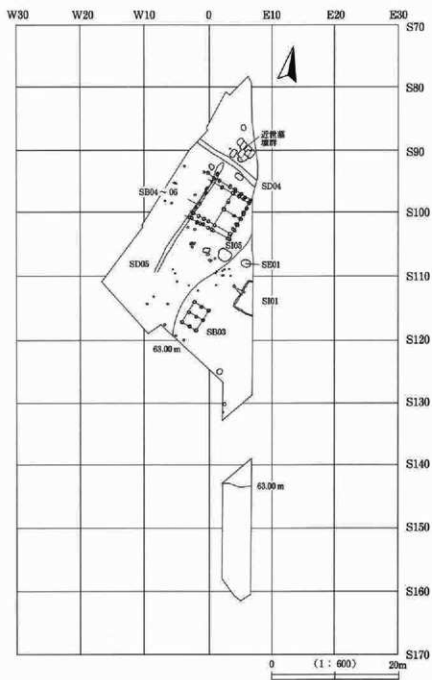
調査区の層序は自然堤防上の各地点で確認を行った結果、いずれの地点でも同様の層序であることを確認した。

- I 層 黒褐色シルト 現耕作土
- II 層 暗褐色シルト 旧耕作層あるいは近世遺物包含層
- III 層 黒褐色シルト 古代生活面
- IV 層 暗褐色粘質土 古代検出面
- V 層 ぬい黄褐色粘質土 地山
- VI 層 暗オリーブ粘土 地山

低地部分は I・II 層までは自然堤防上と同一であるが、III 層以下については異なっている。詳細は水田の項で後述する。



第13図 A区遺構配置図



第14図 B区遺構配置図

### 第3節 調査内容

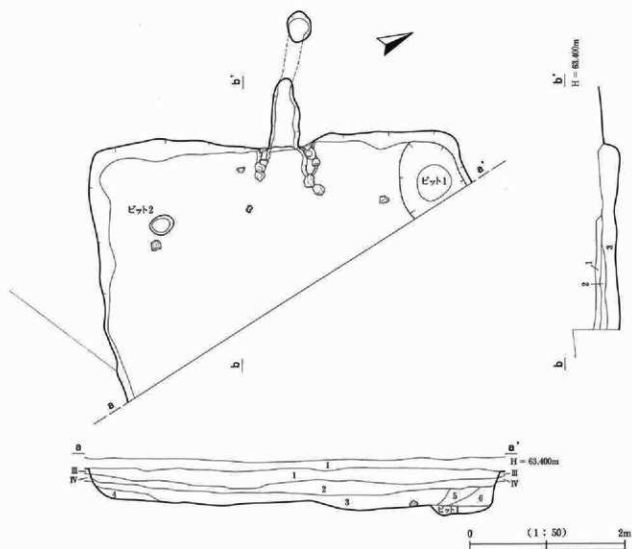
#### 1. 竪穴住居跡 (SI)

##### SI01竪穴住居跡 (第15～19図)

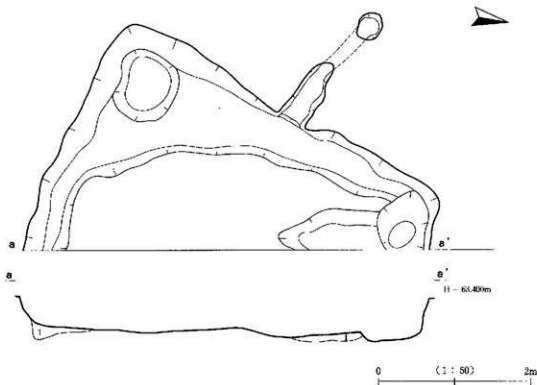
B区東側、S110E0グリッドに位置する。北西2mにSE01井戸跡が、西3mにSB03掘立柱建物跡が存在する。調査区の東端に位置しているため、西側半分が調査区外に広がっており、完掘していない。本遺構にはカマド、ピットが付属する。

検出はIV層上面で行ったが、断面図をみると、掘り込みはIII層で確認できることが判明した。したがって、検出はやや掘り下げた状態で行っていることになる。ただし、III層直上は近現代の耕作土と考えているためこの層自体も削平を受けており、本来の掘り込み面かどうか判断できない。

確認された規模は、西壁が4.7m、北壁が0.65m、南壁が3.3mである。北壁と南壁の幅は4.9mあることか



第15図 SI01 竪穴住居跡



第16図 SI01 掘りかた

遺構名	階番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI01	1	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや強	中	中 におい黄褐ブロックを含む
	2	黒色	10YR2/1	シルト	中	やや弱	黄褐ブロックを少量含む
	3	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや強	やや強	黄褐ブロックを20%程度散在しながら含む
	4	におい黄褐色	10YR4/3	シルト	中	やや強	下に黄褐ブロックを多量含む 初期埋土
	5	におい黄褐色	10YR5/3	シルト	中	やや強	4よりはやや明るい色調、細かい噴火粘土多量を含む
	6	暗褐色	10YR3/3	シルト	中	やや強	灰白色粒(火山灰)を含む 黄褐粒上位に多く含む
ビット1・2	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む

ら、約5mの規模であることが予想される。平面形は完掘してないため不明であるが、方形を基調としたものと考えられる。隅角部分は丸みを帯びているがほぼ直角に近く屈曲している。本遺構の方位は、カマドが付設される西壁を基準とすると、N-22° Wに向いている。

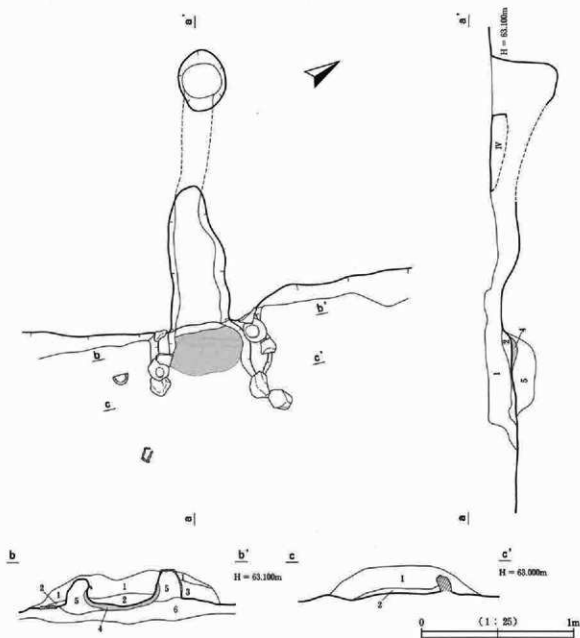
地積土は6層に分層できる。初期堆積として4・5・6層が考えられ、黄褐色を主体とする粘質土である。1・2層は黒褐色を基本とする粘質土であり、これらの堆積状況から考えると自然堆積であろう。

床面は中央より北側がやや低くなっているが、南側はほぼ平坦である。北壁と南壁際にはやや堅く締まった暗褐色の粘質土が堆積しており、粘床と判断している。

掘りかたは、壁際に沿って溝状に掘り込まれている。

カマドは西壁のほぼ中央部に設置されており、東壁より若干北側に斜交している。上部は削平されており、下部のみの検出である。カマド本体(左右袖)煙道、煙出しビットが付属する。

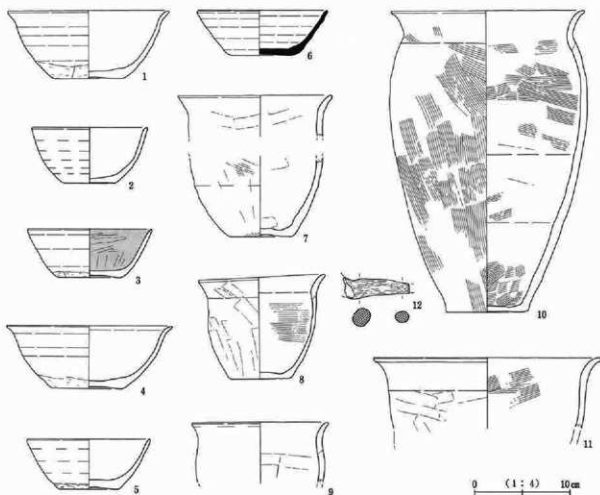
左右袖の幅は最大で83cm、長さは右袖が壁際より56cm、左袖が42cmである。高さは床面より20~23cmである。各袖は陶製土器や各礫を芯材とし、それに明黄褐色の粘質土を充填して構成されている。両袖とも内側は被熱して赤変している。壺型土器は両袖に各1個体分側位で設置されているが、右袖は基部(壁際)に、



第17図 SI01 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI01カマド	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	やや弱	やや弱	炭 少
	2	明黄褐色	10YR6/6	砂質土	弱	中	塊土ブロック多
	3	暗褐色	10YR3/3	SI01 f3	やや強	やや強	塊土ブロック多
	4	明黄褐色	10YR6/8	粘質土	やや強	強	炭土、炭きが特に多い部分
	5	明黄褐色	10YR6/6	砂質土	やや弱	やや強	暗褐色土ブロック 塊土ブロック少
	6	暗褐色	10YR3/4	粘質土	中	やや強	黄褐色砂ブロック 黒褐色粘質土ブロック 少

左袖は先端に近い位置に設置されており、各袖でその位置が異なっている。天井に礎が架構されていたかは不明である。両袖間の堆積土は1・2層が確認できる。2層は地山ブロックを多く含み若干堅く締まっていることから天井部の崩落と判断した。燃焼面は2層直下であり、堅く締まっている。平面で見ると45×28cm

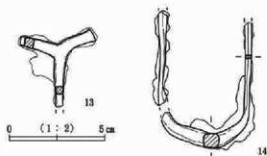


第18図 SI01 出土遺物

の範囲で両袖間に楕円形状に広がっている。その使用面である4層の下層には貼床が位置していることから、カマドは床面構築後に付設されたと考えられる。

煙道は壁際より西に1.78m延び、先端に40×30cmの楕円形状のピットが付設され煙出しとしている。壁際から92cmの範囲まで天井が崩落しているが、その先60cmまではIV層をトンネル状に切り抜いている。壁際での深さは、確認面より10cm、煙出しピット側で42cmであり、先端に向かって緩やかに傾斜している。煙道の堆積土は1層のみ確認している。雨中の調査であったため、煙道と煙出しピットの接合箇所が崩落するなど、観察が不十分であった可能性がある。

ピットは2基床面に構築されている。ピット1は、本建物跡北西隅角に位置し、一部調査区外へ広がっている。現状での規模は42×40cmであり、深さは床面より10cmである。平面形は楕円形状を呈していると考えられる。堆積土は1層が確認でき、黒褐色の粘質土が堆積している。その位置から貯蔵ピットの可能性があ



第19図 SI02 出土遺物(2)



る。ピット2は南西隅付近に位置し、30×25cmの規模で、平面形は楕円形状を呈している。深さは床面より20cmである。

遺物は、土器を中心に、鉄製品も出土している。出土土器の総重量は約3,500g、そのうち14点・2,753gの土器を図化した。

1・2・5は1.5口径杯である。1・5は直線的に開く体部を有し、かつ底部側縁にはヘラケズリによる再調整痕を残す。いずれも内面には黒色処理が施されている。2は直線に近いがやや内湾する体部をもつ。1・2・5の11径は13cm前後でほぼ共通する。3・4は内湾する体部をもち、口縁端部で外反する器形である。いずれも口径が17cmと大きい。底部側縁にはヘラケズリによる再調整が施される。

6は内面に黒色処理が施されない杯である。直線的に開く体部をもつ。内外面ともロクロ調整である。

7～11は甕である。いずれもロクロ調整が施されない、いわゆる非ロクロ甕である。口縁部の形状はいずれもゆるやかに外反するものであり、明瞭には屈曲しない。7・9の11径は15～16cmであり、8は13cmと小型である。内面調整は7の内面が横位ヘラナデであり、8はハケメである。外面調整は縦位ヘラナデもしくはハケメが施されるが、摩擦がはげしい。10はカマド軸の芯材として倒れて出土したもので、ほぼ完形である。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。調整は内外面ともにハケメが施されるが、外面は縦位、内面は横位方向である。11は外面に横位のケズリが施される。

12は甕の把手部と思われる一部のみのため不明である。外面にはミガキが施されている。

鉄製品は2点が出土している。いずれもカマドに近接した床面から出土している。13は不明鉄製品であり、「Y」字形を呈している。雁又式の鉄鏝にも見えるが、断面の形状からそれとは異なっている。14は、刀子状の金具を「凹」の字形に折り曲げたものである。3片に分離しているが全て接合する。用途は不明である。長さが5cm、幅が1cm、厚さが1cmである。

以上、遺物の特徴及び出土遺物から本竈穴住居跡の時期は1期（9世紀後半）に位置づけられると考えられる。（西澤）

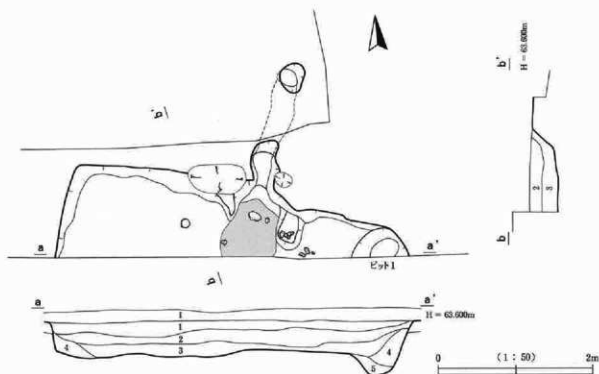
#### SI02 竈穴住居跡は欠番

#### SI03 竈穴住居跡（第20～23区）

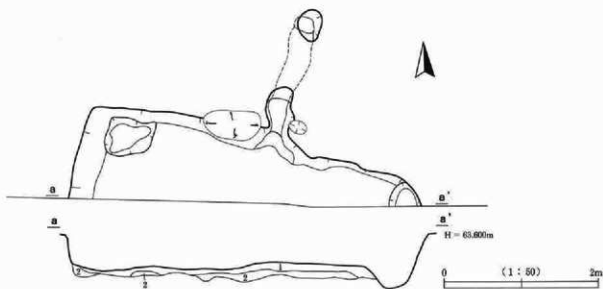
本竈穴住居跡はA1区N10E150グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは北壁から西壁にかけての約1/3であり、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。カマド煙道部分でピットと重複し、新旧関係は本住居跡が古い。

本住居跡はIV層上面において黒褐色土の広がりをもって検出しているが、煙道の一部分から煙出しピットにかけては試掘トレンチによる削平のためV層上面で検出した。平面形・規模は調査区内で確認できた北壁で東西3.50m、調査区内の状況から方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた住居跡北壁を基準とするとN 20° Eである。

住居内堆積土は4層に分けた。1～3層は黒褐色粘質土を基調とする。このうち1層は灰白色火山灰ブロックを一部に含み、また、灰白色火山灰粒を層中に散在して含んでいた。この灰白色火山灰ブロックは一つの層として分離できる可能性もあったが、調査中に確認することはできなかった。4層は暗褐色粘質土でV層に起因すると考えている黄褐色土ブロックを多く含んでいた。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈しており、自然堆積と判断している。

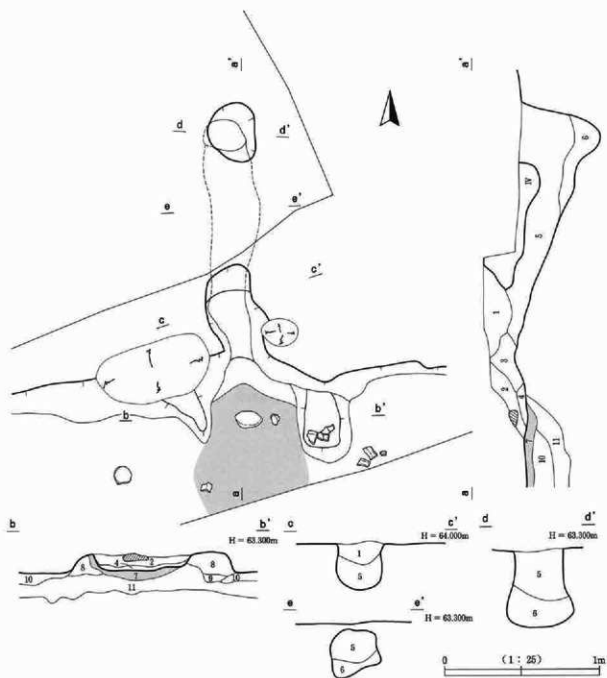


第20図 SI03 竪穴住居跡



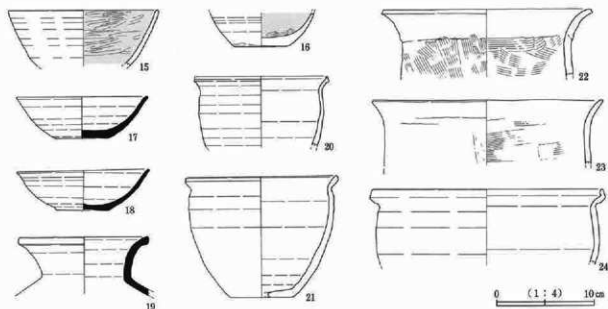
第21図 SI03 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI03	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや強	粘土粒極少量含む灰白色火山灰ブロックを一部に、灰白色火山灰粒を散在して含む
	2	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや弱	やや強	焼土ブロック、褐色ブロックを少量含む
	3	黒褐色	10YR2/3	粘質土	やや強	中	褐色粘質土ブロックを2より多く含む
	4	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	やや強	褐色粒ブロックを(3より大きめ)を多く含む
掘りかた	5	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや弱	褐色粘質土ブロックを少量含む。(ビット1堆積土)
	1	黒褐色	5YR5/4	砂質	弱	やや強	カマド付近では灰少、焼土ブロックを中含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘質土	中	中	黄褐色粘土ブロック少



第22図 SI03 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI03カマド	1	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	やや弱	
	2	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	やや強	塊土粒に少 炭化物少量含む
	3	褐色	10YR4/4	砂質土	弱	やや強	塊土ブロック多、黄褐色ブロック中量含む
	4	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	やや弱	炭化物少、塊土粒少量含む
	5	黒褐色	10YR2/2	粘質土	弱	やや弱	塊土粒状に少 炭化物少 断面赤変して堅くしまる
	6	暗褐色	10YR3/4	砂質土	弱	やや弱	北ブロック少 (粗砂多)
	7	明赤褐色	2.5YR6/8	粘質土	中	強	カマド燃焼厚焼土
	8	赤褐色	10YR7/6	粘質土	やや強	強	(カマド袖)
	9	黒色	10YR2/1	粘質土	中	やや弱	カマド類かた
	10	淡褐色	5YR8/4	砂質土	弱	やや強	塊土ブロック、炭化物 中量含む 貼床1
	11	暗褐色	10YR3/4	砂質土	中	中	黄褐色ブロック中量含む 貼床1



第23図 S103 出土遺物

住居壁は急角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは40~48cmである。床面は調査範囲内ではほぼ平坦に構築され、貼床が施されている。貼床は2層確認され、淡黄色砂質土と暗褐色粘質土を基調とする。据かたは調査区内全体に掘り込みが確認できるが、住居跡東側ではやや深く、この部分の貼床は厚く貼られている。

カマドは住居跡北壁中央に位置し、北壁に対しほぼ直交している。上部は削平のため残存しないが、両袖、燃焼部、煙道、煙出しピットを確認している。両袖間の幅は最大で1m30cm、残存する長さは東袖が48cm、西袖が30cmであった。両袖とも床面から12~16cmの高さが残存している。カマド内堆積土は6層に分けた。1・2・4・5層は黒褐色砂質土を、3層は暗褐色粘質土、6層は暗褐色砂質土を基調とする。このうち3層は他の層に比べしまりが認められ、焼土ブロックと黄褐色粘土ブロックを含んでいるため、燃焼部天井の崩落土の可能性がある。煙道は煙出しピット側のおよそ半分がトンネル状に切り抜かれた状態で残存していた。底面は燃焼部から煙道にかけて緩やかに立ち上がり、煙出しピットに向かっては緩やかに落ち込むが、煙出しピット付近では急な落ち込みになる。煙道は住居跡北壁から北に1.70m延びる。煙出しピットは40×30cmの円形を呈し、検出面からの深さは50cmで壁面は急傾斜で立ち上がる。燃焼部は90×70cmの楕円形の範囲で被熱しており一部調査区外へ広がっている。焼土の厚さは最大で5cmである。カマド袖は東袖が貼床上に明黄褐色粘土、黒色粘質土で構築されている。西袖は住居跡貼床7層の高まりとして確認されたが、本来は東袖と同様の構築土であった可能性もある。

遺物は堆積土中および貼り床中からの出土が大半を占める。遺物の総重量は1,262g、そのうち図化したのは1,054gである。15・16は土師器・杯である。15は口縁部~体部片で残存部分では緩やかに内湾しながら立ち上がり器高が比較的高い。16は底部片であるが、15同様に器高が高い可能性がある。ともに外面ロクロナデ、内面ミガキで内面黒色処理を施す。また、16の外面最下位には横位のケズリが確認できる。17・18は須恵器・杯とともに緩やかに内湾しながら立ち上がり口縁部はわずかに外反する。ともに焼成は良好で色調は灰色である。20~24は土師器・甕で大型と小型の法量に分けられよう。また、内外面ロクロナデのもの

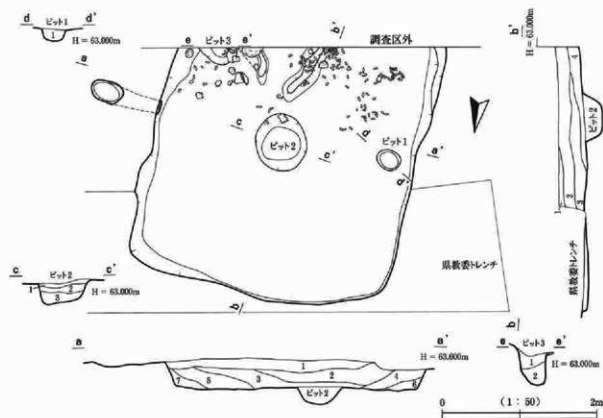
と非ロクロ調整で内外面にハケメを施すものがあるが、個体ごとに口縁部の形態は異なっている。19は須恵器・壺の口縁部片である。焼成は良好で色調は灰色、調整技法は内外面ともロクロナデである。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡の時期はI期（9世紀後半）に位置づけられると考えられる。（小針）

### S104 竪穴住居跡（第24～37図）

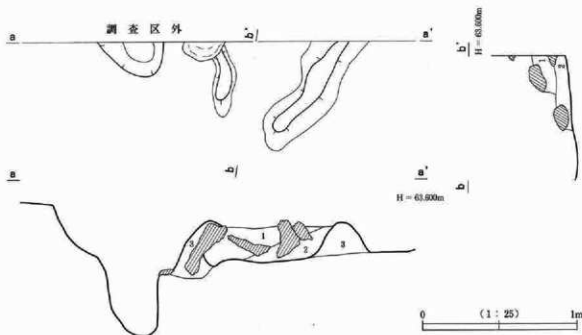
A区東側、N10E140グリッドに位置している。東4mにS103竪穴住居跡が存在する。本遺構南側は調査区外へ広がっているため完掘していない。また、北側は県教委試掘トレンチにより上半部が破壊されている。本遺構には、カマド、ピットが付属する。

検出はⅢ層下位からⅣ層上面にかけてであり、黒褐色土の広がりをもって確認している。確認された規模

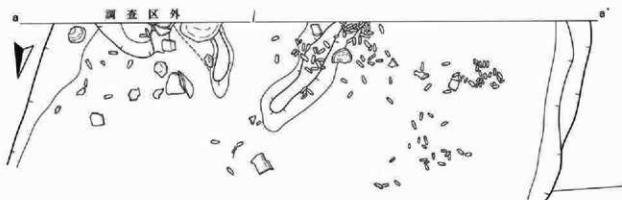


第24図 S104 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S104	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	やや弱	灰白色火山灰 (To-n) ブロックを含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	やや強	鉄土粒含む
	3	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや弱	中	鉄土粒 黄褐色ブロック、土鏝を含む
	4	暗褐色	10YR3/3	粘質土	中	やや強	褐色ブロック (IV層起源) 鉄土ブロックを、土鏝を含む
	5	暗褐色	7.5YR3/3	粘質土	中	やや強	下位に褐色ブロックを含む
	6	黒褐色	7.5YR3/9	粘質土	やや強	中	炭化物少量 褐色ブロックをやや多く含む
ピット1	7	黒褐色	5YR3/10	粘質土	中	やや強	鉄土ブロック 褐色地山ブロックを散在して含む
	1	黒褐色	10YR3/2	砂質土	弱	弱	
	2	暗褐色	10YR3/3	粘質土	弱	弱	
ピット2	1	暗褐色	10YR3/3	粘質土	弱	弱	
	2	暗褐色	10YR3/3	粘質土	弱	やや強	鉄土ブロック多量を含む
	3	黒褐色	10YR3/2	粘質土	弱	弱	鉄土ブロック少量含む
ピット3	1	暗褐色	10YR3/4	砂質土	弱	やや弱	鉄土粒中、炭少量含む
	2	暗褐色	10YR3/3	砂質土	弱	やや弱	鉄土少、炭少量含む



第25図 SI04 カマド



第26図 SI04 遺物出土状況図

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI04カマド	1	暗褐色	10YR4/3	砂質土	やや弱	やや強	焼土ブロック中 黄褐粘土ブロック中
	2	黒褐色	10YR3/2	砂質土	中	やや弱	焼土粒状に少 炭化物少量含む
	3	暗褐色	10YR3/4	粘土質	やや強	強	焼土ブロック少量含む
旧カマド	1	黒褐色	10YR3/1	シルト	中	中	焼土ブロックをやや多く含む
	2	黒褐色	10YR3/1	シルト	やや弱	中	明赤褐色焼土ブロックを少量含む
	3	暗褐色	10YR2/3	粘質土	中	やや弱	焼土ブロックを多量に含む
	4	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや弱	焼土ブロックを少量含む底面は赤く固くしまっている

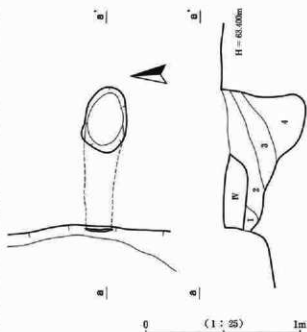
は、西壁が3.30m、北壁が3.45m、東壁が2.80mであり、東西壁間では中心地点で3.50mである。平面形は調査範囲から推定すると3.50m前後の方形を基調とする形態になる。住居跡の方位は東壁を基準とするとN-6°-Eである。

床面は、南側がほぼ平坦であるが、北側が若干低くなっている。これはトレンチにより多少削平されていると考えられるため、全体的にはほぼ平坦であったと判断している。床面の高さは、西壁際で25cm、東壁際で33cmである。貼床は部分的に施されている。

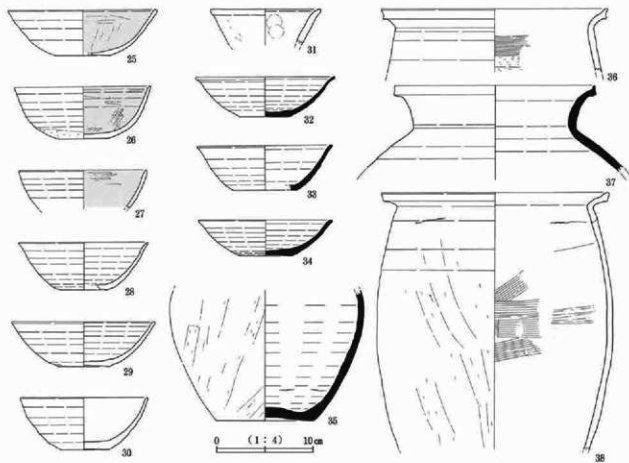
堆積土は8層に区分できる。暗褐色～黒褐色系の粘質土が堆積しており、堆積状況から判断すると自然堆積である。また、最上層である1層には灰白色火山灰が粒～ブロック状に含まれている。

掘りかたは、土坑状の掘り込みがいくつか認められるもので、基本的にはあまり貼床を施さないとと思われる。

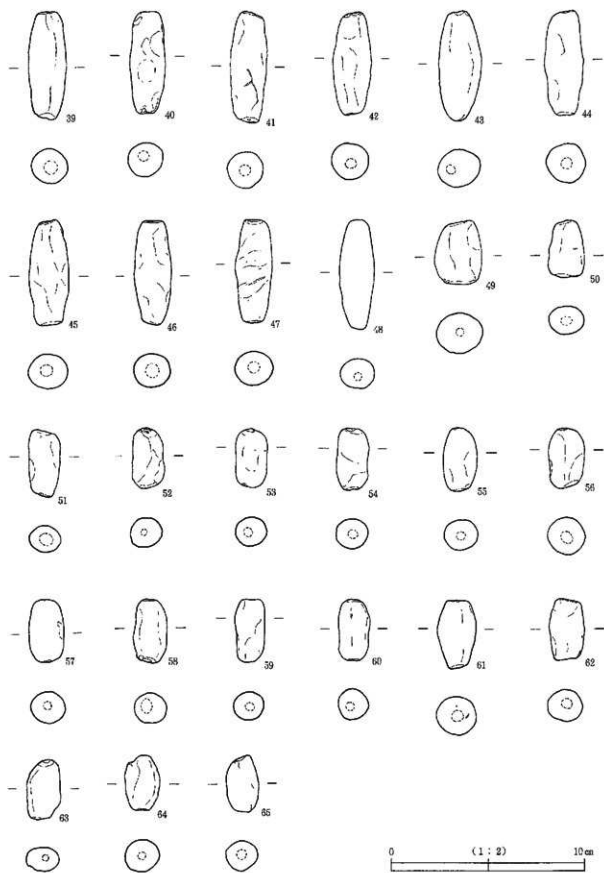
カマドは2基確認した。新期のカマドは、おそらく北壁に付設されると考えられる。カマド本体の一部や煙道等は調査区外へ広がっているため詳細は不明であり、袖の先端部分のみを調査したに過ぎない。したがって方位も正確には不明である。確認された両袖は下部のみ残存し、上部は削平されている。両袖間の幅は最大で1.25m、長さは現状で右袖が80cm、左袖が50cmである。高さは床面から20～30cmである。左袖の一部は掘りすぎのため破壊してしまっている。左袖には長さ40cmの角



第27図 SI04 旧カマド

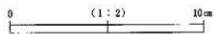
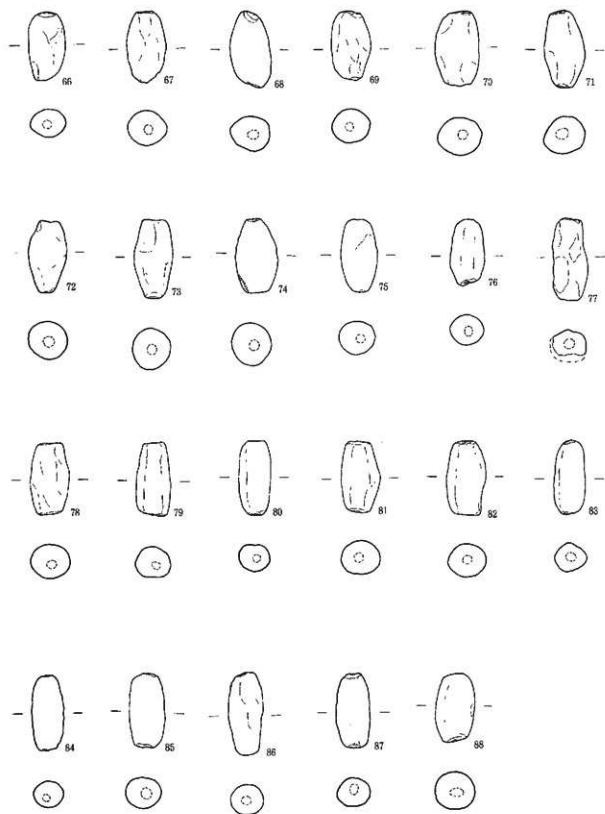


第28図 SI04 出土遺物 (1)

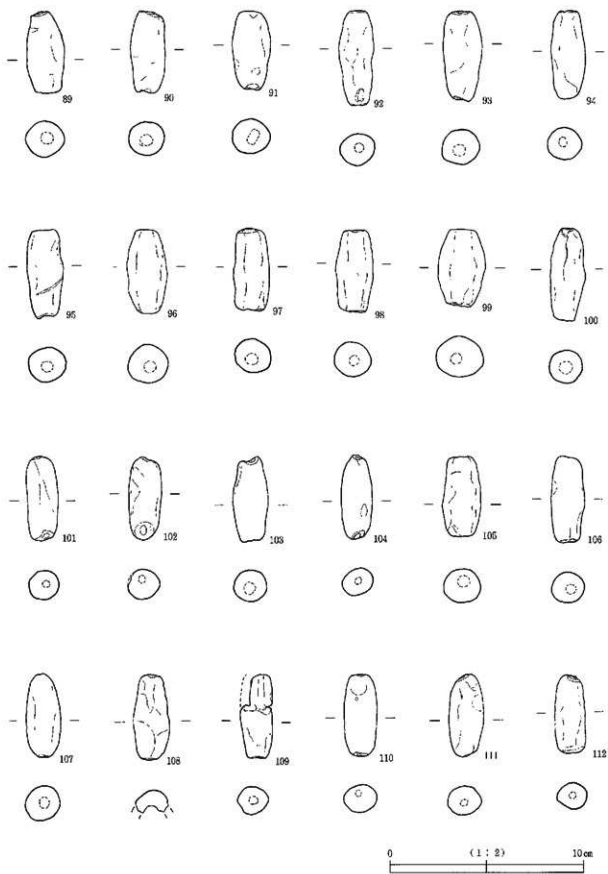


第29圖 S104 出土遺物 (2)

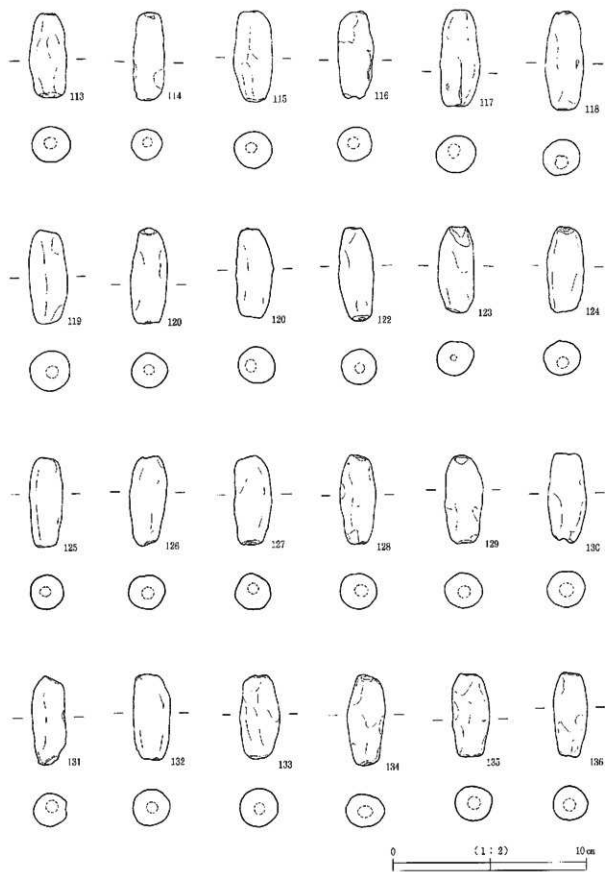




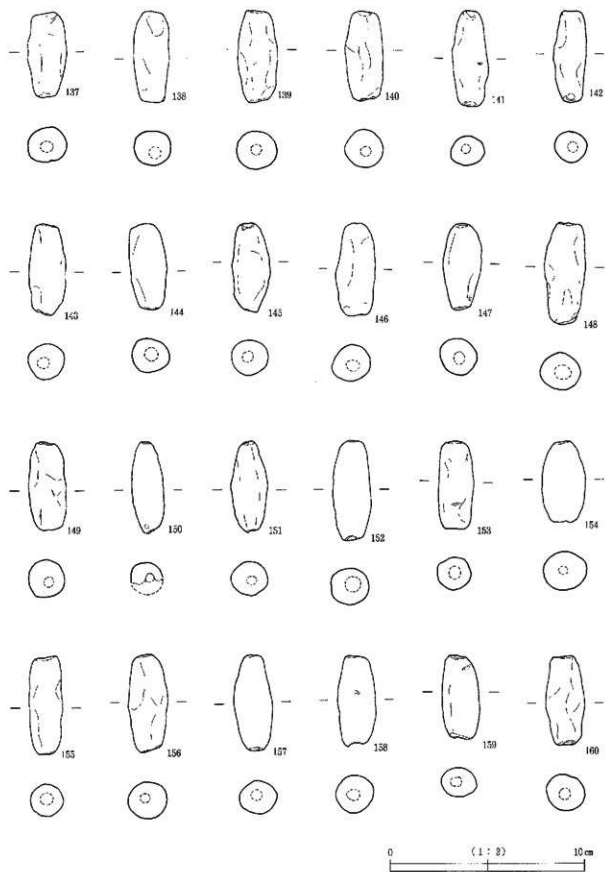
第30圖 S104 出土遺物 (3)



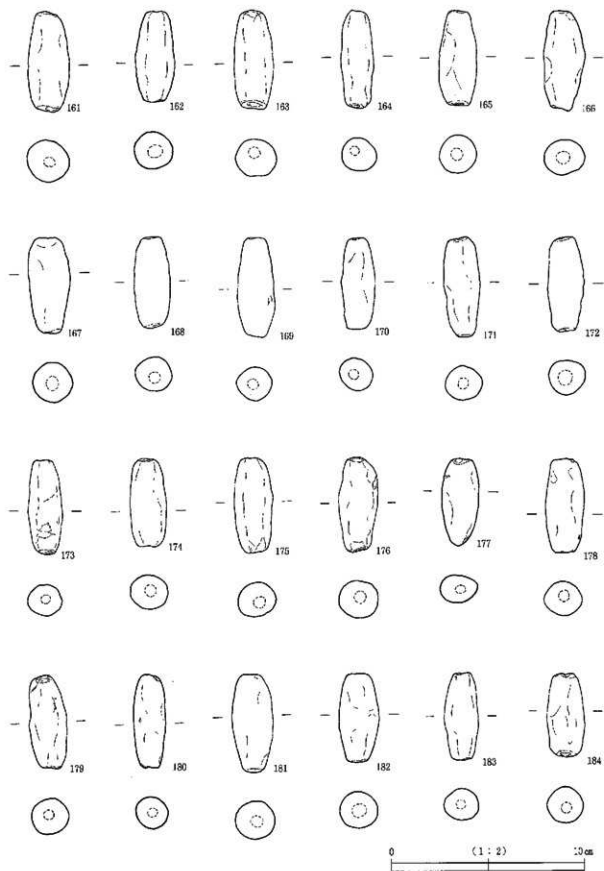
第31圖 S104 出土遺物 (4)



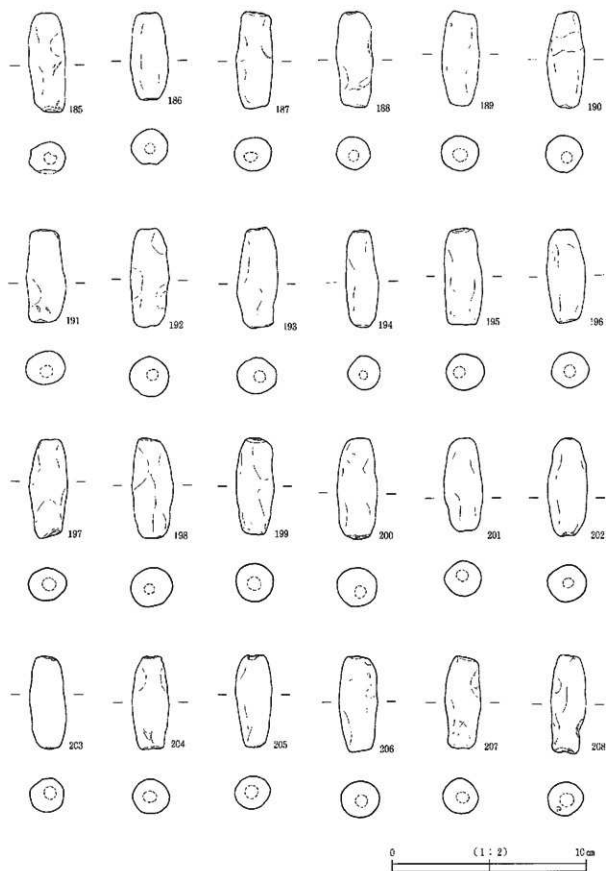
第32圖 SI04 出土遺物 (5)



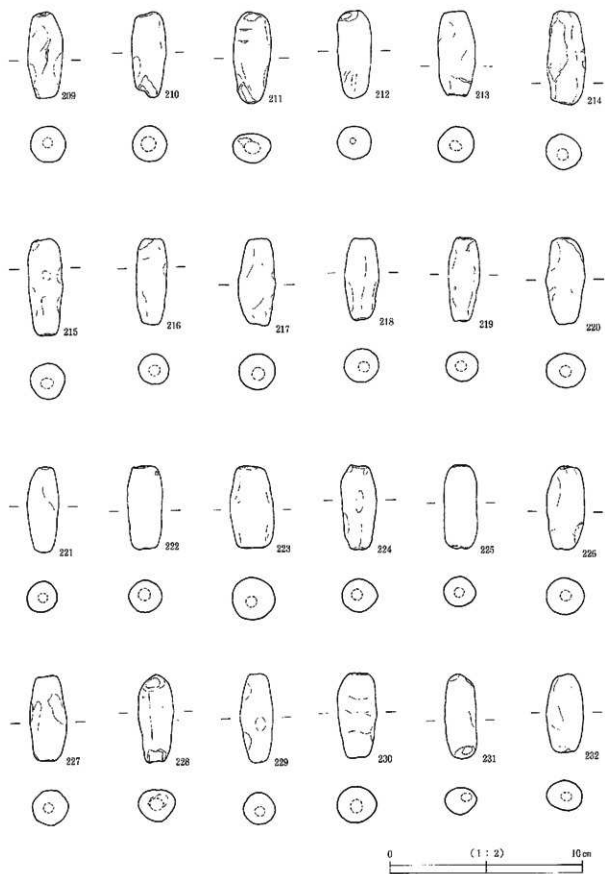
第33圖 SI04 出土遺物 (6)



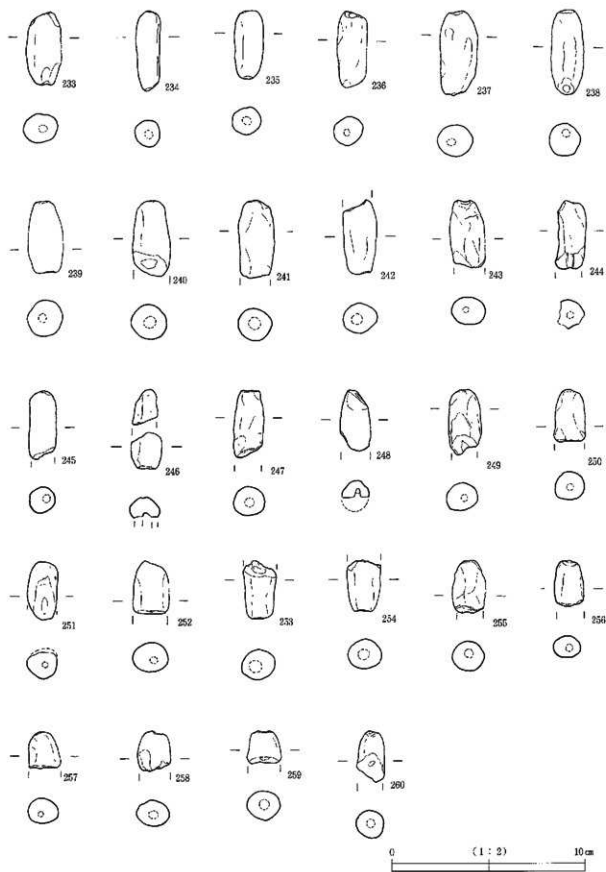
第34图 S104出土遺物(7)



第35圖 SI04 出土遺物 (8)



第36圖 SI04 出土遺物 (9)



第37図 SI04 出土遺物 (10)



礎を芯材とし、暗褐色系の粘質土で補強している。右袖には調査区内からは確認できない。両袖間の堆積土は2層が確認でき、ぶい黄褐色の粘質土(1層)、黒褐色の粘質土(2層)が堆積している。このうち1層はしまりがやや強く、柚櫛成土と類似していることから天井部の崩落土と考えられる。明確な燃焼部は確認できなかった。これらの層中には30~40cmの長さの角礫が含まれており、天井あるいは左右袖に使用された礫であると考えられる。I期のカマドは、東壁に付設されている。煙道、煙出しピットが確認でき、カマド本体(袖部)は確認されない。煙道はIV層をトンネル状に割り抜いて構築され、東壁とほぼ直交している。規模は、長さが東壁より90cmであり、先端に40×27cmの楕円形状を呈するピットが付設され、煙出しとしている。深さは確認面より、喫際で16cm、煙出しピットの底面で52cmであり、外側に向けて下り勾配で傾斜している。堆積土は4層が確認できる。いずれも暗褐色から黒褐色系の粘質土であり、焼土ブロックを含んでいる。煙道底面は被熱を受けて変色している。堆積は煙道側よりおもに流入している。

そのほか床面にはピットが3基構築されている。ピット1は西壁際に30×25cmの楕円形状を呈し、深さは床面より15cmである。黒褐色砂質土が堆積している。ピット2は住居中央に位置し、75×65cmの楕円形状を呈し、深さは床面より25cmである。堆積土は3層に区分でき、いずれも黒褐色系の粘質土が堆積している。ピット3は南東隅、新期カマドの左袖に接して位置する。約半分が調査区外へ広がっているため規模や平面形は不明である。深さは30cmであり、暗褐色の砂質土が堆積しており、遺物が多く含まれていた。その位置や出土遺物の多さから、旧期カマドに付属する貯蔵ピットと考えられる。

遺物は土師器・須恵器を中心にが総重量3,559g出土しており、そのうち14点(1,764g)を図示している。また、土鍾が223点、堆積土下位から床面にかけて出土している。

25~34は杯であり、そのうち25~27は内面に黒色処理が施され、28~31は内面に黒色処理が施こされない。32~34は須恵器である。25は緩やかに外反する体部をもつが、26・27はゆるやかに内湾する体部を持つ。これらは内面にはミガキ調整が施されるが25は太めでやや粗い。30はやや内湾気味の体部をもつが、28・29・32~34は大きく開く体部を持つ。したがって、口径もこれらの杯の方が15cmと大きい。調整は内外面ともロクロ調整のみである。33は小型の鉢である。形状が他とは異なっており、別の器種かもしれない。ロクロを使用せず、ナデのみの調整である。内面には指頭圧痕が残る。

35~38は甕であり、36・38は土師器、35・37は須恵器である。38は長胴型であり、体部中位に最大径をもつ。口縁部の形状は頸部から短く外反し、上方に引き出される。36も同様である。調整はロクロを基本としているが、外面中位以下は縦位のヘラケズリが施される。35・37は須恵器甕である。37は体部中位以下を、35は体部中位以上を欠損している。37の口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部でわずかに上方に引き出される。肩部はあまり張り出さない。35は体部中位付近に最大径をもち、外面には縦位のヘラケズリが施される。

土鍾は223点が出土し全て図化している。その大きさから3分できるが、大部分は長さ5cm前後のものである。断面径はほぼ円形であり、基本的には中央部に孔が穿たれている。粘土織痕や、47のように表面に紙の痕跡が残るものもある。

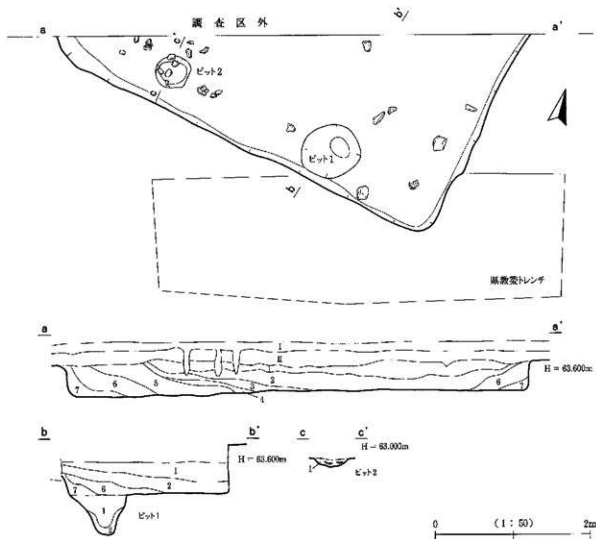
以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竈穴住居跡の時期はI期(9世紀後半)に属すると考えられる。

(西澤)

### SI05 竪穴住居跡 (第38~41図)

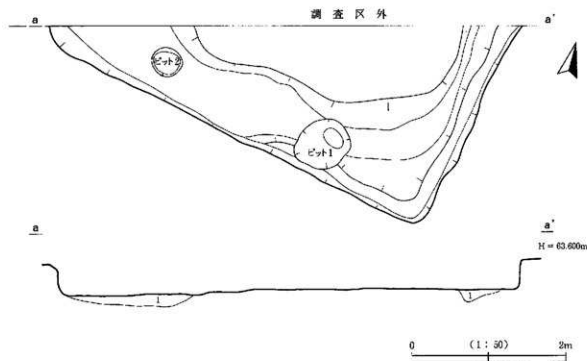
△1区N10E120グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは東壁から南壁にかけての約1/3であり、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。本住居跡は他の遺構との重複関係はなかった。

本遺構はIV層上面において黒褐色土の広がりをもって検出しているが、一部は県教委試掘トレンチによる



第38図 SI05 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色票	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI05	1	黒褐色	10YR2/2	砂質土	やや弱	やや割	
	2	黒褐色	10YR2/3	砂質土	やや弱	やや割	褐色ブロック少 炭少
	3	黒褐色	10YR3/2	砂質土	やや弱	やや割	
	4	黒褐色	10YR2/3	砂質土	やや弱	弱	
	5	暗褐色	10YR3/4	砂質土	やや弱	中	褐色ブロック少
	6	暗褐色	10YR3/3	砂質土	中	中	褐色ブロック中 黒褐色シルトブロック少
ピット1	1	暗褐色	10YR3/3	砂質土	中	やや液	褐色ブロック多 黒褐色シルトブロック少
	2	暗褐色	10YR3/3	砂質土	中	中	炭 褐色粒少
ピット2	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色ブロックやや多い
	2	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	中	炭土粒少 遺物含む
掘りかた	1	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	やや弱	炭化物、褐色粒子少量



第39図 SI05 掘りかた

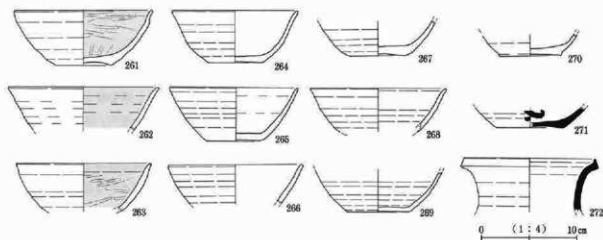
削平のため、V層上面で検出した。調査区外に延びるため平面形・規模はともに不明であるが、調査区内で確認した南壁は東西5 m50cmであり、方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は住居跡南壁を基準とすると $N-10^{\circ}-E$ である。

住居内堆積土は7層に分けた。1～4層は黒褐色砂質土を基調とする。5～7層は暗褐色砂質土を基調とし、V層に起因すると考えている黄褐色土ブロックが含まれていた。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈しており、自然堆積と判断している。

住居壁はほぼ直角に立ち上がり、検出面から床面までの深さは40～45cmであった。床面は調査範囲内ではほぼ平坦に構築され、暗褐色土を基調とする貼床が施されている。掘りかたは住居跡周辺を掘り込むが、住居跡の中央付近は高まりとして掘り残されている。そのため、貼床は住居壁付近に厚く貼られているが、中央付近ではほとんど確認できない。

ピットは住居跡床面上で2基検出した。ピット1は住居跡南壁の西よりに位置する。堆積土は黒褐色粘質土の単層で、土器片と焼土粒を含んでいた。本ピットは床面からの深さが10cm程度と浅く、性格は不明である。ピット2は住居跡南壁の中央、やや東よりに位置する。堆積土は2層確認した。1層は暗褐色土を2層は黒褐色土をそれぞれ基調とするが、堆積状況から人為堆積と判断している。本ピットは位置、規模から柱穴の可能性もあるが、本住居跡の最終的な機能時には埋め戻されたと理解している。

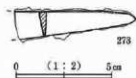
遺物の出上は住居跡南西隅のピット2付近にやや集中している。遺物の総重量は1,355g、そのうち798gを凶化した。261～270は土師器・杯である。器形がわかるものには内湾しながら立ち上がり口縁部がわずかに外反するもの(261・263・264・267)とやや内湾しながらも直線的に立ち上がるもの(262・265・266)がある。また、外面はいずれもロクロナデで、内面はミガキ調整で黒色処理を施すものとロクロナデのみの



第40図 SI05 出土遺物 (1)

ものがある。全体としては比較的器高が高いものが多いといえる。272は須恵器・壺である。焼成は良好で色調は暗灰色である。内外面ともクロナデでとくに端部は強いナデが確認できる。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡の時期は1期(9世紀後半)に属すると考えられる。



第41図 SI05 出土遺物 (2)

#### SI06 竪穴住居跡 (第42図)

A2区 SI0E100 グリッドに位置する。SI09 竪穴住居跡、ピットと重複し、新旧関係は本竪穴住居がピットより古く、SI09 竪穴住居跡より新しい。また、確認調査区の土坑との重複が考えられるが、試掘トレンチによって南壁が破壊されているため新旧関係は不明である。本竪穴住居跡は確認調査範囲にあたるため完掘を行わず、平面観察とサブトレンチでの断面観察に止めている。

本遺構はIV層上面において黒褐色土の広がりをもって検出している。検出面での規模・平面形は南北が3.90m、東西が5.80mで、南北に長い隅丸長方形を呈する。

住居内堆積土は2層に分けた。1・2層はともに黒褐色粘質土で、2層がいわゆる三角堆積を呈することから自然堆積と判断している。

住居壁は残存状況が悪いが緩やかな立ち上がりを確認している。検出面から床面までの深さは\*~\*cmである。床面は南北方向に緩やかな起伏があるがほぼ平坦に構築され、褐色粘土の貼床を部分的に施していた。掘形はサブトレンチ内ではピット状の掘り込みとして確認している。

ピットはサブトレンチ内で3基検出したが、床面での検出はピット1のみである。ピット1は住居跡西壁北西隅付近に位置し、堆積土は暗褐色粘質土の単層であった。本ピットの性格は不明である。

ピット2は貼床下層での検出であり、断面観察では床面まで立ち上がらないことを確認した。堆積土は灰褐色粘質土の単層であった。住居跡壁かたである可能性を考えている。ピット3についてはピット2と堆積土が同じため、同様に住居跡壁形と考えている。カマドに関する施設は確認していない。

本遺構は平面プランが隅丸長方形であり、またカマド等の施設を確認することができないなど住居跡としてはやや特異な点がある。しかし、サブトレンチ内ではあるが、壁の立ち上がりや貼床を確認しているため

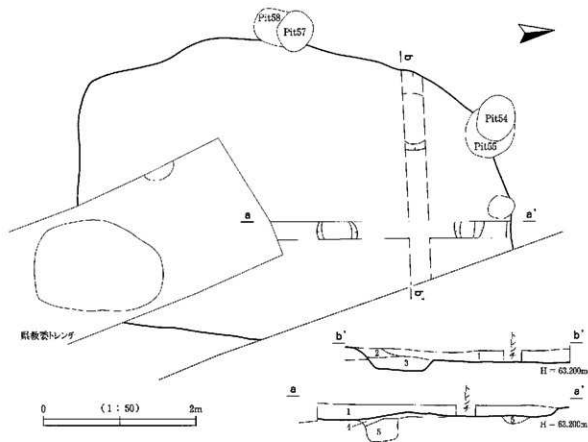
ここでは竖穴住居跡として扱っている。また、本遺構は遺物の出土が皆無であり時期を明確にすることはできないが、重複関係から平安時代以前と推測している。(小針)

### S107 竖穴住居跡 (第43~46図)

A2区南端 S20E100 グリッドに位置する。調査区内で住居跡東隅とカマド煙出し部を除くほとんどを検出している。本住居跡はピットと重複し、新旧関係はピットよりも本住居跡が古い。また、北東壁の一部は県教委による試掘トレンチによって破壊されている。

本遺構はIV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は南北4.90m、東西4.10mであり、南北を長軸とする長方形を呈している。本住居跡の方位は西壁を基準とするとN-6°-Eである。

住居内堆積土は4層に分けた。1層は暗褐色砂質土を基調としている。2~4層は黒褐色砂質土を基調とする。なかでも2にはV層に起因すると考えられる黄褐色ブロックが他の堆積土よりやや多く含まれている。



第42図 S106 竖穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S106	1	黒褐色	7.5YR3/2	粘質土	やや粘	やや強	炭化物 褐色粒 少量含む
	2	黒褐色	7.5YR3/1	粘質土	やや粘	中	炭化物微土ブロック含む
	3	暗褐色	7.5YR3/3	粘質土	やや強	やや強	褐色ブロック 黄褐色砂質土、褐灰色粘土ブロックを含む
	4	褐色	7.5YR4/4	粘質土	強	強	黒褐色ブロックを含む
	5	灰褐色	7.5YR4/2	粘質土	やや粘	やや強	褐色ブロックを含む

後世の削平によって検出面から床面までの深さが浅く、また試掘トレンチによって堆積土が存在しない部分もあるが、堆積状況はいわゆるレンズ状堆積や三角堆積を概ね呈することから自然堆積であると判断している。

住居壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がり、検出面から床面までの深さは25～30cmである。床面は調査範囲内ではほぼ平坦に構築される。断面観察では貼床・掘かたなどは確認できなかった。

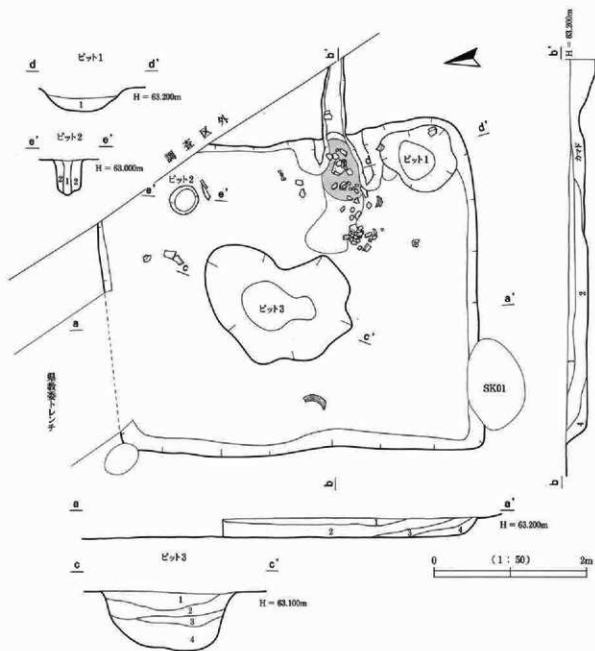
カマドは住居跡南東壁南よりに位置し、南東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存せず、また煙出し部は調査区外にのびるため確認されていないが、両袖、燃焼部、煙道を確認している。両袖間の幅は最大で1.10m、長さは北袖が48cm、南袖が80cmである。両袖とも床面から20～26cmの高さが残存していた。カマド内地積土は5層に分けた。1・4層は黒褐色砂質土、2層は明赤褐色粘質土、3・5層は暗褐色粘質土をそれぞれ基調とする。このうち2層は焼土の層で下層に暗褐色粘質土を基調とする3層が存在することから燃焼部の天井崩落上と考えている。また、4層はV層に起因する黄褐色ブロックと焼土ブロックを含むため煙道部分の大井崩落土と考えている。3層は燃焼部付近に、5層は煙道の底面付近に薄く堆積する。特に3層の下層に燃焼面を確認しており、ともにカマド機能時の堆積土の可能性を考えている。底面は燃焼部から煙道にかけてはやや急に傾斜し、一旦平坦になった後、やや急に落ち込んで傾斜を減じながら調査区外へとびる。煙道底面の状況から調査区境付近は煙出し部に近いものと思われる。煙道は住居跡南東壁から南東にのび、調査区内での長さは1.15mであった。燃焼部は88×53cmの楕円形の範囲で被熱しており、焼土の厚さは最大で11cmである。また、燃焼部の前面と南袖の外側に薄い焼土の広がりが確認された。カマド両袖はIV層上面に構築されており、貼床との関係は不明である。両袖ともにふい黄褐色粘質土単層で構築され、北袖内には構築材として17×12cmの礎が含まれている。

ピットは3基確認された。いずれのピットも住居跡床面から検出している。ピット1は住居跡南東隅、カマド南側に位置する。堆積土は黒褐色粘質土の単層で、カマド袖上にも一部堆積がみられた。本ピットの性格については位置・規模から貯蔵ピットと判断している。ピット2は住居跡北東付近に位置する。断面観察では柱痕跡が確認され、床面の検出であることから本住居跡に伴う柱穴と判断したが、1基のみの検出で他の柱穴が確認できないことから断言できない。ピット3は住居跡中央に位置する。2.2×1.5mの不整な円形で住居跡床面からの深さは80cmと規模が大きい。堆積土は4層に分けたが堆積土中には焼土を含んでいた。貯蔵ピットの可能性もあるが、位置・規模を考慮すると断言することはできず、性格は不明とされる。

遺物はカマド周辺に床面からやや浮いた状態でまとまりをもって出土した。また、須恵器大甕(285)が床面に散乱した状態で出土している。遺物の総重量は約5,000g、そのうち図化したのは13点・4,501gである。274～277は土師器・杯である。内湾しながら立ち上がるもの(274)と緩やかに内湾しながら立ち上がり口縁部がわずかに外反するもの(275～277)がある。いずれも外面はクロコナデ、内面はミガキで黒色処理を施す。278は須恵器・杯で緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。焼成は良好で色調は灰色である。279～284は土師器・甕で流量が大型のもの(279・280・282)、中型のもの(281・283)、小型のもの(282)がある。また、280・283は調整技法にクロコナデを用いるもの(280・282～284)と用いないもの(279・281)がある。また、280・283は口縁部が「く」字状に鋭く屈折し、端部は強いナデによって面を形成するなど類似点が多い。284の底部には砂粒の付着がみられる。いわゆる「砂底」土器であろう。285は前述の須恵器・甕である。外面はタタキ、内面には当て具痕が確認できる。焼成は良好堅緻であり、色調は暗灰色である。286は凹み石である。表裏に窪んだ部分が何箇所もあり、使用面と考えられる。

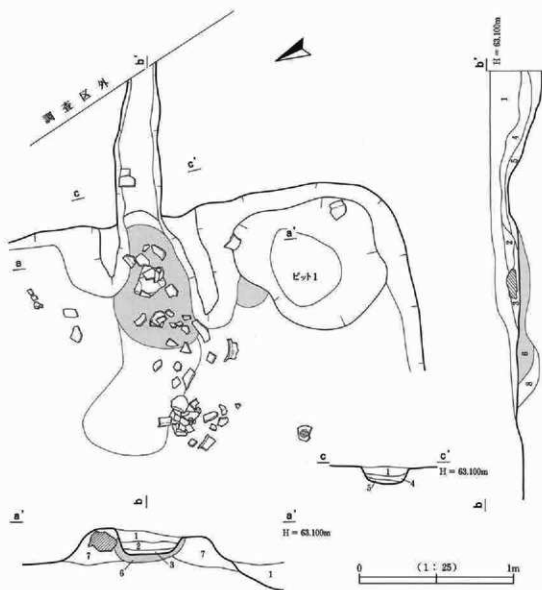
以上、遺構の特徴及び出土遺物から本聚穴住居跡の時期は1期(9世紀後半)に位置づけられると考えられる。

(小針)



第43図 SI07 整穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI07	1	暗褐色	10YR3/4	砂質土	弱	やや弱	
	2	黒褐色	10YR3/2	砂質土	弱	中	黄褐色土ブロック少
	3	黒褐色	10YR3/2	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック中
	4	黒褐色	10YR2/2	砂質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少 灰土粒を少量含む
ピット1	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック多量含む
ピット2	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック少量含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック多量含む
ピット3	1	暗褐色	10YR3/3	粘質土	中	中	褐色土ブロックを少量含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	やや弱	黄土ブロック、褐色、黄褐色土ブロックをやや含む
	3	にふい黄褐色	10YR7/3	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色土ブロックを多量に含む
	4	にふい黄褐色	10YR5/3	粘質土	やや強	やや強	底位に黄褐色土ブロックを少量含む



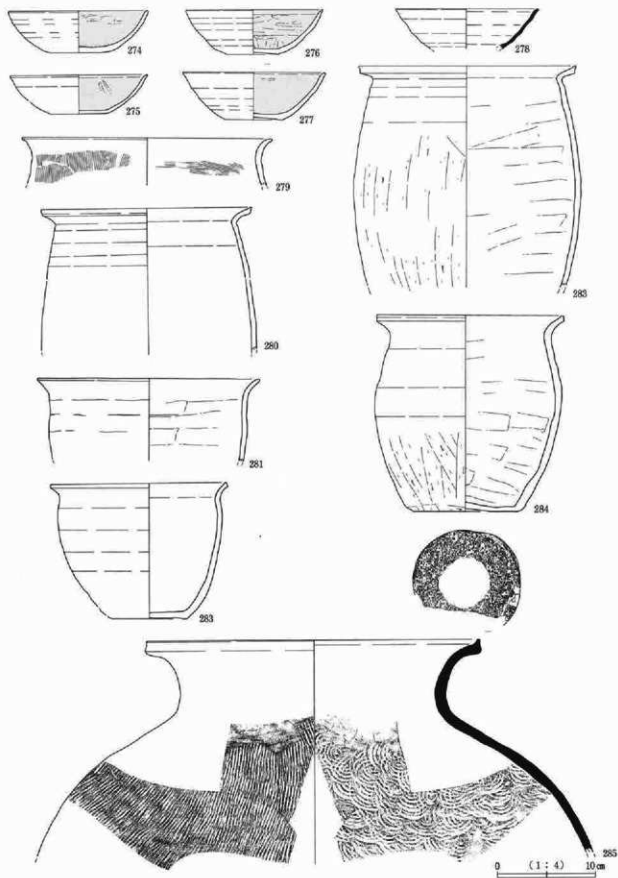
第44図 SI07 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI07カマド	1	黒褐色	10YR2/3	砂質土	弱	やや弱	焼土ブロック少
	2	明黄褐色	2.5YR5/8	粘質土	やや強	やや強	焼土、天井崩落土
	3	暗褐色	10YR3/4	粘質土	やや強	弱	炭化物少、焼土ブロック中
	4	黒褐色	10YR2/3	砂質土	やや弱	弱	炭化物少、焼土・黄褐色土ブロック中 (煙道部天井崩落土か)
	5	暗褐色	10YR3/4	粘質土	やや強	弱	焼土ブロック少 黄褐色土ブロック少
	6	暗赤褐色	10R3/6	粘質土	中	強	焼土、炭化物少量含む
	7	にぶい黄褐色	10YR7/4	粘質土	やや強	やや強	焼土ブロックを含む
	8	暗褐色	10YR3/4	粘質土	やや強	弱	焼土ブロック少 黄褐色土ブロック少

SI08 竪穴住居跡 (第13図)

A区 NOE100 グリッドに位置する。検出された位置が確認調査区内であったため、精査を行わず検出のみの調査となっている。調査区内で検出できたのは西側約1/2である。平面観察ではPit203と重複し、新旧関係は本竪穴住居跡の方が古い。本遺構はIV層上面において黒褐色土の広がりをもって検出された。確認できた西壁の規模は約3m、平面形は方形を呈すると推定できる。堆積土中には炭化物・焼土粒が含まれてい





第45図 S107 出土遺物 (1)

た。また、焼土の広がりが出土面上で1箇所確認できた。

検出面での遺物の出土はないが堆積土及び平面形から竪穴住居跡と判断しており、時期は他の竪穴住居跡と同様、平安時代（9世紀後半代）と考えている。（小針）

#### SI09竪穴住居跡（第47～50図）

A2区 S20E100 グリッドに位置する。SI06竪穴住居跡、ピットと重複し、新旧関係は本住居跡がいずれの遺構よりも古い。SI06竪穴住居跡との重複関係から、本来であればSI06竪穴住居跡完掘後に本住居跡の調査を開始すべきであるが、SI06竪穴住居跡は確認調査範囲にあたるため平面観察とサブトレンチでの断面観察に止まっており、本住居跡のみを完掘している。また、住居跡東壁はSI06竪穴住居跡によって破壊されている。

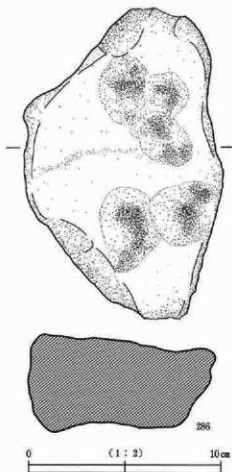
本遺構はIV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は北壁が4.10m、西壁が3.90mで方形を呈している。本住居跡の方位は確認できた住居跡北壁を基準とするとN-8°-Eである。

住居内堆積土は暗褐色粘質土の単層であり、堆積状況からは自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。

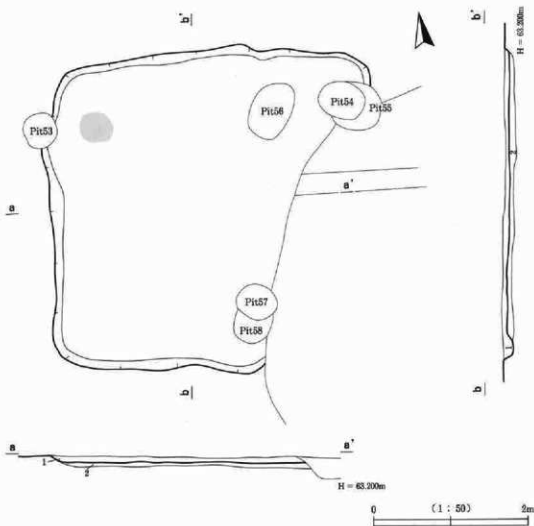
住居跡は残存状況が悪いが緩やかな傾斜の立ち上がりを確認している。検出面から床面までの深さは8cm～10cmである。床面はほぼ平坦に構築され、貼床が施されている。貼床とした2層については暗褐色土を基調としており、当初は1層と色調が近似するため住居内堆積土と考えていた。しかし、1層に比べしまりが強く、焼土の検出も2層の上面であったため最終的には貼床と判断している。畑かたは住居内全体をほぼ平坦に掘り込んでいる。

カマド・ピット等の施設は確認できなかったが、住居跡西壁北よりに50×35cmの範囲で焼土を検出している。本住居跡は残存状況が悪く、焼土の周囲に袖・煙道等の痕跡を確認することができなかったが、位置関係からこの焼土がカマドの燃焼面である可能性がある。

遺物は住居内堆積土からの出土がほとんどを占める。遺物の総重量は1,638gでそのうち1,106gを図化した。287・288は土師器・杯である。288は比較的大型であるが、ともに底面から内湾しながら立ち上がる器形である。調整技法はいずれも外面はロクロナデで下位には回転ヘラケズリを確認でき、内面はミガキで黒色処理を施す。289～291は土師器・甕で289は底部片、290・291は口縁部片である。いずれも調整技法にロクロは使用されていない。290は口縁部が緩やかに外反しているが、291は口縁部が強く外反しており形態が



第46図 SI07出土遺物（2）



第47図 SI09 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI09	1	暗褐色	10YR3/4	粘質土	やや弱	やや弱	黄土粒 黄褐色砂共に少
	2	暗褐色	10YR3/4	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色砂上位にブロック状に多(潮かた埋土=貼床)

異なっている。292は土師器鉢である。底部が欠損しているため全体の器形は不明であるが、緩やかに内湾しながら外傾し口縁部は短く外反している。外面は上位にロクロナデ、中位以下には縦位のミガネ・ケズリを施されている。これらの土器類のほか、土師が51点出土している(293~344)。破片もすべて図化しているため、同一個体を含んでいるかもしれない。いずれも関係のものも少ないが、SI04 竪穴住居跡出土例と同様の形態を呈していると予想される。土師の出土は本遺構とSI04 竪穴住居跡に限定される。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡の時期はI期(9世紀後半)平安時代に位置づけられると考えられる。(小針)

#### SI10 竪穴住居跡(第51~55区)

A3区北端 S50E100 グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは北壁から東壁にかけての約1/3であ

り、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は発掘を行っていない。本住居跡はカマド煙道部分でピットと重複し、新旧関係は本住居跡が古い。

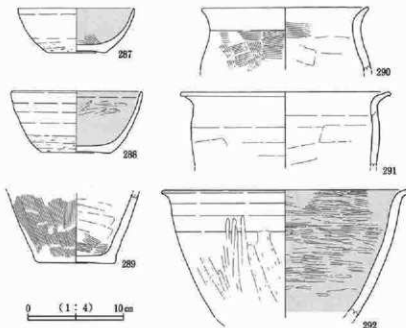
本遺構はV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。調査区外に延びるため規模・平面形は不明であるが、南東隅を確認した東壁で南北4mであり、方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は調査区内で確認できた住居跡東壁を基準とするとN-5°-Eである。

住居内堆積土は2層に分

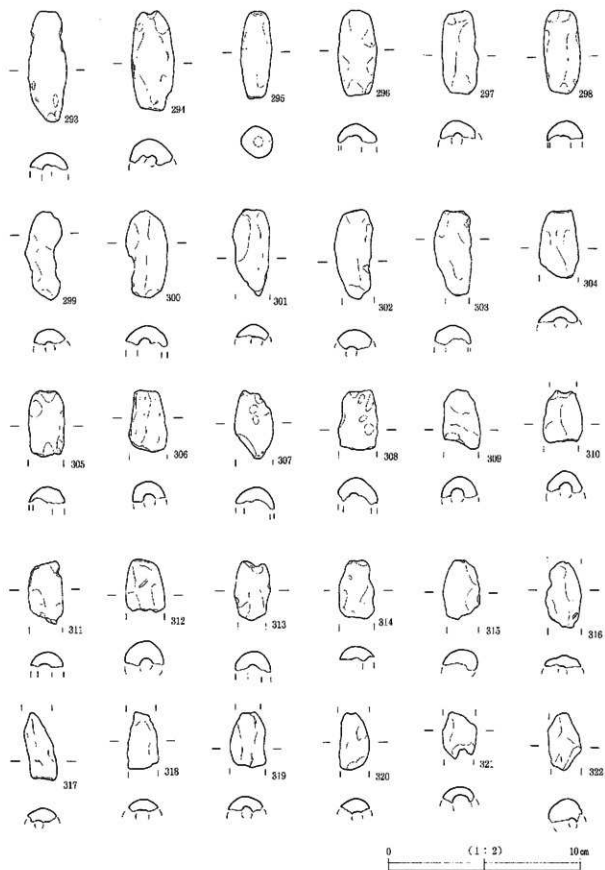
けた。1・2層は暗褐色シルトを基調とし、IV層に起因すると考えている黄褐色粒及び焼土粒を含んでいる。後世の削平によって検出面から床面までの深さが浅いため明確なレンズ状堆積や三角堆積を確認することはできなかったが、堆積状況から自然堆積と考えている。

住居壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がり、検出面から床面までの深さは15~20cmである。床面は調査範囲内ではほぼ平坦に構築され、黒褐色土を基調とする貼床が施されている。掘形は住居壁周辺を深く掘り込むが、住居跡の中央付近は高まりとして掘り残されている。そのため、貼床は住居壁付近に厚く貼られているが、中央付近ではほとんど確認できない。

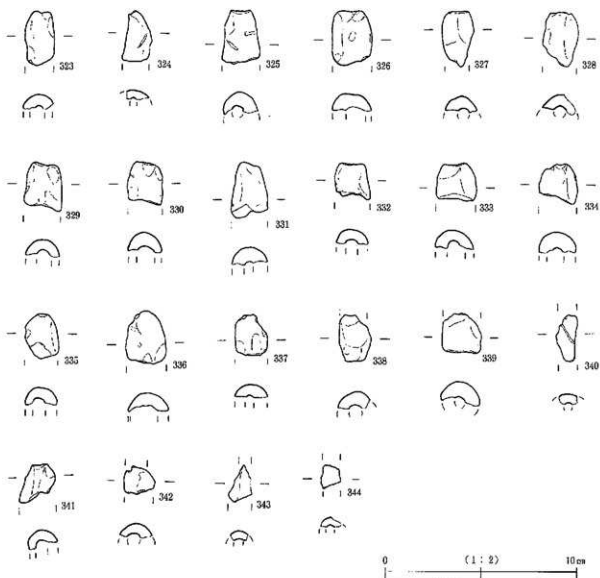
カマドは住居跡北壁と東壁の2箇所で確認している。新时期カマドは住居跡北壁東よりに位置し、北壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存していないが、両袖、燃焼部、煙道、煙出し部を確認している。両袖間の幅は最大で85cm、残存する長さは東袖が55cm、西袖が30cmであった。両袖とも床面から10~15cmの高さが残存している。カマド内堆積土は8層に分けた。いずれの層も黒褐色、暗褐色を基調とするが、2層に焼土ブロックが、5層には焼土ブロック・黄褐色粘土ブロックがそれぞれ多量に含まれているため、いずれも天井の崩落土と理解している。また、6・7層にも焼土ブロック・黄褐色土ブロックが含まれており、天井の崩落土を含む可能性がある。8層は煙道から両袖間にかけて確認できた層でカマド機能時の地積土と考えている。底面は燃焼部から煙道にかけてはやや急な傾斜で立ち上がるが、煙道から煙出し部にかけては緩やかに落ち込む。煙道は住居跡北壁から北に1.38m延びる。煙出し部では3層中より土師器甕が出土している。これは本来ピット状に掘り込まれた煙出し部に補強のため設置されたものと考えている。燃焼部は55×45cmの範囲で被熱しており、焼土の厚さは最大で15cmである。カマド両袖は貼床上に構築され、ともに暗褐色粘質土の単層であった。本住居跡の煙道は、天井崩落土と考えている2層がIV層に起因し、他に天井を構築する可能性がある粘土・礫等を確認できないことからトンネル状に割り貫かれていた可能性がある。



第48図 S109 出土遺物(1)



第49圖 SI09 出土遺物 (2)

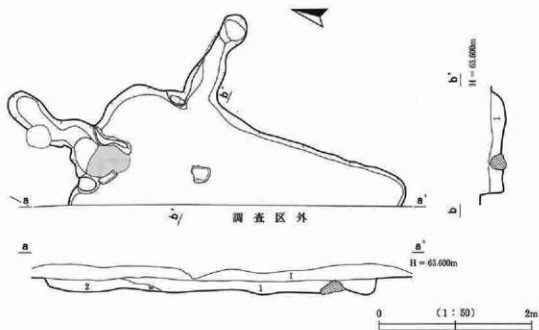


第50図 S109 出土遺物 (3)

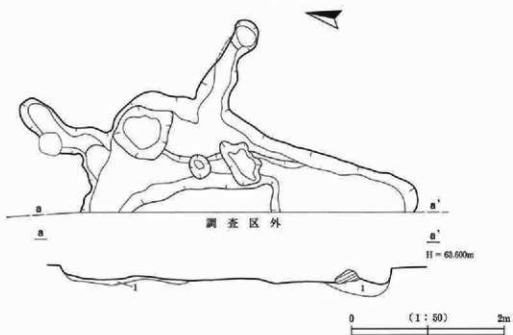
また、堆積状況からは燃焼部付近から煙道にかけて天井が段階的に崩落したものと考えている。

旧期カマドは住居跡東壁北よりに位置し、東壁に対してほぼ直交している。煙道・煙出しピットのみを確認しており、住居跡東壁からの長さは1.48mである。カマド内堆積土は6層に分けた。いずれの層も黒褐色、暗褐色を基調とし、堆積状況からは自然堆積と判断している。燃焼部及び袖については床面でわずかな焼土の広がりや北袖付近に袖の構築材であったと考えられる24×9cmの硯を確認したのみであるため、新カマド構築の際に破壊されたものであろう。

ピットは1基確認された。ピット1はカマドの両袖を断ち切る段階で検出している。断面観察から、このピットは新期カマド袖構築以前に掘り込まれているものの、貼床の上面まで立ち上がることを確認した。そのため本ピットは旧期カマドの機能していた段階に伴うものと判断している。本ピットの性格については位置・規模から貯蔵ピットと考えている。

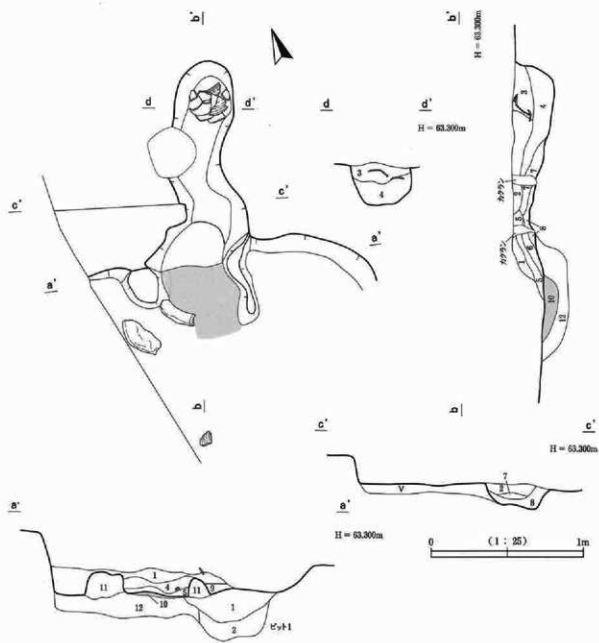


第51図 SI10 竪穴住居跡



第52図 SI10 掘りかた

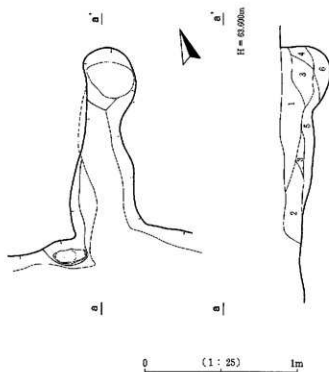
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI10	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	中	やや強	炭土粒を多く含む
	2	暗褐色	10YR3/3	シルト	やや強	中	VI層起源と思われる黄褐色粒を少量含む極少炭焼土も含む
SI10掘りかた	1	黒褐色	10YR2/1	シルト	やや弱	弱	炭化物少 焼土ブロック少量含む (SI10掘りかた埋土)



第53図 SI10 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI10カマド	1	暗褐色	10YR3/4	シルト	中	強	焼土ブロック少量含む
	2	暗褐色	10YR3/4	粘質土	強	強	焼土ブロック多い(天井崩落土)
	3	黒褐色	10YR2/2	シルト	弱	弱	
	4	黒褐色	10YR3/2	シルト	弱	弱	焼土ブロック少
	5	暗褐色	10YR3/4	粘質土	強	強	焼土ブロック黄褐色粘土ブロック多量に含む
	6	暗褐色	10YR2/3	粘質土	弱	弱	焼土ブロック少量含む(天井崩落土)
	7	黒褐色	10YR3/2	シルト	弱	弱	焼土ブロック少量
	8	黒褐色	10YR3/2	シルト	弱	弱	
	9	暗褐色	10YR3/4	シルト	弱	やや強	黄褐色粘土ブロック中量含む(カマド袖)
	10	暗褐色	5YR5/3	シルト	やや弱	強	燃焼部産面焼土
	11	黒褐色	10YR2/3	粘質土	弱	弱	堆積層
	12	黒褐色	10YR2/1	シルト	やや弱	弱	炭化物少 焼土ブロック少量含む(SI10層かた埋土)
ビット1	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	弱	弱	
	2	黒褐色	10YR2/2	シルト	やや弱	強	黄褐色ブロック多





第54図 SI10 旧カマド

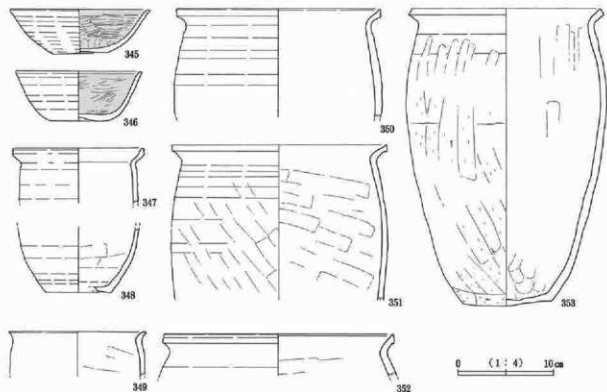
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
旧カマド	1	黒褐色	10YR2/2	シルト	弱	弱	凝土ブロック少量含む
	2	暗褐色	10YR3/4	シルト	弱	弱	凝土ブロック中量含む
	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質土	強	強	凝土ブロック少 II層をブロック状に少量含む
	4	黒褐色	10YR2/3	シルト	弱	弱	凝土ブロック少量含む
	5	黒褐色	10YR2/3	シルト	弱	弱	
	6	黒褐色	10YR2/3	シルト	弱	弱	凝土ブロック少量含む

遺物の総重量は約3,000g、そのうち2,331gを図化した。345・346は土師器杯である。345は底面から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。346は底面から直線的に外傾する器形で比較的高い。ともに外面はロクロナデ、内面はミガキで黒色処理を施す。347～353は土師器・甕で349を除いて調整技法にロクロを使用している。法量は概ね大型のもの(350～353)と小型のもの(347～349)に分けられる。ロクロを使用しているものは口縁部が「く」字状に屈折し端部はナデによって面を形成しているが、347は端部が上方につまみだされている。349は口縁部がわずかに外反する器形である。外面はマメツのため不明であるが、内面は横位のナデが確認できる。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本壱穴住居跡の時期はI期(9世紀後半)に位置づけられると考えられる。(小針)

## 2. 掘立柱建物跡 (SR)

掘立柱建物跡は合計6棟が確認された。このほか建物跡と認定できなかった柱穴群が1箇所集中する部分がある。これらの建物跡は古代に属するものと近世に属するものの二者に分かれる。中世については遺物の



第55図 S110 出土遺物

出土がみられなかったため、積極的に認定するには至らなかった。なお、本書では竪穴住居跡の規模と比較する利便性のため挿図の縮尺は1/50に統一している。

#### SB01 竪立柱建物跡 (第56図)

A区北東端、N5 E130 グリッド付近に位置する。重複する遺構は確認されなかった。検出はⅢ層下位からⅣ層上面にかけてである。

北西側、南西側が調査区外へのびると予想されるため、完掘は行っていない。したがって、正確な規模は不明であるが、梁間が1間、桁行きが4間以上の建物跡であると推定される。柱間寸法は、それぞれ、2.50mと設定することができる。また、桁間が4.80mである。柱穴は5基完掘を行っている。平面形はいずれも円形を基調とするもので、掘りかたの大きさは直径60cm前後、深さは確認面より30cm前後のものが多い。いずれの柱穴からも柱痕跡を確認している。柱痕の径はその痕跡から推定すると20cm前後である。

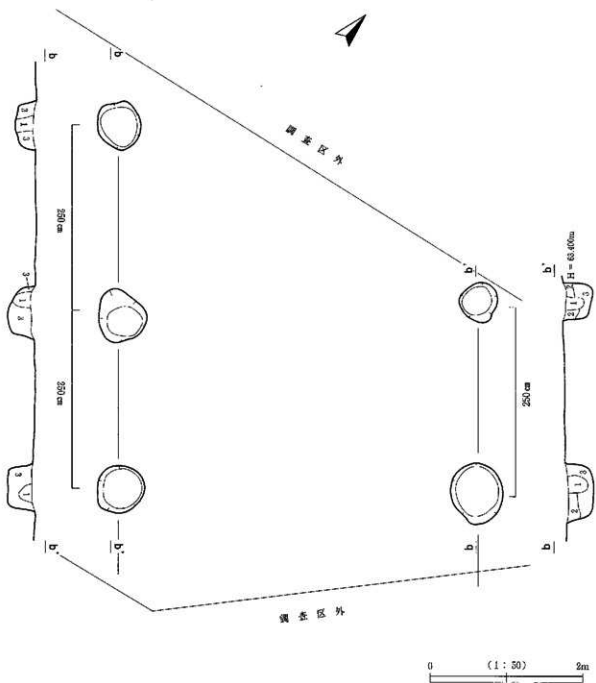
建物方向は梁側が北西-南東方向に向いており、正方位とはいずれも斜行している。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、堆積土の状況から近世に属すると考えられる。

(西澤)

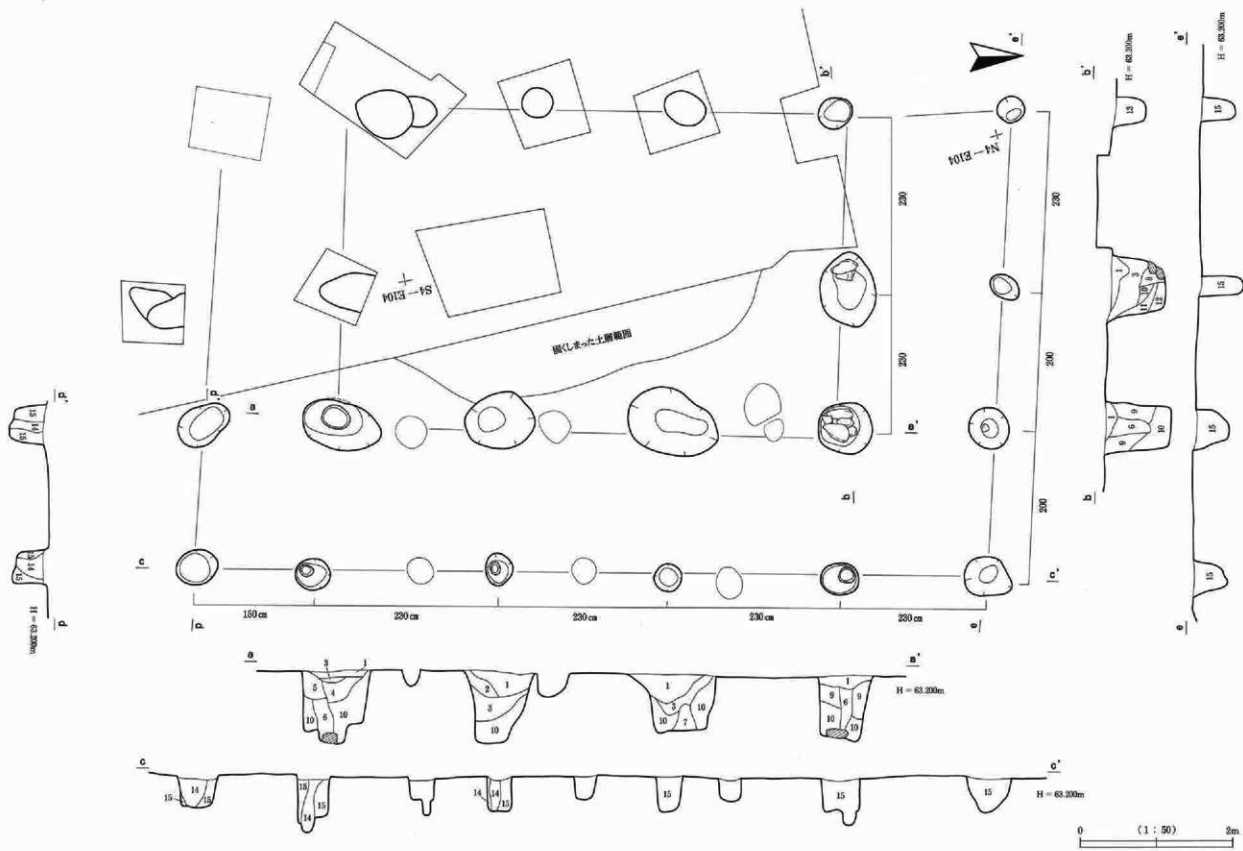
#### SB02 竪立柱建物跡 (第57図)

A区北端、N0 E100 グリッド付近に位置する。本建物跡西側で Pit 7 が基平面的に重複しているが、柱穴の直接の切り合いは認められない。また、底面のレベルをみてもこれらの Pit は、本建物跡の柱穴に比べて



第56図 SB01 掘立柱建物跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SB01	1	暗褐色	10YR3/3	砂質土	やや弱	弱	褐色土ブロック含む
	2	暗褐色	10YR3/3	砂質土	やや弱	中	
	3	黒褐色	10YR3/2	砂質土	中	中	



第57圖 SB02 獨立柱建物跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SD02号	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む
	2	暗褐	10YR3/3	粘土	強	強	黄褐色土ブロック多量含む(3層より固くしめる)
	3	暗褐	10YR3/3	粘土	強	強	黄褐色土ブロック多量含む
	4	黒褐	10YR2/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック少量含む
	5	黒褐	10YR3/1	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック・褐色土ブロック少量含む
	6	黒褐	10YR3/2	砂質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む
	7	明黄褐	10YR6/6	粘土	やや強	やや強	比較的均質な層
	8	にじみ茶褐	10YR5/3	粘土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック含む
	9	暗褐	10YR3/3	粘土	強	強	黄褐色土ブロック多量含む
	10	暗褐	10YR3/4	粘土	強	強	黄褐色土ブロック多量含む
	11	黄褐	10YR5/6	粘土	強	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む
	12	暗褐	10YR3/4	粘土	強	強	黄褐色土ブロック多量含む
	13	褐灰	10YR4/1	粘質土	やや強	強	褐色土ブロック含む
	14	黒褐	10YR2/2	砂質土	やや弱	やや弱	
	15	黒褐	10YR2/2	砂質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む

浅いことから別の柱穴と判断した。そのほか、調査区外で柱穴の重複が認められるが完備していないため詳細は不明である。調査区内には一部のみしか含まれていなかったが、附付の建物跡の可能性が高いと考えられたため関係諸機関の協力のもと、範囲外については検出のみを行っている。ただし、調査した範囲も限られ、期間の制約もあり十分な確認作業を行ったとはいえない。したがって本遺構は完掘をおこなっていない。

平面形式は身舎部と廊部分に分かれた附付きの独立柱建物である。身舎部分の規模は3間×2間の南北棟である。確認した11基であるが、完掘はそのうち6基のみである。その他は調査区外のため検出のみを行っている。規模は、桁行き6.90m、梁間は4.60m、面積は31.7㎡である。柱間寸法は2.30mが基本となる。柱穴の規模は抜き取りの可能性が考えられるため正確ではないが、現状では円形から楕円形の平面形を呈し、径1mを超え、深さ1mの大型の掘りかたである。抜き取りの可能性が少ない柱穴をみると直径が70cm、深さは確認面より1mの平面円形の掘りかたである。掘りかたの堆積土は細かなものではないが、版築状に固められた痕跡が残り非常に堅く締まっていた。また、柱痕の痕跡と考えられる堆積土も存在する。

廊部分の規模は5間×3間であり、北・西・南側の3面に付設される。桁行きは10.70m、梁間は6.30mである。柱間寸法の基準は2m30cmと身舎と同様であるが、一部に2.0m、1.50mのおの混じる。廊部分も含めた面積は67.41㎡である。建物跡の方位はN 2° Eであり、ほぼ正方位に沿っている。身舎内には、黄褐色ブロックを多く含む固く締まった層が存在した。これはあるいは壁地層かもしれない。

遺物はほとんど確認できず、わずかに土師器数点が出土したのみである。したがって、時期は不明ながらも堆積土の特徴・方位からI期(9世紀後半)に属すると考えている。(西澤)

### SB03独立柱建物跡(第58図)

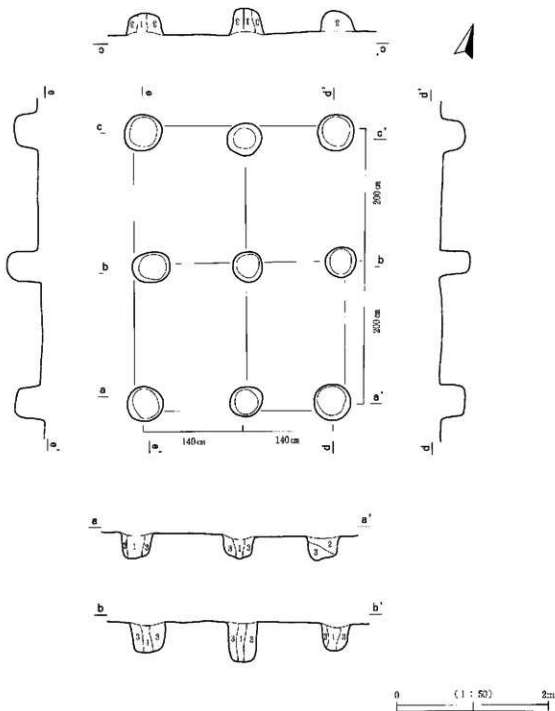
B区中央部、S110W10グリッドに位置する。他遺構との重複はない。

平面形式は9基の柱で構成される総柱式である。規模は2間×2間であり、平面形は南北に長い方形である。桁行きは4.00m、梁間は2.8m、面積は11.2㎡である。柱間寸法は桁行きは200cmを基本としているが、梁行きは140cmであり、梁間の方が60cm短い。柱穴掘りかたの堆積土はおもに柱痕と掘りかたの堆積土に分けられる。ほとんどの柱穴からは柱痕の痕跡が認められる。深さは確認面から30~40cmとやや浅いが、底面の深さもほぼ一定である。中央の柱穴のみ確認面から50cmとやや深い。建物跡方位はN 18° Wである。

総柱式の建物形式を採用しているため、本建物跡は倉庫の可能性が高い。年代は周辺にある竪穴住居跡と堆積土の特徴が類似するため、I期(9世紀後半)に属すると考えられる。(西澤)

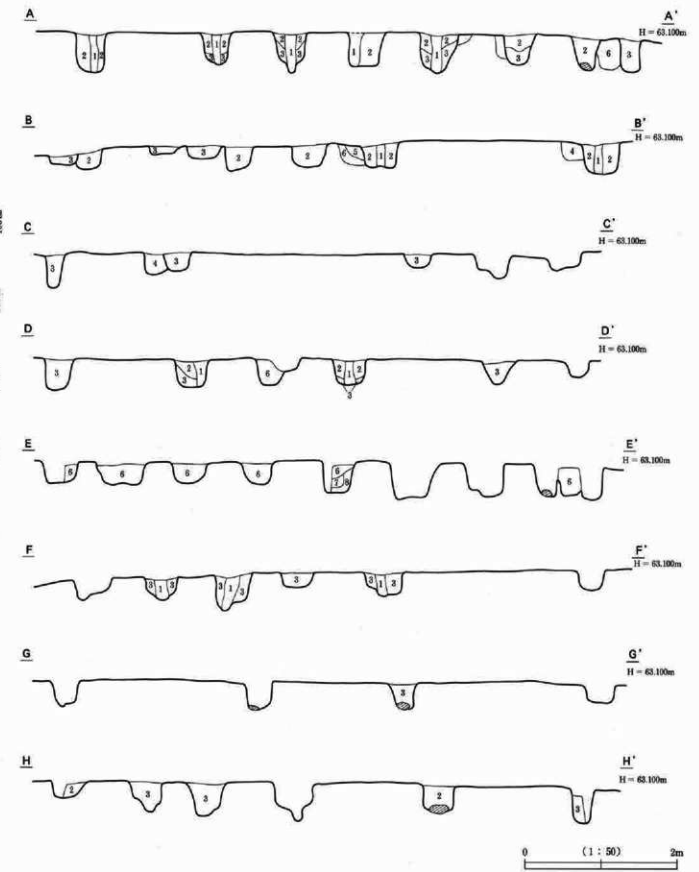
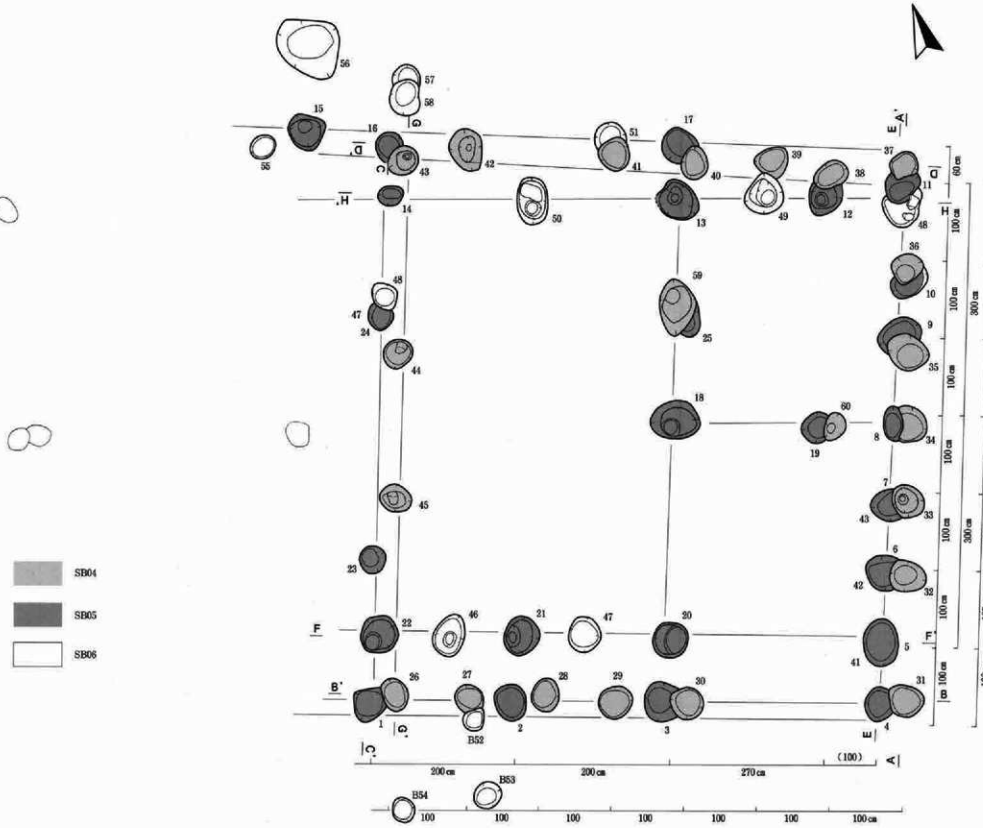
### SB04・05・06独立柱建物跡(第59図)

B区北東部、S90W10~E10グリッドに位置する。SD05と重複しており、本建物跡の方が新しい。北東



第58図 SB03 掘立柱建物跡

遺構名	層番号	色澤	記号	土質	粘性	しまり	特徴
SB03	1	黒褐	10YR2/2	砂質土	弱	中	
	2	暗褐	10YR3/3	粘質土	中	中	黄褐色上ブロック含む
	3	黒褐	10YR2/2	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む



第59圖 SB04・05・06 掘立柱建物跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SB04-06	1	褐灰	10YR8/1	粘質土	中	やや弱	褐色上ブロック含む、黄褐色土ブロック少量含む
	2	黒褐	10YR2/1	粘質土	中	やや強	
	3	黒褐	10YR3/2	粘質土	やや強	中	
	4	黒褐	10YR3/2	粘質土	中	やや弱	
	5	暗褐	10YR3/3	粘質土	やや弱	小	
	6	黒褐	10YR3/2	粘質土	中	中	
	7	黒褐	10YR2/3	粘質土	中	やや弱	
	8	黒褐	10YR2/3	粘質土	中	中	

側には近世葛群、SB04 が位置している。3 棟の建物跡が重複するがほぼ同位置のため、建て替えと判断している。新しい建物跡から SB04 → SB06 とする。西側は斜面となっており多くの柱穴は流失あるいは削平されたと考えられる。したがっていずれの建物跡も完備しておらず、柱穴も不足する。

SB04 はもっとも新しいと考えられる建物跡である。確認できた大きさは 7 × 7 間のみである。柱間寸法は 100cm を基本とするようである。B 44・B 45 柱穴は北側から 250cm、200cm、250cm の柱穴寸法をもち、西に建物がひろがるとすると間仕切となる。B 59、B 60 が内側に位置することから、間仕切がさらに考えられるが、詳細は不明である。

SB05 は、下屋柱が南北に付設される構造である。確認できた大きさは 4 × 8 間であり東西棟と考えられる。桁行きは、現状では 6.70m、梁間は 7.60m である。柱間寸法は桁行きが 20m を基本とし、梁間が、100cm を基本とする。SB04 と同様に間仕切が確認できる。

SB06 はもっとも古いと考える建物である。そのため柱穴も不足しており建物跡としては残りが悪い。柱穴の位置をみると SB04・05 とあまりかわらないと考えられる。構成する柱穴が少ないため柱間寸法等は不明である。なお柱穴 B 53～58 については建物として確認できなかった。

遺物の出土は認められなかったが、堆積土の状況から近世に属すると考えられる。

(西澤)



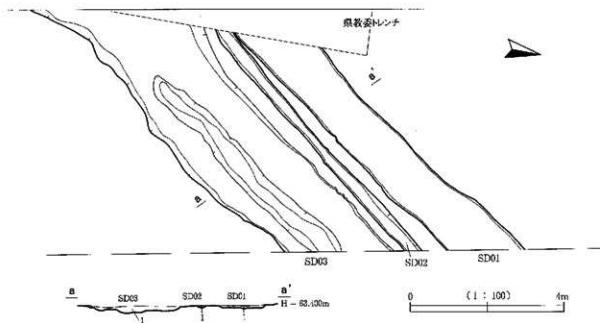
### 3. 溝跡 (SD)

#### SD01・02・03溝跡 (第60図)

A3区S60E100グリッドに位置する。調査区内では他の遺構との重複関係はないが、位置関係からSD01溝跡とSD02溝跡は県教委試掘トレンチ部分で重複していたと推定できる。いずれの溝跡も北東から南西にほぼ平行して延びるが調査区内では一部のみの検出であり、また、SD01・02溝跡は試掘トレンチによって破壊されているため、完掘を行っていない。

これらの溝跡はV層上面で暗褐色土の広がりをもって確認しており、遺構内堆積上は暗褐色砂質土の単層であったため人為堆積か自然堆積か判断することはできなかった。調査区内で検出した長さはSD01溝跡が7.30m、SD02溝跡が7.50m、SD03溝跡が8.90mであり、上幅はそれぞれ1.3・0.4・2.5mであった。いずれの溝跡も調査区内ではほぼ直線的に延びる。検出面からの深さはSD01・02溝跡がそれぞれ10.5cmと浅いが、SD03溝跡は20cmとやや深い。いずれも壁が残存する部分では緩やかに立ち上がるが、SD03溝跡は中位で一度ほぼ平坦になった後、再び緩やかに立ち上がる。底面はSD01・02溝跡がほぼ平坦であるのに対し、SD03溝跡は北東調査区際から6.3mにかけて中央部分がさらに一段掘り窪んでいた。

SD01・02・03溝跡は方向・堆積土がほぼ同一であるため、比較的近い時期の同様の性格をもった溝跡で



第60図 SD01・02・03溝跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SD01	1	暗褐	10YR8/3	粘質土	やや弱	中	
SD02	1	暗褐	10YR8/3	粘質土	やや弱	中	
SD03	1	暗褐	10YR8/3	粘質土	やや弱	中	
SD04	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	中	中	黄褐色心土少量含む
	2	黒褐	10YR3/1	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色ブロック含む
	3	黒褐	10YR3/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色粒土少量含む
SD05	1	黒褐	10YR2/2	砂質土	やや弱	やや弱	

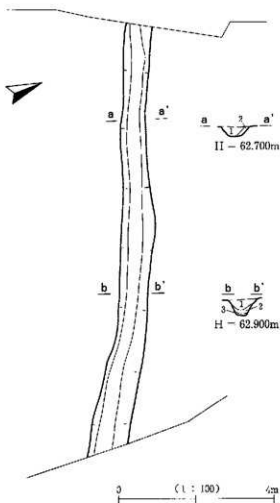
あると考えている。いずれも遺物の出土がないため時期は不明であるが、堆積土からは近世以降の可能性が高い。  
(小針)

#### SD04溝跡(第61図)

B区 S90E0グリッドに位置する。周辺には近世竪群やSB04・05・06掘立柱建物跡が位置するが他の遺構との重複関係はなかった。本溝跡は南東から北西に向かって直線的に延びるが、北西は後世の掘削によって破壊されており、また南東は調査区外に延びるため完掘を行っていない。

本遺構はIV・V層上面で黒褐色土の広がりをもって確認している。遺構内堆積土は3層に分けた。1～3層は黒褐色粘質土を基調とする。1・2層は遺構内全般に確認できるが、3層は遺構内南東付近にのみ確認できた層である。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈するため、自然堆積と判断している。調査区内で確認できた長さは11.20m、上幅は最大で90cmである。検出面からの深さは45cm、壁は底面からやや急傾斜で立ち上がり、部分的には上位でやや開く。底面は南東が北西に比べやや深いが概ね平坦であった。

本溝跡は堆積土に水の影響を受けた痕跡が確認できないことから、区画溝としての性格を有すると考えている。遺物の出土がないため時期は不明であるが、堆積上からは中世以前の可能性がある。  
(小針)



第61図 SD04溝跡

#### SD05溝跡(第62図)

B区 S90～S100W10グリッドに位置する。SB01・05・06掘立柱建物跡と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも本溝跡のほうが古い。本溝跡は北東から南西に向かって直線的に延びるが、残存状況は悪く、北東は後世の削平、南西は試掘トレンチによってそれぞれ破壊されている。そのため、本米はいずれの方向にも延びていたと推測している。

本遺構はIV・V層上面で黒褐色土の広がりをもって確認した。確認できた堆積土は黒褐色砂質土の単層である。したがって、自然堆積か人為堆積かは判断することができなかった。確認できた長さは20.30m、上幅は65cmである。検出面からの深さは10cmと浅いが、底面から緩やかに立ち上がる壁を確認している。底面はほぼ平坦であった。

本溝跡は残存状況が悪く、性格を判断することはできなかった。遺物の出土がないため時期は不明であるが、重複関係と堆積土からは中世以前と考えている。(小針)

#### 4. 土坑 (SK)

##### SK01土坑 (第63図)

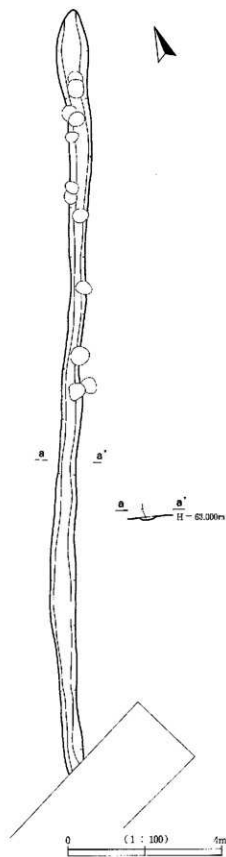
A 2区 S33R104 グリッドに位置する。SI07 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑が SI07 竪穴住居跡より新しい。本土坑はIV層上面で暗褐色粘質土の広がりをもって確認した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が205cm、短軸が145cm、検出面からの深さは65cmである。遺構内堆積土は暗褐色粘質土の単層であり、人為堆積か自然堆積かを判断することはできなかった。底面は中央がわずかに深くなり、壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係と堆積土から中世以降の可能性を考えている。(小針)

##### SK02土坑 (第63図)

A 2区 S31E105 グリッドに位置する。SB02 掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は本土坑が SB02 掘立柱建物跡より古い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸115cm、短軸64cmであり、検出面からの深さは15cmであった。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土を基調とする。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係から平安時代以前の可能性が高い。(小針)

##### SK03土坑 (第63図)

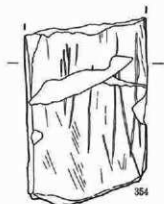
A 2区 S1E106 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はなく、V層上面で灰黄褐色土の広がりをもって確認された。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸115cm、短軸64cmであり、検出面からの深さは40cmであった。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は灰黄褐色砂質土、2層は褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土を基調とする。底面の両端にはビット状の落ち込みが確認でき、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性が高い。(小針)



第62図 SK03 溝跡

#### SK04土坑 (第65図)

A2区S2E105グリッドに位置する。SE02井戸跡と重複し、新旧関係は本土坑がSE02井戸跡より新しい。本土坑はV層上面で暗褐色土の広がりも確認した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸215cm、短軸60cm、検出面からの深さは40cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1・2層はともに暗褐色粘質土を基調とし、黄褐色ブロックを含んでいた。いずれもしまりが強いいため人為堆積の可能性がある。底面は南側がやや深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係から近世以降の可能性がある。(小針)



#### SK05土坑 (第63・65図)

B区E3107Sグリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は円形を呈し、規模は長軸215cm、短軸185cm、検出面からの深さは30cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は灰赤褐色シルトを基調とする。自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。底面は中央がわずかに深くなっており、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、堆積土から近世以前の可能性がある。(小針)



0 (1:2) 5cm

第63図 SK05 出土遺物

#### 5. 井戸跡 (SE)

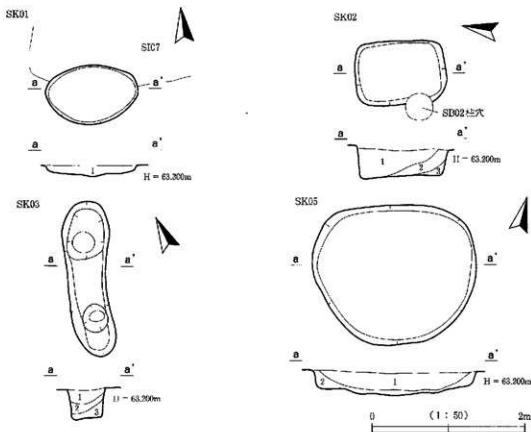
##### SE01井戸跡 (第64図)

B区S100E0グリッドに位置し、本遺構の北側5mにはSB03・04・05掘立柱建物跡がある。他の遺構との重複は確認できない。本遺構はIV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。規模は長軸1.50m、短軸1.20mで平面形は楕円形を呈する。

遺構内堆積土は4層に分けたが、調査中に湧水によって断面が崩落したため下層の堆積状況は不明であり、状況からは4層以上に分けることが可能であったと推測している。1層は黒褐色粘質土であった。2・3層は暗褐色粘質土を基調とし、黄褐色土ブロックを含んでいた。これは壁上位の状況からV層に起因すると考えており、人為堆積の可能性もある。4層は黒色粘粘土を基調とし、前述のように下層の状況は不明であるが砂層と互層となっていた可能性が高い。粘土の堆積層であるため水の影響を受けた堆積とも考えられよう。1・4層については自然堆積の可能性を考えている。

壁は底面から中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から上位にかけては大きく傾ける。傾けた部分の径は1.60m、短軸1.10m、底面の径は80cmであった。

本遺構は井戸枠などを確認していないが、堆積状況及び規模・平面形から素掘の井戸跡と判断している。また、中位から上位にかけての壁面の状況は、井戸の掘かたといった構築時のものではなく、機能時あるいは機能停止以降の埋没過程におけるものと考えている。遺物の出土は皆無であり時期を明確にすることはできないが、SB04・05・06掘立柱建物跡との間わりから近世の可能性があろう。(小針)



第64図 SK01・02・03・05

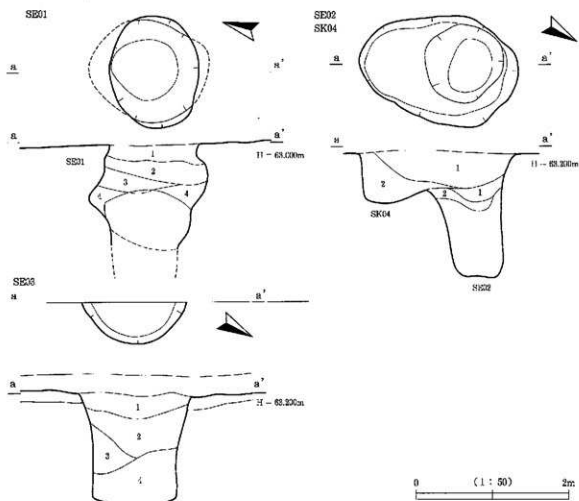
遺構名	層番号	色調	記号	上性	粘性	しまり	特徴
SK01	1	暗褐	10YR3/3	シルト	弱	弱	
SK02	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	やや強	中	褐色ブロックを散在しながら含む
	2	黒褐	10YR3/1	粘質土	やや強	やや弱	褐色粒(5より小さい)を少量含む
SK03	3	暗褐	10YR3/3	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色ブロックを少量含む
	1	灰黄褐	10YR4/2	シルト	やや弱	やや強	細かな褐色ブロックを40%含む
	2	褐	10YR4/4	粘質土	中	中	褐色ブロックを60%程度含む
SK04	3	暗褐	10YR3/4	粘質土	中	やや強	褐色ブロック多量 黄褐色ブロックを少量含む 前者は大きなブロックで混入
	1	暗褐	10YR3/4	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックを40%含む
	2	暗褐	10YR3/3	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを少量φ10cm程度の室内鏝を含む
SK05	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	やや強	やや弱	オリブ褐ブロックを少量含む
	2	灰赤	2.5YR4/2	シルト	やや強	やや弱	黄褐色ブロックを少量含む砂質土一部を含む

### SE02井戸跡

A2区S20E100グリッドに位置する。SK04土坑と重複し、新旧関係は本井戸跡がSK08土坑より古い。本遺構はSK08土坑の底面、V層中位で確認した。規模は径1.10m、平面形は円形であった。

遺構内堆積土は3層に分けたが、調査時にはSK08土坑と同遺構として認識しており、完掘後に別遺構とを判断した。そのため、断面観察を行ったのはK08土坑の断面観察時に確認できた1・2層のみであり、3層以下については断面観察を行っていない。1層は暗褐色粘質土、2層はにおい黄褐色粘質土をそれぞれ基調としている。2層についてはIV層に起因すると考えられ、人為堆積の可能性もある。

坑は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、上位をSK08土坑が破壊しているため、本来の形状は不明である。底面はほぼ平坦で、径は70cmである。SK08土坑底面からの深さは1.20m、IV層上面からの深さは1.70mである。



第65図 SE01・02・03井戸跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SE01	1	黒褐	10YR2/2	シルト	弱	弱	
	2	暗褐	10YR3/3	シルト	弱	強	黄褐色ブロック中少量含む
	3	暗褐	10YR3/3	シルト	弱	やや強	黄褐色ブロック少量含む 灰少量含む
	4	黒褐	10YR3/1	粘質土	強	強	こぶし大の川原石少量含む
SE02	1	暗褐	10YR3/3	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックを極少量含む
	2	にぶい黄褐	10YR4/3	粘質土	やや強	やや弱	暗褐ブロック 黄褐ブロックを少量含む
SE03	1	黒褐	10YR3/2	粘質土	中	中	こぶし大から親指大の礫多い 黄褐色ブロック中 褐色ブロック中
	2	黒褐	10Y3/2	粘質土	中	やや強	ク中
	3	黒褐	10YR2/2	粘質土	中	やや弱	親指大の礫少 粗砂多い 黄褐 褐色 黒褐粘土ブロック少
	4	黒褐	10YR3/2	粘土	強	やや弱	親指大の礫多い 粗砂多い 黄褐 褐色 黒褐ブロック多い 互層に堆積

本遺構は調査時の不注意により堆積状況が不明であるが、規模・平面形から素掘の井戸跡と判断している。遺物の出土がないため時期を明らかにすることはできないが、重複関係から近世以降の可能性がある。(小針)

#### SE03井戸跡 (第64図)

A2区 S30E100 グリッドに位置し、他の遺構との重複はなかった。調査区内で検出できたのは本遺構の東半分の1/2であり、西半分は調査区外に延びる。したがって本遺構は完掘を行っていない。本遺構はV層

上面で黒褐色土の広がりをもって検出したが、断面観察ではIV層からの掘り込みを確認しているため、本来はIV層以上からの掘り込みであったと考えている。

遺構内堆積土は4層に分けた。1～3層は黒褐色粘質土、4層は黒褐色粘土をそれぞれ基調とする。このうち1層については自然堆積と考えている。2層は親指大から拳大の礫を多く含み、V層に起因すると考えている黄褐色のブロックも含んでいた。加えて、しまりも強かったため人為堆積と考えている。また、3・4層では黄褐色・褐色のブロックと粗砂が基調とする堆積土と互層になっているのを確認している。これについては本遺構の機能時から廃絶直後にかけて自然堆積した層が水の影響を受けた可能性と人為堆積の可能性があるが、どちらか判断することはできなかった。

調査区内で確認できた規模は南北の径が1.40mであり、調査区内の状況から平面形は円形を呈すると推測している。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であった。底面の径は1.10m、検出面からの深さは1.25m、IV層上面からの深さは1.55mである。

本遺構は井戸枠などを確認していないが、堆積状況及び規模・平面形から素掘の井戸跡と判断している。遺物の出土はなく時期は不明である。(小針)

## 6. 槽跡 (SA)

### SA01 槽跡 (第68図)

A区、E105S60グリッド付近に位置する。すぐ北側にはSD1～3がある。調査区では4基の掘りかたが確認できるが、調査区外へさらにのびていると考えられる。

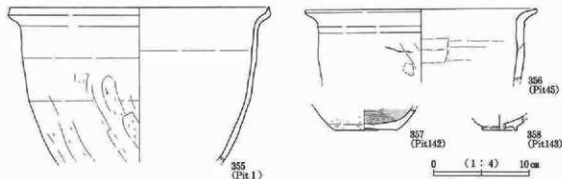
確認できた規模は約8mで北東-南西方向に直線状につづく。

SD1～3溝跡とはほぼ平行していることからこれと同時期と考えられるが、一部のみの調査のため詳細は不明である。(西澤)

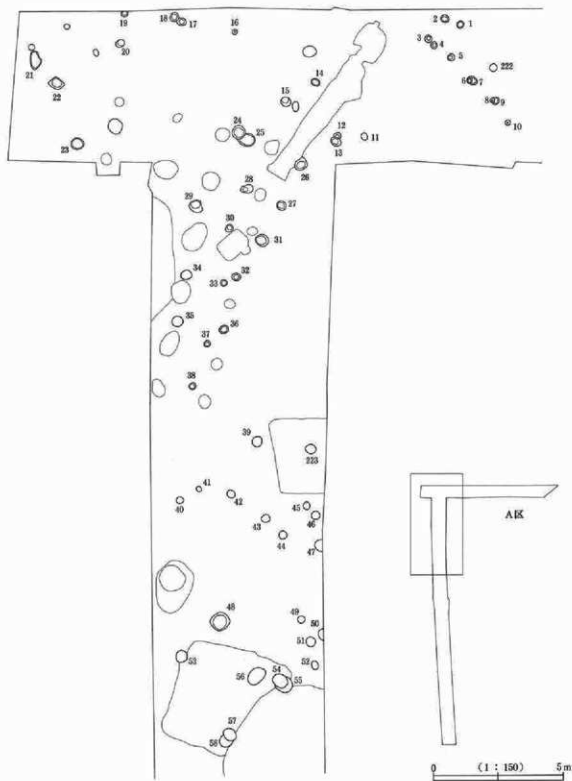
## 7. ビット (Pit)

### A区 Pit (第66・67図)

A区ではPit1～223の計223基のPitを確認している。これには確認調査区に位置するため平面観察のみ

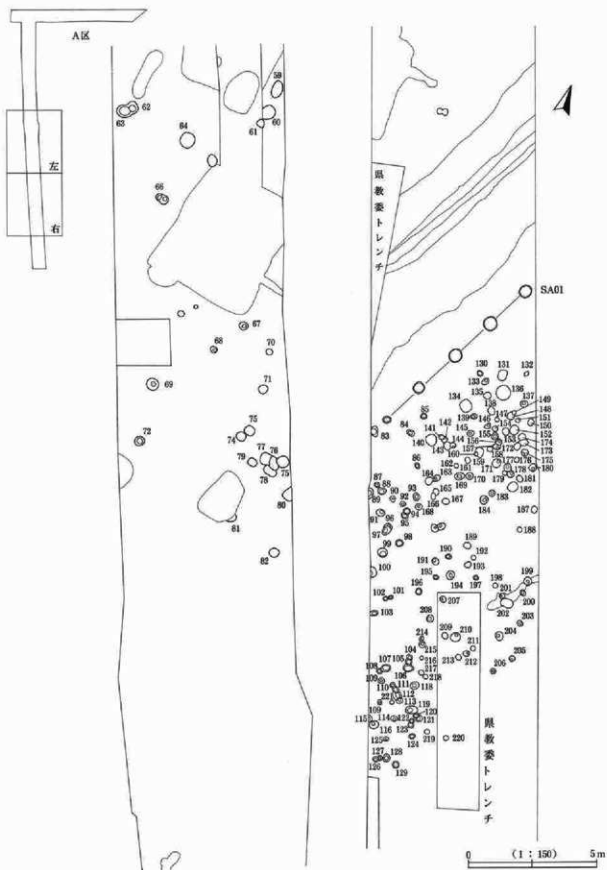


第66図 ビット出土遺物

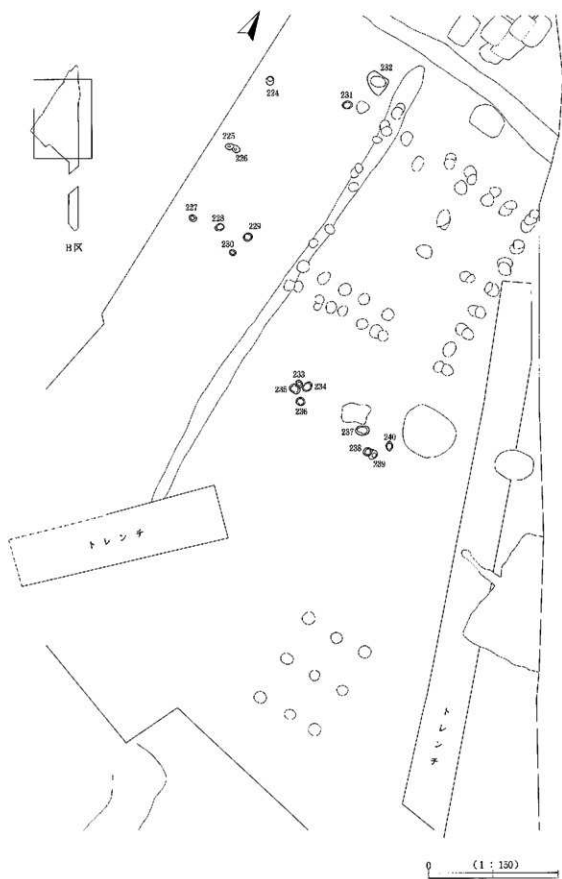


第67図 ピット位置図(1)





第88図 ピット位置図(2)



第69図 ビット位置図(3)

を行ったピットも含まれている。検出面は竪穴住居跡などと同じIV・V層であるが、ほとんどのPitはⅢ層上面からの掘り込みであったと考えている。堆積土は黒褐色・暗褐色・褐灰色を基調とする。A3区S70E100グリッド～S80E100には柱痕跡を確認できたものが集中しているが、調査区の制約から掘立柱建物跡として認識することはできなかった。A2区ではA3区に比べ密度は薄いものの、SB02掘立柱建物跡の位置するN0E100グリッド～N0E110グリッド周辺にやや多い。また、S0E100グリッド付近で確認したPit24～31は掘立柱建物跡となる可能性もあろう。しかし、残存度が著しく悪く積極的にそれと判断できなかった。遺物はいずれからもあまり多く出土しなかった。出土した遺物のうち、4点を図示している。355は土師器鉢である。大型で底部を欠損している。356は土師器甕でロクロ調整である。内外面とも磨減が激しく、詳細は不明である。357は杯底部片である。内面には黒色処理が施される。底部割線には、回転ヘラケズリがみられる。358は陶器碗であり、高台付近にまで灰釉がかかる。釉調から大塚相馬産の可能性が高いと考えられる。

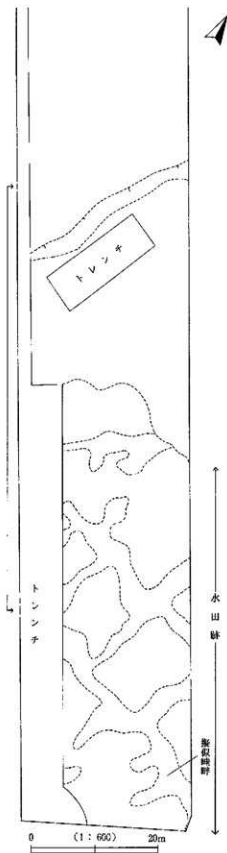
#### B区Pit(第70・71図)

B区ではPit224～270の計17基のPitを確認している。検出面はIV・V層であるが、ほとんどのPitはSB03～05掘立柱建物跡などと同じⅢ層上面からの掘り込みであったと考えている。堆積土は黒褐色・暗褐色・褐灰色を基調とするが、柱痕跡を確認できたものは少ない。A区と比較した場合、調査区内には特に集中する地点も確認できず散在した状況といえる。また、SB03～05掘立柱建物跡周辺のPitはこれらの掘立柱建物跡の柱穴跡である可能性があるが、柱痕跡が確認できないことや位置関係からここでは単独の遺構として扱っている。(小針)

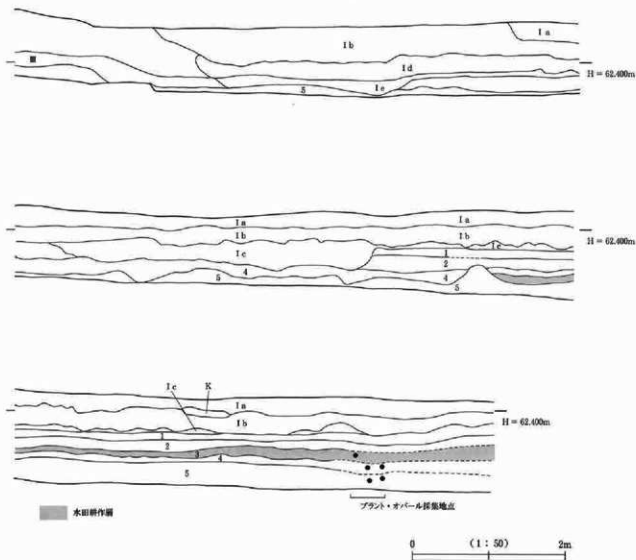
#### 8. 水田跡(SF)

##### 概要

A3区S100E100～S110E100グリッドに位置している。この地点は、竪穴住居跡が立地しているIV層面よりは1段低く、平均すると標高が約62m前後であり、住居跡立地面



第70図 SF01 水田跡



第71図 A区水田跡断面

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
A3区	Ia	灰黄褐	10YR5/2	粘質土	やや強	中	
	Ib	黒褐	10YR3/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐 黒褐 褐色ブロック中
	Ic	暗褐	10YR3/3	粘質土	やや強	やや強	斑痕多
	Id	灰黄褐	10YR4/2	粘質土	中	やや強	斑痕少
	Ie	灰黄褐	10YR4/2	粘質土	中	中	斑痕少 粗砂少
If	暗褐	10YR3/4	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐 黒褐 褐色ブロック中	
1	灰黄褐	10YR4/2	粘質土	中	やや弱	水堀整備以前 耕作層? (LIIに対応か?)	
2	褐灰	10YR4/1	粘質土	中	やや弱	古代~近世? (LIIに対応?) パミス粒少 耕?	
3	黒褐	10YR3/1	粘質土	中	中	古代? 耕作層? キジ時粘土質強い検出面 パミス粒少 粗砂	
4	暗褐	10YR3/4	粘質土	中	やや弱	LIV対応か作土 斑痕少	
5	褐灰	10YR5/1	粘土	中	中	粗砂 斑痕多い	

の標高よりも約1m低い。このため、この区域には他では確認されない土層が堆積することとなっている。  
この区域の土層をみると、現表土であるI層からIf層までの近代以降と考えられる層が堆積している。  
Ib層は粘性・締まりとも弱い黒褐色シルト層であり、古代の土器を包含していた。しかし、同時にビニー

ル等現代の遺物も出土することから、これらは他所より運び込まれた上であると考へた。おそらく付近にある遠縁の土砂を耕作土とするために運び込まれたと考へられる。事実、土地所有者が水田の前は畑作を行っていたという証言とも一致する。1c～f層までは、黄褐色ブロックや黒褐色ブロックが多く含む層であり、これらのブロックは基本土層Ⅳ・Ⅴ層に起因すると考へられる。畑造成時に関わる層であると考へている。上記1b層と同様現代の遺物を包含していたため、現代の土層と判断した。これらの直下層には暗褐色の砂質土層が存在し、断面をよく観察すると灰白色火山灰粒子が散在している層がある。したがって古代に属する可能性が考へられた。そして、これ以下の層においては層相の特徴から水田耕作上の可能性があると考へ、確実なものとするため自然科学分析をおこなった。その結果、イネのプラント・オパールは検出されたものの数が少なく、泥ざり込みの可能性も指摘されたが、少なくともイネの痕跡がわずかでも認められたため検出作業を行うこととした。

#### 検出

火山灰粒子の含まれる層は2カ所(2・3層)がある。2層は削平を多く受けているため、部分的にしか残存していなかった。したがって、実際検出作業を行った面は3層上面である。3層自体も上部層により削平を受けていることは言うまでもない。なお、この灰白色火山灰粒子は十和田 $\alpha$ 降下火山灰の可能性が高いと判断された(第Ⅳ章第2節)。

#### 畦畔の特徴

検出の結果、擬似畦畔Bが認められ、水田跡と判断した。擬似畦畔Bに相当する部分は灰色を呈する粘質～粘土を示し、耕作土に相当する部分は3層の砂質土である。また、その境界には酸化鉄の凝集がわずかに認められる。断ち割りの結果、この粘質土層が3層の上面に断面に表現されない程わずかに認められ、下層に続かないことが確認されたことから、この痕跡を擬似畦畔Bと判断している。

#### 水田区画

擬似畦畔bは方位をN-約40°-Eに向けており、蕃登目状に広がっている。東西方向の畦畔と南北方向の畦畔はほぼ直交している。調査区が狭小のため、完結する区画は1つのみである。これを見ると、東西3.50m、南北2.30m程の区画である。

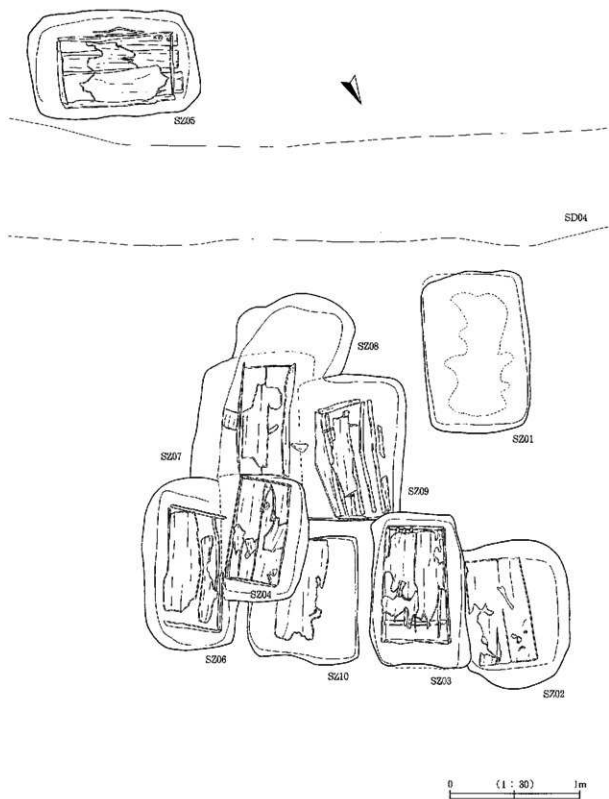
#### 他の諸施設と遺物

畦畔は部分的に途切れているところがあり、これらは水口の痕跡であると考へられる。調査区内からは3カ所確認できる。その他の施設については確認できなかった。現状での高低差は北西方向に高く、南東へ向かうに従って徐々に低くなっている。このことから、この方向に水利を行っていたと考へられるが、削平されているため不明である。

遺物は、古代に属する土師器の細片がわずかに出土するのみであり、それ以降の遺物は確認できなかった。

#### 小結

上記のように3層上面を検出した結果、水田跡と考へられる痕跡を確認した。年代は、火山灰粒子が十和田 $\alpha$ テフラと同等されたことから、集落とほぼ同時期に属すると考へているが、上層の大半が造成土と考へられるため他所から流入の可能性も否定できない。2層にも灰白色火山灰粒子を少量含んでおり、2と3層の層界がかなり混合していると考へられる。また、擬似畦畔bでの検出であること、検出された水田跡がいわゆる「小区画水田」であることから、明確に古代水田跡であると判断し難い点が残る。しかし、検出された平面の状況を積極的に評価すれば水田跡である可能性は十分高いと思われる。(西澤)



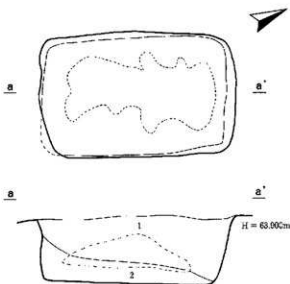
第72圖 近世墓群

遺構名	図番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ01	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック含む
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質土	やや強	やや強	小さな黄褐色土ブロック少量含む

## 9. 近世墓 (SZ)

### 概要

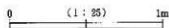
近世墓群はB区の北東部、SH04・05・06やSD04に隣接して位置する。検出数は10基であり、重複して存在している。遺物の出土が少なく明確に時期を決定しがたいものが多いが、配置関係から見るといずれも付近の位置する掘立建物跡と同様であり、18世紀を中心とする前後の時期が考えられる。重複が多いことから、この特定の場所に何時期かにわたって埋葬されていることがわかる。今回の調査で特筆すべき点として多くの墓塚から棺材が比較的良好に残存していたことが挙げられる。地下水位が高いため、水漬け状態であったのが辛い。該期の墓塚の検出例は多いが、棺材が遺存している例が少なく貴重な資料となっている。



### SZ01墓塚跡 (第73・74図)

B区の北西部、S90E 2 グリッドに位置する。南にはSZ08・09が位置している。本遺構は重複が認められず、単独で存在する。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたのみで構成される。

平面形は、角が丸い長方形を呈する。規模は、長軸が128cm、短軸が84cmであり、確認面からの深さが44cmである。堆積土は2層が確認できる。上層に黒褐色粘質土が、下層ににぶい黄褐色粘質土が堆積している。いずれもV層起源と考えられる黄褐色ブロックを多く混合している。この両層の間には幅90cm、高さ20cmの空隙が存在し、わずかに褐灰色粘土が堆積している。底面はV層面まで掘り込んでいるため黄褐色土を早しているが、中央部分は変色し灰色を呈していた。空隙は棺の、底面の変色は遺体(棺)の痕跡かも知れない。棺材が確認されないが、周囲の状況、掘りかた、土層の堆積状況から、本遺構も墓塚であると考えられる。遺物は寛永通宝が1点堆積土中から出土しているのみである。

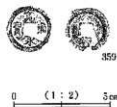


第73図 SZ01墓塚跡

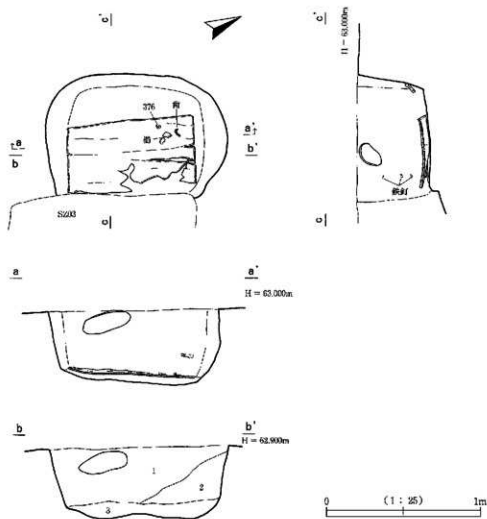
### SZ02墓塚跡 (第75～76図)

B区北西部、S88E 4 グリッドに位置する。南側をSZ03と重複しており、本遺構の方が古い。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

掘りかたは長軸が117cm、短軸80cmの楕円形状を呈する。北東側と西壁側をみると直線状を呈しているため、本来は方形を意識して構築された可能性があ



第74図 SZ01出土遺物



第75図 SZ02 墓坑跡

遺跡名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ02	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックを40%程度含む
	2	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色土ブロックを20%含有、1よりしまりがよい
	3	黒褐色	2.5y3/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロックを極少量含む

る。南側はSZ03により破壊されている。確認面からの深さは47cmである。

掘りかたの堆積上は3層が確認できる。黒褐色の粘質土(1・2層)と粘土(3層)に大別できる。上層ほど黄褐色ブロックを多く含んでいる。3層中にはほとんどブロックが含まれず、上面がほぼ水平であることから、この層は棺内の堆積土の可能性ある。底面はほぼ平坦につくられている。また、1層中には長さが30cm、厚さ10cmほどの円環が含まれていた。これはあるいは墓標あるいは重しであった可能性がある。床板との距離は25cmである。ただし、表面には何ら人為的な痕跡は残っていなかった。

棺材は床材のみ残存している。床材は残存状態が悪く、取り上げることができなかったが、調査時段階での規模は長さが83cm、幅が18cmである。幅はSZ03により削平されている可能性があるが、長さについてはほぼ完存状態であろう。厚さは現存で1~2cmである。遺存状態が悪かったため床材が何枚で構成されてい



るか判断できなかった。

床材の北東隅には、銅銭・榿・歯が検出されている。いずれも残存状態が著しく悪く、榿については取り上げることができなかった。また、これらの出土位置は埋葬時に頭位が東向きであることを示唆する。

そのほかには釘(16点)の出土がある。これらのうち3点は原位置を保って出土している。床材より上方に7・14・25cmの高さで、墓城南西隅付近において確認した。釘先端はいずれも内側を向いており、本来側板を固定するための釘であると考えられる。また、本来はこの付近に側板が存在していたと考えることができる。

榿材は上述のように遺存状態が悪く取り上げることが出来なかったため固化していない。その他の遺物としては鉄釘が16点、銅銭が2枚出土している。鉄釘(360~375)は堆積上中から出土しており、榿材を留めるものであろう。いずれも完形のものがないため全長は不明であるが、厚さをみると太身と細身の2者がある。

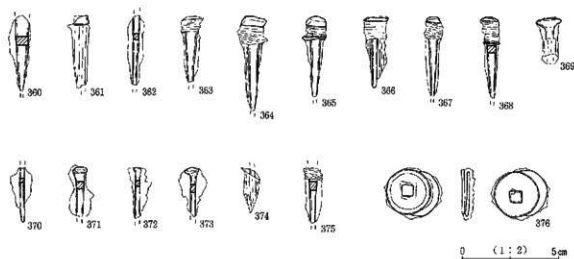
銅銭(376)は2枚が因着しており、現状では分離することが出来ない。また、錆に覆われているため、銭名も不明である。

#### SZ03墓墳跡(第77~79図)

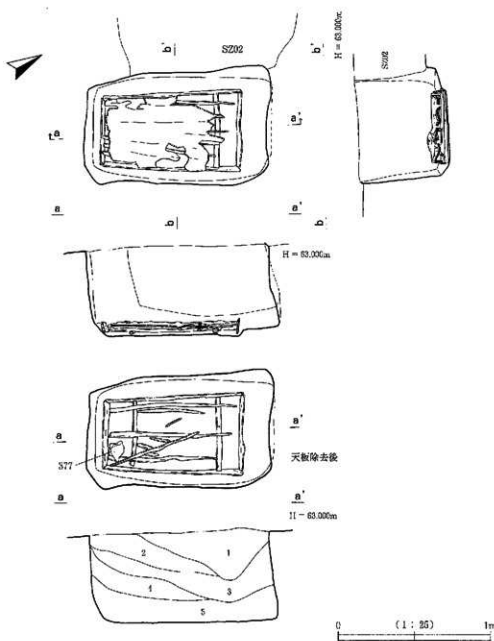
B区北西部、S88E4グリッドに位置する。北側をSZ02と重複しており、木遣構の方が新しい。検出はIV層上面であり、黒褐色上の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

掘りかたの平面形は角の取れた長方形形状を呈している。規模は長軸が120cm、短軸が75cmである。深さは確認面より60cmである。

掘りかたの堆積土は5層が確認できる。上層から褐灰色、黒褐色、暗褐色、褐色の粘質~粘土が堆積している。基本的にはいずれの層中にもV層起源と考えられる黄褐色ブロックを多量に含んでいる。掘り返した土が再堆積したものであり、人為堆積と考えられる。5層は暗灰黄色の粘土であるが、黄褐色ブロックが含まれておらず、棺の周囲のみに存在していることから、腐食した棺材や遺体の痕跡であると考えられる。



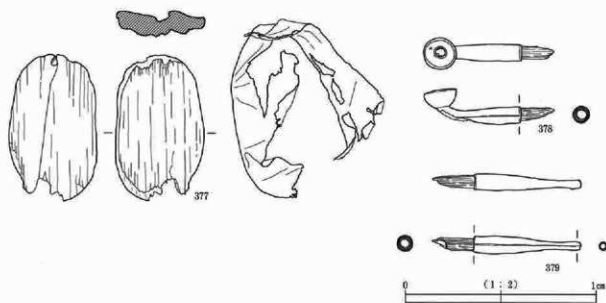
第76図 SZ02墓墳跡出土遺物



第77図 SZ03 墓坑跡

遺構名	順番	色調	記号	上性	転包	しまり	特徴
SZ03	1	褐灰色	10YR4/1	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロックを70%配合有、大きめのブロック
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを10%配合有、1より小さいブロック
	3	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	やや強	黒褐色及び黄褐色土ブロックを少量含む
	4	褐色	10YR4/6	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロックを少量含む
	5	灰黄褐色	10YR4/2	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを少量含む

棺は掘りかた底面の大部分を占める。棺材は大きく3つの部位に分かれている。棺の蓋と考えられる板材(以下、天板)、側面を構成する材(以下、側板)、底面を構成する材(以下、床材)である。天板は一枚の薄い板材でつくられている。両端が腐食して、欠損している。遺存状態が悪いため、取り上げることができなかった。側板は長軸側2枚、短軸側2枚の計4枚で構成され、床材を囲むように配置されている。残存状



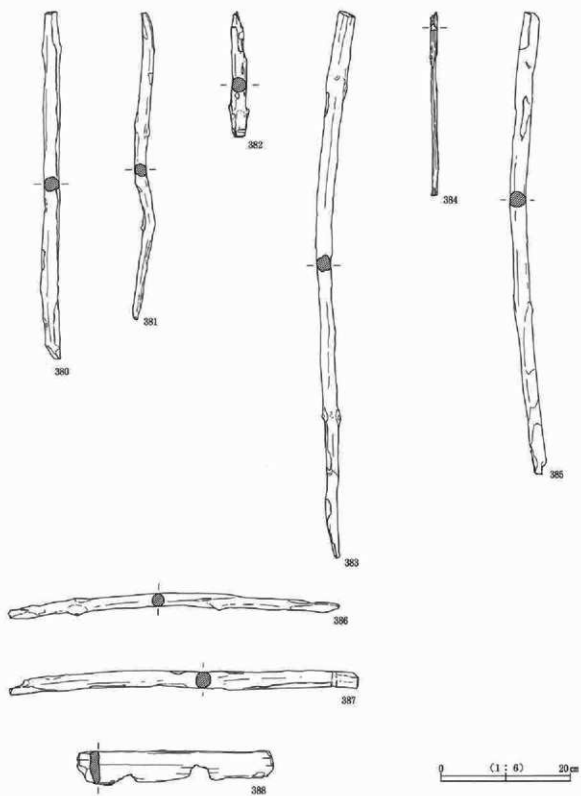
第78図 SZ03 出土遺物

態が悪く、凶化できたものは少ない(388のみ)。この4枚の接合方法は不明である。床材は直径が3 cm強の枝材2本(386・387)を小口側に置き、その上に直径が1~2 cmとやや細い枝材を長軸方向に5本以上(380~385)を並べて設置されているようである。長軸側の枝材は残存状態が悪く、実際に何本使用されているかは不明である。これらは単に置いただけのようであり、紐や釘等で接着している痕跡は認められない。わずかに小口側の材の両端に切り込みが入っているが、これは側板との接合のためのものと考えられる。したがって、これらの棺材は、固定されたものではなく、掘りかたのなかで組み立てられた可能性がある。遺体は、組み合わせた枝材の上に置かれたと考えられ、枝材の間から人骨の一部を検出している。残存状態が悪いため部位などは不明である。

遺物出土状況を見ると、木製の容器が1点、床材の間から出土している。このことから、隙間があるものの、枝材の組み合わせたものが床を構成していると判断している。ただし、腐食しやすい有機質の部位が存在していた可能性は残る。

遺物は木製容器が1点、キセルが1点出土している。377は木製容器である。長さ7.2cm、幅4.8cmの楕円形の板を2枚上下の底板とし、その間を木の皮で包み込む構造を採用している。

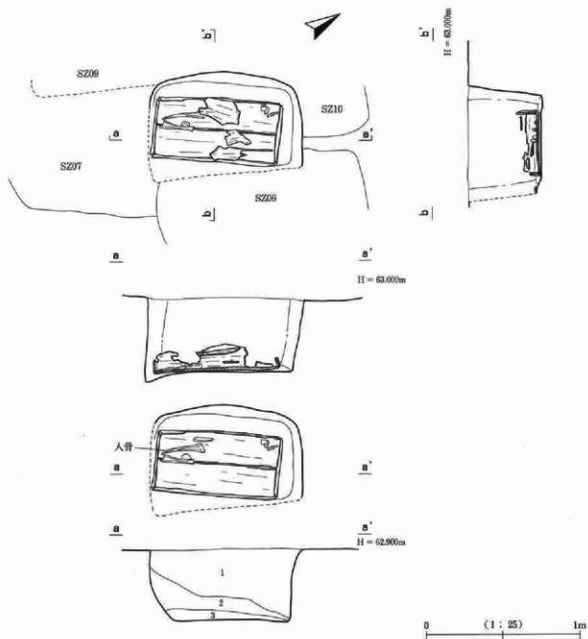
378は雁首、379は吸い口であり、いずれも青銅製であり、対になるものと考えられる。



第79图 SZ03 出土木材

### SZ04墓墳跡（第80～82図）

B区北西部、S90E 6グリッドに位置する。西にSZ07、北にSZ10、北西にSZ09、南にSZ06と重複しており、いずれの墓墳跡よりも本遺構の方が新しい。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。



第80図 SZ04 墓墳跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ04	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	強	黄褐色土ブロック90%含む
	2	黒褐色	10YR3/2	粘質土	やや弱	中	黄褐色土ブロックを多く含む
	3	褐色	10YR6/1	粘土	強	中	炭化物含む

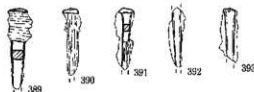
掘りかたの規模は、激しい重複のため判然としないが、おおよそ長軸が1 m、短軸が60~70 cmほどと推定される。平面形は、北と東壁をみると、隅丸の方形を早すると考えられる。深さは確認面より46 cmである。

掘りかたの堆積土は3層に大別できる。上位2層は黒褐色系の粘質土であり、V層起源と考えられる黄褐色土ブロックが多く混合する。最下位の3層は褐灰色の粘土であり、炭化物を含んでいる。この層は他の墓壇と同様に棺内の堆積土であると考えられる。上位の

1・2層は一度に堆積している状況と、墓壇掘りかたという性格から人為堆積であると考えられる。掘り返した土をそのまま埋め戻している状況が窺える。

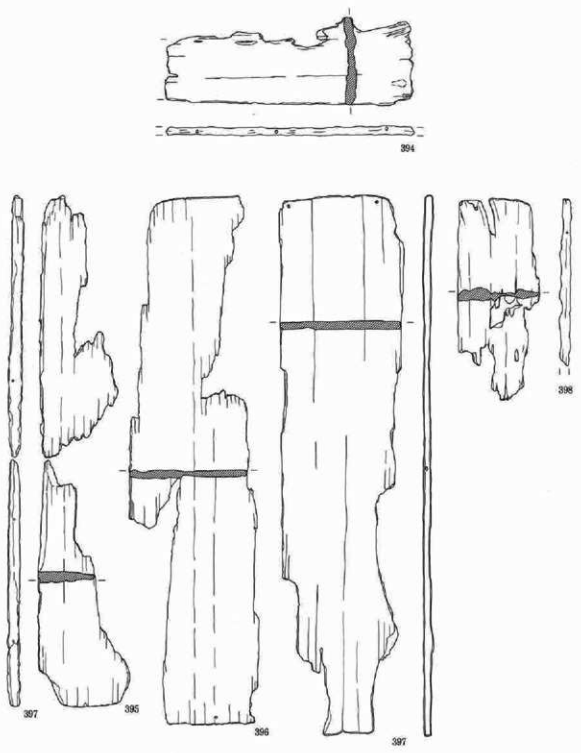
棺は掘りかたほぼ底面を占める。棺材は、天板、側板、床板が残存している。図化したのは5点のみである。天板はそのほとんどが腐食しており、中央部にわずかに残存する程度であり、取り上げを行っていない。天板の高さは、床板より10 cm上方の高さにある。側板は四方に残存するが、多くは腐食している。もっとも残存している北側板(395)をみると高さが15 cm、幅が78 cmである。小口側の側板(394)では、同様に高さが9 cm、幅が37 cmである。これらの側板の底面をみると、径が2 mm程の鉄釘の痕跡が認められることから床板の上に設置したのちに、底面から釘で留められている。確認できたものでは、長軸側の側板では4箇所、小口側の側板では3箇所の釘の痕跡がある。床板は2枚の板材で構成される(396・397)。他に比べると比較的良好に残存している。床板は幅が43 cm、長さが84 cmである。棺の規模はこれから推定すると、長さが約85 cm、幅が約40 cmである。高さは天板の土圧により下方へ落ちていると考えられ不明である。側板の残存状況から類推すると20~25 cm程度であると思われる。

遺物は、堆積土中と床板の上面で確認しているが少ない。床面上から出土したものは、木製容器の一部と考えられる木の皮であり、図化していない。389~393は鉄釘である。断面は方形であり、上端は「L」字形に折れ曲がっている。そのほか、人骨の一部が西側中央で検出している。部位等詳細は不明である。



0 (1:2) 5 cm

第81図 SZ04 出土遺物

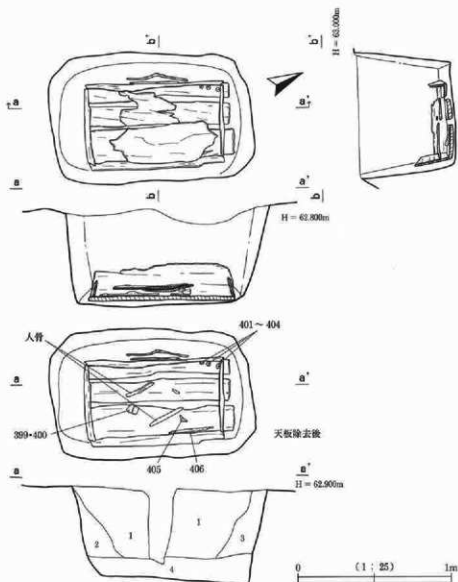


第82圖 SZ04 出土棺材

SZ05墓墳跡（第83～85図）

B区北西部、S94E4グリッドに位置する。北側をSD04と接するか若干重複している。切り合い関係からは新田は判断できなかった。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

掘りかたの規模は、長軸が130cm、短軸が85cmであり、平面形は角の丸い長方形を呈する。底面までの深さは、確認面より64cmである。棺材は底面のやや南よりに設置されており、北側と西側に若干の空間が残る。



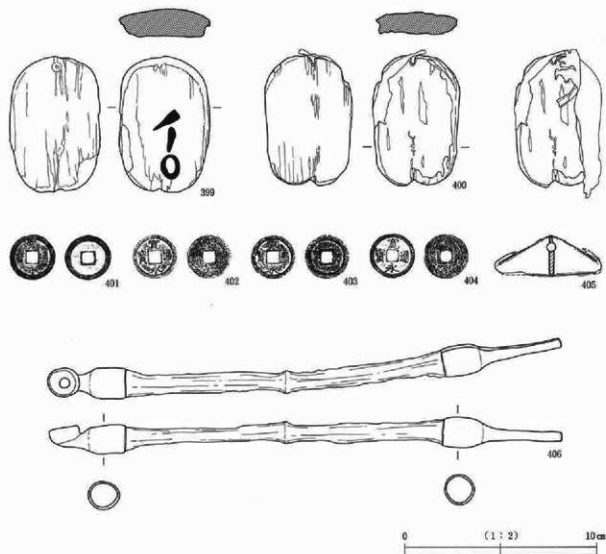
第83図 SZ05墓墳跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ05	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを30%含む
	2	褐灰色	10YR4/1	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック70%含有
	3	灰黄褐色	10YR4/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック少量含む
	4	褐灰色	10YR4/1	粘質土	強	中	酸化鉄少量含む

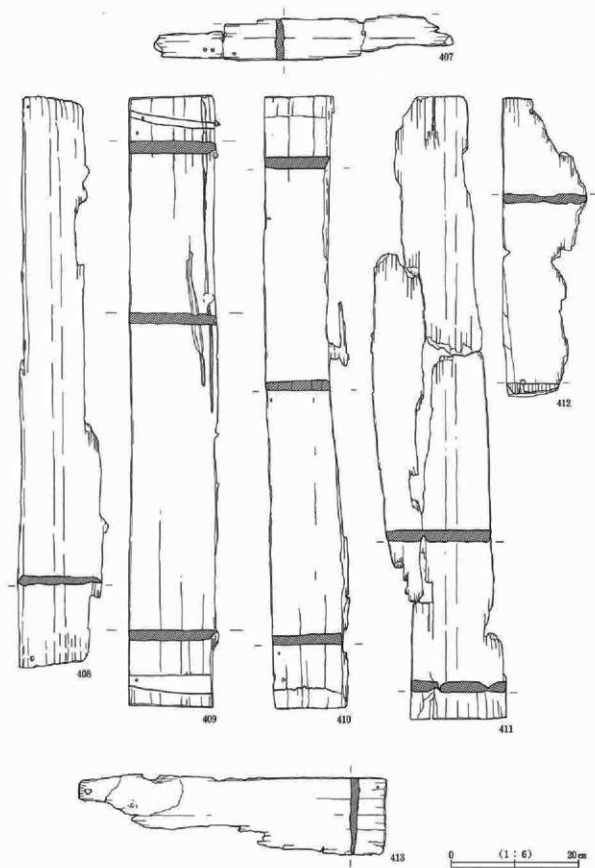


掘りかたの堆積土は4層に大別できる。黒褐色・褐灰色・灰黄褐色の粘質土が上層に、褐灰色粘土が最下層に堆積している。堆積土の大半を1層が占める。上層土はいずれも黄褐色ブロックを混合しているが、最下層にはほとんど認められない。最下層の粘土は棺材の位置などから棺材や遺体の痕跡であろう。これらの堆積土は墓域という性格とブロックの入り方から人為的に堆積したと考えられる。

棺は掘りかた底面に設置されており、残存状況は今回の調査の中でも良好であった。棺は、天板、側板、床板で構成される。天板は中央部分にのみ残存している。残存範囲は長さが70cm、幅が47cmである。天板は厚さが現存で1cm弱ほどしかなく取り上げることができなかった。また、天板は2枚の板材で構成されている。側板は小口側2枚と長軸側2枚の計4枚で構成される。いずれも床板の上に釘で固定されている。長軸側の側板（東側）は高さが22cm、長さ86cmあり、とくに高さは欠損しているが残存状態はよい。厚さは1cm弱ほどであり、天板と同様に薄くつくられている。小口側の側板（北側）は高さが残存で10cm、長さが50cm



第84図 SZ05 出土遺物



第85图 SZ06 出土棺材

である。床板は3枚に分離して残存している。3枚を合わせた大きさは長さが95cm、幅が50cmである。各板材の間は2～3cm程の空間がある。側面に鉄釘の痕跡が確認できるため、本来は3枚が組み合わされ、釘で固定されていたと考えられる。厚さは約2cmであり、天板や側板よりも厚くつくられている。また、床板の端部には小1側の側板の痕跡が残っている。棺の規模を現状から推定すると長さが95cm、幅が50cm、高さが25cm以上とすることができる。

棺材の内図化できたのは7点である。

床板上には古銭が3枚、火打ち鉄、キセル、木製容器、人骨の一部が確認されている。古銭は3枚とも寛永通宝である。405は火打金である。平面が三角形を呈し、側面が折り曲げられている。厚さは3mmである。頂点付近には径8mmの孔が穿たれている。406はキセルであり、ほぼ完形で出土している。全長が27cmである。吸い口と雁首は青銅製である。筒部は竹で作られており、乾燥のためやや収縮している。吸い口部分には合わせ目が存在する。399・400は木製容器である。両者合わせて一つのものと考えられる。長軸側7cm、短軸側4.5cmの大きさの楕円形の板材が2枚あり、両者間を皮で留めて容器としている。399の内面には「イロ」とカタカナで墨書が認められる。また400には朱漆が塗布されている。

#### SZ06墓域跡（第86～88図）

H区北西部、S90の6グッドに位置する。北側をSZ04と重複しており、西側をSZ07と重複している。SZ04よりは古く、SD07よりは新しい。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

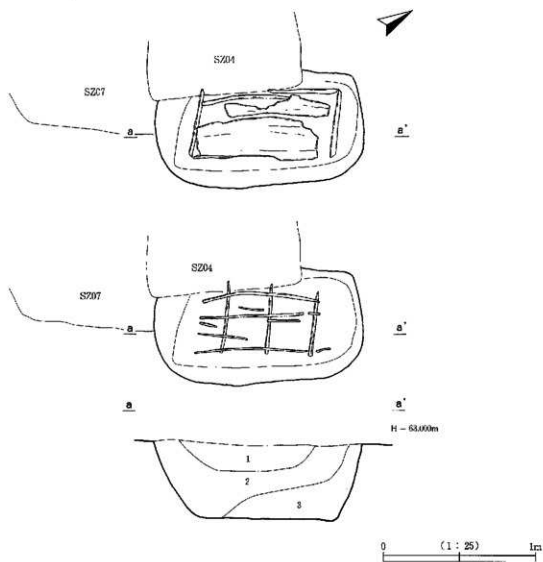
掘りかたの規模は、長軸側が132cm、短軸側が重複により一辺が破壊されているため不明であるが、残存部で計測すると73cmである。深さは確認面から48cmである。平面形は他と同様に、角の丸い長方形を呈している。

掘りかたの堆積土は3層に分層できる。黒褐色の粘質土（1・2層）と褐色粘土（3層）に大別でき、いずれも黄褐色のブロックを混合している。断面図を見ると自然堆積のようにも見えるが、墓域という性格と、ブロックの入り方から考えると人為堆積である可能性が高い。

棺は天板・側板・床材で構成される。そのうち図化したものは12点である（420～431）。

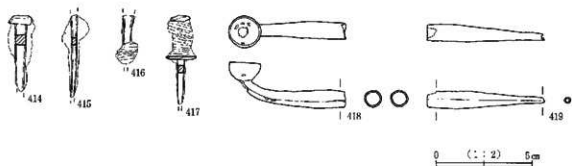
天板は残存値で80×25cmと67×14cmの板材の2枚で構成されている。この2者が本来同一のものか否かは、接合箇所が腐食しているため判断できなかった。側板は4枚で構成されているが、北側板はSZ04との重複により一部が破壊されており、残存状態は悪い。このためこの付近はやや歪んでおり、SZ04構築時の影響を受けているものと考えられる。床材は、枝材で構成されており、現状では破片も含めて12本のみが残存している。短軸（小1）方向に3本の枝材の上に長軸方向の枝材が3本設置されている。小口側の枝材は長軸側の枝材に比べて径が太いもの（2cm）が選ばれている。そして、両端に切り込みが加えられ、側板が乗るように成形されている。小口側枝材の間に6破片の枝材が残るがいずれもその方向からこの長軸方向に使用された枝材の破片であると考えられる。これらを合わせて全体の規模を推定すると、長軸が93cm、短軸が47cm、高さは不明である。

遺物は鉄釘とキセルが出土している。414～417は鉄釘である。いずれも欠損がり、完形ではない。最大厚が5mmほどである。417は中位付近に張り出し部分があり、錆で詳細は不明であるが、何らかの部品が装着されている可能性がある。これらの鉄釘は棺を留めるものであろう。418・419はキセル雁首と吸い口である。いずれも青銅製であり、合わせ目が存在する。

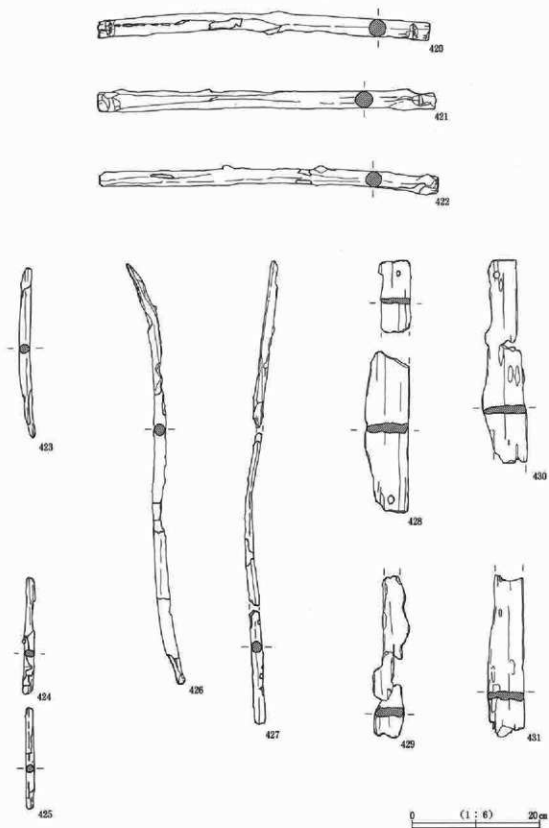


第86図 SZ06 基壇跡

遺構名	層番号	色相	記号	土性	軟性	しまり	特徴
SZ06	1	黒褐色	10V H3/1	粘質土	やや弱	弱	褐色粒やや含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや弱	中	褐色土ブロックやや多く含む
	3	褐色	10YR4/4	粘質土	やや強	やや強	褐色土ブロックやや含む



第87図 SZ06 出土遺物

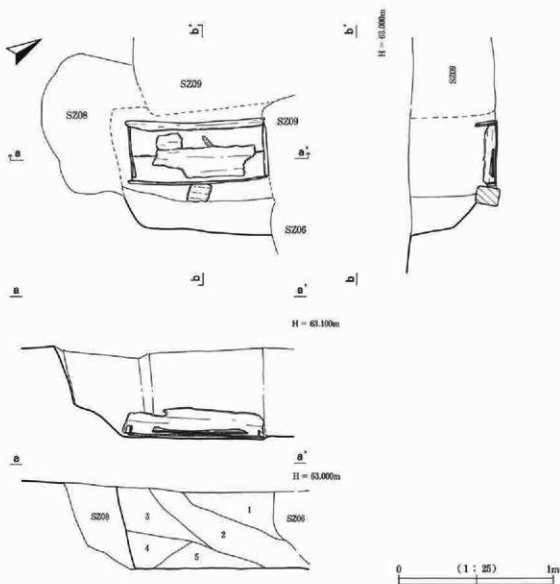


第88图 SZ06 出土棺材

SZ07墓域跡 (第89~91図)

B区北西部、S90E6グリッドに位置する。北側をSZ09、西側をSZ08、東側をSZ04と重複しており、SZ08よりは新しく、SZ09、04よりは古い。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

掘りかたは北、西、南側の3方向、とくに東側がSZ09により大きく削平されているため、規模の復元は困難である。



第89図 SZ07 墓域跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ07	1	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質土	中	やや弱	黄褐色ブロックをほとんど含まない
	2	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロック70%含む
	3	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや強	褐色ブロック10%含む
	4	にぶい黄褐色	10YR5/4	粘質土	強	やや強	黄褐色ブロック80%含む
	5	灰色	5Y4/1	粘質土	強	中	黒褐色土ブロック(炭化物とけたものか)を含む

堆積土は5層に分層される。黒褐色粘質土(3層)とにぶい黄褐色粘質土(1・2・4層)、灰色粘土層(5層)に大別される。黒褐色層とにぶい黄褐色層には黄褐色や褐色のブロックが混合されている。とくに後者には多量に含まれている。黄褐色ブロックは直径約10~20cm前後と大きく、あまり攪拌された状態ではないこと、墓塚という性格から、これらの土層は人為により堆積していると考えている。5層の灰色粘土は棺の周囲に認められ、黄褐色ブロックが含まれていない。4層と5層の層境は明瞭であり現状では、土層のため、4層が押し出された様子であるが、棺の内と外の堆積さの違いをよく表していると考えられる。このような土層の入り方は他の墓塚と同様であり、遺体や棺材の痕跡もしくはその影響を受けた層であると推定される。

棺は掘りかた底面上に設置され、天板、側板、床材で構成される。棺材のうち図化したものは7点である(432~438)。

天板は、遺存状態が悪いが、長さが65cm、幅が30cm、厚さが約1cm残存している。これを見ると2枚の板材で構成されているのがわかる。本来は、側板の上に設置されていたものと考えている。いわゆる「かえり」のついた蓋状ではなく平板な板をもって天板としていたのであろう。厚さも不明な部分が多いが、底板より薄い可能性がある。薄く状態が悪いため取り上げることができなかった。側板は4枚で構成される(432・433・435・437・439)。長軸側の側板のうち北側のものは残存で長さが90cm、高さが18cmであり、厚さが1cm程度である。小口側の板材は残存状態にもよるが、長軸側の側板よりも高さが低い材を使用している可能性がある。長さが34cm、高さが5cm、厚さ1cm弱である。これら4枚の板材は床材の上に設置されている。床材は2枚の板材で構成される(434・436)。大きさは2枚合わせると、長さが90cm、幅が39cmであり、厚さが、天板・側板よりも厚い。これら側板、床板の底には鉄釘の痕跡が残ることから、側板と床板は釘で固定されていると考えられる。残存範囲では長軸側の側板には6カ所、小口側の側板には4カ所の釘が確認できる。

骨の一部は床材の上に残存していたが、細片であるため詳細は不明であるが、その状況から人骨であると判断できる。

掘りかたと兩個板の間には槌(439)がおかれていた。これは、おそらく側板を留めるために設置されていると考えられる。全長は31.5cm、最大幅が16cmであり、柄の径が4cm、槌の径が16cmである。柄と槌部は一本の木を削出して製作されている。側面には凹みがみられることから、よく使用されていたものと考えられる。



第90図 SZ07 出土遺物



第91圖 SZ07 出土棺材

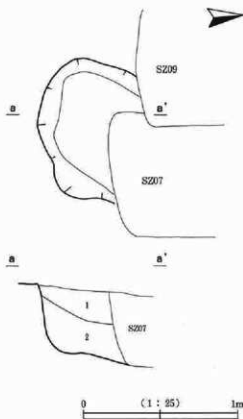


### SZ08墓墳跡 (第92・93図)

B区北西部、S90E4グリッドに位置する。東側をSZ04・09と重複しており、切り合い関係や断面図からみるとSZ07よりは新しくSZ09よりは古い。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたのみで構成される。

掘りかたの規模は東側が重複のため破壊されているため不明であるが、現存では、南北に90cm、東西に45cm残存する。深さは確認面より43cmである。堆積土は2層が確認できる。いずれも黒褐色粘質土であり、2層にのみ黄褐色ブロックが多く含まれる。大きなブロックが混合する2層は人為堆積の可能性があると思われるが、1層は判断できない。棺は確認されなかったが、鉄釘が出土していることから本来は存在していたと考えられる。

440～451は鉄釘である。いずれも断面方形であり、径4mmのものがほとんどである。442～446は頭部の木質と先端の木質方向が異なっている。これらは異なる材を留めていた痕跡であろう。また、この部分に断面方形の筒が装着されている痕跡が認められる。錆で明瞭ではないが、何らかの部品が装着されていると考えられる。



第92図 SZ08墓墳跡

### SZ09墓墳跡 (第94～96図)

B区北西部、S90E4グリッドに位置する。南側をSZ07、東側の一部をSZ03と重複している。切り合い関係から見ると、SZ08よりも新しく、SZ03より古い。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

掘りかたは南側を重複により破壊されているが、残存する三方の形状から推定するとはぼ角の丸い長方形を呈すると考えられる。規模は、長さが114cm、幅が推定で85cm、確認面からの深さが45cm



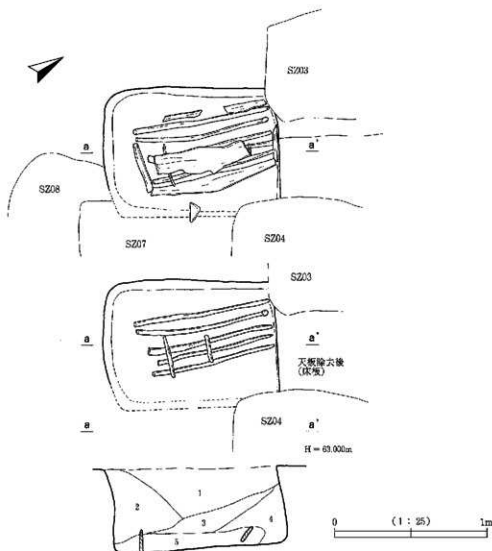
第93図 SZ08出土遺物

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ08	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	褐色土ブロック (IV層総線) を含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多く含む

である。

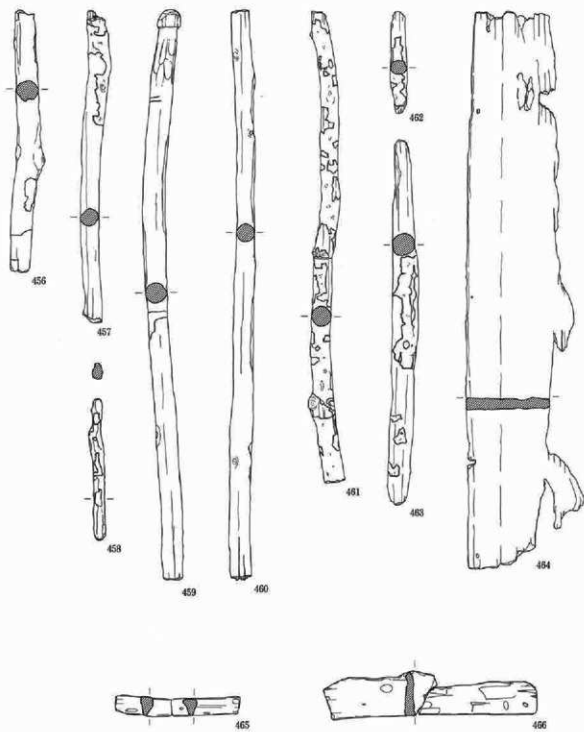
堆積は5層が確認できる。黒色～黒褐色粘質土（1・3・4層）と暗褐色粘質土（2層）、灰色粘土層（5層）に大別できる。前二者のうち3層以外には黄褐色のブロックが混合している。ほとんどに大きめのブロックが含まれることから人為に埋積したものと考えている。5層は棺の周囲及び内部にも広がることから、棺材や遺体の腐食が影響している層と捉えることができよう。

棺は掘りかたの底面に設置されている。天板・側板・床材から構成されているが、いずれも残存状態は悪い。棺材のうち腐化したものは11点である。



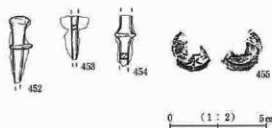
第94図 SZ09 墓坑跡

遺構名	層番号	色質	記号	土質	粘性	しまり	特徴
SZ09	1	黒褐色	10YR5/2	粘質土	やや弱	やや弱	褐色土ブロック20%含む
	2	暗褐色	10YR5/3	粘質土	やや強	中	褐色土ブロック40%含む
	3	黒色	10YR2/1	粘質土	やや強	中	褐色土ブロックほとんど含まない
	4	黒褐色	10YR5/1	粘質土	やや強	強	褐色土ブロック80%含む
	5	灰色	7.5Y4/1	粘土	強	中	木質片少量含む。棺おけの埋土。



第96图 SZ09 出土棺材

天板の残存範囲は62×20cmであり、厚さ1cm未満の薄い板材である。現状では1枚で構成されているが、半分以上を欠損しているため本来の構成は不明である。側板は4枚で構成されている。比較的残存状態のよい南側板をみると、長さが85cm、高さが15cm、厚さが1cm程度の薄い板材である。小口側の2枚は残存状態にもよるが、長軸側の側板よりも高さが低い板材を使用しているようである。



第96図 SZ09 出土遺物

床材は、現状では8本の枝材から構成される(456~463)。長さが90cm程度の長い枝材が5本、約10cm間隔で並べられており、その上部に現存で28cmの短めの枝材を設置している。間隔は30cm前後である。5本の枝材のうち1本の先端は陽物状に加工されている。いずれの材にも釘で固定されている痕跡は認められない。

これらの材を合わせた規模をみると、幅が40cm、長さが90cmの規模(高さは不明)が想定できる。

遺物は4点を図示した。452~454は鉄釘であり、いずれも欠損部分が多い。455は寛永通宝であり、1/3ほど欠損している。(西澤)

#### SZ10墓痕跡(第97・98図)

B区北西部、S88E6グリッドに位置する。南側をSZ04と重複しており、本遺構の方が古い。検出はIV層上面であり、黒褐色土の広がりをもち確認している。本遺構は掘りかたと棺で構成される。

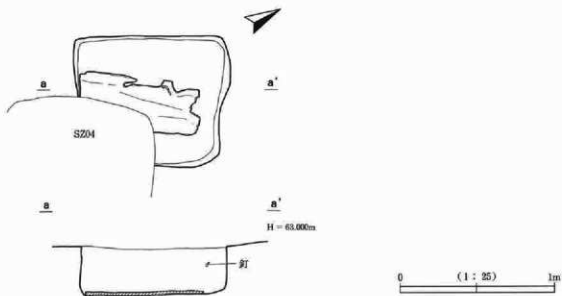
掘りかたの規模は東西が100cm、南北が85cmであり、東壁がやや歪ながらも長方形を呈する。深さは確認面から30cmである。

堆積土は細分できず1層のみである。黒褐色の粘質土であり、黄褐色ブロックを多く含んでいる。墓墳であることや粒径の大きなブロックが多く含まれていることから人為堆積であると考えている。

棺は、床材のみ掘りかた底面に設置されている。遺存状態は悪いが、現状で80cm、幅が35cm残存する。厚さは1.5~2cmである。掘りかたの規模と棺材の残存状態から、この棺も他と同様の規模を有していると予想される。遺存状態が不良のため、この床材を取り上げることができなかった。

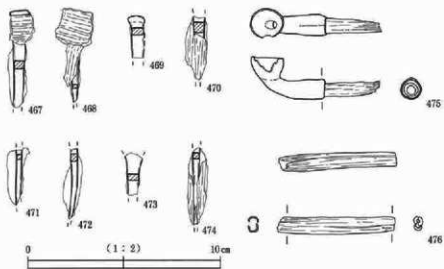
遺物は、堆積土中から鉄釘が8点、床板の上にキセルが1点出土している。

467~474は鉄釘である。468は頭部の木質の方向と下部の木質の方向が異なっている。内部は観察できないが筒形金具が存在しているようである。475はキセルの扉首であり、476は筒部の木質の残存である。キセルは青銅製であり、長さが4cmであり、合わせ目が確認できる。(西澤)



第97図 SZ10 基壇跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SZ10	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや弱	やや強	褐色土ブロック (こまかい) 40%含む

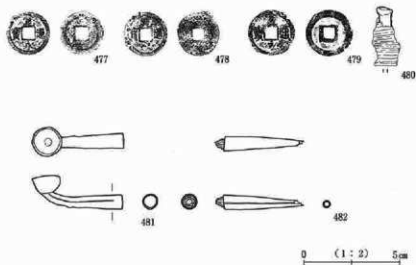


第98図 SZ10 出土遺物

### 不明遺物

477～482の遺物は、本来SZ01～SZ10のいずれかに所属すると思われるが、調査時の混乱と、多数の重複関係により、いずれに所属するものか判断がつかなかった遺物である。

477～479は寛永通宝である。479はその字体から古寛永と考えられる。480は鉄釘であり、先端を欠損している。481～482はキセルの雁首と吸い口である。出土地が不明のため、同一個体か否かは不明である。青銅製であり、合わせ目が存在する。482の吸い口には木質が一部残存している。(西澤)



第99図 SZ 不明遺物

### 10. 遺構外の遺物

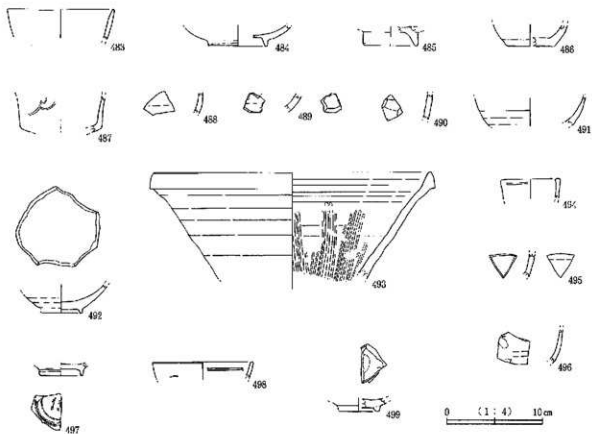
A・B各区の表土中や遺構検出面上からはいくつかの遺物片が採取されている。とくに近世陶磁器は約4,000g出土しており、そのうち約1割の460gを図示している(483～499)。

そのほとんどは、II層中に含まれていたもので、この層が、近世遺物包含層であると判断した理由である。そこII層はI層より大きく改変を受けていたため、I層にも、近世陶磁器が含まれていた。遺構内より出土したものは極めて少ない。これは、近世の生活をも含めて削平されているためであると考えられる。そのため、陶磁器類のほとんどが遺構外出土となったのであろう。

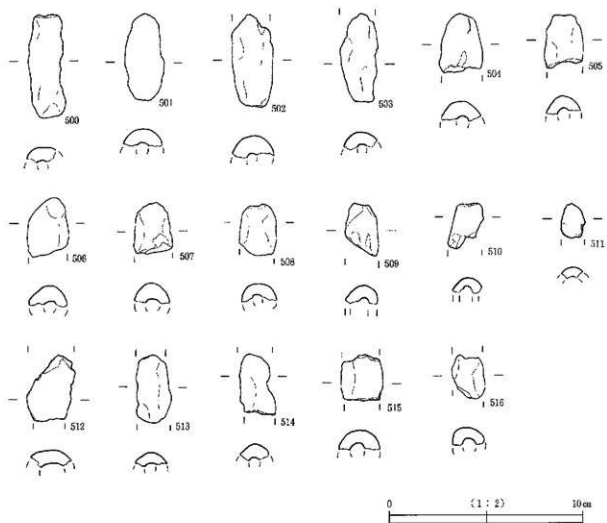
出土した近世陶磁器は18～19世紀の所産に属するものが多い。産地は大堀相馬産や肥前産のものが主体を占めるが、不明のものや在地産と考えられるものも一定数ある。

なお、在地産としたものは主要な産地と判断できないものを一括しているものであり、具体的に産地を示すものではない。

陶磁器以外には、A区SI09付近の検出面より土層が17点出土している(500～516)。おそらくSI09に属するものと考えられるが、検出面上に浮いていたため遺構外として登録したものである。そのほとんどが破片であり、細かく破砕されている。あるいは同一個体も含まれているかもしれない。



第100圖 遺構外出土遺物(1)



第101圖 遠構外出土遺物 (2)





壩<sup>せき</sup> 向<sup>むかい</sup> Ⅱ<sup>に</sup> 遺 跡



## 第II章 堰向II遺跡

### 第1節 調査の概要

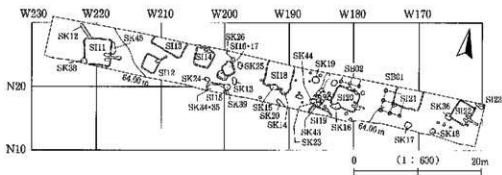
堰向II遺跡の調査は調査区が大きく分けて4地点に分散している。調査時においては内側から順にA～D区と名付けており、また、A～C区については本調査、D区については確認調査、一部本調査を行っている。A区は文道第51号道路、B区は文道第49号道路、187・183田区切り土、C区は排特2号水路、D区は現市道2053035の跡地であり、191・192田区の一部にそれぞれの予定地であるため、各調査区は細長い直線形を基本としている。これらの調査区は、遺跡推定範囲である北東から南西に細長く伸びる自然堤防上を縦断する様に位置している。調査は前章までに触れたように、工事の都合上B区より調査を行っている。したがって、遺構番号は、基本的にB区より検出順に並んでいる。

各調査区の内容をみると、A区からは平安時代の竪穴住居跡を中心に多数の遺構が確認された。面積が560㎡と最小であったが、遺構が濃密に分布している。鍛冶炉が検出された竪穴住居跡と柱式掘立柱建物跡が2棟確認されたものもこの区である。B区は北側を中心に遺構を確認している。この調査区は遺跡がのる自然堤防上の北端から南端を縦断している。B区からは平安時代の竪穴住居跡が中心であるが、近世の柱穴が多数認められた。いくつも重複しており、建物跡に復元するのは困難であった。また、永楽銭や龍泉窯産と考えられる青磁片が出土しており、中世の遺構も存在していた可能性がある。さらに、北端付近には10世紀後半に属する廃棄土坑が存在し、該期の一括資料として貴重な情報を得られている。

C区では平安時代、江戸時代の遺構が確認されている。とくに平安時代の遺構では一辺が7m以上にも及ぶ住居跡が検出され、拡張されていた。古期の住居跡からは緑釉陶器や陶甎などが出土するなど特筆すべき遺物である。D区は一部確認調査と併行して本調査を行った調査区である。竪穴住居跡を中心に検出をおこない、うち2軒の住居跡等を調査した。削平が著しく及んでいたので得られる情報が他に比較して少なかった。

検出遺構としては、竪穴住居跡46軒（うち調査は38軒）、掘立柱建物跡は3棟、土坑57基（同45基）、溝跡11（同9条）条、Pit 521基（同503基）を調査区の全域から確認している。遺跡推定範囲の内、今回の調査では約6%のみしかおこなっていないため、約16倍の遺構数の存在が予想される。

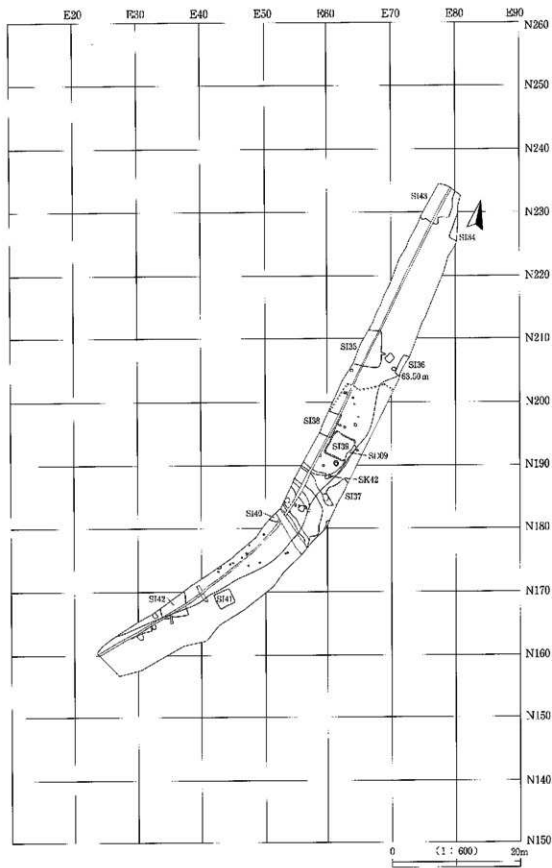
調査の結果、平安時代を主体とする大規模な集落跡であること、近世の民家を中心とする集落跡であることが判明した。



第102図 堰向II遺跡A区遺構配置図







第105图 D区遺構配置図

## 第2節 基本層序

塚向Ⅱ遺跡で確認された層序としては以下のものがある。基本的に西川日遺跡と同一の層序であると捉えている。また、以下の層序は自然堤防上の基本層序であり、それ以外の低地部分の層序とは対応していない。

### I層 黒褐色シルト 現耕作土（現代）

調査区内はいずれの地点においても現在の水田であったため本層はこの水田耕作土層である。また、金属片やビニールが出土する攪乱土坑などはすべてこの層から掘り込まれていると考えている。

### II層 暗褐色シルト 旧耕作層あるいは近世遺物包含層（中世～近世）

近世の遺物はI層にも認められるが、多くがこの層から出土することから近世に対応する層と考えている。したがって、柱穴などの掘り込みはこの面もしくはさらに直上に存在していた層から行われたと考えられる。しかし、この層はI層による削平を受けて確認できない。また、基本的にIII層～IV層で検出作業を行っているため、近世に属する浅い遺構などは破壊した可能性がある。中世に属する遺物がわずかながら出土することから、存在は予想されるが確認はされなかった。層序的に中世はIII層以上、本層か本層によって削平された層に存在すると予想される。

### III層 黒褐色シルト 古代生活面（古代）

層中に古代の生活面が相当すると考えているが、実際は上位が削平されている部分が多い。西川日遺跡のように本層が良好に残存している地点では、遺構の掘り込みがこの層中から行われていたことが確認できている。検出は本来本層上面で行えばよいが、遺構の判別が困難であり、判別できるまで徐々に掘り下げて行った。

### IV層 暗褐色粘質土 古代検出面および縄文時代検出面

多くの地点では本層が遺構検出面となっている。本来はIII層が生活面であるが、I・II層による削平のため表土直下にIV層が存在する地点が多かったためである。塚向Ⅱ遺跡では本層自体も削平されている場合が多い。また、数は少ないものの縄文時代の遺構も本層で確認できる。

### V層 ぬい黄褐色粘質土 地山

自然堤防上の基盤となる層である。削平が深く及んでいた地点では本層が遺構検出面となる。その場合は縄文・古代・近世も同一平面上に遺構が確認されることになる。

### VI層 暗オリーブ粘土 地山

深掘り部分にのみ存在する。V層とともに自然堤防の基盤となる層である。

塚向Ⅱ遺跡では、後世による地形改変の影響が大きく、現耕作土であるI層直下がV層遺構確認面となる。したがって検出は基本的にV層上面で行っている。とくにD区においてはV層自体にも削平が及び、遺構の残存度が著しく悪かった。したがって、いずれの調査区においても生活面の推定は不可能な状況であった。西川日遺跡と同一層序であることが確認できるためあるいはIII層中にその面が存在した可能性が高い。



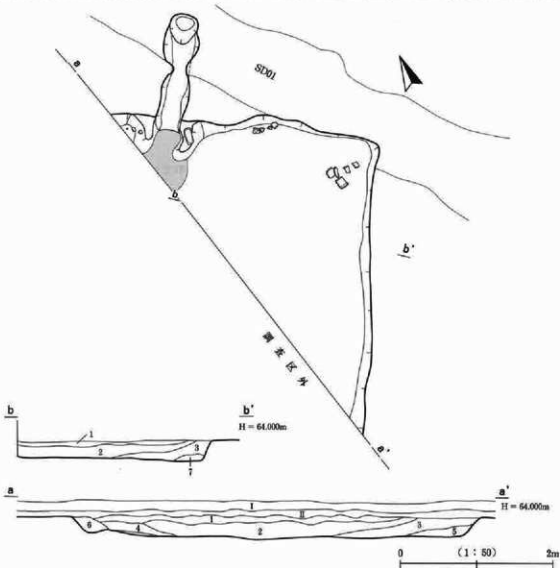
### 第3節 調査内容

#### SI01 竪穴住居跡 (第106~111図)

B区の南端 W110N90 グリッドに位置する。調査区西側に偏って位置するため調査区内には約1/3しか含まれておらず、一部のみの調査となる。したがって本住居跡の完掘は行っていない。また、住居後北東隅付近においてSD01と重複しており、切り合い関係を見ると本住居跡の方が古いと判断できる。

遺構の確認は、V層上面において、黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形・規模ともに完掘していないため不明であるが、後者に関しては少なくとも一辺が3.80m以上あることが確認できる。住居の方位は中軸線を中心に考えると、N-23° - Eとやや東に触れている。

住居堆積土は7層が確認できる。基本的に黒褐色系の粘質土や砂質土で堆積しているが、一部暗褐色の砂質土が混入している。初期堆積土と考えられる3・4層にはV層起源と考えられる黄褐色ブロックが多く含

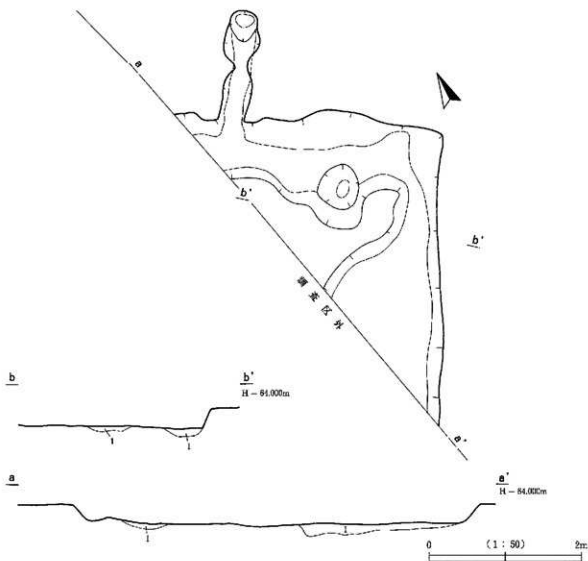


第106図 SI01 竪穴住居跡

まれている。いわゆる三角堆積やレンズ状堆積が確認できることから、木住居跡は自然堆積したと考えられる。

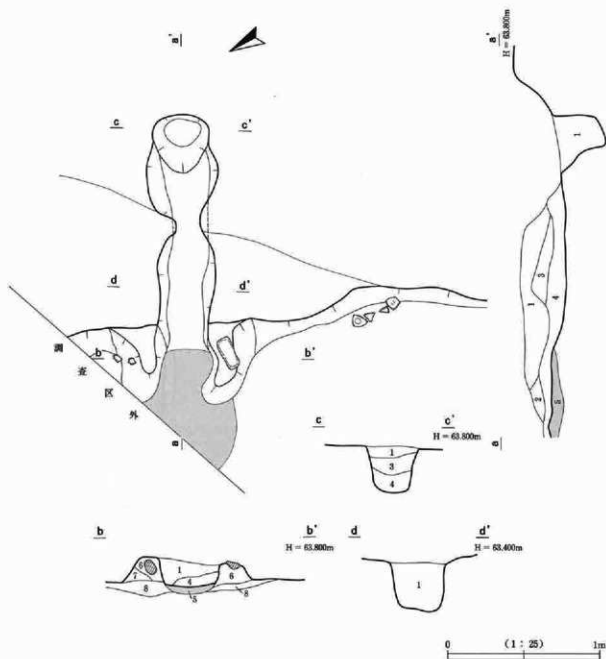
調査を行った範囲内では、床面はほぼ平坦に構築されており、貼り床が施されている。住居壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がっている。掘り方は住居壁際を中心に掘り込みが行われており、中央部の掘り込みは少ない。したがって、貼り床と考えられる黒褐色粘質土層は、壁際を中心として周囲に厚く堆積している。

カマドは、住居北壁のほぼ中央と考えられる位置に構築されている。辺に対してほぼ直交している。上部



第107図 SI01 掘りかた

遺構名	西番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI01	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少、炭化物少
	2	黒褐	10yr2/3	砂質土	やや弱	小	黄褐色砂質土ブロック中、黒褐色粘質土ブロック少、焼土粒少
	3	黒褐	10yr2/3	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色砂質土ブロック多、炭化物少
	4	暗褐	10yr3/3	砂質土	山	やや強	黄褐色粘質土ブロック多
	5	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	中	黄褐色粘質土ブロック少、カマド崩落のブロックか?
	6	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少
	7	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック多
掘りかた	1	褐灰	10yr4/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐ブロックを大量に含む



第108図 SI01 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI01カマド	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少、焼土ブロック少
	2	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	弱	焼土粒・炭化物共に少一住居埋土(5か6層)
	3	黄褐	10yr5/6	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色粘質土ブロック少、焼土粒少
	4	黒褐	10yr2/3	砂質土	やや弱	中	焼土ブロック少、炭化物中一使用層か
	5	橙色	2.5yr6/8	砂質土	中	やや強	炭化物少量まじる 燃焼即焼土
	6	暗褐色	10yr3/4	砂質土	中	中	黄褐色土ブロックを多く含む
	7	黒褐色	10yr2/2	砂質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを少量含む
	8	褐灰	10yr4/1	粘質土	中	中	黄褐ブロック少、炭化物少、焼土粒少

は削平されているため残存しておらず下部のみの検出であるが、両袖、燃焼部、煙道、煙出しピットを確認している。

両袖間の幅は最大で81cm、長さは、左袖が43cm、右袖が48cmである。袖は暗褐色と黒褐色土の2層で構築されており、床面より15cmの高さが残存している。袖内部には、直径10cm程度の円礫が含まれており、やや小さいながら補強用に埋め込まれていると考えられる。袖間の堆積土は3層に分層できる。上層には黒褐色と暗褐色系の層が堆積し、下層の4層には炭化物や焼土ブロックが含まれる。この層は煙道までつづいており、あるいは使用時の堆積層かもしれない。最下層は、焼土層であり、5cmほど床面よりも下がっている。燃焼部であると考えられる。燃焼部の平面形は現状で65×55cmの楕円形を呈しており、調査区外へ続く。この燃焼部は貼り床を掘り込んでつくられていることから、貼り床を張った後にカマドが構築されたことが分かる。

煙道は住居北壁より北方方向へ1.40m延び、先端には径40cmの煙出しピットが付設されている。深さはいずれも確認面から約30cmであるが、後者についてはSI01と重複のため切られていることから、本来はさらに深いものと考えられる。

煙道及び煙出しピットの堆積土は4層が確認できる。3層においてV層起源と考えられる黄褐色土のブロックが多く含まれていることから、この層を天井部の崩落と捉えることができ、したがって本来はこの煙道はトンネル状に削りぬかれていたことが分かる。煙道断面を見ると、ゆるやかに煙出しピットに向けて傾斜している。

遺物の出土状況は、堆積土からの出土が中心であるが床面付近からはカマド周辺にやや多い傾向がある。出土遺物の総重量は1,954gであり、うち4点・1,227gが図示可能であった。

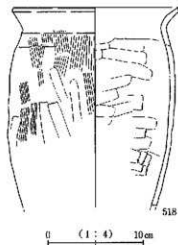
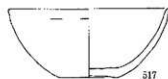
517は内面に黒色処理が施されない杯である。緩やかに内湾する体部をもつ。底部はやや上げ底気味である。調整は内外面ともロクロ調整と思われるがマメツが激しい。518は上師器甕であり、底部を欠損している。口縁部の形状は頸部より「く」字状に外反し、縮部をわずかに肥厚させている。調整はロクロを使用せず、口縁部にはヨコナデ、体部には縦位のハケメないしヘラナデが、内面には横位のヘラナデが施される。

519は鉄製刀子の茎から刀身にかけての破片である。茎の一部に木質が遺存する。520は砥石である。図がした面を主に使用面としている。

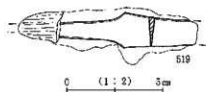
遺物の出土が少なく時期を決定しがたいが、いずれにしろ平安時代（9世紀後半～10世紀前半）に位置づけられる。（西澤）

### SI02整穴住居跡（第112図）

B区中央部、N130W100グリッドに位置する。この区域は旧地表に存在した1区画の田面が1段低くなっていた部分であり、そのため、検出面も周囲より1段下がった状態である。したがって、検出はV層面であ



第109図 SI01 出土遺物（1）



第110図 SI01 出土遺物（2）

るが、周囲のレベルより最大で18cm下がっている。周辺には近世と考えられる多数の柱穴群が存在している。

本建物跡の大半が調査区外に位置していると予想されるため、完照しておらず詳細は不明である。現状の規模は南壁70cm、西壁1.10mであり、南西隅角部分のみ検出となっている。深さは削平された検出面より約10cmである。床面はほぼ平坦であり、壁は傾斜して立ち上がっている。堆積土は黒褐色の粘質土であり、炭化物、黄褐色ブロックが含まれている。

調査を行った範囲は狭小であるが、検出面が周囲と同様の標高であれば、床面までの深さが検出面より30cm程度となり、周辺の竪穴住居跡と同様になること、床面の標高が周辺に位置するSI03 竪穴住居跡などと変わらないこと、その形状が方形を基調とする予想されることなどから、竪穴住居跡と判断している。

遺物の出土は確認できなかったが、周囲の遺構と同様の堆積土を示すことから平安時代に属すると考えられる。



第119回  
SI01 出土遺物 (3)

#### SI03 竪穴住居跡 (第113~119回)

B区N150W110グリッドに位置する。住居跡南西隅角部分が調査区外へと続くため完照していない。ピット391、392と住居跡南東隅、南壁の一部において重複関係にあり、本住居跡の方が古い。北東4mにSI04が、北西4mにSI05・06が位置する。本住居跡には、カマド、土坑が付属する。また、後述のように旧期の住居跡(SI03B)が下層に存在する。

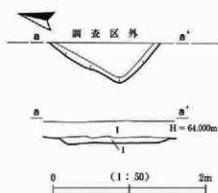
検出はV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。検出面の直上が1層であることから削平を受けていると考えられる。

規模については一部調査区外へつづくが、規模は北壁が4.30m、東壁が約4.90mであり、西壁と南壁は現状ではそれぞれ3.10m、4.10mである。平面形は東壁側がやや長い台形状を呈している。この規模は今回調査の中においては比較的大きい部類に属する。住居軸方位は $N-7^{\circ}-E$ に向いている。

堆積土は8層が確認できる。暗褐色～黒褐色系の堆積土であり、断面図をみると自然に堆積している状況が窺える。

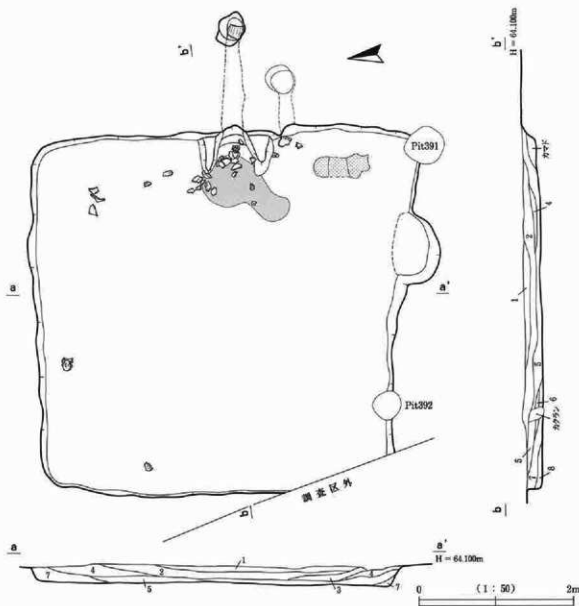
床面はほぼ平坦であり、住居跡中央部を中心に貼り床がほぼ全域で施されている。壁はほぼ垂直に立ち上がるように構築されている。貼り床をうすく除去すると黒褐色土の広がりが確認されたことから、下層に旧期の住居跡が存在することが判明した。この住居跡は南壁の一部を共有することから、拡張が行われたと判断している(後述)。

カマドは、住居跡東壁側のほぼ中央に2基が位置する。うち1基については旧期(SI03B 竪穴住居跡)のカマドと考えて



第112回 SI02 竪穴住居跡

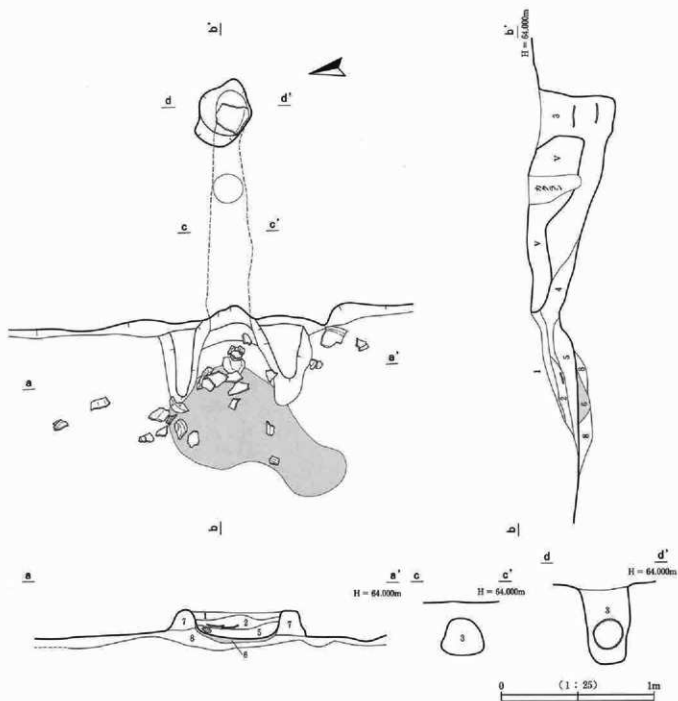
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI02	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少、炭化物少、焼土粒少



第113図 SI03 竪穴住居跡

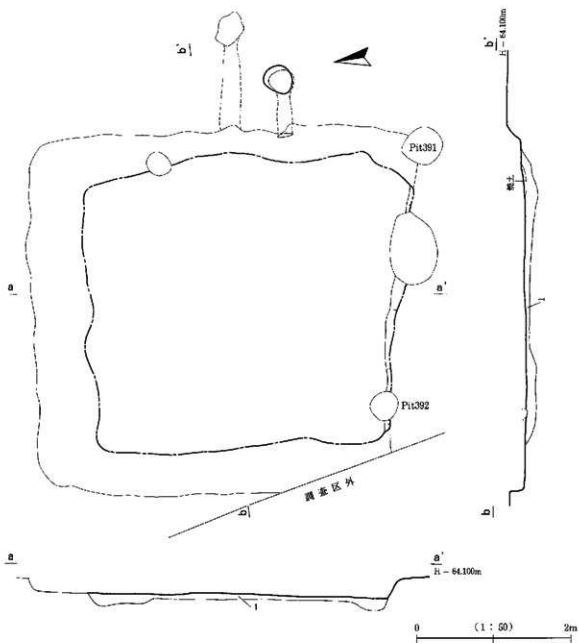
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI03	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	中	炭化物中、焼土粒少
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	炭化物中、焼土粒少、黄褐色粘土ブロック中
	3	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	やや細	焼土粒少、黄褐色粘土ブロック少
	4	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘土ブロック少
	5	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	やや弱	炭化物少、焼土粒少、黄褐色粘土ブロック多
	6	黒	10yr2/1	粘質土	中	強	焼土ブロック多
	7	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	やや弱	焼土粒少、黄褐色粘土ブロック少

いるため後述する。上部は崩落あるいは削平のため残存しておらず下部のみの検出である。両袖間の最大幅は95cm、長さは左袖が48cm、右袖が50cmである。袖は黄褐色土の単層で構成されており、残存高は床面から最大で16cmである。袖間の堆積土は3層が確認できる。このうち2層はV層起源の褐色～黄褐色土であることから、天井部の崩落層と捉えることができる。したがって、本来のカマド内の堆積土はこれより下層であ



第114図 SI03 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI03カマド	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐砂質ブロック少、焼土ブロック少、炭化物少、(埋土)
	2	褐	10yr4/4	砂質土	やや弱	中	焼土ブロック少(天井崩落)
	3	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐砂質ブロック少、灰少、焼土ブロック、炭化物含む(煙道埋土)
	4	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	焼土ブロック中、黒褐粘質土少(煙道からの流方)
	5	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	やや弱	焼土ブロック多、炭化物中、(使用時堆積+天井崩落?の焼土)
	6	明赤褐	2.5yr5/8	シルト	中	やや強	焼土そのもの、4口の焼土固くやましまっている
	7	細灰	10yr4/1	粘質土	やや強	やや強	炭化物少量まじる



第115図 SI03B 竪穴住居跡

遺構名	番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI03B	1	黒褐色	10yr3/1	粘質土	中	やや強	炭化物、褐色ブロック多く含む (灰床 or 古期住居か)

ると判断できる。この5層は黒褐色土であり、炭化物や焼土ブロックを多く含んでいる。直下には焼土層が存在し、これが燃焼部と考えられる。厚さは4～5cmほどであるが、堅く締まっている。燃焼部の範囲は両袖内部から住居跡中央部に向けて、70×120cmの範囲で広がっている。

煙道は住居東壁より北へ1.55m延び、先端に40×35cmの楕円形状の煙出しピットが付設される。V層をトンネル状に削りぬいて構築されている。先端の煙出しピットにむけて、カマドと壁の境を頂部として、やや強く傾斜している。煙道の深さは壁際で確認面から20cm、先端（煙出しピット）で48cmである。



煙道（煙出しピットを含む）内の堆積土は2層が確認でき、黒褐色系の堆積土である。煙道の周囲は被熱により赤変している。煙道の断面形は楕円形を呈している。煙出しピット中位から下位にかけて土師器甕が底部を欠損した状態で出土している。煙出しピット上部に付設されていたものかも知れない。

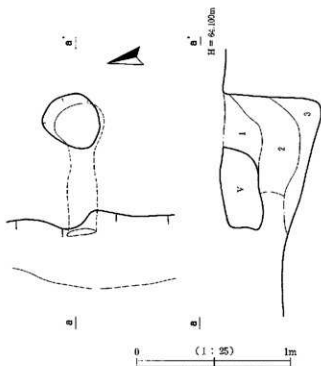
カマドの横断面をみると、貼り床の上から袖が構築されていること、燃焼部が貼り床を掘り込んで作られていることなどから、床面構築後にカマドが設置されていることが判断できる。そのほかの付属施設として考えられるものに、南壁に認められる土坑がある。長軸に1m、壁より外側に約40cm広がっている。あるいは、重複していると考えられる。

遺物は総重量13,701gの上器を中心に出土しており、そのうち36点・4,460gを同化した。出上は堆積土中と床面が中心であり、後者の場合、カマド周辺に集中していた。

521～527・531～532は土師器杯である。体部の形状をみると、ゆるやかに内湾するもの（521・522・525～527）、体部最下位に強くナデが施されるためやや突き出た形態を呈するもの（523）の2者がある。524・531は底部のみの破片のため不明である。これらのうち527は身が深く、やや形態を異にする。口径をみると、526以外は14～15cm前後で占められる。526は口径が13cmとやや小さめである。調整は全てが外面にはロクロナデが、内面にはミガキが施されている。内面のミガキはマメツが多いものの、細かく比較的丁寧に施されている。532は杯体部の小破片であるが、墨痕がわずかに残る。528は高台杯の脚部片である。体部のほとんどを欠損しているが、内面には黒色処理の痕跡が残る。

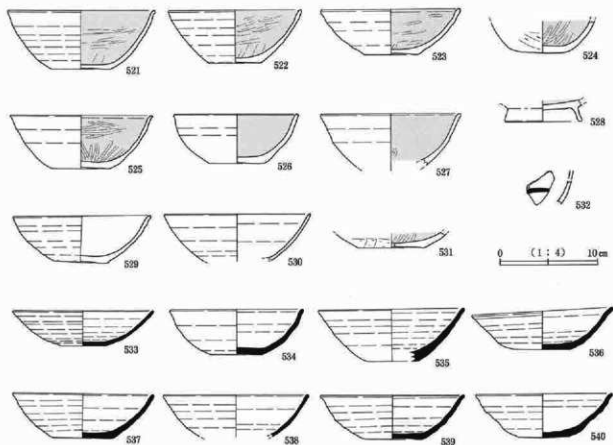
533～540は須恵器杯である。体部の形状はほとんどが内湾気味に立ち上がるものであるが、やや直線的に開くものもある（535・536）。口径は14～15cmのものがほとんどであるが、器高の低いものも存在する（533・536など）。調整はいずれも内外面ともロクロ調整であり、焼成は良好である。

541～545はロクロを使用しない土師器甕である。いずれも口縁部の形状は「く」字状に外反するものであるが、その程度は多様である。体部の形状は基本的に長胴形を呈しているが、541・544は体部上位に最大径をもち、底部に向かってゆるやかに窄まる形態を呈している。底部の形状はいずれも欠損しており不明である。胴縁は、外面には縦位のハケメ、もしくはヘラナデであり、内面は横位のハケメ、もしくはヘラナデが施されている。546～548はロクロ調整の甕である。いずれも口径が13～16cmと小型の部類に属する。549・



第116図 SI03Bカマド

遺物名	群番号	色調	瓷分	土性	粘性	しまり	特徴
SI03Bカマド	1	黒褐色	10y r3/1	粘質土	やや強	中	黄褐色上ブロックをやや多く含む
	2	暗褐	10y r3/3	粘質土	中	やや強	褐色粒、炭化物を少量含む
	3	褐灰	10Y R/1	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色上ブロックを多く含む



第117図 SI03 出土遺物(1)

550は須恵器甕である。550は体部下位から底部にかけて、549は口縁部の破片である。550は平底であり、内外面ともロクロ調整を基本としている。体部下半にはその後継位のヘラケズリが施される。549は外側に大きく開き端部がわずかに突出する形態を呈する。土師器甕に類似する形態である。

553は鉄製絞具である。長さ4.5cm、幅3.6cmの長方形の平面形である。断面は凹形を基調とする。551・552は砥石である。いずれも完形ではないが表裏にスリ面が残る。914・917・919は土鍾である。このうち919の先端にはひも状の織物の痕跡がのこる。

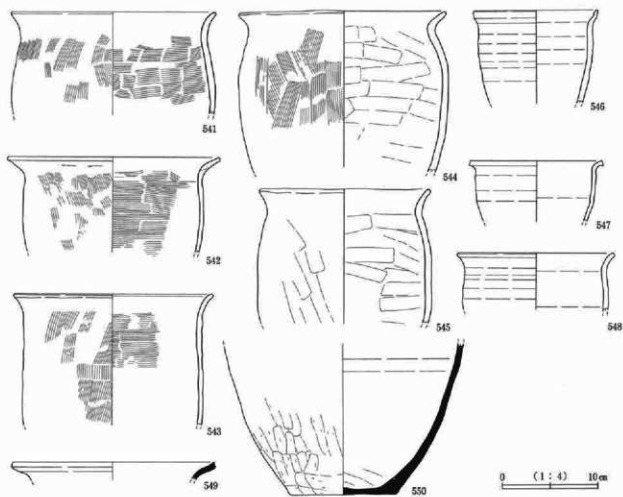
以上、本住居跡は遺構の特徴及び出土遺物からI期(9世紀後半)に位置づけられる。

(西澤)

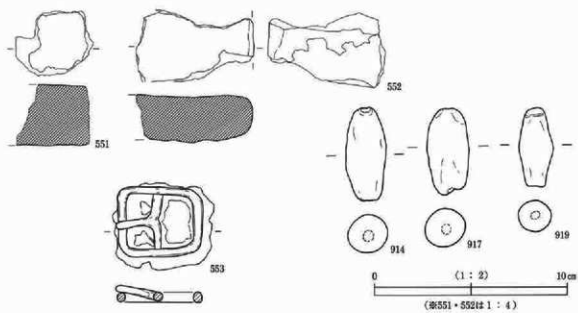
#### SI03B 竪穴住居跡

前述のように、SI03 竪穴住居跡の床面より下層において検出している。規模は、ほぼ3.8m四方の正方形状を呈し、南壁の一部をSI03(新期)と共有している。ただし、本住居跡は拡張後のSI03によって大半が削平されていると考えられることから、この範囲が本来の規模であったかは不明である。

堆積土(掘りかた堆積土)は単層であり、確認面SI03床面より約5~10cmと浅い。SI03住居跡の貼床と同質の粘質土で堆積しており、区別が難しい。したがって、この堆積土は本来新期であるSI03に伴う可能性もある。そのため、SI03B(旧期の住居跡)の残存部分については厳密には掘りかたのみの検出となろう。



第118圖 SI03 出土遺物 (2)



第119圖 SI03 出土遺物 (3)

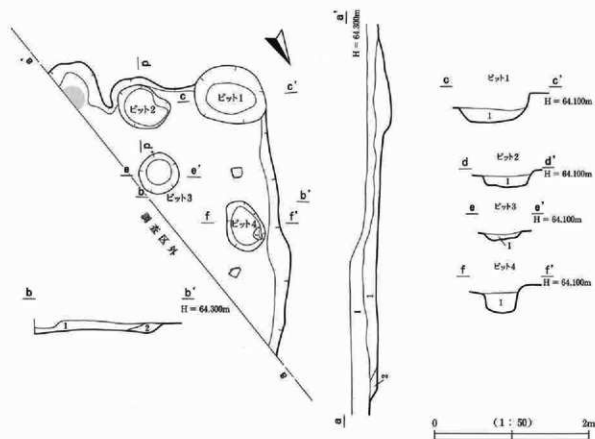
本住居跡がSI03の掘りかた堆積土の可能性も考えられるが、中央部に掘り込みをもつ住居跡は極めて少ないことから、本遺構の堆積土もしくは掘りかた堆積土であると判断できよう。

カマドは東壁側に付設されている。SI03によりカマド本体は残存していない。煙道と煙出しピットのみを検出となる。煙道はSI03Bの範囲より北へ1.35m延び、先端に40×35cmの楕円形状を呈する煙出しピットが付設される。住居側から先端に向けて緩やかに傾斜している。住居壁際での深さは確認面より40cm、煙出しピット部分では64cmである。堆積土は3層が確認できる。地山（V層）を削りぬいて構築されている。

遺物は、貼床堆積土中より出土しているが、堆積土が薄く、埋め戻し中の遺物とこの住居に伴っている遺物を明確に区別できないため出土遺物はSI03に含めて記述している。（西澤）

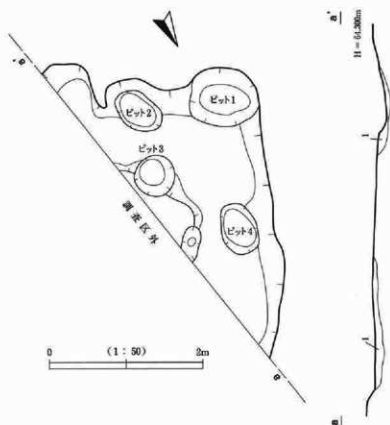
### SI04竪穴住居跡（第120～122図）

B区 N150W100 グリッドに位置する。南西5mにSI03竪穴住居跡が、西3mにSI05・06竪穴住居跡が位置する。住居跡東半分が調査区外へ広がるため完掘していない。付属する施設としてカマドの一部、ピッ



第120図 SI04 竪穴住居跡

遺構名	番番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI04	1	黒褐	10yr2/3	砂質土	やや弱	中	黄褐色ブロック少
	2	黒褐	10yr2/2	砂質土	やや弱	やや弱	
ピット1	1	黒褐	10yr2/2	砂質土	中	中	焼土粒中、炭化物中、黄褐色砂質土ブロック少
ピット2	1	暗褐	10yr3/3	砂質土	中	やや弱	黄褐色砂質土ブロック中
ピット3	1	黒褐	10yr2/2	砂質土	中	中	焼土粒少、炭化物少
ピット4	1	黒褐	10yr2/3	砂質土	やや弱	やや弱	焼土粒少



第121図 SI04 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI04掘りかた	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや強	やや強	黄褐ブロックを多く含む(貼床)

ト4基がある。

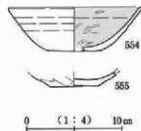
検出はV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。この住居の規模は、現状で西壁が3.50m、南壁が2.75mである。平面形は完掘していないため不明である。住居の方位は二辺の一部のみしか調査していないため正確には不明であるが、西壁を基準とすればN-28°-Eである。

堆積土は2層が確認できる。いずれも黒褐色を基本としており、全体的に砂質が強い。上部の多くを削平されていると考えられるため、自然堆積か否かは判断できない。

床面はほぼ平坦であるが、南壁のカマドの痕跡が残る部分では若干隆んでいる。壁は現存でみると、比較的ゆるやかに立ち上がっている。

掘りかたをみると、住居壁際を中心に掘り込みが確認できることから、貼床は壁際を中心に厚く張られており、中央部は薄い。

カマドは南壁と調査区の境界付近を中心に位置するものと考えられる。この部分に焼土と若干の高まりが認められ、これが右袖と考えられる。焼土はこの右袖より奥側(調査区外)にみえ、燃焼部の焼土と思われる。したがって、最下部のみ残存し、大部分が削平を受けていると考えられる。



第122図 SI04 出土遺物

現状で見ると、袖の幅は最大で45cm、長さが45cmである。

その他の施設として、ピットが4基確認できる。ピット1は住居跡南西隅に位置し、93×75cmの大ききで、楕円形を呈する。深さは床面より18cmである。ピット2は、右袖の西脇に位置し、68×56cmの楕円形を呈する。深さは床面より15cmである。堆積土は暗褐色土の単層である。ピット3はピット2の北側40cmの場所に位置し、直径50cmのほぼ円形を呈する。床面からの深さは10cmと浅い。ピット4は西壁際のほぼ中央部、ピット1から北へ約1mのところに位置する。規模は70×48cmであり、楕円形状を呈する。床面からの深さは25cmである。

出土遺物は堆積土を中心に出土している。総重量は1,591gであり、そのうち2点・69gを図化した。これらの遺物は堆積土中であるが、削平を多く受けている住居跡であることから、そのうち下層に含まれると考えられる。また、硯が1点堆積土上層より出土したが、これはSI26B住居跡出土例と接合した。遺構間接合の可能性が考えられるが、表土直下であること、直前まで周囲に重機が入っていたことなどを考慮すると、本来はSI26B住居跡に伴っている可能性も考えられる。実測図はSI26B住居跡の方に記載している。

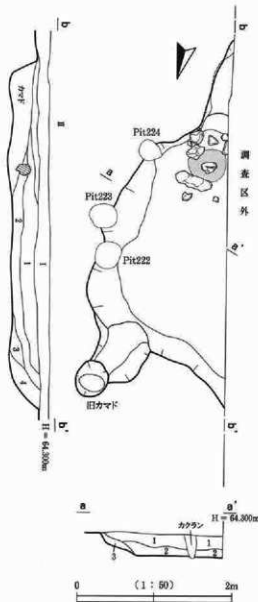
554は内面に黒色処理が施される杯で、体部の形状はやや直線的に広がるものの緩やかに立ち上がる。555は土師器・杯底部片である。体部下半にヘラケズリの痕跡が残る。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から平安時代に属すると考えられるが、詳細は不明である。(西澤)

### SI05 竅穴住居跡 (第123図)

B区 N150W110 グリッドに位置する。南に4mのところSI03がある。本住居跡も大半が調査区外へ広がるため完掘していない。北側でSI06 竅穴住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。また、東壁側をピット222・223・224によって一部壊されている。

検出はV層上面であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。付属する施設として、カマドが新旧合わせで2基確認される。



第123図 SI05 竅穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI05	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	炭化物少、機土粒少量含む
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	炭化物少、機土粒少、黄褐色砂質土ブロック中量含む
	3	黒褐	10yr2/3	粘質土	やや弱	中	炭化物少、機土粒少、黄褐色砂質土ブロック少量含む
	4	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	炭化物少、機土粒少、黄褐色砂質土ブロック少量含む
SI05埋りかた	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロック (大) を多く含む

規模や平面形は、ほとんどが調査区外へ広がるため不明である。現状での規模は、東壁が3.95m、北壁が2.40mである。

堆積土は4層が確認でき、黒褐色系の粘質土を中心に堆積している。断面の堆積状況を見ると、自然に堆積した状況が窺える。

床面はやや凹凸があるもののほぼ平坦であり、深さは確認面から28~35cmである。壁はやや傾斜して立ち上がるが、北壁部分ではさらにゆるやかに立ち上がる。貼床は、床面全体を調査していないため全容は不明であるが、現状では壁際を中心に施されていると考えられる。

カマドは2カ所が確認できる。新期のカマドは南壁に、住居跡南東隅部分に付設される。右袖部分の一部が調査区外のため完顔できなかった。上部は削平されており、下部のみの検出である。現状での両袖間幅は50cmである。袖は角礫中心にして構成している。左袖は3個、右袖には1個の礫を確認している。北側には長さ50cmの大型の礫が存在しているが、おそらく天井部の礫が落ちたものと考えられる。したがって、袖、天井など角礫を中心にカマドを構築していたと考えられ、本遺跡においては特異なものとなっている。両袖間には50×40cmの楕円形状に焼土が広がっており、これが燃焼部と考えられる。直上やや浮いて小型甕が出土している。また、両袖間には直径15cm程度の扁平な礫が置かれており、あるいは支脚として使用されていたかもしれない。

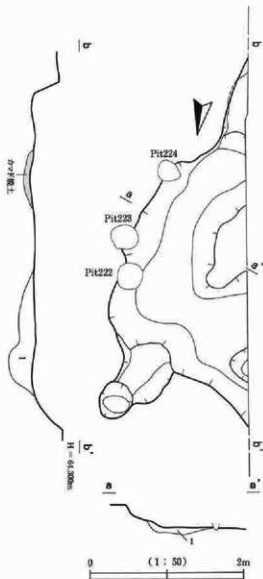
煙道は住居壁から95cm南へ延びるが、煙出しピットは調査区外へ続くと考えられるため調査していない。煙道堆積土は4層が確認できる。

古期のカマドは北辺、北東隅付近に辺と直交して付設されている。住居北壁より北へ約90cm延び、先端に47×40cmの楕円形状の煙出しピットが設けられる。深さは住居壁際で、確認面より28cm、煙出しピット側で50cmである。煙道部分についてはほぼ水平に移行するが、煙出しピット部分で深くなる。

堆積土は5層が確認できる。基本的に暗褐色系の土層で堆積している。このうち2層については、地山に類似するブロックを多く含んでいるためあるいは天井部が崩れた層かもしれない。また、いずれの層もほぼ水平に堆積するため、人為により堆積していると考えられる。

遺物は総重量2,579gが出土し、そのうち5点、1,582gを図化した。

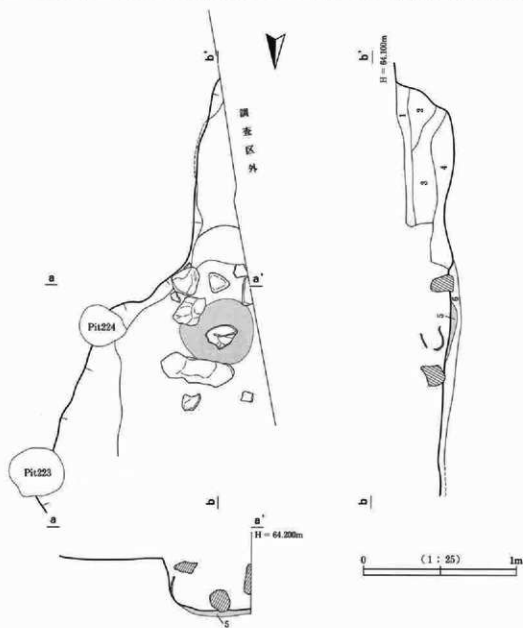
556は土師器杯である。体部の形状はゆるやかに内湾するもので、底部付近にやや強いナデが加えられている。調整は外面にやや細かなクロコナデ痕が、内面には放射状ミガキと横位ミガキが施されている。また、



第124図 SI05 掘りかた

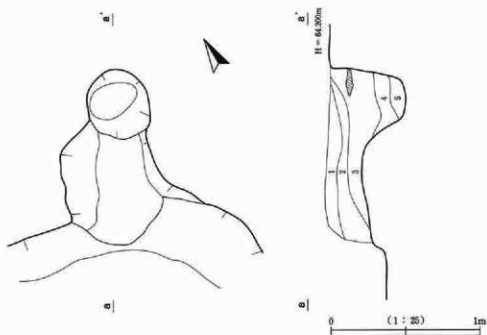
内面には黒色処理が施されている。558は杯の口縁部破片であり、外面に墨痕が残る。557・559～561は土師器甕である。557は小型甕で、口径14cm、器高が13cmである。口縁部は端部をやや肥厚させる。調整は内外面ともロクロナデ痕が残る。559・560はロクロ調整の甕で20cm前後の中型品である。

561はロクロを使用しない甕であり、底部を欠損している。体部の上位～中位付近に最大径をもち、底部



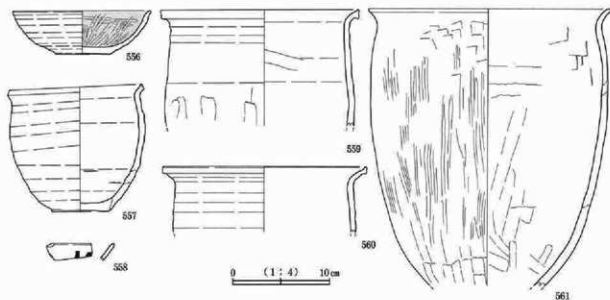
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S105カマド	1	明黄褐色	10yr6/5	粘質土	やや弱	やや弱	暗褐色粘質土ブロック中量含む
	2	黒褐色	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色砂質土ブロック中、炭土ブロック中量含む
	3	にじい黄褐色	10yr7/3	粘質土	やや強	やや弱	炭土、炭化物を含む、黄褐色ブロックを含む
	4	明黄褐色	10yr6/6	粘質土	やや弱	やや弱	暗褐色粘質土ブロックを含む
	5	暗褐色	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色砂質土ブロック中、炭土ブロック多く含む
	6	にじい黄褐色	10yr7/3	粘質土	やや弱	やや強	炭土、炭化物、黄褐色土ブロックを含む(粘床)





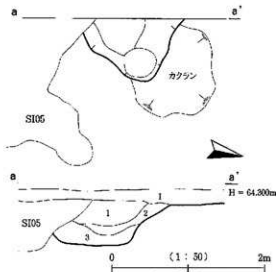
第126図 S105 旧カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S105旧カマド	1	褐色	10yr4/1	粘質土	中	やや強	黄褐色粒子少量含む
	2	暗褐	7.5yr3/3	粘質土	やや強	中	焼土粒を多量に含む 凹天井くずれか
	3	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや強	中	褐色ブロック、焼土粒を含む
	4	にぶい黄褐色	10yr7/4	粘質土	中	やや強	暗褐ブロックをやや含む
	5	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや強	やや弱	褐色土ブロックを少量含む



第127図 S105 出土遺物

に向けて窄まっている。調整は口縁部にヨコナデが、体部にはヘラナデの後、縦位のミガキが施されている。内面には縦位や横位のヘラナデが施されている。以上、遺構の特徴及び出土遺物から考えるとI期(9世紀後半)に位置づけられる。(西澤)



第128図 SI06 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI06	1	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや弱	やや粘	
	2	黒褐色	10yr2/3	粘質土	中	やや粘	焼土粒少
	3	黒褐色	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂ブロック少

### SI06竪穴住居跡(第128図)

B区 N150W110 グリッドに位置し、SI05竪穴住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。また、北東隅部分には柱穴群により破壊されているため、大きく形状を変えている。検出はV層上面であるが、直上層がI層であるため、住居跡大部分が削平されていると考えられる。

平面形や規模は、調査区内には住居北東隅部分のみのため完照しておらず、よって詳細は不明である。

現状での規模は北壁が1m、東壁が1.10mである。深さは確認面から50~60cmである。

堆積土は3層が確認でき黒褐色系の粘質土が堆積している。壁は柱穴群により破壊されている部分が多く不明確であるが、比較的緩やかに傾斜して立ち上がるようである。床面はほぼ平坦である。調査部分が狭小のため掘りかたの調査は行っていない。

カマドやその他の施設については確認していない。

時期は土器の出土が確認できないが、遺構の特徴から平安時代に位置づけられると考えられる。(西澤)

### SI07竪穴住居跡(第129~131図)

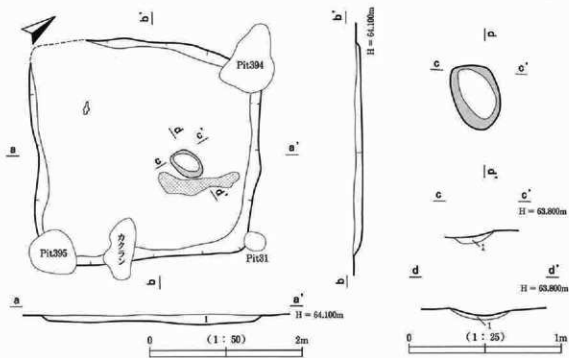
B区 N160W130 グリッドに位置する。Pit 31・394・395と重複し、新旧関係はいずれの遺構より本住居跡の方が古い。

本遺構はV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は北東~南西2.90m、北西~南東2.80mであり、正方形を呈する。本住居跡の方位は東壁を基準とするとN-29°-Eである。

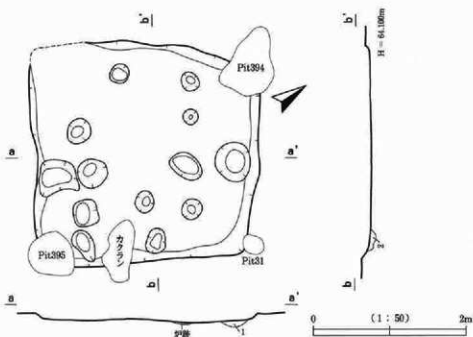
住居内堆積土は黒褐色砂質土の単層であり、堆積状況からは自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。

住居壁は残存状況が悪いが緩やかな傾斜の立ち上がりを確認している。検出面から床面までの深さは13~18cmである。床面はほぼ平坦に構築され、部分的に褐色粘質土を基調とする貼床を施している。掘りかたは部分的なビット状の掘り込みとして確認している。

カマドは確認していないが、床面上で住居跡中央の北東壁よりに40×30cmの楕円形の焼土の広がりを検出した。この焼土を断ち割った結果、浅い掘り込みが確認され、暗褐色砂質土を基調とした堆積土は被熱のために固くしまっていた。掘り込みが確認されたことや掘り込み内に暗褐色砂質土を基調とした堆積土が存在



第129図 SI07 竪穴層跡



第130図 SI07 振りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI07	1	黒褐	10yr2/3	砂質土	弱	弱	黄褐色砂ブロック少、炭化物少
振りかた	1	褐灰	10yr4/1	粘質土	やや強	やや強	褐色砂紋、炭化物を含む(粘床)

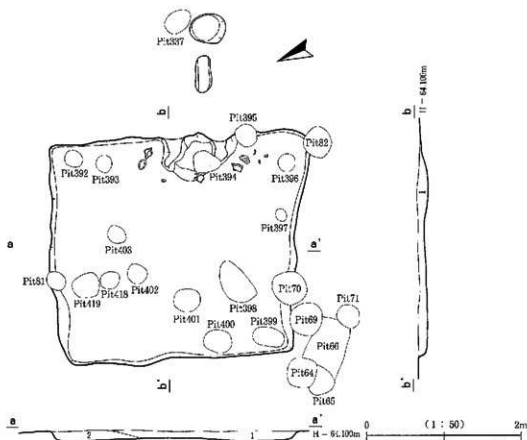
すること、カマドが確認されないことから、この築土の広がりについては炉跡の可能性を考えている。また、この炉跡の周囲に炭化物の広がりを確認している。本遺構はカマドが確認されず、炉跡のみが確認されている。また、炉跡からはやや離れるが、竪穴住居跡南西畔付近の床面では鉄製品(562)が出土している。そのため、ここでは住居跡として扱っているが、工房的な性格を有している可能性がある。

遺物は地積土中からの出土がほとんどであるが、床面からは前述の鉄製品が出土している。遺物の総重量は約1,000gでそのうち同化したのは600gである。

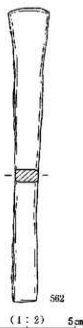
本竪穴住居跡は出土遺物から時期を判断することができないが、規模・平面形および堆積土が他の竪穴住居跡と類似するため平安時代の可能性がある。(小針)

#### S108竪穴住居跡 (第132~135図)

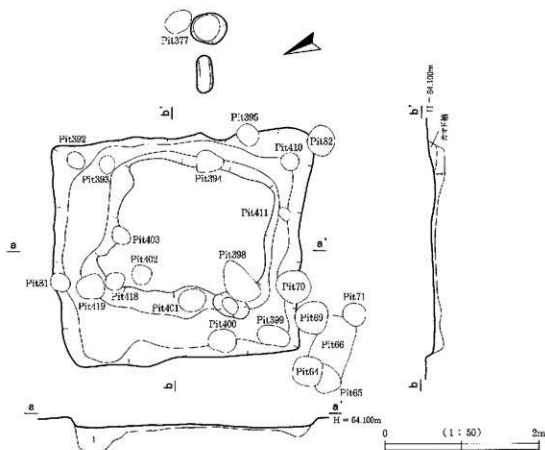
B区 N160W120 グリッドに位置する。Pit 406~412と重複し、新旧関係はいずれのピットよりも本住居跡の方が古い。



第132図 S108 竪穴住居跡



第131図 S107 出土遺物



第133図 S108 掘りかた

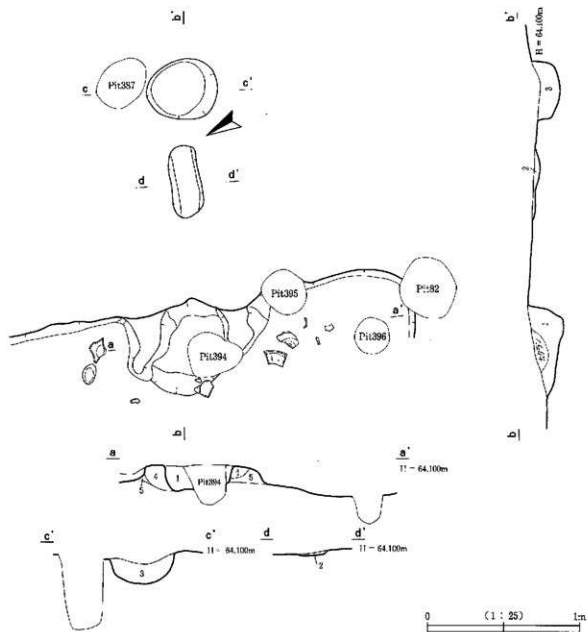
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S108	1	黒褐色	10yr3/1	砂質土	やや弱	中	炭土ブロック少、炭化物少、黄褐色ブロック少
	2	黒褐色	10yr3/1	砂質土	やや弱	やや強	炭土ブロック少、炭化物少、黄褐色砂ブロック多
掘りかた	1	褐灰色	10yr2/1	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックを多く含む(粘床)

本遺構はV層上面において黒褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は北東～南西3.10m、北西～南東3.20mであり、正方形を呈する。本住居跡の方位は東壁を基準とするとN-19°-Eである。

堆積上は2層に分けた。1・2層ともに黒褐色砂質土を基調とするが、2層にはV層に起因すると考えている黄褐色ブロックが多く含まれ、しまりもやや強い。後世の削平によって検出面から床面までの深さが浅いが、堆積状況は2層がいわゆる三角堆積を呈することから自然堆積と判断している。

住居跡は残存状況が悪いものやや急角度に傾斜しながら立ち上がる。検出面から床面までの深さは10～15cmである。床面はほぼ平型に構築され、褐灰色粘質土を基調とする粘床が施されている。掘りかたは住居跡全体を掘り込むが、住居跡周辺が特に深く掘り込み住居跡中央付近は高まりとして掘り残されている。そのため、粘床は住居壁付近では厚く、中央付近は薄くなっている。

カマドは住居南東壁やや南よりに位置し、南東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存していないが、両袖、燃焼部、煙道底面、煙出しピットを確認している。両袖間の幅は最大で38cm、残存する長さは北袖が45cm、南袖は攪乱によって一部を破壊されているものの30cmである。両袖とも床面から10～12.5cmの高さが残存している。カマド内堆積土は3層に分けた。いずれの層も黒褐色粘質土を基調とする。1層



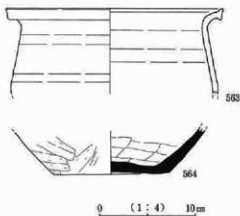
第134図 S108 カマド

遺構名	層番号	色相	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S108カマド	1	黒褐	10yr6/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐砂質ブロック少、黄土ブロック、炭化物少
	2	黒褐	10yr5/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐砂質ブロック少
	3	黒褐	10yr3/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐砂質ブロック少、黄土粒少
	4	黒褐	10yr3/1	粘質土	強	やや強	黄土ブロック(にふい赤褐色)を多く含む
	5	にふい黄褐	10yr4/3	砂質土	中	やや強	暗褐色ブロックを含む

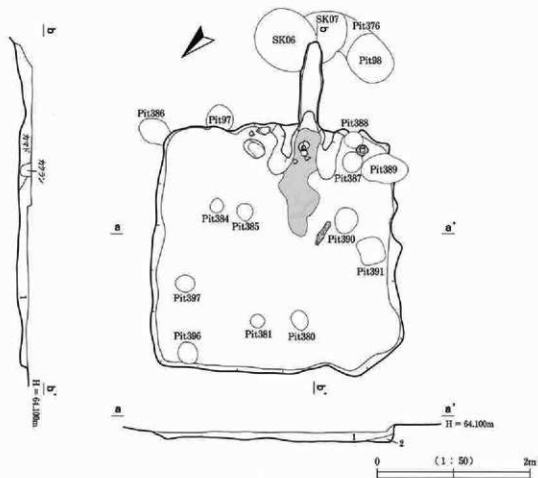
は燃焼部、2層は煙道、3層は煙出しピットの堆積土である。これらの層は含有物に若干の違いがあるものの土質が同じであるため、本来は同一の層であった可能性がある。底面は住居床面から燃焼部にかけて浅い掘り込みがみられ、燃焼部から煙道に向かっては急傾斜で立ち上がる。煙道から煙出しピットにかけての状況は削平のため不明である。煙道は住居跡南東壁から南東方向に1.35m延びる。煙出しピットは47.5×37.5

cmの不整な円形を呈し、検出面からの深さは20cmで壁面は急傾斜で立ち上がる。燃焼部には被熱した範囲を確認できなかった。カマド両袖はともに貼床上に黒褐色粘質土とにぶい黄褐色砂質土で構築されている。この黒褐色粘質土については、カマド内堆積土の可能性も考えられたが、しまりが強く、被熱した痕跡も確認されたために袖の構築土と判断している。

遺物はカマド周辺からやや集中して出土している。遺物の総重量は1,421 g、そのうち図化したのは2点・483 gである。563は土師器・甕の口縁部片である。体部中位がやや膨らみ、体部から口縁部にかけて外反する。端部は上下につまみだし、面を形成している。内外面共にロクロ調整



第135図 SI08 出土遺物



第136図 SI09 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI09	1	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	中	黄褐色ブロック中、炭土炭少
	2	黒褐	10yr2/2	砂質土	やや弱	やや弱	粘土ブロック中、炭化物少

である。564は須恵器・甕の底部片で全体の形状は不明である。調査は外面が横位・斜位のケズリ、内面が横位のナデである。

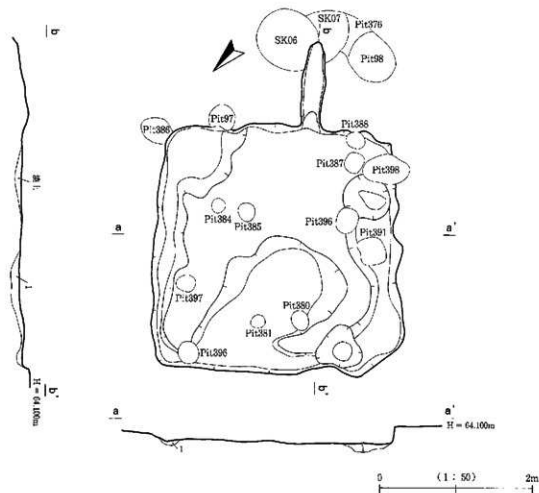
以上、遺構の特徴及び若干の出土遺物から本竪穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが、詳細な時期は不明である。(小針)

#### SI09竪穴住居跡(第136~140)

B区N170W110グリッドに位置する。Pit401~406、カマド煙道部分でSK06・07と重複し、新旧関係はいずれの遺構より古い。本住居跡には、カマドが付設される。

本遺構はV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は北東~南西3.30m、北西~南東3.30mであり、正方形を呈する。本住居跡の方位は北吠を基準とするとN-46°-Eである。

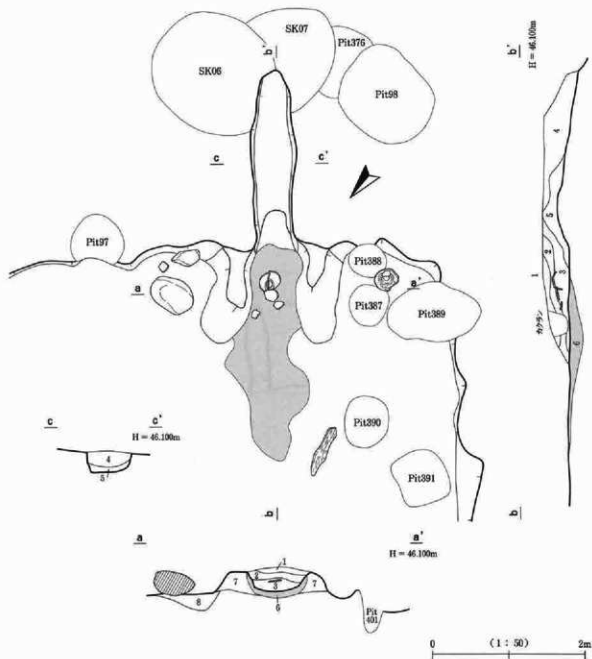
住居内準位は2層に分けた。1層は暗褐色砂質土を基調とする。2層は南西壁付近にのみ確認された層で黒褐色砂質土を基調とする。後世の削平によって検出面から床面までの深さが浅いが、堆積状況は2層が



第137図 SI09掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI09掘りかた	1	黒褐	10y-3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック(中)を多く含む





第138図 SIO9 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SIO9カマド	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐砂質土ブロック少
	2	黄褐	10yr5/6	砂質土	弱	中	明黄褐粘質土中(天井崩落)
	3	暗褐	10yr3/4	粘質土	中	やや弱	焼土粒少、炭化物少(使用時堆積)
	4	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	(埋理土)
	5	褐	10yr4/4	粘質土	中	中	焼土ブロック多、黄褐砂質ブロック多(煙道崩落)
	6	明赤褐	2.5yr5/5	粘質土	やや強	中	炭化物・黒褐ブロック焼土含む
	7	にじみ黄褐	10yr7/4	砂質土	中	やや強	堆山に近い色調(カマド脇)
	8	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	焼土ブロック炭化物含む

概ねいわゆる三角堆積を呈することから自然堆積と考えている。

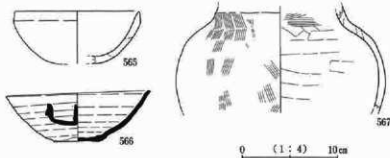
住居壁は残存状況が悪いものの急角度に傾斜しながら立ち上がる。検出面から床面までの深さは10~25cmである。床面はほぼ平坦に構築され、褐灰色粘質土を基調とする貼床が施されている。掘形は南東壁以外の三方の住居壁周辺を浅く掘り込み、

北西壁から中央付近にかけてはやや深く掘り込まれている。また、住居跡中央付近から南東壁・カマド周辺にかけては「コ」の字状の高まりとして掘り残されていた。そのため、貼床は住居壁周辺では薄く、中央付近ではやや厚く貼られているが、住居跡中央付近から南東壁・カマド周辺にかけては確認できなかった。

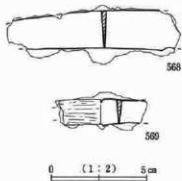
カマドは住居南東壁やや南よりに位置し、南東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存しておらず、また、煙道から煙出し部にかけてはSK06・07土坑によって破壊されているが、両袖、燃焼部、煙道を確認している。両袖間の幅は最大で33cm、残存する長さは北袖が63cm、南袖が65cmである。両袖とも床面から13~15cmの高さが残存している。カマド内堆積土は5層に分けた。1・4層は黒褐色粘質土、2層は黄褐色砂質土、3・5層は暗褐色粘質土をそれぞれ基調とする。このうち2層は被熱の痕跡が確認され、明黄褐色粘土ブロックを含んでいることから燃焼部の天井崩落土と考えている。5層についても2層同様、被熱の痕跡を確認したことから煙道の天井崩落土と判断している。また、2層と3層に挟まれた状態で土師器環(565)が出土している。これは燃焼部天井の構築材として利用された可能性もある。底面は燃焼部から煙道にかけて緩やかな傾斜で立ち上がり、立ち上がりの頂点から先端に向かっては緩やかに落ち込む。煙道は残存部分で住居跡南東壁から南東方向に1.15m延びる。燃焼部は138×45cmの不整形な範囲で被熱しており、被熱の範囲は住居跡の中央付近にまで及ぶ。焼土の厚さは最大で8cmである。カマド袖は両袖とも貼床上にふい黄褐色砂質土で構築され、かなり被熱していた。本住居跡の煙道は、天井崩落土と考えている5層がIV層層を基調とする

ことから本来はトンネル状に割り貫かれていたと理解している。

遺物はカマド周辺からの出土が比較的多い。また、住居跡中央、南西壁よりの床面から炭化材を検出している。遺物の総重量は1,447gでそのうち円化したのは518gである。565は土師器碗で内湾しながら立ち上がる器形で口縁部はナデのためわずかに外反している。マメツのため内外面とも調整技法は明らかではなく、底部の形状も欠損のため不明である。567は土師器・壺体部片である。体部中位に最大径をもち、頸部にかけて緩やかな「S」字状を呈する器形といえる。外面調整は頸部がヨコナデ、体部に縦位のハケメを施す。内面調整は頸部内面に横位のハケメ、体部内面には横位のナデを施している。566は須恵器・杯で底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる。調整技法は内外面共にクロコナデであるが、外面中位に「」の墨書が確認できる。568は鉄製鏝である。茎部と刃部先端が欠損している。569は刀子片である。茎部には木質が残



第139図 S109 出土遺物(1)



第140図 S109 出土遺物(2)

存している。

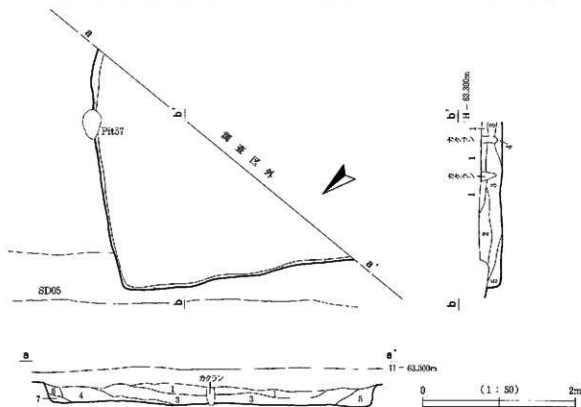
以上、遺構の特徴及び若干の出土遺物から本堅穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細な時期は不明である。 (小針)

#### SI10 堅穴住居跡 (第141~143図)

B区 N160W120 グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは北東壁から北西壁にかけての約1/3であり、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。SD05 溝跡、Pit 57と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも本住居跡の方が古い。

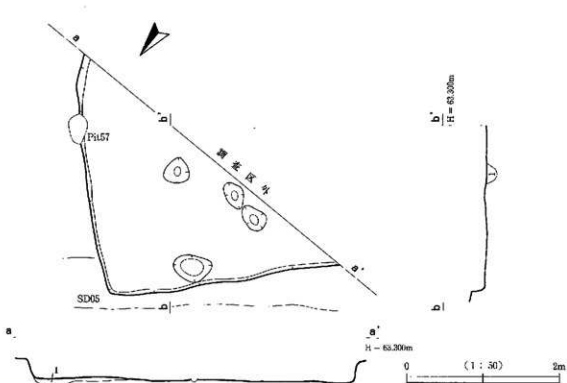
本遺構はV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。調査区内で確認できた規模は北東壁が3.10m、北西壁が3.10mであり、平面形は方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた西壁を基準とするとN-30° - Eである。

住居内土壌は7層に分けた。1~4層は暗褐色砂質土、5~7層は黒褐色砂質土をそれぞれ基調とする。このうち6層には焼土粒が、7層には焼土ブロックと炭化物が含まれていたためカマドに関する堆積上の可



第141図 SI10 堅穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	上性	粘性	しまり	特徴
SF10	1	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	弱	黄褐色砂質ニブロック少、焼土粒少、炭化物少
	2	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	強	黄褐色砂質ニブロック多、黒褐色粘質土ブロック少
	3	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質ニブロック中、焼土粒少、黒褐色粘質土ブロック少
	4	暗褐	10yr3/4	砂質土	やや弱	弱	黄褐色砂質ニブロック中、炭化物少、黒褐色粘質土ブロック少
	5	黒褐	10yr2/2	砂質土	弱	弱	焼土粒少
	6	黒褐	10yr2/2	砂質土	弱	弱	焼土粒少
	7	黒褐	10yr2/2	砂質土	弱	弱	粘土ブロック中、炭化物少



第142図 SI10 掘りかた

遺構名	層番号	色別	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI10掘りかた	1	暗褐色	10yr5/3	粘質土	やや強	やや強	褐色ブロックを多く含む(貼床)

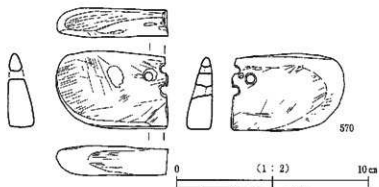
能性がある。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈しており、自然堆積と判断しているが、2層はV層に起因すると考えている。黄褐色土のブロックを多く含み、しまりも非常に強いためこの層のみが人為堆積の可能性もある。

住居壁は急角度に傾斜しながら立ち上がり、検出面から床面までの深さは28~30cmである。床面はほぼ平坦に構築され、部分的に暗褐色粘質土を基調とした貼床を施している。掘りかたは部分的なビット状の掘り込みとして確認している。カマド・ピット等の本住居跡に伴う施設は確認できなかった。

大半の遺物は住居内堆積土からの出土であり、総重量は319gである。石器を1点のみ図示している。570は有孔石製品である。軟質で、中央部に楕円形状に孔が3カ所穿たれている。およそ1/2が欠損している。流れ込みかもしれない。

以上、遺構や堆積土の特徴から本竈穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細は不明である。

(小針)



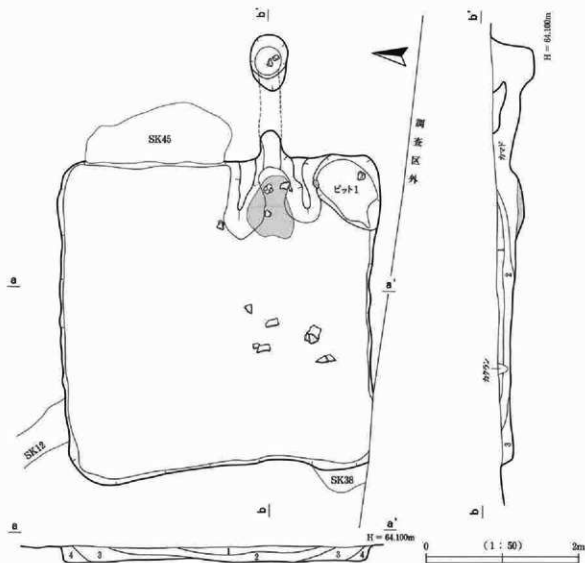
第143図 SI10 出土遺物

### S111 竪穴住居跡 (第144~147)

A区西端 N30W220 グリッドに位置する。調査区内で住居跡のほとんどを検出したが、南西隅付近のみが調査区外にのびる。SK12・38・45土坑と重複し、新旧関係は本住居跡の方がSK38・45より古く、SK12より新しい。カマド・ピットが付設される。

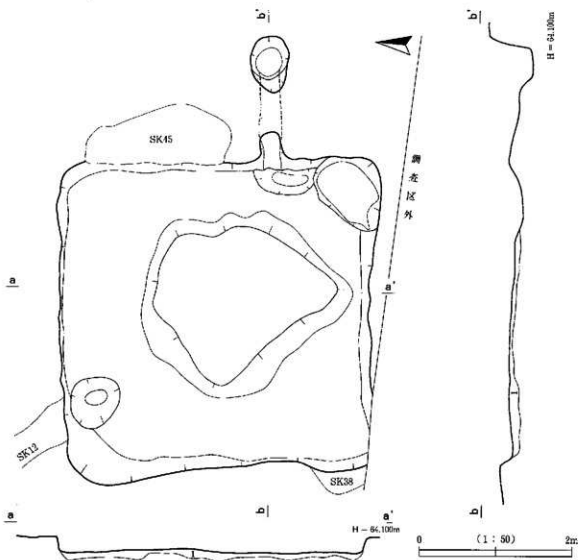
本遺構はV層上面において暗褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は住居跡北壁、東壁ともに4.20mであり、ほぼ正方形を呈する。本住居跡の方位は東壁を基準とするとN-8°-Wである。

住居内堆積土は4層に分けた。1層は暗褐色砂質土、2層は黒褐色粘質土を基調とし、灰白色火山灰粒子



第144図 S111 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S111	1	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	中	黄褐色粘質土ブロック・白色微粒子を少量含む
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色・暗色砂質土ブロック・白色微粒子を少量含む
	3	灰黄褐	10yr4/2	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色粘質土ブロックを多量、炭化物少、炭土粒少
	4	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少
S111覆りかた	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐ブロック(大)を多く含む(陥り床)

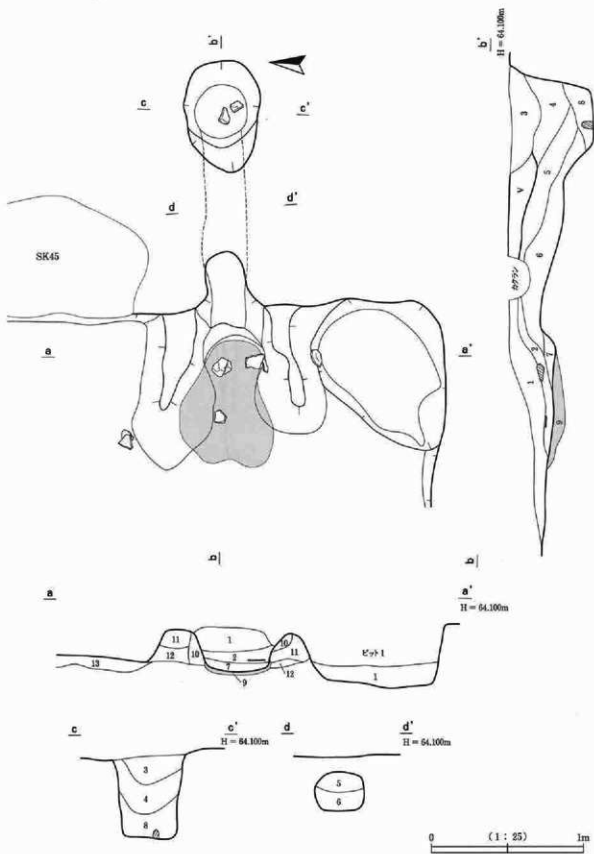


第145図 S111 掘りかた

を微量に含んでいる。3層は灰黄褐色砂質土を基調とするが、V層に起因すると考えている黄褐色土ブロックを多量に含んでいた。4層は黒褐色粘質土を基調としている。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈しており、自然堆積と判断している。

住居壁は残存状況がやや悪いものの急角度に傾斜しながら立ち上がる。検出面から床面までの深さは18～25cmである。床面はほぼ平坦に構築され、黒褐色粘質土を基調とする貼床が施されている。掘りかたは住居内ほぼ全面を掘り込んでいるが、住居壁周辺は深く、中央付近では浅い掘り込みとなっている。そのため、貼床も住居壁周辺では厚く、中央付近では薄く貼られている。

カマドは住居東壁南よりに位置し、東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存しておらず、煙道の一部は攪乱を受けているが、両袖、燃焼部、煙道、煙出しピットを確認している。両袖間の幅は最大で43cm、残存する長さは北袖が1.05m、南袖が85cmである。両袖とも床面から20～23cmの高さが残存している。カマド内堆積土は8層に分けた。1～3・5層は黒褐色粘質土を、4層は褐色砂質土、6層は褐色粘質

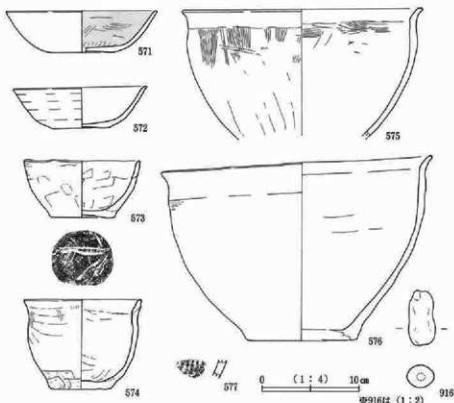


第146圖 SI11 カマド

遺物名	番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI11カマド	1	黒褐色	10yr3/2	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック中、焼土粒少
	2	黒褐色	10yr2/2	粘質土	中	中	焼土粒少、炭化物少
	3	黒褐色	10yr2/3	粘質土	中	中	
	4	褐色	10yr4/4	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック中、黒褐色粘質土ブロック中
	5	黒褐色	10yr3/3	粘質土	やや強	やや強	焼土粒少、黄褐ブロック少量含む
	6	暗褐色	10yr3/4	粘質土	中	やや弱	暗褐ブロック少量含む
	7	暗褐色	10yr3/4	粘質土	中	やや弱	焼土ブロック(中)を含む
	8	黄褐色	10yr5/3	砂質土	やや弱	やや弱	黒褐色粘質土ブロック少
	9	赤褐色	2.5Yr4/6	粘質土	中	中	上位は固くしまる
	10	褐灰色	10Yr4/1	粘質土	やや強	中	黄褐ブロックを含む(貼床)
	11	黄褐色	10Yr5/6	粘質土	やや強	やや強	暗褐ブロック(大)を多く含む
	12	褐色	10Yr4/4	砂質土	中	やや強	暗褐ブロックを少量含む、ほとんどV層に近い
	13	黒褐色	10Yr3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック(大)を多く含む
ビット1	1	黒褐色	10Yr2/2	粘質土	やや強	中	黄褐ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む 住居跡床

土、7層は暗褐色粘質土、8層は黄褐色砂質土をそれぞれ基調としている。このうち6層はIV層に起因すると判断できるため、煙道天井の崩落土の可能性もある。また、4・8層についてもそれぞれIV・V層に起因すると考えており、煙出しビット周辺の壁崩落土の可能性を考えている。燃焼部付近には明確な天井崩落土を確認することはできなかったが、1層にやや多く含まれる黄褐色ブロックが天井を構築していた可能性もあろう。底面は燃焼部から煙道にかけては急傾斜で立ち上がり、煙道は傾斜を減しながら緩やかに落ち込む。煙道から煙出しビットにかけては急傾斜で落ち込んでいる。煙道は住居跡東壁から東に1.23m延び、一部がトンネル状に掘り抜かれた状態で残存している。煙出しビットは73×50cmの不整な楕円形を呈し、検出面からの深さは55cmで壁面は急傾斜で立ち上がる。燃焼部底面は83×63cmの不整な楕円形の範囲で被熱しており、焼土の厚さは最大で10cmである。カマド北袖は貼床上に褐灰色粘質土、黄褐色粘質土、褐色砂質土で構築する。南袖は5層上に北袖同様、褐灰色粘質土、黄褐色粘質土、褐色砂質土で構築されている。

ビットは床面上で1基確認している。ビット1は住居跡南東隅、カマド南側に位置する。105×80cmの楕円形を呈し、住居跡床面からの深さは20cmである。堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。本ビットの性格については位置・規模から貯蔵ビットであると考えている。また、SK45は断面観察から本住居跡との重複関係として捉えているが、堆積土の土質が住居内堆積土と非常に近似するため、本住居跡に伴う可能性もある。遺物はカマド周辺と



第147図 SI11 出土遺物



住居跡中央南よりの床面からやや集中して出土している。遺物の総重量は2,727g、このうち図化したのは1,923gである。571・572は土師器杯であるが、571は底部から直線的に立ち上がるのに対して572は内湾しながら立ち上がる。571は外面調整がマメツのため不明、内面調整は中位が横位・斜位のミガキ、下位がやや幅の広い放射状ミガキであり、内面黒色処理を施す。572は外面調整がロクロナデであるが、内面調整はマメツのため不明である。573は非ロクロの土師器碗で底部から内湾しながら立ち上がり、571・572に比べて器高はやや高い。内外面とも口縁部ヨコナデを施したのち、外面は斜位のナデ、内面は横位のナデを施す。底部には木葉痕が確認できる。574は非ロクロの土師器・甕で分量が小型のものである。体部に比べ口縁部がやや肥厚する。外面調整は口縁部ヨコナデ、体部上位は縦位のハケメののちに横位のナデ、下位には横位のケズリを施している。内面は口縁部ヨコナデ、体部に横位・斜位のナデを施す。575・576は土師器・鉢である。共に底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は強く外反するなど似た器形である。575は外面上位に縦位のハケメ、下位に縦位のケズリを施す。内面上位は横位のハケメを施すが、中位以下はマメツのため不明である。内外面ともにこれらの調整を施した後に口縁部のヨコナデを施している。576は内外面ともほとんどがマメツしているが、外面上位には横位のハケメが確認でき、この後に口縁部のヨコナデを施している。577は縄文土器片で流入したものであろう。916は土鐘であり、1点のみの出土である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本堅穴住居跡は1期（9世紀後半）に位置づけられる。 （小針）

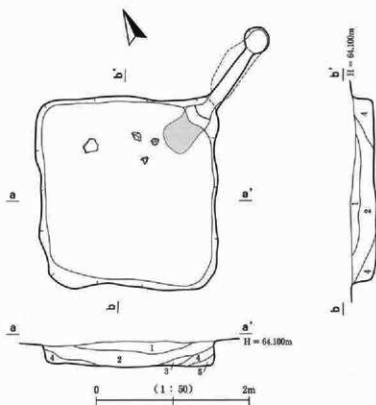
#### SI12堅穴住居跡（第148～151図）

A区N30W210グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。付属する施設にはカマダがある。

本遺構はV層上面で暗褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は南北2.50m、東西2.30mであり、正方形を呈する。本住居跡の方位は東壁を基準とするとN-25°-Eである。

住居内堆積土は5層に分けた。1・2・5層は暗褐色粘質土、3・4層は黒褐色粘質土を基調としている。1～4層にかけては灰白色火山灰微粒子を微量含み、なかでも1・2層はやや多く含んでいた。また、3層にはV層起因と考えられている黄褐色ブロックをやや多く含んでいた。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈しており、自然堆積と判断している。

住居壁は急角度に傾斜しながら立ち上がる。検出面から床面までの深さは25～30cmである。床面は



第148図 SI12 堅穴住居跡

ほぼ平坦に構築され、全体に黒褐色粘質土を基調とした貼床を施している。掘りかたは住居内全体を掘り込むが、中央付近がやや深くなっている。そのため、貼床も壁周辺に比べて中央付近がやや厚くなっている。

カマドは住居跡北東隅に位置し、北西隅と南東隅との対角線とほぼ直交する。

上部は削平のため残存しておらず、また、両袖を確認することができなかったが、燃焼部、煙道、煙出し部を確認している。カマド内堆積土は5層に分けた。1・5層は暗褐色粘質土、2・4層は黒褐色シルト、3層は暗褐色砂質土をそれぞれ基調とする。1層はIV層に起因すると考えている褐色ブロックをやや多く含み、しまりもやや強かった。そのため、断面の形状も含めて考えた場合、1層は煙道の天井崩落土で本来はトンネル状に掘り抜かれていたと判断できる。底面は燃焼部から煙道にかけて緩やかに立ち上がり、煙道から煙

出し部にかけても緩やかに落ち込んでいる。煙道は住居跡北東隅から北東に1.25m延びる。底面の状況及び煙道の堆積状況から煙出し部は本来ピット状を呈していたと考えている。燃焼部は58×43cmの不整な楕円形で被熱しており、焼土の厚さは最大で3cmである。両袖は確認しておらず、被熱範囲の外側にも袖構築材の痕跡を確認することはできなかった。

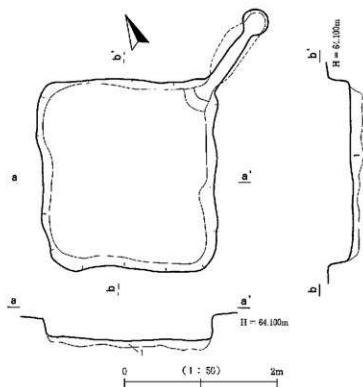
遺物は住居内堆積土からの用土が大半を占めるが、住居跡中央北壁よりの床面から若干出土している。遺物の総重量は1,011g、このうち陶化したのは487gである。578は須恵器・大甕体部片で焼成が良好で暗灰色である。外面はタタキ、内面は当て具痕が残る。915・918は土甕である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本整穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細な時期は不明である。

(小針)

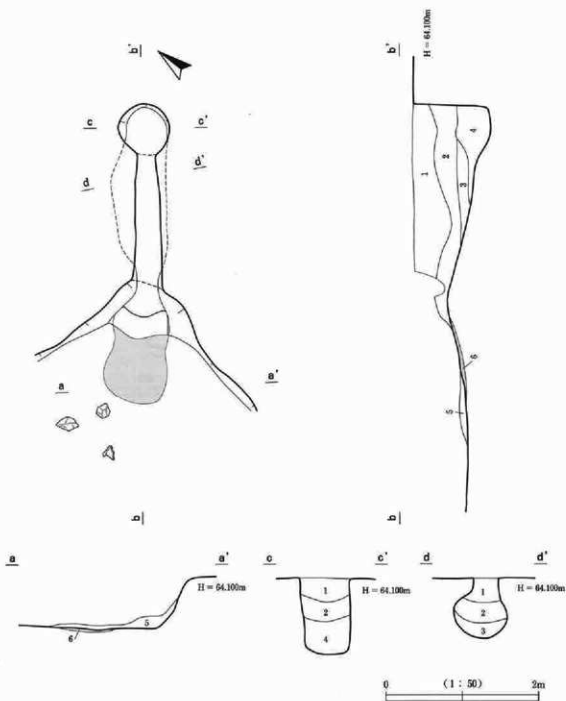
#### SI13 整穴住居跡 (第152~153図)

A区 N30W210 グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは南壁から東西壁にかけての約1/2であり、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。他の遺構との重複関係はなかった。ピットが付設される。



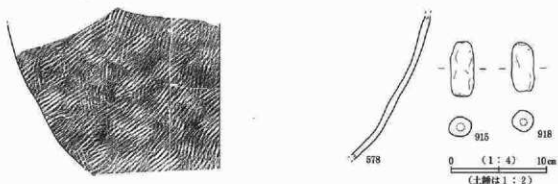
第149図 SI12 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土質	粘性	しまり	特徴
SI12	1	暗褐	10vr3/3	粘質土	中	やや軟	炭化物少、焼土稀少
	2	暗褐	10vr3/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少
	3	黒褐	10vr3/2	粘質土	やや弱	やや軟	黄褐色粘質土ブロック少
	4	黒褐	10vr2/2	粘質土	中	やや軟	黄褐色粘質土ブロック中
	5	暗褐	10vr3/3	粘質土	やや弱	やや軟	黄褐色粘質土ブロック少
SI12掘りかた	1	黒褐	10vr3/1	粘質土	中	やや軟	黄褐色ブロックを多く含む



第150図 SI12 カマダ

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI12カマダ	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや強	やや微	褐色シルトブロック(大)を含む
	2	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	中	黄褐色砂質ブロックを多く含む
	3	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや弱	中	黒褐ブロックを含む
	4	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐砂質ブロックを少量含む
	5	褐灰	10yr4/1	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐砂質ブロックを含む(柱礎埋土or 燃焼部埋土)
	6	暗褐	10yr3/4	粘質土	中	やや弱	暗褐粘土ブロック・粘土ブロックの混在、炭化物ブロック含む(燃焼部)

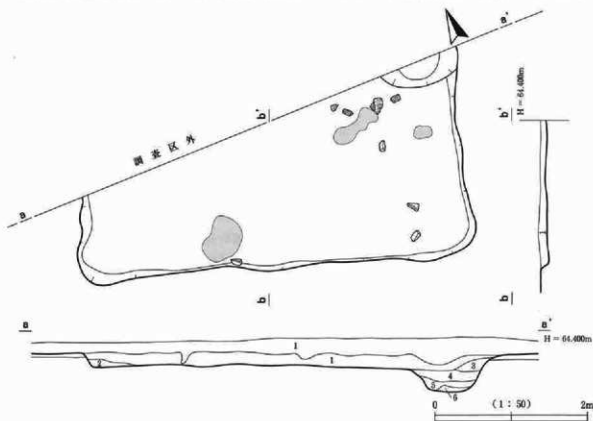


第151図 SI12 出土遺物

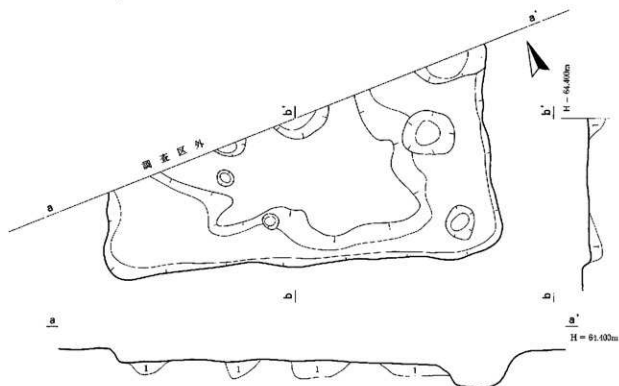
本遺構はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。調査範囲内で確認できた規模は南壁が5.30m、東壁が2.60mであり、平面形は方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた南壁を基準とするとN-19° -Eである。

住居内堆積土は3層に分けた。1～3層は黒褐色粘質土を基調とする。3層は焼土ブロックを多く含んでいたため、カマドに関わる堆積土の可能性もある。後世の削平によって検出面から床面までの深さが浅いが、堆積状況は2・3層がいわゆる三角堆積を呈することから自然堆積と考えている。

住居壁は残存状況が悪いものや急角度に傾斜しながら立ち上がり、検出面から床面までの深さは8～



第152図 SI13 竪穴住居跡



第153図 SI13掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘り	しまり	特徴
S.13	1	黒褐色	10yr2/3	粘質土	中	中	炭化物中、焼土粒少、黄褐色粘質土ブロック少
	2	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや弱	弱	特記なし
	3	黒褐色	10yr3/2	粘質土	中	中	焼土(赤褐色)ブロックを多く含む
	4	黒褐色	10yr3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック(大)を少量、焼土ブロック(大)を含む、(結核に近い)あるいは同じ
	5	暗褐色	10yr3/4	粘質土	やや弱	やや弱	炭化物、赤褐色土ブロック(大+小)を多く含む
	6	黒褐色	10yr3/2	粘質土	中	中	焼土ブロック(小)を多く含む
掘りかた	1	黒褐色	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロック(大)を多く含む

10cmである。床面はほぼ平坦に構築され、黒褐色粘質土を基調とする粘土を部分的に施している。掘りかたは部分的なピット状の掘り込みとして確認している。

ピットは床面上で1基検出した。ピット1は住居跡東壁際に位置する。調査区内ではおよそ1/2の検出であり、全体の規模・形状は不明であるが長軸で1.10m、住居跡床面からの深さは25cmである。堆積土は3層に分けたが、いずれの層も焼土ブロックを含むことから上層の住居内堆積土3層とともにカマドに関する堆積土の可能性もある。本ピットの性格については不明である。また、床面上では焼土及び炭化材を散在した状態で確認している。

遺物は住居内堆積土からの出土が大半を占める。総重量は431gであるが、いずれも小片であるため図化できる遺物はなかった。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細な時期は不明である。 (小針)

#### SI14竪穴住居跡(第154~158図)

A区N30W210グリッドに位置する。調査区内で本住居跡のほとんどを検出したが、カマド類遺物から

し部にかけては調査区外にのびるため、この部分については完備を行っていない。他の遺構との重複関係はなかった。

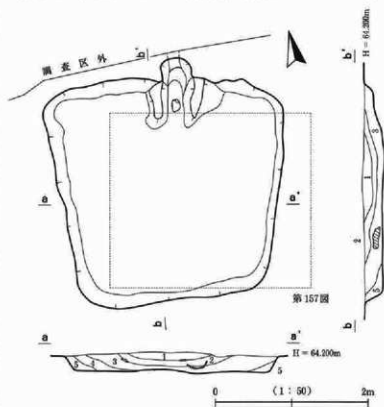
本遺構はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は南北3m、東西2.90mの方形を呈するが、北壁に対して南壁がやや短いため、やや台形に近い。本住居跡の方位は南壁を基準とするとN-6°-Eである。

住居内堆積土は5層に分けた。1・3・5層は黒褐色粘質土、2・4層は暗褐色粘質土をそれぞれ基調とし、1~3層は火山灰粒子を微量ながら均一に含んでいた。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈しており、自然堆積と判断している。付属施設にはカマドがある。

住居壁は急角度に傾斜しながら立ち上がる。検出面から床面までの深さは20~30cmである。床面はほぼ平坦に構築され、全体に黒褐色粘質土を基調とした貼床を施している。堀かたは住居内全体を掘り込むが、中央付近がやや深い。そのため、貼床も壁周辺に比べて中央付近がやや厚くなっている。

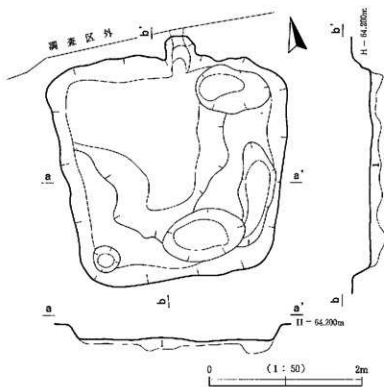
カマドは住居北壁のほぼ中央に位置し、北壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存しておらず、煙道から煙出し部にかけては調査区外にのびるが、両袖、燃焼部、煙道の一部を確認している。両袖間の幅は最大で23cm、残存する長さは東袖が68cm、西袖が63cmである。両袖とも床面から15~18cmの高さが残存している。カマド内堆積土は5層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は褐色粘質土、4層は暗褐色粘質土、5層はふい黄褐色粘質土をそれぞれ基調としている。このうち3層は層の下位が被熱しており、燃焼部の天井崩落土と判断している。

また、5層はV層に起因すると考えており、煙道の天井の一部が崩落したものと考えている。煙道は調査区内で確認した一部ではあるが、トンネル状に切り抜かれた状態で残存していた。確認できた底面は燃焼部から煙道にかけてはほぼ平坦で、煙道でやや急傾斜に落ち込み調査区外にのびる。調査区内での煙道は住居跡北壁から北に38cmのびる。燃焼部では被熱の範囲を確認することができなかったが、底面に15×10cmの礫を検出した。カマド両袖は貼床上に暗褐色粘質土で構築されている。この暗



第154図 SI14 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI14	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	中	焼土粒少
	2	暗褐	10yr6/3	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック少
	3	暗褐	10yr6/2	粘質土	やや弱	やや強	
	4	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色粘質土ブロック少
	5	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや強	特記なし
掘りかた	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	赤褐色ブロック(中)を多く含む



第155図 SI14 掘りかた

や直線的に外傾するが581は体部から口縁部にかけて比較的大きく外反する。581は口縁部ヨコナデ、体部外面は縦位のハケメ、体部内面には斜位・横位のナデを施す。体部から口縁部にかけてはゆるやかに外反し、口縁部はやや肥厚する。また、僅かではあるが口縁端部を上方に突き出している。583は口縁部ヨコナデ、体部外面は横位・斜位のミガキを施す。内面はマメツのため不明である。体部中位に最大径をもち、口縁部はゆるやかに外反する。582・583は須恵器・甕である。584は暗灰色を呈し、外面体部中位以下に縦位のケズリを施す。585は外面タタキ、内面には当て具痕がみられる。586は縄文土器片である。混入と考えている。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡はI期（9世紀後半）に位置づけられる。（小針）

#### SI15竪穴住居跡（第159・160図）

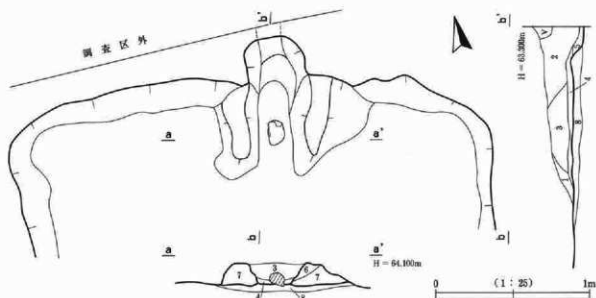
本竪穴住居跡はA区N20W200グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは北壁から東西壁にかけての約1/2であり、この部分についてののみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。SK34・35・39土坑と重複し、新旧関係は本住居跡がSK39より古く、SK34・35土坑よりも新しい。

本遺構はV層上面で暗褐色土の広がりをもって検出している。調査区内で検出できた規模は北壁が2.70mであり、平面形は方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた北壁を基準とするとN-1°-Wである。

住居内堆積土は3層に分けた。1・2層は暗褐色粘質土、3層は黒褐色粘質土を基調としている。このうち2層はV層起因と考えている黄褐色ブロックを多く含んでいた。堆積状況は残存状況が悪いものの2・3層が概ねいわゆる三角堆積を呈することから自然堆積と考えている。

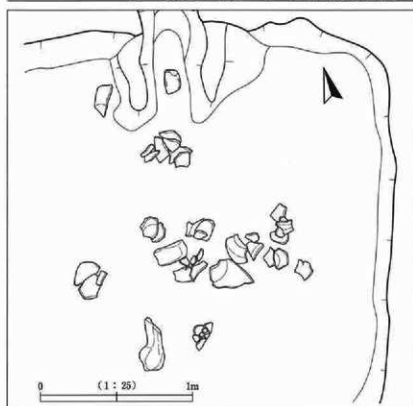
褐色粘質土は被熱の状況によって2層に分けている。

遺物は床面からやや浮いた状態ではあるが、カマド付近と住居跡中央付近から集中して出土した。出土遺物の総重量は6,854g、このうち図化したのは4,277gである。579は土師器杯である。11径に対して底径は大きく、器高が高い。器形は底部から内湾しながらやや急角度で立ち上がる。外面はロクロ調整、内面はミガキ調整で黒色処理を施す。580~583はロクロ使用の土師器甕である。いずれも器高は不明であるが、法量は中・大型の部類といえる。580・581は口縁部ヨコナデ、体部外面はマメツのため明確ではないが縦位のナデ、体部内面は横位のナデを施す。580は体部が膨らみ、口縁部はや



第156図 SI14 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI14カマド	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	焼土粒少、炭化物少 (SI 埋土)
	2	黒褐	10yr3/2	粘質土	やや弱	やや弱	焼土粒少、炭化物少、黄褐色粘質土ブロック少
	3	褐	10yr1/4	粘質土	中	強	下位が磁器し赤灰、磁器灰天井面層
	4	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	焼土ブロック少、炭化物少、(磁器灰堆積か?)
	5	にぶい黄褐	10yr1/3	粘質土	やや弱	やや弱	下層に焼土を含む
	6	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや強	やや強	黄褐ブロックとの混合土、赤変もしくは焼土ブロックをまぜる
	7	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや強	やや強	黄褐ブロックとの混合土
	8	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	砂質っぽい黄褐ブロックがまざる (貼床)



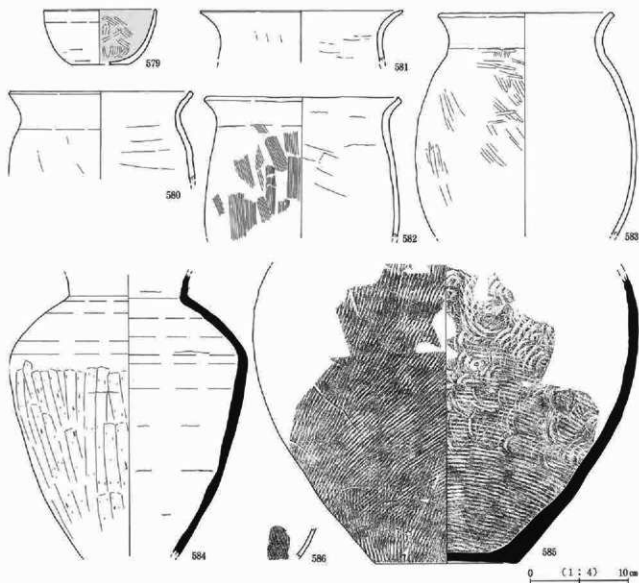
第157図 SI14 遺物出土状況

住居壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がり、検出面から床面までの深さは15~30cmである。床面はほぼ平坦に構築され、ほぼ全体に黒褐色粘質土を基調とした貼床を施す。掘形は住居跡中央を深く掘り込み、住居壁付近を掘り残している。したがって、貼床は住居跡中央が厚く、住居壁際ではほとんど確認できなかった。

本住居跡ではカマド・ピット等の施設を確認することはできなかったが、住居跡中央から北壁にかけて床面で150×80cmの炭化材の範囲を確認している。

遺物は住居内堆積土からの出土がほとんどである。総重量は





第158図 S114 出土遺物

597gであるがいずれも小片であるため固化できなかった。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本堅穴住居跡は平安時代に位置づけられるが、詳細は不明である。(小針)

#### S116 堅穴住居跡 (第161・163・164図)

A区N20W200グリッドに位置する。S117 堅穴住居跡と重複しており、切り合い関係から見ると本住居跡の方が古い。付近には西2mにS114堅穴住居跡、東4mにS118 堅穴住居跡が存在する。

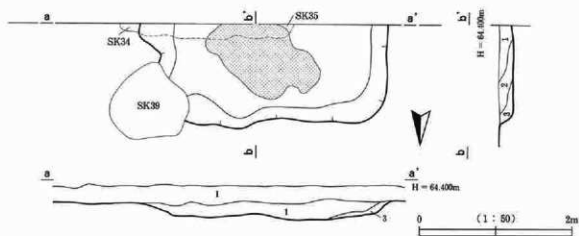
A区中央部付近にはIV層が残存しているため、検出はIV層下位で行っている。平面形は、S117 堅穴住居跡によって北壁と東壁の一部を破壊されているため全容は不明である。現状をみると、南壁と東壁とはほぼ直交しているようであるが、西壁が歪んでおり台形状を呈する。現存する規模は、西壁が0.90m、南壁が1.50m、東壁が0.70mであり、非常に小さい。壁の立ち上がりは傾斜して立ち上がる箇所がほとんどであるが、

オーバーハング状に立ち上がる箇所も認められるなど不明瞭で一定していない。床面の状況は総じて平坦であるものの、細かく見るとゆるやかな凹凸が認められる。明確な貼床も確認できない。カマドなどその他の付属する施設も確認できない。

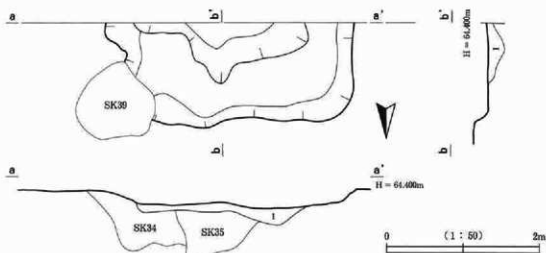
堆積土は3層が確認できる。暗褐色～黒褐色の粘質土が堆積し、いずれの層もSI17 竪穴住居側より流入したと考えられる。

これらの状況を見ると、いわゆる「竪穴状遺構」と呼称すべき遺構であるが、周囲の状況を考えてと竪穴住居跡の範疇にいて捉えておく。したがって、それが住居であるかは特定できない。

遺物は総重量909g、そのうち3点・200gを図化した。



第159図 SI15 竪穴住居跡



第160図 SI15 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI15	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少、炭化物少
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック多
	3	黒褐	10yr3/2	粘質土	やや弱	弱	南北断面3のみ、焼土ブロック中
掘りかた	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロック(中)を少々(小)を多く混ぜる

587はロクロを使用しない撚で、体部以下を欠損している。口縁部は「く」字状に外反するもので、端部が下方にわずかに肥厚する。外面頸部付近には粘土組織が残る。調整は内外面ともマメツが激しいが、ヘラナデ（ヘラケズリ）の痕跡がわずかに残る。588はロクロ調整の撚で、体部中位以下を欠損している。口縁部は頸部よりやや外反し、端部がわずかに上方に引き出される。調整は外面がロクロ調整、内面がマメツのため不明である。589は獣型の土製品である。両端を欠損しているため何を表しているか不明であるが、歯形が遺存している。上下の歯で噛んだようであり、その大きさを小児のものと考えられる。用途・時期ともに不明である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本堅穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細は不明である。(西洋)

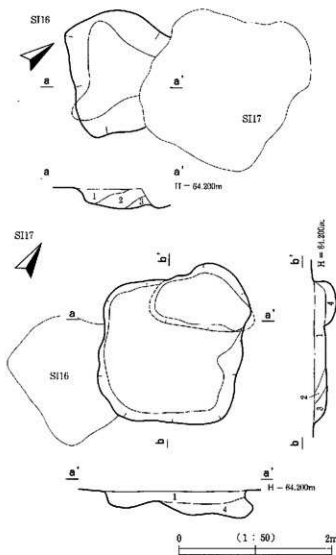
#### SI17堅穴住居跡(第161・165図)

A区N20W200グリッドに位置している。南側をSI16堅穴住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。周囲には、西にSI14堅穴住居跡、東にSI18堅穴住居跡が位置している。

検出はIV層下位であり、黒褐色土の広がりをもって確認している。IV層が残存しているとはいえ、本来の生活面はあくまでもⅢ層相当層であると考えているため、削平を受けていることに違いはない。

平面形は、ほぼ正方形状を呈するが、住居隅については角がつかず、ゆるやかに屈曲している。また、住居北壁に1m30cm×90cmの大きさの楕円形状土坑が付設あるいは重複している。住居跡の大きさは一辺が1.50m～1.70m程度であり、SI16と同様に小さい。

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘着	しまり	特徴
SI16	1	暗褐色	10yr3/4	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、炭化物少
	2	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや弱	やや強	やや強
	3	暗褐色	10yr3/2	粘質土	やや弱	やや弱	やや弱
SI17	1	黒褐色	10yr2/3	粘質土	中	中	線上粒少、黄褐色粘質土ブロック少
	2	暗褐色	10yr3/4	粘質土	中	強	凝土粒中、黄褐色粘質土ブロック中
	3	黒褐色	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少
	4	黒褐色	10yr3/1	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロック(小)を多く含む
SI17あたり	1	暗褐色	10yr3/3	粘質土	やや弱	やや弱	炭化物中、凝土粒少



第161図 SI16・17堅穴住居跡

堆積土は3層が確認でき、暗褐色～黒褐色の粘質土が自然に堆積したと考えられる。

付設あるいは重複する土坑については、断面図を見る限りにおいて、住居跡と付設土坑との堆積土には区別が難しく、あるいは同時に1層が堆積したと考えられる。したがって、この建物跡と土坑は同時期に存在していた可能性が高い。ただし、建物跡の貼床である4層と土坑の堆積土あるいは貼床には重複関係が認められ、後者の方が新しい。この切り合いは床面構築時によるものかもしれない。

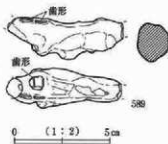
この付設土坑は、長軸線を住居西壁と軸線を合わせて付設している。土坑北側と住居北壁の位置もほぼ対応しており、配置状況を見るとある程度関連があると考えられる。堆積土は1層の下位に5層があり、粘性・しまりともやや弱く、底面とは考えにくい。

掘りかたは、全面にみとめられ、そのうえに10～15cmの厚さで、暗褐色の粘土が貼付されている。中央付近には貼床の下からピットが1基確認されている。45×40cmの楕円形状を呈し、深さは検出面より16cmである。

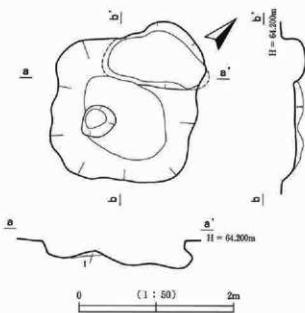
遺物は床面付近に比較的まとまって出土している。その他堆積土中からも含めて731gの土器が出土し、そのうち、4点395gを図化した。

590は土師器杯に分類するが、やや器形が異なる。器高が4cmとやや低いが、体部が大きく開いている。底部付近はやや突き出ている。内面には横位のミガキの後にやや幅広い放射状のミガキが粗雑に入る。また、内面には黒色処理が施されている。591は土師器杯で底部を欠損している。

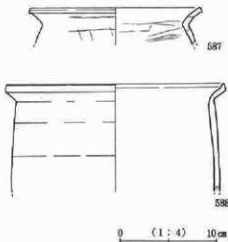
緩やかに外反する体部をもち、端部がやや外に開く。内面には黒色処理が施



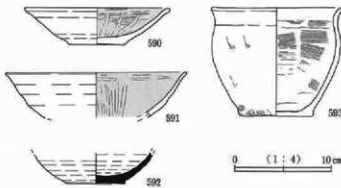
第164図 SI16 出土遺物 (2)



第162図 SI17 掘りかた

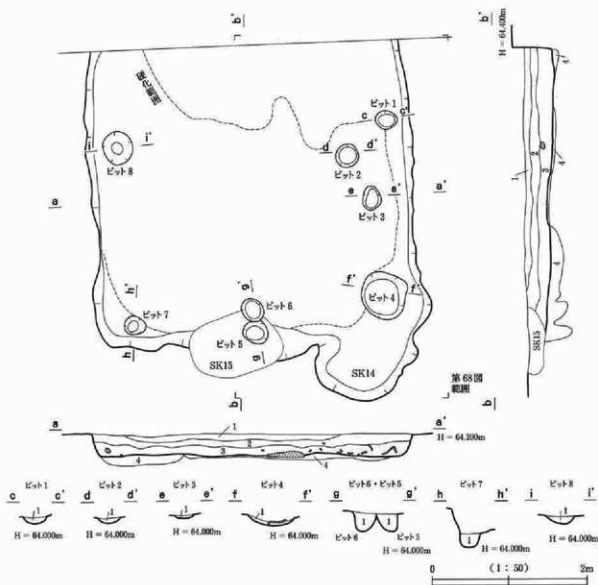


第163図 SI16 出土遺物 (1)



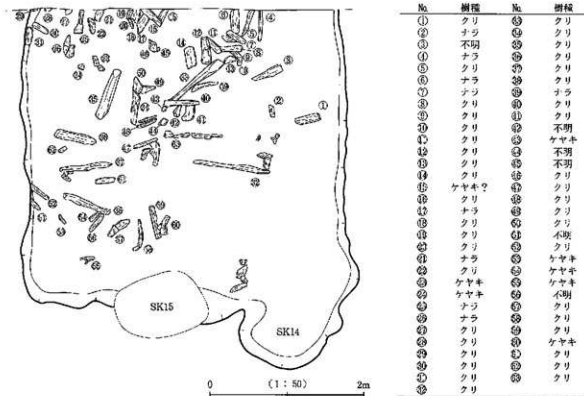
第165図 SI17 出土遺物

され、横位のミガキの後に口縁部付近にまで放射状のミガキが入る。592は須恵器であり、口縁部は欠損しているものの杯類に属する。593は土師器甕であり、ロク口調整を行わない小型品である。口縁部の形状は頸部よりゆるやかに外反するものである。体部中位に最大径をもち、底部に向けてゆるやかに径を減じてい



第166図 S118 竪穴住居跡

遺構名	番番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S118	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中や弱	中	焼土粒少、炭化物少、白色微粒子少(瓶に均一に含む)
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	焼土粒少、炭化物少、黄褐色粘質土ブロック少
	3	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中や強	焼土粒中、焼土ブロック少、炭化物中、炭化材多
pit01	1	暗褐	10yr3/2	粘質土	中や弱	中	黄褐色ブロック多く含む(胎床)
	1	黒褐	10yr3/1	砂質土	中	中	黄褐色ブロックを含む
	1	黒褐	10yr3/1	砂質土	中	中	黄褐色ブロックを含む
	1	黒褐	10yr3/1	砂質土	中	中	黄褐色ブロックを含む、炭化物含む
	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	中や強	中や強	暗褐色・黄褐色ブロックを混合
	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	中や強	中	黄褐色ブロック少量含む
	1	黒褐	10yr3/1	砂質土	中	中	黄褐色ブロックを含む、焼土ブロック炭化物含む
	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	中	褐色砂質ブロックを多く含む
pit08	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	中	褐色砂質ブロックを少量含む



第167図 SI18 出土炭化材

く。調整は山縁部にヨコナデが、体内内外面ともにハケメが施される。

以上、遺構の特徴から本竪穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが、遺物が少なく詳細な時期は不明である。(西澤)

#### SI18竪穴住居跡 (第166～171図)

A区中央部付近、N20W195グリッドに位置する。SK14・15と南壁側で重複しており、SK14を除き本遺構の方が古い。西側4mにSI16・17竪穴住居跡が、東7mにSI20竪穴住居跡が位置している。本遺構の北側は調査区外へ広がっているため完掘していない。付属施設にはピットがあり、カマドは調査区内においては確認されなかった。

検出はⅢ層下位からⅣ層であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。この周辺はA区の中でもっとも標高の高い部分であり、何らかの削平を受けている。

確認された規模は、東壁が約4m、南壁が4.05m、西壁が3.85mである。北壁を調査していないため、平面形は不明であるが、この3辺から推定すると、南北がやや長い長方形を呈すると考えられる。東西吹間は中心で計測すると4.2mであることから4m前後の規模の住居跡が復元できる。主軸方位は、東壁や南壁を基準とすると、N-9°-Eであり、ほぼ北に向いている。

堆積土は3つに大別できる。暗褐色～黒褐色の粘質土が水平に堆積していることから、少なくとも3層は人為堆積の可能性が高い。また、各層中からは焼土ブロックや炭化物が多く混合している。とくに、3層に集中して混合し、土器片も多く含まれている。なお、1層中には灰白色火山灰が粒～ブロック状に含まれている。

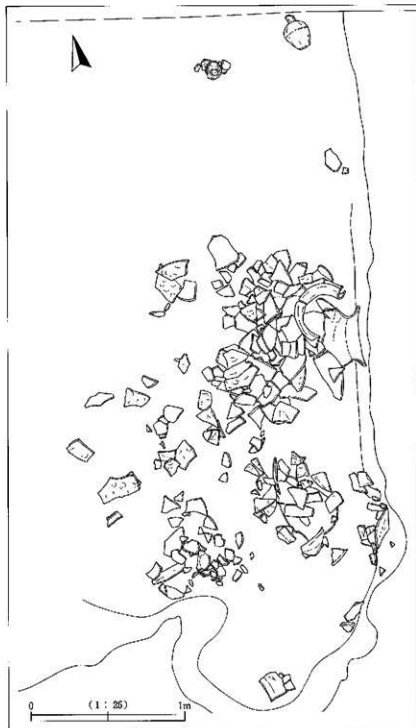
床面には小さな凹凸が多数認められ、中央がやや高くなっている。床面は黄褐色の砂質土であり中央を中心とした範囲は非常に堅く締まっている。これらは2次焼成を受けて、粘質土が硬化した可能性がある。硬化範囲以外は褐色の砂質土であるが、締まりにかけ本来の床面であるかは判断できなかった。壁面の形状はやや傾斜しながらもほぼ垂直に立ち上がっている。床面までの深さは、東壁際で28cm、南壁際で20cm、西壁側で30cmである。床面付近には多数の土器と炭化材が出上している。とくに後者は床面広範囲に広がっている。後述する堆積土の特徴とあわせて本遺構は焼失住居の可能性が高い。

掘りかたは、壁際に沿って溝状の掘り込みが確認できる。床面全体を貼床で覆っているが、中央部付近は薄くなっている。掘りかた底面は褐色の砂質土層である。

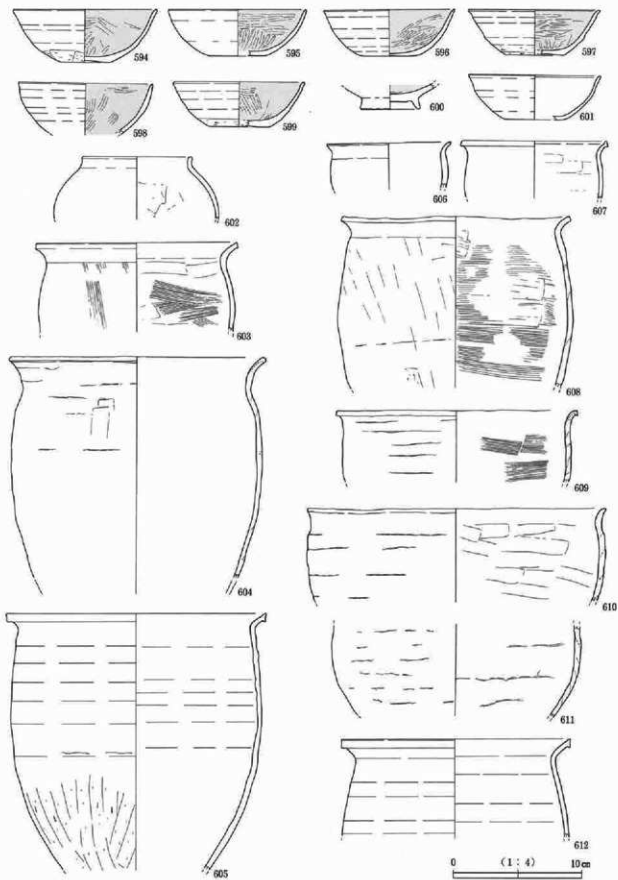
付設される施設として、ピットが8基存在し、その他同時期と考えられる土坑1基が付属する。カマドは調査区内からは確認できなかった。

SK14は別遺構として登録しているが、平面・断面で判断する限り、切り合いが判断できなかった。

黒褐色を基調とする堆積土のため認識できない可能性もあるが、他の建物跡にも類似する例が多かったため、明確に堆積土が区別できないものについては建物跡と同時期に存在していたと判断した。この土坑は本遺構の南東隅に位置し約2m×約80cmの規模であり、平面形は楕円形状を呈する。住居跡の対角線上に上長軸が直交するように付設されている。壁面はややオーバーハング状に抉れている。

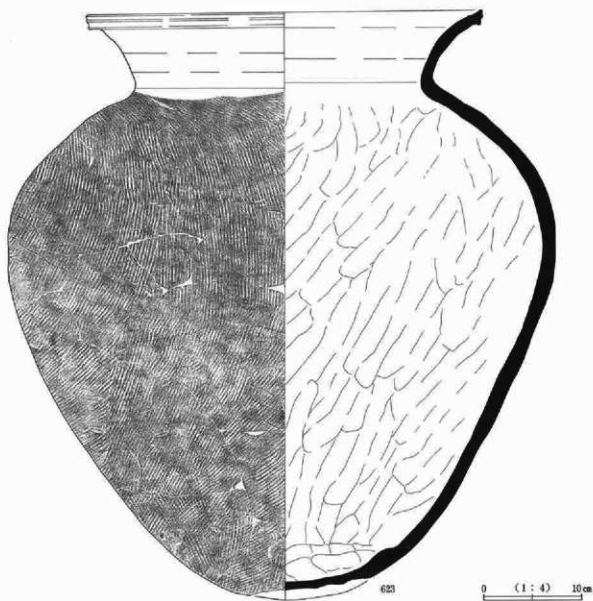
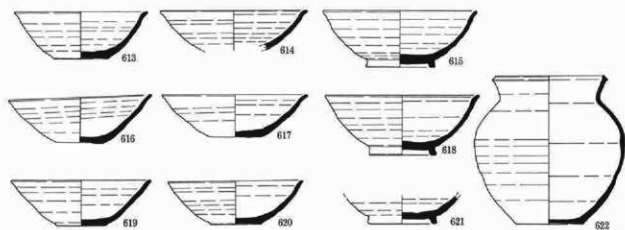


第168図 SI18 遺物出土状況

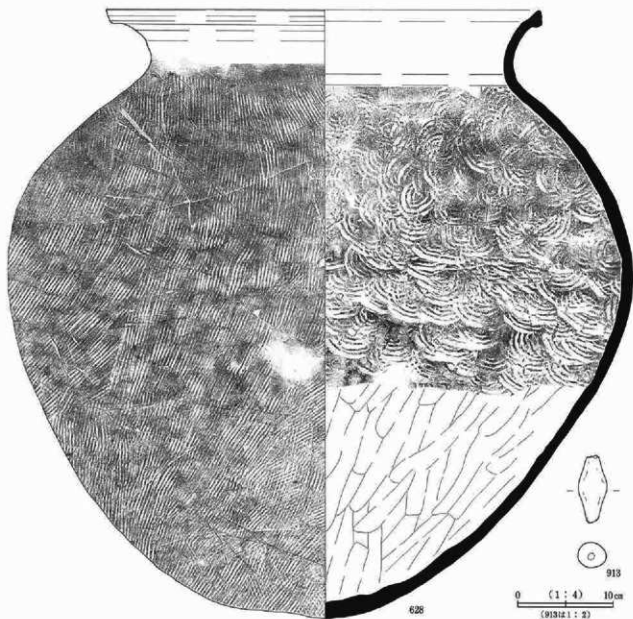
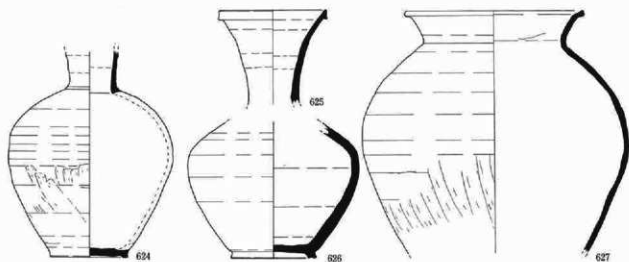


第169圖 S118 出土遺物 (1)





第170圖 S118 出土遺物 (2)



第171圖 S118 出土遺物 (3)

ビット1～3は東壁沿いに北から順に位置している。平面形はいずれも円形に近い楕円形状を呈しており、規模はそれぞれ30×25cm、30×30cm、30×25cmである。深さはいずれも床面から7～10cmと浅い。堆積土も黒褐色の砂質土と同じである。ビット4はビット3の南、付設土坑内に位置し、65×55cmの規模の楕円形状を呈する。深さは床面より11cmであり、黒褐色の砂質土が堆積している。これらビット1～4の上部には大甕が3個体分、うち2個体がほぼ完形である。ビットの断面形はいずれも浅い皿状を呈することからこれらが甕の据え付け穴である可能性が高い。とくにビット4は堆積土中に甕の破片が多量に含まれていたため据え付け穴と判断できる。これがSK14付属土坑内に位置していることはこの土坑の帰属と性格を考える上で非常に興味深い。

ビット5・6は南壁際に位置している。この2基が重複しており、ビット6の方が新しい。いずれも径30cmの円形を呈し、深さは床面から23cmである。ビット7は南西隅に位置し、28×25cmの楕円形状を呈し、深さは18cmである。ビット8は西壁際の北寄りに位置し、45×40cmの楕円形状を呈する。深さは10cmである。これらのビットはいずれも、柱痕跡が確認できず柱穴であるのか判断できない。

遺物は堆積土、床面を問わず多量の土器が出土している。出土状況を見ると、土器とくに須恵器大甕は、東壁沿いから集中して存在する。据え付け穴も確認でき、上方から押しつぶされた出土状況を早していることから、これらの大甕は原位置を保っていると考えられる。炭化材は床面全体に広がっており、樹種を特定できたのは第167図の通りである。あまり残存状態が良好ではなかったため、加工痕は明確に確認できなかったが、角材や丸材が存在することは判断できた。量と材の形状から、住居を構成していた材であると判断できるが、具体的にどの部位かは不明である。出土位置もある程度壁面に対して直交しているようであるが明確ではない。

山土土器の総重量は41,799gであり、そのうち、34点、35,120gを図示した。

594～599・601は土師器杯である。601以外は全て内面に黒色処理が施される。これらの器形をみると、いずれも底部よりゆるやかに内湾するもので片められる。口径も14～15cm前後の間におさまる。調整は外面にロクロナデが施されているが、内面には放射状ミガキと横位のミガキが施される。これらが明瞭に認められるもの(595など)がある一方で、596のようにやや雑なミガキ調整が施されるものもある。底部側縁にヘラケズリによる再調整が施されるものには、594・597・599がある。

600は高台杯の脚部片であり、内面に黒色処理が施される。601は内面に黒色処理を施さない杯で底部の一部が欠損している。体部は内湾気味に立ち上がるが体部上位で軽い屈曲点が認められる。602は短い頸部をもつ短頸甕であり、体部下位を欠損している。内外面ともマメツグが散見し、内面にわずかにヘラナデの痕跡が残る程度である。604～612は土師器甕で、605・612以外はロクロを使用していない。いずれも底部を欠損している。603は体部中位以下を欠損している。口縁部の形状は頸部よりゆるやかに外反するもので、端部にやや強くナデが入る。調整は口縁部にはヨコナデが、内外面にはハケメが施されるが、外面は縦位、内面は横位方向である。一部ヘラナデの痕跡が確認される。604は口径が26.5cmの大形の甕である。口縁部の形状は頸部よりゆるやかに外反する。断面をみると、端部には薄く粘土紐を貼付して整形していることがわかる。調整は磨滅が激しいため観察不能であるが、粘土紐痕が明瞭に残存している。608は口縁部が短く外反する形態を早する甕である。口縁端部にはナデによる面取りが施されている。体部中位に最大径を有し、あまり径を減じないで底部に絞っているようである。調整は口縁部にヨコナデが、内面に横位のハケメが施されるが、外面は磨滅のため、明確に判断できない。609・610・611は、体部に粘土紐痕を明瞭に残す甕である。609は短く外反する口縁部をもち、端部がやや垂下している。外面調整は磨滅のため不明であるが、内

面には横位のハケの痕跡が残る。610も短く外反する口縁部をもつが、その度合いは609よりも弱い。破片であるため口径は不明確であるが、復元すると31cmと大きい。外面には粘土細痕が明瞭に残り、器壁はかなり凹凸がある。内面にはヘラナデの痕跡が残る。611も610とは類似した密であるが砂粒を多く含む胎土であり、あるいは同一個体かもしれない。

605・612はロクロナデが施される甕である。口縁部の形状はともに同様の形態を呈している。調整は内外面ともロクロ調整であるが、605の体部下半には縦位のヘラケズリ痕が残る。

613～617・619～620は須恵器杯である。器形を見ると底部から直線的に開くものが多いが、620のようにやや内湾する体部をもつものもある。調整は内外面ともにロクロ調整であり、胎土も緻密である。615・618・621は須恵器高台杯である。621は脚部破片である。器形は上述の杯に比べ内湾気味であり、身が深いなど区別される。高台は断面が方形であり削り出して成形されている。622は須恵器小型甕である。体部上位～中位にかけて最大径をもち、「く」字状に外反する口縁部をもつ。端部は内側に傾き、断面が三角形を呈する。調整は内外面ともロクロナデであり、焼成は良好堅緻である。623は須恵器大甕である。ほぼ完形に接合された。口径41.5cm、器高62cmの大製品である。口縁部は頸部より強く外反し、端部を厚く肥厚させている。そして、布などで強くナデが施されるため断面が凸状になっている。体部は、上位に最大径を有し、底部に向けて大きく窄まっていく。底部は丸底である。調整は、ロクロナデを基本としているが、体部にはタタキ痕が残る。内面には当て具痕がナデによって消されており、口縁部以下にはその指ナデの痕跡が明瞭にのこる。胎土は緻密であり、焼成は良好堅緻である。

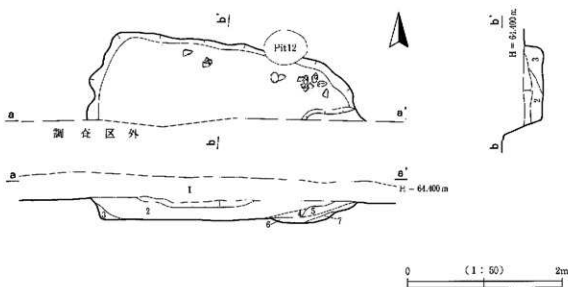
624～627は須恵器長頸甕である。624は口縁部を欠損している。頸部にはリング状の突帯が貼付されている。肩部はあまり張らずにゆるやかに胴部へ移行する。最大径は中位に有し、底部に向けて径を減じる。底部には非常に高い高台が貼付されている。胴部下半にはヘラケズリもしくはヘラナデの痕跡が残る。294・298はおそらく同一個体と思われる長頸甕である。625は口縁部のみの破片である。大きく開く口縁部をもち、端部が折り返される。626は胴部上位以下のみ残存する。この上位付近に最大径を有する。高台は「ハ」字状に開くが短い。625・626は同一個体かもしれないが接合しない。627は須恵器甕であり、底部を欠損している。口縁部は「く」字状に外反し、端部付近でわずかに外に広がる。胴部は中位付近に最大径をもっている。下半には縦位のヘラケズリが施されている。628は須恵器大甕であり、ほぼ完形である。口径は46cm、器高64.5cm、最大径が66cmである大製品である。口縁部はゆるやかに外反するが端部が厚く肥厚している。端部はナデの施され方が623と類似しており、凹凸がある。胴部最大径は上位から中位付近にあり、底部は丸底である。調整は胴部外面にはタタキ痕が、内面上位には背海波文、下位には縦位～斜位のユビナデ痕が残る。胎土は緻密であり、焼成は良好堅緻である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本堅穴住居跡はⅠ期（9世紀後半）に属すると考えられる。（西澤）

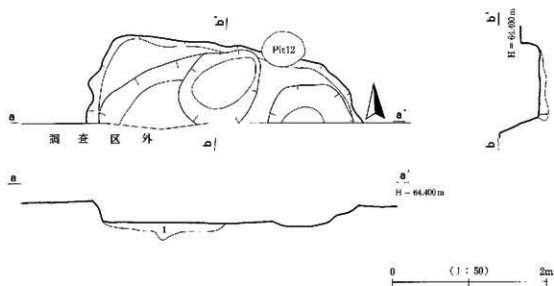
#### S119堅穴住居跡（第172～174図）

A区中央部付近、N20W190グリッドに位置する。北壁に Pit 12 が重複しており、本住居跡の方が古い。検出は、現耕作土であるⅠ層直下であるⅣ層面であり、堆積土黒褐色土の広がりをもって確認した。調査区内には一部しか含まれておらず、大部分が調査区外へ広がっている。したがって、住居跡全てを完掘しておらず、調査は限定されたものとなっている。

規模は、現状で判断する限り、北壁が3 m、西壁が1.20 m、東壁が90 cmである。住居の方位は北壁を基準とすると、N-10° - Eである。



第172図 SI19 竪穴住居跡



第173図 SI19 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI09	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	中	青褐色ブロック中、粘土粒少
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	中	粘土ブロック中、炭化物少
	3	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや弱	中	粘土ブロック少、炭化物少、黄褐色ブロック少
	4	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘質土ブロック中
	5	黄褐	10yr5/6	砂質土	弱	中	石灰質粘質土中(燻・天井崩落)
	6	暗褐	10yr3/4	砂質土	中	やや弱	粘土粒少、炭化物少(使用時破壊)
	7	黒褐	10yr2/2	砂質土	中	やや弱	(燻川粘土)
掘りかた	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック (H) を多く含む

堆積土は3層が確認できるが、建物跡北東隅部分にはカマドがあるため、加えてやや細かな層が4層堆積している。堆積状況から判断すると自然堆積であると考えられる。

床面はほぼ平坦であるが、カマド付近では若干高まっている。床面の深さは検出面から10~28cmである。壁は、西壁側はやや傾斜するものほぼ垂直に立ち上がるが、東壁側では、カマドがあるためか緩やかに傾斜しながら立ち上がる。

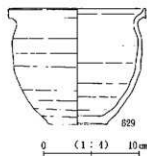
カマドは一部のみ、建物跡北東隅角付近において確認している。大部分が調査区外に位置しているため詳細は不明である。調査区内において確認されたのは左袖の一部と考えられる高まりのみである。現状では幅が20cm、長さが80cmであり、高さは床面より15cmほどである。この高まりを覆う堆積土には焼土、炭化物が多く含まれていた。燃焼部や煙道などその他の痕跡は確認できなかった。

掘りかたは、住居跡の一部のみの調査のため現状では、壁際を溝状に掘り込むものとは異なり、規模の大きな土坑状の掘り込みをいくつかもつものと考えられる。

遺物は床面を中心に出土している。土器の総出土重量1,735g、そのうち1点290gを図化した。

629は小型の甕である。11縁部は端部を上下に肥厚させるもので、面が形成されている。調整はロクロナデのみである。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竈穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細は不明である。(西澤)



第174図 SI19 出土遺物

#### SI20竈穴住居跡(第175~179図)

A区東側、N20W180グリッドに位置する。北壁にPit 273・274と、南壁にSK16と、煙道部分にPit275と重複しており、いずれの部分に置いても本遺構の方が古い。東側にSI21竈穴住居跡が、南西側にSI19竈穴住居跡が存在する。本住居跡にはカマドが付設される。

検出はIV層であり、堆積土黒褐色上の広がりによって確認された。この面は直上のI層により削平されているため、IV層でも下位に近いと考えられる。

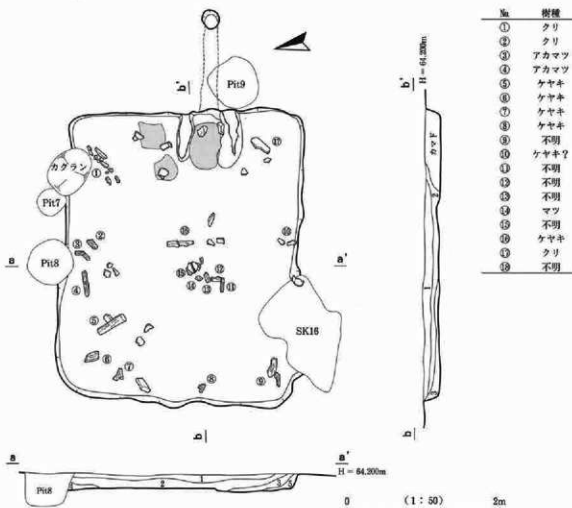
確認された規模は、東壁2.90m、西壁3.00m、北壁3.50m、南壁3.65mであり、南北と東西の壁の長さがほぼ等しい。したがって、平面形は南北壁がやや長く、東西方向にやや長く、角が丸い長方形を呈している。主軸方位はカマドの付設される東壁を基準に考えるとN-16°-Dである。

床面はほぼ平坦につくられており、全体に黒褐色の粘土が貼られている。現存する壁高は確認面から各壁際まで約20cmであり、壁はやや傾斜しているものの垂直に立ち上がっている。

堆積土は5層が確認でき、黒褐色(1・2・5層)と暗褐色(3・4層)の粘質土が自然に堆積している。南や西からの流れ込みが多いためか、南西部側の堆積土の数が多し。各層とも焼土ブロックと炭化物を多く含んでおり、炭化材の出土も多く確認できることからあるいは焼失住居の可能性もあるかもしれない。

掘りかたをみると、全体的に深く掘り込んでいるが、壁際の周囲には溝状にさらに深い。したがって、床面中央部が島状に残存しているような状況になっている。この掘りかたの上に、黒褐色の強い粘性をもち、地山ブロックを多く含む粘土が充填され床となっている。壁の周囲は掘りかたに対応して厚くなっている。

カマドは建物跡東壁のやや南よりの部分に位置している。上部の大半が削平を受けており、下部のみの検

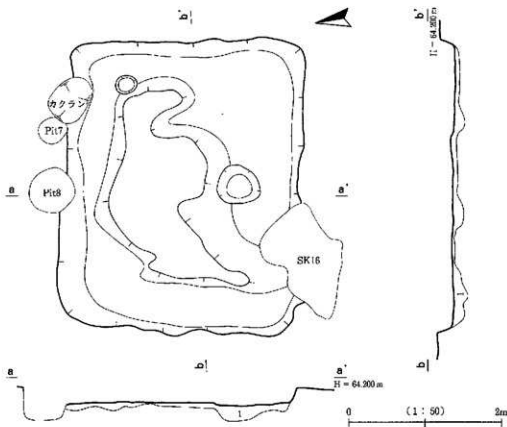


第175図 SI20 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI20	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック中、炭化物少、浅黄色砂質土ブロック中
	2	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、焼土粒少、炭化物少
	3	暗褐	10yr3/4	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、焼土ブロック多、炭化材、粗砂少
	4	暗褐	10yr3/4	砂質土	弱	やや弱	1cm程度の黄褐色粘質土ブロック少(砂質層の層に比べ強い)
	5	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	焼土粒少、炭化物少

出となるが、周囲と比較して残存状態は良好である。カマド軸の方位は住居主軸方位とほぼ同じである。壁に対してほぼ直交していることが窺える。

カマド両袖間の幅は最大で80cm、長さは壁より両袖とも55cm、高さは床面より最大で21cmである。袖は黒褐色と褐色の粘質土で構成されており、内側が被熱を受けて赤変している。両袖間の堆積土は5層に分かれる、暗褐色～黒褐色系の粘質土である。そのうち3層のみは明黄褐色の砂質土であり、カマド本体天井部の崩落と考えられる。したがって、これより上層は崩落後の堆積土であり、住居堆積土と共通する質である。下層は本来のカマドの堆積土と考えられる。5層は赤褐色を呈する焼土層であり、ここが燃焼部であろう。この燃焼部と考えられる範囲は両袖内に62×40cmの規模で楕円形に広がっている。また、袖間、燃焼部の上には支脚と考えられる直径15cm程度の各礫が2個並列しておかれている。



第176図 S120 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しより	特徴
S120掘りかた	1	黒褐	10y:2/1	粘質土	やや粘	やや硬	黒褐 ブロック(少・大)を多くまざる

煙道は東壁より1.30m外側にほぼ直線的に延びる。IV層を切り抜いて構築されている。煙道の一部は Pit 275 や崩落によって破壊されている。先端に25×23cmの楕円形のピットが付設され、燃出しとしている。煙道の深さは地階で確認面より22cm、先端の煙出しピット底面で47cmあり、住居側から煙出しに向かって傾斜している。堆積土は4層が確認できる。黒褐色～暗褐色系の堆積土が堆積しており、一部煙道上部の前壊土も含まれている。6層と8層の境界は崩落のため観察できなかった。カマド本体側からの流入が主体となっている。煙道の断面形は下部が広く上部が狭いやや歪な楕円形状を呈する。

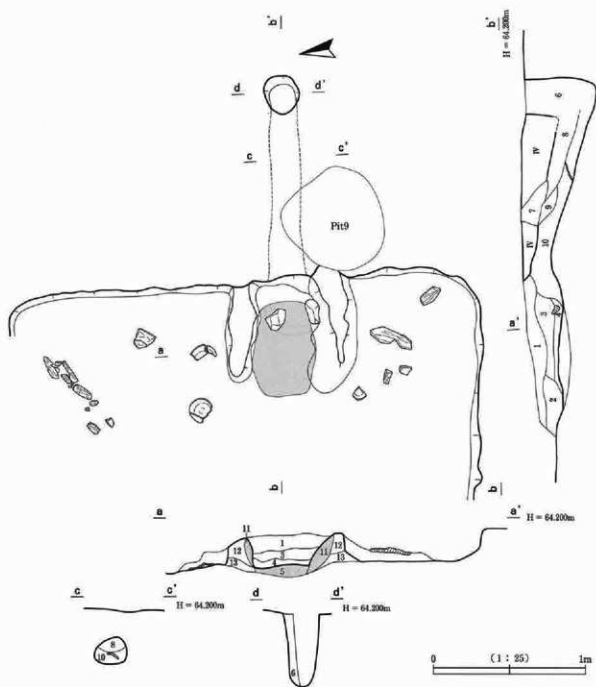
そのほか、同時期の可能性が高い施設としてSK16がある。断面をみると同質の層が堆積しており明確な判断をもって分層できなかった。同時期に存在していた可能性があるが、ここでは断面観察の結果を重視して重複と捉え、SK16が新しいと判断している。

遺物はカマド周辺など比較的まとまって出土している。土器のほか、炭化材も比較的多く認められた。判明した炭化材の樹種は第175図の通りである。

出土土器の総重量は4,489gであり、そのうち10点・1,103gを図示した。

630～634は杯であり、そのうち630～632は内面に黒色処理が施される。630は直線的に開く体部をもつ。内面には細かな放射状と横位のミガキが施される。631は緩やかに立ち上がる体部をもち、端部がわずかに外反する。内面には放射状と横位のミガキが施されるが、粗雑である。632は体部上位を欠損しており、詳

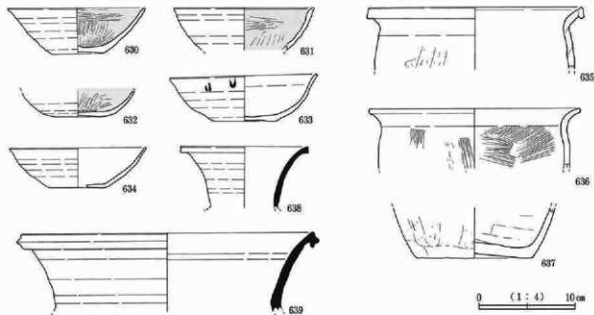




第177図 Si20 カマダ

細は不明である。633～634は内面に黒色処理が施されない杯である。いずれも体部より緩やかに立ち上がる形態をもつ。調整は内外面ともロクロ調整のみである。635～637は土師器であり、636のみ調整にロクロを使用しない。635の口縁部は頸部より外反するもので端部が厚く肥厚し、やや下方に垂下している。体部上位には縦位のヘラケズリの痕跡が残る。636は調整にロクロを使用しないもので、やや強く外反する口縁部をもつ。口縁部はヨコナデ、内外面ともハケメ調整が施される。637はロクロ調整製の底部のみの破片で

遺構名	順番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
20カマド	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒少、炭化物少、黄褐色粘質土ブロック少（住居壇土）
	2	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	弱	焼土ブロック少、炭化材少、黒褐色粘質土ブロック少（砂含む）
	3	明黄褐	10yr6/6	砂質土	やや弱	強	焼土ブロック多・砂質土軟弱と考えている、黒褐色粘質土ブロック少（焼焼部天井部露土）
	4	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや強	中	焼土粒少、炭化物少（炭化時堆積）
	5	赤褐	2.5yr4/6	粘質土	やや強	中	上層に固くしまった部分がある、炭化物を少量含む（焼焼部焼土）かなり厚い
	6	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少
	7	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロック（大）に粒子状を下部に多く含む（煙道天井崩落後の埋土）
	8	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色粒子を中程度含む（煙道壇土）
	9	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色ブロック（大）を含む、被熱部分が段違いのこる（天井崩落土）
	10	暗褐	7.5yr3/3	粘質土	中	やや弱	黄褐色ブロック（中）を含む、煙土粒子も（煙道埋土）
	11	明赤褐	5yr3/2	粘質土	中	中	普通の焼土ブロックを多く含む（ソドもしくはカマド埋土）
	12	黒褐	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロックとの混合土（ソド構成土）
	13	褐	10yr4/6	砂質土	やや強	やや強	内側赤変、黄褐色ブロックを少量含む（ソド構成土）



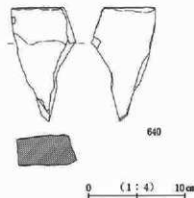
第178図 S120 出土遺物（1）

ある。内面にヘラナデが、外面には縦位のヘラケズリ痕が残る。638～639は須恵器であり、前者が長頸瓶、後者が壺である。638は頸部より大きく開き、端部を肥厚させている。頸部以下を欠損しており、詳細は不明である。639は大壺の頸部より上位の破片である。口縁部は厚く垂下しており、上下端に強くナデが施されている。したがって、口縁端部中位が稜状に突き出る。口径が30cmであり、大形の壺に属するであろう。640は砥石片である。欠損が多いが片面にスリ面が残存する。

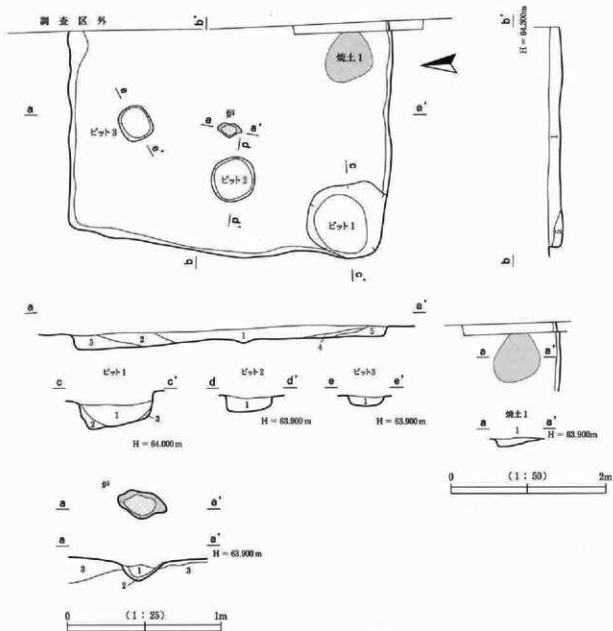
以上、遺構の特徴及び出土遺物から本壘穴住居跡は1期（9世紀後半）に位置づけられると考えられる。（西澤）

#### S121 壘穴住居跡（第180～182図）

A区西側、N20W170 グリッドに位置する。SB01 掘立柱建物跡と住居跡南西部で重複し、本遺構の方が新しい。また、東

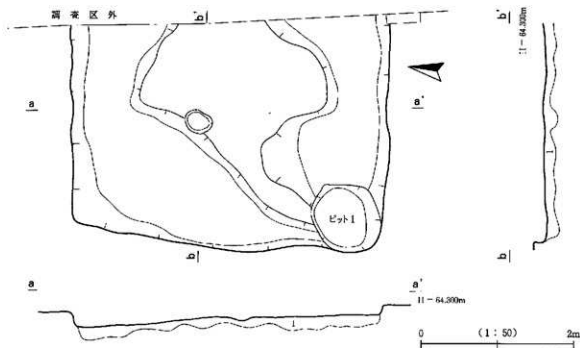


第179図 S120 出土遺物（2）



第180図 SI21 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI21	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	焼土ブロック少、炭化物少、暗褐色粘土質ブロック少
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	黄褐色粘土質ブロック少、焼土粒少
	3	褐	10yr4/6	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘土質ブロック少
	4	黒褐	10yr2/3	砂質土	やや弱	やや強	焼土ブロック中、黒褐色粘質土ブロック少
	5	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	弱	
g	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	炭化物を多く含み、織造跡方も含んでいる
	2	赤褐	2.5yr4/6	粘質土	やや弱	強	赤皮部分
焼土1	1	暗赤褐	2.5yr3/4	粘質土	弱	弱	暗褐色土ブロックを少量含む
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色ブロック、焼土粒を含む
ピット1	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	弱	中	黄褐色ブロックを多く含む
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	弱	中	
ピット2	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	焼土粒を少量含む
ピット3	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	中	黄褐色ブロックを多く含む



第181図 SI21 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI21掘りかた	1	黒褐色	10yr3/1	粘質土	やや強	やや強	炭燭ブロック内を多く含む

壁と調査区の境界付近には現代の耕作によると思われるカクランにより破壊されている。東側5mにSI22 竪穴住居跡が、西5mにSI23 竪穴住居跡が存在する。付属する施設として、ピットが3基床面に、炉が1基、焼土が1カ所東壁に残存している。住居跡北側は調査区外であるため未検出であり、したがって完掘していない。

検出はIV層であるが、この層の直上にはIII層があり削平されていると考えられる。そのため本来の掘り込み面がIV層であるかは判断できない。

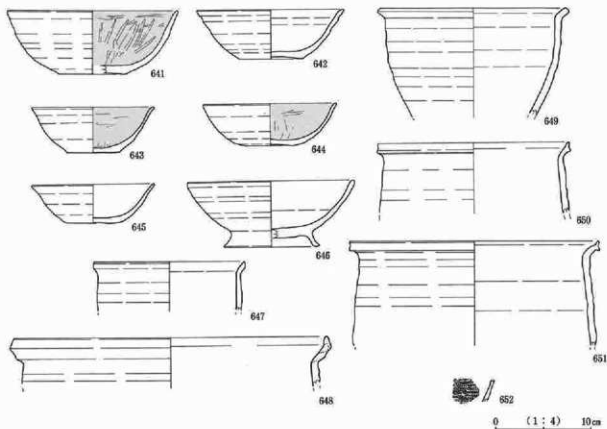
規模は、南壁が4m、西壁・東壁が現状でそれぞれ、2.50m、3mである。平面形は完掘していないため全容は不明であるが、現状で見る限り、東西の辺が異なる長さの台形状を呈していると考えられる。隅角部分は明瞭には屈曲せずある程度の丸みを帯びている。主軸方位は東壁を基準にするとN-2° Eである。

床面は中央部付近で若干高まるがほぼ平坦に構築されている。全面にやや硬化しており、黄褐色のブロックの混合した黒褐色粘土が広がっており、粘床と判断している。床面までの深さは、確認面からそれぞれ西壁側で19cm、南壁側で17cm、東壁側で13cmである。現状ではほぼ垂直に立ち上がっている。

堆積土は3層が確認できる。黒褐色系の粘質土であり、全体的に締まりにかける。堆積状況をもると自然堆積と考えられる。

掘りかたは床面全面をやや深く掘り込んでいるが、とくに壁の周囲を溝状に掘り込んでいるのが目立つ。したがって、粘床もこの壁の周囲部分に比較的厚く施されている。

カマドは明確には確認できなかったが、北東部分に現状で70×60cm、深さが9cmの楕円形状範囲に焼土が広がっており、これが燃焼部の可能性がある。したがって、カマドは削平されているか破壊されていると考



第182図 SI21 出土遺物

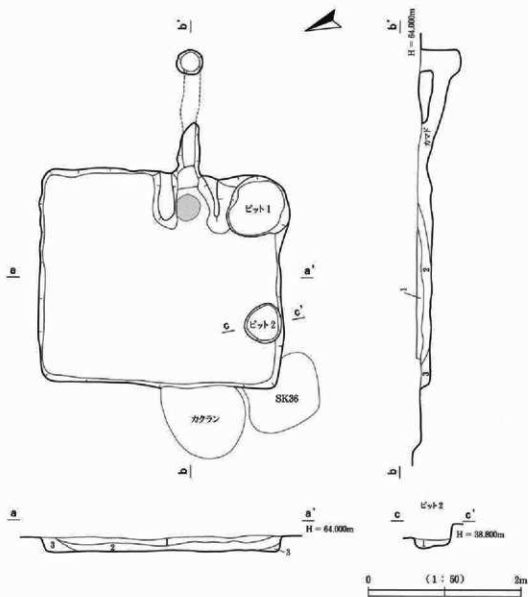
えられ、また少なくとも1カ所は東壁にカマドが付設していたと考えられる。北側の調査区外に存在する可能性も考えられる。

他の施設としてピットが3基、炉と考えられる焼土が1基確認される。ピット1は床面中央部よりやや南に位置し、55×60cmの楕円形状を呈する。床面からの深さは19cmであり、黒褐色の粘質土が1層堆積している。ピット2はピット1の北西に位置し、45×40cmの楕円形状を呈する。床面からの深さは13cmであり、黒褐色の粘質土が堆積している。ピット3は南東隅に位置し、1×1m程の円形を呈する。深さは床面より30cmであり、3つの層の堆積が確認できる。黒褐色(1層)と暗褐色(2・3層)の粘質土であり、自然に堆積していると考えられる。

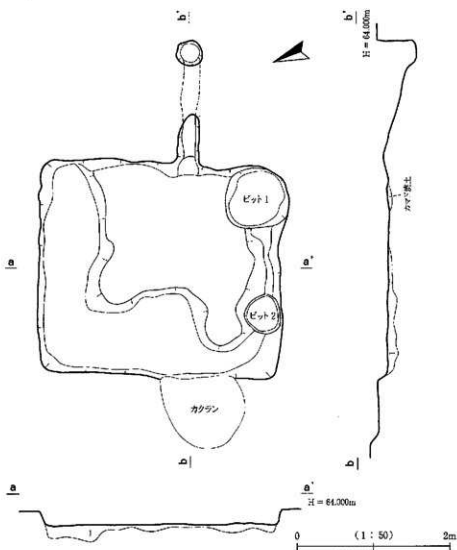
炉は床面中央部に位置する。住居跡完掘時点においては確認できなかったが、貼床を除去した段階で検出した。このため、貼床の下位に存在していた可能性もあるが、断面を観察するとこの部分だけ住居堆積土を掘り残していたと思われる。したがって、本来は床面に備わっていた炉であると考えられる。32×17cmの楕円形状を呈し、深さは床面より10cm程度と浅く小さい規模である。浅い窪みの周囲に焼土がまわることからなんらかの焼成を行っていると考えられるため炉と判断している。炉内の堆積土は2つの層が確認でき、上位に黒褐色の粘質土、下位に赤褐色の砂質土が堆積している。この下位層はあるいは使用面かもしれない。1層は堅く締まり、炭化物、鍛造剥片・粒状滓なども含まれていた。したがって、鉄生産関連の炉(鍛冶炉)であると考えられる(第三章を参照)。

遺物は土器を中心に出土しており、総重量3,986 g、そのうち12点、1,093 gを図化した。

641～645は杯であり、このうち641・643・644には内面に黒色処理が施される。641は口径が18cm、器高が6.5cmであり、通常の形態の杯よりも一回り大きい。体部の形状も内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや外側に開いている。底部側縁にはやや強くナデが施されているため、底部がやや突き出る。内面にはミガキが施されるが、粗雑である。643は内湾する体部をもち、口縁部がわずかに外反する。口径が13cmであり小さい。644は緩やかに立ち上がる体部をもち、内面にはミガキが施されているが磨減が激しい。645は内面に黒色処理が施されない。底部からゆるやかに立ち上がる体部をもち、646は高台杯であり、底部の一部が欠損している。大きく開く体部をもち、口縁部がやや内湾している。高台は大きく「ハ」字状に開く。内外面ともロクロ調整が施され、内面には黒色処理が施されない。647～651はいずれもロクロ調整の甕である。底部を欠損するもののみであり、形状は不明である。口縁部の形態をみると650と651は類似するが、それ以外は多様である。647は緩やかに外反する口縁部であり、端部がやや厚く形成される。648は頸部より外反し、



第183図 S122 竅穴住居跡



第184図 S122 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	上性	粘性	しさり	特徴
S122	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	やや強	中	黄褐色粘質土ブロック少、炭化物少
	2	黒褐	10yr2/3	粘質土	やや弱	中	黄褐色粘質土ブロック中、炭化物少、L1よりしさり強い
	3	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	
S122掘りかた	1	褐灰	10yr</td> <td>粘質土</td> <td>やや強</td> <td>やや強</td> <td>黄褐ブロック、黒褐ブロックを多く混合する。</td>	粘質土	やや強	やや強	黄褐ブロック、黒褐ブロックを多く混合する。
	2	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	やや強	黄褐ブロック(中)を少し中量含む

端部に向けて内湾する。口縁部の断面は三角形状を呈する。649は短く外反する口縁部をもち、端部に面が形成される。650・651は外反する口縁部をもち、端部が上下に肥厚している。強くナデが施されるため端面が窪んでいる。652は縄文土器の破片であるが、混入と考えられる。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡は1期(9世紀後半)に位置づけられる。(西澤)

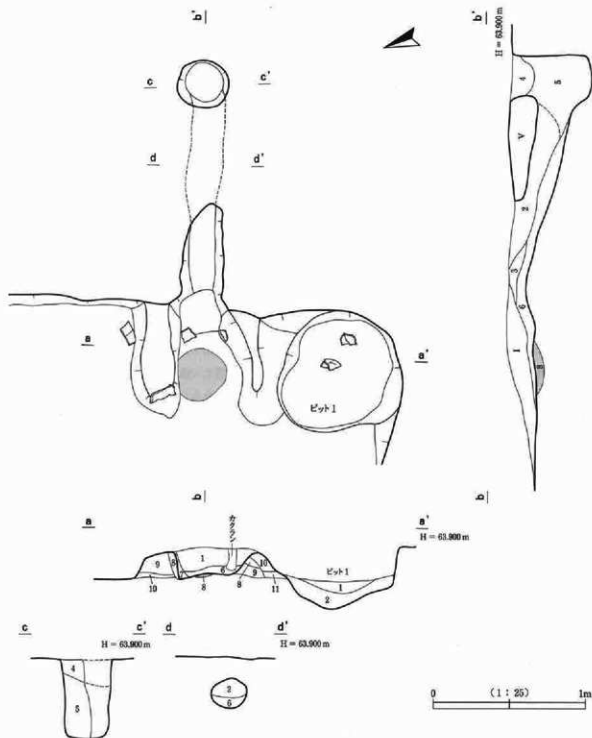
#### S122竪穴住居跡(第183~186)

A区西端、N20W160グリッドに位置する。SK37と住居跡北西隅角で重複し、本住居跡の方が新しい。

また西壁の一部が現代のカクランにより破壊されている。カクランの深さが浅かったため壁の下位は残存している。北側30cmのところにはSI23 堅穴住居跡が位置する。本住居跡にはカマド、ビット2基が付設されている。

検出はIV層下位で、黒褐色堆積土の広がりをもって確認した。

規模は東壁が3.10m、南壁が2.65m、西壁が3.05m、北壁が2.75mであり、おおよそ方形を基調としている。



第185図 SI22 カマド



遺構名	層番号	色調	記号	上性	粘性	しまり	特徴
竪カマド	1	黒褐色	10yr2/3	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少、焼土粒少、灰少
	2	黒褐色	10yr2/3	砂質土	やや弱	やや弱	
	3	黒褐色	10yr3/3	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック多（煙道天井原産）
	4	黒褐色	10yr2/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少
	5	黒褐色	10yr2/2	粘質土	中	中	
	6	黒褐色	10yr4/4	砂質土	やや弱	中	焼土粒中（使用肉）
	7	黒褐色	5yr2/3	粘質土	中	やや強	同じ層土ブロックを多量を含む
	8	赤褐色	2.5yr3/4	粘質土	やや弱	やや強	焼土
	9	褐色	10yr3/3	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロック（中～大）を多く含む
	10	ぶい貴褐色	10yr4/3	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを多く含む
	11	黒褐色	10yr3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロック（大）を含む
ビット1	1		10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色粒、炭化物を含む
	2		10yr3/1	粘質土	中	やや弱	炭化物を多く含む

る。隅角部分は丸みを帯びているものの比較的直角に曲がっている。住居の主軸方位はカマドが付設される東壁を基準に考えると、N-22° - Eである。

床面はほぼ平坦に構築されており、全体的に褐灰色粘土と黄褐色ブロックの混合土を貼って床としている。したがって、堆積土よりもやや堅く締まっている。床面までの深さは、確認面より15～20cmであり、壁は比較的垂直に立ち上がっている。底面積は約8.4㎡である。

堆積土は3つの層に大別できる。いずれも黒褐色を呈する粘質土であり、IV層を起源とするであろうブロックを含んでいる。断面の状況を判断する限り、自然に堆積したと考えられる。

掘りかたは、全体的に掘り込まれているが、とくに四隅の壁沿いに溝状に深く掘り込まれている。中央部分もある程度掘り込みが行われているが浅い。

カマドは東壁やや南よりに設置されている。上半は削平されており、下部のみの検出となる。袖、燃焼部、煙道、煙出しビットが付属している。

カマドの方位は住居の軸とほぼ同じであることから1辺に対して直交して付設されている。左右両袖間の幅は最大で98cm、長さは右袖が70cm、左袖が75cm残存している。右袖は4層が確認でき、黒褐色系の粘質土で構成されている。左袖も4層が確認でき、暗褐色、黄褐色土の粘質土で構成されている。左右の袖で構成土が異なり、構築方法が他とは異なるか、補修が行われているかもしれない。両袖間の堆積土は2層が確認できる。いずれも黒褐色の砂質土である。下位には赤褐色の焼土層があり、この上面が燃焼面（使用面）であると考えられる。燃焼部の範囲は、両袖内に32×35cmの楕円形状に広がっている。

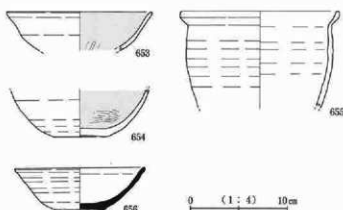
煙道は東壁より東に1.55mの長さでほぼ直線に延びている。住居際から55cmの範囲では煙道上部が崩落しているが、基本的にはV層を切り抜いて煙道としている。先端に33×34cmの規模の煙出しビットが付設されている。煙道の深さは住居壁際で確認面より12cm、先端の煙出しビット部分で52cmである。したがって、住居壁際より、先端に向けて強く傾斜している。煙道部の堆積土は5つの層が確認できる。黒褐色粘質土と褐色砂質土に大別でき、後者は最下位に堆積している。煙出しビット部分は2層に分層でき、いずれも黒褐色粘質土が堆積している。断面を観察すると、これらの箇所にはカマド本体側と煙出しビットからと二方向から堆積土が流入していると考えられる。煙道の断面形はやや扁平な円形を呈する。

その他の施設としてビットが2基床面上に確認できる。ビット1は住居跡南東隅、カマドに隣接して構築されている。規模・平面形は43×40cmの楕円形を呈し、深さは床面から19cmである。堆積土は2層に区分でき、いずれも黒褐色の粘質土が堆積している。炭化物が含まれることやその位置から考えると貯蔵ビットである可能性が高い。

ビット2はビット1から約1m南側、住居南壁に接して構築されている。平面形・規模は50×48cmの楕円形状を呈する。深さは床面より13cmであり、焼土ブロックが少量含まれる黒褐色粘質土が堆積している。

出土遺物は、土器が中心に出土し、総重量1,381g、そのうち4点、586gの土器を図示した。

653～655は杯形土器であり、653・654は土師器であり、内面に黒色処理が施される。655は須恵器である。653は内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部に強くナデが施されるため端部がやや外反する。調整は内面にミガキの痕跡が確認できる。654は口縁部を欠損するが、内湾気味に立ち上がる体部をもつと思われる。内面には黒色処理が施され、ミガキの痕跡が残る。655は大きく開く体部をもち、口縁端部がやや外反する。胎土は緻密であり、焼成は良好堅緻である。656はロクロ調整の甕であり、底部を欠損している。口縁部の形態は、頸部より短く外反し、いったん角度を変えて内湾する。



第186図 SI22 出土遺物

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡は1期（9世紀後半）に位置づけられる。

（西澤）

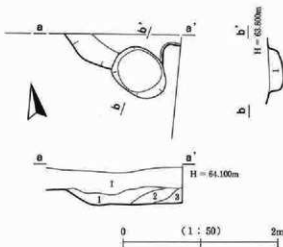
#### SI23竪穴住居跡（第187・188図）

A区西端、N20W165グリッドに位置する。付近には、南50cmの場所にSI22竪穴住居跡が位置している。本遺構は大部分が調査区外に位置するため完測しておらず、したがって、詳細は不明の部分が多い。ビットが1基付設される。

住居方位は調査した範囲が少なく判断できない。検出はV層であり、黒褐色の広がりをもって確認している。現状でも規模は、南壁が1.50m、西壁が0.80mであり、おそらく住居南東コーナー部分であると予想される。堆積土は3層に区分できる。いずれも黒褐色の粘質土であり、2・3層は焼土ブロックが多量に含まれている。これらは、あまりにも狭小の範囲の調査であるため断定できないが、カマドの軸あるいは袖間の堆積土である可能性が高い。この付近には糞類の出土が多く認められた。調査を行った範囲では床面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。床面までの深さは、確認面より20cmである。掘りかたは断ち割りを行っていないため確認していない。

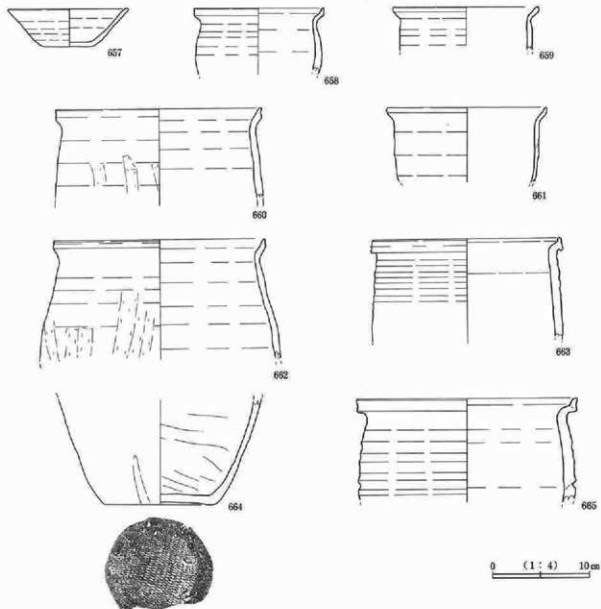
ビット1は建物跡南東隅に構築されている。75×55cmの楕円形状を呈し、深さは床面より10cmである。黒褐色の粘質土が1層堆積している。カマドが東壁側に設置されていると予想されることから、このビットは貯蔵ビットである可能性が高い。

遺物は土器が中心であり、カマドと考えられる東壁周辺の出土が多い。総重量1,812g出土し、その



第187図 SI23 竪穴住居跡

遺構名	順番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI23	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや強	焼土ブロック多
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック(少)、焼土ブロック(大)を含む
	3	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒子、黄褐色粒子含む

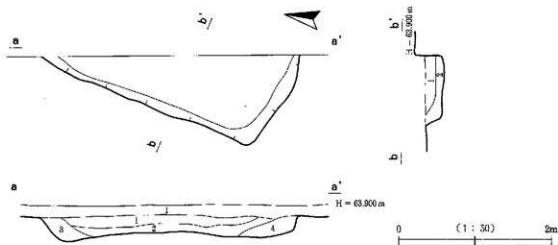


第186図 SI23 出土遺物

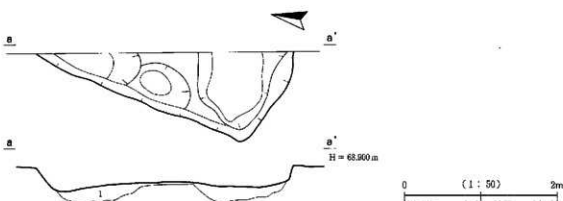
うち9点、1.451gを図化した。

657は内面に黒色処理が施されない杯である。口径は小さいが直線的に開く体部をもつ。調整は内外面ともロクロ調整のみである。色調は橙色を呈する。

658～665は壺形土器であり、いずれもロクロ調整である。658・659は口径が14cm前後の小型品に属する。658は胴部が脹らみ、中位付近に最大径をもつ。口縁部は外反し、端部を肥厚させるものである。659は直線的な胴部をもち、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。661は口径が16.6cmとやや大きいのが全体的には小



第189図 SI24 整穴住居跡



第190図 SI24 掘りかた

産物名	層番号	色調	記号	土質	粘付	しまり	特徴
SI24	1	明褐色	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、白色微粒少(かなり粗)に含まれる、粘上粒少、炭化物少
	2	黒褐色	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少、焼土ブロック少、炭化物少
	3	黒褐色	10yr2/2	粘質土	小	弱	黄褐色粘質土ブロック少
	4	黒褐色	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック中、焼土ブロック少、黒色粘質土ブロック少
SI24掘りかた	1	明黄褐色	10yr7/6	粘質土	中	強	黒褐色粘質土ブロック中

製品に属する。II線部は端部がわずかに内湾する。胴部は直線的に伸びる。660・662は口縁部は短く外反し、端部をわずかに肥厚させるもので、端部の外側には強いナデが施されるためわずかに窪む。胴部の形状はいずれも中位付近より脹らみはじめるものである。664は底部破片である。磨滅のため調整は不明である。底面中央には網代痕が残る。663は直線的な胴部をもつ。口縁部の形状は短く外反し、端部が上下に肥厚するもので、端部外側には2箇所のみナデが施される。体部には細の狭いロクロナデが施されている。665は頸部より外反し、上方に鋭く屈曲するII線部をもつ。体部はわずかに脹らんでいる。底部は欠損のため不明である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本整穴住居跡はI期(9世紀後半)に位置づけられる。

(西澤)

### SI24竪穴住居跡 (第189~191図)

C区南部、N170E 0グリッドに位置する。付近には南側に Pit 378、西側に Pit 354、北側に Pit 357 などが位置している。調査区域に位置しているため、建物跡南西部のみの調査となり、大部分は調査区外に広がっている。そのため、本遺構は完照しておらず、詳細は不明である。

検出は、V層面であるが、C区はその直上が現代耕作土である1層であるため、検出したV層自体も削平を受けていると予想される。現状での規模は、西壁が2.90m、南壁が1.40mであり、いずれも一部のみのため規模全体の予想もつかない。また、平面形も南西隅角部分をみると、方形基調であることに違いないであろう。住居方位は、西壁を基準とすると、N-15° - Wに向いている。

堆積土は4層に区分できる。いずれも黒褐色の粘質土であるが、締まり程度や混合物の違いで区別される。1層には灰白色火山灰の粒子が含まれているのが特徴である。堆積状況を考えると自然堆積の可能性が高い。

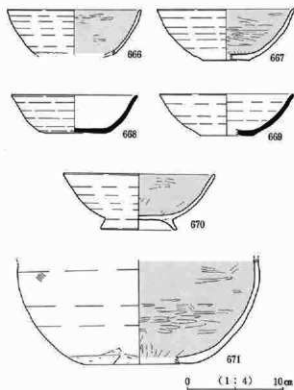
床面は中央部が若干高く、壁際に低くなっているが、その高低差は5cmほどであり平坦に近いと言える。床面のほぼ全面には、締まり、粘性とも強い黒褐色と黄褐色の混合土が広がっており、床面としている。床面の深さは、検出面から23~30cmであり、壁は垂直に近い傾斜で立ち上がっている。ただし、西壁側の一部はやや緩やかな傾斜で立ち上がる部分もある。

掘りかたは、床面全体を掘り込んでいるものの、中央部が浅く、周囲が深くなっている。全体の一部のみの調査のため詳細は不明であるが、この点を考慮すると、他の建物跡と同様に、壁際に溝状に掘り込んでいるのかもしれない。この場合、ここではそれが全周しないことになる。

カマドの施設は調査区内では確認していない。

遺物は堆積土中から土器が出土している。総重量1,912、そのうち6点、539gを図示した。

666~669は杯であり、666・667は土師器、668・669は須恵器である。前者は緩やかな体部をもつ。666は底部を欠損しているが、667は底部側縁に強いナデが施されてやや窪んでいる。いずれも内面に黒色処理、ミガキが施されている。668はやや広めの底部からほぼ直線的に立ち上がる体部をもつ。669は667と同様底部側縁がやや窪む体部をもつ。670は土師器高台杯である。「ハ」字状に開く短い高台がつく。杯部は緩やかに立ち上がる体部をもち、内面に黒色処理が施される。671は体部上位を欠損しているため、器種は不明であるが、残存部の形状から鉢形土器と考えられる。調整はロクロを基本としているが、外面にはハケメの痕跡が若干残る。底部側縁にはヘラケズリが施されている。内面には、黒色処理、横位のミガキが施されている。



第191図 SI24 出土遺物

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡はI期(9世紀後半)に位置づけられる。(西澤)

### SI25 竪穴住居跡(第192~195図)

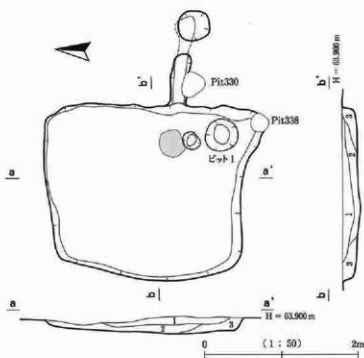
C区南部、N190E 0グリッドに位置する。北側4mにSI26 竪穴住居跡が位置する。煙道の一部にPit 330と、南東隅角にPit 338と重複しており、いずれも本遺構の方が古い。カマド、ピットが付属している。

検出はV層であり、黒褐色土の広がりをもって確認した。

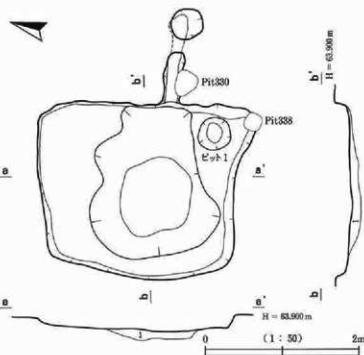
確認された規模は、東壁が約2.80m、南壁が約1.80m、西壁が2.30m、北壁が1.90mであり、北・南壁がやや短く、東西の長さも不揃いである。したがって、平面形はやや重なる台形状を呈している。隅角部分の角度も不揃いであるが、直角に曲がるものではなく、丸みを帯びながら屈曲する。主軸方位は、カマドの付設される東壁を基準とすると、 $N-3^{\circ}-W$ であり、ほぼ北に向いている。

堆積土は3つの層が確認できる。いずれも暗褐色~黒褐色を呈する粘質土であり、自然堆積と考えられる。全体的に締まりにかけ、V層起源と考えられる黄褐色ブロックを含んでいる。

床面は、中央部にむけて非常に緩やかに傾斜している。現状での壁高は、確認面から東壁が16cm、南壁が18cm、西壁が15cm、北壁が8cmであり、北側がやや多く削平されている。壁の立ち上がりは、垂直に近いものやや傾斜

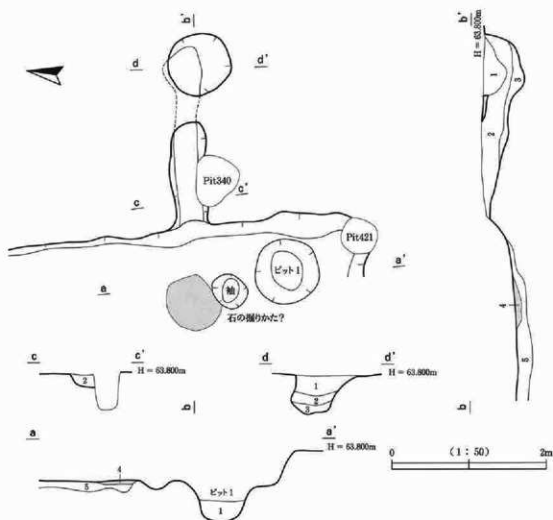


第192図 SI26 竪穴住居跡



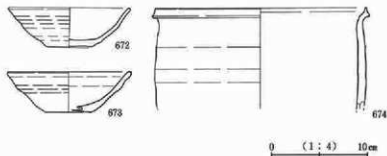
第193図 SI25 掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI25	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、機土粒少、炭化物少
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少(1よりやや少)
	3	黒褐	10yr2/3	粘質土	やや弱	やや弱	(1よりしまる)
SI25掘りかた	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	強	黄褐粘質土ブロック(陥床)



第194図 SI25 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI25カマド	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、焼土粒少、炭化物少
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少、焼土ブロック少
	3	褐	10yr4/4	粘質土	中	中	暗褐色粘質土ブロック少
	4	明赤褐色	2.5yr5/8	粘質土	中	やや弱	焼土
	5	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	やや強	住居 貼土
pit01	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐粘質土ブロック少



第195図 SI25 出土遺物

して立ち上がっている。

掘りかたは、他の住居跡とは異なり中央部のみに掘り込みが行われている。したがって、粘床と考えられる、黒褐色と黄褐色土の混合土は厚さ10cmほどで床面中央部分のみに施されている。

カマドは住居東壁の中央やや南よりの位置に付設されており、東壁とほぼ直交する。袖は確認できず、煙道、煙出しピット、燃焼部を確認している。

袖は両方とも確認できないが、床面に24×20cm、深さ5cm程の楕円形状の掘り込みが穿たれており、燃焼部の位置を考慮すると礎が存在していた掘りかたであると思われる。したがって、このカマドは少なくとも礎を芯材とするか、石組みの袖で構成されていた予想される。廃絶以降のいずれかの時期に礎が除去されたため、袖が残存していなかったと考えられる。燃焼部と考えられる焼土はこの掘りかたの北側に31×39cmの規模で楕円形状に広がっている。カマド本体の位置もこれからおおよその推定ができる。焼土の厚さは5cm程度であり、粘床を掘り込んでいるため、焼土上面つまり使用面は床面とほぼ同一の高さとなっている。

煙道は、東壁より東へ1.23m延び、先端に直径40cmの円形のピットが付設され、煙出しとしている。一部 Pit 359 によって破壊されている。壁際の深さは確認面より5cm、煙出しピット側で確認面より25cmであり、煙出しに向かって緩やかに傾斜している。煙道上部は壁際より65cmの部分まで崩落しているが、一部トンネル状に残存しているため、本来はV層を割り抜いて煙道が構築されていたと考えられる。

煙道の堆積土は3層が確認でき、褐色、暗褐色、黒褐色の粘質土が堆積している。堆積状況からは、初期には住居側から流入するもの(2・3層)が主体となること、その後煙出しピット部分が埋まっていく状況が読みとれる。煙道断面のV層(地山)の厚さは3cm程度であり、このことから本遺構は大部分が削平されていることがわかる。

その他の施設としてピットが1基確認される。床面南東隅に位置するもので、42×40cmの楕円形状を呈している。深さは床面より24cmである。黒褐色の粘質土が堆積している。カマドとの位置関係から貯蔵ピットと考えられる。

遺物は土器が総重量1,094g出土している。そのうち、3点・287gの土器を図示している。

672～673は杯であり、内面に黒色処理が施されない。両者とも緩やかに内湾する体部をもち、底部側縁に強いナデによる窪みを有する。口縁目も比較的細かい調整が施されている。674は土師器甕であり、体部下半以下を欠損している。口縁部の形状は頸部より短く開き、端部が上方へ引き出されている。断面の形状は三角形を呈している。体部内外面とも口縁調整が施される。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡はⅡ期(9世紀末～10世紀前葉)に位置づけられる。

(小針・西澤)

#### SI26 竪穴住居跡(第196～203区)

C区中央部、N200E0グリッドに位置する。北8mにSI33 竪穴住居跡、南5mにSI25 竪穴住居跡が位置する。また、下層にはSI26B住居跡が存在する。本遺構の東西は調査区外へ広がっているため、完掘しておらず、規模等の詳細も不明であるが、内容についてはある程度判明している。本住居跡にはカマド、ピット、礎土が付属する。

検出はV層で行っているが、直上はI層であるためその多くが削平されており、したがって、本来の掘り込み面がこの層に相当するかは判断できない。また、本遺構が存在する範囲は調査前にはある1区画の山面であり、周囲の山面と高低差があり、一段低くなっていた。そのため、周囲の遺構と同様にV層の検出であ



るが10cmほど他よりも検出面が低くなっている。

確認された規模は、北壁が5.25m、西壁が1.20m、南壁が5.50mであり、南北壁間の長さは7mである。北西で1カ所確認される隅角部分やほぼ平行する南北壁などから考えると正方形や長方形などの方形を基調とする平面形が推定できよう。つまり、ほぼ7m四方の方形を基調とする住居跡に復元できる。床面の深さは確認面より20cm前後である。主軸方位はどの壁も完備していないため正確には不明であるが、仮に北壁と直交する線を主軸方位と捉えたとN 4° Wとなる。

床面は、ほぼ平坦であるが、南壁付近ではゆるやかな凹凸がある。また、黄褐色粘質土の高まりが北東部に認められ、均質な土質であったため本来のものと判断したが、あるいは堆積土もしくは貼床の一部かもしれない。調査時点では、中央部分に黒褐色の広がり（下層住居跡のプラン）が確認されているが、これは掘りすぎのためである。断面図の堆積状況からみると、基本的には床面全体に貼床が施されていると判断している。壁の形状は、浅いため正確ではないが、現状ではほぼ垂直に近く立ち上がっている。

堆積土は、2層に区分できる。中央部分には1層が深くまで及んでおり、削平を多く受けていることが判断できる。1層は黒褐色の粘質土、2層は黄褐色の粘質土であり、壁の崩落であろう。削平されているためほとんどが1層で占められており、自然か人為堆積かは判断できない。

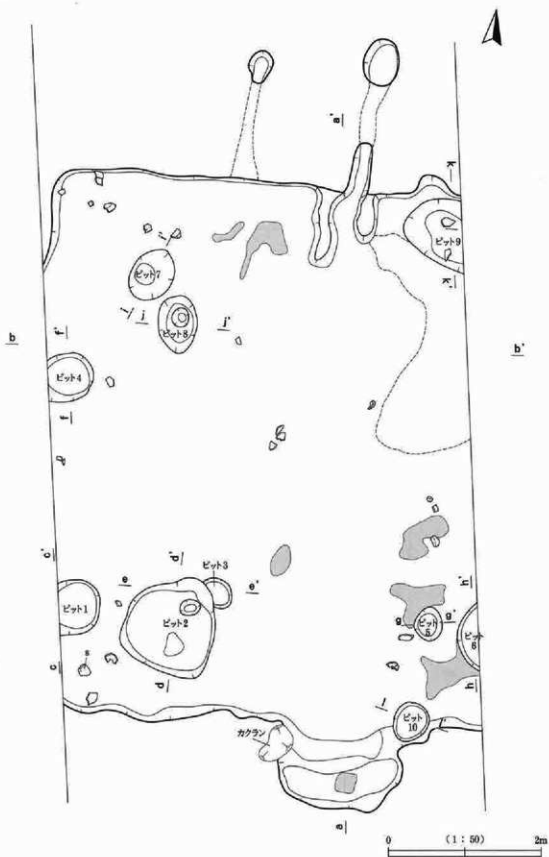
掘りかたは、壁際に沿って周囲を溝状に大きく掘り込むことを基本にしており、それに加えて土坑状の掘り込みがいくつか認められる。中央の下層住居跡の上部にも掘り込みが行われていると思われるが、貼床除去と同時に下層住居跡の調査を行っているため図がきかなかった。断面から判断すると、下層建物跡の上部は人為で埋め戻すことを基本にして、床面の調整を行っているが、いくつかは土坑状の掘り込みもやっているようである。その後黄褐色と黒褐色の混合土である貼床を全面に施して床面を構築している。

カマドは2基とも北壁に設置されている。袖（カマド本体）の残存状態から新期の2時期のものだと判断している。新期カマドは北壁のやや東よりに設置されている。上部の大半が削平されており、下部のみの検出となる。袖、堂焼部、煙道、煙出しピットから構成されている。カマドの方位は北壁とほぼ直交するもの、やや東側に傾いている。

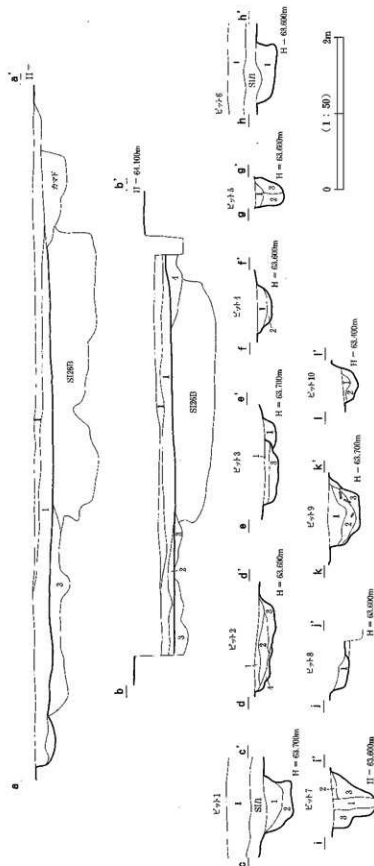
確認された両袖間の幅は最大で80cm、長さは右袖が70cm、左袖が1.05mである。高さは床面から12cmである。袖は黒褐色系の粘質土で構成される。芯材等は確認できない。両袖間の堆積土は3層が確認できる。1層は褐色系の粘質土であり、やや強く締まっていることから、天井部の崩落土である可能性が高い。3・6層は暗赤褐色土を呈しており、焼土を多く含んでいる。最終的な使用面の可能性がある。6層は黒褐色粘質土であり、下層に古い使用面と考えられる築土層（7層）が存在する。範囲は65×25cmの規模で細長い楕円形状を呈し、両袖間内に広がっている。築土層の厚さは3cmほどで貼床である10層を掘り込んでいる。

煙道は北壁より北へ2.15m延び、先端に60×45cmの楕円形状を呈するピットが付設され、煙出しとしている。また、北壁より70cmほどは天井部が崩落しているが、それより北側については、V層をトンネル状に切り抜いた部分が残存している。深さは、壁際で確認面より15cm、煙出しピットの底面では50cmであり、先端に向かって緩やかに下がりながら傾斜している。堆積土は4層が確認できる。褐色～黒褐色を呈する粘質土であり、建物跡側と煙出しピット側の2方向からの流入が認められ、そのうち前者が主体となっている。煙道の断面形は、直径20cmの円形を呈するものが基本であろう。

旧期カマドも北壁に設置されるが、ほぼ中央部分に設置されている。方位は新期カマドとほぼ同方向であり、北壁とは10° 斜行している。カマド本体はおそらく造り替えによって残存しておらず、煙道、煙出しピットのみの検出となる。新期カマドとの間に焼土が広がっているが、あるいは旧期に伴うかも判れない。煙道

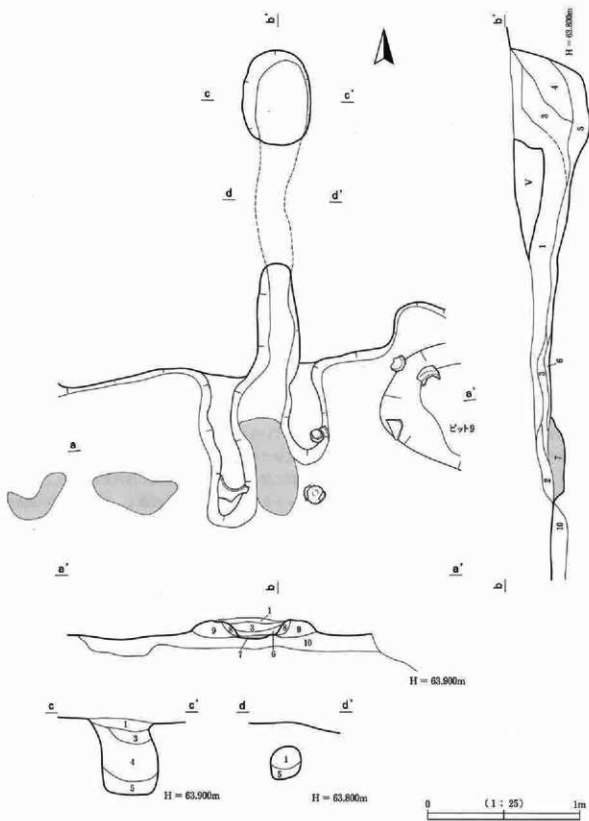


第196図 S126 竪穴住居跡



第197図 S126 竪穴住居跡断面図

遺構名	断面番号	色澤	記号	土性	粘性	しまり	特徴
S126	1	黒褐色	10y7/3	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	2	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	3	黒褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
pit00	1	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	2	黒褐色	10y7/2/4	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	3	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
pit01	1	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	2	黒褐色	10y7/2/3	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	3	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
pit02	1	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	2	黒褐色	10y7/2/3	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	3	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
pit00	1	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	2	黒褐色	10y7/2/3	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	3	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
pit04	1	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	2	黒褐色	10y7/2/3	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少
	3	明黄褐色	10y7/6	粘質土	中	中	灰褐色粘質土ブロック中、灰土粒少



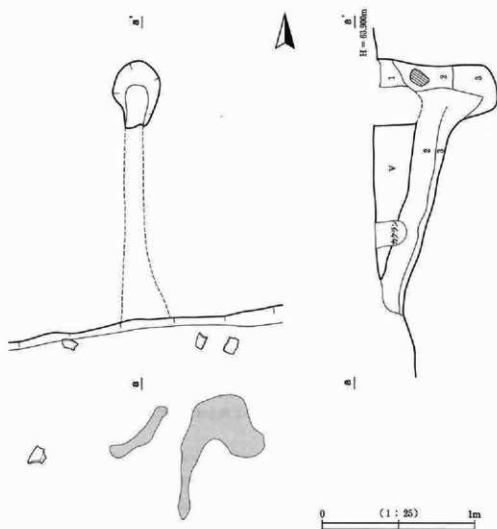
第198図 SI26 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土質	粘性	しまり	特徴
SI26カマド	1	黒灰	10yr4/1	粘質土	やや強	中	黄褐ブロック粒を多く含む、焼上粒、炭化物も含む
	2	黒灰	10yr3/1	粘質土	中	やや強	焼土ブロックを少量含む
	3	黒灰	10yr2/3	粘質土	中	中	焼土ブロック(小)を含む
	4	黒灰	10yr3/2	粘質土	やや強	中	黄褐ブロック(中)を含む
	5	黒灰	10yr2/3	粘質土	やや強	中	黄褐ブロック(少)、焼上粒少、炭化物少
	6	黒灰	10yr2/2	粘質土	やや強	やや強	炭化物を含んでいる
	7	明赤褐	2.5yr5/8	粘質土	やや弱	強	(赤変はげしい)
	8	暗赤褐	2.5yr3/6	粘質土	中	中	(焼土より赤変が弱い) 暗褐粘質土ブロック中含む
	9	暗緑	10yr3/4	粘質土	中	やや強	カマド軸、黄褐粘質土中、強土ブロック中
	10	黒質	10yr3/2	粘質土	中	やや強	住居跡床、黄褐色ブロックとの混合上。(住居跡床)

の長さは壁際より1.70mであり、先端に40×30cmの楕円形状を呈するピットが付設され、燻出しとしている。V層をトンネル状に削り抜いて構築され、深さは、壁際で確認面から18cm、煙出しピットの底面で75cmであり、先端に向けて急傾斜で下がっている。堆積土は3層が確認できる。いずれも褐色～黒褐色を呈する粘質土であり、2層には投げ込みと思われる直径10～20cmの円礫が含まれていた。

そのほか付属する施設として、ピットが10基、土坑が1基確認できる。ピット1は床面の南西に位置し、西側の一部が調査区外へ広がっている。現状では70×55cmの半楕円形状を呈する。深さは床面より35cmであり、2層の堆積土が確認できる。ピット2はピット1の東に位置し、ピット3と重複しており、ピット2の方が新しい。規模は1.20m×1.30mの台形状を呈す大型の土坑状の掘り込みである。深さは床面から20cmであり、4層の堆積土が確認できる。黒褐色の粘質土を基本に堆積しているが、4層がにぶい黄褐色を呈し、床面の一部が崩落し流入したと考えられる。底面はやや凹凸が認められ、37×20cmのピット状の掘り込みと、30×25cmの大きさの焼土が確認できる。これらから何らかの焼成を伴った施設であると推定できるが、詳細は不明である。ピット3はピット2と重複している。ピット2より古いため、全体の規模は不明であるが、直径45cm程度の楕円形状を呈すると予想される。深さは15cmである。ピット4はピット1の北側2.5mに位置し、西側の一部が調査区外へ広がっているため、完掘していない。現状での規模は65×60cmであり、深さは床面より20cmである。堆積土は黒褐色の粘質土2層に区分できる。ピット5は床面南東部分に位置し、ピット6・10が付近に存在する。また、焼土がいくつか周辺に認められる。45×40cmの楕円形状を呈し、深さは床面より37cmである。堆積土は3層に区分できる。ピット6はピット5の東に位置し、東側の一部が調査区外へ広がっているため完掘していない。現状での規模は88×28cmの半円形を呈する。深さは、床面から27cmであり、焼土ブロックを多く含む黒褐色の粘質土が堆積している。ピット7は、床面北西部に位置し、近接してピット8が位置している。75×55cmの楕円形状を呈し、深さは55cmである。断面を観察すると、柱痕跡が確認され柱穴であると判断できる。ピット8は、75×52cmの楕円形状を呈し、深さは12cmである。底面には直径20cmの円形の窪みが認められ、あるいは柱痕跡かもしれない。ピット9は、床面北東隅に位置し、東側の一部が調査区外へ広がっている。現状での規模は95×75cmの半楕円形状を呈する。深さは床面より45cmである。堆積土は、3層が確認でき、黒褐色系の粘質土が堆積している。各層には焼土粒子や炭化物を多く含み、とくに2・3層からは多量の須恵器・甕破片を包含している。新期カマドとの位置関係も合わせて考えると、これに伴う貯蔵ピットであろう。ピット10は、ピット5の南に位置し、直径50cmの円形を呈する。深さは床面より20cmであり、黒褐色の粘質土2層が堆積している。

土坑?は、建物跡南壁に付設されている。重複とも考えられるが、平・断面からでは明確に区別することが出来なかった。本遺跡においてはこのような状況がいくつも認められたことから、偶然に重複と捉えるより、平・断面の観察結果を重視して、同時期に存在していたと判断している。規模は、長軸が1.64m、短軸が67cmであり、半楕円形状を呈している。長軸は南壁とほぼ対応しており、南壁に平行して付設されている。深さは確認面より25cmであり、建物跡床面よりは若干高い。また底面中央部には25cm×25cmの規模で焼土が



第199図 SI26 旧カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI26旧カマド	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中		
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	黄褐ブツ、煙土粒少
	3	褐	10yr4/4	粘質土	やや弱	弱	黄褐ブ中、煙土粒少、粗砂多

広がっている。

このほか床面にはとくに南東部には焼土のひろがり4カ所確認できる。明確な掘り込みは認められないが、ある程度縮まっており、原位置を保っていると考えている。

遺物はSI26下も含めて総重量50,570gが出土しており、そのうち96点・9,810.07gを図化した。

676~690は内面に黒色処理が施される杯、695~704は内面に黒色処理が施されない杯、705~708が須恵器杯である。

675は内外面ともに黒色処理が施される杯である。緩やかに立ち上がる体部をもち、大きく開く口縁部をもつ。口縁部にはやや強いナデが施されている。調整は内外面ともにミガキであり、外面には横位の、内面には放射状と横位の方向に施される。底部はやや丸みを帯びている。内面に黒色処理が施される、いわゆる

土師器杯はいずれも緩やかに立ち上がる体部をもつものと内湾気味に立ち上がる体部をもの2者に分けられる。後者には685・688などがあり、前者にはそれ以外が含まれる。そのうち689～691についてはI線部等が欠損しているため分類は不明である。底部側縁にヘラケズリによる再調整が施される例が確認できる(681・685)が、多くが外面調整はロクロ調整のみである。磨滅のため観察不能のものがふくまれるものの、いずれも内面には見込み付近の放射状ミガキと体部内面の横位方向のミガキ調整が施される。調整単位は比較的細かい。底部調整は全て糸切りのみである。また、底部側縁に強いナデが施される例は認められない。

691は杯体部破片であるが、体部に墨痕が遺存している。695～704は内面に黒色処理が施されない杯である。696・699はやや直線的な、702はやや内湾気味な体部であるが、いずれも緩やかに立ち上がる範囲に含まれるであろう。調整は内外面ともにロクロ調整のみである。また、702は体部側縁に強いナデが加えられている。

705～708は須恵器杯であり、708以外はいずれも底部を欠損しており図上復元ができない。体部の形状は緩やかに立ち上がるもののみであるが、形状の個体差がやや大きい。調整は内外面ともにロクロ調整のみであるが、ロクロ目が細かいものが多い。底部切り離しは全て糸切りである。

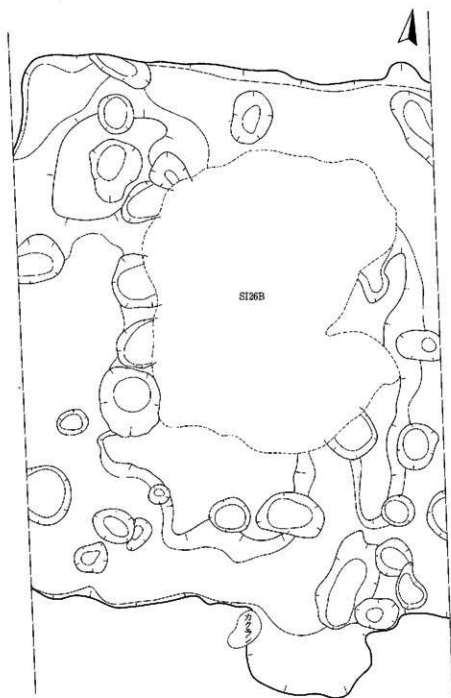
692～694は高台杯である。692は「ハ」字状に開く高い高台を有し、杯部は大きく開くやや扁平な形状を呈する。内面には黒色処理が施され、ミガキが施されているが磨滅が多い。693は短い高台もち、皿状の杯部をもつものである。高台はやや厚めに作られており、端部は丸めにおさまられている。削り出し高台である。体部は皿状を呈し、端部が外側に開き厚く作られている。内面には細かなミガキ調整が施こされ、黒色処理が加えられている。694はその杯部の形状から693と同様の短い高台を有していると考えられる。

709は高台部もしくは底部のみの破片である。わずかに残る体部下半の角度の違いから、おそらく耳皿の底部と考えられる。

710～721・723は土師器壺類である。図示したものの13点のうちロクロを使用するもの5点(711・715・716・720・721)と使用しないもの8点(710・712～714・717～719・723)の2者があり、後者の方が多い特徴がある。I径の大ききで分けると、30cm以上の大型品(719)、15～25cm程度の中型品(710～712・714・720～721・723)、10cm前後以下の小型品(713・717～718)に分けられる。中型のものが主体であるが、大・小型品もある程度存在している。とくに小型品が他に比べ多いと思われる。I線部の形状をみると、ゆるやかに外反するものがほとんどを占め、それ以外では端部を肥厚させるもの1点(720)と少ない。調整をみると、ロクロを使用しない壺については口縁部のヨコナデは共通するが体部外面については異なる。ハケ調整には710・712・713・718・723などがあり、ケズリ調整には719がある。

722は土師器ナベ形土器である。体部下位～底部を欠損しており、形状は不明である。僅内部は端部を上下に肥厚させ、中央(側面)に強いナデが施されるため凹んでいる。調整は内外面ともロクロ調整のみである。

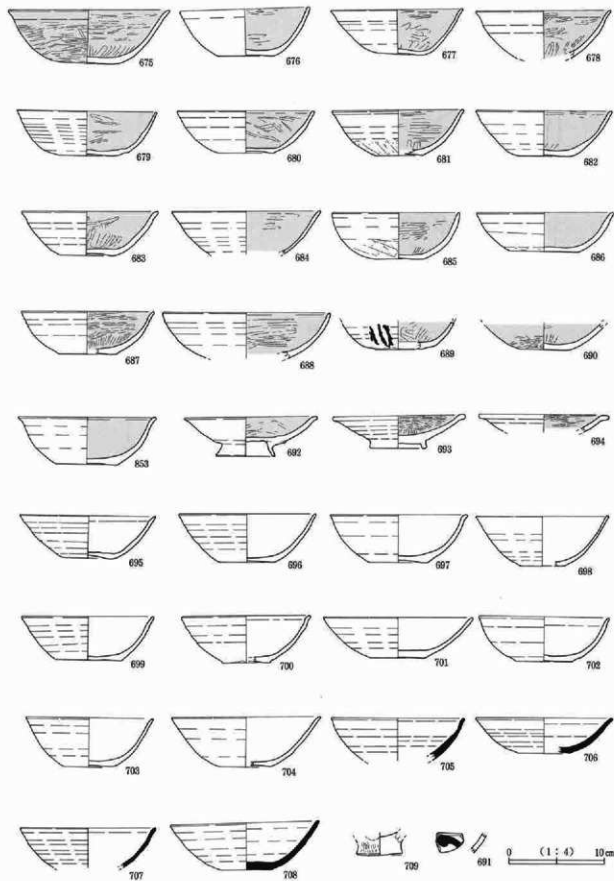
724～731は須恵器・壺類である。724・727・731は壺、726・730は長頸壺、725・728・729は小型壺(甗)である。724は口縁部～体部上半部までの破片である。肩部の傾きから考えると、体部の最大径は上位にあると思われる。調整は残存部分においては外面にタタキが、内面に当て具痕跡が残る。口径が22cmであり、中型に属すると考えられる。731は724に比べあまり肩部が張らない形態である。体部上位～中位付近に最大径をもつ。I径は21cmである。調整は基本的にはロクロ調整であるが、体部下半には縦～斜位のヘラケズリが施される。727は底部のみの破片であるが、これと同様の形態を呈すると考えられる。725・728は体部中に最大径をもつなどほぼ同様の形態を呈すると考えられる。ただし、728の方が底部は小さく胴部の張ら



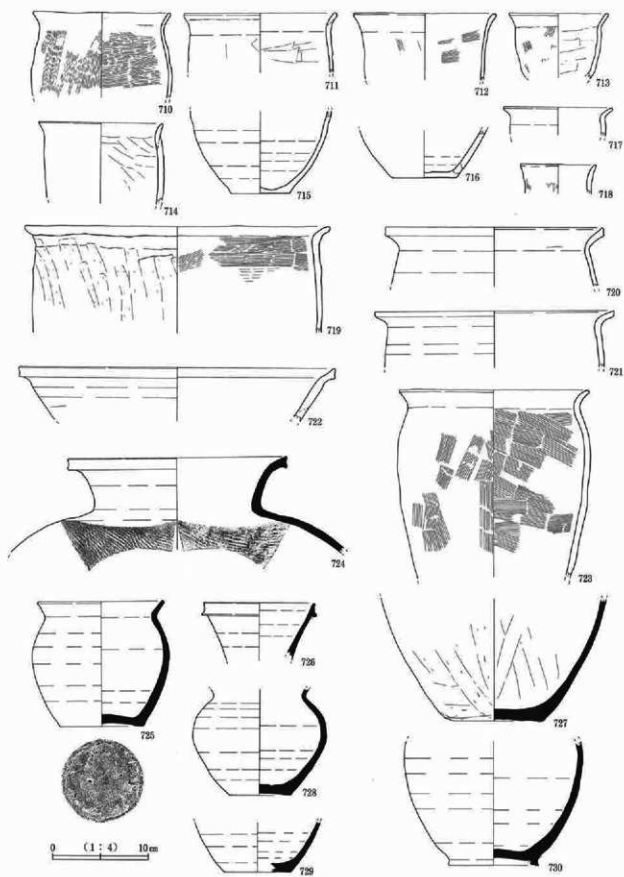
0 (1:50) 2m

第200図 SI26 掘りかた





第201图 SI26 出土遺物(1)



第202圖 S126 出土遺物 (2)

も大きい。また、725の底面には砂粒の痕跡が残る砂底土器である。729は残存する形態や大ききから考えるとこれらと同様であろう。

726は長頸瓶の口縁部、730は体部中位～底部にかけての破片である。730には短かい高台がつく。断面形は台形を呈する。体部は残存部から考えるとあまり肩部が張らない形状であると考えられる。920は土鍾である。小破片であるが堆積上中からの出土である。

767・768・769は鉄製刀子である。767・769は茎部分、768は茎から刀身にかけての破片である。以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡はⅡ期（9世紀末～10世紀前半）に位置づけられる。（西洋）

#### SI26B 竪穴住居跡（第204～210区）

C区中央部、N200E0グリッドに位置している。SI26 竪穴住居跡と縦に重複しており、本遺構の方が古い。

検出は、SI26 住居跡を精査時に床面に黒褐色土の広がりをもって確認している。上述のようにやや掘りすぎてしまったため露出したもので、本来なら貼床除去後に確認されるべきものである。

規模は、北壁が約3.20m、西壁が3mであり、南北壁間の長さは3.70mである。南東隅には土坑が1基付設されている。

平面形は非常にいびつであるが、これは上層のSI26の掘りかた構築時によってある程度破壊されているため、本来の形状を表していないと推定される。現状では、楕円形の土坑が付設しているものの、不正形な台形状を呈する。したがって、主軸方位を求めることは困難である。

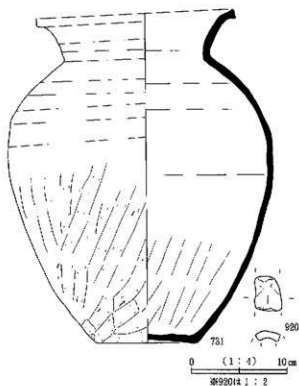
堆積上は、SI26の貼床も含めて10層が確認できる。このうち3・4層はSI26の貼床である。断面図を見ると、5層下面を境にして、堆積状況が異なっている。すなわち、5層以上は水平堆積を基本とすることから一度に埋められた人為堆積と考えられ、5層以下の黒褐色系の堆積土は自然に流入した状況が窺える。5層はSI26を構築時にSI26B住居跡の最後の堆積土として、埋められた層であろう。

したがって、5層は広義にはSI26の貼床に含まれると考えられる。6層の焼土層も投げ込まれたもので、5層に準じる性格と考えられる。7層以下は自然に堆積している状況が窺えることから、SI26B住居跡の堆積土は自然に埋没したと判断できる。

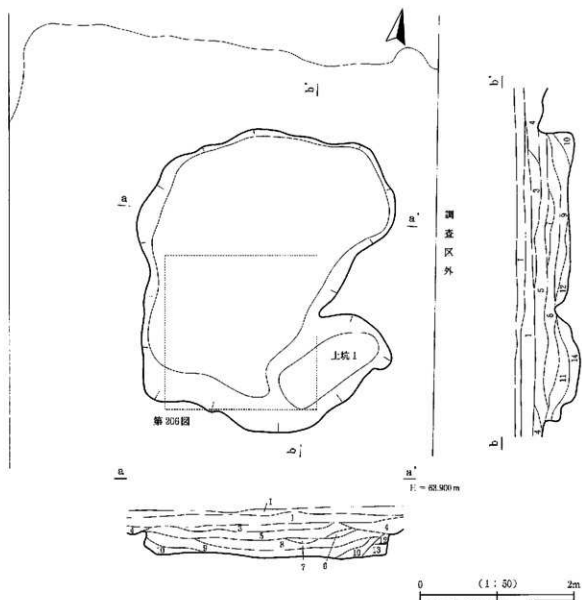
床面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。深さはSI26の掘りかた底面より、約30cmである。土坑とは若干の段差が認められる。

掘りかたは、土坑状の掘り込みがいくつか認められ、本遺跡で一般的な方法とは異なっている。したがって、貼床は基本的に部分的にしか施されていない。

付属する施設として、土坑1がある。規模は、長軸が約2m、短軸が1.10mであり、平面形は楕円形状を

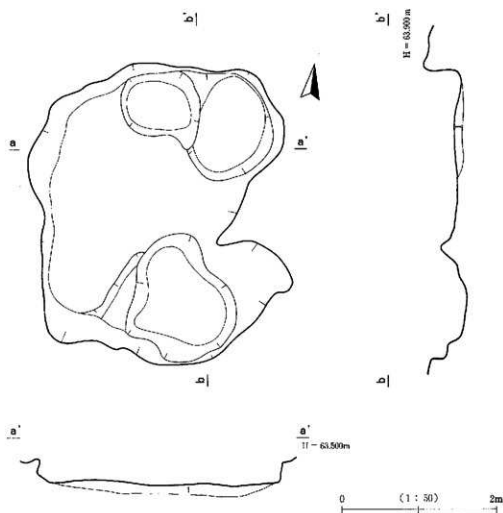


第203図 SI26 出土遺物（3）



第204図 SI26 B 竪穴住居跡

遺構名	別番号	色調	記号	上性	粘性	しまり	特徴
SI26B	1	暗褐色	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック中、焼土粒少、炭化物少、黒褐色粘質土ブロック少量含む
	2	明黄褐色	10yr7/6	粘質土	中	強	暗褐色粘質土ブロック少量含む
	3	褐色	10yr4/4	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロック中、焼土粒少量含む
	4	明黄褐色	10yr6/6	粘質土	中	強	黒褐色ブロック中焼土
	5	黒褐色	10yr3/2	粘質土	中	中	黄褐色ブロック少、焼土粒中量含む
	6	明赤褐色	2.5yr5/6	粘質土	やや弱	強	黒褐色ブロック中焼土
	7	明赤褐色	2.5yr5/6	粘質土	やや弱	強	黒褐色ブロック中焼土
	8	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロック少、焼土粒少量含む
	9	黒褐色	10yr2/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロック少、焼土粒少量含む
	10	黒褐色	10yr2/2	粘質土	やや強	強	黄褐色ブロック少量含む
	11	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロック少、炭化物少量含む
	12	に44黄褐色	10yr5/4	粘質土	中	中	黄褐色ブロック中、焼土粒中量含む
	13	に44黄褐色	10yr5/4	粘質土	中	中	黄褐色ブロック少量含む
	14	に44黄褐色	10yr5/4	粘質土	中	中	黄褐色ブロック多、炭化物少量含む
壁跡掘りかた	1	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや強	中	結核



第205図 SI26B掘りかた

早する。重複とも考えられたが、断面観察の結果、堆積土に区別がつかなかったことから、同時期に存在すると判断した。設置箇所は、木住居跡南西隅角であり、土坑の長軸が対角線に直交するように配置されている。深さは確認面より40cmであり、住居跡床面よりやや深い。

そのほか、カマドは確認していない

本遺構は、床面に貼床が施されること、平坦であること、北壁と西壁が方形を意図していること、土坑状の施設が付属することなどから、現状での平面形はいびつながらも住居跡と判断している。

遺物は堆積土中～床面を中心に出土している。なお、取り上げは、上層（3・4・5層）、中層（6・7・8層）、下層（9・10・11・12・13・14層）に分けて上層より取り上げている。住居跡南味際には、762のナベがまとまって出土している。

732～745は杯類であり、そのうち、732～736には内面に黒色処理が施され、737～743には施されない。744～745は須恵器である。732～733は杯であり、緩やかに立ち上がる体部をもつ。底部側縁にはヘラケズリによる再調整が施される。734～736は内面に黒色処理が施される高台杯であるが、いずれも高台部だけの破片である。735は断面が三角形を呈する高台である。それ以外は「八」字状に開くものである。

737~743は内面に黒色処理が施されない杯である。いずれも緩やかに立ち上がる体部をもつが、737のみが口縁端部がやや強く外反する。調整は内外面ともロクロ調整であり、底部切り離し技法は糸切りである。744は直線気味に開く体部を、745は緩やかに立ち上がる体部をもつ。

746~754は土師器甕である。749以外は調整にロクロを使用する。749はロクロを使用せずやや歪に仕上がっている。口縁部の形状は基本的には同様であるが、端部の成形がやや異なる。頸部より「く」字状に外反し、端部をやや厚く肥厚させ、緩やかな面を形成するもの(749~751・

753)とその後に上方へ強く引き出されるもの(752・754)の2者がある。

755は緑釉陶器碗である。底部は欠損しており、全容は知れない。胎土は緻密であり、黒色粒子が少量含まれる。硬質である。輪調は明緑色であり、鮮やかである。黒管90号窯形式に比定できよう。

756・757は小型の甕である。756は口径が11cm、757は8cmと小さい。

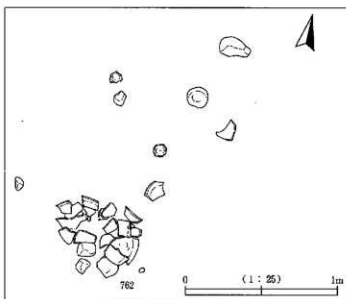
758は須恵器甕の底部破片である。外面にはタタキの痕跡が僅かに残る。759は須恵器長頸瓶である。体部は中位に最大径をもつ、球形に近い形態である。口縁部は単純口縁であり、大きく開く。頸部と体部の接合箇所には突帯がつけられる。底部には断面形が台形を呈する高台がつく。調整は体部下半に回転ヘラケズリが施されるが、それ以外は基本的にはロクロ調整のみである。

760~762は土師器ナベである。いずれも復元口径が37~40cm前後であり、近似した容量をもつ。口縁部の形状も端部を上下に肥厚させるなど類似している。調整は760・761は体部外面には縦位のヘラケズリが施される。760の内面には粗いクシメが施され、スリメ状を呈している。762の上半部はロクロ調整、中位にヘラケズリ、下位にタタキが施される。内面にも一部タタキの痕跡が残る。底部は欠損しているが、残存部分の傾きから考えると平底にはならないと思われる。

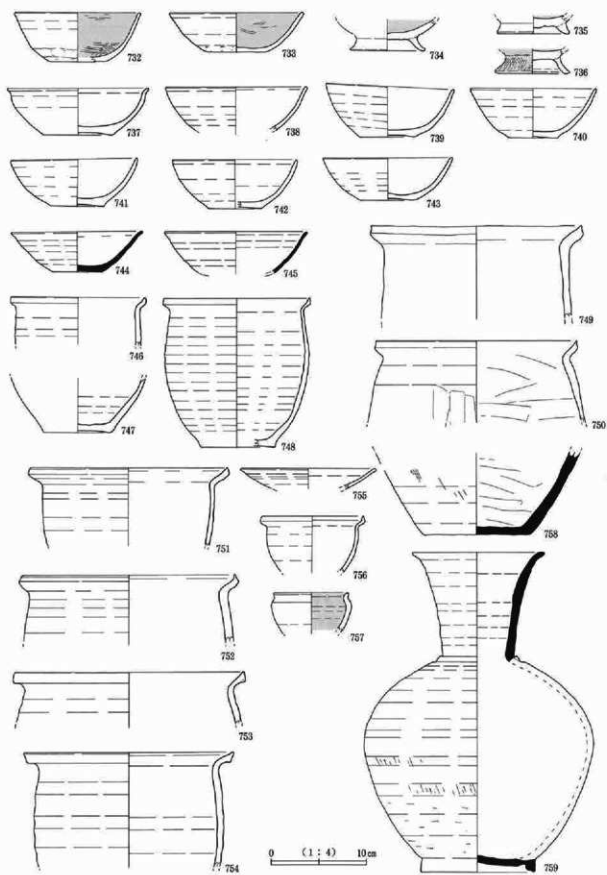
763~764は内面に黒色処理が施される、鉢である。外面的な形態は土師器甕に類似しているが、やや口径が広い。外面にはロクロ調整が、内面には横位のミガキが施されている。

765は耳皿であり、約半分が欠損している。内外面とも黒色処理が施され、ミガキが施されている。高台がつかず、粗く成形されているなど通常の形態とはやや異なっている。

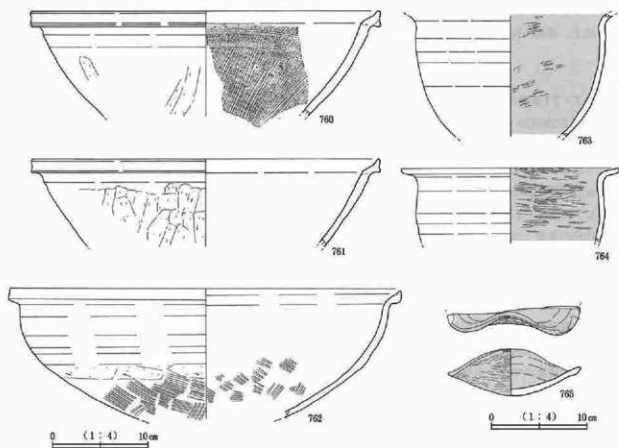
766は陶製の甕である。その形態から風字甕と考えられる。三方には側面があるが、小口側一方には側面がなく腔部となっている。裏側には脚が1カ所のみ残存している。対になる部分には剥落した痕跡が残ることから本来は2個の脚部を有していたと考えられる。内面には擦痕が残るがとくに腔部には非常に強く摩擦している。これらは2個体が接合したものであるが、このうち1片はSI04の堆積土上位から出土している。もう一方はSI26下層住居跡から出土している。SI04は検出面直上が現耕作上であることから以前の耕地整理時に運ばれてきた可能性が考えられる。したがって、ここではSI26下層住居跡に帰属すると考えている。



第206図 SI26B 遺物出土状況



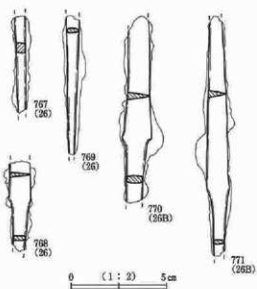
第207圖 S126B 出土遺物 (1)



第208図 SI26B 出土遺物 (2)



第209図 SI26B 出土遺物 (3)



第210図 SI26・26B 出土遺物 (4)



が、本来2カ所に廃棄されていた可能性もある。770・771は鉄製刀子である。いずれも両端を欠損している。  
以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡はⅡ期（9世紀末～10世紀前半）に位置づけられる。

(西澤)

### SI27・27B 竪穴住居跡 (第211～214図)

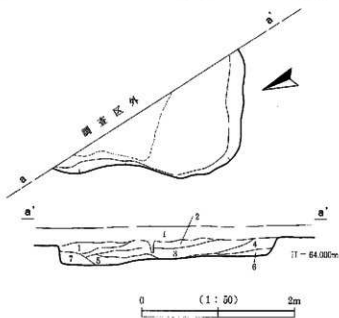
C区 N250E20 グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは南壁から西壁にかけての約1/4であり、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。

本遺構はV層上面で黒褐色土、暗褐色土の広がりとして検出した。調査区内で検出できた規模は南壁が1.50m、西壁が2.60mであり、平面形は方形を呈するものと考えている。住居跡の方位は確認できた南壁を基準とするとN 27° - Eである。

住居内堆積土は7層に分けた。1・4層は黒褐色粘質土、2・3層は暗褐色砂質土、5・6層は褐色粘質土、7層は黒褐色砂質土をそれぞれ基調とする。1～6層はV層に起因すると考えている黄褐色ブロックを多く含み、しまりも比較的強い。堆積状況は7層のみがいわゆる三角堆積を呈するが、他の層についてはいわゆる水平堆積に近く、自然堆積とするには南側からのみの流入となる。以上のことから、1～6層については人為堆積による埋め戻しと理解している。

住居壁は急傾斜で立ち上がり、検出面から床面までの深さは23～30cmである。床面は北側がやや低く落ち込み、住居跡の中央と南側にはぶい黄褐色砂質土を基調とした貼床を施す。掘かたは住居跡南壁周辺と中央付近を掘り込んでいる。カマド・ピット等の施設は確認できなかった。

また、本住居跡貼床除去後、下層から100×90cmの範囲で暗褐色粘質土の広がりや黒褐色土のピットを検出した。当初、SI27 竪穴住居跡の貼床の一部だと考え調査を行ったが、西隅がほぼ直角になり、立ち上がりはSI27 竪穴住居跡の掘かたとは異なっていた。断面観察ではピットがSI27 竪穴住居跡の貼床上面までは立ち上がらないことを確認している。これらのことから、この暗褐色粘質土の広がりはSI27 竪穴住居跡によって削平された住居跡 (SI27B) 貼



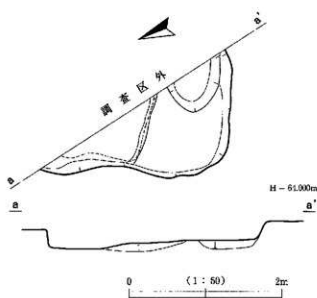
第211図 SI27 竪穴住居跡

遺構名	明番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI27	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック中、黒色粘質土ブロック少
	2	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	中	黄褐色粘質土ブロック中、黒色粘質土ブロック少、炭十粘少
	3	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック少、黒色粘質土ブロック少
	4	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック少、炭十粘少
	5	褐	10yr1/6	粘質土	弱	やや強	黄褐色粘質土ブロック多、黒色粘質土ブロック中
	6	黒褐	10yr2/2	砂質土	やや弱	弱	自然堆積
	7	褐	10yr5/6	砂質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック少、黒色粘質土ブロック少、炭十粘少
※設置りかた	1	ぶい黄褐	10yr5/4	砂質土	中	強	黄褐色粘質土多、炭十粘少、⇒SI27B貼床
	SI27B	1	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	中
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	強	黄褐色粘質土ブロック多、SI27B貼床

床とピットと判断している。ただし、方位がSI27 竪穴住居跡とほぼ同一であり、西味の一部を共有している状況であるため、SI27 竪穴住居跡との重複というよりは同一住居跡の建て替えであると考えている。

出土遺物の総重量は575gであり、このうち円化したのは1点・25gである。772は土師器・杯で内外面共にロクロ調整である。ゆるやかに内湾しながら立ち上がるが、口縁端部はわずかに外反する器形である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から木竪穴住居跡は平安時代に位置づけられると考えられるが詳細は不明である。(小針)



第212図 SI27 掘りかた

#### SI28 竪穴住居跡 (第215～220図)

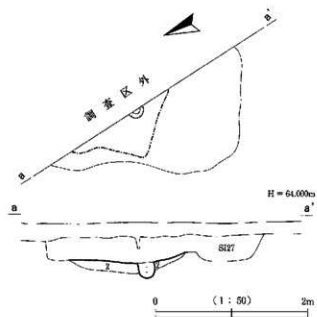
C区 N250E20 グリッドに位置する。SB03 獨立柱建物跡、SK30 土坑と重複し、新旧関係は本竪穴住居跡がいずれの遺構よりも古い。カマド2基、ピット6基が付属する。

本遺構はV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。規模・平面形は南北4.90m、東西4.80mの正方形を呈する。本住居跡の方位は南壁を基準とするとN-15°-Eである。

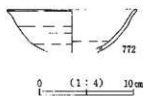
住居内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土を基調とする。後世の削平のため残存状況は悪いが、3層がいわゆる三角地積を呈することから自然堆積と考えている。

住居壁は急傾斜で立ち上がり、検出面から床面までの深さは30cmである。床面は西側がやや高くなるがほぼ平坦に構築され、壁周辺に明褐色粘質土を基調とした貼床を施している。掘りかたは壁周辺を掘り込み、住居跡中央付近は平坦に掘り残されていた。したがって貼床は壁周辺では厚く貼られるが、住居跡中央ではほとんど確認できない。

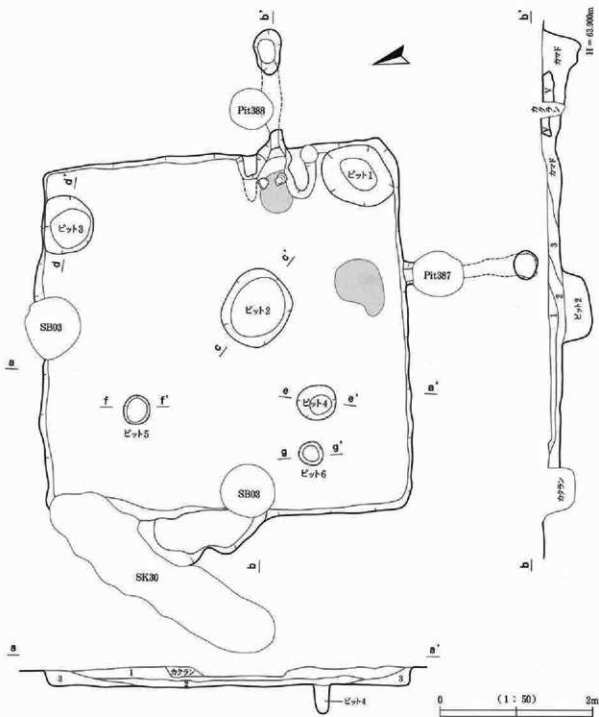
カマドは2基確認した。新カマドは住居跡東壁南側に位置し、東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存せず、煙道の一部をSB03 獨立柱建物跡によって破壊されているが、両袖、燃焼部、煙道、煙出しピットを確認している。両袖面の幅は最大で33cmである。調査の不手際で北袖の一



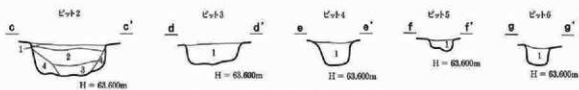
第213図 SI27 B 竪穴住居跡



第214図 SI27 出土遺物



第215図 SI28 竪穴住居跡



第216図 SI28 竪穴住居跡ピット断面図

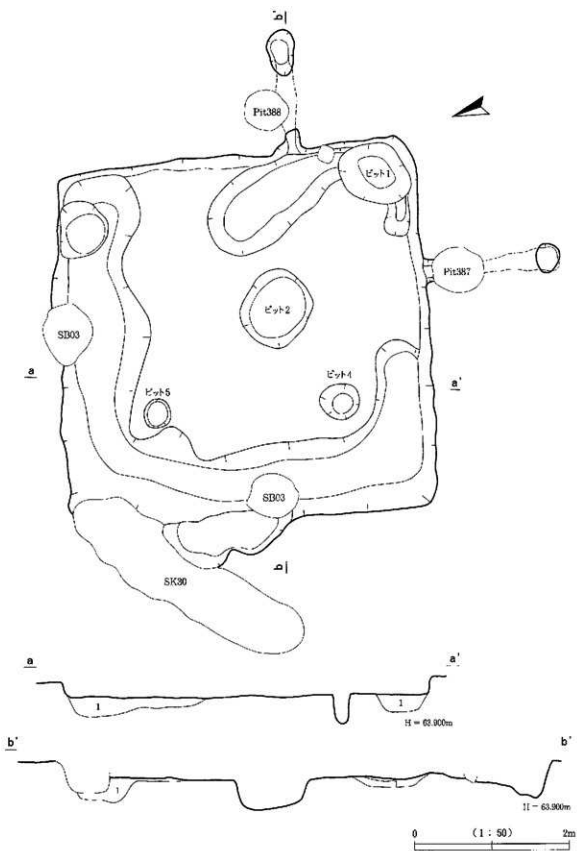
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴	
S128	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	中	焼土粒少、白色炭粒子粒に少(部分的にブロック少)	
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒少、黄褐色粘質土ブロック少、炭化物少	
	3	暗褐	10yr3/3	粘質土	やや弱	やや弱	カマド付近にのみ焼土ブロック少	
S129のみ	4	褐	10yr4/6	粘質土	やや強	やや強		
	pit1	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや強	黄褐ブロック、粘土粒、土層片を含む
		2	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	中	黄褐ブロック少量含む
	pit2	1	褐灰	10yr4/1	粘質土	やや弱	中	焼土ブロック、黄褐ブロックを多く含む
3		黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	黄褐ブロック(欠)を含む	
pit3	4	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや弱	中	焼土ブロック、黄褐ブロックを含む	
	5	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	中	黄褐ブロック、炭化物、焼土粒を含む	
pit4	6	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐ブロック砂を含む	
	7	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐ブロック砂を含む	
pit5	8	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐ブロック砂を含む	
	9	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐ブロック砂を含む	

部を破壊してしまったが、残存する長さは北袖が33cm、南袖が465cmであり、両袖とも床面から13~18cmの高さが残存している。カマド内堆積土は8層に分けた。1・4・6~8層は黒褐色粘質土、2・3層は暗褐色粘質土、5層は黄褐色粘質土をそれぞれ基調とする。このうち、3層は焼土ブロックを多く含み、しまりも強い。また、5層は煙出しピットの壁が被熱し崩落したものと考えている。7・8層についてはそれぞれ燃焼部と煙出しピットの最下層であることから本カマド機能時の堆積層の可能性がある。底面は燃焼部からやや急傾斜で立ち上がり、煙道は緩やかに落ち込む。煙道から煙出しピットにかけては急傾斜で落ち込んでいる。煙道は住居跡東壁から東に1.23mのび、一部がトンネル状に掘り抜かれた状態で残存していた。煙出しピットは60×35cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは53cmで壁面は急傾斜で立ち上がる。燃焼部底面は53×43cmの不整形な楕円形の範囲で被熱しており、焼土の厚さは最大で3cmである。カマド両袖は貼床土に黒褐色粘質土と黒褐色粘質土によって構築されていた。

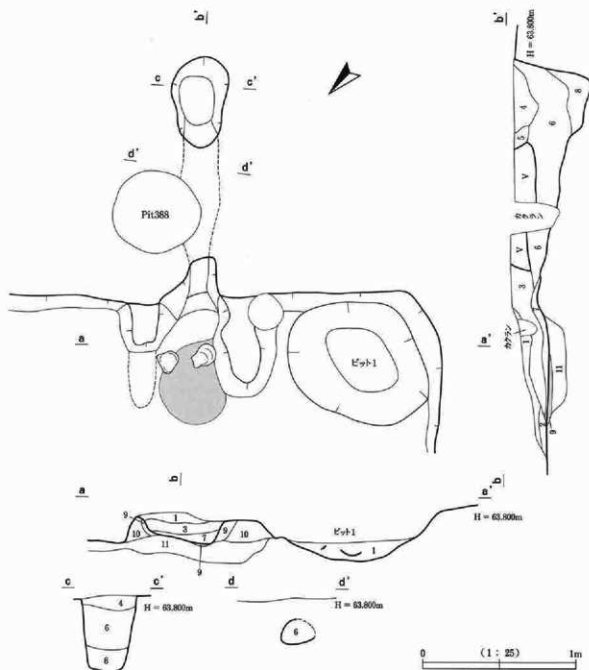
旧カマドは住居跡南壁中央東よりに位置し、南壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存しておらず、また、煙道の一部をSP03 独立柱建物跡によって破壊されているが、燃焼部底面、煙道、煙出しピットを確認している。カマド内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は黒褐色粘質土を基調とする。煙出しピットについては当初、単独の遺構外ピットとして掘り込みを行ってしまっただけで、堆積状況は不明であるが、黒褐色土を基調とする層が堆積していた。底面は燃焼部から急傾斜で立ち上がり、煙道から煙出しピットにかけては緩やかに落ち込む。煙道は住居跡南壁から南に1.85m延び、一部がトンネル状に掘り抜かれた状態で残存していた。煙出しピットは35×30cmの円形を呈し、検出面からの深さは48cmであり、壁面は急傾斜で立ち上がる。燃焼部底面は75×63cmの不整形な範囲で被熱しており、焼土の厚さは10cmである。

ピットは床面上で6基検出している。ピット1は住居跡南東隅に位置し、規模は100×80cm、床面からの深さは13cmである。堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。ピット2は住居跡中央南よりに位置し、規模は100×85cm、床面からの深さは38cmである。堆積土は4層に分けた。1・3層は黒褐色粘質土、2層は褐色粘質土、4層は暗褐色粘質土を基調としていた。ピット3は住居跡北東隅西よりに位置し、規模は78×65cm、床面からの深さは28cmである。堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。ピット4~6は住居跡のやや西よりに位置する。規模・床面からの深さはピット4が53×50cm、深さ30cm、ピット5が40×35cm、深さ15cm、ピット6が43×30cm、深さ30cmである。堆積土はいずれのピットも黒褐色粘質土の単層であった。各ピットの性格についてはピット1・2が位置・規模から貯蔵穴と考えており、ピット3についても同様の性格を有する可能性がある。ピット4~6の性格は不明であるが、ピット4・5はその位置関係から柱穴の可能性もあろう。

遺物はピット1堆積土中から比較的多く出土している。遺物の総重量は7,405g、そのうち凶化したのは



第217図 SI28 掘りかた



第218図 SI28 カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI28カマド	1	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	焼土粒少、黄褐粘質土ブロック少
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	焼土粒中、炭化物少
	3	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや弱	強	焼土ブロック多、黄褐粘質土ブロック少、炭化物少
	4	黒褐	10yr2/3	粘質土	中	中	焼土ブロック多、炭化物中
	5	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	焼土ブロックを含む
	6	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒少、炭化物少、黄褐粘質土ブロックを含む
	7	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	焼土粒少、炭化物少
	8	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	中	
	9	に5位の赤褐	2.5yr5/4	粘質土	中	中	焼土と黒褐シルトの混合焼土上方が強い
	10	暗褐	10yr3/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロックを多く含む
	11	黄灰	10yr4/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロックと黒褐色ブロックの混合

2,720gである。773～788は土師器杯である。外面は全てロクロ調整であるが、内面調整はミガキ調整で黒色処理を施すもの(771～782)とロクロ調整のみのもの(783～788)がある。体部の形状はゆるやかに内湾するものが主体を占めるが、体部最下位に強いナデを施すもの(782・781)もある。782は口径に比べて底径がやや大きい。784には体部外面に「上」のヘラガキがある。789は須恵器杯である。体部の形状はゆるやかに内湾するが最下位に強いナデを施す。内外面ともロクロ調整である。790・791は土師器・高台杯である。いずれも外面はロクロ調整、内面はミガキ調整で黒色処理を施す。790は杯部最下位に強いナデを施すが791にはみられない。いずれも貼付高台である。793～798はロクロ不使用の土師器甕である。いずれも残存状況は良好でなく、全体の形状が明らかなものはないが、法量が小型のもの(793・795)、中型のもの(794)、大型のもの(796・798)に分けられよう。口縁部はゆるやかな「く」字状のもの(793・794)とやや急角度で大きく開き肥厚するもの(796)がある。外面はハケメあるいはヘラケズリ調整で内面は横位のナデである。797は土師器甕で器壁が厚い。内外面ともにわずかにナデが確認でき、内面の端部には指頭圧痕が顕著である。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竪穴住居跡はⅡ期(9世紀後半)に位置づけられる。

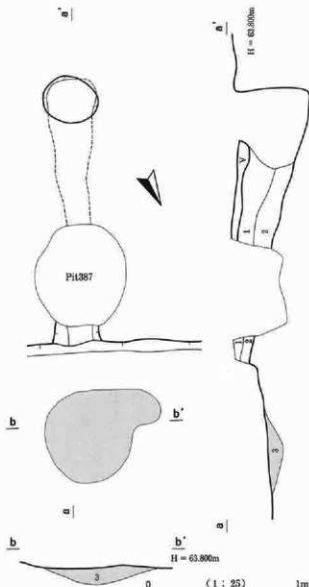
(小針)

#### SI29竪穴住居跡(第221～223図)

C区N240E0グリッドに位置する。SK33・37土坑、SD07・08溝跡と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも本竪穴住居跡のほうが古い。ビット2基が付属する。

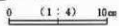
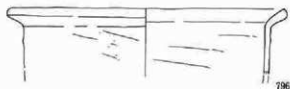
本遺構はV層上面でにぶい黄褐色土の広がりをもって検出している。規模・平面形は重複によって破壊されている部分があるものの、南北4.30m、東西4mのほぼ正方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた西壁を基準とするとN-29°-Wである。

本住居跡は後世の削平のため床面のみの検出であるため堆積状況は不明であり、したがって住居跡跡も残存していない。検出した床面はほ



第219図 SI28 旧カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
28旧カマド	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	やや強	中	黄褐ブロック(小・粒状)を少量含む
	2	にぶい黄褐	10yr5/4	粘質土	中	やや弱	黄褐シルトとの混合土、天井崩落、雄土ブロックを含む
	3	赤褐	2.5Yr4/8	粘質土	やや弱	やや強	上位1～2cmは、深く走る固く締まっている(壁境部雄土)



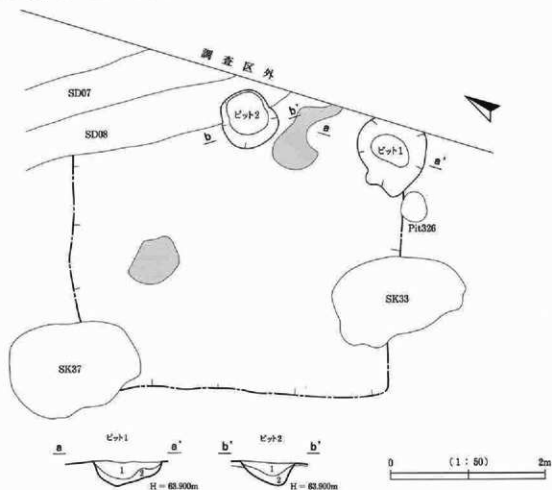
第220圖 S128 出土遺物



は平坦で、にぶい黄褐色土を基調とした貼床を施している。掘形は住居跡壁周辺を深く掘り込み、中央付近は浅く掘り込んでいる。したがって、貼床は壁周辺では厚く、中央付近では薄くなっている。

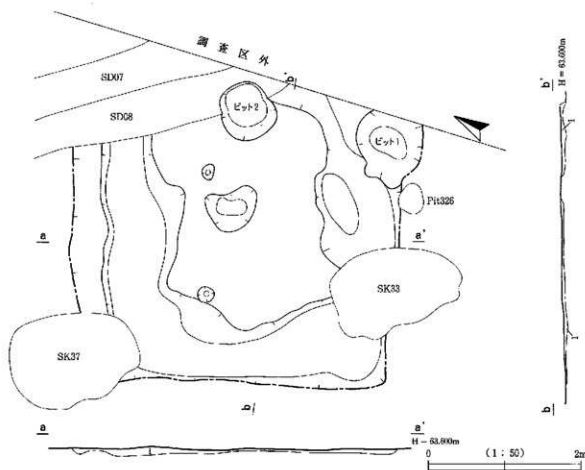
カマド削平のため残存していないが、住居跡南東隅付近に95×60cmの不整形な焼土の広がりを確認しており、これがカマドの燃焼部の痕跡であると考えている。ピットはこの燃焼部の痕跡の両側に2基床面上で確認している。ピット1は燃焼部痕跡の南西側に位置し、規模は105×80cm、床面からの深さは35cmである。ピット内の堆積土は2層に分けた。ピット2は燃焼部痕跡の北側に位置し、75×70cm、床面からの深さは33cmである。ピット内の堆積土は2層に分けた。この2基のピットからは遺物が出土しており、その性格については位置・規模から貯蔵穴の可能性を考えている。また、床面上では75×55cmの範囲で炭化材の広がりを確認している。

遺物は貼床、ピット内から出土している。遺物の総重量は1,175g、このうち固化したものは254gである。799は土師器・杯で底部から直線的に立ち上がり、底径はやや大きい。内外面ともロクロ調整である。800は



第221図 S129 竪穴住居跡

遺物名	順番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
ピット1	1	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	やや強	焼土粒少、炭化物中、黄褐砂質土ブロック少
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒中、炭化物少、黄褐砂質土ブロック少
ピット2	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	焼土粒少、黄褐砂質土ブロック少
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	焼土粒少、黄褐砂質土ブロック中

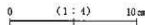


第222図 SI29 掘りかた

遺構名	図番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI29掘りかた	1	濃い黄褐色	10yrs/4	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色砂質土ブロック多、黒褐色粘質土ブロック少

須恵器・杯で体部からゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。内外面ともロクロナデで底部は回転糸切り無調整であった。

以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竈穴住居跡はI期（9世紀後半）に位置づけられる。（小針）



### SI130竈穴住居跡（第224～228図）

C区 N230E 0 グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは北東壁から南東壁を中心とした全体の約2/3であり、この部分についてのみ調査を行った。そのため本住居跡は完掘を行っていない。他の遺構との重複関係は認められなかった。カマド2基、ピット1基が付属する。

本遺構はV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。規模は調査区内で確認できた北東壁が3.50m、南東壁が4.20mであり、平面形は北東～南西方向にやや長く長方形を呈すると考えている。本住居跡の方位は確認できた東壁を基準とするとN 32° Eである。

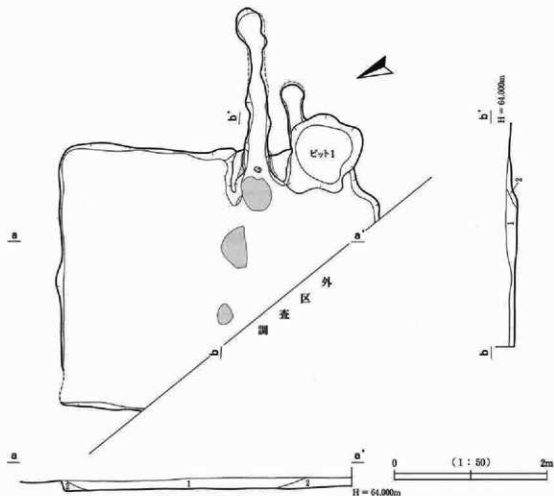
堆積土は2層に分けた。1・2層ともに黒褐色粘質土を基調とし、2層はV層に起因すると考えている黄

第223図 SI29 出土遺物

褐色ブロックを多く含んでいた。堆積状況は残存状況が悪いものの2層がいわゆる三角堆積を呈することから自然堆積と考えている。

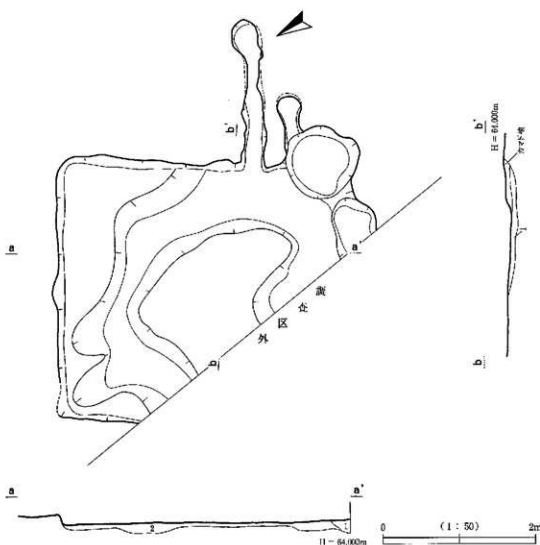
住居壁は残存していた部分ではやや急傾斜で立ち上がり、検出面から床面までの深さは5～10cmである。床面はほぼ平坦に構築され、明黄褐色を基調とした貼床を施している。掘りかたは壁周辺を掘り込むが中央付近は高まりとして掘り残されていた。そのため貼床は壁周辺では厚く貼られるが、中央付近ではほとんど確認することができなかった。

カマドは2基確認している。新カマドは住居南東壁の中央やや南よりに位置し、南東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存していないが、両袖、燃焼部、煙道、煙出し部を確認している。両袖間の幅は最大で30cm、残存する長さは北袖が73cm、南袖が45cmを測り、両袖とも床面から10～15cmの高さが残存している。カマド内堆積土は5層に分けた。1・3・5・7層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土、4層は明黄褐色砂質土、6層は暗褐色砂質土をそれぞれ基調とする。このうち、4層は燃焼部天井崩落土と考え



第224図 SI30 整穴住居跡

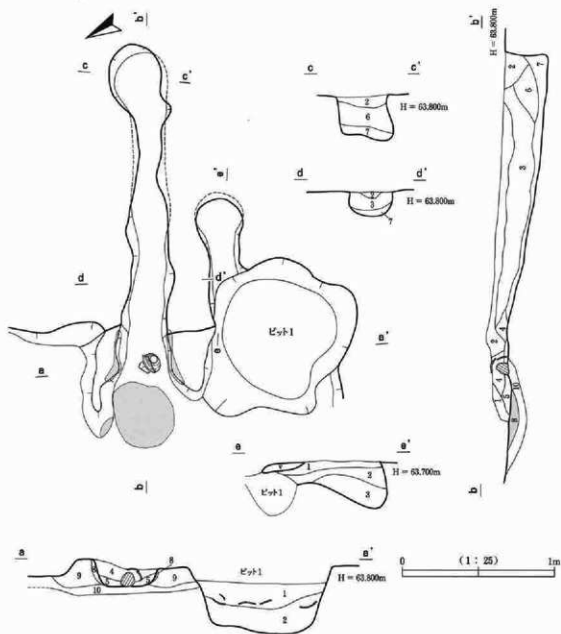
遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI30	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	黄褐色粘土ブロック少 焼土ブロック少
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	中	黄褐色粘土ブロック多
ピット1	1	暗褐	10yr3/3	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質ブロック中、黒褐色粘質ブロック少
	2	黒褐	10yr3/2	粘質土	中	やや弱	黄褐色砂質ブロック少、粗砂中



第225図 SI30 掘りかた

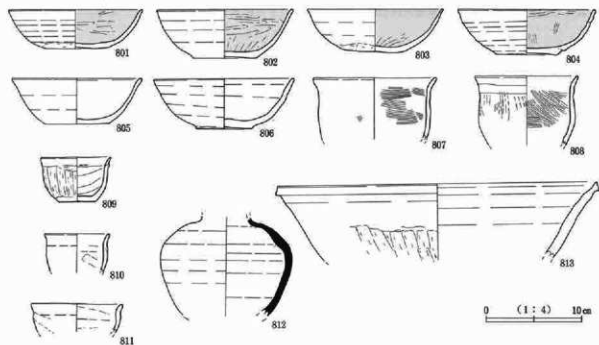
遺構名	層番号	色彩	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI30掘りかた	1	暗緑	10yr5/3	粘質土	中	中	黄褐色面上ブロック中、粘土粒少、炭化物少、黒褐粘質土ブロック少
	2	明黄褐	10yr7/6	粘質土	弱	強	暗緑、黒褐粘質土ブロック少、1SI貼床

しており、層中からは土師器環が出している。この土師器環については出土状況からカマド構築の際の補強として使用された可能性がある。また、5・7層については燃焼部から煙道、煙出し部にかけての最下層に堆積しており、カマド機能時の堆積土と理解している。本住居跡の煙道は堆積土に明確な天井崩落土を確認することができないことと南北断面の形状からトンネル状に割り抜かれた状態で残存していた煙道の上面が後世に削平を受けたものと考えている。底面は燃焼部から煙道にかけてはほぼ平坦で煙道から煙出し部にかけては緩やかな傾斜で落ち込んでいる。煙道は住居跡南東壁から南東に1.40mのびる。燃焼部は45×38cmの円形の範囲と両袖の内側が被熱していた。焼土の厚さは最大で8cmであり、焼土上には10×8cmの礫を設置している。両袖は貼床上ににぶい黄褐色砂質土で構築されているがこれは被熱の状況によって2層に分けている。旧カマドは住居南東壁の南よりに位置し、南東壁に対してほぼ直交している。上部は削平のため残存しておらず、また、そのほとんどをピット1によって破壊されているが、煙道の一部から煙出し部にかけて確



第226図 SI30 カマド・旧カマド

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI30カマド	1	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少、焼土粒少
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少、焼土粒少
	3	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土・焼土ブロック少、炭化物少、砂質やや強い
	4	明黄褐	10yr7/6	砂質土	弱	中	暗褐色粘質土ブロック少、焼土粒少
	5	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒少、炭化物少、黄褐色砂質土ブロック少
	6	暗褐	10yr3/4	砂質土	やや弱	やや弱	暗褐色粘質土ブロック少
	7	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	焼土粒少、炭化物少、黄褐色砂質土ブロック少
	8	明赤褐	2.5yr5/6	砂質土	弱	強	焼土
	9	にじい黄褐	10yr5/4	砂質土	弱	強	暗褐色粘質土ブロック少
	10	明黄褐	10yr7/6	砂質土	弱	強	SI 貯庫と同じ
SI30旧カマド	1	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	中	
	2	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	中	黄褐砂質土ブロック少
	3	黒褐	10yr2/2	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐砂質土ブロック中

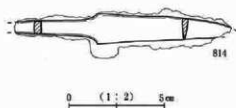


第227図 SI30 出土遺物

認している。カマド内堆積土は3層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土、3層は黒褐色粘質土を基調としている。確認できた部分では底面が煙道から煙出し部にかけてやや急傾斜で落ち込み、煙道はピット1東壁から南東に53cm延びる。燃焼部の痕跡等は確認できなかった。

ピットは床面上で1基確認している。ピット1は住居跡南側に位置し、規模は120×85cm、床面からの深さは38cmである。堆積土は暗褐色砂質土と黒褐色粘質土の2層に分けた。堆積土中からは遺物が比較的多く出土している。本ピットの性格については位置・規模から貯蔵穴と考えている。

遺物はカマド内堆積土とピット1堆積土からの出土が比較的多い。遺物の総重量は3,286g、そのうち図化したのは1,370gである。801～806は土師器・杯である。底部から内湾しながら立ち上がる器形(801)と内湾しながら立ち上がり口縁部がわずかに外反する器形(802～806)がある。外面調整はほとんどがロクロナデであるが、801は最下位に回転ヘラケズリが、803にはヘラケズリ再調整がそれぞれ確認できる。内面調整は801～804が横位・斜位のミガキで内面黒色処理を施すのに対して、805・806はロクロナデのみであった。807・808は小型の土師器・甕で体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。いずれも内外面にハケメを施したのち口縁部にヨコナデを施す。809～811はミニチュア土器でいずれもロクロを用いていない。杯形である811の口縁部は緩やかな「S」字状を呈し肥厚する。813は土師器・ナベであるが、焼成は良好で胎土も緻密である。形状は体部から口縁部にかけては直線的に開き、端部はナデによって面を形成している。調整技法は外面上位および内面がロクロナデ、外面中位には横位のケズリを施す。812は須恵器・壺の体部片で体部のやや上位に最大径をもつ。焼成は良好で、調整技法は内外面共にロクロナデである。814は鉄製刀子である。切先と茎尻を欠損している。



第228図 SI30 出土遺物(2)

以上の出土遺物の特徴から本竪穴住居跡の時期はⅡ期（9世紀末～10世紀前半）といえる。（小針）

#### SI 31 竪穴住居跡（第229図）

B区 N90W100 グリッドに位置する。住居跡のほとんどが削平と擾乱を受けているため、検出できたのは住居跡北壁から東・西壁の一部のみである。Pit 316、SK27 土坑と重複し、新旧関係は本住居跡がピット316より古く、SK27 土坑よりも新しい。

本遺構はV層上面で黒褐色土上の広がりとして検出した。後世の削平のため残存状況は悪いが、確認できた規模は南北2.90m以上、東西6mであり、平面形は北東隅の状況から方形を呈すると考えている。本住居跡の方位は確認できた平面形が歪であるため測定不能である。

残存していた堆積土は黒褐色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。住居跡は残存していた部分ではやや急傾斜で立ち上がり、検出面から床面までの深さは3～15cmである。床面は傾かない起伏がみられ、住居跡東より若干の貼床が施す。明確な掘りかたを確認することはできなかった。また、カマド・ピット等の施設も確認できなかった。

遺物の出土はないため時期を判断することはできないが、住居内堆積土が他の竪穴住居跡と類似することから平安時代の可能性が考えられよう。（小針）

#### SI 32 竪穴住居跡（第230図）

B区 N100W100 グリッドに位置する。調査区内では住居跡南隅・西隅のみの検出であり、この部分について調査を行っている。そのため本住居跡は完掘を行っていない。

本遺構はV層上面で黒褐色土上の広がりとして検出した。規模は住居跡南隅から西隅まで3.50mであり、平面形は方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた住居跡南隅から西隅までの延長線を基準とするとN-30° Eである。

住居内堆積土は5層に分けた。1・2・5層は黒褐色粘質土、3・4層は暗褐色粘質土を基調としている。このうち3・4層はV層に起因すると考えている黄褐色土ブロックが多く含まれていた。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈することから自然堆積と考えている。

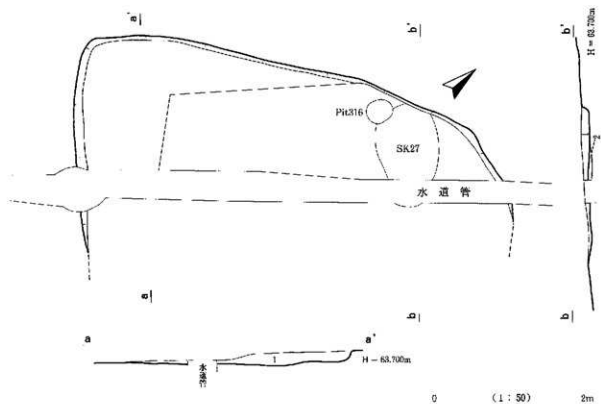
住居跡は確認した部分では急傾斜で立ち上がり、検出面からの深さは30cmである。床面はほぼ平坦に構築されているが、貼床及び掘形を確認することはできなかった。また、カマド・ピット等の施設も確認できなかった。遺物は堆積土中から出土しており総重量は60gであるが、いずれも土師器の小片であり図化できるものはなかった。

時期は遺物の出土が少ないため詳細は不明であるが、遺構の特徴から平安時代の可能性がある。（小針）

#### SI 33 竪穴住居跡（第231図）

C区中央北・N210E0 グリッドに位置する。Pit 331・334・324と重複するが、本住居跡の方が古い。調査したのは住居跡西側の一部であり、ほとんどが調査区外へ延びるため完掘しておらず、したがって詳細も不明である。調査区内における規模は西壁が1.80m、南壁が40cmである。堆積土は黄褐色と黒褐色の2層が確認できる。遺物は112g出土したが、図示できるものはなかった。

調査した面積が極小であるが、その形状、床面の高さ、遺物の出土などから周囲と同様平安時代に属する竪穴住居跡と判断している。（西澤）



第229図 SI31 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI31	1	黒褐色	10yr2/3	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック、炭土粒を少量含む
SI31 掘りかた	2	黒褐色	10yr3/1	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを含む

S138 竪穴住居跡 (第232・233図)

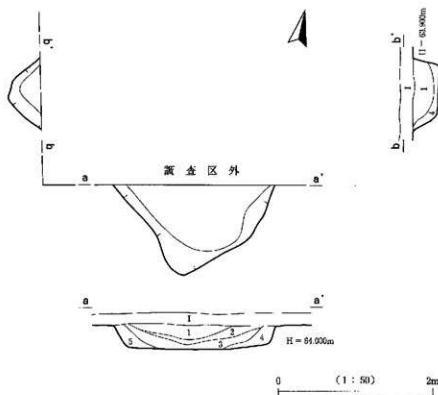
D区 N200E60 グリッドに位置する。調査区内で検出できたのは東壁から北・南壁の一部にかけての約1/2であり、この部分のみ調査を行った。そのため木住居跡は完掘を行っていない。カマド1基が付属する。

木遺構はV層上面で暗褐色土の広がりとして検出した。後世の削平のため残存状況は悪いが、確認できた規模は南北3.80m、東西2.10mであり、平面形は方形を呈するものと考えている。本住居跡の方位は確認できた東壁を基準とするとN-16° -Eである。

調査区内では床面のみを検出であるため住居内堆積土が残存していないが、調査区断面では床面上に黒褐色粘質土と純土ブロックが僅かに残存していた。自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。床面は平坦に構築され、暗褐色粘質土を基調とする貼床を施しているが、調査区断面では床面が南に向かって傾斜している状況を確認している。掘形は住居跡東壁から南壁際を掘り込み、中央付近を平坦に掘り残している。また、部分的なビット状の掘り込みも確認している。

カマドは東壁中央やや北よりに位置し、東壁に対してほぼ直交する。ほとんどが削平のため残存していないが、煙道の一部と煙出しビットを確認している。カマド内堆積土は4層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土、4層は褐色粘質土をそれぞれ基調とする。底面は煙道から煙出しビットにかけて緩やかに落ち込んでいる。煙道は一部ではあるがトンネル状に削り抜かれた状態で残存しており、確認できた煙道の長さは1m15cmである。煙出しビットは径35cmの円形を呈し、検出面からの深さは45cmである。



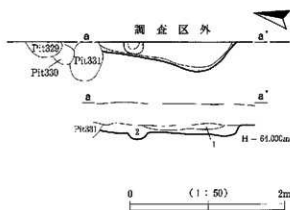


第230図 SI32竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI32	1	黒褐	10yr3/1	粘質土	中	中	黄褐粒~ブロック(小)を多く含む
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	中	やや弱	黄褐粒を少量含む
	3	暗褐	10yr3/4	粘質土	やや弱	やや強	黄褐粒、煙土を含む
	4	暗褐	10yr3/3	粘質土	中	やや弱	黄褐粒を多く含む
	5	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐粒を含む

本竪穴住居跡は遺物の出土が皆無であるため時期を明確にすることはできないが、形状・規模から他の竪穴住居跡と同様、平安時代と考えている。

(小針)



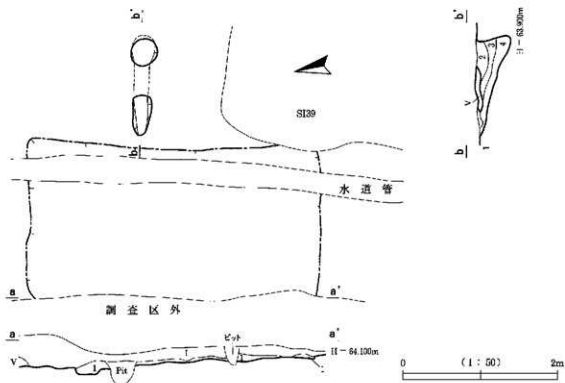
第231図 SI33竪穴住居跡

#### SI39竪穴住居跡(第234~236図)

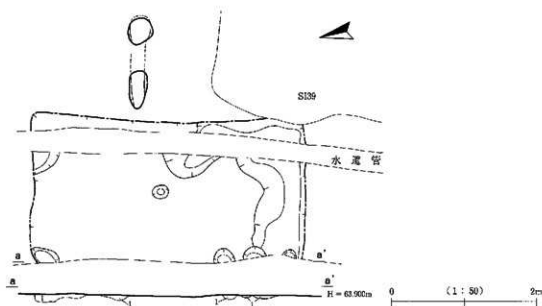
D区 N200E60 グリッドに位置する。SI309 溝跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方がSD09 溝跡より古い。カマド1基、ピット2基が付属する

本遺構はV層上面で黒褐色土の広がりとして検出した。後世の削平のため残存状況は悪いが、確認できた規模は南北3.70m、東西3.70mであり、

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI33	1	黄褐	10yr5/6	粘質土	中	やや強	塊土性ブロック、暗褐ブロックを含む、
	2	黒褐	10yr2/2	粘質土	やや強	中	黄褐ブロックを少量含む



第232図 SI39竪穴住居跡



第233図 SI38掘りかた

遺構名	層番号	色調	記号	二性	粘性	しまり	特徴
SI38	1	黒褐	10y+2/2	粘質土	中	中	炭化物多、塊土ブロック中、黄褐色粘質土ブロック少
SI38掘りかた	1	暗褐	10y+3/3	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色、砂質土ブロック多（粘床）
38カマド	1	黒褐	10y+3/2	粘質土	中	中	塊土ブロック中、炭化物少
	2	明赤褐	2.5y+5/8	シルト	中	強	燃焼部粘土
	3	褐	10y+4/4	粘質土	中	強	黄褐色粘質土ブロック多、黒褐粘質土少
	4	黒褐	10y+2/2	粘質土	中	中	黄褐色ブロック少、粘床が古いビット

平面形はほぼ正方形を呈する。本住居跡の方位は確認できた西壁を基準とするとN-30° ードである。

堆積土は黒褐色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。住居壁は確認部分では急傾斜で立ち上がり、検出面から床面までの深さは3cmである。床面は多少の起伏があるものの概ね平坦に構築され、褐色粘質土を基調とした貼床が施されていた。掘りかたは住居跡の壁周縁を大きく掘り込み、部分的にピット状を呈するが、中央付近は掘り残している。そのため貼床は住居跡壁際では確認できるが、中央付近ではほとんど確認することはできない。

カマドは住居南壁東よりに位置し、南壁に対してほぼ直交する。ほとんどが削平のため残存していないが、燃焼部と煙出し部の一部を確認している。カマド内地積土は煙出し部に黒褐色粘質土の単層を確認したのみである。北面は後世の削平とSI09溝跡のため不明であるが、残存している部分の状況からは燃焼部から立ち上がり、煙出し部に向かって緩やかに落ち込んでいたものと推測できる。確認できた煙道の長さは45cmである。燃焼部は75×50cmの範囲で被熱しており、焼土の厚さは最大で5cmである。

ピットは床面上で2基確認している。ピット1は住居跡北東隅に位置し、規模は90×70cm、床面からの深さは28cmである。堆積土は黒褐色粘質土、黄褐色粘質土、暗褐色粘質土の3層に分けた。ピット2は住居跡南東隅に位置し、規模は75×68cm、床面からの深さは25cmである。堆積土は黒褐色粘質土を基調とする3層に分けた。この2基のピットの性格についてはいずれも位置・規模から貯蔵穴の可能性を考えている。

遺物は2基のピットからの出土である。遺物の総重量は3,116gでそのうち図化したのは890gである。815～817は土師器杯である。815は底部から内湾しながらやや直線的に立ち上がり内面黒色処理を施す。外面はロクロナデの後に最下位に横位のケズリが確認でき、内面は中位に横位のミガキ、中位から下位にかけては縦位のミガキを施す。816は内湾しながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形である。818は底部から内湾しながら立ち上がるが体部中位から口縁部にかけては直線的に外傾する。また、端部はやや肥厚している。816・817はともに内外面ともロクロナデを施す。818は土師器高台杯の底部片である。内面黒色処理を施し、高台は貼付高台であった。819・820は土師器・甕である。口径はほぼ同じだが、口縁部～端部の形状が異なっている。819は内外面ともロクロナデ、821は外面が口縁部から中位にかけてロクロナデ、中位以下は斜位のケズリである。内面は体部に縦位・斜位のハケメを施す。820は土師器・鍋で内湾しながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。端部はナデのため面を形成している。外面はマメツのため明確ではないがロクロナデおよび体部中位に縦位のケズリを施す。内面もマメツのため明確ではないがわずかに中位に横位のハケメが確認できる。822は須恵器・甕の体部片で焼成は良好である。調整技法は内外面ともロクロナデである。

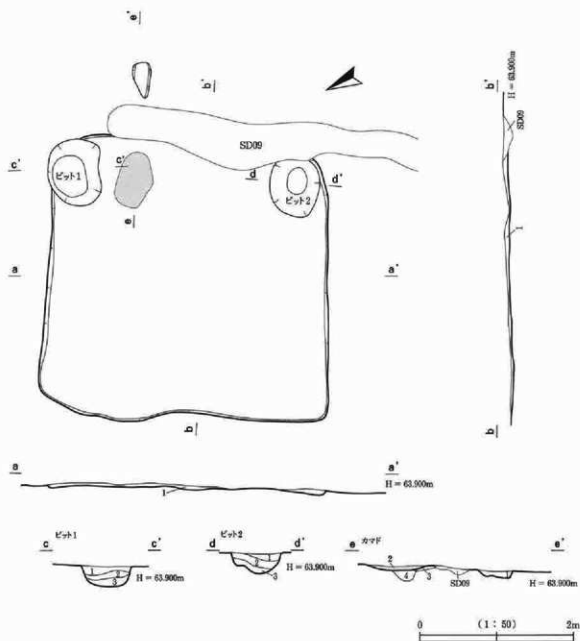
以上、遺構の特徴及び出土遺物から本竈穴住居跡はⅡ期（9世紀末～10世紀前半）に位置づけられる。（小針）

## 2 掘立柱建物跡（SB）

### SB01掘立柱建物跡（第238図）

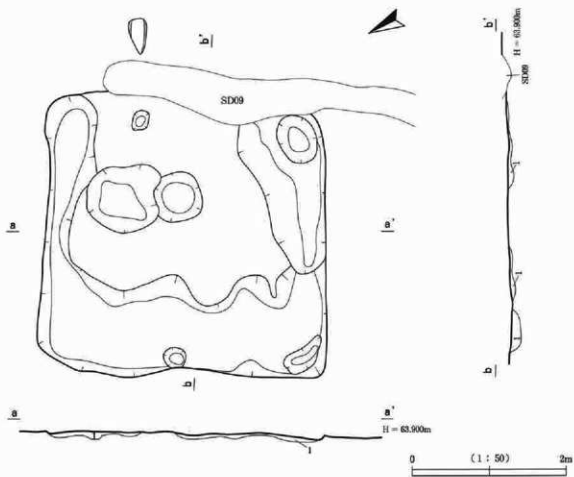
A区南部、N20W180グリッドに位置する。SI21 竈穴住居跡と重複し、本建物跡の方が古い。したがって、構成される柱穴の一部が破壊されており存在しない。隣接して北側にはSB02 掘立柱建物跡が存在する。検出はⅣ層で行っている。

平面形式は、総柱式掘立柱建物跡であり、9基の柱穴から構成されると考えられるが、7基の柱穴のみ確認している。規模は2間×2間であり、桁行き（南北）が3.0m、梁間が（東西）が3.0mであり、面積は9

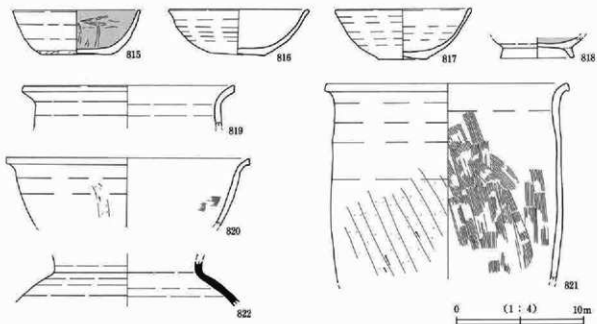


第234図 SI39 竪穴住居跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SI39	1	黒褐色	10yr2/3	粘質土	中	中	黄褐色粘質土粒状に多、炭化物少、焼土粒少
SI39掘りかた	2	褐	10yr4/4	粘質土	中	強	黄褐色粘質土粒状に多、黒褐色粘質土粒状に少
ピット1	1	黒褐色	10yr3/1	粘質土	中	やや強	焼土ブロック、炭化物少量含む
	2	明赤褐色	2.5yr5/6	粘質土	やや弱	中	焼土粒、炭化物多く含む
	3	暗褐色	10yr3/3	粘質土	中	やや強	土器片多し。炭化物、焼土ブロック少量含む
ピット2	1	黒褐色	10yr3/2	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック少、炭化物少量含む
	2	黒褐色	10yr3/2	粘質土	中	やや強	黄褐色粘質土ブロック中、炭化物少量含む
	3	黒褐色	10yr2/2	粘質土	やや強	中	焼土粒少量含む



第235図 Si39 掘りかた



第236図 Si39 出土遺物

m<sup>2</sup>である。建物方位はN-17° -Wである。柱間寸法は150cmを基準とすると考えられる。

各柱穴の深さは確認面より20~30cmであり、非常に浅い。これは掘り込み面をⅢ層と捉えているが、この区域にはⅢ層が確認できないことから、削平が多く及んでいるためと考えられる。したがって、堆積の状況も不明であるが、柱痕の痕跡がわずかに残る柱穴もある。掘りかたの形状はすべて円形であり、直径も50cm前後である。

遺物の出土は認められないものの、堆積土の特徴から平安時代に属すると考えられ軸の方位から推定するとⅡ期（9世紀末~10世紀前半）に属する可能性がある。（西澤）

#### SB02掘立柱建物跡（第238図）

A区中央から東部にかけて、N30W190グリッド付近に位置する。東側に隣接してSB01掘立柱建物跡が、南側にSI20竪穴住居跡が位置している。重複は調査区内においては確認できないが、遺構の大半が調査区外へ延びているため実際は不明である。

調査区内において確認できたのは3基の柱穴のみであるが、柱穴の形状や規模、堆積土の特徴、建物方位、柱穴の広がりなどからSB01掘立柱建物跡と同様の形式に属する建物跡と判断した。規模は確認できたものでは東西が3.0mである。建物方位は多くが調査区外にあるため不明であるが、SB01と同一と思われる。柱間寸法も150cmとSB01同様である。

柱穴の平面形は円形であり、いずれも直径50cm前後であり、深さは確認面から50cmである。

遺物は出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、堆積土の特徴からおおよそ平安時代に属すると考えられまた、配置状況からSB01と同期の可能性がある。（西澤）

#### SB03掘立柱建物跡（第237・239図）

C区北部、N250E0~E30グリッドに位置する。SI28竪穴住居跡と重複するが、本建物跡の方が新しい。平面形式は側柱の掘立柱建物跡であり、下屋柱を伴う。南側の一部が調査区外へ延びるため、完掘を行っていない。桁行が16.20m、梁間が6.30mである東西棟である。柱間寸法は210cmを基本とし西端では一部150cmである。北側と南側の主柱穴には重複が認められるが、これは下屋柱と考え、同じ建物跡を構成する柱穴と捉えている。

遺物は柱穴堆積土より砥石が1点出土している（823）。

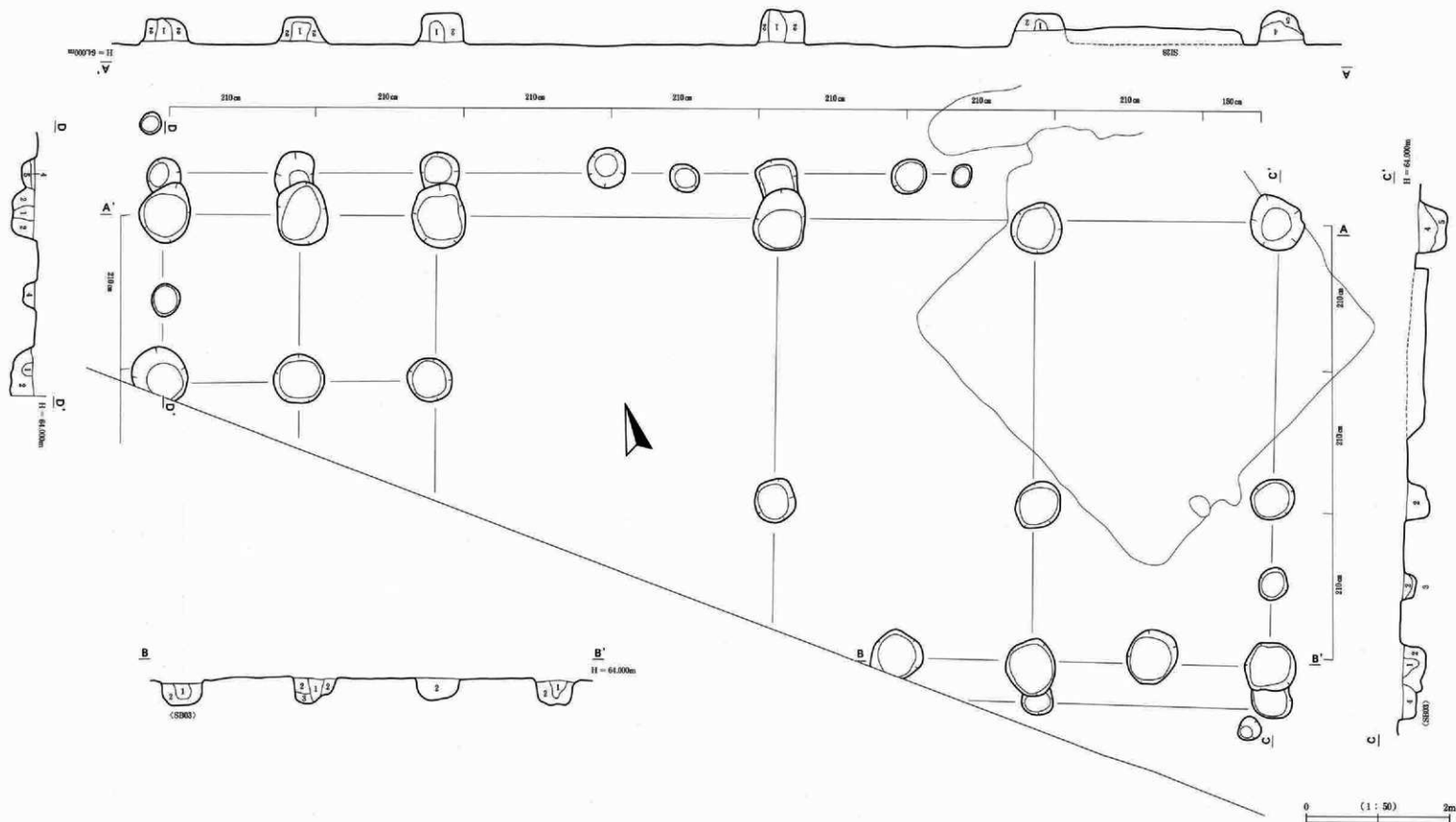
年代は堆積土の特徴と建物跡の構造から近世に属すると考えられる。

（西澤）



第237図 SB03 出土遺物





第239圖 SB03 掘立柱礎物跡



### 3 土坑 (SK)

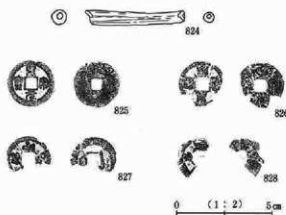
#### SK01土坑 (第242図)

B区 N123W103 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、IV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸150cm、短軸80cm、検出面からの深さは15cmである。遺構内堆積土は黒褐色砂質土の単層であった。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明である。

(小針)

#### SK02土坑 (第240・242図)

B区 N125W100 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、IV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸100cm、短軸65cm、検出面からの深さは15cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であるが、底面で拳大の礫を検出しており、人為堆積の可能性が高い。底面は鍋底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は底面からやや浮いた状態で出土している。824は木製の部品であり、キセルの軸と考えられる。825～828は銅銭である。825は聖宋元宝であり北宋1101年の初鑄年代が考えられている。826～828は磨耗が激しく、銭銘は不明である。



第240図 SK02出土遺物

本土坑の時期・性格については出土遺物から中世墓の可能性はある。

(小針)

#### SK03土坑 (第242図)

B区 N166W109 グリッドに位置する。SK04土坑と重複し、新旧関係は本土坑がSK04土坑より新しい。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な円形を呈し、規模は長軸75cm、短軸70cm、検出面からの深さは70cmである。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は黒褐色砂質土、2層は暗褐色砂質土、3層はふい黄褐色砂質土をそれぞれ基調とする。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積を呈することから自然堆積と判断している。底面は鍋底状を呈し、壁は底面から急傾斜に立ち上がり中位でやや緩やかになったのちに再び急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係から平安時代以降と考えている。

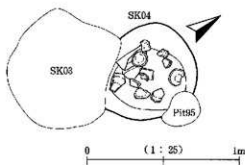
(小針)

#### SK04土坑 (第241・242図)

B区 N166W107 グリッドに位置する。SK03土坑と重複し、新旧関係は本土坑がSK03土坑より古い。本土坑はV層上面で暗褐色土の広がりをもって確認した。平面形は円形を呈し、規模は径70cm、検出面からの深さは28cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は暗褐色砂質土、2層は黒褐色砂質土を基調とする。1層はしまりがやや強く、黄褐色土ブロック・炭化物・焼土粒を含むため、人為堆積の可能性はある。底面

は鍋底状を呈し、壁は急傾斜で立ち上がる。遺物は底面からやや浮いた状態でまとまって出土している。

遺物は937g出土し、そのうち7点605gを図化した。829・831～832・834は杯であり、内面に黒色処理が施されない。そのうち829・832・834は器高が3.5cm以下と非常に低い。これに対し、831は5cm以上ある。色調は赤褐色を呈している。830・833・835は高台杯である。高台部のみの破片である。高い高台（830・835）や低い高台（833）の2つがある。本上坑は出土遺物からⅡ期以降 10世紀中葉の廃棄土坑の可能性がある。（小針）



第241図 SK04遺物出土状況

#### SK05土坑（第242図）

B区N168W108グリッドに位置する。Pit94と重複し、新旧関係は本上坑が古い。本遺構はV層上面で黒色土の広がりをもって検出した。平面形は不正な隅丸方形を呈し、規模は径70cm、検出面からの深さは12cmである。遺構内堆積土は黒色砂質土の単層であった。底面は緩やかな起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は44g出土しているが、細片のため図示していない。時期・性格は不明である。（小針）

#### SK06土坑（第242図）

B区N162W107グリッドに位置する。SI09 竪穴住居跡、SK07土坑と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも本土坑が新しい。本上坑はV層上面で暗褐色土の広がりをもって検出した。平面形は円形を呈し、規模は径80cm、検出面からの深さは38cmである。遺構内堆積土は暗褐色砂質土の単層である。底面は鍋底状を呈し、壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物は616g出土し、そのうち2点600gを図化した。837・838はいずれも甕である。838は底部のみ、837は小甕である。この土坑性格は不明である。重複関係、出土遺物から時期は平安時代以降と考えている。（小針）

#### SK07土坑（第242図）

B区N161W108グリッドに位置する。SI09 竪穴住居跡、SK06土坑、Pit389と重複し、新旧関係は本土坑がSK06土坑より古く、SI07 竪穴住居跡・Pit389より新しい。本土坑はV層上面で暗褐色土の広がりをもって検出した。確認できた平面形は楕円形を呈し、規模は長軸80cm、短軸60cm、検出面からの深さは30cmである。遺構内堆積土は暗褐色砂質土の単層である。底面は西側がやや深く、壁は急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係から平安時代以降と考えている。（小針）

#### SK08土坑（第242図）

B区N164W99グリッドに位置する。SD04溝跡と重複し、新旧関係は本土坑が古い。本土坑はV層上面で確認したが、調査中の手違いにより断面観察を怠ってしまった。したがって、遺構内堆積土・堆積状況は不明である。確認できた平面形は不正な楕円形を呈し、規模は長軸が150cm、短軸が40cm、検出面からの深さは52cmであった。底面は東側に向かって緩やかに落ち込み平坦ではない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、部

分的に挟れる。西壁は他の一方に比べ緩やかに立ち上がるが、これが本来の形状であったかは不明である。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係と規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性はある。(小針)

#### SK 09土坑 (第242図)

B区N161W118グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で暗褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸170cm、短軸85cm、検出面からの深さは40cmである。遺構内堆積土は暗褐色粘質土の単層であった。底面は鍋底状を呈し、壁は底面から急傾斜で立ち上がるが、中位で一度緩やかになったのちに再び急傾斜で立ち上がる。遺物は堆積土中から約90g出土しており、うち4点70gの石器を図示した856~859。本土坑は出土遺物、規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性が高い。(小針)

#### SK 10土坑 (第242図)

B区N158W108グリッドに位置する。SK11土坑、Pit 101と重複し、新旧関係は本土坑がPit 101より古く、SK11土坑より新しい。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不正な楕円形を呈し、規模は長軸110cm、短軸45cm、検出面からの深さは60cmである。遺構内堆積土は黒褐色砂質土の単層であった。底面は西側がやや深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 11土坑 (第242図)

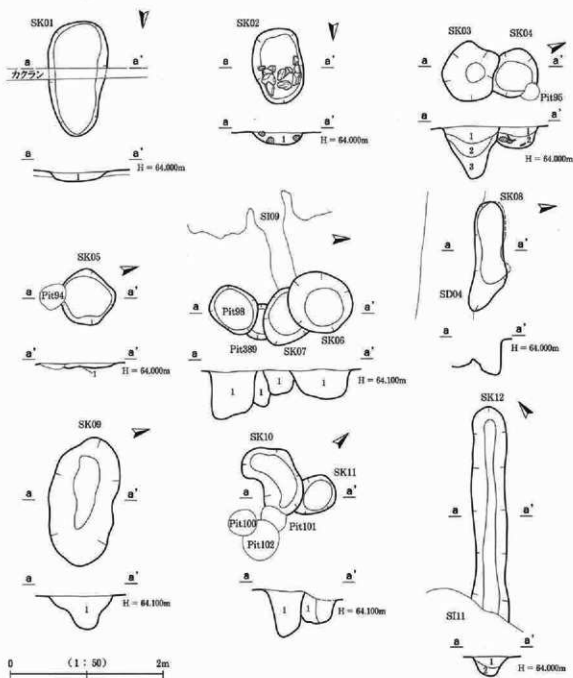
B区N158W108グリッドに位置する。SK10土坑と重複し、新旧関係は本土坑が古い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は円形を呈し、規模は径65cm、検出面からの深さは38cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層である。底面は鍋底状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 12土坑 (第242図)

A区N28W222グリッドに位置する。SI11 窪穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑が古い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は溝状を呈し、確認できた規模は長さ275cm、幅45cm、検出面からの深さは30cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1・2層ともに黒褐色粘質土を基調とする。堆積状況は概ねいわゆるレンズ状堆積を呈するため自然堆積と考えている。底面はほぼ平坦で壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物は26g出土しているが、時期・性格は不明である。重複関係と規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性が高い。(小針)

#### SK 13土坑 (第243図)

A区N20W198グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸120cm、短軸65cm、検出面からの深さは35cmであった。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層である。底面は西側に向かって緩やかに落ち込む。遺物の出土はなく、時期・性格等は不明である。(小針)



第242図 土坑 (SK) 平面図

SK 14土坑 (第243図)

A区 N19W190 グリッドに位置する。調査時には SI18 竪穴住居跡と重複し本土坑が新しいと判断したため、ここでは土坑として扱うが、遺構内堆積土に SI18 竪穴住居跡との明確な差を確認することができないため同竪穴住居跡に付属する施設の可能性がある。本土坑はV層上面で検出したが、調査中の手違いにより断面観察は行っていない。平面形は楕円形を呈し、確認できた規模は長軸110cm、短軸80cm、検出面からの深さは30cmである。底面はほぼ平坦で SI18 竪穴住居跡の床面よりわずかに落ち込む。壁は急傾斜で立ち上

新遺構名	番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SK01	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	弱	弱	
SK02	1	黒褐色	10YR2/3	粘質土	弱	やや弱	
SK03	1	黒褐色	10YR2/3	粘質土	やや弱	やや強	
	2	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや弱	やや強	
	3	にぶい黄褐色	10YR5/1	粘質土	やや弱	弱	
SK04	1	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色砂質土ブロック少 炭化物少 黄土粒少
	2	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや弱	弱	
SK05	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	弱	やや弱	
SK06	1	黒褐色	10YR2/3	粘質土	弱	弱	
SK07	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	弱	やや弱	
SK08	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	弱	弱	黄褐色砂質土ブロック少 炭化物少 黄土粒少
SK09	1	暗褐色	10YR3/4	粘質土	やや強	やや強	黄褐色砂質土ブロック少 炭化物少 黄土粒少
SK10	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土ブロック中 炭化物少
SK11	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや弱	強	黄褐色砂質土 多
SK12	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロック(中)を少量含む
	2	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを多く含む

がる。遺物は286g出土しており、そのうち1点34gを図示している(836)。内面に黒色処理が施される杯であり、底部割縁にヘラケズリによる再調整が施される。時期は出土遺物から平安時代に属すると考えられる。(小針・西澤)

#### SK15土坑(第243図)

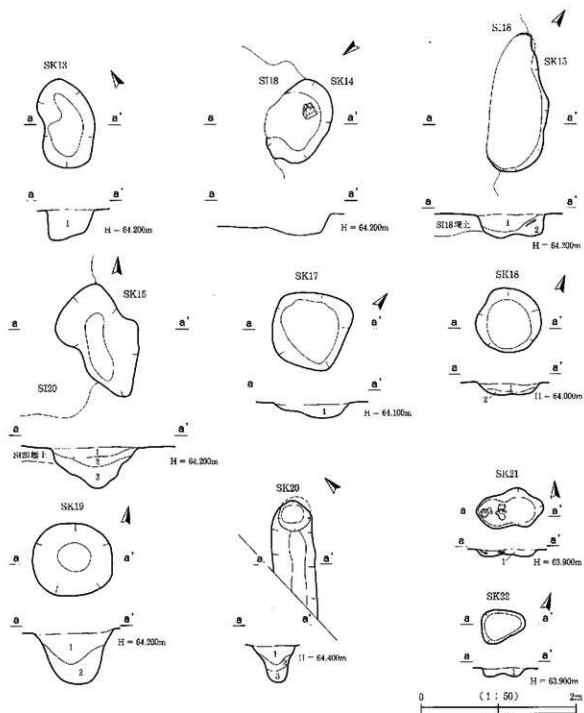
A区N19W192グリッドに位置する。SK14同様、調査時にはSI18 竪穴住居跡と重複し本土坑が新しいと判断したためここでは土坑として扱っている。しかし、断面観察ではSI18 竪穴住居跡との間に明確な立ち上がりを確認することはできず、同竪穴住居跡に付属する施設の可能性が高い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸188cm、短軸70cm、検出面からの深さは35cmであった。遺構内堆積土は2層に分けた。1・2層ともに黒褐色粘質土を基調とし、前述したようにSI18 竪穴住居跡の堆積土と非常に近い。底面は北側がわずかに落ち込むが、SI18 竪穴住居跡の床面とほとんど差がない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は787g出土しているが図示できない。時期は堆積土の様子からSI18と同時期と考えられる。(小針)

#### SK16土坑(第243図)

A区N16W182グリッドに位置する。調査時にはSI20 竪穴住居跡と重複し本土坑が新しいと判断したためここでは土坑として扱うが、SI20 竪穴住居跡に付属する施設の可能性もある。本土坑はV層上面で褐灰色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸180cm、短軸85cm、検出面からの深さは55cmである。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は褐灰色粘質土、2層は黒褐色粘質土、3層はにぶい黄褐色粘質土をそれぞれ基調とする。底面は鍋底状を呈し、SI20 竪穴住居跡の床面からは落ち込む。壁は底面から緩やかに立ち上がったのち、中位で急傾斜に立ち上がる。遺物は72g出土しているが図がでない。時期は堆積土の状況からSI20と同時期と考えられる。(小針)

#### SK17土坑(第243図)

A区N14W172グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって確認している。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸100cm、短軸95cm、検出面からの深さは18cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。底面は鍋底上で東側がやや落ち込み、壁は比較的緩やかに立ち上がる。遺物の出土はなく、時期・性格については不明である。(小針)



第243図 土坑 (SK) 平面図 (2)

SK18土坑 (第243図)

A区 N14W167 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。平面形は不整な円形を呈し、規模は径85cm、検出面からの深さは18cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は褐色粘質土を基調とする。底面はほぼ平坦で、壁は比較的緩や

新編墳名	番番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SK13	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	黄褐色ブロックを少量含む
SK15	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	中	黄褐色 炭化物を含む
SK16	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックを含む ブロックの大きさが大きい
	1	灰褐色	10YR4/1	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックやや多く含む 焼土粒を少量含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	中	炭化物 凝土粒 黄褐色ブロックを少量含む
SK17	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質土	やや強	中	焼土ブロック、炭化物を含む
	4	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや弱	焼土ブロック、炭化物をやや多く含む
	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	焼土ブロック多い 焼土粒中 炭化物
SK18	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや強	
	2	褐色	10YR4/4	粘質土	中	やや強	黄褐色砂質ブロック多い
SK19	1	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	中	黄褐色砂質ブロックを少量含む
	2	にぶい黄褐色	10YR4/5	粘質土	やや弱	中	暗褐色ブロックを少量含む
SK20	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや強	
	2	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	やや強	やや暗褐色味 断片質か？黄褐色ブロック(中)を含む
	3	黒褐色	10YR3/3	粘質土	やや強	やや弱	暗に黄褐色(地山)ブロックを含む
SK21	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	中	
SK22	1	黒褐色	10YR3/3	粘質土	中	やや弱	

かに立ち上がる。遺物の出土はなく、時期・性格は不明である。

(小針)

#### SK 19 土坑 (第243図)

A区 N22W185 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で暗褐色土の広がりをもって確認した。平面形は円形を呈し、規模は径105cm、検出面からの深さは90cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は暗褐色シルト、2層は褐色砂質土を基調とする。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積を呈するため自然堆積と判断している。底面は鍋底状で、壁は急角度で立ち上がる。遺物は48.7g出土しているが細片である。時期・性格は不明である。

(小針)

#### SK 20 土坑 (第243図)

A区 N17W192 グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、南側が調査区外に延びるため完掘を行っていない。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。確認できた規模は長軸133cm、短軸55cm、検出面からの深さは50cmであり、平面形は長い楕円形を呈すると推測している。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土を基調とする。堆積状況は微ないわゆるレンズ状堆積を呈するため自然堆積と判断している。底面はほぼ平坦であるが、北端はビット状に掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上位でやや開く。遺物は10.9g出土しているが、少量のため時期・性格は不明であるが、規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性が高い。

(小針)

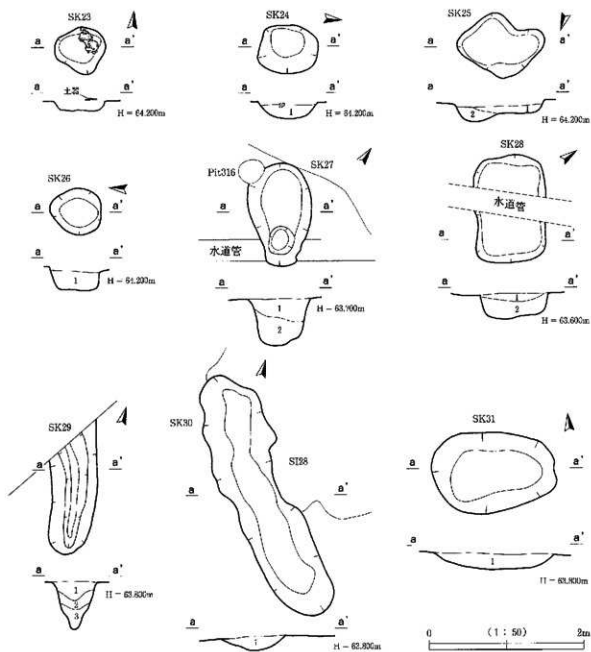
#### SK 21 土坑 (第243図)

B区 N169W107 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸93cm、短軸53cm、検出面からの深さは8cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。底面はやや起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は底面から浮いた状態で出土している。279gの遺物が出上しそのうち2点197gを図示した。839・840は杯である。840は内面に黒色処理が施され、839に比べて大型である。出土遺物から本土坑の時期はⅡ期(9世紀末～10世紀前葉)に位置づけられると考えている。

(小針)

#### SK 22 土坑 (第243図)

B区 N169W108 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって



第244図 土坑 (SK) 平面図 (3)

検出している。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸58cm、短軸43cm、検出面からの深さは13cmである。遺構内堆積土は黒褐色砂質土の単層であった。底面には起伏があり、壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物の出土は1,855g出土し、うち8点992gを図示している。841・843は内面に黒色処理が施される杯でいずれもゆるやかに内湾する体部をもつ。845は内外面ともに黒色処理が施される。両面とも細かなミガキが施される。842・844は高台杯で、内面に黒色処理が施されない。841は高台のみの破片である。846～848は甕でいずれもロクロ調整である。出土遺物より時期は平安時代であるが詳細は不明である。(小針)



新遺構名	番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SK22	1	黒褐	10YR5/3	粘質土	中	やや弱	
SK23	1	黒褐	10YR1/1	粘質土	中	やや強	黒褐色少量含む
SK24	1	黒褐	10YR2/2	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックを含まない
SK25	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	中	やや強	下に黄褐色ブロック(大)を含む
	2	暗褐	10YR3/3	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを多く含む
SK26	1	黒褐	10YR5/1	粘質土	やや強	やや強	黄褐色ブロックを含む 遊上収炭化物含む
SK27	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	やや強	中	φ5cm前後の円礫(擾乱?)を含む
	2	暗褐	10YR3/3	粘質土	中	中	黄褐色を少量含む
SK28	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックを含む
	2	暗褐	10YR3/4	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを多く含む
SK29	1	黒褐	10YR5/1	粘質土	中	やや強	黄褐色をほとんど含まない
	2	黒褐	10YR2/2	粘質土	中	やや強	黄褐色ブロックを含む
	3	褐色	10YR4/4	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを含む
SK30	1	黒褐	10YR2/2	粘質土	中	やや弱	暗褐色粘質土ブロック少
SK31	1	黒褐	10YR2/2	粘質土	中	やや強	

#### SK 23土坑 (第244図)

A区 N17W185 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で検出しているが調査時の手違いにより断面観察は行っていない。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸63cm、検出面からの深さは18cmであった。底面はほぼ平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物は底面から浮いた状態で出土している。出土量は624gであり、そのうち1点277gを図示している。849は土師器であり、底部を欠損している。出土遺物から本土坑は平安時代に属すると考えられる。(小針)

#### SK 24土坑 (第244図)

A区 N21W203 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色上の広がりをもって検出している。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸80cm、短軸70cm、検出面からの深さは20cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。底面は鍋底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物の出土はなく、時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 25土坑 (第244図)

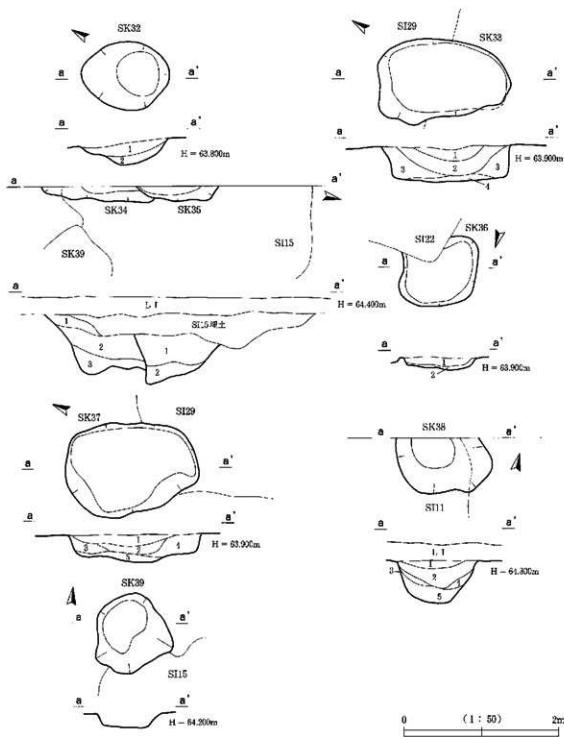
A区 N24W197 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色上の広がりをもって検出している。平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は長軸110cm、短軸85cm、検出面からの深さは18cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土を基調とする。底面は西側がやや深く鍋底状であるのに対し、東側はほぼ平坦である。壁はやや急傾斜で立ち上がる。本土坑は遺物の出土がないため時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 26土坑 (第244図)

A区 N25W198 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は円形を呈し、規模は径63cm、検出面からの深さは25cmであった。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層である。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物ごく少量、20gのみ出土している。時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 27土坑 (第244図)

B区 N92W88 グリッドに位置する。S31 竪穴住居跡、Pit 316と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも本土坑が古い。本土坑はS31 竪穴住居跡貼床除去後に黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は楕円



第245図 土坑 (SK) 平面図 (4)

形を呈し、規模は長軸128cm、短軸80cm、検出面からの深さは65cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土を基調とする。堆積状況からは自然堆積か人為堆積かを判断することはできない。底面は概ね平坦であるが、南端はピット状に掘り込んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

新設標名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SK32	1	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	
	2	暗褐色	10YR3/4	粘質土	中	中	黒褐色粘質土ブロック少
SK33	1	灰褐色	10YR3/4	粘質土	中	中	黄褐色粘質土ブロック多い
	2	黒褐色	10YR3/2	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色粘質土ブロック多い
	3	黄褐色	10YR7/6	粘質土	やや弱	中	黒褐色粘質土ブロック少
SK37	1	暗褐色	10YR3/3	粘質土	弱	弱	(骨片含む) 有機質腐った層と混る
	2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質土	中	やや弱	黄褐色粘質土ブロック多
	3	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや弱	弱	黒褐色粘質土ブロック中 炭化物少
	4	暗褐色	10YR3/3	粘質土	中	中	黒褐色粘質土ブロック少 黄褐色粘質土少
	5	明黄褐色	10YR5/6	粘質土	中	やや強	暗褐色粘質土ブロック少
SK34	1	黒褐色	10YR4/4	粘質土	中	弱	元有機質か?
	2	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	黄褐色粘質土を少量含む
	3	黒褐色	10YR2/3	粘質土	やや弱	やや弱	褐色粘質土を少量含む
SK35	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	中	暗褐色粘質土を少量含む
	2	黄褐色	10YR5/8	粘質土	やや強	中	暗褐色粘質土を少量含む
	1	黄褐色	10YR5/2	粘質土	中	中	暗褐色粘質土を少量含む
SK36	1	黄褐色	10YR5/8	粘質土	やや強	中	暗褐色粘質土を少量含む
	2	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	褐色粘質土を少量含む
SK38	1	解褐	7.5YR3/4	粘質土	やや弱	中	粘土ブロックを多く含む
	1	褐灰	10YR5/1	粘質土	中	中	褐色粘質土を多く含む
	2	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや弱	暗褐色粘質土を少量含む
	3	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	やや弱	褐色粘質土を少量含む
	5	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質土	中	中	褐色粘質土を多く含む
		黄褐色	10YR5/3	粘質土	やや弱	やや弱	暗褐色、明黄褐色ブロックを含む

本土坑は遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性があらる。(小針)

#### SK 28土坑 (第244図)

B区 N87W92 グリッドに位置する。ほぼ中央を水道管によって破壊されているが、他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色粘質土の広がりをもって検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長軸140cm、短軸85cm、検出面からの深さは38cmであった。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土を基調とする。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなく、時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 29土坑 (第244図)

B区 N96W90 グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、北側が調査区外に延びるため完掘を行っていない。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は溝状を呈し、確認できた長さは155cm、幅63cm、検出面からの深さは73cmである。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は褐色粘質土を基調とする。堆積状況は概ねいわゆるレンズ状堆積であるため自然堆積と判断している。底面は幅が狭いがほぼ平坦であった。壁は底面から急傾斜で立ち上がり、中位でやや傾斜が緩やかになったのちに再び急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、規模・形状から縄文時代の陥し穴である可能性が高い。(小針)

#### SK 30土坑 (第244図)

C区 N247E25 グリッドに位置する。S128 罅穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑がS128 罅穴住居跡より新しい。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は溝状を呈し、規模は長さ325cm、幅80cm、検出面からの深さは20cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 31土坑 (第244図)

C区 N244E32 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。平面形はやや不整な楕円形で、規模は長軸158cm、短軸108cm、検出面からの深さは23cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であるが、しまりがやや強いため人為堆積の可能性もある。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 32土坑 (第245図)

C区 N243E13 グリッドに位置する。他の遺構との重複はなく、V層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。平面形はやや不整な楕円形で、規模は長軸113cm、短軸90cm、検出面からの深さは30cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土を基調とする。堆積状況は概ねいわゆるレンズ状堆積であり、自然堆積と判断している。底面は鍋底状を呈する。壁はやや急傾斜で立ち上がるが、北端では中位で一度緩やかになる。遺物の出土はなく、時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 33土坑 (第245図)

C区 N228E5 グリッドに位置する。SI29 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本上坑がSI29 竪穴住居跡より新しい。本上坑はV層上面で灰黄褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸170cm、短軸103cm、検出面からの深さは45cmであった。遺構内堆積土は4層に分けた。1層は灰黄褐色粘質土、2層は黒褐色砂質土、3層は明黄褐色砂質土、4層は暗褐色砂質土をそれぞれ基調とする。1～3層はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈するが、しまりや含有物から人為堆積と考えている。また、4層はしまりが非常に弱く、骨片を含むため本来は有機質であった層と考えている。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は堆積土中から9gのみ出土している。

本上坑の時期・性格は出土遺物及び堆積状況から近世墓と考えている。

(小針)

#### SK 34土坑 (第245図)

A区 N19W202 グリッドに位置する。SI15 竪穴住居跡、SK35 土坑と重複し、新旧関係はいずれの遺構より本上坑が古い。本上坑はSI15 竪穴住居跡貼床除去後に黒褐色土の広がりをもって確認したが、西側はSK35 土坑によって破壊され、南側は調査区外に延びるため完掘を行っていない。確認できた規模は長さ125cm、幅23cm、検出面からの深さは53cmであり、平面形は溝状を呈すると推測している。遺構内堆積土は3層に分けたが、いずれも黒褐色粘質土を基調とする。底面は起伏が激しく、東側を深く掘り込んでいる。壁は急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係、規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性はある。

(小針)

#### SK 35土坑 (第245図)

A区 N19W201 グリッドに位置する。SI15 竪穴住居跡、SK34 土坑と重複し、新旧関係は本上坑がSI15 竪穴住居跡より古く、SK34 土坑より新しい。本上坑はSI15 竪穴住居跡貼床除去後に黒褐色土の広がりをもって確認したが、南側が調査区外に延びるため完掘を行っていない。確認できた規模は長軸110cm、短軸20cm、検出面からの深さは60cmであり、平面形は不整な楕円形を呈すると推測している。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は黄褐色粘質土を基調としている。底面は東側が深く平坦ではない。

壁は底面から急傾斜で立ち上がり、上位でやや開く。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、SK34同様、重複関係と規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性はある。(小針)

#### SK 36土坑 (第245図)

A区 N15W165 グリッドに位置する。SI22 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑がSI22 竪穴住居跡より古い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸90cm、短軸85cm、検出面からの深さは20cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は暗褐色粘質土を基調とする。底面はやや起伏があるが概して平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係から平安時代以前の可能性がある。(小針)

#### SK 37土坑 (第245図)

C区 N23E3 グリッドに位置する。SI29 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑がSI29 竪穴住居跡より新しい。本土坑はV層上面にふい黄褐色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸185cm、短軸120cm、検出面からの深さは40cmであった。遺構内堆積土は5層に分けた。1層はふい黄褐色砂質土、2層は暗褐色砂質土、3層は暗褐色粘質土、4層は明黄褐色粘質土、5層は褐色砂質土をそれぞれ基調とする。1～4層はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈するが、しまりや含有物から人為堆積と考えている。5層はしまりが非常に弱く本来は有機質であった層と考えている。また、3層は骨片を含んでいた。底面は中央が緩やかに落ち込み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は出土していないものの、骨片の出土やその形状及び堆積状況から近世墓と考えている。(小針)

#### SK 38土坑 (第245図)

A区 N24W222 グリッドに位置する。SI11 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑がSI11 竪穴住居跡より古い。本土坑はV層上面とSI11 竪穴住居跡床面で黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸128cm、短軸70cm、検出面からの深さは60cmである。遺構内堆積土は5層に分けた。1層は褐灰色粘質土で断面観察でのみ確認できた層である。2・3層は黒褐色粘質土、4層はふい黄褐色粘質土、5層は黄褐色砂質土を基調とする。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を呈するため自然堆積と判断している。底面は鍋底状で、壁は急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係から平安時代以前と考えることができる。(小針)

#### SK 39土坑 (第245図)

A区 N19W199 グリッドに位置する。SI15 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本土坑がSI15 竪穴住居跡より新しい。本土坑はV層上面で確認しているが、調査時の不注意により断面観察を行わず完掘してしまった。平面形は不整な円形で、径108cm、検出面からの深さは15cmである。底面はほぼ平坦で壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係からは平安時代以降といえる。

(小針)

#### SK 40土坑 (第246図)

C区 N163E3 グリッドに位置する。SD06 溝跡と重複し、新旧関係は本土坑がSD06 溝跡より古い。本土坑はSD06 溝跡の底面で灰褐色土の広がりをもって確認している。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸145

cm、短軸50cm、検出面からの深さは55cmである。遺構内堆積土は4層に分けた。1層は灰褐色粘質土、2層はにぶい黄褐色粘質土、3・5層は暗褐色粘質土、4層は褐色砂質土を基調とする。堆積状況は概していわゆるレンズ状堆積を呈するため自然堆積と考えている。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが中位でやや開く。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係と規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性はある。(小針)

#### SK 41土坑 (第246図)

C区 N241W12 グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、調査開始時に内側をサブレンチによって破壊してしまった。本土坑はV層上面で褐灰色土の広がりをもって検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸190cm、短軸120cm、検出面からの深さは53cmである。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は褐灰色粘質土、2層は黒褐色粘質土、3層は黒色粘土を基調とし、1・2層は人為堆積の可能性はある。底面は平坦で、壁はやや急傾斜で立ち上がる。遺物の出土はなく、時期・性格は不明である。(小針)

#### SK 42土坑 (第246図)

D区 N188E61 グリッドに位置する。SD09 溝跡と重複し、新旧関係は本土坑がSD09 溝跡より古い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって確認した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸108cm、短軸50cm、検出面からの深さは48cmである。遺構内堆積土は4層に分けた。1層は黒褐色粘質土、2層は黒褐色粘土、3層は灰黄褐色粘質土、4層は黒褐色粘土を基調とする。堆積状況は概ねいわゆるレンズ状堆積を呈し、自然堆積と考えている。底面は平坦で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がったのち上位でやや開く。遺物の出土がないため時期・性格は不明であるが、重複関係と規模・形状から縄文時代の陥し穴の可能性はある。(小針)

#### SK 43土坑 (第246図)

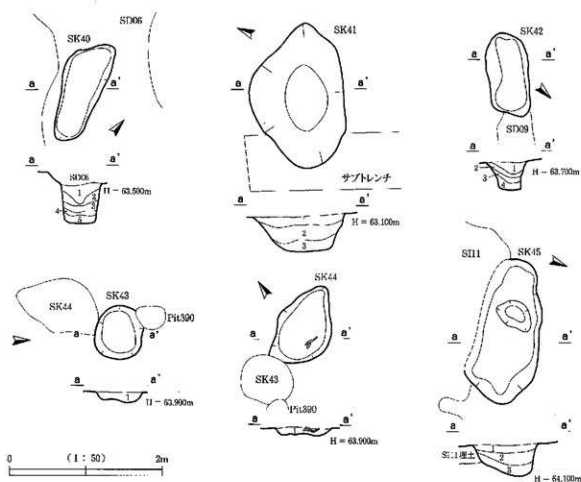
A区 N18W186 グリッドに位置する。SK44 土坑、Pit 190 と重複し、新旧関係は本土坑が Pit 190 より古く SK44 土坑より新しい。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。平面形は円形で、規模は径70cm、検出面からの深さは15cmである。遺構内堆積土は黒褐色砂質土の単層であった。底面は鍋底状で東側がやや深く、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は279g 出土し、そのうち2点197g を図示した。(小針)

#### SK 44土坑 (第246図)

A区 N17W187 グリッドに位置する。SK43 土坑と重複し、新旧関係は本土坑がSK44 土坑より古い。本土坑はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸110cm、短軸75cm、検出面からの深さは10cmである。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であった。底面は起伏があり平坦ではない。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は底面から浮いた状態で出土している。総重量1.855g であり、そのうち8点・993g を図示している。(小針)

#### SK 45土坑 (第246図)

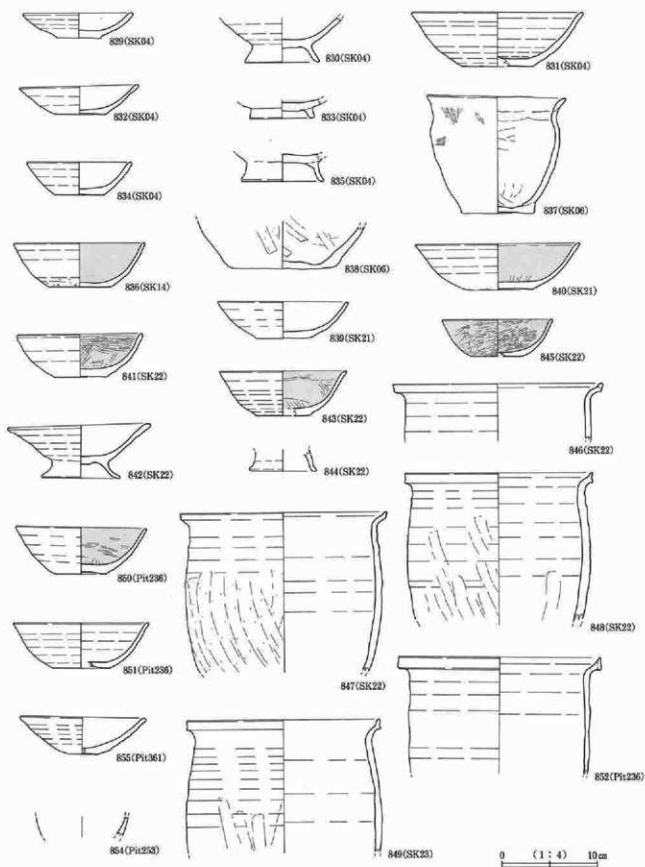
A区 N26W218 グリッドに位置する。調査時には SI11 竅穴住居跡と重複し本土坑が新しいと判断したた



第246図 土坑 (SK) 平面図 (5)

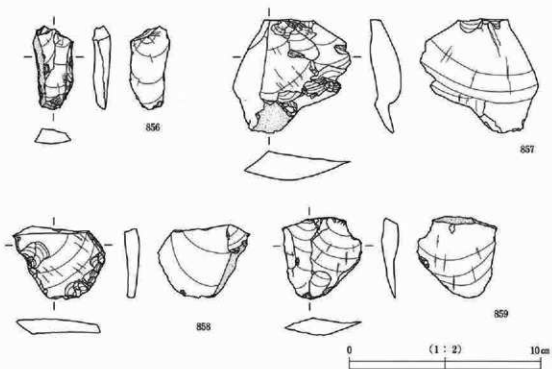
新遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SK40	1	灰褐色	7.5YR4/2	粘質土	やや強	強	灰褐色ブロック(小)を含む
	2	にぶい黄褐色	10YR6/3	粘質土	中	中	黄褐色粒少量含む
	3	暗褐色	10YR3/3	粘質土	やや弱	中	暗褐色粒少量含む
	4	褐色	10YR4/4	粘質土	やや弱	中	褐色粒少量含む
SK41	5	暗褐色	7.5YR3/3	粘質土	中	中	
	1	褐色	10YR4/1	粘質土	やや強	中	
SK42	2	黒褐色	10YR3/2	粘質土	中	中	
	3	黒	10YR2/1	粘質土	強	中	
	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロック少量含む
SK43	2	黒褐色	10YR3/2	粘質土	やや強	中	黄褐色少量含む
	3	灰褐色	10YR6/2	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色ブロック少量含む
	4	黒褐色	10YR2/3	粘質土	強	中	
	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	中	やや弱	黄褐色粒子を少量含む
SK44	1	黒褐色	10YR3/2	粘質土	やや強	中	黄褐色ブロックを含む
	2	暗褐色	10YR3/3	粘質土	中	中	
SK45	1	黒褐色	10YR3/1	粘質土	やや強	中	
	2	暗褐色	10YR3/3	粘質土	中	やや強	2層は、S.IIより黄褐色砂質が多い
	3	黒褐色	10YR2/2	粘質土	中	中	黄褐色ブロックを含む

め、ここでは土坑として扱うが、遺構内堆積土に S.II 堅穴住居跡との明確な差を確認することができないため同堅穴住居跡に付属する施設の可能性が高い。本土坑は V 層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 188cm、短軸 63cm、検出面からの深さは 40cm である。遺構内堆積土は 3 層に分けた。1・3 層は黒褐色粘質土、2 層は暗褐色粘質土を基調とする。底面は東側が深く、



第247圖 土坑出土遺物





第248図 SK09出土石器

SI11 竪穴住居跡の床面よりもやや深く掘り込んでいる。中央にはビット状の落ち込みを確認している。壁は急傾斜で立ち上がる。遺物の出土は確認できなかった。時期は、堆積土の状況や位置関係からSI11と同時期と考えられる。  
(小針)

#### 4 溝跡 (SD)

##### SD 01 溝跡 (第249図)

B区N100W110グリッドに位置する。調査区内ではSI01 堅穴住居跡と重複し、新旧関係は本溝跡がいずれの遺構よりも新しい。本溝跡は北西から南東に向かって直線的に延びるが、N85W100グリッド付近で三方に分岐する。南・東は後世の削平によって破壊され、北西・南西は調査区外に延びるため、本遺構は完掘を行っていない。

本遺構はV層上面で暗褐色土の広がりをもって検出した。遺構内堆積土は暗褐色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。分岐部分については南・東に延びる溝跡の幅がやや狭くなるため、2つの溝跡の重複の可能性もある。しかし、調査中には平面観察での重複は確認できず、堆積土も同じであったため同一の溝跡と判断した。調査区内で確認した長さは分岐部分までが10.6m、分岐部分から西に4.5m、東に1.1m、南に0.9mである。上幅は最大で1.3m、深さは30cmであった。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦だが概して南側に向かって低くなっている。

遺物は2点のみ出土している(861・862)。いずれも大塚相馬産の碗の皿で近世に属すると考えられる。

本溝跡は時期・性格については不明である。ただし、時期については遺物や堆積土から近世以降の可能性が高い。(小針・西澤)

##### SD 02 溝跡 (第249図)

B区N100W110グリッドに位置する。調査区内ではPit 2・3・4と重複し、新旧関係は本溝跡がいずれのPitよりも新しい。本溝跡は北西から南東に向かって緩やかに蛇行しながら延びるが、南東は後世の削平によって破壊され、北西は調査区外のため完掘を行っていない。

本遺構はV層上面で暗色土の広がりをもって検出した。遺構内堆積土はSD01 溝跡と同様暗褐色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。調査区内で確認した長さは18.4m、上幅は最大で95cm、深さは15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦だが南側に向かって低くなっている。

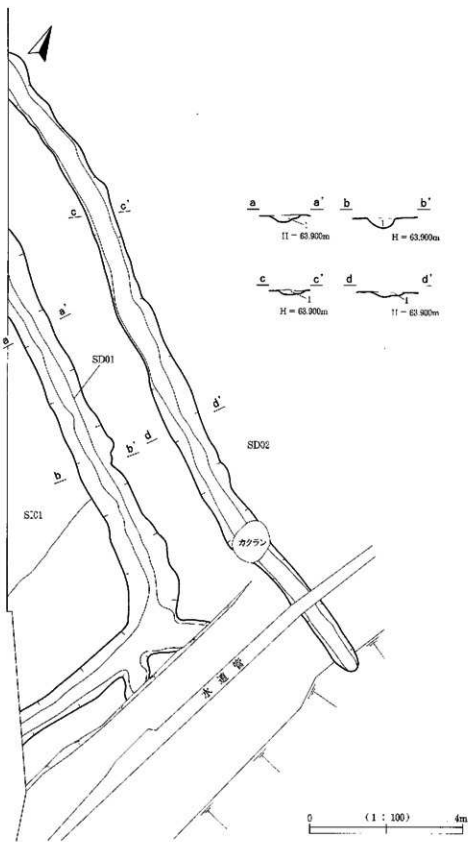
本溝跡は時期・性格については不明であるが、堆積土がSD01 溝跡と同一であり、ほぼ平行して延びる。このことから、本溝跡はSD01 溝跡と同様の性格を有し、時期についても同様比較的近い時期の溝跡と考えることができる。(小針)

##### SD 03 溝跡 (第250・251図)

B区N110W110グリッドに位置する。調査区内ではPit 24と重複し、新旧関係は本溝跡が新しい。本溝跡は東から西に向かって直線的に延びるが、両端とも調査区外に延びるため完掘を行っていない。

本溝跡はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。調査区内で確認した長さは8.7m、上幅は最大で55cm、深さは20cmであった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。遺物は石筴が1点のみ出土している(860)。

本溝跡は出土遺物が少量であるため時期・性格については不明である。しかし、時期については堆積土から中世以前の可能性が高く、また、性格についても堆積状況に水の影響を確認できないことから区画等の性格を考えている。(小針)



第249図 SD01・02溝跡

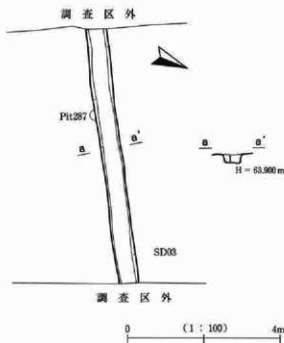
### SD 04溝跡 (第252・253図)

B区 N180～N160W110 グリッドに位置する。SE02 井戸跡・SK08 土坑と重複し、新旧関係は本溝跡がSE02 井戸跡より古く、SK08 土坑より新しい。本溝跡は南東から北西に向かって直線的に伸びるが、南東は調査区外に伸び、北西は後世の削平によって破壊されているため完掘を行っていない。

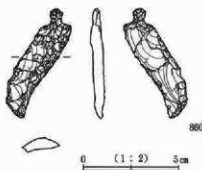
本溝跡はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出した。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色土砂質土、3層は暗褐色砂質土を基調とする。2・3層はV層に起因すると考えている黄褐色土ブロックを含んでいるが、しまりが強くないため壁の崩落土と考えている。また、3層は本溝跡内南東側では確認できず、SE02 井戸跡より北西の底面に確認した層である。堆積状況はいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を示しており、自然堆積と考えている。調査区内で確認できた長さは19.8m、上幅は最大で90cm、深さは40cmである。壁は底面から急傾斜で立ち上がり、上位でやや大きく開く。底面はほぼ平坦であった。

遺物は4点が図示可能である。863は須恵器長頸瓶の底部片であり、平安時代に属する。

古代の遺物が出土するものの、B区 N150～N170W110 グリッドに集中する Pit 群が近世の掘立柱建物跡を形成する可能性もあり、その場合、本溝跡はこの掘立柱建物跡と同一の方位であるため、近世の区画溝としての性格を考えることもできる。(小針)



第250図 SD03溝跡



第251図 SD03出土遺物

### SD 05溝跡 (第254図)

B区 N100W120 グリッドに位置する。SI07 竪穴住居跡と重複し、新旧関係は本溝跡がSI07 竪穴住居跡より新しく、Pit より古い。本溝跡は北東から南西に向かってほぼ直線的に伸びるが、北東は後世の削平によって残存状況が悪く、南西は調査区外に伸びる。そのため、本溝跡は完掘を行っていない。

本溝跡はV層上面において黒褐色土の広がりをもって検出した。遺構内堆積土は暗褐色砂質土の単層であり、人為堆積か自然堆積か判断することはできなかった。調査区内で確認できた長さは12.3m、上幅は最大で95cm、深さは10cmである。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦であった。

本溝跡は出土遺物が皆無であるため時期・性格等は不明であるが、堆積土から近世以降の可能性はある。

(小針)

### SD 06溝跡 (第255図)

C区 N170E 0 グリッドに位置する。SK40 と重複し、新旧関係は本溝跡がSK40 より新しい。本溝跡は北

西から南東に向かって直線的に延びるが、南東は調査区外に延びるため完掘を行っていない。

本溝跡はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土を基調とし、黄褐色土ブロックを含むが、粘性がやや強かった。3層は褐灰色粘質土を基調としている。堆積状況は概ねいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を示すため、自然堆積と考えている。調査区内で確認できた長さは8.1m、上幅は最大で1.8m、検出面からの深さは45cmである。壁は底面から急傾斜で立ち上がり、底面はほぼ凹凸がなく南東に向かって低くなっていた。

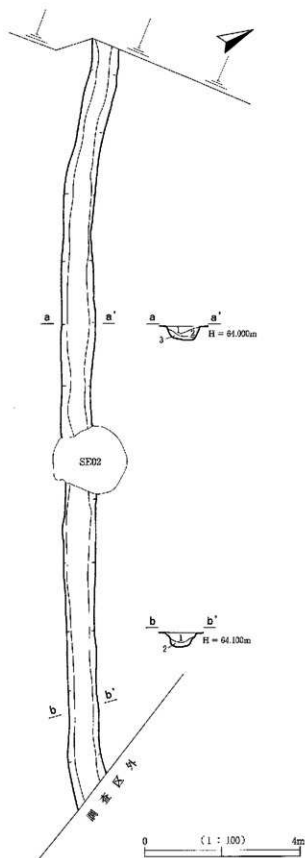
遺物は1点のみ出土している(864)。大塚相馬産の竈であり、近世に属する。

本溝跡の時期は出土遺物から近世とすることができる。また、性格については不明であるが、堆積土に粘性がやや強い層が確認でき、地形の低い側に向かって延びることから排水施設としての機能を想定している。(小針)

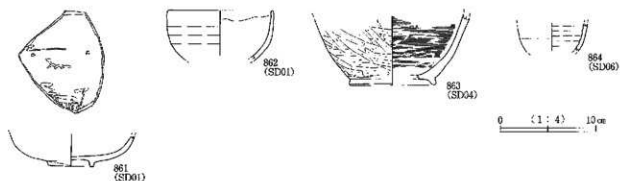
#### SD 07 溝跡 (第256図)

C区 N250W10 グリッドに位置する。SD08 溝跡と重複し、新旧関係は本溝跡がSD08 溝跡より新しい。本溝跡は南東から北西に向かってほぼ直線的に延びるが、N240E0グリッド付近ではやや角度を北に変える。北東は後世の削平によって破壊され、南東は調査区外に延びるため本溝跡は完掘を行っていない。

本溝跡は灰黄褐色土の広がりとしてV層上面でそれぞれ検出した。遺構内堆積土は灰黄褐色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。調査区内で確認できた長さは9.9m、上幅は最大で55cm、検出面からの深さは10cmである。壁は残存状況が悪いが、確認できた部分では底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ凹凸がなく、北西に向かうに従って低くなっている。



第252図 SD04溝跡



第253図 SD出土遺物

本遺構の時期・性格は出土遺物がないため不明であるが、堆積土から近世以降の可能性がある。(小針)

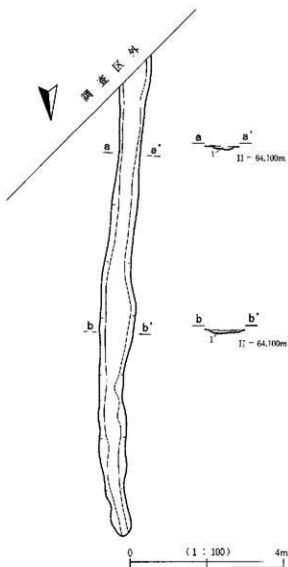
### SD08溝跡 (第256図)

C区 N250E0 グリッドに位置する。SI29 竪穴住居跡、SD07 溝跡と重複し、新旧関係は本溝跡がSD07 溝跡より古く、SI29 竪穴住居跡より新しい。本溝跡は南東から北西に向かって直線的に延びるが、南東は調査区外に延び、北西は後世の擾乱と削平によって破壊されているため完掘を行っていない。

本溝跡はV層上面で黒褐色土の広がりとして検出している。遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は黒褐色粘質土、3層は暗褐色粘質土をそれぞれ某調とする。堆積状況は概ねいわゆるレンズ状堆積・三角堆積を早するため、自然堆積と判断している。調査区内で確認できた長さは7.7m、上幅は最大で80cm、検出面からの深さは8cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がり、西側の上位でやや開く。東壁の上位はSD07 溝跡との重複のため不明であるが、西壁とほぼ同じ状況であったものと推測している。底面は鍋底状を呈し、北西に向かうに従って低くなっている。

本溝跡の時期は、重複関係から平安時代以降近世以前と考えることができる。ただし、東方10mに位置するSB03 掘立柱建物跡と方位をほぼ揃えることを考慮すると、近世の区画溝である可能性が高い。

(小針)



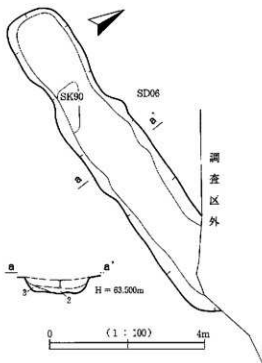
第254図 SD05溝跡

SD 09溝跡 (第248図)

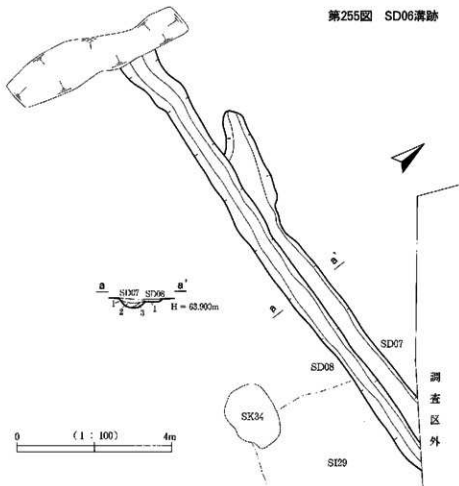
D区 N180E60 グリッドに位置する。SI39 整穴住居跡、SK42 と重複し、新口関係は本溝跡がいずれの遺構よりも新しい。本溝跡は北東から南西に向かって緩やかに弧状に延びるが、後世の削平のため両端を確認することはできず、本来の形状がどのようなものであったかは不明である。

本溝跡はV層上面で褐灰色土の広がりをもって検出した。遺構内堆積土は褐灰色粘質土の単層であり、自然堆積か人為堆積かを判断することはできなかった。確認できた長さは7.4m、上幅は最大で80cm、検出面からの深さは10cmである。壁は残存状況が悪いが確認できる限りでは底面から緩やかに立ち上がる。底面には凹凸がないが、南西に向かってやや低くなっている。

本溝跡は遺物の出土がないため時期・性格を明



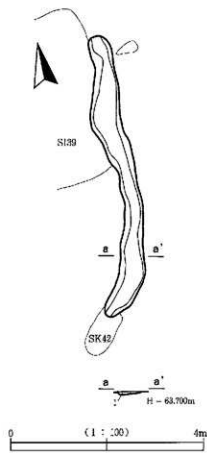
第255図 SD06溝跡



第256図 SD07・08溝跡

確にすることができないが、重複関係から平安時代以降と考えることができる。

(小針)



第257図 SD09溝跡

遺構名	層番号	色調	記号	土性	粘性	しまり	特徴
SD01	1	黒褐	10YR3/3	粘質土	やや弱	やや強	黄褐ブロック少量含む
S102	1	暗褐	10YR3/3	粘質土	やや弱	中	黄褐色砂質ブロック少
SD03	1	黒褐	10YR2/2	粘質土	やや弱	弱	黄褐色砂質ブロック少 明褐色粘土ブロック
SD04	1	黒褐	10YR3/2	砂質土	やや弱	中	
	2	黒褐	10YR3/2	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質ブロック中
	3	暗褐	10YR3/3	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土ブロック中
S105	1	暗褐	10YR3/4	砂質土	弱	弱	黄褐色砂質ブロック中
SD06	1	黒褐	10YR3/1	粘質土	やや強	中	黄褐ブロック(小、粒子)を多く含む
	2	黒褐	10YR2/3	粘質土	やや強	中	黄褐粒子を含む
	3	褐灰	10YR4/1	粘質土	中	やや強	黄褐粒と黒褐粒の混合
SD07	1	黒褐	10YR3/2	粘質土	中	中	凝土質 炭化物共に少
	2	黒褐	10YR3/2	粘質土	中	やや強	黄褐色粘土ブロック少
	3	暗褐	10YR3/4	粘質土	中	中	黄褐色粘土ブロック多い
SD08	1	灰黄褐	10YR4/2	粘質土	中	中	
SD09	1	褐灰	10YR4/1	粘質土	中	中	黄褐粘質土ブロック中 炭化物少



## 5 井戸跡 (SE)

### SE 01井戸跡 (第258・259図)

B区 N170W100 グリッドに位置する。Pit406 と重複し、新旧関係は本井戸跡が Pit343 より新しい。本遺構はV層上面で黒褐色土の広がりをもって検出している。規模は長軸2.3m、短軸1.8m、平面形は北西～南東に長い楕円形を呈する。

遺構内堆積土は8層に分けた。1・2層は黒褐色砂質土、3層はふい黄褐色砂質土、4層は黄褐色砂、5・6層は黒褐色砂、7層は黒褐色粘質土、8層はオリーブ灰粘土をそれぞれ基調とする。1・3層は黄褐色砂を多く含む層であり、なかでも1層は基調となる黒褐色砂質土と黄褐色砂が互層となっていた。5・6層については東側に厚く西側に薄く堆積しており、概ね東側からのみの流入と考えることができる。また、5層は拳大程度の礫を多く含むが、これは基盤層の礫とは明らかに異なるものである。1～3・5・6層については人為堆積と判断している。一方、4層はV層に起因すると考えている層であるが他の層とは異なり含有物はほとんどみられなかった。色調はV層と非常に類似するが、V層と比べるとしまりが弱く僅かに黒褐色砂質土のブロックを含んでいたため、遺構内堆積土として捉えることができる。このような土質と壁の状況から、4層については人為的な堆積ではなく壁の崩落土として捉えている。7層については5層同様に拳大程度の礫を多く含むが、粘質も強いいため水の影響を受けた可能性も考えられる。人為堆積か自然堆積かは判断することができなかった。8層は粘土層であるため水の影響を受けた自然堆積層と考えている。

壁は断面観察を行った東西壁で異なった状況を呈する。西壁は底面から緩やかに立ち上がり、中位でやや急傾斜になった後にほぼ垂直に立ち上がる。これに対して東壁は底面から緩やかに立ち上がるが、下位で上端から東に55cmと大きく抉れた後に中位から上位にかけて垂直に立ち上がる。底面は西側に比べ東側がやや深く、長軸1.15m、短軸95cmと南北にやや長い。検出面からの深さは1.35mである。

本遺構は井戸枠等を確認していないが、堆積状況及び規模・平面形から素製の井戸跡と考えている。ただし、堆積土中で確認した礫については廃棄時に投げ込んだ可能性と壁の補強に用いられた可能性の2つを考えているが、いずれにしても整然とした石組であった可能性は低い。また、東壁下位については、井戸の掘かたといった構築時のものではなく、機能時あるいは機能停止以降の埋没過程におけるものと理解している。

遺物は1点・98.91gが出土している。唐津産の陶器皿で大橋編年Ⅱ期に相当すると考えられる。

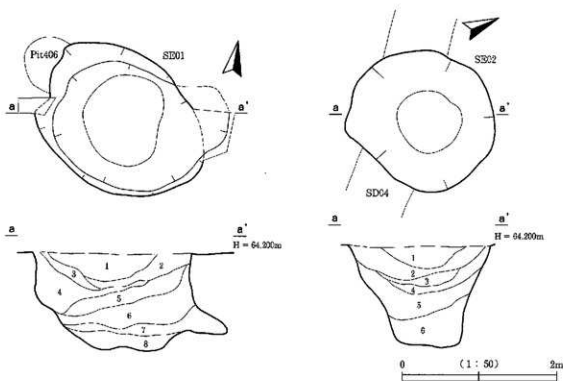
出土遺物から本井戸跡は近世・江戸時代に属すると考えられる。

(小針・西澤)

### SE 02井戸跡 (第258図)

B区 N170W110 グリッドに位置する。SD04 と重複し、新旧関係は本遺構が SD04 より新しい。検出はV層上面で暗褐色土の広がりとその中央のV層に類似した円形の明黄褐色土の広がりをもって確認された。規模は径190cm、平面形はやや不整形な円形を呈する。

遺構内堆積土は6層に分けた。1層は明黄褐色砂で前述のV層に類似する層である。そのため本遺構は当初、中央の明黄褐色土をV層と誤認し、円形の溝跡として調査を開始した。2・4・5層は暗褐色砂質土、3層は暗褐色砂である。このうち3層は拳大の礫を多く含む、2・4層も同様の礫を含んでいる。5層は黄褐色砂を互層に含むが、層中を細分するのは不可能であったため大別の一層として扱っている。6層はオリーブ黒粘土で最下層にやや厚く堆積していた。1～5層については2～4層に投げ込まれたと考えている礫を含むこと、大きく黄褐色砂と暗褐色砂質土が互層になっていることから人為堆積と判断している。6層



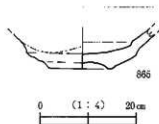
第258図 SE01・02井戸跡

遺構名	層番号	色調	記号	土産	粘性	しまり	特徴
SE01	1	黒褐色	10YR2/3	粘質土	弱	やや弱	黄褐色砂多(互層を含む)2~8cmの小礫中量含む
	2	黒褐色	10YR2/3	粘質土	弱	やや弱	黄褐色砂ブロック小
	3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質土	中	中	黒褐色粘質土、黄褐色砂質土ブロック多い
	4	黄褐色	10YR5/8	砂	弱	弱	黒褐色砂質土ブロック小
	5	黒褐色	10YR3/2	砂	弱	弱	15cm~20cmの礫多
	6	黒褐色	10YR3/2	砂	弱	弱	3cm~5cmの小礫小
	7	黒褐色	10YR2/2	粘質土	やや強	中	15cm20cmの礫多
	8	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	強	やや弱	黒褐色粘土ブロック少
SE02	1	型	2.5YR7/6	砂	弱	弱	中厚薄ブロック小
	2	暗褐色	10YR3/3	砂質土	中	中	15cm程度の礫小
	3	暗褐色	10YR3/3	砂	弱	やや弱	18cm程度の礫多い
	4	黒	10YR4/4	粘質土	中	中	黄褐色砂ブロック小
	5	暗褐色	10YR3/4	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂互層を含む
	6	暗赤褐色	5YR3/2	粘土	強	やや弱	

は機能時以降の水の影響を受けた自然堆積層と考えている。

壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、西壁では中位で緩やかな段を形成する。中位から上位にかけては東西壁とも上方に向かって広がっていく。底面はほぼ平坦で径90cmの円形であり、検出面からの深さは1.3mである。

本遺構は井戸枠等を確認していないが、堆積状況及び規模・平面形から素掘の井戸跡と考えている。堆積土中で確認した際についてはSE01井戸跡同様、投げ込みと壁の補強の2つの可能性があるが、SE01井戸跡に比べると礫の量は多いとはいえ、廃棄時の投げ込みであると考えている。遺物の出土は確認できなかった。時期は不明瞭であるが、その構造から近世・江戸時代に属すると考えられる。(小針)



第259図 SE01出土遺物

## 6 小穴 (Pit)

建物跡に復元できなかった柱状遺構や小穴を一括してピットとして扱っている。遺物の出土は少ないものの一部ではみられ、第247図に図示している。(なお、各 Pit の計測値や堆積土については第14表の通りである。)

### A区 Pit (第262図)

A区では計31基の Pit を確認している。整穴住居跡などと同じIV・V層での検出があるが、ほとんどの Pit は本米、Ⅲ層上面からの掘り込みと考えている。堆積土は黒褐・暗褐・褐灰色土が基調となる。N20W190～W180 グリッド付近にやや集中するが柱痕跡を確認できたものは皆無であり、調査区の制約を考慮しても位置関係からこれらの Pit が独立柱建物跡を構成する可能性は低いと考えている。ただし、A区にはSB01・02 独立柱建物跡が存在するため調査区周辺に同様の独立柱建物跡が存在する可能性もある。

### B区 Pit (第263～265図)

B区では計315基の Pit を確認した。IV層・Vでの検出であったが、A区同様、ほとんどがⅢ層上面からの掘り込みと考えている。堆積土は黒褐・暗褐・褐灰色土を基調とし、柱痕跡を確認したものも多い。特に自然堤防の頂部にあたるN140～N170W100 グリッドには比較的規模が大きく柱痕跡を持つものが集中する。これらの Pit (小穴) は、多くが複雑に重複するもので、調査時には掘立柱建物跡として認識することが困難であった。調査後の整理段階においても、積極的にこれを建物跡と復元できる可能性が高い。また、その場合、時期は柱配置・堆積土から近世に位置づけると考えられる。

### C区 Pit (第266～268図)

C区では計45基の Pit を確認した。IV・V層での検出があるが、他の調査区同様、ほとんどがⅢ層上面からの掘り込みといえよう。堆積土は黒褐・暗褐・褐灰色土を基調とする。柱痕跡を確認したものもあるが全体的に集中した状況ではなく、調査区の制約もあってSB03以外の独立柱建物跡を確認することはできなかった。

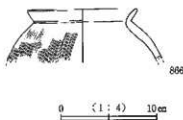
### D区 Pit (第269～270図)

D区では計22基の Pit を確認した。ほとんどの Pit が確認調査区に位置するため、完掘を行ったのは Pit 365のみである。IV・V層で検出を行ったが、他の調査区同様、ほとんどがⅢ層上面からの掘り込みであろう。堆積土は黒褐・暗褐・褐灰色土を基調とするが、平面観察のみのものを含めても柱痕跡を確認したものは少なく独立柱建物跡が存在した可能性は低いと考えている。

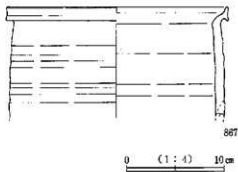
## 7 確認調査

D区を中心に確認調査も本調査と合わせて行っている。D区は当初調査予定になかったが、調査中急遽追加されて調査区である。この追加された調査区は、工事による掘削が、遺構検出面に及ばないと想定されていたために、確認調査のみを行う予定であった。ところが、検出作業後あらためて標高を計測すると、一部分については、想定よりも遺構検出面が高いことが反面した。そのため、変則的であるが、この部分のみ本調査を行うこととなったのである。D区からは竪穴住居跡を10軒、溝跡3条、土坑13基、ピット21基を確認している。本調査を行ったのはそのうち、竪穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑2基である。

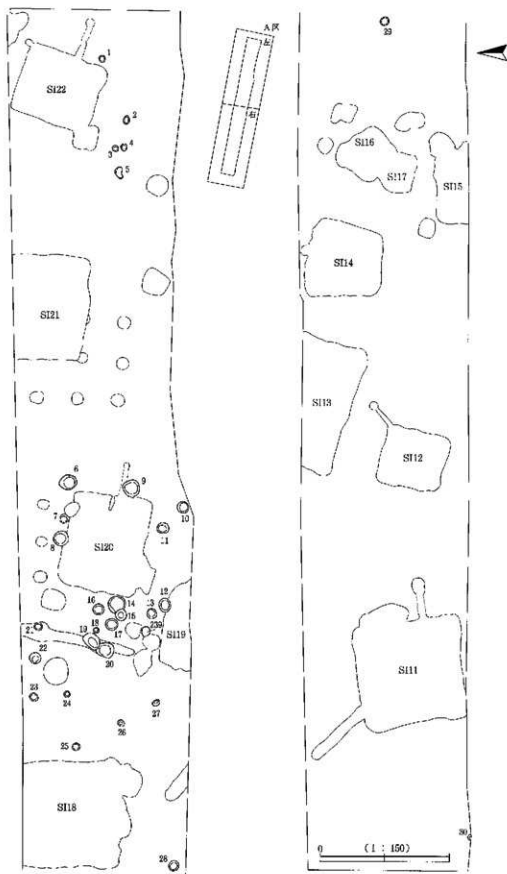
確認調査であったため、詳細な資料は得られていないが、第105図のように、A～C区と同様の遺構の分布状況が、確認できる。また、検出作業中には若干の遺物が認められた。そのうち図示可能なものは2点のみである(866・867) 866～867は土師器甕である。866ははへんであるが、「く」字体に屈曲する口縁部をもつ。胴部がすばまる形状はあまり例がない。調整は外面にハケメが施される。867は、通有のロクロ調整甕である。この2点は、SI33・35出土遺物としているが、これらの遺構を精査したものはないため仮の所属である。また、D区で発見された遺構は、これらの出土遺物や、分布状況から考えると、他の住居跡同様の時期が考えられる。



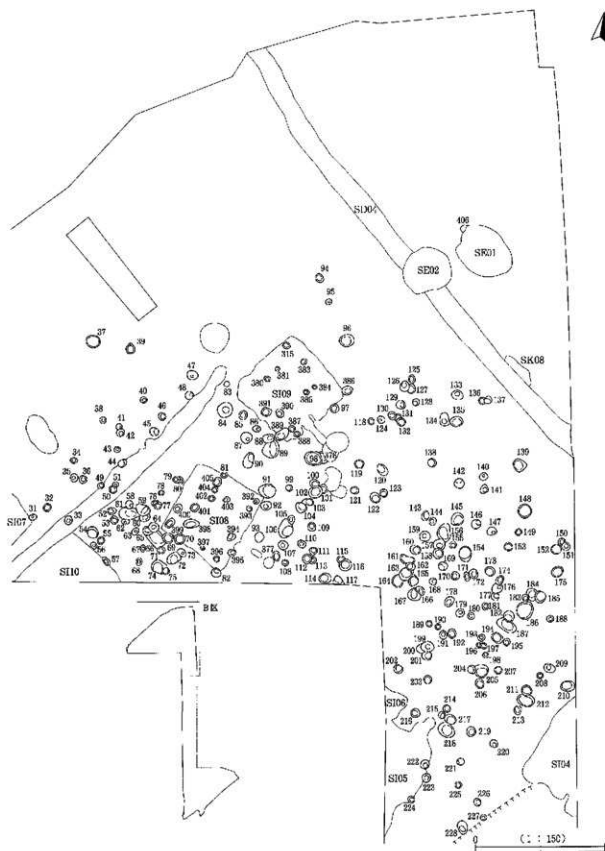
第260図 SI33 出土遺物



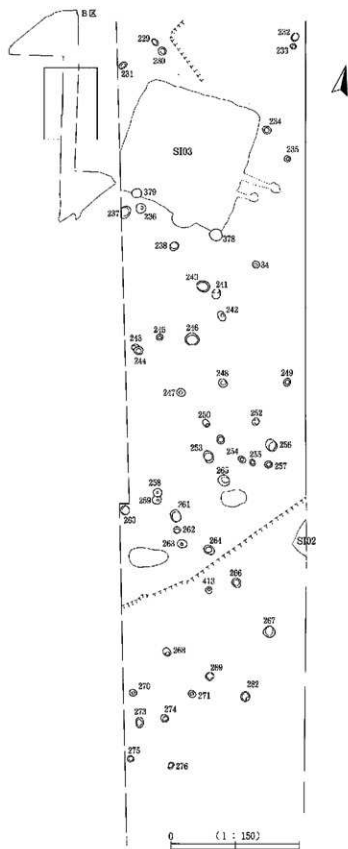
第261図 SI35 出土遺物

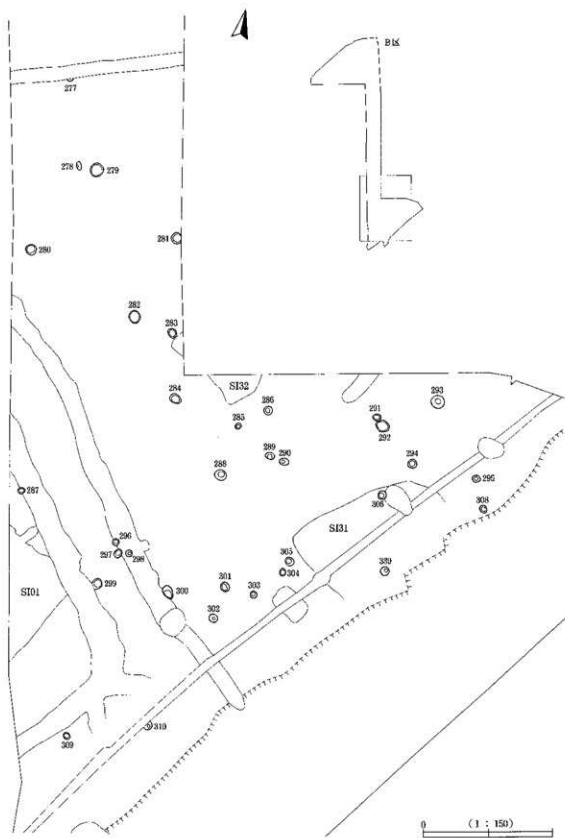


第262図 ピット位置図(1)



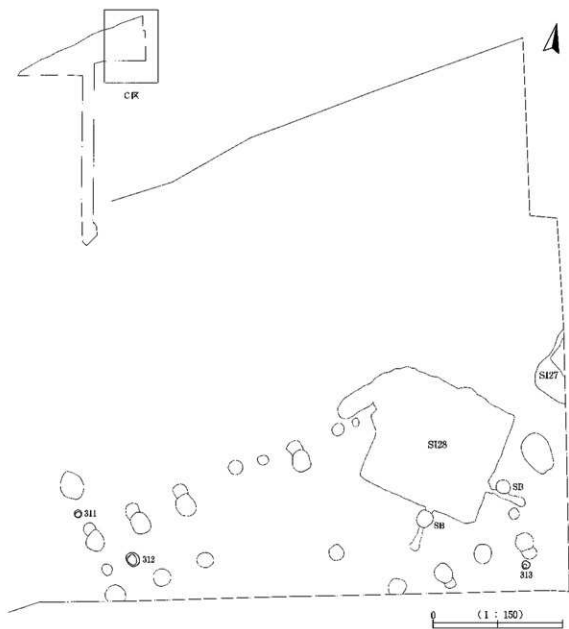
第263図 ヒット位置図 (2)



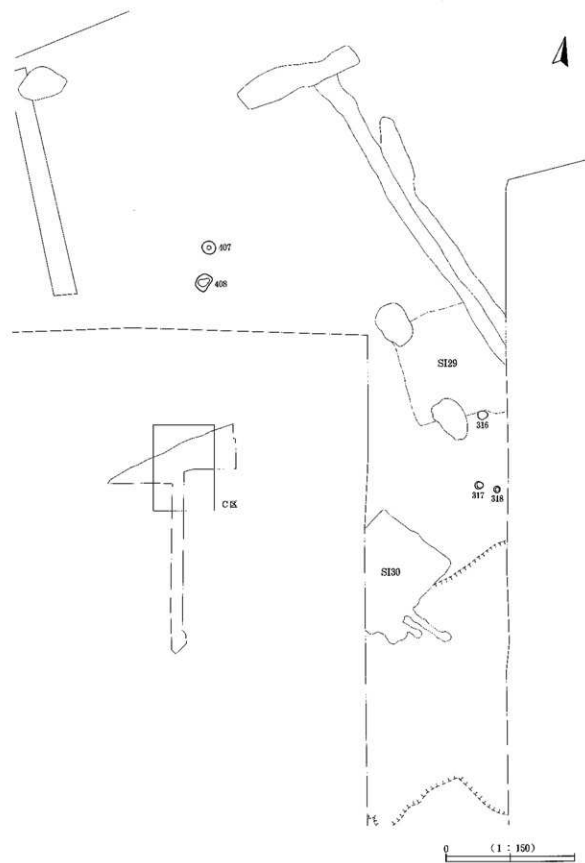


第265図 ビット位置図(4)

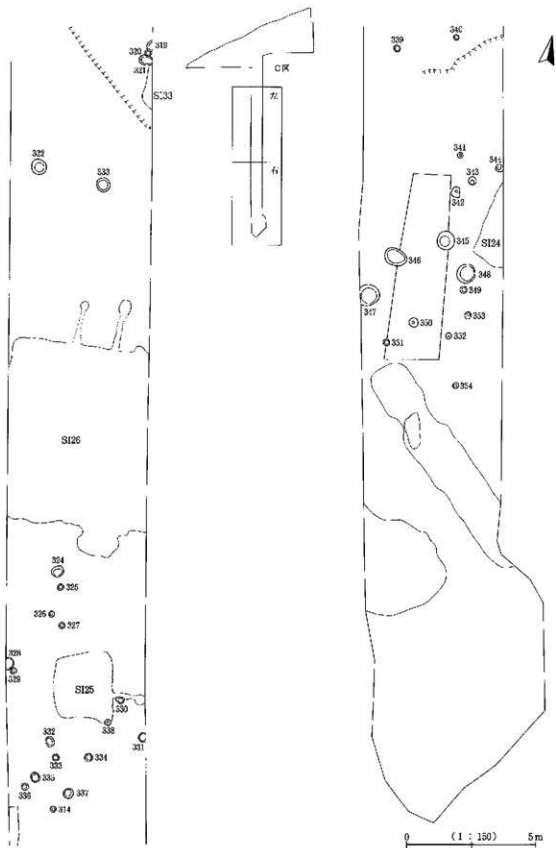




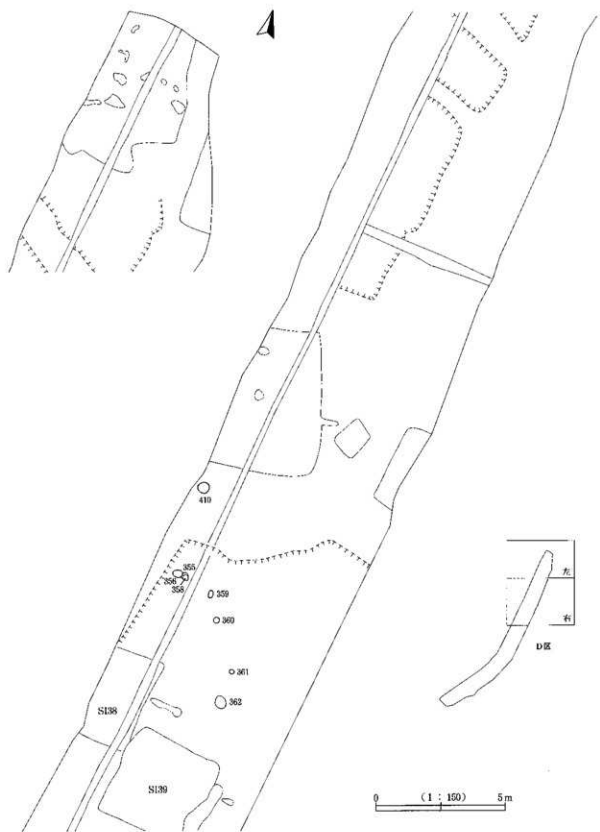
第266図 ピット位置図(5)



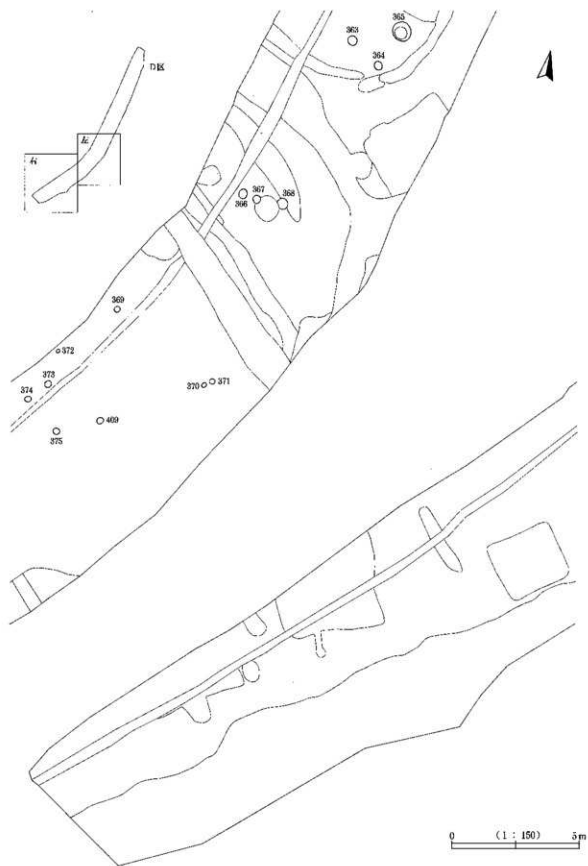
第267図 ビット位置図(6)



第268図 ピット位置図(7)



第269図 ビット位置図(8)



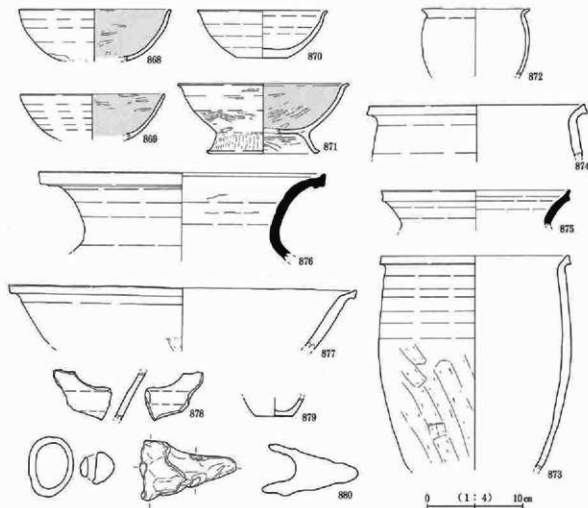
第270図 ピット位置図(9)

## 8 遺構外出土遺物

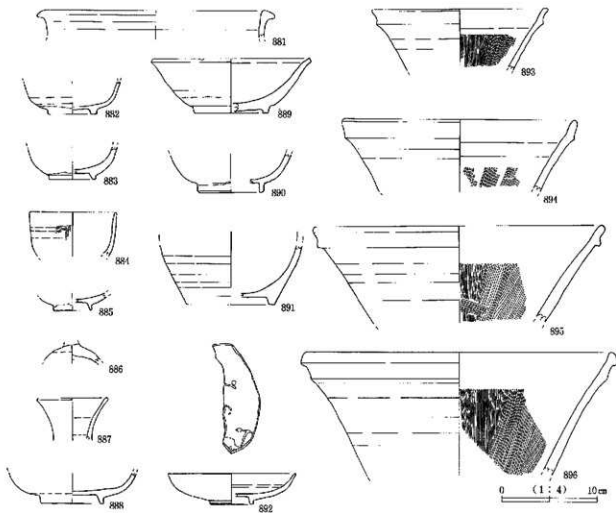
塚向Ⅱ遺跡の各調査区においては、遺構検出中において遺構以外から出土した遺物や調査区周辺における表採遺物を中心に遺構外出土遺物として登録している。土師器・土師など平安時代に属するものは少ないが、そのうち13点を図示した。また、灰軸陶器片が1点C区周辺の田面上で表採された(878)。内面にも軸がかかっているため短頸壺の可能性もある。868～869は土師器杯であり、そのうち870のみ内面に黒色処理が施されない。いずれも体部の形態はゆるやかに内湾するものである。

871は高台杯である。口徑18cmと大きく、器高も7cmと高い。外面調整はクロブチであるが、その後にミガキが若干施されている。872～874は甕である。872のみ小型品である。873・874はロクロ調整の甕である。875・876は須恵器甕で、875は土師器と類似する口縁部をもつが頸部が絞り込まれる。

877は土師器ナベであるが残存状態は悪い。878は表採された灰軸陶器片である。胎土の特徴から東濃産かもしれない。879は不明であるが、小型品の底部となろう。880は、把手である。その大ききから椀に付いていたと考えられるが不明である。



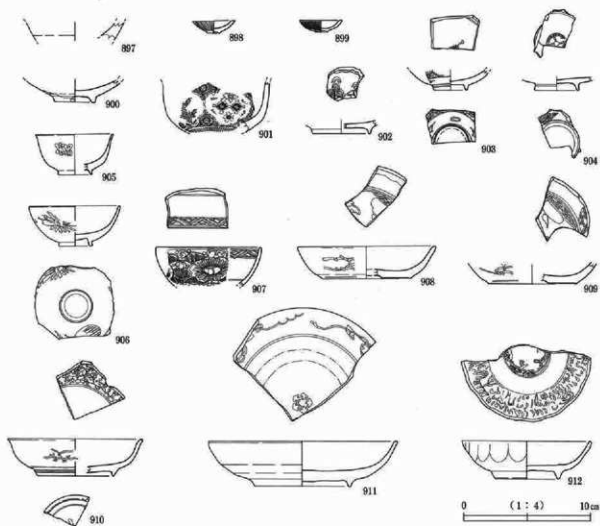
第271図 遺構外出土遺物(1)



第272図 遺構外出土遺物（2）

遺構外出土遺物でもっとも多いものは陶磁器類である。総量は4,742gであり、そのうち34点を図示した。これらはとくにB区南端の斜面下やC区の井戸跡から多く出土している。C区の井戸跡は現代遺物が主体となることから遺構としては登録していない。産地では大堀相馬産や肥前産があり、そのほかに産地不明の在地産が片める。年代としては18～19世紀代が考えられ、これは西川口遺跡と同様である。867のように唐津と考えられる皿が出土しており、大橋編年Ⅰ～Ⅱ期に相当し、年代は16世紀末～17世紀初頭に比定できる。これらの陶磁器類からは18世紀中心とするその前後の時期のものが主体であると考えられる。

このほか銭貨がある。921は永楽通宝であり、半分欠損している。B区北端付近の検出中より出土している。この出土により、周辺にある多数のPit（小穴）のうちには中性に属する可能性が考えられるほど貴重な資料となっている。



第273圖 遺構外出土遺物 (3)



第274圖  
遺構外出土遺物 (4)



## 第三章 分析

### 第1節 テフラ分析

#### (1) 西川日遺跡

株式会社 古環境研究所

##### 1. はじめに

東北地方北部岩手県域には、岩手、十和田、秋田駒ヶ岳、焼石、鬼首など岩手県域とその周辺に分布する火山のほか、北海道、中部、中国、九州地方などの火山などから噴出したテフラ（tephra、火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの関係を求めることにより、地層の堆積年代や土壌の形成年代のみならず、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。

そこで北上市西川日遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って、指標テフラの検出同定を試みることにした。分析の対象となった試料は、A1区4号住居址およびA3区西壁の2地点である。

##### 2. 土層の層序

###### (1) A1区4号住居址

A1区4号住居址の覆土は、下位より黒灰色土（層厚3cm以上）、黄色砂質細粒火山灰層（層厚1.1cm、試料1）、黒灰色土（層厚8cm）、若干色調が暗い灰色作土（層厚14cm）からなる（図1）。

###### (2) A3区西壁

A3区西壁では、下位より黄灰色粘土（層厚8cm以上）、黄灰色粘土ブロック混じり暗灰色粘質土（層厚23cm、③層）、暗灰褐色粘質土（層厚6cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色粘質土（層厚6cm、②層）、灰色凝灰質シルトブロック（試料3'）を含む白色粗粒火山灰混じり暗灰色粘質土（層厚18cm、①層）、若干色調が暗い灰色粘質土（層厚14cm、1層）、黒灰色土ブロック混じりで色調が若干暗い灰色土（層厚13cm、1a層）、若干色調が暗い灰色作土（層厚26cm）が認められる（図2）。

##### 3. テフラ検出分析

###### (1) 分析試料と分析方法

A1区4号住居址の試料1、A3区西壁の試料7より上位の5点の合計6点についてテフラ検出分析を行い、テフラ粒子の産状に関する分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を観察。

## (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。A1区4号住居地の試料1のテフラ層には、火山ガラスがとくに多く含まれている。火山ガラスの形態は、軽石型や平板状のいわゆるバブル型である。また、その色調は無色透明や白色である。A3区西壁では、いずれの試料からも火山ガラスが検出される。火山ガラスは試料3'に多く含まれており、試料5や試料3にも比較的多く認められる。火山ガラスの形態としては、軽石型のほかバブル型が認められる。その色調は無色透明や白色である。

## 4. 屈折率測定

### (1) 測定方法

A1区4号住居地の試料1およびA3区西壁の試料5の2点について、日本列島とその周辺のテフラカタログ(町田・新井、1992)の作成にも利用された温度一定型屈折率測定法(新井、1972、1993)により、テフラ粒子の屈折率の測定を行った。

### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。A1区4号住居地の試料1に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.502-1.508(modal range: 1.503-1.506)である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.706-1.708である。A3区西壁の試料5に含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.503-1.508である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.706-1.708である。

## 5. 考察

A1区4号住居地の試料1が採取されたテフラ層については、層相、火山ガラスの特徴(形態・色調・屈折率)、重鉱物の組合せ、さらに斜方輝石の屈折率などから、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田a火山灰(To-a、大池、1972、町田ほか、1981)に同定される可能性が高い。したがって、A1区の4号住居地については、To-aより下位にある可能性が考えられる。またA3区西壁の試料5(②層上部)に含まれるテフラ粒子についても、その特徴からTo-aに由来する可能性が高い。この土層断面ではTo-aの一次堆積層は認められないものの、火山ガラスの産状から②層上部付近(あるいは①層最下部付近)にTo-aの降灰層準があった可能性がある。

なお、今回得られた火山ガラスの屈折率は、テフラ・カタログ(町田・新井、1992)に記載されているTo-aの値よりも若干高い傾向にある。この原因としては、To-aのユニット間に火山ガラスの屈折率の違いがある可能性が考えられる(町田ほか、1981)。またカタログに記載された試料の採取地点が給源に近いために標準試料に含まれる火山ガラスが分厚く、さらにTo-aの噴出年代が新しいために十分水合が進んでいないこと、遠隔地ではその逆で水合が進んで屈折率に違いが生じていることに起因するとも考えられる(新井房夫群馬大学名誉教授談話)。より高精度の同定のためには、エレクトロンプローブX線マイクロアナライザー(EPM)による火山ガラスの主成分化学組成分析などが有効と考えられる。

## 6. 小結

西川目遺跡において地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、十和田a火山灰(To

-a、915年)に同定される可能性が高いテフラ層およびテフラ粒子が検出された。A1区の4号住居址については、To aより下位にある可能性が考えられる。

#### 文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第4紀研究、11、p.254-269。  
新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」、p.138-149。  
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会、276p。  
町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学、51、p.562-569。  
大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年。第4紀研究、11、p.232-233。

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
A1区4号住居址	1	—	—	—	++++	pm>bw	透明、白
A3区西壁	3	—	—	—	++	pm>bw	透明、白
	3'	—	—	—	+++	pm>bw	透明、白
	5	—	—	—	++	pm>bw	透明、白
	6	—	—	—	+	pm>bw	透明、白
	7	—	—	—	+	pm>bw	透明、白

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, —: 認められない。

bw: バブル型, pm: 軽石型。

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 ( $\gamma$ )
A1区4号住居址	1	1.502—1.508 (1.503 1.506)	opx>cpx	1.706—1.708
A3区西壁	5	1.503—1.508	opx>cpx	1.706—1.708

屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）による。

( ) は modal range を示す。opx: 斜方輝石、cpx: 単斜輝石。

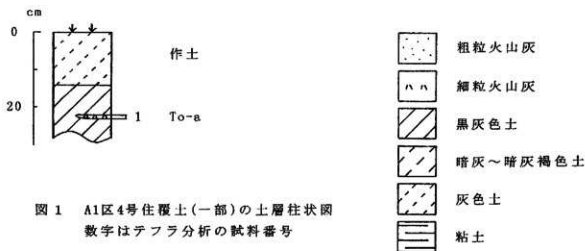


図1 A1区4号住履土(一部)の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

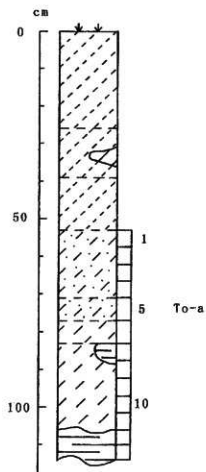


図2 A3区西壁の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

## (2) 堰向Ⅱ遺跡

株式会社 古環境研究所

### 1. 調査分析の目的

北上川流域北上市域とその周辺には、焼石岳、鴨子、1-和田をはじめとする東北地方の火山のほか、洞爺、蛤良、阿蘇など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の地積年代を知ることができるようになっている。そこで、発掘調査担当者により北上市堰向Ⅱ遺跡において採取送付された試料を対象に、火山ガラス比分析により指標テフラの検出・同定を試みることにした。

### 2. 火山ガラス比分析

#### (1) 分析試料と分析方法

分析の対象となった試料は、SI18（上～中層）、SI20（堆積土上層、1層）、SI28（堆積土上層）、SK34（堆積土中層、2層）から採取された4点である。火山ガラス比分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4 1/3mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒を観察し、火山ガラスの形態色調別比率を求める。

#### (2) 分析結果

火山ガラス比ダイアグラムを図1に、その内訳を表1に示す。SI18（上～中層）には、火山ガラスがごくわずかに含まれている。火山ガラスとしては、分厚い中間型ガラス（0.8%）、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（0.4%）、繊維状に発泡した軽石型ガラス（0.4%）が認められる。SI20（堆積土上層、1層）には、比較的多くの火山ガラスが含まれている。この試料に含まれる火山ガラスは、量が多い順にスポンジ状に発泡した軽石型ガラス（4.8%）、繊維束状に発泡した軽石型ガラス（4.4%）、無色透明で平板状のいわゆるバブル型ガラス（0.8%）、中間型ガラス（0.4%）である。

SI28（堆積土上層）には、少量の火山ガラスが含まれている。含まれている火山ガラスは、量が多い順に、繊維束状に発泡した軽石型ガラス（2.8%）、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（2.0%）、無色透明で平板状のいわゆるバブル型ガラス（0.8%）、中間型ガラス（0.4%）である。SK34（堆積土中層、2層）には、火山ガラスがごくわずかに含まれている。火山ガラスとしては、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス（0.4%）が認められる。

### 3. 考察

分析対象となった試料のうち、SI20（堆積土上層、1層）およびSI28（堆積土上層）に含まれる火山ガ

ラスについては、その火山ガラスの形態から、915年に十和田火山から噴出したと推定されている十和田 a 火山灰 (To-a、大池、1972、町田ほか、1981、町田・新井、1992、2003) に由来する可能性が考えられる。ただし、いずれの試料も純度は高くなく、より火山ガラス比が高いSI20の試料についても、通常の北上地域とその周辺で認められるTo-aの一次堆積層の層相とは異なるように見える。なお、本遺跡とその周辺には、完新世のテフラとして、約5,500年前\*1)に十和田火山から噴出した十和田中層テフラ (To-Cu、大池ほか、1966、早川、1983、福田、1986、町田・新井、1992) も分布している。精度の高い同定のためには、火山ガラスなどの屈折率測定や傾度の高いEPMAを用いた火山ガラスの主成分化学組成分析が行われると良い。

また、SI18 (上～中層) については、サンプルの観察結果や火山ガラスの量が非常に少ないことなどから、テフラの一次堆積層である可能性は低い。またSK34 (堆積土中層、2層) についても、ごく少量ながら火山ガラスは認められるものの、純度が低く、テフラの起源を明らかにすることは困難である。分析に先立って、一次堆積層の確認に必要な地質調査が行われることを期待したい。

#### 4. まとめ

堰向II遺跡において採取された試料を対象に行われた火山ガラス比分析により、SI20 (堆積土上層、1層) およびSI28 (堆積土上層) からある程度の量の火山ガラスが検出された。これらの火山ガラスについては、十和田 a 火山灰 (To-a、915年) に由来する可能性はあるものの、高精度の同定は困難な状況であった。

\*1) 放射性炭素 (14C) 年代、町田・新井 (2003) によれば、To-Cuの暦年較正年代は約6,000年前と記載されている。

#### 文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロロジーの基礎的研究、第四紀研究、11、p.254-269。  
福田友之 (1986) 考古学からみた「中層軽石」の降下年代、弘前大学考古学研究、3、p.4-15。  
早川由紀夫 (1983) 十和田火山中層テフラ層の分布、粒度組成、年代、火山、第2集、28、p.263-278。  
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会、276p。  
町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会、336p。  
町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) H本海を渡ってきたテフラ、科学、51、p.562-569。  
大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11、p.232-233。  
大池昭二・中川久夫・七崎 肇・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰、第四紀研究、5、p.29-35。

表1 火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
SI18 (上～中層)	0	0	0	2	1	1	246	250
SI20 (埋土上層、I1)	2	0	0	1	12	11	224	250
SI28 (埋土上層)	1	0	0	2	5	7	235	250
SK34 (埋土中層、I2)	0	0	0	0	2	0	248	250

数字は粒子数。bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型。sp：スポンジ状、fb：繊維束状。  
cl：無色透明、pb：淡褐色、br：褐色。

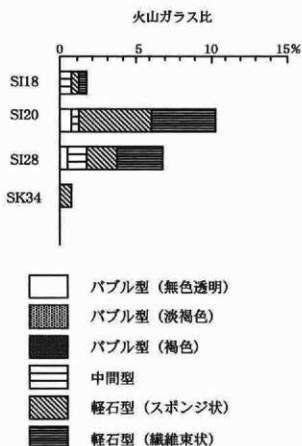


図1 火山ガラス比ダイアグラム



## 第2節 プラント・オパール分析

### 1. 西川目遺跡におけるプラント・オパール分析1 (試掘時)

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山、2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山、1984)。

ここでは、西川目遺跡における稲作跡の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行う。

#### 2. 試料

分析試料は、A3区西壁において上位より白色暗灰色粘質土 (地表下53cm、試料1)、白色暗灰褐色粘質土 (地表下71cm、試料2)、暗灰褐色粘質土 (地表下77cm、試料3)、黄灰色粘土ブロック混じり暗灰色粘質土 (地表下83cm、試料4) および黄灰色粘土 (地表下106cm、試料5) の5点である。分析結果の柱状図に試料採取箇所を示す。

#### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原、1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞 (葉身にのみ形成される) に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数 (試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-3}\text{g}$ ) を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザサ節

は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

#### 4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

試料1では、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型が検出されている。このうち、ヨシ属とススキ属型が比較的高い密度である。試料2では、イネ、ヨシ属、ススキ属型およびネザサ節型が検出されている。ヨシ属が非常に高い密度であり、ススキ属型とネザサ節型も比較的高い密度である。試料3では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型が検出されている。ススキ属型が高い密度であり、ヨシ属とネザサ節型も比較的高い密度である。試料4では、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型が検出されている。密度は、ススキ属型がやや高い以外はいずれも低い値である。試料5では、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型が検出されているが、いずれも低い密度である。

#### 5. 考察

本調査地点では、白色暗灰褐色粘質土（試料2）と暗灰褐色粘質土（試料3）よりイネのプラント・オパールが検出されている。ただし、プラント・オパール密度は1,000個/g未満であり、稲作跡の検証や探査を行う際の基準とされる3,000個/gには満たない。このことから、両層準において稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。ここで検出されたプラント・オパールは、他所から混入したものとみなされる。もし仮に両層準が耕作層であったとするならば、1) 稲作の行われていた期間が短かった、2) 稲葉の多くが耕作地（水田）の外に持ち出されていた、3) イネの生産性が低かった、4) 土層の堆積速度が非常に速かった、などが原因でプラント・オパール密度が低かったと考えられる。

イネ以外では、すべての層準においてヨシ属が検出されており、暗灰褐色粘質土、白色暗灰褐色粘質土および白色暗灰色粘質土（試料1）では高い密度である。とくに白色暗灰褐色粘質土では卓越している。こうしたことから、調査地は少なくとも黄灰色粘土（試料5）堆積以降は湿地かそれに近い環境であり、白色暗灰褐色粘土上の堆積時はヨシが繁茂するほどの湿地であったと推定される。なお、黄灰色粘土ブロック混じり暗灰色粘質土（試料4）から上位の白色暗灰色粘質土にかけては、ススキ属型が比較的高い密度である。これらの層準は、上述したように湿地的環境が想定されていることから、ススキ属のなかでも湿地を好むオギが生育していたと推定される。

#### 6. まとめ

西川目遺跡においてプラント・オパール分析を行い、水田跡の可能性について検討を行った。その結果、明らかに水田耕作層と判断される層準は認められなかった。なお、暗灰褐色粘質土、白色暗灰褐色粘質土および白色暗灰色粘質土上の堆積時は、調査地は湿地であり、ヨシ属のほかオギが生育していたと推定された。

#### 文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機軸細胞壁酸性体。富山県植物志報告、第31号、p.70-83。  
杉山真二 (2000) 植物遺体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社、p.189-213。  
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の硫酸体環本と定量分析法 -。考古学と

表1 岩手県、西川目遺跡のプラント・オパール分析結果

分類群 (和名・学名)		試料	A3区西壟					
			1	2	3	4	5	
イネ科	Gramineae (Grasses)							
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)			9	7			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		20	63	28	15	12	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		30	36	42	30	6	
タケ亜科	Hambrusoideae (Bamboo)							
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type		71	135	85	23	6	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> ) type		20		7	15	12	
その他	Others		10	9	14		6	
未分類等	Unknown		344	414	219	241	69	
プラント・オパール総数			495	657	395	324	110	

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		0.26	0.21			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	1.28	3.97	1.78	0.95	0.73	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.38	0.45	0.52	0.37	0.07	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.34	0.65	0.41	0.11	0.03	
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> ) type	0.15		0.05	0.11	0.09	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

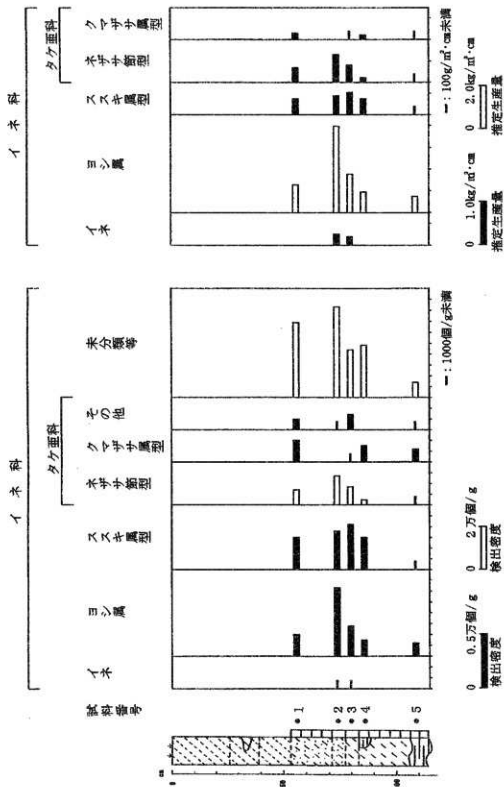
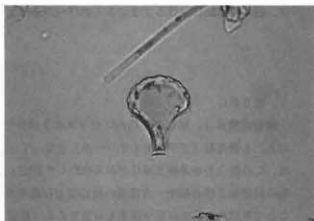


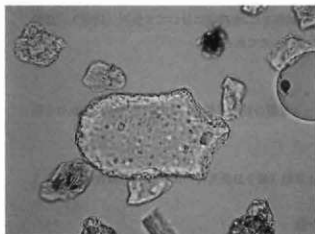
図1 A3区西壁におけるプラント・オパール分析結果



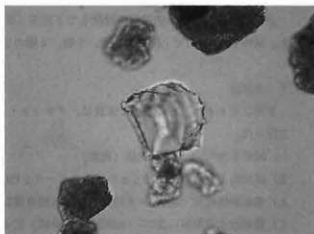
イネ



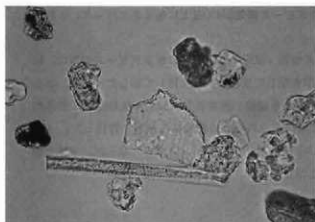
イネ



ヨシ属



ネザサ節型



クマザサ属型



スキキ属型

プラント・オバールの顕微鏡写真 —— 50 $\mu$ m

## 2. 西川目遺跡におけるプラント・オパール分析2 (本調査時)

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

西川目遺跡では、発掘調査において平安時代とされる水田跡が畦畔を伴って検出された。そこで、当該遺構における稲作を検証することを目的に、プラント・オパール分析を行うことになった。

### 2. 試料

分析試料は、検出水田遺構の畦畔上で2箇所 (試料1、試料2)、水田面において3箇所 (試料3、試料4、試料5)、壁面で土位より2層、3層、4層の3点の合計8点である。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞 (葉身にのみ形成される) に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数 (試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-8}\text{g}$ ) を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザサ属は0.48、クマザサ属 (チシマザサ属・チマキザサ属) は0.75である。

#### 4. 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

田面および畦畔上からは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびクマザサ属型が検出されている。このうち、イネは田面の一部を除いて比較的高い密度である。ヨシ属は山面の一部と畦畔で比較的高い密度である。ススキ属型はいずれも比較的高い密度である。ネザサ節型とクマザサ属型は低い密度である。壁面では、2層と3層でイネが比較的高い密度で検出されている。ヨシ属も2層と3層で検出されており、このうち3層では比較的高い密度である。ススキ属型は各層で検出されている。3層と4層では高い密度である。ネザサ節型は2層と4層で、クマザサ属型は各層でそれぞれ検出されているが、いずれも低い密度である。

#### 5. 西川目遺跡における稲作について

水田遺構の田面部と畦畔部からはすべての試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。プラント・オパール密度は、山面部で1,500~3,800個/g、畦畔部の2試料では2,300個/gおよび3,300個/gと稲作跡の検証や探査を行う際の基準とされる3,000個/gにほぼ近い値である。よって、当該遺構において稲作が行われていたと判断してよからう。なお、プラント・オパール密度がやや低いことについては、1) 稲作が行われていた期間が短かった、2) 稲葉の多くが耕作地（水田）の外に持ち出されていた、3) イネの生産性が低かった、4) 土層の堆積速度が非常に速かった、などが考えられる。とくに、平安時代には稲の収穫は株のまま刈り取るいわゆる株刈りで行われていたと考えられ、収穫時に稈（茎）に残っていた葉身は山面には堆積せず耕作地外に持ち出されていた可能性が高い。よって、上記の2)の可能性がより高い。

なお、畦畔部からも田面部同様比較的高い密度で検出されていることから、当時畦塗りや畦の作り替えが水田土壌を利用して行われていたことが想定される。

イネ以外では、ヨシ属とススキ属型が比較的高い密度である。ヨシ属は湿地に生育することから、調査地周辺は湿地かそれに近い環境であったと推定される。また付随して検出されるススキ属型は、湿地を好むオギである可能性が高い。

#### 6. まとめ

西川目遺跡において検出された平安時代の水田跡について、プラント・オパール分析から稲作の検証を試みた。その結果、田面と畦畔のいずれからもイネのプラント・オパールが検出され、当該遺構において稲作が行われていたことが確認された。なお、プラント・オパール密度がやや低いことから、稲作継続期間はあまり長くはなかったと推定された。なお、当時の調査地は湿地的環境であり、ヨシ属のほかにはオギ等の生育が示唆された。

#### 文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の微動細胞壁構造。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.
- 杉山真二 (2000) 植物組織体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。岡成社、p.189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の組織体標本と定量分析法。考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田跡の探査。考古学と自然科学、17、p.73-85.

表1 岩手県、西川目遺跡のプラント・オパール分析結果

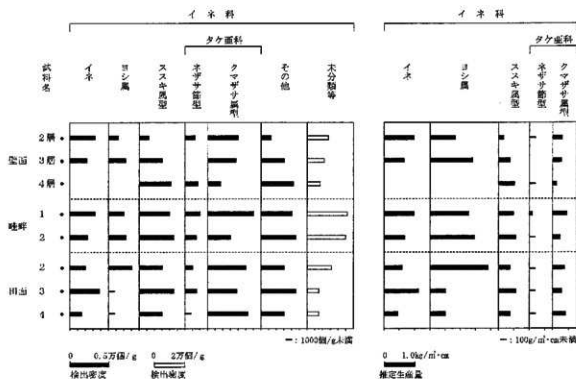
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名)	試料	壁面			田面			畦	
		2層	3層	4層	2	3	4	1	2
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	33	22		20	38	15	33	23
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	13	22		30	8	8	20	23
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	13	30	42	30	45	30	40	45
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	13		17	10	15	8	20	15
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyahozasa</i> ) type	40	37	17	50	38	53	60	30
その他	Others	13	30	42	30	45	30	40	45
未分類等	Unknown	138	112	85	158	75	76	259	249
プラント・オパール総数		231	232	204	307	225	206	438	407

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.97	0.66		0.58	1.10	0.45	0.97	0.67
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.83	1.42		1.87	0.47	0.48	1.26	1.43
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.16	0.37	0.53	0.37	0.56	0.38	0.49	0.56
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.06		0.08	0.05	0.07	0.04	0.10	0.07
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyahozasa</i> ) type	0.30	0.28	0.13	0.37	0.28	0.40	0.45	0.23

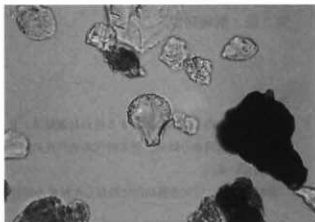
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



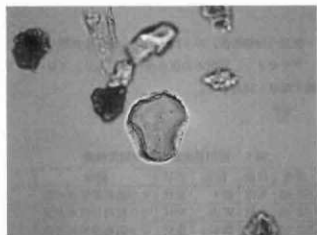




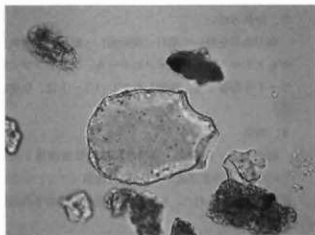
イネ



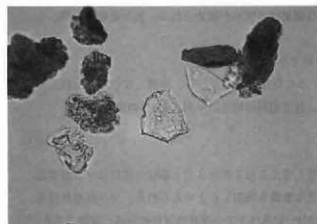
イネ



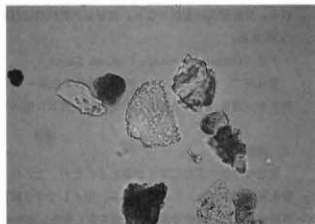
ススキ属型



ヨシ属



クマザサ属ミヤコザサ節型



クマザサ属型

植物球形体の顕微鏡写真 ———— 50 $\mu$ m

### 第3節 樹種同定

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県北上市二子町に所在する西川目遺跡は、北上川やその支流が形成した沖積地の自然堤防上に位置している。発掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、近世の掘立柱建物跡や墓坑等の遺構が確認されている。

本報告では、近世の墓坑内に残存した棺桶の部材について樹種同定を行い、木材利用に関する調査を行う。

#### 1. 試料

試料は、近世の墓坑（SZ05・06・07・09）内に確認された棺桶の部材5点である。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。

#### 2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を製作し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを製作する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

#### 3. 結果

結果を表1に示す。棺桶の部材には針葉樹1種類（マツ属複雑管束亜属）と広葉樹1種類（クリ）の合計2種類が認められた。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）  
マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部には垂直樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞、仮道管、樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圈外で急〜やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

#### 4. 考察

棺桶の棒状の部材にクリが認められたが、その他の板状と考えられる部材3点と棒状の部材はマツ属複雑管束亜属であった。このことから、主としてマツ属複雑管束亜属を利用したと考えられる。マツ属複雑管束亜属の木材は、軽軟であるが樹脂を多く含み、水中などでの一定条件下での保存性は比較的高い種類である。

表1 西川目遺跡の樹種同定結果

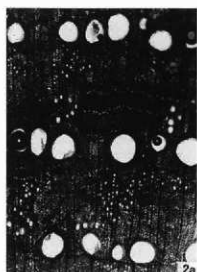
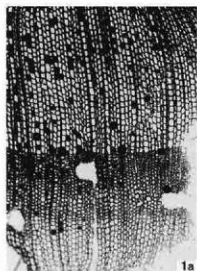
遺構	用途	部位	形状	樹種
SZ 05	木棺	側4	板状	マツ属複雑管束亜属
SZ-06	木棺	W10	棒状	マツ属複雑管束亜属
SZ 07	木棺	側木1	板状	マツ属複雑管束亜属
SZ-09	木棺	W3	棒状	クリ
SZ(?)	木棺	側1	板状	マツ属複雑管束亜属

国内における棺材等の調査事例は、弥生～古墳時代の事例が大部分である。近世の棺等については、文献等によれば、一般庶民用としてはヒノキやモミが高級品で、普通はスギやマツが多かった（満久、1983）とされている。一方、クリは棺材としての記載はないが、クリは耐朽性が高いといった材質的な特徴から、利用された可能性がある。本分析結果は、前述の所見を概ね支持する結果と言える。ただし、当該期の棺等の調査事例は少ないため、特に広葉樹の利用や地域性、部材毎の木材選択等は現段階では詳細は不明である。

#### 引用文献

満久 崇徳、1983、木のはなし、思文閣出版、238p.

図版1 西川目遺跡の木材



1. マツ属複雑管束亜属 (SZ-06側4)  
 2. クリ (SZ-09W3)  
 a : 木口、b : 柁目、c : 板目

200  $\mu$ m : a  
 200  $\mu$ m : b, c

## 第4節 炭化種実の同定

### 1. 西川目遺跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

#### 1. はじめに

西川目遺跡は北上市二子町の北上川により形成された沖積低地自然堤防上に立地する平安時代の集落跡とされる。発掘調査では竪穴住居9棟が確認され、そのうちSI07の竈において発掘担当者が堆積物の水洗選別を行ったところ、若干の炭化種実を検出した。炭化種実の同定は実体顕微鏡を用いて行い、同定した分類群を出土部位別に表1にまとめた。炭化種実乾燥標本として分類群別にガラス瓶に入れ、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管されている。

#### 2. 炭化種実の出土傾向

炭化した種実はおもむきとコムギであり、住居内で利用していたものが竈で炭化したと考えられる。また、ヤマブドウは炭化していないがやや風化が激しく、当時利用していたものが堆積したと考えられる。ホタルイ属、エノキグサ、ニガナ属は炭化しておらず、比較的保存が良いため後世の混入種実の可能性も否定できない。

#### 3. 出土した分類群の形態記載

ヤマブドウ：炭化していない種子を出土した。種子は心形で腹面には2つの孔があり、背面には魁状の溝がある。風化が進んでおり、混入の可能性は低いと考えられる。

おもむき：炭化種子を出土した。

種子は紡錘形で頂部は丸みを帯び、種子長は幅の約2.5倍、厚さは幅の3分の2程度、腹面の基部に孔があり、背面の中央には縦に溝がある。炭化種子は焼け跡が激しい。

コムギ：炭化種子を出土した。種子は基部と頂部が丸い円筒形で、基部には孔があり、背面の中央には縦に溝がある。種子長は幅の約1.5倍、厚さは幅の約1.1倍であった。

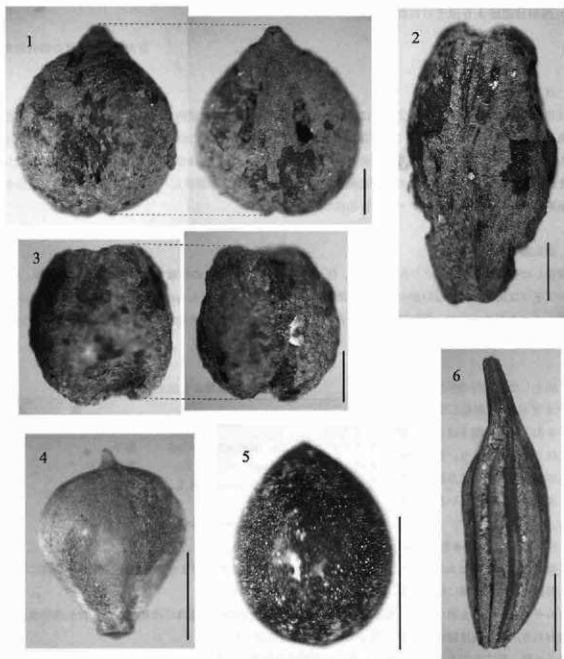
ホタルイ属：果実を出土した。果実は扇形で柱頭部分が突出し、基部は平坦である。片面中央が膨らんでいて上面観は二等辺三角形である。ホタルイ属は全種が水湿地など湿った場所に生育する。かなり保存が良く、後世の混入の可能性がある。

エノキグサ：種子を出土した。種子は水滴型で表面は平滑だが大変微細な凹凸がある。畑など日あたりの良い場所に生育する。かなり保存が良く、後世の混入の可能性がある。

ニガナ属：果実を出した。果実は紡錘形で頂部が長く伸び、表面には高い稜が8から10本ある。林の縁のような半日陰から日向に生育する。かなり保存が良く、後世の混入の可能性がある。

表1 西川目遺跡より出土した炭化種実

分類群	学名	出土部位/遺構	SI07 竈
ヤマブドウ	<i>Vitis coignetia</i> Pulliat	種子	1
おもむき	<i>Hordeum vulgare</i> L.	炭化種子	3
コムギ	<i>Triticum aestivum</i> L.	炭化種子	1
ホタルイ属	<i>Scirpus</i>	果実	1
エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> Linn.	種子	3
ニガナ属	<i>Ixeris</i>	果実	1



図版1 西川目遺跡SI07より出土した炭化種実

1.ヤマブドウ、炭化種子 2.オオムギ、炭化種子 3.コムギ、炭化種子 4.ホタルイ属、  
 果実 5.エノキグサ、種子 6.ニガナ属、果実 スケールは1mm

## 2. 塚向Ⅱ遺跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

### 1. はじめに

塚向Ⅱ遺跡は北上市二子町の北上川により形成された沖積低地自然堤防上に立地する平安時代中期の集落跡とされる。発掘調査では30棟以上の住居跡が確認された。そのうち、堅穴住居6棟の竈、炉、床面及び掘立柱建物1棟の柱穴において発掘担当者が堆積物の水洗選別を行ったところ、若干の炭化種実を検出した。炭化種実の同定は実体顕微鏡を用いて行い、同定した分類群を出土部位別に表1にまとめた。炭化種実は乾燥標本として分類群別にガラス瓶に入れ、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管されている。

### 2. 炭化種実の出土傾向

まず、全体の出土傾向をみると、SI03及びSI20は個数、種類ともに多く出土しているが、そのほかの住居では少ない。また、SI18は焼失住居とみられるが、出土数はそれほど多くない。炉や竈はもともと燃焼を促進する構造になっており、通常の使用では燃焼が進み有機物は最終的に灰化する。したがって炭化物が多く残るには、住居の埋積が開始する直前に燃焼途中で消火されるという条件が必要となる。SI03とSI20は住居放棄前にこの消火行為が行われたと推測され、他の住居ではこの行為が行われなかった可能性がある。

焼失住居に関しては、燃焼途中で消火行為を行わなくても、土壁あるいは土を使用した屋根が崩れ落ちると隙欠となり、内部で燃焼していた種実などが炭化して保存される場合がある。SI18は炭化種実が峻際の貯水目的と考えられる大甕付近にあり、崩れた壁に埋積されたか、燃焼にともなって大甕が破壊され、水が周囲にこぼれた影響も考えられる。

掘立柱建物SB01は倉庫と想定されており、火の気がないと考えられる。したがって焼失建物でない場合、

表1 塚向Ⅱ遺跡より出土した炭化種実

分類群	出土部位/遺構	SI07	SI07	SI11	SI18	SI20	SI22	SB01
		竈	炉	竈	大甕付近	竈	竈	柱穴
サンショウ	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (Linn.) DC.					2		
ホオノキ	<i>Magnolia obovata</i> Thunberg.					1		
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	15				11	2	
オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i> L.	24				1		1
コムギ	<i>Triticum aestivum</i> L.			7				
ムギ類	<i>Hordeum and/or Triticum</i>			4				
アワ	<i>Setaria italica</i> Beauv.						5	
クイナビエ	<i>Echinochloa oryzicola</i> (Vasing.) Vasing.	2			1			
アカザ属	<i>Chenopodium</i>						3	
ササゲ属	<i>Vigna</i>						2	
マメ科	Leguminosae	2					2	
エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> Linn.					2	2	
				1			1	
核菌綱	Ascomycotina							3
不明	Unknown							1
		炭化種実	13	2		3		

柱穴から出土した炭化種実、柱を立てる際に隙間を埋める土とともに持ち込まれ堆積した可能性が高い。

次に出土した炭化種実の種類について、残存が多いSI03及びSI20でみると、イネ、オオムギ、コムギ及びアワといった穀類を中心に出土しており、これにササゲ属、マメ科などの食用種子とアカガ属、エノキグサなどの雑草の種子が共存する。オオムギはSB01柱穴で出土した果実は皮オオムギとみられ、住居内でオオムギが多く出土している。東北地方の寒冷な気候など考慮すると耐寒性、早生性の強い皮オオムギの可能性が極めて高い。皮オオムギを人間が食用とせず、馬などの家畜の飼料専用であったとする考えもあるが、古代では人間が食料として利用していた可能性は十分にある。SI20では草本の他に木本のサンショウとホオノキを出土した。サンショウは果実を香辛料として用いる。ホオノキの種子は利用しないと考えられるため、大きな果実が燃料として材とともに持ち込まれた可能性も考えられる。

本遺跡で出土したイネは3住居内で脱穀された状態で炭化しており、貞献用として栽培されていただけでなく通常食用としていたと考えられる。したがって平安時代の北上周辺では穀類としてイネ、オオムギ、コムギ、アワなどとマメ類が常食されていたと推測される。

### 3. 出土した分類群の形態記載

#### 木本

サンショウ：(SI20)炭化した内果皮の破片を出土した。完形であれば球に近い紡錘形で、一方に内果皮長の2分の1程度の突出した縁取りがある溝状のへそがある。全体にやや粗い、比較的稜のそろった突出した細目で覆われている。サンショウ属の他の種では網目が不規則で突出が激しい、へその形状が異なる、などの点で区別される。果実は香辛料として利用されており、人間の活動域で見つかる例が多い。

ホオノキ：(SI20)炭化した種子を出土した。種子は一方に偏した扁平な心形で、中央にやや深いへこみがあり、全体にやや深いしわが縦方向に入る。ホオノキの葉は芳香性があり食物を包むのに用いられたりするが、種子の利用は不明である。

#### 草本

イネ：(SI03、SI20、SI22)炭化した胚乳を出土した。胚乳は楕円形で表面に2、3本の縦筋があり、基部の一方に胚の脱落した凹みを確認できる。

オオムギ：(SI03、SI20、SB01)SI03、SI20からは炭化種子を、SB01からは炭化穎果を出土した。種子は紡錘形で頂部は丸みを帯び、種子長は幅の約2.5倍、厚さは幅の3分の2程度、腹面の基部に孔があり、背面の中央には縦に溝がある。炭化種子は焼け膨れが激しい。穎果は皮が良く残っており、種子に密着した状態で、皮オオムギの可能性が高い。オオムギには完全熟して穎がはがれやすくなる裸オオムギと、穎が分泌液で密着しはがれない皮オオムギがある。皮オオムギは裸オオムギと比較すると耐寒性があり、早熟でやせ地適応性が高いため、東日本特に東北地方で栽培される。

コムギ：(SI03)炭化した種子を出土した。種子は基部と頂部が丸い円筒形で、基部には孔があり、背面の中央には縦に溝がある。種子長は幅の約1.5倍、厚さは幅の約1.1倍であった。

ムギ類：(SI03)焼け膨れが激しく、オオムギともコムギとも区別できない物をムギ類とした。

アワ：(SI03、SI18、SI20)炭化種子を出土した。種子は円形で頂部がやや突出し、ヒエ属種子に似るが、基部には長三角形の胚があり、ヒエ属の楕円形の胚とは形が少し異なる。焼け膨れが激しく、胚の部分が焼け落ちて少し広がり、種子表面がはがれている種子が多い。



タイムビエ：(SI03) 穎果を出土した。穎果は紡錘形で縦に稜が3本ほどあり、全面に剛毛がある。基部は脆粒性を示す。保存がかなり良く、後世の混入の可能性も考えられる。

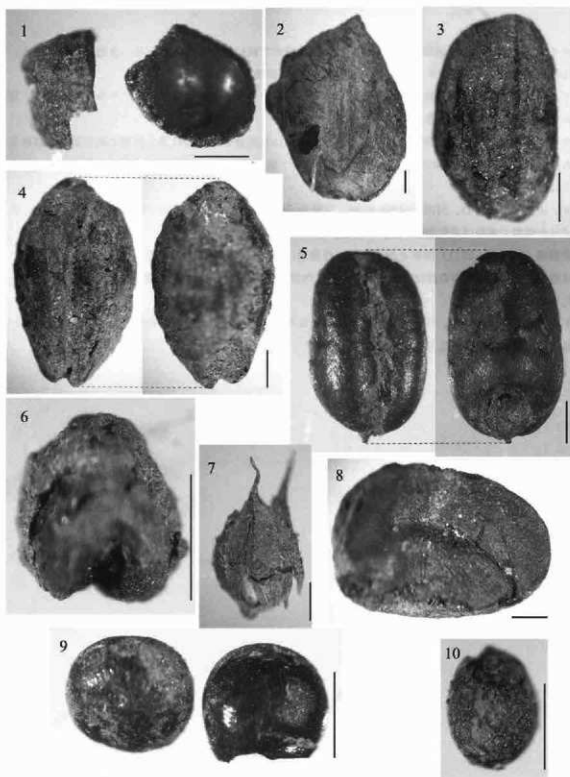
アカザ属：(SI20) 炭化種子を出土した。種子は円形で扁平、表面はほぼ平滑でやや光沢があり、周囲から中央に向かって一本の溝が走る。

ササゲ属：(SI20) 炭化種子を出土した。ササゲ属は完熟後乾燥休眠状態で内部で初生葉とよばれる子葉を出す。この試料ではそれが確認された種子をササゲ属と同定した。確認出来なかった種子はマメ科と同定した。

エノキグサ：(SI03, SI18, SI20) SI18, SI20からは種子を、SI03, SI20からは炭化種子を出土した。種子は水滴型で表面は大変微細な凹凸がある。

核菌綱：(SI07, SI11) 菌核を出土した。核菌綱は枯死した樹皮などに付着し生活している。出土したのは胞子を生成する球形の部位で、もともと黒く内部がスポンジ状の均質で大変硬質なため、炭化しているかどうか判別しにくい。

不明炭化種実：(SI03, SI07, SI18) 種実がかなり煮しく焼け膨れて炭水化物や脂肪などが溶けているため種類の同定が不可能なものを不明種実とした。



図版1 堰向Ⅱ遺跡より出土した炭化種実

1.サンショウ、炭化内果皮破片(SI20) 2.ホオノキ、炭化種子(SI20) 3.イネ、炭化胚乳(SI03) 4.オオムギ、炭化穎果(SB01) 5.コムギ、炭化種子(SI03) 6.アワ、炭化種子(SI03) 7.タイヌビエ、穎果(SI03) 8.ササゲ属、炭化種子(SI20) 9.アカザ属、炭化種子(SI20) 10.エノキグサ、炭化種子(SI03) スケールは1mm

## 第5節 出土遺物の形状と組成からみた埴向Ⅱ遺跡における鉄器製作活動について

岩手県立博物館 赤沼英男

### 1 はじめに

岩手県北上市に立地する埴向Ⅱ遺跡はほ場整備事業に伴い、平成15年に発掘調査された遺跡である。発掘調査の結果、9世紀後半～10世紀前半に比定される竪穴住居跡、掘立建物跡、および墓壇などが検出された<sup>1)</sup>。竪穴住居跡の中には鉄製杖状器や椀状滓を伴うもの、床面のほぼ中央にすり鉢状に彫り窪められた焼土遺構を有するものがあり、後者の焼土遺構からは剥片状鉄滓や粒状鉄滓が見出されている。遺跡内で鉄に関する生産活動が実施されていたことは確実で、日常生活に必要な鉄器が製作されていたことをも考えることができ、出土資料の外観形状と遺構の検出状況だけで、生産活動内容について言及することは困難とされた<sup>1)</sup>。

遺跡内での生産活動状況を推定する有効な手段に、出土遺物の金属考古学的調査がある。調査の結果、遺跡内では鋼の製造と鋼製鉄器の製作が行われていたものと推定された。以下に、埴向Ⅱ遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果について報告する。

### 2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は、鉄器1点(Na1)、鉄滓4点(Na2～Na5)の合計5資料である。なお、鉄滓は外観形状によって椀状滓、粒状滓、または剥片状鉄滓に分類された。Na1は出土時多量の土砂が固着していて外観形状の特定が困難であったため不明鉄器とされた<sup>1)</sup>が、その後に行われた保存処理の結果、岩手県軽米町山根館遺跡、青森県浪岡町浪岡城跡などで発見されている鉄製杖状器であることが判明した。本稿ではNa1を鉄製杖状器と呼ぶことにする。調査資料の概要は表1に示すとおりである。

### 3 調査試料の抽出

鉄器および鉄滓からの調査試料抽出は、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使って実施した。Na1については図1a<sub>1</sub>の矢印の部分から約0.2gの試料を、Na2～Na4については図3、図4に示す矢印の部位に深さ1～2cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1gの試料を切り取った。抽出した試料をさらに2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。Na5については図2a<sub>1</sub>の中から4資料を選別し、それらを化学成分分析に、図2b<sub>1</sub>に示した資料を組織観察に供した。

### 4 調査方法

組織観察用試料についてはエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された領域および鉄滓中の鉱物相を電子顕微鏡・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。

化学成分用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾燥し、メノー乳鉢で粉砕した後約0.5gをテフロン分解容器に秤量し、マイクロウェーブ分解装置で溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、

ニッケル (Ni)、コバルト (Co)、マンガン (Mn)、リン (P)、チタン (Ti)、けい素 (Si)、カルシウム (Ca)、アルミニウム (Al)、マグネシウム (Mg)、バナジウム (V)、ジルコニウム (Zr) の13元素を高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES法) で分析した。

## 5 調査結果

### 5-1 №1 鉄錠状鉄器および№5 剥片状鉄滓の化学組成

表2に№1、表3に№5から抽出した試料の化学成分分析結果を示す。№1 Sa<sub>1</sub>および№1 Sa<sub>2</sub>の T.Fe はそれぞれ77.21mass%、56.81mass%、№5の T.Fe は67.26mass%で、錆化が進んだ試料である。№1 Sa<sub>2</sub>、№5からは0.1mass%を上回るPが検出されている。

錆化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化の可能性を考慮する必要がある<sup>1)</sup>。粘土状物質を主成分とする№2 樽状滓の凸部表面 (№2 Sa<sub>1</sub>) から抽出した試料中に含有される Cu、Ni、Co は、内部から抽出した試料に含有される Cu、Ni、Co よりも低レベルにある。この結果によると、遺物を取り囲む土砂に0.01mass% (100ppm) 以上の Co、Ni、Cu が含有される可能性は乏しい。金属考古学的調査を行った鉄器に副またはその合金をはじめとする異種金属の付着がみられなかったこと<sup>1)</sup>を考慮すると、0.01mass%以上の Co、Ni、Cu が検出された試料については、検出された三成分のほとんどが錆化前の地金に含まれていたと判断される。

一方、Pについては埋蔵環境下から富化されることがある<sup>2)</sup>。錆化した試料におけるPの値を評価するにあたっては、遺物を取り囲んでいた土壌中、およびほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる他の鉄器のP含有量を調べ、富化の可能性を検討する必要がある。№1 Sa<sub>2</sub>、№5についてはそれとほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる鉄器の化学組成が不明なため、上述の検討はできない。ここでは№1 Sa<sub>2</sub>、№5に相当量のPが含有されていた可能性を指摘するにとどめる。

### 5-2 №1 鉄錠状鉄器および№5 剥片状鉄滓の組織観察結果

№1 Sa<sub>1</sub>から抽出した試料の屑縁部は錆からなるが、その内部はほぼメタルから構成されているので、ナイタール (硝酸2.5ml) とエチルアルコール97.5mlの混合溶液) で腐食した。図1 b<sub>1</sub>はマクロエッチング組織、図1 c<sub>1</sub>はb<sub>1</sub>領域R<sub>1</sub>内部のミクロエッチング組織、図1 e<sub>1</sub>はc<sub>1</sub>枠内部を200倍で観察したものである。図1 c<sub>1</sub>にはフェライトの粒界がみられるだけである。この組織に基づけば、炭素量0.1%未満の鋼と評価される<sup>1)</sup>。№1 Sa<sub>2</sub>から抽出した試料については錆化が著しく (図1 e<sub>2</sub>)、錆化前の地金の組織を推定できる領域を見出すことができなかった。

図1 b<sub>1</sub>領域R<sub>1</sub>内部には灰色を呈する粒状の領域 (Wus)、灰色の角状領域 (XT)、暗灰色の領域 (Fa) とそれらを取り囲む微細粒子を内包する黒色領域 (Ma) からなる非金属介在物が、図1 e<sub>1</sub>枠内部には灰色の角状領域 (XT) とそれらを取り囲む微細粒子を内包する黒色領域 (Ma) からなる非金属介在物がみられる。EPMAによる分析によって領域 (Wus) はウスタイト (化学理論組成FeO)、領域XTはFe-Ti-Al-O系化合物、領域FaはFe-Mg-Si-O系化合物 [マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 (2 (Fe, Mg) O・SiO<sub>2</sub>と推定される)] であることがわかった。上記組織観察結果を整理すると、表2右欄のとおりとなる。

№5 (図2 a<sub>1</sub>) は縦断面の長軸が1~1.3mm、短軸が約0.4mmの長方形を呈する。図2 b<sub>1</sub>領域R<sub>1</sub>、領域R<sub>2</sub>内部は錆組織からなり、領域R<sub>1</sub>は主としてウスタイト (Wus) とヘマタイト (Hem) と推定される領域によって構成される (図2 c<sub>1-a</sub>)。

### 5-3 No.2～No.4鉄滓の化学組成

No.2 Sa<sub>1</sub>のT、Fe、Si、およびAlはそれぞれ51.36%、7.79%、2.48%、No.2 Sa<sub>2</sub>のT、Fe、Si、およびAlはそれぞれ19.27%、18.7%、7.38%で、後述する組織観察結果を考え合わせると、No.2 Sa<sub>2</sub>は酸化鉄を、No.2 Sa<sub>1</sub>は溶融または部分溶融した粘土状物質を主成分とする。No.3はNo.2 Sa<sub>1</sub>、No.4はNo.2 Sa<sub>2</sub>とほぼ同じ化学組成をとる。

### 5-4 No.2～No.4鉄滓から抽出した試料の組織観察結果

No.2は塊状滓の一部で、欠損前の上面は楕円形を呈していたと推定される。凸部表面には青灰色を呈し、部分溶融した粘土状物質が固着する。凹部には赤錆が析出している(図3a<sub>1</sub>)。塊状滓の凸部Sa<sub>1</sub>から抽出した試料にはいたるところに空隙がみられ、外表面は主としてガラス化した組織によって覆われていて、内部には鉄滓が残存する(図3b<sub>1</sub>)。図3c<sub>1</sub>は図3b<sub>1</sub>枠内部のEPMAによる組成像(COMP)、図3c<sub>2</sub>は図3c<sub>1</sub>枠内部を1000倍で観察した組成像である。組成像には灰色のウスタイト(Wus)、やや暗灰色をした柱状の

FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物(FA)〔マグネシウムを固溶した鉄かんらん石2(Fe, Mg)O・SiO<sub>2</sub>と推定される〕、暗灰色のFe-Al-O系化合物〔ハースナイ特(FeO・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)と推定される〕、およびガラス化した黒色領域(G1)が観察される(図3c<sub>1</sub>)。Sa<sub>2</sub>から抽出した試料は酸化ケイ素(Qtz:石英と推定される)とガラス化した領域(G1)からなる(図3d<sub>1</sub>)。

No.3も塊状滓の一部で、欠損前の全体形状はNo.1とほぼ同じであったと推定される。Sa<sub>1</sub>から抽出した試料はウスタイト(Wus)、暗灰色のFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物(FA)〔マグネシウムを固溶した鉄かんらん石2(Fe, Mg)O・SiO<sub>2</sub>と推定される〕、および微細な化合物を内包する黒色領域(Ma)から(図4)、Sa<sub>2</sub>から抽出した試料はウスタイト(Wus)および微細な化合物を内包する黒色領域(Ma)からなる。

No.4は粒状を呈する。抽出した試料にはいたるところに空隙がみられ、全域がガラス化した組織からなる。マクロ組織の枠内部は、Fe-Al-O系化合物(Ha)と微細な粒子が赤色した黒色領域(Ma)によって構成されている(図4)。

## 6 考察

### 6.1 No.1鉄器の組成

No.1は長さが15.5cm、一方の端部の横断面は長軸2.2cm、短軸0.6cm、もう一方の端部の横断面は長軸1.3cm、短軸0.6cmで、いずれも長方形に近い形状をとる。ほぼ同形態の鉄器は、青森県浪岡城跡、岩手県山根館遺跡、岩手県盛岡城跡、福島県福島市飯坂、福島県連郷B遺跡、および滋賀県斗西遺跡などでも検出されている<sup>5)</sup>。また、当該資料に比べやや扁平で幅広ではあるが、青森県根城跡、岩手県跡部城跡からも類似資料が出土している。一方の端部が他方に比べ幅広に加工されている上記資料については、農具における部品としての使用、工具としての使用、あるいは武器としての使用を想定することができるとは、その特定は難しい。この点については当該資料の使用状況を必ず実物資料の検出を待って明らかにする必要がある。No.1には炭素量0.1%以下の亜共析鋼が配されている。幅広の端部から抽出した試料に基づく調査結果であり、No.1全てがその組織によって構成されていたことを断定することはできない。この点については当該資料の広領域にわたる部分から試料を抽出し、確認する必要がある。

後述するように、古代・中世には複数の鍛製造法があった可能性がある。いずれの方法が用いられたとし

ても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されていたことは間違いない。同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じて組成の異なる鋼が作り出された可能性が高く、鉄器地金の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態に合致した資料の分類結果を得ることは難しい。

表2の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタルに取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される。従って、鋼製造過程で合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

図5a・bはNa1Sa<sub>1</sub>、Na1Sa<sub>2</sub>およびNa5の [(mass%Co)/(mass%Ni)] と [(mass%Cu)/(mass%Ni)]、[(mass%Ni)/(mass%Co)] と |(mass%Cu)/(mass%Co)| の比を求めプロットしたものである。Na1Sa<sub>1-2</sub>、Na5のNi含有量はいずれも1%未満で、Na2塊状滓の外表面から抽出した試料と同レベルまたはそれよりも低いレベルにある。検出されたNiが当該資料そのものに含有されていたか、埋蔵環境からの富化によるものかを鑑別することは難しい。そこで図5aへのNa1Sa<sub>1-2</sub>、Na5のプロットは混合させた。図6bから明らかのように、Na1Sa<sub>1</sub>、Na1Sa<sub>2</sub>は離れた位置にあり、Na1の製作に組成の異なる鋼が使用された可能性があることを示している。Na1Sa<sub>2</sub>とNa5が近接した位置にプロットされること、Na5が伊跡に伴って検出されたことを加味すると、遺跡内では原料鉄からNa1を製作する操作、またはNa1を目的とする鋼製鉄器に造形する操作が行われていた可能性を考えることができる。前者の場合、組成の異なる原料鉄が遺跡内にもたらされていたことについても検討する必要がある。

図5にはNa1とほぼ同じ形態をとる中世の遺構から検出された鉄錠状鉄器もプロットした。滋賀県登川町・西遺跡出土資料 (Na13~Na19) は図5aでは左下に、図5bでは中央下にほぼまとも分布する。これら6資料の原料鉄は同じ組成であったとみることができる。図5aの中央下、図5bの右下にプロットされる福島県いわき市連郷B (Na11)、青森県八戸市根城跡 (Na12Sa<sub>1-2</sub>)、および岩手県軽米町山根館跡出土資料 (Na20Sa<sub>1-2</sub>) の三成分比もほぼ同じ値をとる。これら3資料も同じ組成の原料鉄を素材に製作されていた可能性が高い。塚向II遺跡出土資料 (Na1Sa<sub>1-2</sub>)、浪岡城跡出土資料 (Na6~Na8)、盛岡城跡出土資料 (Na9)、福島市飯坂出土資料 (Na10)、および戸町跡出土資料 (Na13) はそれぞれ単独でプロットされている。塚向II遺跡出土鉄錠状鉄器とほぼ同じ三成分比を有する資料はみられず、中世に鉄錠状鉄器を製作した地域が複数あったことが伺える。

## 6.2 古代・中世における鋼の製造

古代・中世の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石〔砂鉄もしくは鉄鉱石<sup>9)</sup>〕を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬物である鉄は炭素量に応じ、鋼と鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を抽出し含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある<sup>9)</sup>。上記の方法は近世たたら製鉄における錡押法<sup>9)</sup>によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが鉄鉄も混在すると考えられている）〕を精製し目的とする鋼に変える操作は精錬<sup>9)</sup>と呼ばれている。古代に鋼を溶解する技術は未確立であったと考えられるので（溶解温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1~0.2%の鋼を溶解するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある<sup>1)</sup>）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打

によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、夥しい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鋳造鉄器の普及が示すように<sup>10)</sup> 11)、遅くとも9世紀には鉄鉄を生産する技術、すなわち鉄鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている<sup>12)</sup>。得られた鉄鉄を溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された鉄鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は、鉄鉄を經由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼(鉄)法<sup>13)</sup>に位置づけられる。

鉄鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶<sup>14)</sup>がよく知られている。たたら吹製鉄には鉄押法と鋳押法の2つの方法がある。後者における生産の主目的物は鑄鉄(主として鋼からなる鉄塊)、前者はが外に流し出される鉄鉄で、副生成物として炉内に鋳鉄もできる。鉄押法において鋳鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された鉄鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に鉄鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに木炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた鉄鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火流にふれ酸化され、鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鋳とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積み重ね、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上のせ、加熱・鍛行によって鉄滓の除去と幣形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている<sup>15)</sup>。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質こそ異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に鉄鉄の脱炭が図られるが、溶鉄(溶融した鉄鉄)を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている<sup>16)</sup> 17)。この方法の場合、溶鉄の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかなように、鉄に関する生産設備として少なくとも①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として鉄鉄を生産するための炉と鋼を生産するための炉が、精錬炉については鉄鉄を局所的に溶融し脱炭するための炉と溶鉄を準備した後それを脱炭して鋼を製造する炉が、鍛冶炉については精錬鍛冶と小鍛冶のための炉があった可能性がある。検出された炉跡の残存状況と出土資料の形状でたたらに炉跡の機能を決定することはさきわめて危険である。以下ではこの点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、No.2～No.5鉄滓の成因について検討することとする。

### 6-3 鉄滓の成因

No.4およびNo.5はSI21堅穴建物のほぼ中央部に構築された炉跡内部から見出されている。炉は平面形が長軸37cm、短軸17cmの楕円形を呈し、深さは10cm程度である。炉内には堆積土が2層確認されていて、一層は固く締まり炭化物を多く含んでいる。その下に赤褐色の砂質土があり、操作時の炉底面はその下にあったと推定されている<sup>1)</sup>。炉内部が赤褐色を呈することから、酸素がよく行き渡った開放状態で操作が行われていた可能性が高い。

No.5は縦断面が長方形をした鍋からなる。精出した試料が主としてウスカイトとヘマタイトからなること

から、純化された鋼を加熱・鍛打した際に剥離した資料（鍛造剥片）とみることができる。No 1は直径が1 cm程度の粒状で、抽出した試料にはいたるところに空殻が残存する。マイクロ組織はFe-Al-O系化合物とガラス化した領域からなり、Si、Al、Feを主成分とする。粘土状物質と酸化鉄が反応し溶融または部分溶融した後、空気が入り込み粒状化したものと思われる。

No 2、No 3はそれぞれNo 1住居跡の床面直上、床面下層から検出されている。炉跡に伴う資料ではなく、他の場所で生成した後、住居跡内に混入したとみなければならない。既述のとおり、No 2の凸部は主として溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われており、その内側にウスタイト、鉄かんらん石、Fe-Al-O系化合物、およびガラス化した領域からなる鉄滓が残存する。凸部外表面に木炭の噛み込みはみられない。No 3もNo 2の鉄滓部分とはほぼ同じ鉱物組成をとる。6-2に基づけば、No 2、No 3の成因については、製錬、精錬鍛冶、および精錬の3つを考慮することができる。

製錬を想定した場合、原料鉱石は鉄チタン鉱物をほとんど含まない鉄鉱石を想定する必要がある。遺跡内およびその周辺に該当する鉄資源は賦存しない。製錬を実施したとみなすことができる炉跡が未検出であることをふまえると、当該遺跡においてその実施を主張することは難しい。

既述のとおり、精錬鍛冶における出発物質は主として鋼からなり、相当量の鉄滓が混在した組成不均一な鉄である<sup>3)</sup>。木炭の燃焼による炉内到達可能温度域を考慮すると、主として鋼からなる鉄を溶解することは困難であり、純化の操作は加熱・鍛打によったとみなければならない。この操作では鉄塊に付着または鉄塊中に固着する鉄滓が破砕され除去される。その過程で飛散した鉄滓が炉内に入り、炉材粘土と反応しながら溶融または部分溶融した後、炉底にたまり固化する。検出された炉跡が精錬鍛冶に使用されたという見方に立てば、金属考古学的調査を行ったNo 2およびNo 3は炉床部において生成したとみなければならない<sup>18)</sup>。炉底部には熱源である木炭が共存しているため、鉄滓中にある程度の木炭が噛み込まれるはずである。上記2点の鉄滓には木炭の噛み込みや固着はみられない。熱源である木炭と反応サイトとが分離された状況下において生成した鉄滓の可能性はある。

No 2、No 3が碗状を呈すること、木炭と反応サイトとが離れた位置にあった可能性があることを考え合わせると、碗状を呈する容器または設備の中に溶鉄を生成させ、それを空気酸化により脱炭して鋼を製造する操作（精錬）の過程で生成した可能性を考慮することができる。鉄滓中に残存するウスタイト、鉄かんらん石は溶鉄の再酸化物、または鉄浴の再酸化物と碗状容器の素材、あるいは精錬過程で使用された造洋材が反応し生成した物質と考えられる。

S121住居跡で見いだされた炉跡では、精錬または鉄滓が固着した鉄塊の過熱・鍛打による純化、さらには純化された鋼を素材とする、製品鉄器の製作が行われていたものと思われるが、この点を明確にするためには羽口、台石等の道具類の検出が不可欠である。これまで鋼製造は直接製鋼法を基軸に検討されてきたきらいがあるが、鉄の生産と流通、および鉄を素材としての鋼の製造と鋼製鉄器の製作という一連の生産方法を考慮に入れて、古代における鉄・鉄器生産を研究する必要がある。この問題意識の基に鉄関連遺構の発掘調査が進められ、生産設備の復元や使用された道具の解明がなされれば、古代の鋼製造法の実態に迫ることができるにちがいない。

#### 註

- 1) 財団法人若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター・岩澤正晴氏からのご教授による。
- 2) 佐々木敏、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」『季刊考古学』8、1984、pp.27-33。
- 3) 佐々木敏、伊藤謙「川合遺跡出土の鉄片、鉄線ならびに焼允の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要』11



静岡県埋蔵文化財調査研究所、1987、pp.63-78。

- 4) 『鉄剣の銅像複製写真と解説』丸善株式会社、1968。
- 5) 赤沼英男、佐々木修、伊藤重「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、2000、pp.53-376。
- 6) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの海浜集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている<sup>1)</sup>。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して扱うことには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された、磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採取されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 7) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、丸善、1981。
- 8) 大澤正巳「古墳供鉄砂洋からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40。
- 9) 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990、p.11。
- 10) 五十川伸久「古代・中世の鉄造物」国立歴史民俗博物館研究報告第46号、1992、pp.1-78。
- 11) 五十川伸久「古代から中世前半における鉄造物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。
- 12) 関清「古代末の北陸-富山沿岸部の遺跡群-I」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。
- 13) 空気酸化により鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはたたらに $\alpha$ -Feに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の銅製鉄器によく使用される珪共析鋼が鉄鉄を精錬してたたらに得られたかどうか不明なため、本論では鋼製製鋼(鉄)法という表現をとった。
- 14) 村上英之助「村土・中津の往復書簡」たたら研究、36・37、1996、p.78-88。
- 15) 赤沼英男「中世後期における原料鉄の流通とその利用」『鉄と剣の生産の歴史』株式会社建山閣、2002年、pp.97-115。
- 16) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999、pp.15-24。
- 17) 赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふえらむ、Vol.2 No.1、社団法人日本鉄鋼協会、1997、pp.44-51。
- 18) 精錬鍛冶の山出物質として組成不均一な鉄塊が想定される。流湯品は価値換算を容易に行えるよう、組成や形状が規格化されている必要がある。組成が不均一で不定形な形状の鉄塊が、商品として広域的に流通していたとは考えにくい。精錬鍛冶を考える場合、遠路直轄の要所が別途確保されていて、そこで生産された組成不均一な鉄が精錬鍛冶場へ運び込まれていたことを前提にする必要がある。

表1 調査資料の概要

No.	検出遺構		資料名	推定年代
	遺構名	層位		
1	S107	床面直上	鉄製鉄器	9~10世紀代前半
2	S111	床面直上	銅杖鉄滓	9~10世紀代前半
3	S111	T層	銅杖鉄滓	9~10世紀代前半
4	S121	炉内	銅杖鉄滓	9~10世紀代前半
5	S121	炉内	銅片状鉄滓	9~10世紀代前半

注1) Noは分析番号。検出遺構、資料名、推定年代は財団法人若手県文化振興事業団西成文化財センター・西澤正樹氏による。

表2 鉄器の分析結果

No.	化学組成 (mass%)											Cu, Ni, Coの三成分比							
	Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Si	Ca	Al	Mg	V	Zr	μクロ組織	n.m.i.	Co/Ni	Cu/Ni	Co/Ni	
1	1.77	21	0.069	0.008	0.030	0.001	0.05	0.001	0.001	0.001	0.001	<0.001	<0.001	no	Wus, XT, Fa, Ma	—	—	0.27	0.30
2	56.81	0.010	0.004	0.011	0.001	0.10	0.026	1.58	0.029	0.397	0.044	<0.001	<0.001	no	XT, Ma	—	—	0.36	0.91

注1) Noは表1に対応。Noはサンプル番号。化学組成分析はICP-AES法による。

注2) Paはパーライト。炉内内の数値はμクロ組織から推定される炭素量。noはない。

注3) n.m.i.は非金属介在物組成。Wusはウスタイト (化学理論組成FeO)、XTはウスタイト (化学理論組成FeO)、XTはFe-Al-V-O系化合物、FaはFe-Mg-Si-O系化合物、Maはマトリックス。

表3 銅片状鉄滓の分析結果

No.	化学組成 (mass%)											μクロ組織			Cu, Ni, Coの三成分比				
	Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	Zr	μクロ組織	n.m.i.	Co/Ni	Cu/Ni	Co/Ni
5	67.26	0.008	0.004	0.011	0.051	0.11	0.206	2.11	0.153	0.851	0.176	0.014	0.004	Wus	XT, Ma	—	—	0.36	0.73

注1) Noは表1に対応。Noはサンプル番号。化学組成分析はICP-AES法による。

注2) Paはパーライト。炉内内の数値はμクロ組織から推定される炭素量。noはない。

注3) n.m.i.は非金属介在物組成。Wusはウスタイト (化学理論組成FeO)、XTはFe-Al-V-O系化合物、FaはFe-Mg-Si-O系化合物、Maはマトリックス。

表4 鉄滓の分析結果

No.	資料名	化学組成 (mass%)											μクロ組織			鉱物組成				
		Ti	Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	Zr	μクロ組織	n.m.i.	Co/Ni	Cu/Ni	Co/Ni
2	1	銅杖鉄滓	51.36	0.008	0.008	0.029	0.083	0.11	0.204	7.79	1.33	2.48	0.626	<0.001	0.006	Wus, Fa, Ha, Ma	—	—	—	—
3	—	銅杖鉄滓	19.27	0.007	0.006	0.008	0.113	0.17	0.479	18.7	1.44	7.38	1.13	<0.001	0.009	Qlx, Gl	—	—	—	—
4	—	銅杖鉄滓	59.20	0.007	0.014	0.034	0.049	0.06	0.175	6.62	0.628	2.28	0.465	<0.001	0.005	Wus, Fa, Ma	—	—	—	—
4	—	銅杖鉄滓	11.62	0.003	0.004	0.002	0.092	0.06	0.387	16.8	0.820	6.76	1.01	<0.001	0.008	Ha, Ma	—	—	—	—

注1) Noは表1に対応。Noはサンプル番号。化学組成分析はICP-AES法による。

注2) Wus: ウスタイト (化学理論組成FeO)、Fa: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ila: マトリックス。

注3) n.m.i.は非金属介在物組成。Wusはウスタイト (化学理論組成FeO)、XTはFe-Al-V-O系化合物、FaはFe-Mg-Si-O系化合物、Maはマトリックス。

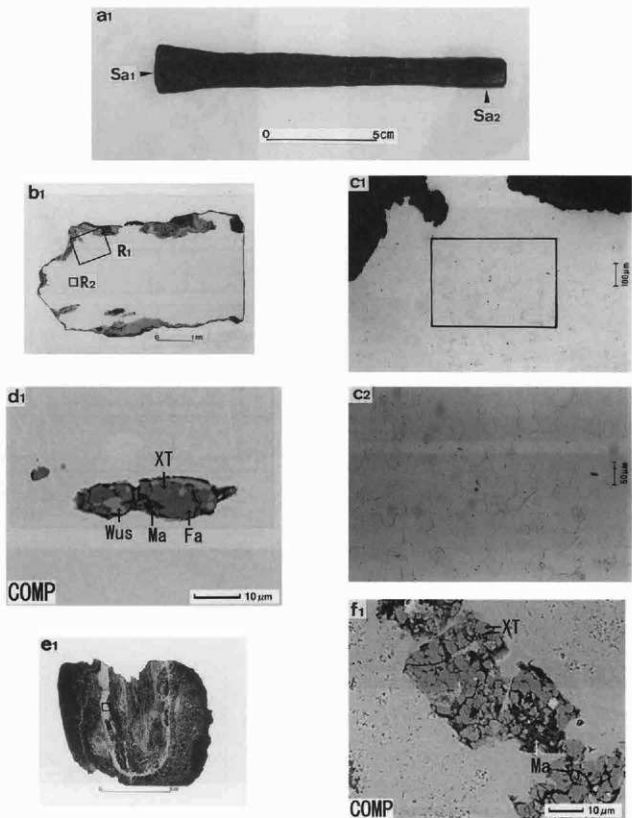


図1 №1の外観と抽出した試料の組織観察結果

a<sub>1</sub>: 外観。矢印は試料抽出位置。b<sub>1</sub>・e<sub>1</sub>: それぞれa<sub>1</sub>のSa<sub>1</sub>、Sa<sub>2</sub>から抽出した試料のマクロエッチング組織とマクロ組織。エッチングはナイタルによる。c<sub>1</sub>: b<sub>1</sub>領域R<sub>1</sub>内部のマクロエッチング組織。c<sub>2</sub>: c<sub>1</sub>枠内部のマクロエッチング組織。d<sub>1</sub>・f<sub>1</sub>: それぞれb<sub>1</sub>領域R<sub>1</sub>内部、e<sub>1</sub>枠内部に残存する非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP)。Wus: ウスタイト、XT: Fe-Ti-Al-O系化合物、Fa: Fe-Mg-Si-O系化合物 [マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 (2 (Fe, Mg) O · SiO<sub>2</sub>と推定される)、Ma: マトリックス。

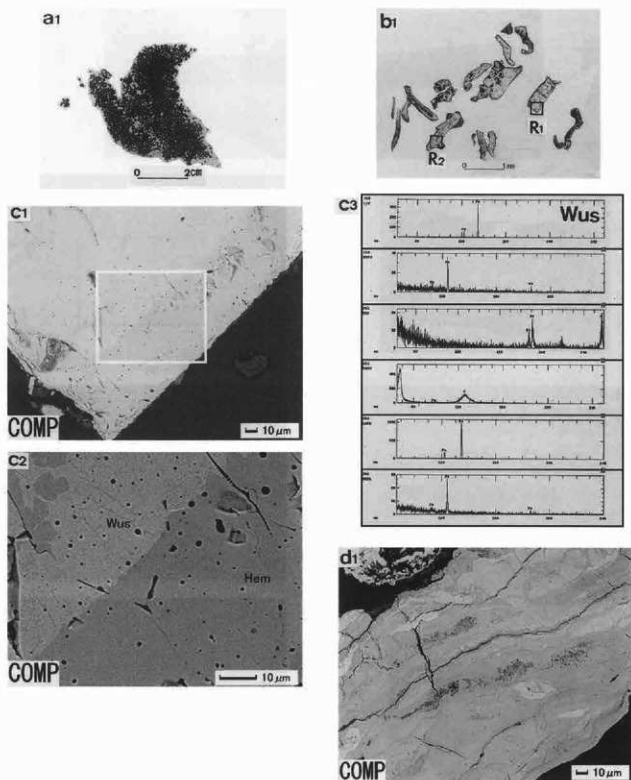


図2 No.5の外観と抽出した試料の組織観察結果

a<sub>1</sub>: 外観。b<sub>1</sub>: 抽出した試料のマクロ組織。c<sub>1</sub>-<sub>3</sub>: b<sub>1</sub>領域R<sub>1</sub>内部のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。  
 d<sub>1</sub>: b<sub>1</sub>領域R<sub>2</sub>内部のEPMAによる組成像 (COMP)。Wus: ウスタイト (化学理論組成FeO)、Hem: ヘマタイト。

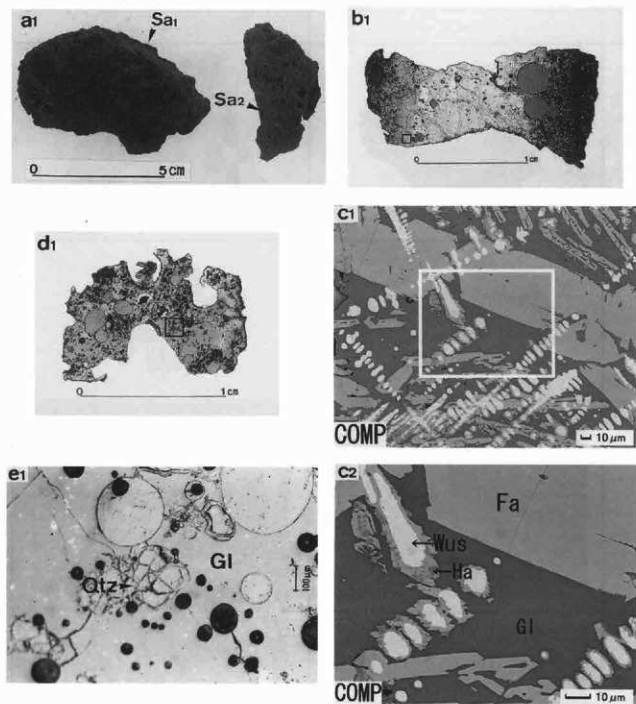


図3 No.2の外観と抽出した試料の組織観察結果

a<sub>1</sub>: 外観。矢印は試料抽出位置。b<sub>1</sub>: a<sub>1</sub>のSa<sub>1</sub>から抽出した試料のマクロ組織。c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>: b<sub>1</sub>枠内部のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。c<sub>2</sub>はc<sub>1</sub>枠内部を1000倍で観察した組成象。Wus: ウスタイト、Fa: FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Ha: Fe-Al-O系化合物、Gl: ガラス質ケイ酸塩。d<sub>1</sub>: a<sub>1</sub>のSa<sub>2</sub>から抽出した試料のマクロ組織。e<sub>1</sub>: d<sub>1</sub>枠内部のミクロ組織。Qtz: 酸化ケイ素 (石英と推定される)、Gl: ガラス質ケイ酸塩。

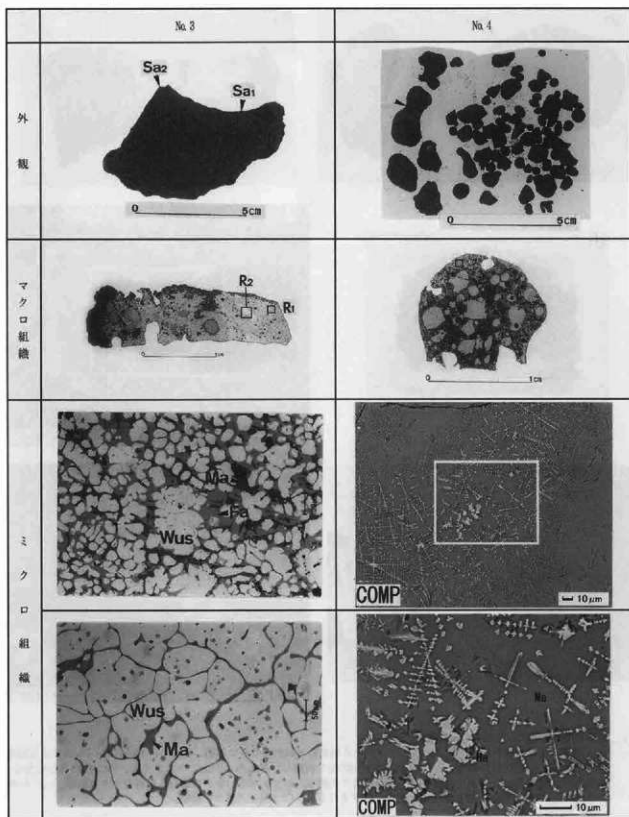


図4 No. 3およびNo. 4の外観と抽出した試料の組織観察結果  
 外観の矢印は試料抽出位置。No. 3のミクロ組織上段および下段は、それぞれマクロ組織領域R<sub>1</sub>、R<sub>2</sub>内部。No. 4のEPMAによる組成像 (COMP) 上段はマクロ組織枠内部、下段は上段の枠内部を1500倍で観察した組成像。Ha: Fe-Al-O系、Ma: マトリックス。

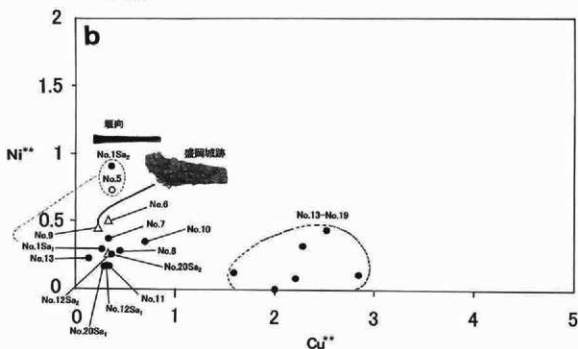
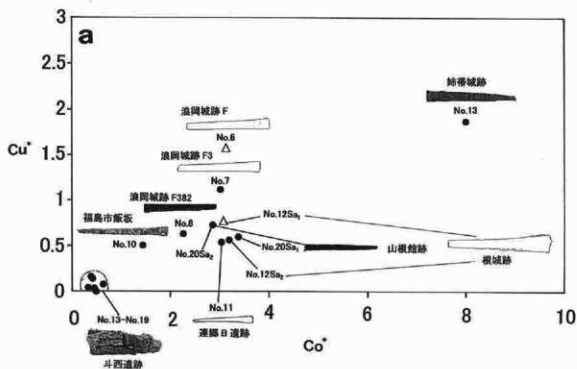


図5 No.1Sa<sub>1</sub>・No.2Sa<sub>1</sub>・No.5に含有されるCu、Ni、Co三成分比  
No.は表1に対応。図には古代および中世の遺跡から出土  
した鉄鋸状鉄器の分析結果も掲載。

●：非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されたもの。

○：非金属介在物中に鉄チタン酸化物が見出されなかったもの。

△：非金属介在物が見出されなかったもの。

Co\* : (mass%Co)/(mass%Ni)、Cu\* : (mass%Cu)/(mass%Ni)

Co\*\* : (mass%Ni)/mass%Co、Cu\*\* : (mass%Cu)/(mass%Co)

## 第四章 考察

### 第1節 出土土器の年代的位置づけ

#### はじめに

ここでは西川目・塚向II両遺跡出土遺物の分類を行い、その年代的な位置づけを行う。両遺跡においては、いくつかの遺構堆積土中の同様の位置にToyoテフラを含むことで共通していたため、おおそ同時期に属すると考えられた。そのため、ここではこれらを一括して分類・検討を行う。分類後は周辺の遺跡との比較を通じて年代を付与することにする。

#### 2. 分類

出土土器には、杯、壺、鉢、壺、高台杯などがある。それぞれ、土師器（便宜的に名称は内黒土器、非内黒土器を一括）、須恵器の種別に分かれる。各種別のうち比較的出土量の多い杯・鉢類についておもな対象となる。土師器が中心となり、須恵器については出土量が少なく参考程度に触れておくことにする。

##### (1) 分類の指標

分類を行うにあたって、ここではとくに器形と法量をおもな指標とする。これまでの研究の結果から器形と法量が重要な指標となることは明らかであるため、これらに属性を絞って分類を行う。もちろん、本来はさらに詳細な属性を組み合わせて検討を行なわねばならないが、ここでは大まかな時期差を捉えることを主眼としているため簡略化している。

内面に黒色処理が施される杯と施されない杯は、ここでは便宜的に土師器に一括して考えており、区別する場合に限って内黒土器・非内黒土器と呼称している。この呼称は単に黒色処理の有無を表しているものであり、ここでは特別な意味をもたない<sup>1)</sup>。

実際に分類は、種別→器形→法量の順で行っている。器形がさらに細分できる可能性があるものここでは大まかなまとまりを示すにとどめている。

##### (2) 土師器

杯 すべて調整にロクロを使用している。

A類 体部が直線もしくは直線状に開くもので、体部断面形状が逆台形を指向しているもの。「直線状」としているが、志波城出土例のように逆台形形状を呈するものは少ない。広義の意味において直線状としている。

B類 体部が内湾しながら立ち上がるもの。「椀形」を呈するもの。西川目・塚向II遺跡においてはもっとも主体的な杯となるものである。

C類 体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するものである。B類とは口縁端部の形状が異なる。内湾する度合いはさまざまであるが、断面形状を重視して同一の部類に含めている。この内湾度の違いは口径や器高・底



第275図 杯の分類



径に対応するものである。

D類 底部側縁（体下半部）で一度屈曲し、その後内湾しながら立ち上がるもの。口縁部は外反しない。

F類 底部側縁（体下半部）で一度屈曲しその後内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反するもの。

上記のような5類を大別すると、以下のようになる。

I A類 逆台形を指向する7世紀以来の器形

II B・C類 椀形を指向する器形

III D・E類 底部が突出する器形

これらの各類は、さらに法量を指標にして細分される。

法量1 口径が15cm以上のもの。器高が5cm以上のものが主体である。

法量2 口径が13～14.9cmのもの。器高が3.5cm～4.9cmのものが主体である。

法量3 口径が13cm以下のもの。器高が2.0cm～3.5cmのものが主体である。

今回の両遺跡の調査では、法量別には2類が主体を占めている。1・3類については少量の出土となっている。なお、これらの数字は、両遺跡分の統計からそのピークの数字をまとめたものであるため、今後周辺の遺跡を含めて分析を行う場合は多少値が変化する可能性があるが、平均的な数値はあまり変動がないものとする。

法量はこの時代には法量分化が顕著であるため、器種の差とも考えられるが、これまでのいくつかの検討の結果から、とくに底径が小さくなることは年代差である可能性が高いと考えられている。したがって、法量の差は器種差の可能性を残しつつもここでは仮に時期差と捉えることにしたい。

次に甕の分類を行う。

A類 調整にロクロを使用しないもので、口縁部が外反するもの。いわゆる単純口縁の形態をとる。

B類 調整にロクロを使用するもので、口縁部が外反するもの。いわゆる単純口縁の形態をとる。

C類 口縁部は外反しながら立ち上がり、端部が上方に引き出されるもの。直角に屈曲するものも含める。

D類 口縁部が外反しながら立ち上がり、端部が上下に肥厚するもの。

甕形土器の場合、上記の5類がそれぞれ口径の違いにより25cm以上の大型、20～25cmの中型、20cm以下の小型に分けられる。これは時期差ではなく機能の差によるものと考えられる。なお、小型にはミニチュアも含めている。今回はこのミニチュア型甕も比較的多く出土している。

### (3) 須恵器

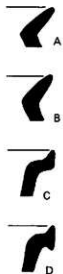
検討の結果、須恵器の分類については、類似する分類基準で対応が可能と思われるが、絶対数が少ないためここでは行わない。

なお、器種としては杯のほかには大甕、甕、長頸甕が確認できる。

### (4) その他

高台杯、鉢、ナベ、内外面に黒色処理が施された黒色土器などがあるがいずれも出土数が少なく分類できないため、その特徴を列記するにとどめたい。

高台杯は10点が出土している。種別でみると須恵器2点、内黒土器5点、非内黒土器3点である。器形をみると、杯部では多くは椀形を呈し、杯分類で言えばB・C類に相当するものがほとんどであるが、非内黒の1点は直線的に開く杯部をもつものも



第276図 甕の分類

ある。II緑増部は外反するものとしないものの2者に分かれる。高台部は「ハ」字形に大きく開くものが多く、断面形が丸くなるものと方形になるものの2者がある。須恵器・高台杯は高台が短く、断面が方形に作られている点で内黒・非内黒土器とは異なる。

鉢は7点が出土している。底部まで残存しているものが少なく全体の形状は判然としなが、口径に対して器高が短いものを「鉢」として区別している。内面に黒色処理を施すものが多い。器形は緩やかに外反するII緑部から底部に向けて窄まっていくもので、口径部に最大径をもつ。調整は内面には横位のミガキが施される例が多い。外面はロクロナデのみや下半部にケズリが施されるものもある。

ナベは5点が出土している。鉢よりも口径に対する器高の比率が低いものである。底部が欠損しているものが多く全体の形状は不明であるが、丸底に近い底部と考えられる。口径部はすべて端部が上下に肥厚する。調整は体上半部がロクロナデ、体下半部が縦位のヘラケズリを施す。内外面にタキの痕跡を残すものもあり(762)、やや製作技法が異質なものである。内面はナデのみが多いが、粗いハケが施されるものもある(760)。5点中4点がSI26やその下層住居跡より出土するなど、出土遺構が限定される。出土例や製作技法の点で特異であり、広義の「北陸系」土器である。

これらのほか、緑釉陶器輪が1点、両面ともに黒色処理が施される黒色土器が数点出土している。

#### (5) 小結

さて、これら各期の時期的な前後関係であるが、杯に限定して考えると、同様の分類基準で行った水沢市・中平入遺跡の検討結果からA→B・C→D・E類へと相対的に新しいことが想定できる(西澤2002)。地域(部)が異なるものの基本的な時間の流れについては器形の変化はあまり変わらないと考えるため、今回もこの仮説が採用できると思われる。したがって相対的に杯A類が古くD・E類が新しいことになる。実際の出土状況では、各類が重複しており、供伴する例が多い。これは、いくつかの機能・性格をもつ杯を組み合わせて使用していたことを示しており、そのなかで新器種の追加や削減が行われていたことになる。これらのうちA類がもっとも早くから組成に加わったもので、D・E類がもっとも新しく追加された器種であると考えられる。このように、杯類でみた各類はある程度共存するものの基本的には時期差である可能性が高いと考えられる。ここでみた各分類は厳密な意味において型式ではないため「類」と呼んでいるが、「形式」の意味に近いと思われる。いずれはこの形式内に型式を設定し組列を見出さねば着大な編年は構築できないであろう。

相対的に新しいと考えられる杯D・E類は各種別とも確認できるが、とくに内黒・非内黒土器に多い。この類の特徴である底部側縁の窪みは強いナデ調整によるものと考えられるが、これはヘラケズリによる再調整の名残かもしれない。実際、D・E類に再調整が加えられるものは今回確認されていない。

法量の変化について考えると、口径が13cm以下の法量3が内黒、須恵器にはほとんど認められない。非内黒でもとくにD・E類に多い。逆にいえばこの法量がD・E類の特徴の一つとなっている。

ここでは大まかな範囲で法量(口径)を捉えたが、さらに細分すれば細かな変化が追える可能性がある。非内黒土器に特有であり、ある時期を限定する指標となりうる。

調整についてはあまり触れなかったが、底部切り離しは全ての種別において承切りであり、底部に再調整されるものはきわめて少ない。底部側縁に再調整が施されるものも数例である。内黒土器の場合内面には対上部には横位に、体下半には放射状にミガキが施される。細かく「窄」に施されるものもあるが、ミガキの幅が太く、放射状が斜位になるなど雑に施すものも比較的多く含んでいる。

壺類についてはあまり顕著な差を認めることができなかった。これは5種の器形が揃って組成に含まれていることであり、使用頻度の高い壺類の特徴なのかもしれない。したがって、杯類と同様に時間的な関係をみる場合は今回の分類内をさらに細分して型式を設定しなければならず、また時期対象を広げることが必要となる。杯類に比べ器形が変化する時間がゆるやかと考えられるからである。

### 3. 組成

#### (1) 類型の設定

つぎに、上記の分類がどのように組み合わせるのかそれぞれ出土遺構ごとに見てみる。厳密には堆積土中と床面上出土のものを区別しなければならないが、出土量の関係もありここでは一括して検討している。

各遺構から出土した土器類を分類別に表したのが第1表である。この表から、杯類D・Eの消長と法量の変化（各器種の組成比）を指標として大きく3つの類型に区分できる。

西川目・塚向Ⅱ遺跡1期 内黒土器杯A・B・C類、非内黒土器杯A・B・C類からなる。出土量は須恵器・内黒土器が主体であり、非内黒土器は少ない。

西川目・塚向Ⅱ遺跡2期 内黒土器杯A・B・C・D・E類、非内黒杯A・B・C類からなる。内黒土器に新しい器形であるD・E類が新しく組成に追加される段階である。出土量で見れば、須恵器・内黒土器・非内黒土器の割合が全て同じくらいになっている。杯類の主体はB・C類である。全体量があまり変わらないため、須恵器・土師器の量が減じ、非内黒土器の割合が増加したためと考えられる。

西川目・塚向Ⅱ遺跡3期 内黒土器A・B・C・D・E類、非内黒土器A・B・C・D・E類が併存段階。非内黒土器にも新しい器形であるD・E類が加わる。両者にも各器種が揃うが量的にはB・C・D類が多く、A類がほとんどなくなる。須恵器が急激に減少し、内黒土器・非内黒土器で出土量の大半を占める用になる段階である。内黒土器と非内黒土器にD・E類が出現する時期に明確な差があるかは実際には不明であるが、便宜的に区別したものである。

上記のように、西川目・塚向Ⅱ遺跡においては、出土遺物の検討から上記の3時期に区分することができる。なお、1期のうち、非内黒土器を伴わない西川目SI07・09などは1期のなかでもより古相をしめすかもしれない。しかし、発掘を行っていない住居跡もあるため断言できない。また、3期のうち、法量3をもつ遺構は3期のなかでも新しい段階に属すると考えられる。したがって、さらに4つに細分される可能性もあるが、個々での主眼は大きな時期差の特定のためあまり触れないことにする。

#### (2) 他器種との組成

杯以外の土器がどのように組み合わせるであろうか。壺は各類とも全ての段階で組成に加わっており、今回の両遺跡の時期においてはあまり組み合わせに変化はない。もっと広い期間で見れば差が出て来るであろう（羽柴2000）。そのなかで、壺D類をみると、1期において、D類はC類とあまり変わらないJ線部断面をしているが、後者については、わずかに下部が脹らんでいる（351・352など）。これが3期になると、さらに垂下するようになる（605・651など）。この理解がただしければ、時期が降るにつれ、肥厚の度合いが徐々に大きくなるのが考えられる。また、上方のみ肥厚するC類についても同様に変化すると考えられる。し



2期の土器群はD・E類が含まれるようになるが、A～C類に比べて出土量は少ない。非内黒土器にD・E類が登場する時期を便宜的に3期としたが、大まかには2期に含まれると考える。D・E類が登場するものの、主体とならない段階のものである。内黒と非内黒の出土比率は同じくらいである。須恵器も少ないが出土している。周辺の遺跡においては上川岸Ⅱ遺跡ⅩE-3住居跡、藤沢遺跡SI262竪穴住居跡・SI265竪穴住居跡などがある。3期には藤沢遺跡SI021竪穴住居跡、牡丹畑遺跡・SI012竪穴住居跡、南部工業団地内遺跡D001竪穴住居跡、D007竪穴住居跡などがある。

これら1期～2期(3期)にかけての一群と類似する土器群は、年代がある程度判明している宮城県・多賀城周辺の編年と対比してみると、多賀城では涌ノ池10層出土土器群(柳沢1992)、村田編年(村田1995)では1群と2群の一部も含まれると考えられる。年代は、10層出土土器群は9世紀第4四半期、村田編年1群～2群は9世紀第4四半期～10世紀前半と考えられている(柳沢1994・村田1995・2000)。

以前、同様の分類を行い多賀城周辺の土器群と比較したことがある(西澤2002)。その結果、杯にD・E類が出現する時期は9世紀後半になってからであり、これらが主体を占めるようになるのは10世紀初頭～前葉と考えた。この仮説に従えば、D・E類は杯類の中において主体を占めず、B・C類と同様の出土率であることから、すくなくとも10世紀前半には降らないものと考えられる。

緑釉陶器との供伴関係をみると、緑釉陶器は1個体分の破片がSI26B竪穴住居跡から出土している。床面出土の遺物ではないが、3期に属する遺構である。緑釉陶器は黒登90号窯併行期と判断でき、9世紀後半の年代が考えられている。これらと1・2期との時期差から9世紀末を前後する時期であり、10世紀初め頃にも及んでいる可能性がある。なお、SK04上坑出土遺物は、さらに時期が降る可能性がある。器高が低い法壇3のみで片められる杯類はこれらの土器群(西川目・塚向Ⅱ遺跡1～3期)の次の段階に位置づけられ、10世紀中葉前後の年代が推定される。この遺構のみのためあえて分離しないが、集落の最終段階はこの時期に属するのかもしれない。

以上をまとめると、1期～2期は9世紀後半、3期は9世紀末～10世紀前葉の年代が考える。火山灰が堆積土中に認められたのは西川目SI04、塚向ⅡSI18などで1期に属するが、いずれも堆積土最上層付近に粒～ブロック状に入る状況であった。竪穴の埋没期間の問題もあるが、少なくとも火山灰が流入した時期にはほぼ堆積が完了していた時期でもあったと考えられる<sup>(1)</sup>。したがって、上記で設定した年代とも大きく齟齬をきたさないものと考えられる。

大きくみると、本遺跡出土土器群は9世紀後半を中心とする時期に相当すると考えられ、一部10世紀代へ降る遺構も存在するということになる。また、SK04出土土器についてはその特徴から10世紀中葉まで降る可能性があり、土器が出土していないものの同時期の遺構もほかに存在していたと思われる<sup>(2)</sup>。

## 5. まとめ

以上、土器の分類およびその年代的な位置づけを中心に若干の検討を行ってきた。報告書の性格上、分類や変遷について詳細に述べることができなかつたが、本遺跡の限定された一時期のみではあるが、大まかな変遷や所属時期が明らかになったと思われる。岩手県内においては、古代土器編年は相対的なものについてはほぼ整備されているものの、個別土器の組成や細分、絶対年代など課題は多い。とくに個別器種の組列に関しては不明といわざるを得ない。今後はこれらの点に留意しつつ、大局的な土器の変化の意味づけを行う研究と合わせて進められることを望みたい。また、ここでは土器を年代決定のみに扱っているが、本来はほかに使用状況や種別の差、配置状況など土器自体の性格を検討しなければならない。これらの問題は別の

機会に論じたいと思う。

註

- 1 筆者は、伊藤の指摘のように（伊藤1998など）、井内黒の土器（須恵系土器）は別様式の土器と考えているため、本来は、名称を区別すべきかもしれないが、ここでは、あえて触れないことにする。
- 2 火山灰の有無で時期差が考えられるが、蓋上部に入るため削平されていれば不明となる。黒色土中で検出できたものであれば検出できた可能性が、多くは削平されていたため、火山灰の有無で時期差を判断することは断念している。
- 3 土坑のみの存在は考えにくい。

参考文献

- 伊藤博幸1998 a 「北上盆地南部」『東北地方の古代集落』第24回古代城柵宮衛遺跡検討会シンポジウム資料
- 伊藤博幸1998 b 「後半期の集落」『岩手考古学』第10号
- 高橋信雄ほか1982『岩手の土器』岩手県立博物館
- 西澤正晴2002「出土土器について」『中半人遺跡第2次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集
- 村田晃一1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『塚島考古』第36号
- 村田晃一2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺 移住の時代」『宮城考古学』第2号
- 八木光則1979「林崎遺跡調査のまとめ」『太田方八』遺跡—昭和53年度発掘調査概報—」盛岡市教育委員会
- 横沢和明1992「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究年報1991』
- 横沢和明1994「東北の埴輪陶器—陸奥を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 埴輪陶器—』

## 第2節 検出遺構について

### 1. はじめに

ここでは、西川目・堰向Ⅱ遺跡で調査されたおもな遺構について、若干の検討を行う。とくに前節で設定した遺物の時期区分を援用して遺構の変遷を検討していくことにする。

### 2. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は両遺跡で合計54軒（建替えを含める）が検出されている。ここでは、このなかで規模、方位、掘りかた、立地など特徴的な属性について簡単にまとめる。

#### 大きさの類別

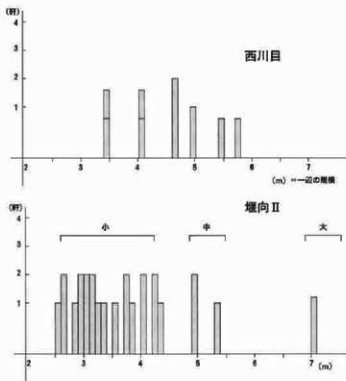
一辺でも規模が判明する住居跡について、計測を行ったのが第277図である<sup>(1)</sup>。これによれば、大きく次の3つに分けることができる。大多数を占めるのが一辺4.5m以下の住居跡群であり、5m前後の住居群、6m以上の群とつづく。それぞれ、小・中・大型とする。

図をみると、6割以上がほぼ同一の規模をもつ小型の竪穴住居群ということになる。中型のものは一定数確認できるものの、大型については極めて少ないという傾向が看取できる。このような傾向は、これまで繰り返し述べられたように<sup>(2)</sup>、平安期になると住居跡の大きさには統一性が認められるようになることと矛盾しない。

そういった状況の中で大型の竪穴住居跡は規模の点で際だったものである。遺物の出土量や種類も多く他とは規模やその内容をみれば歴然たる差が認められる。この竪穴住居跡が仮に居住用だとするなら階層的な差が認められるであろう。

#### 主軸の方位

今回確認した竪穴住居跡のうち軸方位が判明するものをまとめたのが第278図である。住居跡主軸は北方向を基準にして計測している。この図をみると、大きく2つのグループに分けられそうである。1つは0°～10°前後東（あるいは西）に触れているグループであり、もう1つは20°～30°前後に触れているグループである。つまり、前者はほぼ北を指向する1群、後者は大きく東に触れる1群であるといえる。このほか、少数ながらも西に振れる住居跡や40°以上東に触れる住居跡などがあるが備かである。大半の住居跡が、このいずれかの群に含まれる



第277図 各遺跡の住居規模

ことになる。計測時の誤差もありうるが、このような差が読みとれる。この主軸の差は、重複関係がなく直接的に検証できないが、多くは時期差と捉えられる。それは前節で設定した遺物の時期区分と対応させると、ほぼ北方向を向く1群には西川目・塚向Ⅱ遺跡1期に対応するものが多い傾向にあり、また、東に大きく触れる1群には同2・3期に対応するものが多い傾向にあるからである<sup>(4)</sup>。この点でみると、この主軸の差は構築時期による差と捉えることができよう。すなわち、本遺跡で9世紀後半の段階で構築される住居跡は北を指向するのに対し、その後10世紀前後に構築される住居跡は大きく東に触れた軸をもつようになることである。

主軸の差がすべて時期差と考えるのは早計であろうが、少なくとも西川目・塚向Ⅱ遺跡の場合は上記のように捉えられよう。また、限定された主軸方位をもつことから、なんらかの規制が伴っていることが予想される。竪穴住居跡の主軸方位と掘立柱建物跡の方位が揃うことも合わせて、ある一定の配置が意図される。

#### 掘りかたの構造

竪穴住居跡の掘りかたの構造は今回の調査からは次の3つに分けることができる。

- ① SI08・19・14・21など住居壁面に沿って床面の周囲を深く掘るものである。
- ② SI25などのように、床面の中央部分のみ掘り下げるもの。
- ③ SI12などのように、床面全体を掘り下げるもので、底面に段差がつかないもの。

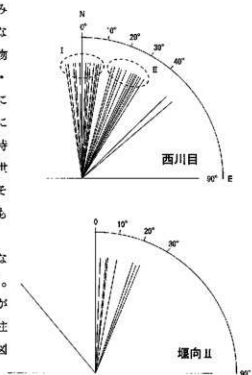
塚向Ⅱ遺跡では①がもっとも主体的な掘りかたの構造となる。この掘りかたの構造は竪穴住居跡の構築時の設計に大きく関係していると考えられる。これに3つの差が認められることは、年代差、系群差、遺構の機能差などが考えられるが、現時点では何を表しているのか明らかにできなかった。これは周辺の遺跡も含めて検討すべき問題である。構築過程に差が認められる点は興味深い事実である。

#### 立地・占地

竪穴住居跡については、両遺跡とも自然堤防上全体に立地している。とくに集中している部分もない。ただし、塚向Ⅱ遺跡のB区やC区は削平されている部分が多いことを考慮に入れても多少の空白があると考えられている。縁辺に集中するのではなく、竪穴住居跡の重複はあまり認められないため、自然堤防上全体に同じような密度で広がっていると考えられる。掘立柱建物跡はとくに竪穴住居跡群と位置を隔てている様子は看取できないが、甬が付設される西川目遺跡SB02周辺では、竪穴住居跡の空白域がありそうである。いずれにせよ、調査区が非常に細長いため立地している状況がすべて判明しているわけではない。

#### 竪穴住居跡付属土坑について

本遺跡では竪穴住居跡の一辺に土坑が付設されるものが比較的多く認められた。当初、近世など後世の遺構との重複であると考えていたが、堆積上の区別が難しいものが多く、竪穴住居跡と一連の構造をしている点を重視して竪穴住居跡と同時期と判断したものがあつた。例えばSI08・18・26などに付属する土坑であ



第278図 住居方位



る。これらは住居の一面から張り出すように構築されるもので、床面より深くなるものもあるが多くは床面とほぼ同一の深さをもつ。焼失住居跡と考えられる SI18 例をみると、この張り出した土坑内にも大體の破片がおよんでおり床面と連続していたことがわかる。甕の破片が多く出土したことから人糞を保管した部分であったと考えられる。少ない例であるが、これらの土坑は住居プランから張り出しているものの床面に穿たれて構築されるいわゆる貯蔵穴と同様に住居跡の諸施設の一つであると考えられる。

#### 建築材について

焼失住居と考えられる住居跡には SI18 と SI20 がある。この両遺構からは多数の炭化材が出土した。前者の方が良好に遺存していたこともあり、点数も多い。これらの同定を行った結果、SI18 はクリ材が、SI20 にはヒノキ、その他の材が多く使用されていることが判明した。2 例のみの同定のため他の状況が不明な点が残るが、あるいは中型の規模である SI18 と小型である SI20 では材質を使い分けしていた可能性がある。規模がある建物にはより強度の高い木材を使用したのであろうか。竪穴住居跡の規模だけでなくこういった内容も、資料が増えれば、その機能についても明らかとなるものは多いであろう。

#### 3. 廃棄土坑について

堰向Ⅱ遺跡のB区北端に位置するSK04土坑には非内黒土器の杯D・E類がまとめて出土している。堆積土の状態などから一括して廃棄されたと考えられる。これらの土器の組成から10世紀中葉の年代が付与できる。このような遺構はこの時期にみられるような廃棄土坑の可能性もある。多賀城周辺においては、多量の一括廃棄土器が出土する土坑がある程度調査されている(たとえば山王遺跡SX3443土坑など)。本遺跡の土坑からの出土数は少ないものの、他の土坑と比べれば格段の差がある。しかも完形に近い杯類も多いことから何らかの廃棄行為が行われた可能性がある。この土坑の位置が集落の外れ、自然堤防の端部に位置することも奇的であろう。いずれにせよ、土器的にも、遺構的にも重要な資料となるであろう。

#### 4. 鍛冶炉について

堰向Ⅱ遺跡からは2軒の竪穴住居跡から炉が検出されている。うち1基の炉跡からは鍛造剥片が確認されていることから、本遺跡において鍛冶を行っていたと考えている。前章までに述べたように、1軒はSI21竪穴住居跡、もう1軒はSI07竪穴住居跡である。時期はSI21が1期に、後者は主軸方向から2期に所属すると考えられる。前者では、土壌を採取して洗浄を行った結果、粒状滓や鍛造剥片が確認できた。これらの遺物と炉の状況から鍛冶炉の可能性が高いと考える。住居跡の約半分しか調査を行っていないため、コマドの有無は不明であるため、住居として使用していたのか、工房として使用していたのかは不明である。もう1軒はB区の北端に位置している。削平が及んでいるため床面までが浅く遺存状態は悪かったが、焼土の広がりや床面に確認されている。この焼土は非常に浅く、炉として認定するのは難かしいが、建物跡の床面には鉄滓や鉄器、鉄素材と考えられる鉄製品などが出土している。これらのことから、鉄床石や鍛冶工具の出土・痕跡は認められないものの、この建物跡で何らかの鉄生産関連の行為が行われていたと考えている。このほかSI11住居跡からは鉄滓が堆積土中より出土している。これらの鉄滓類は科学的な分析を行った結果(第IV章)、鍛冶に伴うものと判断された。したがって、堰向Ⅱ遺跡においては、集落の内部で鍛冶を行っていたと考えることができる。

## 5. 水田跡について

西川目遺跡A区において検出された遺構である。検出された場所は自然堤防が終わり低地部分に相当する部分である。偶然にも調査区に含まれていたため水田跡が検出された。先に述べたように、時期については明確に判断できなかったが、 $T_0-a$  粒子を重視して、集落に同時期かそれに近い年代を考えている。

本遺跡周辺において平安時代の水田跡が検出されている例としては、水沢市の常磐広町遺跡、中平入遺跡、平泉町竜ヶ坂遺跡などから見つかっているが非常に少ない。北東北に目を広げても秋田県横山遺跡のみである。胆江地区を中心に今後増えていくと思われるが、水田跡の発見は古代における社会復元のためになくはない重要な遺構である。

今回検出の水田区画は約 $3 \times 3$  mと非常に小さい。これまで県内で確認された水田区画より極めて小さいものとなっている。古代においてもこのような小区画の水田跡が使用されていた可能性がある。ただし発見された例はなく、北東北通行の区画であったかは不明である。部分的な調査であったため、全体の様子が不明のため、このような区画が一面に広がっているのか、限定された範囲のみであるのかはわからない。

また、調査範囲内のみでみる場合、これらの区画はほぼ方位に沿って整然と配置されているようである。北東北地方で発見された古代水田跡例に比べれば非常に特異な平面形を有している。

## 6. 小結

このように、西川目・塚向Ⅱ両遺跡からは竪穴住居跡を中心にいくつかの遺構から構成されている状況を見た。最後にこれらを時期別に分けてまとめたい。時期は、遺構の主軸方位と前節で設定した遺物の時期との組み合わせから大きく2つの時期に分けた<sup>(1)</sup>。

平安時代Ⅰ期集落 遺物でみたⅠ・Ⅱ期に対応し、住居跡の主軸方位が北を指向するもの。年代は9世紀後半が考えられる。西川目遺跡の大部分の遺構と塚向Ⅱ遺跡のS103などが含まれる。西川目遺跡の廂付や総柱も建物跡もこの時期に含まれると考えている。

こうしてみると、この時期の集落の中心は西川目遺跡であり、廂付きの建物を中心に集落が広がっていると予想される。両遺跡を含めてもこの時期が最盛期であった可能性が高い。廂付建物を中心に若干の空間があり、その周りに竪穴住居跡、倉庫跡が周囲に配置されている。

平安時代Ⅱ期集落 遺物3期に対応し、住居跡の主軸方位が東に大きく触れるもの。9世紀末～10世紀前半 塚向Ⅱ遺跡S126・30などが含まれる。遺構数はⅠ期に比べて減少している可能性がある。大型の竪穴住居跡がこの時期の中心となろう。竪穴土坑であるSK04はこの時期の最後に位置づけられる。

遺物の年代観や遺構の主軸方向にばらつきが少なくことから、これら両遺跡は極めて限られた時期に存続した集落と考えられる。したがって、遺跡全体では数百軒以上と考えられる竪穴住居跡はかなりの数が同時期に存在していた可能性が高いと思われる。集落の規模、総柱や廂付独立柱建物跡などの特徴的な遺構など、遺構の面から考えると、一般的集落とは考えにくく、地域の中心を担う拠点的な集落であると考えられよう。なお獨立柱建物跡については次節で詳しく述べる。

### 注

- (1) 本来は面積で分類の方がより特徴を表すと考えるが、本遺跡では完備した遺構が少ないため、便宜的に1辺でも規模が判明する遺構を中心に設けた。したがって、その一辺の規模を計測している。規模で規模が異なる場合は、最大長を採用している。面積比でグループ分けした場合と必ずしも今回の結果とは対応しないであろう。
- (2) 高橋信雄(高橋1985)、西野修(西野1998)などの研究がある。

- (3) 北を指向する群の対応率は9/17であり、東に大きく触れる1群の対応率は2/5である。ほぼ半数の確率で対応するが、後者の場合例数が少なく判断が難しい。
- (4) この対応はあくまで大まかな部分であり、細かな点ではうまく対応しない部分もある。とくに2期の場合は例数が少ないため、不確定な要素も含まれる。これは、遺物の時期と主軸の変化の時期が対応していないからであろう。少なくとも、早い段階では北を指向する住居跡が多いということはいえる。また、遺物と主軸の対応に矛盾が多い場合は主軸方向を優先している。そのため誤差をおかしている可能性もある。

#### 参考文献

- 相原康二1992「古代集落と生活」『新版古代の日本』第9巻東北・北海道 角川書店
- 高橋信雄1985「岩手の古代集落—整穴住居址の集計にみる問題—」『日高見国—菊池啓治宗学兄還暦記念論集—』
- 西野 修1988「北上盆地北部の様相」『第24回 古代城壕官衙遺跡検討会資料』
- 伊藤博平2001「常盤広町遺跡」『岩手の遺跡』岩手日報社

### 第3節 掘立柱建物跡について

#### 1 はじめに

西川川・塚向Ⅱ遺跡からは、平安期に属する総柱式と廂がついた（廂式）付きの掘立柱建物跡が検出されている。これらの掘立柱建物跡はどの集落跡からも必ず確認されるわけではない。近年、県内においては古代集落の立地する低位段丘やその相当面の開発が多く及び、該期の調査例が急激に増加している。これまであまり注目されなかったこれらの遺構<sup>(1)</sup>が、集落全体の中でどのように位置づけられるのか現在のところ全く不明とごわざるを得ない。

そこで、ここでは県内の総柱式、廂式の建物跡<sup>(2)</sup>を抽出し、これらが普遍的な在り方を示すのか否かを検討し、その性格について簡単な検討を行ってみたい。なお、対象とする地域は北上盆地周辺であり、県北（盛岡以北）や沿岸地域については対象外とする。

#### 2 県内の諸例

北上盆地周辺における平安期集落の調査例のうち対象となったのは193遺跡<sup>(3)</sup>である。これらのうち、総柱式及び廂式の掘立柱建物跡が確認された遺跡をまとめたものが第2表である。集めたもののうち平安期の掘立柱建物跡が確認されたのは34遺跡となる。

側柱式も含めて掘立柱建物跡が確認された遺跡の割合は17%であり、全集落に対し2割に満たない。さらに、総柱式の場合は6%、廂式においては3%と極めて限定的になる。これは、調査面積や調査範囲の差、また、掘立柱建物跡が所属時期の決定に際し困難が伴うという事情も考えられることにもよるが、いずれこのような傾向が大きく変動するとはいえない。平安期集落において掘立柱建物跡の存在自体が極めて稀な遺構であるといえる。また、ここでは検討を行っていないが同時期における竪穴住居跡と比較するとその差は極めて顕著となることは容易に想像できる。集落に対する掘立柱建物跡の数や竪穴住居に対する掘立柱建物跡数の稀少さは今後もあまり変化しないと思われる。こうした然然たる差からは、竪穴住居がおもに居住用と考えられるのに対し、掘立柱建物跡はそれ以外の機能を想像するに易いことであろう。

第1表をみると、北上市が本遺跡を含めて7例ともっとも多く、次いで、盛岡市が6例、水沢市が3例、遠野市が2例、花巻市・矢巾町が各1例となる。旧郡単位で見れば、新渡戸郡6例、神賀郡1例、和賀郡8例、胆沢郡3例、閉伊郡1例となり、紫波郡と和賀郡がそのほとんどを占めていることが分かる。比較的認識率が高いと考えられる総柱式でさえ、旧郡単位に数基程度しか存在しないのである。これらの建物跡は域権が設置されない和賀郡に多いことは興味深い事実である。

面積では、総柱の平均が14.5㎡、廂付きの平均が104㎡である。総柱式の方が面積にまとまりがあるが、廂式の場合は多様である。また、当然平均面積は大きくなる。したがって、廂式の場合は構造や規模、ひいてはその性格について多様な在り方を示していることが予想される。

棟数は各集落の中において数棟であり、多くは竪穴住居跡に伴って1～2棟といった程度である。なかには表根遺跡のように側柱式の掘立柱建物跡のみで構成される集落もあるが極めて少ない。

時期をみると、9世紀後半～10世紀前半にかけての時期が付与される場合が圧倒的である。盛岡市・小幡遺跡のように9世紀前半に位置づけられる建物跡もあるが少数である。掘立柱建物跡自体の細かな時期を決定することは困難であるが、おおよそその時期に多い傾向があることはわかる。

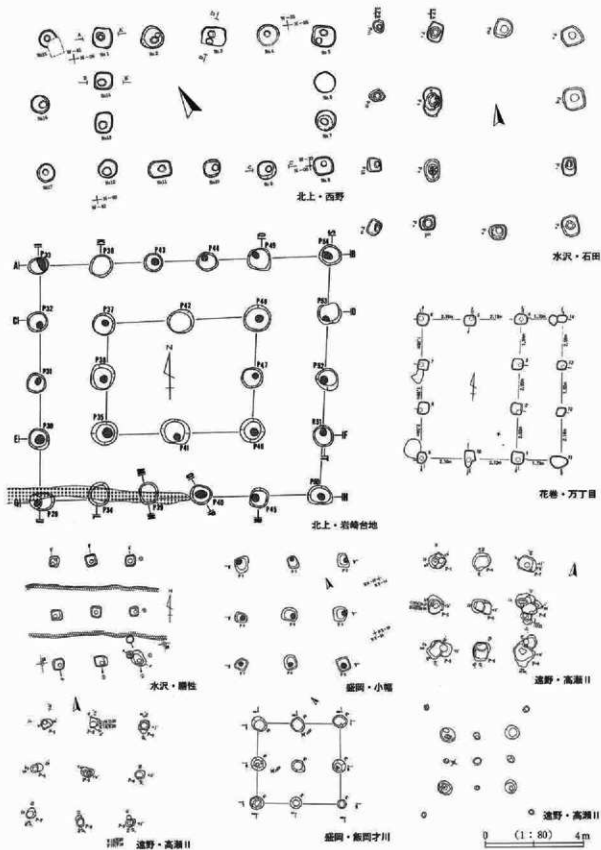
そのほか、灰釉や緑釉といった施釉陶器や瓦といった一般的な集落跡ではあまり出土しない遺物が伴う確

第2表 岩手県内陸地方における9・10世紀の廂式・総柱式掘立柱建物跡

郡	No.	遺跡名	市町村	遺構	規模	面積(m <sup>2</sup> )	時期	特記遺物	備考
紫波郡	1	棺熊堂B	盛岡市	総柱	2×2	8.06	平安		
	2	小幡	盛岡市	総柱	2×2	23.04	9世紀前		4次
				総柱	2×2	14.43	9世紀前		
	3	飯岡才川	盛岡市	総柱	2×2	11.56	9世紀後		
				総柱	2×2	11.56	9世紀後		
				総柱	2×2	10.56	9世紀後		
4	飯岡林崎Ⅱ	盛岡市	総柱	2×2	12.24	平安	円面硯		
			総柱	2×2	13.2	平安		26次	
			総柱	2×2	29.68	平安		44次	
5	台太郎	盛岡市	総柱	2×2	9.3	平安		23次	
			総柱	2×2	12.07	10世紀前			
6	一本松	矢巾町	総柱	2×2	41.6	平安			
			廂	南北棟 2×3 (一面廂)	41.6	平安	灰輪・緑輪	廂は東面の1面	
7	万丁目	花巻市	廂?	不明	不明	平安			
			廂	東西棟 3×4 (一面廂)	79.88	10世紀前	「寺」墨書	廂は西面の1面	
8	西野	北上市	総柱	2×2	10.2	平安			
			総柱	2×2	10.2	平安			
9	岩崎台地	北上市	廂	南北棟 2×2 (四面廂)	124.9	平安	硯・漆紙・石帯	建て替え除く 身舎6.3×6.6 9.75×5.75	
			廂	南北棟 2×2 (四面廂)	140.4	平安			
			廂	東西棟 2×3 (四面廂)	169.05	平安			
			廂	東西棟 2×3 (四面廂)	169.05	平安			
10	上鬼柳Ⅲ	北上市	総柱	2×2	8.4		灰輪・緑輪・二彩	他に側柱であるが多数の建物跡	
			廂付	南北棟 2×3 (三面廂)	67.41	9世紀後			
11	西川目	北上市	総柱	2×2	11.2	9世紀後			
			総柱	2×2	9	9世紀後	緑輪・灰輪・硯		
12	堰向Ⅱ	北上市	総柱	2×2	9	9世紀後			
			総柱	(2×2)		9世紀後			
13	横町	北上市	総柱	2×2	9.92	平安			
			総柱	2×2	14.43	平安			
14	膳性	水沢市	総柱	2×2	13.3	平安			
			廂	南北棟 2×3 (一面廂)	67.6	平安			
15	石田	水沢市	廂	3×2 (一面廂)		平安	灰輪	廂は東	
			廂	3以上×2 (一面廂)		平安		廂は東	
16	林前Ⅱ	水沢市	総柱	2×2		平安			
			総柱	2×2		平安			
			総柱	2×2		平安			
			廂	南北棟 2×3 (一面廂)	50.4	平安		廂は東面の1面	
17	高瀬Ⅰ	遠野市	総柱	2×2	17.6	平安	「地子船」墨書	廂(縁か)が付く	
			総柱	2×2	11.8(25.8)	平安			
			総柱	2×2	16.8	(平安)			
18	高瀬Ⅱ	遠野市	総柱	2×2		(平安)			
			総柱	(2×2)	?	(平安)			
			総柱	2×2	14.4	9世紀後半			
			総柱	3×2	39.1	9世紀後半		4時期の建替	

\* ( ) は推定

\* 廂の規模は身舎部分、面積は廂も含む。盛岡市・林崎・矢巾町・館畑遺跡は除外する。



第279図 岩手県内掘立柱建物の諸例

率が高いことがあげられる。

### 3 各遺跡の内容

さて、第2表にある遺跡のうち、おもな遺跡についてその概要をみてみよう（図279図）。

総柱式が検出された主な遺跡には、盛岡市飯岡才川遺跡、盛岡市本宮熊空B遺跡、矢巾町一本松遺跡、水沢市膳性遺跡などがある。

盛岡市飯岡才川遺跡は、雫石川南岸の自然堤防上に立地する。旧河道を挟んで南側には細谷地遺跡、東側には向中野館遺跡、北側には飯岡沢田遺跡がある。遺跡からは2間×2間規模の総柱建物が4棟検出されている。そのうち3棟はやや軸を異にするもののほぼ等間隔で直線的に配置されている。これらの面積は平均すると約11㎡とほぼ同規模である。時期は9世紀後半と考えられている。このほか竪穴住居跡8軒が密集して確認されている。旧河道を挟んで南側には細谷地遺跡があり、同規模の建物跡が検出されているが総柱ではない。「庫」的な倉庫の可能性もある。このようにみるとこの付近には他に例をみないほどの「倉庫」跡が集中している。

本宮熊空B遺跡は才川遺跡と同様に雫石川南岸の自然堤防上に立地している。才川遺跡の北西約1kmに位置する。総柱建物跡が1棟、同規模の欄柱建物跡1棟検出されている。総柱は2間×2間であり、面積は12.92㎡である。これらは同時期の竪穴住居跡に近接して配置されている。近年の調査で大規模な集落跡であることが明らかになりつつあり、今後さらなる建物跡が検出される可能性がある。

水沢市膳性遺跡は、那沢川南岸の低位段丘上に立地する。古墳時代～平安時代にかけての集落である。平安期の集落からは総柱を含めた2棟の建物跡が検出されている。いずれも9世紀末頃の年代が考えられている。そのうち総柱式は1棟であり、方形の掘りかたをもつ。規模は2間×2間、13.3㎡であり、他に比べてやや大きい。そのほかは2間×2間規模の欄柱の建物跡であり、同様に方形の掘りかたをもつ柱穴である。面積的にはやや大きく20㎡強である。時期は9世紀後半である。他に竪穴住居跡も20軒調査されている。

つぎに、廂付が検出されたおもな遺跡には水沢市・石山遺跡、北上市西野遺跡などがある。

水沢市・石山遺跡は胆沢扇状地上の低位段丘上に立地する。膳性遺跡よりもさらに南に位置する。奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡が中心である。このうち平安時代に属する掘立柱建物跡は6棟確認されている。時期は9世紀末から10世紀前半にかけてであり、同時期に竪穴住居跡は存在していないようである。したがって、該期には掘立柱建物跡のみで構成される遺跡となる。廂式の建物跡はそのうち1棟であり、身舎が3間×2間の南北棟である。廂は西側1面のみに付設される。面積は48.9㎡である。このほかは3間×2間の欄柱の建物跡であり、南北棟のものが4棟、東西棟が1棟である。前者は廂付き建物と同一の方向軸をもって直線的に配置されている。後者はこれに直交する形で配置されている。これらは一部を除きほぼ20㎡強の面積をもつ。厳密に建物跡の時期は不明であるが、竪穴住居跡との重複もあることから、これらとは時期を異にしている可能性が高い。そうすると、廂付きを含む整然と配置された建物跡が折出されることになる。官衙的（公的）な性格が非常に強いと思われる。

北上市西野遺跡は北上川西岸の低位段丘上に立地する。掘立柱建物跡は1棟のみ検出されている。10世紀前半の年代が考えられており、同時期に竪穴住居跡も存在する。身舎部分は4間×3間の東西棟であり、西側に1面の廂が付設される。面積は51.26㎡である。「寺」と書かれた書土器が多く出土する。

総柱式と廂式の両者が確認された遺跡には、遠野市・高瀬1遺跡、北上市・岩崎台地遺跡などがある。高瀬1遺跡は、猿ヶ石川南岸の自然堤防上に立地する。4棟の掘立柱建物跡が検出され、2棟が総柱式、1棟

が廂式である。総柱式は2間×2間の規模で北西-南東にほぼ軸をそろえて配置される。さらに南東側に1棟、2間×1間の側柱式建物跡が同一軸に並んでいる。総柱式2棟の面積はそれぞれ11.39㎡、6.58㎡であり、側柱式は約11.5㎡である。中央の総柱式は規模が小さいものの、周囲の角に1本の柱穴をもつ。廂あるいは幅かは不明である。これらの建物群は竪穴住居跡群の間にあり、重複はない。時期は9世紀後半と考えられている。

廂式は大型の竪穴住居跡に近接して存在する。身舎部分は2間×3間の南北棟である。東側に1面廂が付設される。身舎部分の柱穴掘りかたは方形であり、大きい。面積は50.4㎡である。遺物には「犬」、神、「地」種「口」などの墨書土器がある。そのほか、近接する高瀬Ⅱ遺跡からは総柱式が4基検出されている。

北上市岩崎台地遺跡群は、和賀川南岸の中位段丘上に立地している。平安期の獨立柱建物跡は16棟確認(建替も含む)されている。そのうち総柱式が2棟、廂式が6棟である。総柱式は広域農道建設予定地分の調査区から検出されている。竪穴住居跡群の中に2棟が存在する。これは方位に沿う建物跡とは軸線と同じくしていることから同時期に存在すると考えられる。規模は2棟とも2間×2間であり、面積は10.5㎡前後である。

廂式の建物跡は秋田道予定地分の調査区から検出されている。重複(建て替え)を含めて6棟であるため、実質は3棟分の建物跡と考えられる。これらのうち2棟は隣接して配置される。向者とも四面に廂が付設される四面廂建物跡である。身舎部分が3間×2間、廂部分5間×4間のもので身舎部分が2間×2間、廂部分4間×4間の2棟である。面積は前者が身舎のみで55.78㎡、廂を入ると169.05㎡、後者は同様に35.64㎡、130.68㎡になる。前者は2回の、後者は3回の建て替えがあり、後者には3方が溝・土坑で囲まれている時期のものがある。竪穴住居跡群とは離れて立地している。さらに一面のみ廂が附く建物跡も存在する。4(5)間×3間の東西棟であり、北側に廂が付く。面積は33.5㎡である。身舎内部には粘土が広がっており、居住用とも考えられている。場所も離れていることから、他の建物跡とは時期が異なっている可能性が高い。

これらのほかに通行の側柱式建物跡も確認されており、竪穴住居跡が集中する区域にまとまって存在する。遺物は転用硯、漆蓋紙、墨書土器などが出土している。

総柱・廂付建物跡を中心に概略を述べてきたが、側柱式であるが特徴的な獨立柱建物跡が確認された遺跡として北上市上鬼柳Ⅱ・Ⅲ遺跡について触れておきたい。

北上市上鬼柳Ⅲ遺跡は和賀川南岸の中位段丘の縁辺に立地する。岩崎台地遺跡群よりは東方になる。獨立柱建物跡は12棟(建てかえ含む)確認されている。いずれも10世紀前半の年代が考えられている。特徴的な点はこれらのうち2棟が三方を溝や土坑によって囲まれていることである。雨落ち溝にしては規模が大きく性格は不明ながら特徴的な遺構である、柱穴掘りかたも方形のものである。建物跡は重複を含めて12棟、集中して存在し、方位に沿って配置されている。この遺跡からは竪穴住居跡も確認されているが建物跡群よりはやや距離がある。「寺」、「佛」などの墨書土器や二彩などが出土している。

以上のように、総柱式や廂式が確認されたおもな遺跡を中心にその特徴をみてきたが、いずれもその位置(分布)が重ならず地域(小地域)を分けており、それぞれが各地域の拠点的な集落跡である場合が多い傾向が分かった<sup>(4)</sup>。廂式が検出された遺跡からは「寺」「佛」と墨書された土器の出土も多い。総柱式は2間×2間の規模のものが多く、面積もあまり異なることがわかる。



#### 4 小 結

以上簡単に、総柱式獨立柱建物跡と廂式獨立柱建物跡について触れてみた。平安期における獨立柱建物跡は岩手県内においては極めて稀な存在であるなかでさらにこの両者は稀少であることが分かった。

総柱式は一般的には倉庫跡であると考えられている。とくに穀物（コメ）を貯蔵するための高床式倉庫であると考えられる場合が多い（奈良国立文化財研究所1998）。本県においても、積極的に肯定できる証拠はないものの、その構造から倉庫跡と考えることもよいと思われる。多くは2間×2間の小型の建物跡であることから居住用とは考えにくく、聚住住居跡に近接して構築されることが多いことからそれが窺える。正倉などのように官衙に伴う總柱式建物と比較すると圧倒的に規模が小さい。したがって、各集落に付属している一般的な倉庫跡と考えられる。しかし、特定の家族に伴うものか、集落全体に伴うものかは不明と云わざるを得ない。また、仮に倉庫と考える場合にしても總柱の倉庫跡が限定された集落跡のみから確認されることから、これらは周辺の集落分も保管されていた可能性がある。同規模の側柱式の建物跡の場合も同様に倉庫の機能が想定できる。おそらくは保管する中身が異なっていると思われる（奈良国立文化財研究所1998）。

複数の總柱式建物跡が確認された遺跡は少ないが、単体で存在する場合と複数棟からなる場合がある。多くは複数棟から構成されると思われるが良好な調査例は少ないのが残念である。併構成の理解が今後の課題となる。

廂式の獨立柱建物跡は總柱式以上に限定されている。獨立柱建物跡は地域の拠点的な遺跡に多く、廂式はさらにその中でも遺構・遺物ともに際立った遺跡にあると考えられるが、總柱式建物跡に比べてその性格は不明である。多くの場合、廂の数や位置が一定ではなく、側柱建物跡を伴うものや単体で存在するものなど遺構の在り方としても多様である。したがって、廂式建物跡については様々な性格が想定できる。とくに、「寺」・「佛」が書かれた墨書土器が相伴する例が多く、その構造は単体から構成される建物跡については「村落内寺院」と考える場合がある。また、硯や施釉陶器などと相伴する例が多く、識字層の存在と重複する。したがって、寺院と考えるほかに、「官人」層が存在する可能性も大いに指摘できるのである。

通常、廂が付設される構造は官衙や寺院といった一般的でない遺跡に多く見出せるもので、他の建物跡と比較して構造の複雑さなど「格」が異なると考えられている。そういった建物跡が集落内から確認されることの意味を考えると非常に興味深い問題である。これらを「公的」な建物とするにはなお大きな隔りがあるが、今後はこういった視点も必要になるのではないであろうか<sup>(1)</sup>。

このように、廂式の建物跡の性格については各遺構、各集落によって異なるとと思われる。しかし、これらが限定的に存在することは重視すべきであろう。

いずれにせよ、具体的な構造や内容については今後の課題となるが、總柱式と廂式建物跡というものは決して一般的な存在ではなく、該期の集落構造については社会構造を解明するために新しい視点となるべきものであることは間違いない。

ここでは、紙幅の都合もありさらなる検討はできず、残された問題は多々ある。とくに總柱式や廂式建物と施釉陶器との相関関係など遺物との問題、建物跡の構造など興味深い点が多い。今後は以上のような点を踏まえてあらためて検討していきたい。

#### 註

(1) 伊藤博幸の研究（伊藤1980・1981）や積原康二の指摘（相原1992）などがあるが少ない。

(2) 「總柱式」、「廂式」は適当な名称がないためここでは便宜的に使用する。

- (3) 西野(1998)と伊藤(1998)作成の資料に1999年度以降の当センター・各市町村発刊の報告書を中心に集計している。したがって、すべてのデータを集成しているのではないが、全体的な傾向は求められると思う。なお、個別データの提示は省略する。
- (4) 例外物に盛岡市の平石川南岸では、竪柱式建物跡を含む集落が近接して存在する。
- (5) 郷、郷長、末端官衙、豪族居宅といった問題にまで言及する研究が今後若手県内においても発展できる可能性を持っているということである。また、こうした視点は相原によってすでに指摘されている(相原1992)。
- (6) 竪柱、廂式に限らず竪立柱建物跡自体がどの集落からも検出されるわけではないということを再度強調しておきたい。集落における竪立柱建物跡の割合は地域によって大きく異なる。生活様式などのより大きなレベルでの違いが関わってくる問題である。竪立柱建物跡が業内に比べ少ないとされる関東地方などでも竪立柱建物跡は割合が少ないもののどの集落から確認されているのである。

#### 参考文献

- 相原康二1992「古代集落と生活」『新版 古代の日本』第9巻東北・北海道 角川書店
- 伊藤博幸1980「胆沢城と古代村落」『日本史研究』215
- 伊藤博幸1981「岩手県における竪立柱建物の構造とその展開」『西光田遺跡』岩手県水沢市文化財報告書第5集
- 宮原祥夫1998「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 高島英之1998「古代集落と稲倉 関東地方の遺跡を中心に」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 山中敏史・石毛彰子1998「地方豪族の居宅と稲倉」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 松村恵司1998「律令国家の末端支配と集落」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』奈良国立文化財研究所
- 津野 仁1998「郷長とその性格」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』奈良国立文化財研究所
- 山中敏史1998「律令国家の地方末端支配機構—研究の現状と課題—」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所1998a「古代の稲倉と村落・郷里の支配」
- 奈良国立文化財研究所1998b「律令国家の地方末端支配機構をめぐって—研究集会の記録—」

## 第V章 総括

### 西川目遺跡・塚向II遺跡の概要

西川目・塚向II遺跡は、それぞれが向かいあう自然堤防上に立地する。調査の結果、2遺跡の合計で52軒の竪穴住居跡を中心とする遺構が発見され、周辺では類をみない規模の平安期集落であることが判明した。両遺跡は、時期的にも重複する密接な関わり合いが認められ、この地域はもとより、周辺を広く含めた地点的な集落群であることが今回の調査で明らかになりつつある。この平安時代に属する集落が遺跡の主体であったが、それ以外の時代にも人類の痕跡が残されている。

もっとも古くさかのぼる痕跡は縄文時代である。発見された遺構は陥穴のみであることから、狩猟の場として使用されたと考えられる。時期は不明であるが、川土している縄文土器の破片から後晩期に属すると考えている。その後、9世紀になるまでは、人類の痕跡は確認できていない。

遺跡から北東へ1kmと近くに二子塚が存在するため、中世遺構の発見が期待されたが、今回の調査からは明確な遺構は発見されなかった（土坑1基のみ）。しかし、龍泉窯産の青磁片や永楽銭の出土から中世においても何らかの痕跡が確認できる。重複して多数発見された柱穴群のいずれかが中世に属するかもしれない。

近世（18世紀を中心とする江戸時代）になると、建物跡や井戸跡、墓などが発見され、集落を形成していたことが判明した。それらのなかで、とくに近世墓の調査は棺材が良好に遺存するなど貴重な発見となっている。本書ではこれに関する論究を行うことができなかったが、いずれ若手県内の近世墓研究には欠かせない資料となると思われる。

このように、いくつかの時代の痕跡が重なっていることが判明した。現在もこの両自然堤防上には住宅が建ち並び古代や近世とあまり変わることはない立地をあらわしている。

最後に、今回の調査における主体である平安時代のおもな遺構・遺物について、その成果を取り上げつづまめとした。

### 竪穴住居跡

今回の調査における中心的な遺構である。時期的には9世紀後半～末と10世紀初頭の2時期に人別できることがわかった。大半の竪穴住居跡は4m×4m以下の規模であるが、5m以上の規模も一定の割合で存在した。ここから豊富な遺物が出土し、とくに鉄製品や土器の種類が多様であることが特徴である。なかには7mを超える規模も存在している。硯や緑釉陶器といった貴重かつ稀少な遺物が出土することから、これを見る限り層間的な差が認められるのかもしれない。このような差は建築材からも窺える。焼失住居である5m以上の規模のSI18からは、クリを中心とする部材が確認されているのに対し、4m以下の規模であるSI21からはスギ材を中心とする部材が確認された。これらの材質の差がただちに層間的なものとは結びつきにくい、規模の異なる住居跡から材質の異なる部材が使用されていることは興味深い点である。焼失住居跡はまた、遺物の配置状況をよく知ることができる。SI18からは須恵器大甕の完形品が2個体分出し、住居跡南東隅に配置されていたと考えている。ここには住居壁よりも張り出すように土坑が付設されている。また、大甕付近の上を洗浄したところアワの種子が検出された（第IV章）。これら周辺はあるいは食料の保管施設であったかもしれない。竪穴住居跡にはカマドが付設される場合が多々みられたが、その内部の土層をいくつか採取し、水洗選別を行った。鑑定の結果、イネ、オオムギなどのムギ類、アワ・ヒエなどの雑穀類、マメなどが存在することが判明した。平安期の食生活の一端が想像できるであろう。このように、竪穴

住居跡の調査からは様々な事実が明らかとなった。

#### 掘立柱建物跡

古代における掘立柱建物跡は非常に数少ない遺構である（第IV章第3節）。西川目遺跡からは、廂付と総柱式が、塚向Ⅱ遺跡からは総柱式が検出されている。廂付や総柱式などの形式の建物跡は官衙やその関連施設にみられるのと同形式である。これらはその構造からは一般的な居住施設とは考えにくく、何らかの特別な施設であると想定できる。前者では「寺」や「佛」と墨書された土器と併存する例もあり、村落内寺院と考える場合もある。後者では一般的に倉庫と考えられている。その他の可能性もあるが、ここでは倉庫と捉えている。

#### その他の遺構

その他の遺構として、水田跡がある。西川目遺跡で確認された。今回の調査では擬似畦畔での検出であるため水田の明確な情報は少ないが、一区画が2m～3m程度の小区画な水田跡であることが判明した。歴史的にはやや不明確なものの混入していた和山aテフラの存在を積極的に生かせば平安時代に属すると考えられる。

#### 遺物

総遺物量は203kg出土している。そのほとんどが古代の土師器類である。これらは竪穴住居跡を中心に出土しており、規模の大きな住居跡はその出土量も多い。とくに、SI26からは50kgの遺物が出土している。これは総遺物量の4分の1にもなる。調査した竪穴住居跡が46軒を考えるとみれば軒違いの出土量を誇る。遺物量の比較からみても他とは圧倒的な差があるのである。この住居跡は下層にもう1軒住居跡が重複しており拡張と考えている。この住居跡からは緑釉陶器片や硯が出土した。この両者とも山土遺跡が非常に限定される。また、この両者と掘立柱建物跡とはある程度対応関係がありそうである。これらのほか、歯形がついた土製品や鍛造銅片、鉄滓、種子などが出土している。とくに歯型の付いた土製品はその歯型から子供用と考えられるがその詳細は不明である。

#### 集落の性格

以上のようにおもな古代の遺構について判明した事実をまとめてみた。西川目・塚向Ⅱ遺跡は遺構・遺物とともに質・量の点で他とは異なることが明らかとなった。このような遺跡はどのような性格をもつものであろうか。

集落構成として、竪穴住居群に掘立柱建物跡が付属することは、建物群のみで構成される郡衙などの一般的な官衙とは異なり、集落のなかにある公的な機関である可能性がある。若手県内では古代掘立柱建物跡の検出率が少ないことを考えるとその蓋然性は高いと言える。これらの問題はさらなる検討が必要となるが、このような建物跡の発見と研究は、これまで竪穴住居跡を中心に検討されてきた古代集落の研究に新たな視点を加えることができると思われる。

以上、西川目・塚向Ⅱ遺跡の調査成果をまとめた。このように、両遺跡は古代における諸研究に貴重な資料を提供した。今後はこれを生かした研究を続けていかねばならない。

# 觀 察 表



第3表 西川目遺跡土器観察表

( )内は復元

No	器種	種別	出土 遺跡	層位	形状 (%)	色相	焼成	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整			胎土	その他
											外面	内面	底部		
1	杯	赤内黒	S01	カマド南輪	10	にぶい 黄褐色	良	(17.2)	4.7	7.4	回転ナデ、下段： ケズリ	赤切り後ケズリ	密	スノコ痕あり	
2	杯	赤内黒(?)	S01	カマド輪	50	淡褐色	良	(12.2)	6.0	(5.5)	回転ナデ(マメツ) マメツ	赤切り(マメツ)	密		
3	杯	土師器	S01	カマド	20	にぶい 黄	良	(13.0)	5.2	(6.5)	回転ナデ、下段：ミガキ(マメツ) ケズリ	赤切り(周縁部 密 ヘラケズリ)	密	内面黒色処理(マ メツ)	
4	杯	赤内黒	S01	扉面	50	にぶい 黄褐色	良	17.4	6.5	(7.5)	回転ナデ、下段：マメツ(ミガキ) ケズリ	赤切り後ケズリ	密、赤色スコリナ ケズリ		
5	杯	赤内黒	S01	カマド南輪	70	灰白	やや 甘い	12.5	5.3	6.2	回転ナデ、下段：回転ナデ(マメ 赤切り ツ)	密		「田主」ヘラ掻き	
6	杯	須恵器	S01	2層	70	灰白	やや 甘い	13.9	4.8	6.5	回転ナデ	赤切り	密、砂粒少量含む		
7	壺	土師器	S01	2層	40	明赤褐色	良	16.2		6.4	口縁部：ヨコナデ、マメツ(ヘラナ 体部：横段ヘラナデ) ツ・マメツ	密	砂粒少量含む		
8	壺	土師器	S01	貯蔵ピット (北側)埋土	60	橙	良好	(13.9)	11.0	(6.4)	口縁部：ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、 体部：横段ヘラナデ 体部：横段ハケメ		やや粗、砂粒多く 含む	外面のヘラナデが ハケメに透い	
9	壺	土師器	S01	貯蔵ピット 埋土	30	橙	良	(14.4)	6.4		口縁部：ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、 体部：マメツ 体部：横段ヘラナデ		やや粗、62-3 mm砂粒含む		
10	壺	土師器	S01	カマド輪	60	橙	良	(20.4)	31.9	8.8	口縁部：ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、 体部：横段ハケメ 体部：横段ハケメ	ハケメ(格子状)	やや粗、砂粒多く 含む		
11	壺	土師器	S01	貯蔵ピット 埋土	10	にぶい 黄褐色	良好	(23.8)	7.5		口縁部：ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、 体部：横段ヘラナデ 体部：横段ハケメ		密、やや砂粒多い		
15	杯	土師器	S03	扉面	30	にぶい 黄褐色	良	(15.5)	(6.0)		回転ナデ	横位ミガキ	密	内面黒色処理	
16	杯	土師器	S03	ピット内	40	にぶい 黄褐色	良		3.5	5.5	回転ナデ、下段：回転 ヘラケズリ(マメツ)	ミガキ(マメツ) 再調整(マメツ)	密		
17	杯	須恵器	S03	中層	20	灰	良好	(13.8)	4.4	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	密、赤色スコリ ナケズリ	
18	杯	須恵器	S03	ピット?	75	灰	良好	13.8	4.4	5.8	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	密	
19	壺	須恵器	S03	中層		灰	良	(13.4)	6.3		回転ナデ	回転ナデ		やや粗、重みあり	
20	壺	土師器	S03	貯蔵下	20	淡黄褐色	良	(13.8)	7.5		回転ナデ	回転ナデ		粗、砂粒少量赤 色スコリや鉄屑含む	
21	壺	土師器	S03		50	赤褐色	良好	(15.5)	12.9	(8.7)	回転ナデ	マメツ(回転ナ 赤切り デ)		やや粗	
22	壺	土師器	S03	貯蔵下	20	にぶい 黄	良好	(21.8)	7.6		口縁部：ヨコナデ、口縁部：ヨコナデ、 体部：横段ヘラナデ 体部：横段ハケメ		やや粗、φ3mmの 砂粒含む		
23	壺	土師器	S03	扉面	18	淡褐色	良好	(23.8)	8.9		マメツ	口縁部：マメツ、 体部：横段ハケメ			
24	壺	土師器	S03	ピット?	45	橙	良	(24.0)	8.0		回転ナデ	回転ナデ		やや粗、砂粒多く含 み赤色スコリヤ含む	
25	杯	土師器	S04	扉面	50	橙	良	(15.8)	4.8	(5.5)	回転ナデ、下段：マメ ツ(ヘラケズリ?)	マメツ(ミガキ?) 赤切り	密	内面黒色処理?	
26	杯	土師器	S04	扉面	50	橙	良好	(14.3)	5.5	(5.2)	回転ナデ、下段：ミガキ(マメツ) ケズリ	再調整(マメツ)	密		
27	杯	土師器	S04	扉面	30	にぶい 黄	良	(13.4)	4.1		回転ナデ(マメツ) マメツ(ミガキ)		密	白色砂粒含む 内面黒色処理	
28	杯	赤内黒	S04	中央ピット	20	にぶい 黄	良	12.4	5.0	5.2	回転ナデ	回転ナデ		密	
29	杯	赤内黒	S04	扉面	30	淡褐色	良	(15.0)	4.7	(5.3)	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	密	
30	杯	赤内黒	S04	扉面	40	橙	良	(13.3)	5.5	(4.5)	回転ナデ	マメツ	赤切り	密	
31	鉢	土師器	S04	扉面	10	橙	やや良	(11.4)	3.5		横位ケズリ(マメツ) ツ	横位圧痕(マメツ)		粗	
32	杯	須恵器	S04	扉面	40	にぶい 赤褐色	良好だが 赤い	(14.5)	4.2	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	密、白色砂粒含 む	
33	杯	須恵器	S04	中央ピット	10	にぶい 赤褐色	良好だが 赤い	(14.2)	4.7	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ		密	生焼け気味
34	杯	須恵器	S04	扉面	70	灰	良好	7.0	3.3	5.2	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	密	
35	壺	須恵器	S04	扉面	10	灰	良好		13.8	10.2	横位ヘラケズリ (マメツ)	回転ナデ	ナデ	密	
36	壺	土師器	S04	扉面下 ピット?	10	淡褐色	良好	(23.5)	6.7		回転ナデ	回転ナデ		やや粗、砂粒少量 含む	
37	壺	須恵器	S04	扉面	10	灰	良好	(20.5)	5.5		回転ナデ	回転ナデ			

No.	品種	種別	土土 濃度	肥料	生育率 (%)	色調	構成	口径 (cm)	容高 (cm)	容積 (cm <sup>3</sup> )	調整			土質	その他
											外蓋	内蓋	底紙		
20	葉	土耕鉢	S04	床苗	40	にぶい 黄緑	良	(23.8)	27.2		口縁部：凹紙ナデ、 体部：凹紙ナデ、 縁部：マメツ(一 部傾斜ハケム)	凹紙ナデ、 凹紙ナデ、 体部：マメツ(一 部傾斜ハケム)		やや粗、砂粒少量 含む	
201	鉢	土耕鉢	S05	床苗	50	にぶい 黄緑	良	(14.6)	5.8	5.8	凹紙ナデ	ミガキ(マメツ) マメツ		密	
202	鉢	土耕鉢	S05	下種→床苗	10	にぶい 黄緑	良	(15.8)	4.6		凹紙ナデ	マメツ		密	密、赤色スコリヤ 少量含む
203	鉢	土耕鉢	S05	結核中	30	にぶい 黄緑	良好	(14.2)	5.1		凹紙ナデ	ミガキ		密	内面黒色処理
204	鉢	非内黒	S05	床苗	60	淡黄	良	13.3	5.5	5.2	凹紙ナデ	凹紙ナデ	糸切り	密	やや粗、赤色スコリ ヤ・白色砂粒含む
205	鉢	非内黒	S05	床苗・結核中	50	淡黄	良	(13.5)	5.7	(6.0)	凹紙ナデ	凹紙ナデ	マメツ	密	密、砂粒含む
206	鉢	非内黒	S05	床苗	20	にぶい 黄緑	良	(14.2)	4.2		凹紙ナデ	凹紙ナデ(マメ ツ)		密	密、φ2~3mm砂 粒含む
207	鉢	非内黒	S05	床苗	50	淡黄	良		3.8	4.0	凹紙ナデ	凹紙ナデ	糸切り	密	
208	鉢	非内黒	S05	下種	10	淡黄	良好	(14.4)	4.8		凹紙ナデ	凹紙ナデ		密	
209	鉢	非内黒	S05	床苗	30	淡黄	良	4.3	6.8		凹紙ナデ	凹紙ナデ	糸切り	密	
270	葉	土耕鉢	S05	中種	10	橙	良好	2.3	6.8		凹紙ナデ	マメツ	糸切り	密	
271	鉢	深草鉢	S05	上種	10	にぶい 黄	良好 やや 粗	2.1	7.0		凹紙ナデ	凹紙ナデ	糸切り	密	重質あり
272	葉	深草鉢	S05	中種	10	暗沢 黄	良好 重質	(13.8)	5.7		凹紙ナデ	凹紙ナデ		密	
274	鉢	土耕鉢	S07	上種	45	にぶい 黄緑	良	(14.4)	4.4	6.8	マメツ(凹紙ナデ)	マメツ(ミガキ)	両面整型がマメ ツ	密	内面黒色処理
275	鉢	土耕鉢	S07	床苗	70	橙	良	(14.2)	6.1	5.8	マメツ(凹紙ナデ)	マメツ(ミガキ)	マメツ(ヘラ切 り?)	密	内面黒色処理
276	鉢	土耕鉢	S07	床苗	40	にぶい 黄緑	良好	13.0	4.7	5.2	凹紙ナデ	上段：傾斜ミガキ、 糸切り 下段：傾斜ミガキ		密	内面黒色処理、外 面黒質あり
277	鉢	土耕鉢	S07	床苗	40	橙	良好	(14.5)	5.0	(6.0)	凹紙ナデ	マメツ(ミガキ)	糸切り	密	内面黒色処理、外 面黒質あり
278	鉢	深草鉢	S07	床苗	20	灰	良好 重質	(14.8)	4.2		凹紙ナデ	凹紙ナデ		密	密、砂粒少量 含む
279	葉	土耕鉢	S07	床苗・カマ ド3期	20	淡黄	良	(25.8)	4.9		口縁部：ヨコナデ、 体部：傾斜ハケム	口縁部：ヨコナデ、 体部：傾斜ハケム		密	砂粒含む
280	葉	土耕鉢	S07	床苗	40	淡黄	良	(21.8)	15.4		凹紙ナデ(マメツ)	凹紙ナデ(マメ ツ)		密	密、砂粒少量含む
281	葉	土耕鉢	S07	床苗	20	橙	やや 不良	(23.0)	6.7		ヨコナデ(マメツ)	口縁部：ヨコナデ、 体部：マメツ(傾 斜ヘラナデ)		やや粗	
282	葉	土耕鉢	S07	床苗	80	橙	良	18.4	14.3	8.0	凹紙ナデ(マメツ)	凹紙ナデ(マメ ツ)		やや粗	やや重む
283	葉	土耕鉢	S07	カマド輪中	20	灰白	良	(22.3)	23.3		口縁部：～上段： 凹紙ナデ、下段： 傾斜ケズリ	口縁部：凹紙ナデ 凹紙ナデ、下段： (マメツ)、体部： 傾斜ヘラナデ		やや粗	砂粒含む
284	葉	土耕鉢	S07	床苗	80	橙	良	19.3	20.7	11.2	口縁部：～上段： 凹紙ナデ、下段： 傾斜ケズリ	口縁部：～上段： 凹紙ナデ、下段： 傾斜ヘラナデ		やや粗	砂粒含む
285	葉	深草鉢	S07	床苗	10	暗沢 黄	良好 重質	(34.7)	23.3		口縁部：凹紙ナデ、 体部：傾斜ハケム	口縁部：凹紙ナデ、 体部：傾斜ハケム		密	密、砂粒少量 含む
287	鉢	土耕鉢	S09	床苗	75	にぶい 黄緑	良	(12.2)	4.7	6.1	凹紙ナデ/A型：凹紙 ヘラナデ(ミガキ)	マメツ(ミガキ) ヘラ切り/A ヘラナデ(ミガキ)		良	内面黒色処理
288	鉢	土耕鉢	S09	カマド輪中	60	橙一黄 橙	良	(18.8)	6.5	7.2	凹紙ナデ、下段： 凹紙ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ、 体部：マメツ(傾 斜ヘラナデ)		密	内面黒色処理
289	葉	土耕鉢	S09	床苗	10	にぶい 橙	良		7.4	8.0	傾斜ハケム	傾斜ヘラナデ、 マメツ(ハケム)		やや粗、?2~3 mm砂粒含む	
290	葉	土耕鉢	S09	床苗	10	にぶい 橙	良	17.6	6.5		口縁部：ヨコナデ /体部：傾斜ハケム	口縁部：ヨコナデ、 体部：傾斜ハケム		やや粗	砂粒少量 含む
291	葉	土耕鉢	S09	床苗	10	淡黄	良	(22.1)	7.9		口縁部：～上段： 凹紙ナデ、体部： 傾斜ヘラナデ	口縁部：凹紙ナデ、 体部：傾斜ヘラナデ		やや粗	砂粒少量 含む
292	鉢	土耕鉢	S09	床苗	30	にぶい 黄緑	良	(25.6)	11.5		口縁部：～上段： 凹紙ナデ/下段： 傾斜ケズリ	口縁部：傾斜ミガキ		密	内面黒色処理





第5表 西川目遺跡木製品観察表

No.	器種名	出土遺積	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	No.	器種名	出土遺積	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
377	容器	S293	7.7	4.5	0.9		426	椀材	S296	66.0		1.7	
380	椀材	S293	84.8		径2.1					17.7		1.8	
381	椀材	S293	48.4		径1.9		427	椀材	S296	27.1			
382	椀材	S293	18.8		径2.3				28.3				
383	椀材	S293	86.1		径2.6		428	椀材	S296	11.3	5.1	0.9	
384	椀材	S293	26.1		径1.1				25.3	8.9	1.5		
385	椀材	S293	72.7		径2.5		429	椀材	S296	25.6	4.5	1.8	
386	椀材	S293	51.2		径1.9		430	椀材	S296	32.1	6.8	1.3	
387	椀材	S293	54.3		径2.2		431	椀材	S296	25.4	5.7	1.3	
388	椀材	S293	36.0	5.2	1.4		432	椀材	S297	38.7	5.9	1.2	
394	椀材	S294	38.9	13.6	1.7		433	椀材	S297	89.0	12.6	1.5	
395	椀材	S294					434	椀材	S297	80.5	24.6	1.4	
396	椀材	S294	83.8	20.2	1.2		435	椀材	S297	89.8	21.7	1.7	
397	椀材	S294	94.7	16.4	1.2		436	椀材	S297	88.5	19.2	1.9	
398	椀材	S294	31.8	12.8	2.0		437	椀材	S297	48.1	9.3	1.5	
399・400	容器	S295	7.2	4.8	1.4	朱塗?	438	椀材	S297	14.3	2.2	1.4	
407	椀材	S295	47.0	6.5	1.2		439	木桶	S297	32.2		径3.9	
408	椀材	S295	90.1	13.8	1.6		440	椀材	S299	41.5		3.5	
409	椀材	S295	95.0	14.0	2.0		457	椀材	S299			径2.7	
410	椀材	S295	98.2	13.1	1.9		458	椀材	S299				
411	椀材	S295	98.2	19.0	1.9		459	椀材	S299	88.7		3.1	
412	椀材	S295	47.2	(13.3)	1.7		460	椀材	S299	90.0		2.9	
413	椀材	S295	48.4	12.1	0.9		461	椀材	S299	74.2		径3.2	
420	椀材	S296	52.4		2.5		464	椀材	S299	87.7	1.7	3.0	
421	椀材	S296	53.4		2.7		462・463	椀材	S299	57.7		3.4	
422	椀材	S296	53.3		2.5						2.1		
423	椀材	S296	26.9		径(1.3)					8.8	3.8	1.8	
424・425	椀材	S296	18.5		径1.0		465	椀材	S299	16.9	2.7	2.0	
			18.0		1.1		466	椀材	S299	33.2	8.9	1.2	

第6表 西川目遺跡金属製品観察表

No.	器種名	出土遺積	器位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
13	不明	S801	カマド上層	(4.1)	3.9		
14	不明	S801	扉面	(7.2)	(4.8)	0.7	
273	刀子	S805	中層	(8.2)	1.5	0.4	
359	鍔	S201	埋土一拵	径2.4			寛永通宝
360	鍔釘	S202	埋土一拵	(4.8)	0.7	0.4	
361	鍔釘	S202	埋土一拵	(3.7)	1.2		
362	鍔釘	S202	埋土一拵	(3.8)	0.4	0.4	
363	鍔釘	S202	埋土一拵	(3.8)	0.8		
364	鍔釘	S202	埋土一拵	(5.8)	1.3		
365	鍔釘	S202	埋土一拵	(5.2)	1.2		
366	鍔釘	S202	埋土一拵	(3.7)	1.2		
367	鍔釘	S202	埋土一拵	(4.1)	1.9		
369	鍔釘	S202	埋土一拵	(4.2)	1.6	0.4	
369	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.3)	1.3		
370	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.8)	0.3	0.2	
371	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.5)	0.7	0.4	
372	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.8)	0.4	0.3	
373	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.5)	0.7	0.4	
374	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.8)	0.3		
375	鍔釘	S202	埋土一拵	(2.8)	0.4	0.5	

№	群像名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
376	鏡	S202	礎土一層	径2.4			銅鏡(鏡縁不明)・物鏡長1が付置
378	半七ル	S203	礎土一層	(8.8)	径1.0		
379	半七ル	S203	礎土一層	(7.8)	径1.0		
389	鉄釘	S204	礎土一層	(4.3)	1.8	0.5	
390	鉄釘	S204	礎土一層	(3.8)	0.9		
391	鉄釘	S204	礎土一層	(3.3)	0.6	0.4	
392	鉄釘	S204	礎土一層	(3.2)	0.6		
393	鉄釘	S204	礎土一層	(2.7)	0.6		
401	鏡	S205	椀内	径2.3			寛永通宝
402	鏡	S205	椀内	径2.2			寛永通宝
403	鏡	S206	椀内	径2.2			寛永通宝
404	鏡	S205	椀内	径2.2			寛永通宝
405	火打金	S206	椀内	2.1	6.1		
408	半七ル	S205	椀内	27.0	径1.0	0.3	
414	鉄釘	S209	礎土一層	4.1	1.2	0.9	腰貫焼い口
415	鉄釘	S208	礎土一層	4.4	0.4	0.4	
416	鉄釘	S206	礎土一層	2.5	0.6		
417	鉄釘	S206	礎土一層	4.7	1.8	0.3	
418	半七ル	S206	椀内	(6.2)	径0.9	0.9	
419	半七ル	S206	椀内	(6.2)	径0.9		
440	鉄釘	S209	上層	(4.9)	(2.3)		
441	鉄釘	S206	上層	(4.0)	0.6		
442	鉄釘	S209	礎土一層	(4.5)	0.7	0.4	
443	鉄釘	S209	礎土一層	(4.5)	0.9	0.4	
444	鉄釘	S206	礎土一層	(4.7)	0.9	0.4	
445	鉄釘	S206	礎土一層	(4.6)	0.6	0.4	
448	鉄釘	S209	礎土一層	(2.6)	0.6	0.3	
447	鉄釘	S206	礎土一層	(2.4)	1.6	0.2	
448	鉄釘	S206	礎土一層	(1.6)	0.8	0.4	
449	鉄釘	S206	礎土一層	(2.7)	0.4	0.4	
450	鉄釘	S206	礎土一層	(2.3)	(0.6)	0.4	
451	鉄釘	S208	礎土一層	(3.6)	(0.8)	0.4	
452	鉄釘	S209	礎土一層	(3.6)	1.1		
453	鉄釘	S209	礎土一層	(2.2)	0.4	0.2	
454	鉄釘	S209	礎土一層	(2.8)	1.1	0.2	
455	鏡	S209	礎土	径(2.6)			寛永通宝
457	鉄釘	S210	礎土一層	(3.6)	1.1	0.4	
488	鉄釘	S210	礎土一層	(4.9)	(2.0)	0.2	
469	鉄釘	S210	礎土一層	(2.2)	0.8	0.4	
470	鉄釘	S210	礎土一層	(3.3)	0.5	0.5	
471	鉄釘	S210	礎土一層	(3.6)	(0.3)	0.2	
472	鉄釘	S210	礎土一層	(3.6)	(0.4)	0.4	
473	鉄釘	S210	礎土一層	(2.2)	(0.6)	0.4	
474	鉄釘	S210	礎土一層	(4.0)	(0.4)	0.3	
475	半七ル	S210	椀内	(3.9)	径1.0		金属部分腐食
476	半七ル	S210	椀内	(6.1)	径0.8		大貫のみ
477	鏡	不明		径2.2			寛永通宝
478	鏡	不明		径2.2			寛永通宝
479	鏡	S207・S209の間	石の下	径2.3			寛永通宝
490	釘	不明		(3.0)	0.8		
481	半七ル	不明		(4.7)	1.8		腰貫
482	半七ル	不明		(4.6)	0.8		焼口

第7表 西川目遺跡石器観察表

No.	器種名	出土遺構	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
288	石み石	S87	ベルト一拵	18.4	10.3	5.2	
294	砥石	S806	礫土	(9.0)	6.4	2.1	

第8表 西川目遺跡土製品観察表

No.	器種	遺構	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	色調	重量(g)	備考
12	取っ手	S81カマド		(9.2)		1.8	にぶい黄緑	20.12	
28	土器	S94	中～下層	5.7	2	1.8	焼灰	18.41	
40	土器	S94	中～下層	5.4	1.8	1.8	にぶい黄	15.31	
41	土器	S94	中～下層	4.99	1.9	1.9	にぶい黄	18.41	
42	土器	S94	東床下ピット	5.46	1.95	1.9	にぶい黄	17.33	
43	土器	S94	上層	5.9	2.25	2	焼灰	22.97	
44	土器	S94	中～下層	5.5	2.05	3	にぶい黄	18.63	
45	土器	S94	東床下ピット	5.05	2.05	1.85	にぶい黄緑	17.85	
46	土器	S94	下層	5.5	1.9	1.8	にぶい黄緑	19.67	
47	土器	S94	窯り床	5.5	1.9	1.8	にぶい黄	20.08	
48	土器	S94	中～下層	5.7	1.8	1.7	にぶい黄緑	14.7	
49	土器	S94	東床下ピット	3.4	2.5	2.45	にぶい黄	17.83	
50	土器	S94	中層	(2.0)	1.8	1.8	にぶい黄緑	9.28	
51	土器	S94	窯り床	3.3	1.1	1.4	にぶい黄緑	7.78	
52	土器	S94	下層	3.2	1.85	1.6	にぶい黄緑	7.8	
53	土器	S94	法面	3.1	1.6	1.6	にぶい黄緑	8.65	
54	土器	S94	中層	3.3	1.8	1.6	にぶい黄緑	8.96	
55	土器	S94	一拵	3.4	1.7	1.65	にぶい黄緑	8.21	
56	土器	S94	一拵	3.2	1.9	1.4	にぶい黄緑	8.8	
57	土器	S94	一拵	3.3	1.8	1.8	にぶい黄緑	8.02	
58	土器	S94	一拵	3.4	1.7	1.8	にぶい黄緑	9.18	
59	土器	S94	法面	3.3	1.6	1.5	にぶい黄緑	8.29	
60	土器	S94	一拵	3.76	1.6	1.6	にぶい黄緑	8.03	
61	土器	S94	一拵	3.5	2	2	にぶい黄緑	12.47	
62	土器	S94	窯り床	3.2	1.8	1.7	にぶい黄緑	9.89	
63	土器	S94	一拵	3.2	1.76	1.25	焼灰	8.8	
64	土器	S94	一拵	3.95	1.75	1.7	にぶい黄	8.08	
65	土器	S94	一拵	2.95	1.7	1.55	にぶい黄	9.8	
66	土器	S94	中層	3.5	1.8	1.9	焼灰	8.89	
67	土器	S94	東床下ピット	3.8	2	1.8	焼灰	11.64	
68	土器	S94	一拵	4.05	2.2	1.8	焼灰	13.08	
69	土器	S94	カマド縁上面	3.81	2.05	1.75	にぶい黄	11.73	
70	土器	S94	一拵	3.9	2.3	2	黒青	17.82	
71	土器	S94	中～下層	4.1	2.1	2	黒青	18.74	
72	土器	S94	法面	4.3	2	2	にぶい黄	15.87	
73	土器	S94	下層	4.1	2	2.1	にぶい黄緑	17.99	
74	土器	S94	下層	4	2.1	2.2	にぶい黄	18.72	
75	土器	S94	下層	3.85	1.9	1.8	にぶい黄	11.87	
76	土器	S94	下層	3.8	1.75	1.6	にぶい黄緑	8.12	
77	土器	S94	下層	4.3	1.75	(1.25)	にぶい黄緑	11.85	
78	土器	S94	カマド縁上面	3.75	2	1.85	にぶい黄緑	12.31	
79	土器	S94	カマド縁上面	3.9	1.8	1.6	にぶい黄	11.81	
80	土器	S94	中層	3.9	1.7	1.4	にぶい黄	9.77	
81	土器	S94	カマド縁上面	3.8	2	1.75	にぶい黄	13.81	
82	土器	S94	カマド縁上面	4.1	2	1.75	にぶい黄	12.38	
83	土器	S94	中層	3.88	1.85	1.85	にぶい黄	9.88	
84	土器	S94	中層	4	1.8	1.4	焼灰	8.7	
85	土器	S94	中層	3.85	1.85	1.65	焼灰	12.15	
88	土器	S94	中層	4.4	1.8	1.8	にぶい黄緑	12	

No.	品名	規格	部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	色別	重量 (g)	備考
87	土盤	S04	中盤	3.9	1.76	1.1	黒焼	18.76	
88	土盤	S04	中盤	3.5	2	1.9	にぶい焼	12.34	
89	土盤	S04	中盤	4.3	1.9	1.9	灰黄焼	12.52	
90	土盤	S04	中盤	4.2	1.8	1.7	にぶい焼	13.33	
91	土盤	S04	中盤	4	2	1.9	にぶい黄焼	13.4	
92	土盤	S04	東床下ビット	5.1	1.8	1.75	にぶい黄焼	13.94	
93	土盤	S04	東床下ビット	4.7	2	1.9	にぶい焼	15.77	
94	土盤	S04	東床下ビット	4.65	1.8	1.7	にぶい焼	16.47	
95	土盤	S04	中盤	4.6	1.9	1.8	にぶい焼	14.89	
96	土盤	S04	カマド鉢上面	4.4	2.1	2	にぶい焼	17.64	
97	土盤	S04	カマド鉢上面	4.4	1.8	1.8	にぶい焼	12.69	
98	土盤	S04	カマド鉢上面	4.45	2	1.8	にぶい黄焼	14.84	
99	土盤	S04	カマド鉢上面	4.68	2.45	2.15	にぶい焼	20.94	
100	土盤	S04	足り床	4.9	1.7	1.7	にぶい焼	15.07	
101	土盤	S04	東床下ビット	4.86	1.6	1.5	灰黄焼	11.96	
102	土盤	S04	中盤	4.3	1.7	1.6	黒焼	11.22	
103	土盤	S04	中盤	4.4	1.7	1.6	焼	10.83	
104	土盤	S04	中盤	4.4	1.8	0.9	黒焼	10.43	
105	土盤	S04	カマド鉢上面	4.2	2	1.8	にぶい黄焼	14.03	
106	土盤	S04	中盤	4.6	1.7	1.8	にぶい焼	11.83	
107	土盤	S04	中盤	4.4	1.8	1.8	焼灰	13.1	
108	土盤	S04	東床下ビット	4.5	1.9	(1.15)	にぶい焼	7.88	
109	土盤	S04	中盤	4.4	1.8	1.8	焼灰	8.1	
110	土盤	S04	中盤	4.3	1.75	1.5	黒焼	11.47	
111	土盤	S04	中盤	4.3	1.76	1.9	黒焼	12.2	
112	土盤	S04	カマド鉢上面	4.2	1.66	1.46	にぶい黄焼	8.88	
113	土盤	S04	東床下ビット	4.8	1.96	1.9	にぶい焼	15.64	
114	土盤	S04	東床下ビット	4.6	1.8	1.9	にぶい黄焼	11.33	
115	土盤	S04	東床下ビット	4.8	2.06	1.9	にぶい黄焼	17.62	
116	土盤	S04	東床下ビット	4.55	1.86	1.8	にぶい焼	14.56	
117	土盤	S04	カマド鉢上面	5.1	2.1	1.9	にぶい焼	19.2	
118	土盤	S04	中～下層	6.2	2	1.9	にぶい焼	18.97	
119	土盤	S04	中～下層	4.9	2	2.1	にぶい焼	17.1	
120	土盤	S04	中～下層	5	1.86	1.8	にぶい黄焼	15.29	
121	土盤	S04	中～下層	4.7	1.9	1.91	にぶい焼	15.22	
122	土盤	S04	中～下層	4.95	1.8	1.65	にぶい黄焼	15.39	
123	土盤	S04	一層	4.8	1.8	1.8	にぶい黄焼	13.68	
124	土盤	S04	一層	4	1.99	1.79	にぶい焼	14.43	
125	土盤	S04	一層	4.6	1.7	1.7	にぶい焼	12.58	
126	土盤	S04	中盤	4.1	1.9	1.8	にぶい焼	15.54	
127	土盤	S04	中盤	4.71	1.9	1.9	にぶい焼	16.16	
128	土盤	S04	中盤	4.6	1.8	1.8	にぶい焼	15.6	
129	土盤	S04	足り床	4.5	2	1.8	にぶい黄焼	14.21	
130	土盤	S04	足り床	4.7	2	1.8	にぶい焼	15.01	
131	土盤	S04	足り床	4.7	1.7	1.7	にぶい黄焼	12.64	
132	土盤	S04	足り床	4.51	1.9	2	にぶい焼	16.46	
133	土盤	S04	カマド鉢上面	6.4	2.1	2	にぶい焼	18.08	
134	土盤	S04	足り床	4.5	2	1.7	にぶい黄焼	14.71	
135	土盤	S04	中盤	4.3	2	1.8	にぶい焼	17.04	
136	土盤	S04	下層	4.3	1.8	1.8	にぶい黄焼	13.48	
137	土盤	S04	下層	4.3	2	1.8	にぶい黄焼	14.69	
138	土盤	S04	下層	4.7	1.8	1.8	にぶい黄焼	14.24	
139	土盤	S04	カマド鉢上面	4.85	2.05	2.05	にぶい焼	18.2	
140	土盤	S04	カマド鉢上面	4.75	2	2	にぶい黄焼	16.54	
141	土盤	S04	カマド鉢上面	5.05	1.8	1.6	にぶい黄焼	13.6	
142	土盤	S04	中盤	4.8	1.7	1.6	にぶい焼	13.27	
143	土盤	S04	中盤	4.8	1.9	1.85	にぶい焼	15.04	

凡	器種	液種	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	色調	重量 (g)	備考
144	土器	S04	中層	4.5	1.05	1.8	灰黄緑	14.71	
145	土器	S04	中層	4.7	1.8	1.05	にぶい黄	14.39	
146	土器	S04	中層	4.6	2	1.0	にぶい黄	18.42	
147	土器	S04	中層	4.5	1.9	1.7	赭灰	12.94	
148	土器	S04	粘り灰	5.3	2.1	1.9	にぶい黄緑	19.83	
149	土器	S04	中層	4.99	1.95	2	にぶい黄緑	16.63	
150	土器	S04	中層	4.45	1.7	(1.1)	赭灰	8.54	
151	土器	S04	中層	4.7	1.85	1.8	にぶい黄	12.98	
152	土器	S04	中層	5.2	1.95	1.9	黄	16.98	
153	土器	S04	中層	4.8	1.75	1.7	にぶい黄	14.21	
154	土器	S04	中層	4.3	2.25	2.15	にぶい黄	18.61	
155	土器	S04	中層	5.15	1.7	1.7	にぶい黄	14.8	
156	土器	S04	東床下ピット	5.25	2.05	1.9	にぶい黄	17.98	
157	土器	S04	中層	5	1.98	1.85	にぶい黄緑	16.4	
158	土器	S04	中層	4.8	2	1.98	にぶい黄	16.8	
159	土器	S04	中層	4.4	1.8	1.5	赭灰	12.88	
160	土器	S04	東床下ピット	4.75	2.05	1.9	にぶい黄緑	16.16	
161	土器	S04	中層	5.3	2.15	2.25	にぶい黄	22.03	
162	土器	S04	カマド跡上面	4.8	2	2	にぶい黄	16.83	
163	土器	S04	カマド跡上面	5.2	2.1	1.9	にぶい黄緑	19.58	
164	土器	S04	カマド跡上面	5.2	1.7	1.7	にぶい黄	13.58	
165	土器	S04	カマド跡上面	5.1	1.9	2	にぶい黄	18.02	
166	土器	S04	中層	5.2	2.1	2	にぶい黄緑	17.24	
167	土器	S04	中層	5.1	2.1	2	にぶい黄緑	18.42	
168	土器	S04	中層	4.9	1.9	1.8	にぶい黄緑	14.36	
169	土器	S04	中層	5.25	1.9	1.75	にぶい黄	16.54	
170	土器	S04	中層	4.8	1.8	1.7	にぶい黄緑	13.41	
171	土器	S04	カマド跡上面	5.3	1.9	1.85	にぶい黄	15.27	
172	土器	S04	カマド跡上面	5	1.95	1.9	にぶい黄緑	15.21	
173	土器	S04	カマド跡上面	5	1.8	1.8	にぶい黄	13.76	
174	土器	S04	カマド跡上面	4.9	1.9	1.8	にぶい黄	15.53	
175	土器	S04	カマド跡上面	5	2	1.8	にぶい黄緑	17.03	
176	土器	S04	カマド跡上面	5	2	2	にぶい黄緑	17.48	
177	土器	S04	下層	4.8	1.9	1.5	灰黄	12.1	
178	土器	S04	一節	4.9	2	1.8	にぶい黄緑	17.41	
179	土器	S04	カマド跡上面	4.9	2	1.9	にぶい黄	16.52	
180	土器	S04	一節	4.8	1.8	1.7	にぶい黄	13.94	
181	土器	S04	一節	5.1	2.1	2.1	にぶい黄緑	18.18	
182	土器	S04	一節	4.7	2	1.7	にぶい黄緑	16.21	
183	土器	S04	カマド跡上面	4.8	1.8	1.85	にぶい黄	12.53	
184	土器	S04	カマド跡上面	4.4	1.9	1.9	にぶい黄	14.81	
185	土器	S04	一節	5.2	1.9	1.8	にぶい黄	16.29	
186	土器	S04	一節	4.8	1.9	1.8	赭灰	15.04	
187	土器	S04	一節	5.2	1.9	1.8	にぶい黄	13.41	
188	土器	S04	一節	5.1	1.75	1.7	にぶい黄	15.85	
189	土器	S04	一節	4.9	1.9	1.8	にぶい黄	15.26	
190	土器	S04	一節	5.1	2	1.85	にぶい黄	16.52	
191	土器	S04	一節	4.9	2.05	1.75	にぶい黄	16.77	
192	土器	S04	一節	5.15	2.05	2.05	にぶい黄	19.31	
193	土器	S04	一節	5.3	2.05	1.9	にぶい黄緑	19.3	
194	土器	S04	一節	5.5	1.8	1.8	にぶい黄緑	13.77	
195	土器	S04	一節	5.1	2	1.9	にぶい黄緑	19.76	
196	土器	S04	一節	4.95	2	1.9	にぶい黄緑	16.96	
197	土器	S04	中層	5.2	2	1.7	にぶい黄	17.67	
198	土器	S04	東床下ピット	5.3	2.15	2.1	にぶい黄緑	21.21	
199	土器	S04	中層	5	1.9	2	にぶい黄緑	18.02	
200	土器	S04	一節	5.3	2.1	2.05	にぶい黄	21.53	

№	品種	産地	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色澤	重量 (g)	備考
201	土鯧	504	一節	4.9	2	1.8	にぶい腹	16.33	
202	土鯧	504	一節	5.15	2.05	2	にぶい腹	18.78	
203	土鯧	504	一節	4.9	1.85	1.75	にぶい腹	14.92	
204	土鯧	504	一節	4.9	1.8	1.8	にぶい腹	15.54	
205	土鯧	504	一節	4.9	1.8	1.7	にぶい腹	12.32	
206	土鯧	504	一節	5	2	1.9	にぶい腹	17.85	
207	土鯧	504	脇目床	4.8	1.8	1.8	にぶい腹	15.43	
208	土鯧	504	中層	5.1	1.8	1.8	にぶい腹	18.37	
209	土鯧	504	一節	4.5	1.9	1.85	にぶい腹	14.3	
210	土鯧	504	一節	4.5	1.7	1.8	にぶい腹	11.16	
211	土鯧	504	脇目床	4.8	1.8	1.5	にぶい腹	13.32	
212	土鯧	504	一節	4.8	1.7	1.7	雑戻	13.69	
213	土鯧	504	一節	4.42	1.9	2	にぶい腹	15.24	
214	土鯧	504	カマド縁上面	5	2	(1.85)	にぶい腹	15.92	
215	土鯧	504	一節	5.1	1.8	1.8	にぶい腹	15.42	
216	土鯧	504	脇目床	4.4	1.5	1.8	にぶい腹	11.88	
217	土鯧	504	脇目床	4.5	1.9	1.9	にぶい腹	14.33	
218	土鯧	504	一節	4.3	1.7	1.8	にぶい腹	12.01	
219	土鯧	504	床面	4.4	1.8	1.8	にぶい腹	12.48	
220	土鯧	504	脇目床	4.5	2	1.8	にぶい腹	15.35	
221	土鯧	504	一節	4.4	1.8	1.8	にぶい腹	10.08	
222	土鯧	504	一節	4.4	1.8	1.7	にぶい腹	13.52	
223	土鯧	504	一節	4.35	2.25	2.3	にぶい腹	22.8	
224	土鯧	504	脇目床	4.4	1.8	1.5	にぶい腹	12.34	
225	土鯧	504	一節	4.4	1.7	1.55	雑戻	12.73	
226	土鯧	504	一節	4.4	1.95	1.9	黒焼	16.49	
227	土鯧	504	一節	4.4	1.8	1.5	にぶい腹	15.55	
228	土鯧	504	一節	4.8	1.8	1.7	にぶい腹	10.95	
229	土鯧	504	一節	4.5	1.7	1.6	にぶい腹	11.81	
230	土鯧	504	中層	4.4	2	1.8	にぶい腹	17.64	
231	土鯧	504	一節	4.48	1.6	1.59	雑戻	8.97	
232	土鯧	504	下層	4.1	1.8	1.6	雑戻	12.48	
233	土鯧	504	一節	3.8	1.8	1.9	にぶい腹	9.53	
234	土鯧	504	一節	4.3	1.3	1.6	黒焼	6.41	
235	土鯧	504	中層	3.5	1.8	1.8	にぶい腹	8.68	
236	土鯧	504	一節	4	1.55	1.5	黒焼	8.58	
237	土鯧	504	一節	4.4	1.8	2	黒焼	13.8	
238	土鯧	504	一節	4.48	1.7	1.7	雑戻	13.69	
239	土鯧	504	一節	3.8	1.85	1.9	にぶい腹	12.75	
240	土鯧	504	一節	4	1.8	1.8	にぶい腹	11.8	
241	土鯧	504	中層	(4.6)	1.9	1.7	にぶい腹	14.8	
242	土鯧	504	一節	3.9	1.8	1.8	にぶい腹	9.83	
243	土鯧	504	下層	(3.5)	1.75	1.45	雑戻	7.88	
244	土鯧	504	中層	(3.6)	(1.4)	1.4	雑戻	6.77	
245	土鯧	504	一節	3.6	1.4	1.4	雑戻	7.34	
246	土鯧	504	下層	(3.45)	1.5	(1.0)	黒焼	3.90	
247	土鯧	504	上層	(3.5)	1.5	1.5	にぶい腹	8.07	
248	土鯧	504	一節	3.25	1.5	1.8	黒焼	4.17	
249	土鯧	504	下層	(3.4)	1.6	1.5	雑戻	7.36	
250	土鯧	504	下層	2.8	1.55	1.5	戻焼	6.29	
251	土鯧	504	一節	(3.1)	1.8	(1.4)	雑戻	5.77	
252	土鯧	504	一節	2.8	1.9	1.8	黒焼	7.1	
253	土鯧	504	カマド縁上面	(3.1)	(1.75)	1.6	にぶい腹	6.44	
254	土鯧	504	カマド縁上面	2.8	1.75	1.6	にぶい腹	6.84	
255	土鯧	504	カマド縁上面	2.8	1.7	1.6	雑戻	7.15	
256	土鯧	504	一節	2.5	1.85	1.65	雑戻	5.32	
257	土鯧	504	下層	2.1	1.8	1.35	戻焼	3.87	

No.	品名	建機	機位	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	色別	重量(t)	備考
258	土盤	S104	中層	(2.1)	1.7	1.9	黒色	4.22	
259	土盤	S104	一括	1.85	1.85	1.5	にぶい黄緑	3.73	
260	土盤	S104	下層	(2.8)	(1.4)	(1.4)	深黒	4.05	
293	土盤	S100	P17	5.8	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	8.40	
294	土盤	S100	上層	6.25	2.2	(0.9)	にぶい黄緑	12.2	
295	土盤	S109	商業区	4.5	1.6	1.7	にぶい黄緑	11.75	
296	土盤	S100	P10	4.6	(1.7)	(0.6)	にぶい黄緑	7.25	
297	土盤	S100	上層	(4.4)	(1.9)	(0.65)	にぶい黄緑	6.84	
298	土盤	S100	P 9	4.4	(2.0)	(0.7)	にぶい黄緑	6.32	
299	土盤	S100	上層	(4.7)	(1.8)	(0.7)	にぶい黄緑	5.49	
300	土盤	S109	P 8	(4.1)	(2.2)	(0.6)	にぶい黄緑	8.07	
301	土盤	S100	上層	(4.6)	(1.9)	(0.6)	にぶい黄緑	6.01	
302	土盤	S100	上層	(4.7)	(1.9)	(0.6)	にぶい黄緑	6.74	
303	土盤	S800	上層	(2.7)	(1.9)	(0.7)	にぶい黄緑	7	
304	土盤	S800	上層	(2.6)	(2.1)	(0.6)	にぶい黄緑	5.75	
305	土盤	S800	P17	(3.4)	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	5.97	
306	土盤	S800	上層	(3.2)	(2.0)	(0.7)	にぶい黄緑	5.27	
307	土盤	S800	P17	(2.8)	(2.0)	(0.6)	にぶい黄緑	4.70	
308	土盤	S800	P17	(3.6)	(2.0)	(0.7)	にぶい黄緑	6.08	
309	土盤	S800	下層	(3.1)	(1.6)	(0.7)	にぶい黄緑	4.83	
310	土盤	S800	上層	(2.8)	(2.0)	(0.6)	にぶい黄緑	4.53	
311	土盤	S800	上層	(3.5)	(1.7)	(0.6)	にぶい黄緑	4.32	
312	土盤	S800	上層	(3.3)	(2.0)	(0.6)	にぶい黄緑	4.47	
313	土盤	S800	上層	(3.0)	(1.9)	(0.7)	にぶい黄緑	4.33	
314	土盤	S800	上層	(3.0)	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	4.03	
315	土盤	S800	上層	(3.1)	(1.9)	(0.7)	にぶい黄緑	4.41	
316	土盤	S800	上層	(3.5)	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	3.81	
317	土盤	S800	上層	(3.6)	(1.6)	(0.7)	にぶい黄緑	3.75	
318	土盤	S800	上層	(3.0)	(1.6)	(0.6)	にぶい黄緑	3.04	
319	土盤	S800	上層	(2.9)	(1.6)	(0.6)	にぶい黄緑	3.67	
320	土盤	S800	上層	(3.0)	(1.5)	(0.7)	にぶい黄緑	3.27	
321	土盤	S800	上層	(2.6)	(1.7)	(0.6)	にぶい黄緑	2.33	
322	土盤	S800	上層	(3.0)	(1.7)	(1.6)	にぶい黄緑	4.27	
323	土盤	S100	上層	(2.3)	(1.5)	(0.5)	にぶい黄緑	2.68	
324	土盤	S100	上層	(2.7)	(1.4)	(0.4)	にぶい黄緑	1.78	
325	土盤	S100	上層	(2.8)	(2.0)	(0.7)	にぶい黄緑	5.73	
326	土盤	S100	P20	(2.8)	(2.1)	(0.7)	にぶい黄緑	5.96	
327	土盤	S100	上層	(2.8)	(1.7)	(0.7)	にぶい黄緑	3.72	
328	土盤	S100	上層	(2.8)	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	3.53	
329	土盤	S100	P17	(2.4)	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	3.65	
330	土盤	S100	P17	(2.0)	(2.0)	(0.7)	にぶい黄緑	3.30	
331	土盤	S100	P17	(2.3)	(1.6)	(0.6)	にぶい黄緑	4.32	
332	土盤	S100	P20	(1.7)	(1.7)	(0.5)	にぶい黄緑	2.50	
333	土盤	S100	上層	(2.0)	(2.1)	(0.7)	にぶい黄緑	3.06	
334	土盤	S100	上層	(1.7)	(2.0)	(0.6)	にぶい黄緑	2.81	
335	土盤	S100	P16	(2.4)	(1.8)	(0.6)	にぶい黄緑	2.82	
336	土盤	S100	上層	(2.7)	(2.1)	(0.6)	にぶい黄緑	4.53	
337	土盤	S100	上層	(2.1)	(1.7)	(0.7)	にぶい黄緑	2.55	
338	土盤	S100	上層	(2.5)	(1.8)	(0.7)	にぶい黄緑	3.79	
339	土盤	S100	上層	(2.1)	(2.0)	(0.6)	にぶい黄緑	3.79	
340	土盤	S100	上層	(2.4)	(1.8)	(0.5)	にぶい黄緑	1.8	
341	土盤	S100	上層	(4.4)	(1.5)	(0.5)	にぶい黄緑	2.17	
342	土盤	S100	一括	(1.8)	(2.0)	(0.6)	にぶい黄緑	1.18	
343	土盤	S100	上層	(2.0)	(1.2)	(0.4)	にぶい黄緑	0.97	
344	土盤	S100	上層	(1.2)	(1.0)	(0.4)	にぶい黄緑	0.43	
560	土盤	道橋外(A 2区)		5.5	(1.7)	(0.7)	にぶい黄緑	7.77	
601	土盤	道橋外(A 2区)		(4.1)	(2.8)	(0.7)	にぶい黄緑	7.02	



№	経緯	遺構	層位	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	色調	重量(g)	備考
502	土壁	遺構外(A2区)		(4.8)	(2.15)	(0.80)	にぶい黄褐色	10.59	
503	土壁	遺構外(A2区)		(4.85)	(1.9)	(0.80)	にぶい黄褐色	7.24	
504	土壁	遺構外(A2区)		(3.1)	(2.1)	(0.8)	にぶい黄褐色	5.82	
505	土壁	遺構外(A2区)		(3.85)	(2.0)	(0.80)	にぶい黄褐色	4.60	
506	土壁	遺構外(A2区)		(3.15)	(2.0)	(0.8)	にぶい黄褐色	5.55	
507	土壁	遺構外(A2区)		(2.7)	(1.85)	(0.8)	にぶい黄褐色	4.73	
508	土壁	遺構外(A2区)		(2.7)	(1.85)	(0.80)	にぶい黄褐色	4.08	
509	土壁	遺構外(A2区)		(2.5)	(1.7)	(0.8)	にぶい黄褐色	3.90	
510	土壁	遺構外(A2区)		(2.3)	(1.5)	(0.4)	にぶい黄褐色	2.47	
511	土壁	遺構外(A2区)		(1.8)	(1.2)	(0.5)	にぶい黄褐色	1.38	
512	土壁	遺構外(A2区)		(3.5)	(2.3)	(0.8)	にぶい黄褐色	6.45	
513	土壁	遺構外(A2区)		(3.8)	(2.75)	(0.8)	にぶい黄褐色	4.78	
514	土壁	遺構外(A2区)		(3.2)	(1.8)	(0.7)	にぶい黄褐色	4.30	
515	土壁	遺構外(A2区)		(2.45)	(2.3)	(0.8)	にぶい黄褐色	5.87	
516	土壁	遺構外(A2区)		(2.2)	(1.6)	(0.80)	にぶい黄褐色	2.39	

第9表 西川目遺跡 Pit 観察表

地区	番号	色調	土質	粘性	しまり	混入物	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
A区	1	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強		20	14	28.5	
A区	2	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	30	35.1	
A区	3	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	中		28	28	35.5	
A区	4	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28	28	31.8	
A区	5	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		30	20	40	
A区	6	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	22	20		平面観察のみ、柱礎あり
A区	7	10YR2/2黒褐	粘質土	やや強	中		30	(18)	32.8	
A区	8	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	33	28	51.3	
A区	9	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28	20	52.2	
A区	10	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや弱	褐色土ブロック多量、黄褐色土ブロック微量含む	54	52	30.3	
A区	11	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		54	44	38.8	
A区	12	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		40	24	18.4	
A区	13	10YR3/3黒褐	粘質土	中	中		44	36	32.5	
A区	14	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		34	28	41.2	
A区	15	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックモヤヤ多く含む	40	36	55.8	
A区	16	10YR3/3黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックモヤヤ多く含む	38	35		平面観察のみ
A区	17	10YR3/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34	34	47	
A区	18	10YR3/2黒褐	粘質土	中	中		30	30	44	
A区	19	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックモヤヤ多く含む	28	(22)	28.2	
A区	20	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		28	20	29.8	
A区	21	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		70	42	15.8	
A区	22	10YR3/3黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28	28	30.9	
A区	23	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		50	44	39.2	
A区	24	10YR3/3黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	38	34		平面観察のみ
A区	25	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		32	30	34.3	
A区	26	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや弱	褐色土ブロック多量含む	54	46	14.2	
A区	27	1: 10YR4/4褐 2: 10YR4/4褐	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む				
A区	27	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR4/4褐	粘質土	やや弱	やや弱	褐色土ブロック多量含む	30	28	29.1	
A区	28	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR4/4褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む				
A区	29	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		40	40	37.6	
A区	30	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		37	34	30.7	
A区	30	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		115	82	43.1	
A区	31	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR4/4褐	粘質土	中	やや弱	褐色土ブロック多量含む	52	30	42.3	
A区	31	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR4/4褐	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む				

地区	番号	色別	土質	粘性	しまり	流入物	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
A区	32	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		80	54	56.8	
A区	33	1 : 10YR3/1黒褐 2 : 10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックをやや多く含む	28	24	34.4	
A区	34	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		22	20	23.7	
A区	35	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		36	20	45.8	
A区	36	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		22	22	41.7	
A区	37	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		28	20	28.8	
A区	38	10YR3/1黒褐 10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックをやや多く含む	28	20	38.5	
A区	39	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		42	37		平置観察のみ
A区	40	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックをやや多く含む	24	22	27.3	
A区	41	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		22	20	37.7	
A区	42	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		32	30		平置観察のみ
A区	43	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		34	32		平置観察のみ
A区	44	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		30	30		平置観察のみ
A区	45	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		32	28		平置観察のみ
A区	46	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		32	32		平置観察のみ
A区	47	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック少量含む	46	(32)		平置観察のみ
A区	48	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		78	72	53.9	
A区	49	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		30	28		平置観察のみ
A区	50	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		44	(20)		平置観察のみ
A区	51	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	炭化物を含み、粘土粒少量含む	36	30		平置観察のみ
A区	52	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34	28		平置観察のみ
A区	53	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		44	40	66	柱状あり
A区	54	1 : 10YR4/6褐	粘質土	やや強	やや強	炭化物少量含む	80	50	44.5	
A区	55	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	(48)	42	18	
A区	56	1 : 10YR3/3暗褐 2 : 10YR3/3暗褐 3 : 10YR3/3暗褐 4 : 10YR3/3暗褐	粘質土	やや弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	78	52	61	柱状あり
A区	57	1 : 10YR3/3暗褐 2 : 10YR3/3暗褐	粘質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック少量含む	56	30	33	
A区	58	1 : 10YR2/2黒褐 2 : 10YR2/2黒褐 3 : 10YR2/2黒褐 4 : 10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	48	40	73	
A区	59	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	70	52		平置観察のみ
A区	60	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	54	52		平置観察のみ
A区	61	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	30		平置観察のみ
A区	62	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28	28		平置観察のみ、柱状あり
A区	63	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	85	52	59.3	
A区	64	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	60	58		平置観察のみ
A区	65	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	48	30		平置観察のみ
A区	66	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		36	21	30.2	
A区	67	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38	34		平置観察のみ、柱状あり
A区	68	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		40	32	30.5	
A区	69	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	48	46	18.2	
A区	70	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		26	22		平置観察のみ
A区	71	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	40	38		平置観察のみ
A区	72	10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや強		38	36	57.7	
A区	73	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	炭化物・粘土粒少量含む	42	42		平置観察のみ
A区	74	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	炭化物・粘土粒少量含む	38	38		平置観察のみ
A区	75	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	50	40		平置観察のみ
A区	76	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	58	50		平置観察のみ
A区	77	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	50	(50)		平置観察のみ
A区	78	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	56	30		平置観察のみ
A区	79	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	40	38		平置観察のみ

地区	番号	色相	土質	粘性	しまり	混入物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
A区	80	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	54	(42)		平瀬観察のみ
A区	81	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	46	(40)		平瀬観察のみ
A区	82	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	40	37		平瀬観察のみ
A区	83	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR3/4暗褐 3: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	粘土粒少量含む	43	(24)	60.2	
A区	84	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		32	20	18	
A区	85	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		26	24	23.5	
A区	85	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	炭化物少量含む	22	18	39	柱痕あり
A区	87	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	強	黄褐色土ブロック多量含む				
A区	87	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱		20	20	42.1	
A区	88	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱		28	32	34.3	
A区	89	10YR2/2黒褐	砂質土	やや弱	やや弱		34	32	30.5	
A区	90	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	炭化物少量含む	24	20	31.9	
A区	91	1: 10YR3/3暗褐 2: 10YR3/3暗褐 3: 10YR3/3暗褐	粘質土	弱	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む	32	20	49	柱痕あり
A区	92	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		20	18	38.7	
A区	93	1: 10YR3/3暗褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	炭化物・粘土粒少量含む	32	28	28.1	柱痕あり
A区	94	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	20	24	11.4	
A区	95	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	炭褐色土ブロック多量含む	24	18	31	
A区	96	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	強	炭土ブロック・炭化物含む	26	(12)	24.9	
A区	97	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	炭化物・粘土粒少量含む	38	28	33.5	柱痕あり
A区	98	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	強	黄褐色土ブロック多量、粘土粒少量含む	30	26	22.4	
A区	99	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む、炭化物少量含む	38	38	50.5	
A区	100	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む、炭化物少量含む	(48)	24	27.5	
A区	101	10YR2/2黒褐	粘質土				18	14		平瀬観察のみ
A区	102	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック含む	24	22		平瀬観察のみ
A区	103	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	30	20	30.5	柱痕あり
A区	104	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	28	21	28	
A区	105	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	25	25	22.2	
A区	108	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	40	34	23.8	
A区	107	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック多量含む	(38)	30	35	柱痕あり
A区	108	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱		24	20	30.5	
A区	109	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱		25	23	61	柱痕あり
A区	110	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		22	22	15	
A区	111	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	23	20	37.5	
A区	112	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐 3: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	強	黄褐色土ブロック多量含む	(30)	34	46.8	
A区	113	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		26	22	62.5	
A区	114	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		21	16	20.1	
A区	115	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	炭褐色土ブロック少量含む	30	(16)	47.2	
A区	116	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐 3: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	強	炭化物少量含む	36	32	66.3	柱痕あり
A区	117	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	24	22	49.4	
A区	118	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	弱	やや弱	黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	34	30	55.7	柱痕あり
A区	119	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む	48	30	43	
A区	120	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	22	18	26.5	

地区	番号	色票	土質	粘性	しまり	混入物	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	備考
A区	121	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱		26	22	23.0	
A区	122	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	33	31		平置観察のみ
A区	123	10YR3/3緑褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	24	18	20.1	
A区	124	1:10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	23	21	45.5	柱状あり
		2:10YR2/2黒褐	粘質土	弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む				
A区	126	10YR3/3緑褐	粘質土				20	16		平置観察のみ
A区	126	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	22	20	18	
A区	127	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	20	20	21.5	
A区	128	10YR2/2黒褐	粘質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	33	26	41.3	
A区	129	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	26	24	16.8	
A区	130	10YR3/3緑褐	粘質土	弱	弱		24	20	20.1	
A区	131	1:10YR2/2黒褐	砂質土	やや弱	やや弱		30	34	51.8	
		2:10YR2/2黒褐	砂質土	中	強	黄褐色土ブロック多量含む 炭化物少量含む				
A区	132	10YR3/3緑褐	粘質土				20	14		平置観察のみ
A区	133	10YR3/3緑褐	粘質土	弱	弱		30	22	30.6	
A区	134	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	32	28		平置観察のみ
A区	135	10YR3/3緑褐	粘質土				30	26		平置観察のみ
A区	136	10YR2/2黒褐	粘質土				56	66		平置観察のみ
A区	137	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	26	26		平置観察のみ、柱状あり
A区	138	10YR3/3緑褐	粘質土				36	28		平置観察のみ
A区	139	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24	22		平置観察のみ、柱状あり
A区	141	10YR3/3緑褐	粘質土				20	18		平置観察のみ
A区	142	10YR2/2黒褐	粘質土			炭化物多量含む	24	24	21.4	
A区	143	10YR2/2黒褐	粘質土				34	28		平置観察のみ
A区	144	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	21	20		平置観察のみ、柱状あり
A区	145	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24	24		平置観察のみ、柱状あり
A区	146	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	26	22		平置観察のみ、柱状あり
A区	147	10YR3/3緑褐	粘質土				18	16		平置観察のみ
A区	149	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	30	28		平置観察のみ
A区	149	10YR2/2黒褐	粘質土				18	16		平置観察のみ
A区	150	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	26	24		平置観察のみ
A区	151	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	22	18		平置観察のみ
A区	152	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	36	36		平置観察のみ
A区	153	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	26	26		平置観察のみ
A区	154	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	24	22		平置観察のみ
A区	155	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	26	26		平置観察のみ、柱状あり
A区	156	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	24	24		平置観察のみ、柱状あり
A区	157	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	31	24		平置観察のみ、柱状あり
A区	158	10YR3/3緑褐	粘質土				22	20		平置観察のみ
A区	159	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	40	30		平置観察のみ
A区	160	10YR3/3緑褐	粘質土				16	16		平置観察のみ
A区	161	10YR2/2黒褐	粘質土				24	20		平置観察のみ
A区	162	10YR2/2黒褐	粘質土				18	14		平置観察のみ
A区	163	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	(34)	24		平置観察のみ、柱状あり
A区	164	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	34	30		平置観察のみ
A区	166	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	26	22		平置観察のみ
A区	166	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック・炭化物少量含む	26	18		平置観察のみ
A区	167	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24	22		平置観察のみ
A区	168	1:10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	23	26	35	柱状あり
		2:10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック多量含む				
		3:10YR2/2黒褐	粘質土	弱	やや強					
A区	169	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	28	26		平置観察のみ、柱状あり
A区	170	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	30	26		平置観察のみ、柱状あり
A区	171	10YR3/3緑褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	34	34		平置観察のみ、柱状あり
A区	172	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	26	24		平置観察のみ
A区	173	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	(36)	26		平置観察のみ
A区	174	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	26	(26)		平置観察のみ

地区	番号	色別	土質	粘性	しまり	混入物	長軸(cm)短軸(cm)深さ(cm)	備考
A区	175	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	26 26	平置観察のみ、柱状あり
A区	176	10YR2/2黒褐	粘質土				21 18	平置観察のみ
A区	177	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む、黄土粒少量含む	30 30	平置観察のみ、柱状あり
A区	178	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	30 28	平置観察のみ、柱状あり
A区	179	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	18 18	平置観察のみ
A区	180	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	32 30	平置観察のみ、柱状あり
A区	181	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24 22	平置観察のみ
A区	182	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	42 40	平置観察のみ
A区	183	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む、炭化物少量含む	26 26	平置観察のみ、柱状あり
A区	184	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む、炭化物少量含む	30 30	平置観察のみ、柱状あり
A区	185	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック、炭化物少量含む	29 26	平置観察のみ、柱状あり
A区	188	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	27 23	平置観察のみ、柱状あり
A区	187	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	28 22	平置観察のみ
A区	188	10YR2/2黒褐	粘質土				21 18	平置観察のみ
A区	188	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック、炭化物少量含む	27 24	平置観察のみ
A区	190	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック、炭化物、黄土粒少量含む	20 18	平置観察のみ
A区	191	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	28 24	平置観察のみ、柱状あり
A区	192	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック、炭化物少量含む	18 18	平置観察のみ
A区	193	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック、炭化物少量含む	27 24	平置観察のみ
A区	194	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	35 32	平置観察のみ、柱状あり
A区	195	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	22 18	平置観察のみ
A区	196	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	26 24 12	
A区	197	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	18 18	平置観察のみ
A区	198	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	18 18	平置観察のみ
A区	199	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック、黄土粒少量含む	34 30	平置観察のみ、柱状あり
A区	200	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	26 20	平置観察のみ
A区	201	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	30 30	平置観察のみ、柱状あり
A区	202	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	46 32	平置観察のみ、柱状あり
A区	203	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24 20	平置観察のみ、柱状あり
A区	204	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	38 30	平置観察のみ、柱状あり
A区	205	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24 22	平置観察のみ、柱状あり
A区	206	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	24 19	平置観察のみ、柱状あり
A区	207	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	26 22	平置観察のみ、柱状あり
A区	208	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	30 28	平置観察のみ、柱状あり
A区	209	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	26 24	平置観察のみ
A区	210	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	41 36	平置観察のみ、柱状あり
A区	211	10YR2/2黒褐	粘質土			炭化物少量含む	21 19	平置観察のみ
A区	212	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	27 24	平置観察のみ、柱状あり
A区	213	10YR2/2黒褐	粘質土			黄褐色土ブロック多量含む	21 20	平置観察のみ
A区	214	10YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱		20 18 10.3	
A区	215	1 : 10YR2/2黒褐 2 : 8YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	黄褐色土ブロック少量含む	26 24 24 43	柱状あり
A区	216	10YR3/3暗褐	粘質土	弱	弱		16 14 20.2	
A区	217	1 : 10YR2/2黒褐 2 : 8YR2/2黒褐	粘質土	弱	弱	炭化物、黄褐色土ブロック少量含む	22 21 20.9	
A区	218	10YR2/2黒褐	粘質土				18 18	平置観察のみ
A区	219	10YR2/2黒褐	粘質土				22 20	平置観察のみ
A区	220	10YR2/2黒褐	粘質土				20 20	平置観察のみ
A区	221	10YR2/2黒褐	粘質土	やや硬	中		16 14 11	
B区	222	10YR3/3暗褐	粘質土			黄褐色土ブロック少量含む	53 50 16.2	平置観察のみ
A区	223	10YR3/3暗褐	粘質土				42 38	平置観察のみ
B区	224	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		26 26 4.9	
B区	225	10YR2/2黒褐	粘質土	やや硬	やや硬		32 26 6	
B区	226	10YR2/2黒褐	粘質土	やや硬	中		34 26 10.3	
B区	227	10YR3/3暗褐	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロック少量含む	88 82 66.3	
B区	228	10YR3/3暗褐	粘質土	やや硬	やや硬		34 28 15	
B区	229	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや硬		36 34 22.6	

地区	番号	色別	土質	粘性	しまり	侵入物	高輪(m)幅輪(m)深さ(m)	備考	
8区	230	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや粘		30	32	6.2
8区	231	10YR3/3暗褐	粘質土	やや粘	やや粘		36	28	11.3
8区	232	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		100	72	27.3
8区	233	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	30	20	18.9
8区	234	10YR3/3暗褐	粘質土	やや粘	中	黄褐色土ブロック少量含む	42	34	14.3
8区	235	10YR3/3暗褐	粘質土	やや粘	やや粘	黄褐色土ブロック少量含む	40	30	20.5
8区	236	10YR3/3暗褐	粘質土	やや粘	やや粘	黄褐色土ブロック少量含む	34	32	31.6
8区	237	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや粘	黄褐色土ブロック少量含む	54	35	25.9
8区	238	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや粘	黄褐色土ブロック少量含む	34	32	22.3
8区	239	10YR3/3暗褐	粘質土	やや粘	やや粘	黄褐色土ブロック少量含む	38	32	39.6
8区	240	10YR3/3暗褐	粘質土	やや粘	中	黄褐色土ブロック少量含む	38	28	27.7

第10表 堀内II遺跡土器観察表

№	器種	出土 遺構	層位	発見率 (%)	色別	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	取柄		胎土	その他		
										内面	外面				
517	杯	葬内溝	3801	床面	25	浅径	やや軟 (18.8)	7.3	8.8	マメツ(回転ナデ)	マメツ	糸切リ	胎土	外面下位ヘラケズリの可能性あり	
518	瓶	土師器	3801	床面	79	浅筒	良	17.3	21.8	口縁部:ヨコナデ/ 口縁部:ヨコナ 上段:縦口ハケメ/ 下段:縦口ヘラナデ	マメツ	糸切リ	胎土	瓶、砂粒少量含む	
521	杯	土師器	3803	床面	30	短	良好 (15.2)	6.2	6.0	回転ナデ	マメツ(縦口ミ ガキ)	糸切リ	胎土	藍、赤色スコリヤ 内面黄色地肌含む	
522	杯	土師器	3803	下層~深面	75	に広い 短	良	13.8	5.6	5.8	回転ナデ	エガキ	糸切リ	胎土	内面黄色地肌
523	杯	土師器	3803	中層~深面	60	浅筒	良	(14.4)	4.8	5.8	回転ナデ	マメツ(ミガキ)	糸切リ	胎土	藍、赤色スコリヤ 内面黄色地肌含む
524	鉢?	土師器	3803	上層~中層	に広い 浅筒	良		3.4	(5.0)	マメツ(ケズリ)	放射状ミガキ	ケズリ	胎土	やや粘、砂粒含む 内面黄色地肌、大藍	
525	杯	土師器	3803	下層~深面 中	49	浅筒	良	(14.6)	5.6	5.9	回転ナデ/下位: マメツ(ヘラケズ キ/下位:放射 状ミガキ)	放射状ミガキ 糸切リ	胎土	内面黄色地肌	
526	杯	土師器	3803	下層~深面	68	短	良 (12.8)	5.2	5.7	マメツ(回転ナデ)	マメツ	マメツ(糸切リ)	胎土	藍、黄緑白色砂粒 内面黄色地肌含む	
527	杯	土師器	3803	床面	25	に広い 浅筒	やや軟 (14.6)	5.6		回転ナデ	マメツ(ミガキ)		胎土	内面黄色地肌	
528	高倉 杯	土師器	3803	床面	39	短	良	1.8	7.9	回転ナデ	マメツ	糸切リ	胎土	内面黄色地肌	
529	葬内溝	3806	床面	100	に広い 短	良	14.3	5.2	5.7	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	藍、φ2~3mm砂 粒含む	
530	杯	葬内溝	3803	上層~中層	25	に広い 浅筒	やや軟 (15.2)	5.0		マメツ(回転ナデ)	マメツ(回転ナ デ)		胎土		
531	杯	土師器	3803	上層	18	浅筒	良	1.6	(8.7)	ヘラケズリ	放射状ミガキ 壁	ヘラケズリ再編	胎土	内面黄色地肌	
532	杯	土師器	3803	カマド上層	29	に広い 浅筒	良		3.6	回転ナデ			胎土	内面黄色地肌、大藍	
533	杯	須恵器	3803	上層~中層	29	灰 良好 壁筒	(14.8)	3.7	(4.7)	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土、赤色スコ リヤ含む	
534	杯	須恵器	3803	床面	59	灰白 やや軟	(13.8)	4.8	5.3	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土	
535	杯	須恵器	3803	中層	灰	良好 (15.0)	5.5	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土		
536	杯	須恵器	3803	深面	80	灰 良好 壁筒	14.4	4.5	5.6	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土、砂粒少量 含む	
537	杯	須恵器	3803	中層~深面	80	灰 良好 壁筒	14.7	4.7	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土	
538	杯	須恵器	3803	下層~深面	30	灰 良好 (15.1)	4.4		回転ナデ	回転ナデ			胎土	胎土	
539	杯	須恵器	3803	下層~深面	100	灰 良好 壁筒	15.0	4.7	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土	
540	杯	須恵器	3803	下層~深面	50	暗灰 良 (14.1)	4.6	5.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切リ	胎土	胎土		
541	壺	土師器	3803	床面	29	特異筒 良 (21.0)	10.9			口縁部:ヨコナデ/ 口縁部:ヨコナデ/ 体部:縦口ハケメ/ 体部:縦口ハケメ	口縁部:ヨコナデ/ 口縁部:ヨコナデ/ 体部:縦口ハケメ/ 体部:縦口ハケメ		胎土	瓶、砂粒少量含む	
542	壺	土師器	3803	埋土	29	浅筒 良 (22.2)	10.1			口縁部:ヨコナデ/ 口縁部:縦口ハケメ/ 体部:縦口ハケメ	口縁部:ヨコナデ/ 口縁部:縦口ハケメ/ 体部:縦口ハケメ		胎土	瓶、砂粒少量、赤色 スコリヤ少量含む	

No.	群種	種別	出土 遺構	層位	厚さ (%)	色相	構成	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	陶器			土質	その他	
											外壁	内面	底部			
543	Ⅲ	土師器	S103	底面	30	明黄緑	良	(20.6)	13.8		口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハケメ	口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハケメ		Ⅲ		
544	Ⅲ	土師器	S103	開口部	00	にぶい 黄緑	軟	(21.6)	17.0		口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナデ	口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナデ		Ⅲ	砂粒少量含む	
545	Ⅲ	土師器	S103	底面	20	にぶい 黄緑	良	(18.0)	13.8		口縁部：ヨコナデ /体部：縦位ハラナ デ(マメツ)	口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナ デ		Ⅲ	砂粒少量含む	
546	Ⅲ	土師器	S103	胎体中・ その他	80	淡黄緑	良	12.8	9.8		回転ナデ	回転ナデ		Ⅲ	砂粒・赤色 スクリヤ陶器含む	
547	Ⅲ	土師器	S103	中層	10	淡黄	良	(13.8)	6.4		回転ナデ	マメツ(回転ナ デ)		Ⅲ	砂粒少量含む	
548	Ⅲ	土師器	S103	上層	10	淡黄緑	良	(18.4)	6.0		回転ナデ(マメツ)	マメツ(回転ナ デ)		Ⅲ	砂粒少量含む	
549	Ⅲ	須臾器	S103	上層	10	灰	良好	(20.8)	1.9		回転ナデ	回転ナデ			磁化、白色砂粒含 む	
550	Ⅲ	須臾器	S103	底面	30	灰	良好	15.5	10.8		横位：ハラケズリ /下位：ナデ	回転ナデ		Ⅲ	砂粒少量含 む	
554	Ⅲ	土師器	S104	上層	20	淡黄	良	(14.8)	4.7	(5.3)	回転ナデ	マメツ(ミガキ)	糸切り		Ⅲ	内面黒色磁 化
555	Ⅲ	赤内黒	S104	埋土	10	埋	良	1.8	(5.1)		回転ナデ	回転ナデ	糸切り		Ⅲ	断面、φ2~3mm 砂粒多量含む
559	Ⅲ	土師器	S105	中層~底面	80	にぶい 黄	良	14.0	4.7	5.5	回転ナデ	上段：横位ミガキ/ 下段：縦位ハラ ナデ		Ⅲ	内面黒色磁 化	
557	Ⅲ	土師器	S105	底面	00	にぶい 黄緑	良	13.8	13.3	6.0	回転ナデ	回転ナデ(マメ ツ)	糸切り		Ⅲ	
558	Ⅲ	赤内黒	S105	中層	10	黄灰	良				回転ナデ			Ⅲ	黒成あり	
559	Ⅲ	土師器	S105	田カマド跡 出しビット	25	埋	良	(19.8)	12.2		上段：回転ナデ/下 段：縦位ハラズリ	回転ナデ(一部 ハラナデ)		Ⅲ	砂粒少量含 む	
560	Ⅲ	土師器	S105	底面	10	淡黄	良	(21.8)	6.0		回転ナデ	マメツ(回転ナ デ)		Ⅲ	砂粒多量含 む	
561	Ⅲ	土師器	S105	上層~底面	25	にぶい 黄	良	(25.1)	20.0		上段：下位：横位 上段：縦位ハラナ デ/中位：縦位ハラ ナデ/下位：横位 ミガキ			Ⅲ		
563	Ⅲ	土師器	S108	底面	10	明黄緑	良	(23.8)	9.0		回転ナデ	回転ナデ		Ⅲ		
564	Ⅲ	須臾器	S108	底面	10	灰	良好	3.7	(12.2)		横位・斜位ケズリ	横位ハラナデ		Ⅲ	黄成、砂粒少量含 む	
565	Ⅲ	土師器	S109	上層	20	にぶい 黄緑	やや軟	(13.0)	6.5	(4.8)	マメツ	マメツ		Ⅲ	やや粗、砂粒多量 含む	
566	Ⅲ	須臾器	S109	底面	70	にぶい 黄緑	良	15.1	5.3	5.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り、指環正 規	Ⅲ	黄成、砂粒少量含 む 磨擦 面	
567	Ⅲ	土師器	S109	カマド付近	20	淡黄緑	良	11.2			口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハケメ	口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナ デ		Ⅲ	砂粒少量含 む	
571	Ⅲ	土師器	S111- (S130)	底面	40	にぶい 黄緑	良	(15.8)	4.4	(8.2)	回転ナデ	ミガキ(マメツ)	糸切り	Ⅲ	φ1mm砂粒多 量含む	
572	Ⅲ	赤内黒	S111	底面	50	埋	やや軟	(13.8)	4.3	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	Ⅲ		
573	Ⅲ	土師器	S111	底面	50	埋	良	(12.0)	6.1	6.4	口縁部：ヨコナデ/体 部：ハラナデ	口縁部：ヨコナデ/体 部：ハラナデ	水濁 器：ハラナデ	Ⅲ	やや粗、砂粒多量 含む	
574	Ⅲ	土師器	S111	埋土カマド	90	黄灰	良	12.05	8.5	6.0	口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナ デ	口縁部：ヨコナ デ/体部：ハラ ナデ	ハラケズリ	Ⅲ	φ2~3mm砂 粒含む	
575	Ⅲ	土師器	S111 (S130)	底面	50	にぶい 黄緑	良	(24.9)	13.4		口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナ デ	口縁部：ヨコナデ/ 体部：縦位ハラナ デ	上段：縦位ハラナ デ/中位：縦位ハラ ナデ/下段：マメ ツ(ハラナデ)	Ⅲ	砂粒少量含む	
576	Ⅲ	土師器	S111	底面	70	にぶい 黄緑	良	(28.0)	18.6	(11.8)	口縁部：ヨコナデ /体部：マメツ	マメツ		Ⅲ	やや粗、砂粒含む	
577	Ⅲ	縄文	S111	一括	10										縄文	
578	Ⅲ	須臾器	S112	上層	10	埋	やや軟	16.3			タタキ目	当て具痕		Ⅲ	赤い	
579	Ⅲ	土師器	S114	上層	30	淡黄緑	良	(11.7)	5.8	(0.0)	マメツ(回転ナ デ)/下 段：マメツ(ハラ ケズリ)	ミガキ	糸切り	Ⅲ	砂粒少量含む 内面黒色磁 化	
580	Ⅲ	土師器	S114	上層	20	にぶい 黄緑	良	(18.0)	9.7		口縁部：マメツ /体部：ヨコナ デ	口縁部：マメツ /体部：ヨコナ デ	マメツ	Ⅲ	砂粒多量含む	
581	Ⅲ	土師器	S114	中層	10	埋	やや軟	21.8	5.2		マメツ	マメツ		Ⅲ	やや粗	
582	Ⅲ	土師器	S114	中層	20	埋	やや軟	(18.8)	14.7		口縁部：ヨコナ デ/体部：縦 位ハラナ デ	口縁部：マメツ /体部：縦 位ハラナ デ		Ⅲ	砂粒含む 輪縁内底	

No.	品種	種別	出土 遺構	層位	埋没率 (%)	色調	構成	口径 (cm)	径高 (cm)	底径 (cm)	調査			出土	その他
											外面	内面	底部		
583	瓦	土師器	S14	上層	40	にぶい 黄緑	瓦	(18.2)	23.6		口縁部：ヨコナデ /体部：マメツ(新 瓦・埋没ミガキ)			瓦、砂粒含む	
584	瓦	須恵器	S14	中～下層	40	灰	良好		29.2		上部：陶輪ナデ/4割～ 下部：模範ヘラナデ	陶輪ナデ		陶瓦、砂粒含む	
585	瓦	須恵器	S14	上層	10	緑灰	良好 変色		31.4	14.8	上部：青灰泥 / ナデ? 下部：タタキ			瓦、砂粒少量	平行あて瓦
586	鉢	陶文	S14		10										陶文
587	瓦	土師器	S16	埋土	20	にぶい 黄緑	瓦	(17.0)	3.9		口縁部：ヨコナデ / 体部：模範ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ / 体部：模範ヘラナデ		瓦、φ2～3mm砂 粒含む	
588	瓦	土師器	S16	埋土	25	にぶい 黄	瓦	(22.6)	11.3		陶輪ナデ	陶輪ナデ(マメ ツ)		瓦、砂粒多量含む	
589	杯	土師器	S17	上層	50	にぶい 黄	瓦	(15.3)	3.9	5.9	陶輪ナデ	ミガキ	糸切り	陶器	内面黒色処理
591	杯	土師器	S17	上層	25	黄褐色	瓦	(17.0)	4.8		陶輪ナデ	マメツ(模範ミ ガキ)		瓦、砂粒やや多く 含む	内面黒色処理
592	杯	須恵器?	S17	深層	10	灰白	瓦		3.1	8.1	陶輪ナデ	陶輪ナデ	糸切り	瓦	
593	瓦	土師器	S17	上層	45	黄	瓦	(13.4)	11.6	7.7	口縁部：マメツ (ヨコナデ)/体部： マメツ(模範ヘケ メ)	口縁部：マメツ (ヨコナデ)/体部： マメツ(模範ヘケ メ)		やや粗、砂粒多量 含む	
594	杯	土師器	S18	下層～床面	60	にぶい 黄	瓦	(15.0)	5.7	(5.0)	陶輪ナデ/下位： (手掛り)ヘラナデ	ミガキ(マメツ)	糸切り	陶器	内面黒色処理
595	杯	土師器	S18	上層～下層	20	にぶい 黄緑	瓦	(14.1)	4.9	(5.6)	陶輪ナデ	上部：模範ミガキ / 下部：模範ミガキ	糸切り	瓦、φ1mm砂粒含 む	内面黒色処理
596	杯	土師器	S18	上層	100	にぶい 黄緑	瓦	13.8	4.9	6.2	陶輪ナデ(マメツ)	模範ミガキ	マメツ	陶瓦、砂粒含む	内面黒色処理
597	杯	土師器	S18	下層	30	にぶい 黄緑	瓦	(13.0)	4.6	6.2	陶輪ナデ/下位： ヘラナデ	上部：模範ミガキ (マメツ)/下部：瓦 模範ミガキ(マメツ)		瓦	内面黒色処理
598	杯	土師器	S18	床面	40	浅黄緑	瓦	(14.0)	5.3		マメツ(模範ナメ)	マメツ(上部： 模範ミガキ・体 部：模範ミガキ)		瓦、φ1mm砂粒少 量含む	内面黒色処理
599	杯	土師器	S18	中層	80	黄	瓦	13.2	4.8	6.2	陶輪ナデ/下位： 陶輪ヘラナデ	ミガキ(マメツ)	陶輪ヘラナデ	瓦、φ1mm砂粒含 む	内面黒色処理
600	冨台 杯	土師器	S18	深面	10	にぶい 黄緑	瓦		2.3	6.2	陶輪ナデ	マメツ(ミガキ)	糸切り	瓦	内面黒色処理、貼 付冨台
601	杯	野内瓦	S18	上層	25	にぶい 黄緑	やや軟	(13.0)	4.7	(5.0)	マメツ(陶輪ナデ)	マメツ	マメツ(糸切り)	やや粗、砂粒多量 含む	
602	瓦	土師器	S18	中層	20	黄	瓦	(11.5)	6.6		マメツ	マメツ(ヘラナ デ)		瓦、砂粒多量含む	
603	瓦	土師器	S18	深面	20	浅黄緑	瓦	(25.0)	5.5		口縁部：ヨコナデ / 体部：マメツ(新 瓦・埋没ミガキ)	口縁部：ヨコナ デ/体部：模範ヘ ラナデ(ハケメ)		やや粗、砂粒多量 含む	
604	瓦	土師器	S18	深面	30	明黄緑	瓦	(28.5)	25.1		マメツ(模範ヘラ ナデ)	マメツ		やや粗、砂粒多く 含む	
605	瓦	土師器	S18	上層	70	淡黄	瓦	(28.9)	26.9		口縁部：上層：模範ミガキ、 /下部：模範ヘラナデ	陶輪ナデ		やや粗、砂粒多量 含む	
606	瓦	土師器	S18	上層	30	にぶい 黄緑		(12.9)	4.9		マメツ	マメツ		瓦、φ2～3mm砂 粒多量含む	
607	瓦	土師器	S18	中層	20	淡黄	やや軟	(14.9)	6.0		マメツ(陶輪ナデ)	マメツ(模範ヘ ラナデ)		瓦、砂粒含む	
608	瓦	土師器	S18	埋土	20	にぶい 黄緑	瓦	(23.3)	13.1		口縁部：ヨコナデ / 体部：マメツ(新 瓦・埋没ミガキ)	口縁部：ヨコナ デ/体部：模範ヘ ラナデ		やや粗、砂粒多量 含む	
609	瓦	土師器	S18	埋土	20	にぶい 黄緑	瓦	(21.3)	7.5		ヨコナデ(マメツ)	口縁部：ヨコナ デ/体部：模範ヘ ラナデ		瓦、砂粒含む	
610	鉢?	土師器	S18	中層	20	淡黄	軟	(20.9)	9.9		口縁部：ヨコナデ / 体部：マメツ	口縁部：ヨコナ デ/体部：模範ヘ ラナデ(マメツ)		粗、砂粒多量・赤 色スクリヤ含む	
611	瓦	土師器	S18	深面	30	にぶい 黄緑	瓦		9.6		マメツ	マメツ		瓦、砂粒含む	
612	瓦	土師器	S18	上層	20	浅黄緑	瓦	(23.3)	10.4		陶輪ナデ	陶輪ナデ		瓦、砂粒少量含む・ 赤色スクリヤ含む	
613	杯	須恵器	S18	上層～中層	40	灰	瓦	(13.6)	5.0	(5.8)	陶輪ナデ	陶輪ナデ	糸切り	陶器、φ1mm砂粒 含む	



No.	品種	種別	出土 場所	層位	埋存率 (%)	色調	焼成	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	取柄		底形	胎土	その他
											外蓋	内蓋			
614	杯	須臾部	S18	中層	20	灰白	良	(15.4)	4.2		回転ナデ	回転ナデ	無蓋		
615	高台 杯	須臾部	S18	表面	50	灰黄	良好	(15.8)	6.0	(7.1)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色、白色砂粒含	貼付高台
616	杯	須臾部	S18	上層～床面	65	灰白	良好	14.7	5.2	4.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色	
617	杯	須臾部	S18	下層～床面	80	黄灰	やや軟	15.8	4.5	5.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	底、φ2～3mm砂粒含む	
618	高台 杯	須臾部?	S18	下層～床面	60	灰黄	良好	(16.8)	8.3	7.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色	貼付高台、中位に2次焼成?
619	杯	須臾部	S18・SK14	中層～下層	40	灰	良好	14.4	4.8	5.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色、白色砂粒含	
620	杯	須臾部	S18	中層～下層	65	灰黄	やや軟	13.8	4.5	5.3	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	底、白色砂粒含	
621	高台 杯	須臾部	S18	表面	45	灰黄	良		2.0	7.2	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	底	貼付高台
622	壺	須臾部	S18	下層	40	焼灰	良好	(11.8)	15.0	(6.5)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	褐色	
623	大壺	須臾部	S18	床面	100			41.2	61.4		口縁部:回転ナデ/ 胴部:回転ナデ/ 底部:平転クナキ	口縁部:回転ナデ /胴部:平転ナデ	タケ		丸底
624	真鍮 皿	須臾部	S18	床面	90	焼灰	良好 堅脆	21.6	8.1		裏面～上部:回転ナ デ(灰流)中位:龍 泉ヘラケズリ～平 転ナデ/下部:回転 ナデ		口縁部:ナデ、龍 泉中心部:未調整		削り出し高台
625	真鍮 皿	須臾部	S18	表面	80	焼灰	良好 堅脆	11.2	9.8		回転ナデ	回転ナデ		底	626と同一樹林か
626	真鍮 皿	須臾部	S18	表面	70	灰白	良好		14.4	(8.9)	回転ナデ	回転ナデ		褐色、砂粒少量含	削り出し高台
627	壺	須臾部	S18	表面	70	焼灰	良好 堅脆	(18.5)	25.4		口縁部～上部:回 転ナデ/下部:龍 泉ヘラケズリ	回転ナデ		褐色	割縁成残る
628	大壺	須臾部	S18	表面	100	焼灰	良	45.5	63.7		口縁部:回転ナ デ/胴部:タタキ (平打目)	口縁部:回転ナ デ/上部:青濁 流/下部:平 転ナデ		褐色	丸底
629	壺	土師部	S19	上層	70	透黄褐色	良	14.2	12.2		回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り	やや粗、φ1mm程度 の赤スクリヤ含む	
630	杯	土師部	S20	床面	60	黄	良	14.3	4.7	5.4	回転ナデ	上部:焼成15ヶ/ 下部:焼成15ヶ	糸切り	底	内面黒色地埋
631	杯	土師部	S20	上層	10	にぶい 黄褐色	良	(14.4)	4.5		回転ナデ	上部:焼成15ヶ/ 下部:焼成15ヶ		褐色	内面黒色地埋
632	杯	土師部	S20	焼遺下層		にぶい 黄褐色	良	2.8	4.8		回転ナデ	放射状スガキ	糸切り	底、砂粒少量含	内面黒色地埋
633	杯	赤内黒	S20	床面	70	透黄褐色	やや軟	16.0	6.0	8.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色	
634	杯	赤内黒	S20	カタマ村近	30	透黄褐色	良	(14.4)	4.2	(5.6)	回転ナデ(マメツ)	マメツ(回転ナ デ)	糸切り	やや粗、砂粒・赤色 スクリヤ少量含む	
635	壺	土師部	S20	中層	20	透黄褐色	良	(22.1)	6.5		口縁部～胴部:回転ナ デ/胴部:龍泉ヘラ ナデ/ハケメ(マメツ)	回転ナデ		やや粗、砂粒少量 含む	
636	壺	土師部	S20	床面	20	にぶい 黄褐色	良	(22.0)	6.3		口縁部:ヨコナ デ/胴部:マメツ (龍泉ハケメ)	口縁部:ヨコナ デ/胴部:龍泉・ 斜紋ハケメ		やや粗、砂粒少量 含む	
637	壺	土師部	S20	表面	10	にぶい 黄褐色	良	6.3	(11.8)		胴部:龍泉ヘラケ ズリ/下部:龍泉ナ デ	龍泉ヘラナデ		褐色、赤色砂粒少 量含む	
638	壺	須臾部	S20	床面	30	焼灰	良好	13.2	6.5		回転ナデ	回転ナデ		褐色	
639	壺	須臾部	S20	下層	10	焼灰	良好 堅脆	31.4	8.3		回転ナデ	回転ナデ		褐色	
641	杯	赤内黒	S21	焼土	30	にぶい 黄褐色	良	(17.8)	6.7	(7.2)	回転ナデ	口縁部:焼成15 ヶ/胴部:龍 泉ヘラナデ	糸切り	やや粗	黒色地埋
642	杯	赤内黒?	S21	上層～中層	45	にぶい 黄褐色	良好が 多い	(15.3)	5.2	6.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	底、白色砂粒含む	
643	杯	土師部	S21	下層～床面	85	黄	良	(12.8)	4.8	8.4	マメツ(回転ナ デ)	マメツ(スガキ)	糸切り	褐色	内面黒色地埋
644	杯	土師部	S21	上層～下層	80	透黄褐色	良	(15.8)	4.4	(5.0)	回転ナデ	マメツ(スガキ)	糸切り	底	内面黒色地埋
645	杯	赤内黒	S21	床面	100	黄	良	12.7	4.2	5.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	底、φ2～3mm砂 粒含む	
646	高台 杯	赤内黒	S21	床面	50	黄	良	(17.4)	7.0	(10.2)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	底、黄褐色・砂粒、貼付高台 含む	



No.	目録	種別	出土 遺構	層位	発見率 (%)	色調	構成	口径 (cm)	器高 (cm)	線径 (cm)	調製			胎土	その他
											外蓋	内蓋	底部		
681	杯	土師器	S28	結床中	60	にぶい 黄緑	良	(13.8)	4.8	6.0	上段：回転ナデ、下 段：旋削ヘラケズリ	ミガキ	糸切り	褐色	内面黒色地埋
682	杯	土師器	S28	結床中	60	黄	良	14.2	4.8	6.8	回転ナデ	マメツ(ミガキ)	マメツ(糸切り)	褐色	内面黒色地埋
683	杯	土師器	S28	ビット9埋 土	50	にぶい 黄緑	良	(14.2)	4.7	6.4	回転ナデ	ミガキ	糸切り	やや黄	内面黒色地埋
684	杯	土師器	S28	埋土	30	淡黄緑	良	(15.6)	4.5		回転ナデ	マメツ(ミガキ)		黄	内面黒色地埋
685	杯	土師器	S28	埋土	45	にぶい 黄緑	良	(13.3)	4.9	(5.0)	口縁部：回転ナデ ノ下蓋：手持ちケ ズリ	口縁部：回転ナデ/ ノ下蓋：手持ちケ ズリ	マメツ(ヘラケ ズリ)	褐色、砂粒少量 C	内面黒色地埋
686	杯	土師器	S28	埋土	90	黄	良	14.6	4.2	7.3	回転ナデ、下蓋： マメツ(ヘラケズリ)	マメツ	マメツ(ヘラケ ズリ)	やや黄、砂粒少量 含む	内面黒色地埋
687	杯	土師器	S28	床面	25	にぶい 黄緑	良	(14.6)	4.5	(6.0)	回転ナデ	ミガキ	糸切り	褐色	内面黒色地埋
688	杯	土師器	S28	埋土	50	にぶい 黄緑	良	(17.6)	4.8		回転ナデ	横紋ミガキ		褐色、砂粒少量 含む	
689	杯	土師器	S28	結床中	10	にぶい 黄緑	良	3.3	(4.8)		回転ナデ	ミガキ		褐色	黒割7川、内面黒 色地埋
690	甕?	土師器	S28	埋土	28	黄緑	良	2.9	(5.0)		横紋ミガキ	マメツ(ミガキ)	砂意透刺織	褐色、砂粒含む	内外面黒色地埋
691	杯	青内黒	S28	埋土	10	にぶい 黄	良				回転ナデ	回転ナデ	褐色	黒割	黒割あり
693	杯	土師器	S28	下層～床面	100	黄	良	14.3	6.1	8.4	回転ナデ	マメツ	糸切り	黄、砂粒含む	内面黒色地埋
692	高台 杯	土師器	S28	埋土	95	黄	良	13.8	4.3	6.2	マメツ(回転ナデ)	マメツ(ミガキ)	マメツ	黄、砂粒含む	内面黒色地埋、結 付高台
693	高台 杯	土師器	S28	結床中	85	にぶい 黄緑	良	13.9	3.5	(5.8)	回転ナデ	ミガキ	糸切り	褐色、φ1mm砂粒 含む	結付高台?
694	皿?	土師器	S28	結床中	18	淡黄緑	良好	(13.5)	1.9		回転ナデ	ミガキ		褐色	内面黒色地埋
695	杯	青内黒	S28	埋土	90	淡黄	やや黄	14.2	4.8	5	マメツ(回転ナデ)	マメツ(回転ナ マメツ デ)		やや黄、φ1~3mm 砂粒含む	
696	杯	青内黒	S28	ビット10 埋土	60	淡黄緑	良	(14.4)	5.1	5.8	上位：回転ナデ(マ メツ)/下蓋：マメ ツ(ヘラケズリ?)	マメツ(回転ナ 糸切り デ)		黄、砂粒少量含む	
697	杯	青内黒	S28	結床中	38	黄緑	良	(14.1)	5.9	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り(マメツ)	黄、砂粒・赤色ス コリヤ含む	
698	杯	青内黒	S28	結床中	26	淡黄緑	やや黄	(13.8)	6.2	(4.7)	回転ナデ	マメツ	糸切り	褐色	
699	杯	青内黒	S28	埋土	50	淡黄緑	良	(13.8)	4.8	6.8	回転ナデ	横紋ミガキ/黄泥 ナデ	糸切り	褐色	
700	杯	青内黒	S28	結床中	50	淡黄緑	やや黄	(13.5)	5.0	(5.1)	回転ナデ	マメツ(回転ナ マメツ デ)		黄、砂粒含む	内外面黒付帯
701	杯	青内黒	S28	埋土	50	淡黄緑	良	(15.6)	4.3	(5.7)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色、砂粒少量 含む	
702	杯	青内黒	S28	埋土	30	淡黄緑	やや黄	(13.5)	4.2	(6.0)	回転ナデ(マメツ)	マメツ(回転ナ デ)		黄	
703	杯	青内黒	S28	埋土	80	淡黄緑	やや不 良	(13.5)	6.2	(5.5)	マメツ：回転ナデ マメツ：回転ナ デ	マメツ：糸切り マメツ	黄、φ1mm砂粒含む・ 赤色スコリヤ少量含む	黄、砂粒少量、赤 色スコリヤ少量含む	黄泥?、陶器?
704	杯	青内黒	S28	結床or 上層	75	黄緑	やや黄	(15.6)	5.4	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	黄	
705	杯	淡部器	S28	結床中	30	灰白	良好	(13.8)	4.5		回転ナデ	回転ナデ		褐色	
706	杯	淡部器	S28	ビット4 埋土	30	灰白	良好	(14.2)	3.7	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	褐色、砂粒少量 含む	
707	杯	淡部器	S28	結床中	20	灰白	良	(14.6)	4.2		回転ナデ	回転ナデ		褐色	
708	杯	淡部器	S28	埋土	70	灰白	軟	15.6	6.1	6.2	マメツ(回転ナデ)	マメツ(回転ナ マメツ デ)		褐色	
709	耳皿 ?	土師器	S28	埋土	10	黄	良		2.4	(4.8)	上部：指オケギ、 下部：横紋ミガキ		回転糸切り	黄、φ2~3mm砂 粒含む	回転力弱
710	皿	土師器	S28	結床中	15	にぶい 黄	良	(14.4)	9.0		口縁部：ヨコナデ ノ下蓋：マメツ(横 紋・横紋ハケメ)	口縁部：ヨコナ ノ下蓋：マメツ(横 紋・横紋ハケメ)		黄、砂粒少量・赤 色スコリヤ少量 含む	
711	皿	土師器	S28	埋土	20	黄	良	(16.0)	6.3		口縁部：ヨコナデ/横 紋：マメツ(横紋ハ ケメ)ノ下蓋：マメ ツ(ヘラケズリ?) ノ下蓋：横紋ナ デ	口縁部：ヨコナ ノ下蓋：マメツ(横 紋ハケメ)		黄、砂粒少量含む	
712	皿	土師器	S28	結床中	40	明黄緑	良	(15.6)	7.8		口縁部：ヨコナデ ノ下蓋：マメツ(横 紋ハケメ)	口縁部：ヨコナ ノ下蓋：マメツ(横 紋ハケメ)		黄、砂粒少量含む	

地 区 種 別	種 別	土 質 通 稱	層 位	粘 土 含 率 (%)	色 調	結 核	口 径 (cm)	粒 径 (mm)	調 製			土 質	其 他
									内 質	外 質	造 形		
713	黄	土砂層	S126	粘土	40 に近い 黄		(10.4)	6.9	口縁部:ヨコナデ /体部:マメツ(層 状・斜位ハケメ)	口縁部:ヨコナ デ/体部:横位 ヘラナデ	赤切り	黄、砂粒多量 含む	
714	黄	土砂層	S126	粘土	40 淡黄	黄	(12.8)	8.0	口縁部:ヨコナデ /体部:マメツ	口縁部:ヨコナデ/ 体部:斜位・横位ヘ ラナデヨコナデ	赤切り	黄、砂粒含む、赤 色スコリア含む	
715	黄	土砂層	S126	粘土	30 灰白にふ い調	良好		8.7 (8.2)	同前ナデ	同前ナデ	赤切り	やや黄、砂粒やや 多く含む	
716	黄	土砂層	S126	粘土	40 淡黄緑	やや不 良		5.0 5.8	マメツ(層状ナデ?)	マメツ(同前ナ デ)	赤切り(停止?)	黄、φ2~3mm砂 粒多く含む、赤色 スコリア含む	
717	黄	土砂層	S126	粘土	20 黄	良	(11.4)	3.0	口縁部:ヨコナデ /体部:マメツ	マメツ		黄褐色、白色砂粒 含む	
718	黄	土砂層	S126	粘土	20 淡黄	良	(8.0)	3.1	口縁部:ヨコナデ /体部:マメツ (層状ハケメ)	マメツ		黄、φ1~2mm砂 粒含む	
719	黄	土砂層	S126	粘土	20 淡黄	やや不 良	(31.8)	11.2	口縁部:ヨコナデ /体部:マメツ/体部:横位ハケ (層状ナデ?)	口縁部:ヨコナデ /体部:横位ハケ メ/体部:マメツ		やや黄、φ2~3mm 砂粒多量含む、赤色 スコリア少量含む	
720	黄	土砂層	S126	粘土	40 黄	良	(22.7)	6.2	同前ナデ	同前ナデ		やや黄	
721	黄	土砂層	S126	ビット1 粘土	20 に近い 黄緑	良	(25.0)	5.9	同前ナデ	同前ナデ		黄褐色、砂粒少量 含む	
722	黄	土砂層	S126	粘土	15 灰黄褐色	良	(22.8)	5.6	同前ナデ	同前ナデ		黄、砂粒含む	
723	黄	土砂層	S126	粘土	40 に近い 黄緑	良	(19.7)	19.8	口縁部:ヨコナデ /体部:同前ナデ/体部:斜位・横位 ハケメ	口縁部:ヨコナ デ/体部:同前ナ デ		やや黄、φ1~2 mm砂粒多量・赤色 スコリア少量含む	
724	黄	埋戻層	S126	床面	15 灰 黄緑	良好	(23.0)	8.8	口縁部:同前ナデ /下部タタキ	口縁部:同前ナデ /下部高尾		黄、白色砂粒多量 含む	
725	黄	埋戻層	S126	床面	80 雑灰	良好	(13.0)	13.2 (8.7)	同前ナデ	同前ナデ	ナデ:同前部: 黄 砂?	黄褐色、赤白砂粒 少量含む	
726	黄	埋戻層	S126	粘土	40 雑灰	良好	(11.8)	6.1	同前ナデ	同前ナデ		黄褐色、赤白砂粒 少量含む	
727	黄	埋戻層	S126	粘土	雑灰	良好		12.9 (10.3)	層状・斜位ヘラナ デ	層状ヘラナ デ	ナデ or 黄褐色な し	黄褐色、砂粒少量 含む	
728	黄	埋戻層	S126	粘土	70 灰	良好		11.2 9.3	同前ナデ	同前ナデ	赤切り	黄褐色、砂粒少量 含む	自然物(腐植?) 含む
729	黄	埋戻層	S126	粘土	19 灰	良好		5.2 (7.0)	同前ナデ/下部 や	同前ナデ	赤切り	黄褐色	
730	黄	埋戻層	S126	粘土	70 灰	良好		13.2 5.7	同前ナデ	同前ナデ	ナデ:オオヤエ、黄 褐色部:同前ナ デ	黄、赤白砂粒 少量含む	
731	黄	埋戻層	S126	ビット粘土	80 雑灰	良	20.9	34.5 10.7	口縁部-一部上部:黄 口縁部-一部上部: 同前ナデ/体部:同前ナ デ/体部:同前ナ デ/体部:同前ナ デ	口縁部-一部上部: 同前ナデ/体部: 同前ナデ/体部: 同前ナデ	ナデ	黄、赤白砂粒 少量含む	
732	灰	土砂層	S126B	下層	40 淡黄緑	良	(13.2)	5.2 (5.7)	同前ナデ/下 部:エガキ	同前ナ デ/下 部:エガキ	赤切り、同前部: 同前ナ デ	黄、砂粒少量含む 含む	内面黒色粘 土
733	灰	土砂層	S126B	上層	80 黄	良	(14.0)	4.2 3.8	同前ナデ/下 部:エガキ	同前ナ デ/下 部:エガキ	ヘラ切り?	黄、φ1~2mm砂 粒含む	内面黒色粘 土
734	高台 砂	土砂層	S126B	床面	20 灰白	良		3.3 7.7	同前ナデ(マメツ)	マメツ(エガキ)		黄、砂粒少量含む 含む	内面黒色粘 土、粘 付高台
735	高台 砂	土砂層	S126B	中層	19 に近い 黄緑	良		1.9 (7.2)	ナデ	マメツ	マメツ(菊花 状、砂、砂粒多量 含む)	黄、砂粒多量含む 含む	内面黒色粘 土
736	高台 砂	土砂層	S126B	床面	18 黄褐色	良好	(7.8)	7.0 6.1	エガキ	エガキ		黄、砂粒少量含む 含む	内面黒色粘 土、粘 付高台
737	灰	非内質	S126B	上層~下層	80 雑 黄	やや軟	(14.8)	4.9 7.3	同前ナデ	同前ナ デ	赤切り	やや黄、砂粒含む	
738	灰	非内質	S126B	中層	25 淡黄緑	良	(14.8)	4.8	同前ナデ	同前ナ デ		黄、φ1~2mm砂 粒含む	
739	灰	非内質	S126B	床面	100 黄	良	13.4	5.7 5.8	同前ナデ	同前ナ デ	赤切り	黄、φ1mm砂粒 多量含む	
740	灰	非内質	S126B	中層	90 淡黄緑	やや軟	13.1	5.2 5.2	同前ナデ	同前ナ デ	赤切り	黄褐色	
741	灰	非内質	S126B	一括	100 黄	良	13.3	5.2 5.7	同前ナデ	同前ナ デ	赤切り	黄、砂粒多量 含む	
742	灰	非内質	S126B	中層	20 黄		(13.0)	5.2 (5.5)	マメツ(同前ナ デ)	マメツ(同前ナ デ)		黄、白色砂粒含む	
743	灰	非内質	S126B	上層	80 雑 黄	やや軟	(13.8)	4.5 (5.8)	同前ナデ	同前ナ デ	赤切り	黄、φ1mm砂粒 少量含む	

No.	品種	土質	厚さ	積厚率 (%)	色相	構成	口径 (cm)	容高 (cm)	底径 (cm)	調査			土質	その他	
										外面	内面	底部			
744	杯	須原砂	S200	中層	90	純灰 ～黄 (赤い)	真	13.6	4.3~4.15	5.2	回転ナデ	回転ナデ	赤切り		
745	杯	須原砂	S200	中層～下層	10	灰	真好	18.0	4.7		回転ナデ	回転ナデ	赤切り	褐色	
746	壺	土砂等	S200	中層	10	灰黄褐色	真	(14.1)	5.1		回転ナデ	回転ナデ	赤切り	やや粗	
747	壺	土砂等	S200	上層	40	黄	真	8.8	(7.1)		回転ナデ	回転ナデ	赤切り	粗、砂粒多量含む	
748	壺	土砂等	S200	中層	50	淡黄褐色	真	15.3	15.7	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	やや粗、砂粒含む	
749	壺	土砂等	S200	中層	25	にぶい 黄褐色	やや軟	(22.2)	8.8		マメツ	マメツ		やや粗、砂粒多量含む	
750	壺	土砂等	S200	下層	30	黄	真	(21.8)	8.6		口縁部～体部：目 転ナデ/体部：雑 土/体部：機土・ 位ヘラケズリ	口縁部：回転ナ デ/体部：機土・ 斜位ヘラケズリ		粗、砂粒多量含む	
751	壺	土砂等	S200	中層	10	にぶい 黄褐色	真	(20.8)	8.2		回転ナデ	回転ナデ		やや粗、砂粒多量含む	
752	壺	土砂等	S200	上層	40	にぶい 黄褐色	真	(22.0)	7.8		回転ナデ	マメツ (回転ナ デ)		粗、φ2～3mm砂 粒含む	
753	壺	土砂等	S200	上層	10	にぶい 黄褐色	真	24.0	5.4		回転ナデ	マメツ (回転ナ デ)		やや粗、砂粒含む	
754	壺	土砂等	S200	中～上層	30	黄	真	(22.0)	12.8		回転ナデ	回転ナデ		粗、φ1～2mm砂 粒多量含む	
756	壺	雑土	S200	一帯	20		真	(14.2)							
758	壺	土砂等	S200	上層	20	にぶい 黄褐色	真	(10.5)	5.9		回転ナデ	回転ナデ		粗、砂粒含む	
757	壺	土砂等	S200	上層	15	淡黄	真	(7.7)	4.2		回転ナデ	回転ナデ		粗、φ1mm砂粒少 量含む、赤色スコ リヤク多量含む	
759	壺	須原砂	S200	床面	10	灰白	真好		8.7	11.0	回転ナデ	横位ヘラケズリ	褐色	タタキの痕跡残る	
760	長楕 形	須原砂	S200	上～中層	60	純灰	真好 紫褐色	(13.9)	23.3	12.0	底部～上部：回転 ナデ/下部：機土 回転ヘラケズリ	底部：回転ナデ 赤切り、機土 ナデ	褐色	赤り付く実等	
760	壺	土砂等	S200	床面	20	にぶい 黄褐色	真	(36.2)	11.1		回転ナデ	ハケメ		やや粗	赤げあり
761	壺	土砂等	S200	中層	10	淡黄褐色	真	(36.2)	9.2		口縁部～体部：目 転ナデ/体部：雑 土/上部：ナデ 位ヘラケズリ	口縁部：回転ナ デ/下部：機土 /下部：ハケメ		粗、砂粒含む	
762	壺	土砂等	S200	床面	80	黄	真	41.1	13.8		口縁部～上部：回転 ナデ/下部：機土 位ヘラケズリ	口縁部～上部：目 転ナデ/下部：機 土/中部～体部：タ タキ		やや粗、砂粒多量、薄くスス付 含む	
763	壺	土砂等	S200	一帯	10	淡黄褐色					回転ナデ	横位ミガキ	赤		
764	壺	土砂等	S200	一帯	10	黄褐色		(23.8)			回転ナデ	横位ミガキ	赤	やや粗	
765	耳皿	真黒	S200	中層	50	真黒		14	5.0		内外真黒色処理		赤		
772	杯	赤内黒	S27	転成中	20	にぶい 黄褐色	真	(13.8)	4.5		マメツ (回転ナ デ)	マメツ (回転ナ デ)		褐色	
773	杯	土砂等	S20	ビット1 層土	100	黄	真好	13.9	5.2	5.7	回転ナデ	ミガキ	赤切り	褐色	内面黒色処理
774	杯	土砂等	S20	ビット1 層土	60	にぶい 黄褐色	真	13.8	5.3	5.8	回転ナデ	ミガキ/表面：マ メツ (赤切り) 赤切り	褐色、φ1mm砂粒 含む	内面黒色処理	
775	杯	土砂等	S20	ビット1 層土	25	にぶい 黄褐色	真	(13.7)	4.2	(5.2)	回転ナデ	マメツ (ミガキ)	赤切り	褐色、砂粒多量含む 内面黒色処理？ 含む	
776	杯	土砂等	S20	カマド層土	40	にぶい 黄褐色	真	(14.0)	4.5		回転ナデ	ミガキ		粗、砂粒少量含む 内面黒色処理	
777	杯	土砂等	S20	層土	40	淡黄褐色	真	(14.0)	4.8	(4.8)	回転ナデ(マメツ)	ミガキ	赤切り、機土？ 赤色スコリヤク多 量含む(ヘラケズリ?)	褐色、φ1～3mm砂粒 含む	内面黒色処理
778	杯	土砂等	S20	ビット1 層土	30	にぶい 黄褐色	真	(15.0)	5.3	(5.8)	回転ナデ/下部： ヘラケズリ	ミガキ(横位状)		褐色	内面黒色処理
779	杯	土砂等	S20	カマド層土	40	にぶい 黄褐色	真	(15.0)	5.5	(6.0)	回転ナデ/下部： ヘラケズリ	ミガキ		粗、白色砂粒含む 内面黒色処理	
780	杯	土砂等	S20	層土	40	にぶい 黄褐色	真	(14.4)	5.1	(6.0)	回転ナデ/下部： マメツ	ミガキ(ミガキ) ヘラケズリ真黒 色？		やや粗、砂粒多量 含む	内面黒色処理
781	杯	土砂等	S20	層土	70	にぶい 黄褐色	真	14.4	4.4	6.5	回転ナデ	上部：横位ミガキ/ 下部：機土/赤 切り	赤切り	やや粗、砂粒含む 内面黒色処理	
782	杯	土砂等	S20	ビット1 層土	100	淡黄褐色	やや軟	15.3	5.3	6.5	回転ナデ	マメツ	赤切り	褐色、砂粒含む 内面黒色処理	
783	杯	赤内黒	S20	カマド層土	10	にぶい 黄褐色	真	(13.8)	4.5	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ	赤切り	褐色	

試 験 種 別	種 別	出土 深層	単位	含水率 (%)	色別	構成	口徑 (mm)	容積 (cm)	密度 (g/cm <sup>3</sup> )	調整		形状	粘土	その他	
										外置	内置				
764	杯	赤内風	S28	中層	にぶい 黄	頁	(14.0)	3.0	回転ナデ	回転ナデ		腐青	石膏[上]		
765	杯	赤内風?	S28	ビット1 硬土	60	硬	頁	(14.0)	3.0	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	腐青	
766	杯	赤内風	S28	ビット1 硬土	20	硬	頁	(14.4)	4.2		回転ナデ	回転ナデ		腐青	
767	杯	赤内風	S28	ビット1 硬土	100	灰白	頁砂	15.5	5.1	6.1	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	黄、φ1~2mm砂、硬質粘土? 粘土心	
768	杯	赤内風	S28	ビット1 硬土		にぶい 黄緑	頁		3.9	6.0	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	腐青	
769	杯	深層部	S28	ビット2 硬土	15	灰	頁砂	(13.2)	3.6	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	腐青	
770	高台 杯	土降部	S28	ビット1 硬土	60	にぶい 黄	頁砂	(15.2)	6.6	9.1	回転ナデ	上段:横紋ヒガキ/ 下段:横紋ヒガキ	糸切り	腐青、砂粘土心	内面黒色処理、粘 土高台
771	高台 杯	土降部	S28	ビット1 硬土	100	にぶい 黄緑	頁	15.2	6.0	8.0	回転ナデ	ヒガキ(マメツ)	マメツ、調整部	黄、砂粘土多量含む	内面黒色処理、粘 土高台
772	鉢?	土降部	S28	硬土		にぶい 黄緑	頁		2.0	(5.0)	ケズリ	マメツ(ヒガキ)	砂置?	黄、砂粘土多量含む	
773	皿	土降部	S28	ビット1 硬土	20	硬	頁	(14.0)	3.1		調整部:ヨコナデ/各 部:縦紋ハケメ	調整部:ヨコナデ/ 各部:縦紋ハラナデ		黄、φ2~3mm砂 粘土多量含む	
774	皿	土降部	S28	硬土	40	硬	頁	(20.0)	8.1		調整部:ヨコナデ /各部:マメツ	調整部:ヨコナデ /各部:マメツ		やや硬、砂粘土多 量含む	
775	皿	土降部	S28	硬土	30	硬	頁		5.6	7.2	マメツ/下段:ケ ズリ?	調整ナデ	糸切り	黄	
776	皿	土降部	S28	硬土	30	にぶい 黄緑	やや軟	(29.0)	3.1		調整部:ヨコナデ /各部:マメツ (横紋ハラナデ)	各部:マメツ (横紋ハラナデ)		腐青、砂粘土心	
787	皿?	土降部	S28	旧カマド 硬土	10	にぶい 黄	頁		4.7	(12.0)	調整ハラナデ	調整部:縦紋厚	やや硬、砂粘土 皿? 含む		
788	皿	土降部	S28	硬土	10	硬	頁		10.4	(9.3)	上段:マメツ(縦紋 ハラナデ)/下段: 横紋ハラナデ	調整ハラナデ	マメツ	やや硬、砂粘土多 量含む	
789	杯	赤内風	S29	ビット1 硬土	60	硬	頁	13.8	5.2	6.5	調整ナデ	調整ナデ	糸切り	黄、砂粘土心	
800	杯	深層部	S29	ビット2 硬土	60	灰黄	頁	15.1	4.9	5.4	調整ナデ	調整ナデ	糸切り	腐青、砂粘土心	
801	杯	土降部	S30	ビット1 硬土	50	硬	頁	(14.0)	4.1	7.0	調整ナデ/下段: 調整ハラナデ	ヒガキ	マメツ	調整、砂粘土多量含む	内面黒色処理 心
802	杯	土降部	S30	ビット1 硬土	80	灰黄緑	頁	14.2	5.2	6.5	調整ナデ	ヒガキ	糸切り	腐青	内面黒色処理
803	杯	土降部	S30	ビット1 硬土	60	にぶい 黄	頁	(14.2)	4.8	6.4	調整ナデ/下段: ハラナデ	マメツ(ヒガキ)	ハラナデ再調整	腐青	内面黒色処理
804	杯	土降部	S30	硬土	70	硬	やや 不頁	14.4	4.9	6.3	調整ナデ	マメツ/調整部: 調整ヒガキ	調整糸切り	黄、φ1mm砂粒少 量含む、赤色スコ ロ腐青、 リヤ少量含む	
805	杯	赤内風	S30	ビット1 硬土	60	にぶい 黄	やや軟	(13.8)	4.8	6.8	調整ナデ	調整ナデ	糸切り	腐青	
806	杯	赤内風	S30	深層部	100	にぶい 黄	頁	14.7	5.4	6.0	調整ナデ	調整ナデ	糸切り	黄、砂粘土多量含む	
807	皿	土降部	S30	ビット1 硬土	25	硬	やや軟	(12.8)	5.1		調整部:ヨコナデ /各部:横紋 ハラナデ	調整部:ヨコナ デ/各部:横紋 ハラナデ		黄、砂粘土心	
808	皿	土降部	S30	ビット1 硬土	20	洗練後	頁	(10.8)	7.3		調整部:ヨコナデ /各部:横紋ハ ケメ	調整部:ヨコナ デ/各部:横紋 ハラナデ		やや硬	
809	皿	土降部	S30	ビット1 硬土	60	にぶい 黄緑	頁	7.3	4.7	3.8	調整部:ヨコナデ/ 各部:縦紋ナ デ	調整部:ヨコナ デ/各部:縦紋 ハラナデ		やや硬、φ1mm砂 粘土多量含む	
810	皿	土降部	S30	硬土	10	にぶい 黄緑	頁	(8.0)	4.1		調整部:ヨコナデ /各部:マメツ	調整部:ヨコナ デ/各部:マメツ		黄、砂粘土多量含む	ニチュア土器
811	皿	土降部	S30	ビット1 硬土	20	洗練後	頁	(8.0)	3.0		調整部:ヨコナデ/ 各部:マメツ	調整部:ヨコナ デ/各部:マメツ		やや硬、2mm砂 粘土多量含む	
812	皿	深層部	S30	ビット1 硬土	40	地灰	頁砂	(5.1)	10.4		調整ナデ	上段:ナデ、下 段:調整ナデ		黄、砂粘土少 量含む	
813	皿	土降部	S30	旧カマド 硬土	20	洗練後	頁	(33.1)	7.9		調整部-調整部:黄 粘土ナデ	調整ナデ		黄、φ1mm砂粒多 量含む	内面黒色処理

No.	器種	種別	出土 遺構	層位	瓦片率 (%)	色相	焼成	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調査			出土	その他
											外周	内面	底部		
815	杯	土師器	S19	ビット1 埴土	50	にぶい	真	(13.0)	4.7	(7.0)	回転ナデ/下位: 回転ヘラケズリ	マメフ(ミガキ)	糸切り	やや粗、砂粒少量	内面黒色地埋
816	杯	非内黒	S19	ビット1 埴土	70	淡黄褐色	やや軟	(14.4)	8.0	5.8	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密	
817	杯	非内黒	S19	下層	65	淡黄褐色	やや軟	(14.8)	8.3	(8.0)	マメフ(回転ナデ)	マメフ(回転ナ デ)		密、赤色スコリヤ 含む	
818	高台 杯	土師器	S19	ビット1 埴土	50	黄褐色	やや軟		2.1	7.8	回転ナデ	マメフ	糸切り	密、白色粒粒・赤 色スコリヤ含む	内面黒色地埋、結 色スコリヤ含む
819	壺	土師器	S19	ビット1 埴土	10	淡黄	真	(21.8)	4.3		回転ナデ	回転ナ デ		密、φ1~3mm程度、 赤色スコリヤ含む	
820	鉢・ 罎?	土師器	S19	ビット1 埴土	18	にぶい 黄褐色	真	(25.2)	7.2		回転ナデ/一部破 欠ヘラケズリ	口縁部一部破: 回転ナデ/縁部: 横紋ハケメ		やや粗、砂粒含む	内面上位:コゲ付 着
821	壺	土師器	S19	ビット1 埴土	20	にぶい 黄	真	(24.8)	20.8		口縁部:回転ナデ、口縁部:回転ナデ/ 体部:マメフ(新 縁部:斜紋・横紋ハ ケヘラケズリ)	口縁部一部破: 回転ナデ/縁部: 横紋ハケメ		密、砂粒含む	
822	壺	須恵器	S19	ビット1 埴土	10	灰	良好		5.4		回転ナデ	回転ナデ		表面、φ1mm砂粒	表面:スス付塵 少量含む
829	杯	非内黒	SK04	埴土	100	黄褐色	良好	11.2	2.7	4.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密着	
830	高台 杯	非内黒	SK04	埴土	15	黄褐色	真		4.7	(7.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り?	やや粗、砂粒含む	貼付高台
831	杯	非内黒	SK04	埴土	40	橙	やや不 真	(18.0)	5.7	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密	
832	杯	非内黒	SK04	埴土	80	橙	やや軟	12.5	2.2	5.4	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密、中砂粒含む	
833	高台 杯	土師器	SK04	埴土	10	淡黄褐色	真		2.0	(6.0)	ミガキ	マメフ		密着	内面黒色地埋・貼 付高台
834	杯	非内黒	SK04	埴土	50	にぶい 黄褐色	やや軟	(10.9)	3.5	(5.3)	回転ナデ	マメフ	糸切り	密、中砂粒少量含 む	
835	高台 杯	非内黒	SK04	埴土	10	淡黄褐色	真		2.4	(8.8)	マメフ(8コナデ)	マメフ		密、粗砂少量含む、赤 色スコリヤ少量含む	貼付高台
836	杯	内黒	SK14	埴土	20	橙	真	(13.7)	4.8	6.8	回転ナデ/下位: 回転ヘラケズリ	マメフ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ (再調査)	密着	黒色地埋
837	壺	土師器	SK06	埴土	80	黄褐色	やや真	14.4	12.5	7.7	口縁部:回転ナデ/体 部:斜紋・横紋ハケ メ	口縁部:3コナデ/体 部:斜紋・横紋ハケ メ		密、粒状含む、赤色 スコリヤ少量含む	
838	壺	土師器	SK06	上層	10	明黄褐色	真		5.0	(11.0)	マメフ(ケズリ)	ヘラナデ		密、粒状含む、赤色 スコリヤ少量含む	
839	杯	非内黒	SK21	埴土	80	淡黄褐色	やや軟	(13.5)	4.0	5.6	回転ナデ	回転ナデ	マメフ(糸切り)	密着	
840	杯	土師器	SK21	埴土	40	にぶい 黄褐色	良好	(17.2)	4.0	(7.2)	回転ナデ	マメフ(ミガキ)		密着	内面黒色地埋
841	杯	土師器	SK22	埴土	30	橙	真	(13.2)	4.6	5.4	回転ナデ	放射状ミガキ・ ヨコミガキ		密着、砂粒少量含 む	内面黒色地埋
842	高台 杯	非内黒	SK22	埴土	100	橙	良好	14.9	5.8	8.2	回転ナデ	回転ナデ	厚縁部ナデ張	不明	貼付高台
843	杯	内黒	SK22	埴土	35	にぶい 黄褐色	真	(13.2)	4.7	(5.6)	回転ナデ	マメフ(ミガキ)	糸切り	密着、砂粒大	黒色地埋
844	高台 杯	?	SK22	埴土	10	淡黄褐色	真		2.3	7.1	回転ナデ	回転ナデ		密着	
845	瓶	須恵器	SK22	埴土	20	黄褐色	真	(11.8)	3.6	(5.2)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	ヘラケズリ(再 調査)	密着、粗砂少量含 む	内面黒色地埋 (赤・白)含む
846	壺	土師器	SK22	埴土	20	にぶい 黄褐色	真	22.0	6.0		回転ナデ			やや粗、砂粒少量 含む	
847	壺	土師器	SK22	埴土	30	橙	真	(21.5)	18.9		口縁部~上部(部 破ナデ)、下部: 縦紋ヘラケズリ	回転ナデ		密、φ2~3mm砂 粒少量含む	
848	壺	土師器	SK22	埴土	15	明黄褐色	真	(15.6)	19.8		回転ナデ張ナデ	回転ナデ/下 部:マメフ(ナデ)		密、φ1~3mm砂 粒少量含む	
849	壺	土師器	SK23	埴土	30	にぶい 赤褐色	真	(20.2)	14.8		口縁部~上部(部 破ナデ)、下部: 縦紋ケズリ	回転ナデ		密	
850	杯	土師器	Pic 230	?	70	にぶい 橙	真	13.8	5.2	5.0	回転ナデ	放射状ヨコミガ キ	糸切り	密	内面黒色地埋
851	杯	非内黒	Pic 236	?	20	にぶい 黄褐色	真	(14.0)	4.8	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	糸切り	密、砂粒含む	
852	壺	土師器	Pic 238	埴土	20	黄褐色	真	(21.0)	12.3		回転ナデ	回転ナデ		やや粗、砂粒少量 含む	

No.	種類	種別	出土 遺構	層位	保存率 (%)	色相	組成	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎体		底面	胎土	その他
											外面	内面			
855	杯	青内黒	Plc 301	埋土	10	にぶい 黄	真	(13.2)	3.9	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	赤色り	紫、白色砂粒含む	
863	長瓶	須恵器	SO4	埋土	10	灰	真砂	7.3	9.9		斜紋・横紋ヘラケ	横紋・縦紋ヘラケ	輪花状押さへ・ 駝行ナデ		
866	壺	土師器	SD10	ヤブレンタ 302	10	にぶい 黄褐色	真	(11.4)	5.4		口縁部：ヨコナデ / 口縁部：ヨコナデ 体部：縦紋ヘラケ / 体部：マメツ			やや粗、砂粒含む	
867	壺	土師器	SD3 303	横出溝	20	黄褐色	真	(23.8)	11.8		回転ナデ	回転ナデ		粗密	
868	杯	土師器	遺構外	25	にぶい 黄褐色	真	(15.8)	5.7			回転ナデ	マメツ (2ガキ)		紫、赤色スコリヤ 内面黒色粘厚、赤 黒下段；黒灰あり	
869	杯	土師器	遺構外	20	にぶい 黄褐色	真砂	(15.0)				マメツ (回転ナデ)	マメツ (2ガキ)		粗密、砂粒少量 内面黒色粘厚	
870	杯	須恵器	遺構外	30	灰白	真砂	(13.4)	5.8	5.4		回転ナデ	回転ナデ	赤色り	粗密、細砂少量含 む	
871	高台 杯	土師器		50	黒褐色	真	(18.0)	7.4	(11.0)	マメツ (2ガキ) / マメツ (2ガキ) 高台部：縦紋2ガキ				粗密、細砂粒含む 内面黒色粘厚	
872	壺	土師器	遺構外	10	黄褐色	真	(11.2)				マメツ		やや粗		
873	壺	土師器	遺構外	40	にぶい 黄褐色	真	(19.6)	22.6			口縁部～上段 (縦紋) 回転ナデ 下/7等：縦紋ナデ			紫、砂粒少量含む	
874	壺	土師器	遺構外	20	にぶい 黄褐色	真	(22.6)	5.5			回転ナデ			やや粗	
875	壺	須恵器	表面	20	にぶい 赤褐色	真	(19.8)	4.1			回転ナデ	回転ナデ		粗密	
876	壺	須恵器	現代 井戸	30	赤灰	真	(30.0)				回転ナデ	回転ナデ	紫		
877	鉢	土師器	遺構外	15	にぶい 黄褐色	真	(36.3)	6.4			口縁部：ヨコナデ マメツ /体部：マメツ (縦紋ヘラケナデ)			やや粗	
878	瓶	灰胎 (C30)		10	灰白	真					ケズリ	回転ナデ		粗密	ハケあり
879	瓦蓋 ?	土師器	遺構外	T5	10	灰黄褐色	真	1.36	4.8				赤色り	粗密	
880	把手 付	土師器	遺構外		10	黄褐色									

第11表 境内Ⅱ遺跡陶磁器観察表

No.	器種名	遺構名	出土層位	口径	器高	底径	駝行・文様	産地	年代	備考
854	灰胎碗	Plc252	埋土上層	2.0				大塚相馬産		
861	陶器鉢中皿	SD01	上層	(13.0)	3.3	(4.7)	海浜風文文	大塚相馬産		やや黄色不真
862	陶器碗	SD01	上層	(10.8)	3.3			大塚相馬産		ワラ反縁
864	陶器鉢	SO06	埋土	2.9				大塚相馬産		ナマコ輪縁
865	陶器皿	SD01	中層	2.9	(4.5)			鹿津	大塚編年Ⅰ～Ⅱ期 16C～17C初期	ワラ反縁 黄色不真
881	壺	現代井戸跡	埋土	(25.1)	3.0			在池産		縁縁部ナマコワラ反縁し掛け
882	鉢	遺構外	斜面下灰褐色土層中	(10.5)	3.5	(4.9)		在池産	19C	相馬? (少し土黒い)
883	陶器丸皿	現代井戸跡	埋土	3.4	(4.8)			大塚相馬産	19C～	
884	陶器碗	現代井戸跡	埋土	(9.0)	4.7			在池産		相馬?
885	陶器碗	現代井戸跡	南端落ち込み	1.8	(3.9)			大塚相馬産	18C	
886	陶器弘貝具	表探		2.1				在池産		
887	灰胎	遺構外	斜面下灰褐色土層中	(7.5)	4.5			在池産?		反縁のちナマコ輪縁し掛け
888	陶器鉢	SD06	埋土	(13.3)	3.2	(5.5)		大塚相馬産	19C	やや黄色不真
889	陶器鉢	現代井戸跡	埋土	(16.3)	5.8	(7.7)		在池産		
890	陶器碗	遺構外		4.2	5.5			大塚相馬産	19C	
891		現代井戸跡	埋土							
892	陶器中皿	現代井戸跡	埋土	(13.4)	3.3	(4.5)	海浜風文文	大塚相馬産		
893	すり鉢	遺構外	斜面下	(18.2)	6.5			不明	19C中期以降	土黒い
894	すり鉢	遺構外		(24.0)	7.6			在池産	19前	
895	すり鉢	遺構外	灰褐色土層上	(30.0)	10.3			在池産	19C?	
896	すり鉢	遺構外	斜面下灰褐色土層中	(32.0)	13.0			不明	19C前～中期	在池産か
897	青磁碗	遺構外	B区北	2.0				鎌倉	15C	



No.	器種名	遺構名	出土層位	口径	器高	底径	絵付・文様	産地	年代	備考
888	織紋紅器	遺構外	斜面下	(4.8)	1.4	(1.3)		畿前	19世紀	大徳廟年V期
889	織紋紅器	遺構外	斜面下	4.5	1.3	1.3		畿前	19C前期	大徳廟年V期
900	織紋把ノ目輪紅器	現代井戸跡	埋土	2.4	(4.2)			畿前	18C後	大徳VI期
901	織紋丸瓶	遺構外	斜面下灰褐色土層中		5.4		野紙模範	不明		
902	織紋品	現代井戸跡	埋土	1.9	(8.0)		海浜風土文	在地産		
903	織紋丸瓶	現代井戸跡	埋土	(8.8)	1.8	(3.8)	意匠文	平清水		
904	織紋品	表層	上層		1.4	(4.8)	大文・ワツ文文?	畿前	19C中期以降	瀬戸?
905	織紋地中小杯	現代井戸跡	埋土	(8.1)	4.3	(3.5)	藤字体文	在地産	19C以降?	
906	色絵織紋丸瓶	遺構外	灰褐色土層土	(8.5)	4.3	(3.5)		不功		
907	平織紋丸瓶	現代井戸跡	埋土	(11.8)	4.1		意匠文	平清水		
908	織紋中皿	現代井戸跡	埋土	(14.4)	3.4	(9.2)	意匠文か海浜風土文	畿前	18C後	大徳廟年VI期
909	織紋品	表層	上層	(13.8)	2.1	(9.2)	意匠文か海浜風土文	畿前	18C後	大徳廟年VI期
910	織紋品	現代井戸跡	埋土	(14.1)	3.9	(8.0)	意匠文	畿前		
911	織紋品	遺構外	灰褐色土層土	(19.8)	4.9	(10.8)	五弁文・意匠文			コンニャク料
912	織紋輪花皿	現代井戸跡	埋土	(13.5)	4.1	(9.9)	意匠文	不明	18C?	

第12表 境内Ⅱ遺跡金属製品観察表

No.	器種名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
519	刀子	S01	中層	9.5	1.8	0.3	
553	鉋具	S03	中層	4.5	4.7	0.6	
562	鉄細杖	S07	表層	15.5	2.1	0.7	
565	鉄鎌	S09	粘着中	(8.1)	3.1	0.3	
569	刀子	S09	粘着中	(4.8)	2	0.3	
707	釘	S26	上層	(5.0)	0.5	0.5	
768	刀子	S26	上層	(4.6)	1.2	0.2	
769	刀子	S26	一拵	(7.3)	0.6	0.3	
770	刀子	S28 B	上層	(8.8)	1.6	0.4	
771	刀子	S28 B	上層	(12.4)	1.8	0.4	
824	刀子	S38	ビット1埋土	(11.2)	1.8	0.4	
825	キセル (木質部)	SK02	埋土		径0.7		(木質)
826	銅鏡	SK02	埋土	径2.4			聖徳天皇
827	銅鏡	SK02	埋土	径2.2			不明
828	銅鏡	SK02	埋土	径2.2			不明
830	銅鏡	SK02	埋土	不明			不明
921	銅鏡	S09付近	1層 (出土中)	径2.4			赤銅鏡

第13表 境内Ⅱ遺跡石器観察表

展覧No.	器種名	出土遺構	層位	長さ	幅	厚さ	備考
520	砥石	S01	表層	13.9	(4.5)	3.9	
551	砥石	S03	北東区 上層	(7.2)	(8.0)	8.1	
552	砥石	S03	北東区 上層	(7.9)	(12.2)	4.9	
570	穿孔石製品	S19	一拵	(8.0)	4.0	1.4	
540	砥石	S29	一拵	11.9	6.2	3.1	
823	砥石	S813	北東カド 下層位	12.4	8.5	2.7	
850	スクレイパー	SK06	上層 一拵	4.4	2.1	0.8	
857	削片	SK09	上層	9.9	6.2	1.5	
858	スクレイパー	SK09	上層	3.9	4.9	0.8	
859	リフレーク	SK09	上層	4.3	4.2	0.9	
860	石匙	GD03	埋土中	5.7	3.4	0.8	

第14表 堰向II遺跡 Pit 観察表

クワッド	番号	色調	土質	粘性	しまり	風入物	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	備考
A区	1	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	28	28	24	
A区	2	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	32	22	17	
A区	3	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	22	20	12.6	
A区	4	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	28	25	28	
A区	5	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	45	32	16.8	
A区	6	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	88	58	31.8	
A区	6	1:10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む	44	44	43.6	
A区	7	10YR3/1黒褐	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む				
A区	7	10YR2/2黒褐	粘質土	やや強	中	黄褐色土粒・炭化物少量含む	58	54	28.5	
A区	8	10YR3/3暗褐	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む、機土粒少量含む	62	58	45	
A区	9	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック多量含む	72	60	37	
A区	10	1:10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む	44	44	43.6	
A区	10	2:10YR3/1黒褐	粘質土	やや強	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む				
A区	11	1:10YR2/2黒褐	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを含む	48	42	34.6	
A区	11	2:10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック多量含む				
A区	12	10YR2/2黒褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック少量含む	58	48	48.5	
A区	13	10YR3/3暗褐	砂質土	やや弱	やや弱		38	38	36.2	
A区	14	1:10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土粒を含む	68	64	41.3	
A区	14	2:10YR3/3暗褐	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む				
A区	15	10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	43	42	34.8	
A区	16	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	40	40	27.8	
A区	17	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	48	44	16.1	
A区	18	10YR2/2黒褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック少量含む	22	21	18.2	
A区	19	1:10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	機土ブロック多量含む	50	45	28.5	
A区	19	2:10YR3/3暗褐	粘質土	中	中					
A区	20	10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや弱		(92)	52	30	
A区	21	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		30	24	28.8	
A区	22	1:10YR3/1黒褐	シルト	やや弱	中	黄褐色土ブロック少量含む	44	42	25.8	
A区	22	2:10YR4/6暗	砂質土	やや弱	中	暗褐色土ブロック少量含む				
A区	23	1:10YR3/1黒褐	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	30	32	
A区	23	2:10YR4/4暗	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック少量含む				
A区	24	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		28	22	18.2	
A区	24	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28	28	23.5	
A区	26	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		24	(14)	28.4	
A区	27	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		38	28	87.2	
A区	28	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34	20	58.2	
A区	29	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38	38	23.7	
A区	30	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	(22)	18	28.2	
B区	31	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		30	24	34.8	
B区	32	1:10YR4/1黒灰	砂質土	やや弱	やや弱		33	28	52	
B区	32	2:10YR4/1黒灰	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック含む				
B区	33	1:10YR2/3黒褐	砂質土	やや弱	やや弱		38	28	78.1	
B区	33	2:10YR2/3黒褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む				
B区	33	3:10YR2/3黒褐	砂質土	中	やや弱	黄褐色砂質土多量含む				
B区	34	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	28	24	28	
B区	35	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	33	28	32.4	
B区	36	1:10YR2/3黒褐	砂質土	やや弱	やや弱		32	28	42.3	
B区	36	2:10YR2/3黒褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック多量含む				
B区	37	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	56	50	23.1	
B区	38	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	27	24	18.2	
B区	39	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	20	20	22.5	
B区	40	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	26	24	46	
B区	41	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	24	22	26.7	
B区	42	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	32	30	37.8	
B区	43	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	24	22	21.3	
B区	44	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	40	32		
B区	45	10YR3/1黒褐	砂質土	中	やや弱	黄褐色90%に黒褐色10%のまじり	36	32	66	

グッド	番号	色紙	土質	特性	しまり	混入物	長軸(mm)	短軸(mm)	深さ(mm)	備考
0区	46	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30	25	44.7	
0区	47	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	42	30	52.1	
0区	47	1: 10YR2/2濃褐	砂質土	やや弱	弱	黄褐色砂質土ブロック少量含む	82	40	40.2	
	2: 10YR2/3濃褐	砂質土	やや弱	弱	黄褐色砂質土ブロック少量含む					
	3: 10YR2/3濃褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土多量含む					
0区	48	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	34	32	38.8	
0区	49	1: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	やや弱		24	22	39.9	
	2: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック多量含む					
0区	50	1: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	やや弱		32	30	53.4	
	2: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック多量含む					
0区	51	10YR2/2濃褐	粘質土	中	中		22	19	31	
0区	52	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	36	26	22.7	
0区	53	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30	28	33.2	
0区	54	1: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む、炭化物少	48	42	58.7	
	2: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	やや強	黄褐色砂質土ブロック含む、炭化物少					
	3: 10YR2/2濃褐	粘質土	中	やや強	黄褐色砂質土多量含む					
0区	55	10YR2/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28	26	22.4	
0区	56	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	30	28	29.9	
0区	57	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	40	26	44.2	
0区	58	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	30	52.3	
0区	59	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	58	48	56	
0区	60	10YR2/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	58	(20)	29.9	
0区	61	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	(80)	56	64.3	
0区	62	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	30	18	31.1	
0区	63	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	22	42.1	
0区	64	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	34	26	26.8	
0区	65	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		34	32	34.6	
0区	66	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		(80)	50	17.1	
0区	67	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	24	20	18.2	
0区	68	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	38	24	33.5	
0区	69	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	43	41	47.9	
0区	70	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	48	42	57.5	
0区	71	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	32	28	46.8	
0区	72	1: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む、機土粒少、炭化物少	(50)	40	76.7	
	2: 10YR2/3濃褐	砂質土	やや弱	弱	黄褐色砂質土ブロック少量含む					
	3: 10YR5/4暗褐	砂質土	やや弱	強	黄褐色砂質土ブロック少量含む					
0区	73	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	40	28	79.6	
0区	74	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	(50)	46	88.8	
0区	75	10YR3/1濃褐	砂質土	中	やや強	黄褐色土ブロックを多量含む	26	26	35.1	
0区	76	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		(22)	19	17.5	
0区	77	10YR2/2濃褐	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土ブロック少量含む	32	26	30.8	
0区	78	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	22	20	34.2	
0区	79	10YR2/3濃褐	砂質土	やや弱	やや強		26	24	26	
0区	80	10YR2/3濃褐	砂質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック、炭化物少量含む	(32)	24	16	
0区	81	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	28	21	27.7	
0区	82	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量含む	38	36	37.9	
0区	83	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	22	22	31.5	
0区	84	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	52	58	43	
0区	85	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	28	29.2	
0区	86	10YR3/1濃褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28	22	42.7	
0区	87	10YR4/3に1Y黄褐	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	44	42	68.1	
0区	88	10YR2/2濃褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土ブロック含む	46	32	50.1	
0区	89	10YR3/3暗褐	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土ブロック含む	(80)	64	40.1	
0区	90	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	82	42	65.2	
0区	91	1: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック含む、黄褐色粘質土ブロック少量含む	68	54	75.7	
	2: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む					
	3: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	強	黄褐色砂質土ブロック多量含む					

グッド	番号	色相	土質	粘性	しまり	混入物	長軸 (cm) 短軸 (cm) 厚さ (cm)	備考
日区	82	10YR4/1補灰	砂質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	40 30 42.4	
日区	83	10YR3/3補焼	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む	48 38 53.3	
日区	84	10YR3/3補焼	粘質土	中	中		35 34 36.6	
日区	85	10YR3/3補焼	粘質土	中	中		30 24 23.5	
日区	86	1: 10YR3/3補焼 2: 10YR3/3補焼	粘質土	中	中		54 44 75.9	
		3: 10YR5/8黄褐	砂質土	やや弱	強	暗褐色土ブロック少量含む		
日区	87	10YR4/1補灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34 (28) 25.4	
日区	88	10YR3/2黄褐	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロック含む	(50) 54 60.5	
日区	89	10YR4/1補灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	26 24 23.3	
日区	100	1: 10YR2/2黄褐 2: 10YR2/2黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	30 34 51.6	
		粘質土	中	強	黄褐色土ブロック多量含む			
日区	101	10YR4/1補灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	32 26 31.8	
日区	102	1: 10YR2/2黄褐 2: 10YR2/2黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	(50) 48 48.5	
		粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック含む			
日区	103	10YR4/3(2)黄褐	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む		
		1: 10YR3/1黄褐	粘質土	中	やや強	黄土状少量含む	42 28 52.6	
		2: 10YR4/2灰黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック多量含む		
		3: 10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土塊少量含む		
日区	105	10YR2/2黄褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む	32 20 56.6	
日区	106	10YR3/3補焼	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土ブロック含む	72 57 76	
日区	107	1: 10YR3/3補焼 2: 10YR3/3補焼	粘質土	中	中		30 33 46.8	
		粘質土	中	やや強	黄褐色砂質土含む			
日区	108	10YR3/3補焼	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	26 24 26	
日区	109	10YR4/3(2)黄褐	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	32 26 47.7	
日区	110	10YR3/3補焼	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	34 28 53.2	
日区	111	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30 28 42.7	
日区	112	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	40 36 34.4	
日区	113	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	32 20 56.7	
日区	114	1: 10Y2/2黄褐 2: 10YR2/2黄褐	砂質土	弱	やや弱	黄褐色砂質土ブロック少量含む	48 48 48.2	
		砂質土	弱	中	黄褐色砂質土ブロック多量含む			
日区	115	1: 10YR3/1黄褐 2: 10YR4/2灰黄褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック塊少量含む	26 (26) 32	
		粘質土	中	中	黄褐色土ブロック多量含む			
日区	116	10YR4/2灰黄褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	52 43 48.9	
日区	117	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	(40) 36 61.3	
日区	118	10YR4/1補灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30 24 74.9	
日区	119	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	36 36 37	
日区	120	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	80 34 82	
日区	121	1: 10YR2/2黄褐 2: 10YR2/2黄褐 3: 10YR2/2黄褐	粘質土	中	中		32 29 42.4	
		粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック含む			
		粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む			
日区	122	10YR4/1補灰	粘質土	中	中		40 38 27.1	
日区	123	1: 10YR3/1黄褐 2: 10YR3/1黄褐	粘質土	中	やや弱		32 28 56.1	
		粘質土	中	やや強	黄褐色砂質土ブロック含む			
日区	124	10YR3/3補焼	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	28 26 70.5	
日区	125	10YR4/1補灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	32 28 29.4	
日区	126	1: 10YR2/2黄褐 2: 10YR2/2黄褐	砂質土	やや弱	やや弱		40 30 46	
		砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土ブロック含む			
日区	127	10YR2/2黄褐	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土ブロック多量含む	32 28 29.6	
日区	128	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28 24 48.8	
日区	129	1: 10YR4/1補灰 2: 10YR3/3補焼	砂質土	やや弱	やや弱		32 32 40.5	
		砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む			
日区	130	10YR2/2黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34 26 33.4	
日区	131	10YR3/3補焼	砂質土	やや弱	中	黄褐色砂質土多量含む	(22) 15 27.5	
日区	132	10YR4/1補灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34 34 66	
日区	133	10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	44 38 48.5	
日区	134	1: 10YR3/1黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	60 30 53.5	

グリッド	番号	色調	土質	粘性	しまり	混入物	長軸 (cm) 短軸 (cm) 深さ (cm)	備考
		2: 10YR3/1黒褐	砂質土	中	やや弱	黄褐色30%に黄褐色10%のまじり		
B区	136	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	48	40 61.9
B区	138	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28	28 17.3
B区	137	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	32	28 38.7
B区	139	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックを少量含む	32	32 44.6
B区	139	1: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロックを少量含む	68	54 41.8
		2: 10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック・粘土粒少量含む		
		3: 10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む		
B区	140	10YR4/1褐灰	粘質土	やや弱	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30	28 41.6
B区	141	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		28	24 23
B区	142	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	48	34 43
B区	143	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	38	28 38.5
B区	144	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28	24 28.2
B区	146	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	48	44 35.4
B区	148	10YR3/2暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38	38 12.1
B区	147	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	30 36
B区	148	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	58	58 69.9
B区	149	1: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		38	30 33.3
		2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや弱			
		3: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック含む	(24)	30 28.3
B区	150	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	31 43.1
B区	151	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	40	38 58.4
B区	152	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	30 27.3
B区	153	10YR2/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	82	48 66.2
B区	155	1: 10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック極少量含む	28	28 31.4
		2: 10YR4/2灰黄褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む		
B区	156	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	72	52 44.8
B区	157	1: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	弱	黄褐色砂質土少量含む	(38)	48 59.4
		2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色砂質土含む		
B区	158	10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色砂質土ブロック少量含む	44	42 42
B区	159	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	41	40 40.1
B区	160	1: 10YR3/1黒褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色砂質土ブロック少量含む	42	32 70.5
		2: 10YR3/2暗褐	粘質土	中	弱			
		3: 10YR3/2暗褐	粘質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック多量含む		
B区	161	10YR2/2黒褐	砂質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む	58	30 62.4
B区	162	10YR3/2暗褐	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色砂質土多量含む	34	32 82.4
B区	163	1: 10YR3/2暗褐	砂質土	やや弱	やや弱	黄褐色砂質土少量含む	(43)	50 40
		2: 10YR3/2暗褐	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色砂質土含む、炭化物少		
B区	164	10YR4/2灰黄褐	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	48	44 40
B区	165	10YR4/2灰黄褐	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	(38)	38 29.4
B区	166	10YR4/1褐灰	砂質土	中	中	黄褐色砂質土ブロック少量含む	38	28 63.5
B区	167	10YR4/1褐灰	砂質土	中	強	黄褐色砂質土ブロック含む	(43)	48 73.4
B区	168	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28	25 33.2
B区	169	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	34 43.8
B区	170	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	32	30 30
B区	171	10YR4/1褐灰	粘質土	中	やや強	黄褐色砂質土多量含む	38	20 41.6
B区	172	10YR4/1褐灰	粘質土	中	中	黄褐色砂質土少量含む	36	35 40
B区	173	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	35	34 62.7
B区	174	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	38	28 38.8
B区	175	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	46	40 39.5
B区	176	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	(34)	36 294
B区	178	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	32	30 60.7
B区	178	10YR2/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	40	31 34
B区	178	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	(50)	29 82
B区	179	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	32 34.2
B区	180	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	25	24 17

グリッド	番号	色画	土質	粘性	しまり	混入物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	備考
9区	181	10YR1/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	27	24	46.1	
9区	182	10YR1/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	44	40	61.8	
9区	183	10YR1/1黒褐	砂質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	30	26	56.1	
9区	184	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや硬		46	41	56.4	
9区	185	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		47	40	59.3	
9区	186	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/1黒褐	砂質土	やや硬	中		68	63	46.9	
9区	187	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	72	38	75.8	
9区	188	10YR2/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	24	23	24.3	
9区	189	1: 10YR4/1黒灰 2: 10YR4/1黒灰	粘質土	中	やや硬		26	24	27.6	
9区	190	1: 10YR4/1黒灰 2: 10YR4/1黒灰	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	22	20	44	
9区	191	10YR4/1黒灰	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	30	57.1	
9区	192	1: 10YR3/2暗褐 2: 10YR3/2暗褐	砂質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34	34	32.4	
9区	193	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	28	29	43.5	
9区	194	10YR1/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	47	34	22.8	
9区	195	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	28	24	33.9	
9区	196	10YR3/2暗褐	粘質土	中	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	21	18	66.4	
9区	197	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	24	22	25.6	
9区	198	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	24	20	42.6	
9区	199	10YR2/2黒褐	砂質土	やや硬	硬	黄褐色土ブロックを含む	64	42	57.8	
9区	200	10YR3/2暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	(32)	27	24.5	
9区	201	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	砂質土	やや硬	硬	黄褐色土ブロックを多量含む	40	36	49.2	
9区	202	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/1黒褐	砂質土	やや硬	硬	黄褐色土ブロックを多量含む	38	34	69	
9区	203	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	36	30	54.6	
9区	204	10YR4/1黒灰	砂質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	36	29	54	
9区	205	10YR3/1黒褐	砂質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを含む	56	54	68.3	
9区	206	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	39	34	38.8	
9区	207	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを含む	30	25	39.6	
9区	208	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを含む	24	24	29.2	
9区	209	1: 10YR3/2黒褐 2: 10YR3/2黒褐	砂質土	やや硬	硬	黄褐色土ブロックを含む	44	32	45.2	
9区	210	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	50	43	59.6	
9区	211	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR4/2灰黄褐	砂質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	40	40	49.6	
9区	212	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	55	48	19.7	
9区	213	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	32	29	33.4	
9区	214	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	砂質土	やや硬	中		31	30	47	
9区	215	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	砂質土	やや硬	硬		29	28	24.8	
9区	216	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	30	32	47.5	
9区	217	10YR3/1黒褐	砂質土	やや硬	硬	黄褐色土ブロックを含む	50	34	43.4	
9区	218	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/1黒褐 3: 10YR2/2黒褐	砂質土	やや硬	やや硬	黄褐色土ブロックを多量含む	66	52	67	
9区	219	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	砂質土	中	中	黄褐色土を少量含む	42	38	63.6	
9区	220	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30	30	30.1	
9区	221	10YR4/1黒灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30	28	27	

グッド	番号	色別	土質	粘性	しまり	記入物	長軸 (cm) 短軸 (cm) 深さ (cm)	備考
B区	222	10YR3/1黒黄	砂質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	30 26 22.2	
B区	223	10YR3/1黒黄	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック含む	30 28 9.8	
B区	224	10YR3/1黒黄	砂質土	中	中		32 30 20.8	
B区	225	1: 10YR2/2黒黄	粘質土	中	中		26 24 26.2	
		2: 10YR2/2黒黄	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック含む		
B区	226	1: 10YR2/3黒黄	粘質土	中	やや弱		30 26 33.8	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	弱	強			
B区	227	1: 10YR2/2黒黄	粘質土	中	中		26 26 31.7	
		2: 10YR2/2黒黄	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む		
B区	228	10YR3/3暗黄	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	52 38 25.4	
B区	229	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	中		32 23 62.3	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む		
B区	230	10YR3/1黒黄	砂質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	32 30 36.4	
B区	231	1: 10YR2/2黒黄	粘質土	中	弱		35 24 28.3	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック多量含む		
B区	232	10YR4/3にぶ・黄緑	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	34 26 38.7	
B区	233	10YR4/3にぶ・黄緑	シルト	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	22 22 10.9	
B区	234	10YR3/3暗黄	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	32 28 19.3	
B区	235	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	24 22 28.9	
B区	236	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	38 36 55	
B区	237	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	(40) 34	
B区	238	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	中	中		34 30 38.2	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	中	強	黄褐色土ブロック多量含む		
A区	239	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28 26	
B区	240	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	やや弱		50 42 32.2	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	やや強	褐色土ブロック多量含む		
B区	241	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	38 30 71	
B区	242	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	42 28 28.1	
B区	243	10YR3/3暗黄	砂質土	弱	弱		(30) 222) 23.4	
B区	244	10YR2/3黒黄	砂質土	弱	中	黄褐色土ブロック含む	30 34 38.2	
B区	245	10YR4/1褐灰	砂質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	28 25 28.6	
B区	246	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	やや弱		50 40 35.4	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	やや強	黄褐色土ブロック含む		
B区	247	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	弱	やや弱		34 30 48.1	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	中	褐色土ブロック含む		
		3: 10YR4/4暗	砂質土	やや弱	中	黄褐色土ブロック含む		
B区	248	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	30 30 12.1	
B区	249	10YR2/3黒黄	砂質土	中	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	32 25 34.7	
B区	250	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	32 22 28.7	
B区	251	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	33 26 74.9	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	中	強	黄褐色土ブロック多量含む		
B区	252	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30 28 31.5	
B区	253	10YR2/3黒黄	砂質土	やや弱	中	褐色土ブロック少量含む	48 36 35.8	
B区	254	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	32 24 17	
B区	255	10YR3/1黒黄	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	27 22 67.1	
B区	256	1: 10YR2/3黒黄	砂質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック多量含む	48 44 46.5	
		2: 10YR2/3黒黄	砂質土	中	やや弱			
		3: 10YR2/3黒黄	粘質土	やや強	やや強			
B区	257	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック含む	30 28 29.3	
B区	258	10YR4/1褐灰	砂質土	中	中		32 30 26.5	
B区	259	10YR3/1黒黄	砂質土	やや弱	中		32 (28) 46	
B区	260	10YR3/1黒黄	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34 34 59.1	
B区	261	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	48 40 52.2	
B区	262	10YR2/3暗黄	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	28 28 54.8	
B区	263	10YR4/1褐灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	38 30 66.7	
B区	264	1: 10YR2/3黒黄	粘質土	中	中	褐色土ブロック多量含む	43 33 38.1	
		2: 10YR2/3黒黄	粘質土	中	中			

グリップ	番号	色別	土質	特性	しまり	運入物	長軸(mm)短軸(mm)深さ(mm)	備考
B区	265	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	48 41 56	
B区	266	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	36 34 50.7	
B区	267	1: 10YR3/2黒褐 2: 10YR3/2黒褐	粘質土	中	強	黄褐色土ブロックを多量含む	48 45 39.1	
B区	268	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土ブロック含む	30 20 24	
B区	269	1: 10YR3/2黒褐 2: 10YR3/2黒褐	砂質土	中	弱		32 32 47	
B区	270	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28 26 33.6	
B区	271	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土ブロック含む	35 26 18.4	
B区	272	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38 36 27.8	
B区	273	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土ブロック含む	40 29 26.3	
B区	274	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土ブロック含む	30 30 14.7	
B区	275	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	26 24 28.9	
B区	276	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28 18 17.7	
B区	277	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中		26 20 31.5	
B区	278	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28 23 43.2	
B区	279	1: 10YR3/2黒褐 2: 10YR3/2黒褐	砂質土	やや硬	弱		56 50 34.2	
B区	280	1: 10YR3/2黒褐 2: 10YR3/2黒褐	砂質土	弱	弱		41 38 26.6	
B区	281	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR5/6黄褐	砂質土	中	中	黄褐色土ブロック多量含む	42 38 43.7	
B区	282	1: 10YR3/2黒褐 2: 10YR3/2黒褐 3: 10YR3/2黒褐	砂質土	やや硬	やや硬		51 40 33.2	
B区	283	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土ブロック含む	37 32	
B区	284	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	中		44 34 26.6	
B区	285	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	24 24 25	
B区	286	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/4暗褐	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土を含む	34 32 23.1	
B区	287	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック・黄土粒少量含む	26 24 38	
B区	288	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	43 42 26.0	
B区	289	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34 26 18.3	
B区	290	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38 27 18.7	
B区	291	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	32 26 11.1	
B区	292	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	52 42 6.9	
B区	293	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	50 48 27.1	
B区	294	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38 34 13.9	
B区	295	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28 28 16.7	
B区	296	10YR4/1細灰	砂質土	やや硬	中	黄褐色土ブロック少量含む	26 26 25	
B区	297	10YR4/1細灰	砂質土	やや硬	中	黒色ブロック少量含む	36 30 20	
B区	298	10YR4/1細灰	砂質土	やや硬	中	黄褐色土ブロック少量含む	26 24 21.8	
B区	299	10YR4/1細灰	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土ブロック含む	40 38 24.4	
B区	300	1: 10YR2/3黒褐 2: 10YR4/4暗	砂質土	弱	中		34 26 49.5	
B区	301	1: 10YR2/3黒褐 2: 10YR2/3黒褐	粘質土	中	やや硬	黄褐色土ブロック少量含む、黒褐色ブロック含む	40 34 29	
B区	302	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや硬	黄褐色土少量含む	36 32 31.8	
B区	303	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	やや硬	中	黄褐色土ブロックを多量含む	28 26 32.5	
B区	304	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	30 24 16.3	
B区	305	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	38 34 16.6	
B区	306	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/4暗褐	粘質土	やや硬	やや強	黄褐色土を含む	32 31 22.9	
B区	307	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	38 32 36.6	



グッド	番号	色別	土質	地味	しまり	混入物	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	備考
B区	308	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	28	12.8	
B区	309	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	30	25	25.8	
B区	310	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34	(24)	25.8	
C区	311	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	30	28	16	
C区	312	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	60	52	30.5	
C区	313	1: 10YR3/3暗褐 2: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや弱		32	31	20.3	
B区	314	10YR4/1黒灰	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロックを多量含む	40	38	50.4	
B区	315	10YR3/1黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロックを多量含む	30	22	30.9	
C区	316	10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	40	34	30.6	
C区	317	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	34	30	21	
C区	318	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		26	24	21.5	
C区	319	10YR5/4cふい黄褐	粘質土	中	中	暗褐色土ブロック含む	44	(18)	12.2	
C区	320	1: 10YR3/1黒褐 2: 10YR3/1黒褐	粘質土	やや強	中	黄褐色土ブロック多量含む	30	24	36.8	
C区	321	10YR3/3暗褐	粘質土	やや強	やや強	黄褐色土ブロック多量含む	50	40	20.7	
C区	322	1: 10YR3/3暗褐 2: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	62	52	29	
C区	323	1: 10YR2/3暗褐 2: 10YR2/3暗褐 3: 10YR2/3暗褐	粘質土	中	やや弱		56	52	28.5	
C区	324	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック少量含む	50	45	18.5	
C区	325	1: 10YR3/3暗褐 2: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		28	24	31	
C区	326	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中		26	24	13.8	
C区	327	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	34	24	25.8	
C区	328	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	45	(32)	21.2	
C区	329	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	28	24	25.2	
C区	330	1: 10YR4/1黒灰 2: 10YR4/1黒灰	粘質土	中	強	黄褐色土ブロック多量含む	30	30	46	
C区	331	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		37	(26)	24.8	
C区	332	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		39	30	16	
C区	333	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	27	26	16.7	
C区	334	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		32	30	16.3	
C区	335	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		40	38	14.2	
C区	336	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや弱		27	26	12.7	
C区	337	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	49	38	24.5	
C区	338	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む、黒褐色土ブロック少量含む	40	35	15	
C区	339	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや弱		26	25	13.2	
C区	340	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや弱		22	20	11.4	
C区	341	10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		22	20	23.5	
C区	342	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	30	18.4	
C区	343	10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロックを多量含む	29	29	18.9	
C区	344	10YR3/3暗褐	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	32	32	24	
C区	345	1: 10YR4/1黒灰 2: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		74	60	29	
C区	346	10YR2/2黒褐	粘質土	中	やや強	黄褐色土ブロック少量含む	60	64	22	
C区	347	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR3/3暗褐 3: 10YR2/2黒褐	粘質土	中	中		60	(70)	113.1	
C区	348	1: 10YR2/2黒褐 2: 10YR3/3暗褐	粘質土	中	やや弱	黄褐色土ブロック含む、黒褐色土ブロック・細砂少量含む	74	70	112.9	
C区	349	1: 10YR3/3暗褐 3: 10YR3/3暗褐	粘質土	やや弱	やや弱	黄褐色土ブロック・粗砂含む	28	28	13.2	

グリッド	番号	色調	土質	粘性	しまり	混入物	高輪 (cm) 短輪 (cm) 深さ (cm)			備考
C区	350	1:10YR2/2高輪	粘質土	中	やや固		28	34	34	
		2:10YR2/2高輪	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む				
C区	351	10YR2/2高輪	粘質土	中	中		27	26	12.5	
C区	352	10YR2/2高輪	粘質土	中	中		23	22	14.3	
C区	353	10YR2/2高輪	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック含む	26	25	17.5	
C区	354	10YR2/3高輪	粘質土	中	中	黄褐色土ブロック少量含む	24	22	20.2	
D区	355	10YR2/3高輪	粘質土	中	中		28	26		平面観察のみ
D区	356	10YR2/3高輪	粘質土	中	中		26	30		平面観察のみ
D区	357	10YR3/3高輪	粘質土	中	中		(22)	12		平面観察のみ
D区	358	10YR3/3高輪	粘質土	中	中		30	28		平面観察のみ
D区	359	10YR3/3高輪	粘質土	中	中		31	23		平面観察のみ
D区	360	10YR3/3高輪	粘質土	中	中		26	25		平面観察のみ
D区	361	10YR3/3高輪	粘質土	中	中		22	21		平面観察のみ

第15表 堀向II遺跡土製品観察表

番号	目録	遺構	層位	種別	長さ	幅	厚さ	色調	備考
800	窯器土製品	S16	埋土		0.1	2.1	1.95	K-F1-黄緑	
786	縄	S14 S26	F1下	ベルト下層	16.7	(12.6)	(3.3)	K-F1-黄	数量あり
913	土鏝	S16	上層		5.35	2.2	2	K-F1-黄緑	
914	土鏝	S103			4.82	2.1	2	K-F1-黄緑	
915	土鏝	S112	上層		4.4	1.75	1.5	K-F1-黄緑	
916	土鏝	S111	上層		4.35	2.15	1.8	K-F1-黄緑	
917	土鏝	S103			4.55	2.2	2	K-F1-黄	
918	土鏝	S112			3.9	1.7	1.65	K-F1-黄緑	
919	土鏝	S103	粘り度		4.15	1.8	1.65	K-F1-黄	
920	土鏝	S126	埋土一帯		(2.76)	(2.1)	(0.7)	K-F1-黄緑	
	粘土塊	S121	上層					K-F1-黄	
	粘土塊	S109	上層					K-F1-黄	
	粘土塊	S103	埋土					K-F1-黄緑	
	粘土塊	S125	埋土					K-F1-黄緑	
	粘土塊	S126	埋土					K-F1-黄	
	粘土塊	S126	埋土					K-F1-黄緑	
	粘土塊	S126	中層					K-F1-黄緑	
	粘土塊	S121	土灰内一帯					K-F1-黄	

写 真 图 版



1. 西川目遺跡遠景①（南から）



2. 西川目遺跡遠景②（西から）



西川目遺跡A区（南から）



西川目遺跡B区

写真図版 4

西川目遺跡



1. 基本土層



2. 作業風景

1. A区調査前状況



2. B区北調査前状況



3. B区南調査前状況





写真図版 6



1. SI01 完掘状況



2. SI01 南北土層断面



3. SI01 東西土層断面

1. SI03 完備状況



2. SI03 東西土層断面



3. SI03 南北土層断面



写真図版 8

西川百遺跡



1. S103 カマド完備状況



2. S103 カマド土層断面



3. S103 掘りかた

1. S104 完掘状況



2. S104 東西土層断面



3. S104 南北土層断面  
断面左側は、トレンチにより  
削平



写真図版10



1. SI04 カマド検出状況



2. SI04 旧カマド発掘状況



3. SI04 遺物出土状況

1. SI05 完掘状況



2. SI05 東西土層断面



3. SI05 南北土層断面



写真図版12

西川自遺跡



1. SI07 完掘状況



2. SI07 南北土層断面



3. SI07 東西土層断面

1. S107 ビット1



2. S107 ビット2



3. S107 カマド周辺遺物  
出土状況





写真図版14

西川目遺跡



1. SI07 カマド完掘状況



2. SI07 カマド土層断面



3. SI07 カマド袖断ち  
割り

1. S109 完掘状況



2. S109 土層断面



3. S109 遺物出土状況





1. SI10 完掘状況



2. SI10 土層断面



3. SI10 カマド完掘状況

1. SI10 カマド土層断面  
(南北)



2. SI10 カマド土層断面  
(東西)



3. SI10 カマド袖断ち割り  
状況





1. S110 旧カマド



2. S110 旧カマド土層  
断面



3. S110 カマド遺物出土  
状況



A2区完掘



1. SB02 完備状況



2. SB02 柱配置状況



3. SB02 整地層断面

1. SB02 柱穴断面 (1)



2. SB02 柱穴断面 (2)



3. SB02 柱穴断面 (3)







1. SB01 完掘状況



2. SB03 完掘状況



3. SB04・05・06 完掘  
状況

1. SE01 完備状況



2. SE01 土層断面



3. SE02 完備状況





1. 近世墓群



2. SZ01 完掘状況



3. SZ01 土層断面

1. SZ02・03 棺検出状況



2. SZ02・03 掘りかた



3. SZ03 遺物出土状況





1. SZ02 土層断面



2. SZ02 遺物出土状況



3. SZ03 棺検出状況  
(天板除去後)

1. SZ04 棺検出状況①



2. SZ04 棺検出状況②  
(天板除去後)



3. SZ04 掘りかた



写真図版28



1. SZ05 棺検出状況①



2. SZ05 棺検出状況②  
(天板除去後)



3. SZ05 遺物出土状況

1. SZ05 土層断面



2. SZ05 掘りかた



3. 近世墓群完備状況  
棺を壊しながら重複する







1. SZ06 棺検出状況①



2. SZ06 棺検出状況②  
(天板除去後)



3. SZ06 土層断面

1. SZ07 棺検出状況①



2. SZ07 棺検出状況②  
(天板除去後)



3. SZ07 土層断面





1. SZ09 棺検出状況①



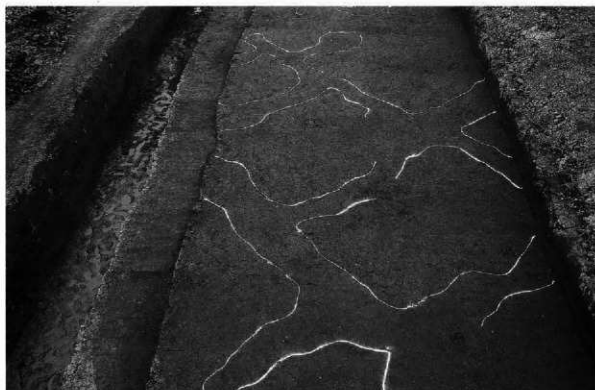
2. SZ09 棺検出状況②  
(天板除去後)



3. SZ07・09 検出状況



A区水田跡 (SF01)



1. A区水田跡 (SF01)



2. A区水田跡断面



1. 堰向Ⅱ遺跡遠景（東南から）



2. 堰向Ⅱ遺跡遠景（南西から）遠くに北上川が見える



A区全景（西から）



B区全景（北から）





C区全景（北から）

1. B区調査前状況①



2. B区調査前状況②



3. C区調査前状況





1. S101 完掘状況



2. S101 土層断面



3. S101 カマド

1. SI02 完掘状況



2. SI03 完掘状況



3. SI03 土層断面





1. S103 カマド①



2. S103 カマド②



3. S103 カマド土層断面

1. SI03B完掘状況①



2. SI03B完掘状況②



3. SI03 旧カマド断面



写真図版44

堰向II遺跡



1. SI04 完掘状況



2. SI04 東西土層断面



3. SI04 南北土層断面

1. S105 完掘状況



2. S106 東西土層断面



3. S105 南北土層断面







1. S105 カマド完掘状況  
①



2. S105 カマド完掘状況  
②



3. S106 カマド土層断面

1. S105 旧カマド



2. S106 完相状況



3. S106 土層断面





1. SI07 完盤状況



2. SI07 東西土層断面



3. SI07 南北土層断面

1. S108 完備状況



2. S108 土層断面



3. S108 掘りかた





1. S108 カマド完掘状況

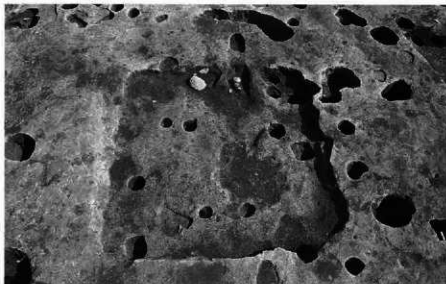


2. S108 カマド土層断面



3. S108 カマド袖断ち  
割り

1. S109 完掘状況



2. S109 土層断面



3. S109 掘りかた





1. SI09 カマド完掘状況

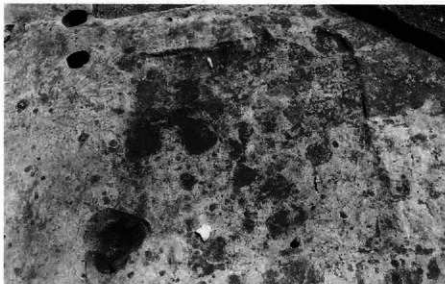


2. SI09 土層断面



3. SI09 カマド袖断ち  
割り

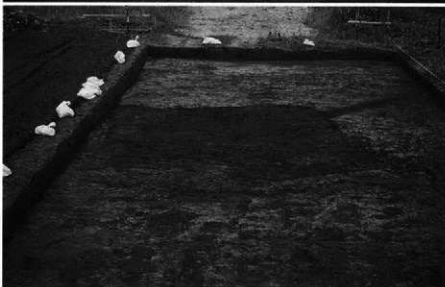
1. S110 完掘状況



2. A区東検出状況



3. S111 検出状況







1. SI11 完掘状況



2. SI11 土層断面①  
(東西)



3. SI11 土層断面②  
(南北)

1. S111 カマド完備状況



2. S111 カマド土層断面  
①



3. S111 カマド土層断面  
②





1. SI11 カマド袖断ち割り



2. SI11 掘りかた①



3. SI11 掘りかた②

1. SI12 完掘状況



2. SI12 土層断面



3. SI12 カマド





1. SI13 完掘状況



2. SI13 土層断面



3. SI13 掘りかた

1. SI14 完掘状況



2. SI14 土層断面



3. SI14 遺物出土状況



写真図版60

堰向II遺跡



1. SI15 完掘状況



2. SI15 土層断面 (南北)



3. SI15 土層断面 (東西)

1. S116・17 完備状況



2. S116・17 土層断面  
(東西)



3. S116・17 土層断面  
(南北)







1. SI18 検出状況



2. SI18 完掘状況



3. SI18 土層断面

1. SI18 遺物出土状況①



2. SI18 遺物出土状況②  
(東から)



3. SI18 遺物出土状況③  
(北から)





1. 炭化材出土状況



2. 長頸瓶出土状況



3. 須恵器大甕出土状況

1. SI19 完掘状況



2. SI19 土層断面 (南北)



3. SI19 土層断面 (東西)





1. S120 検出状況



2. S120 完掘状況



3. S120 土層断面

1. S120 カマド



2. S120 カマド土層断面



3. S120 カマド煙道断面





1. SI20 遺物出土状況



2. SI20 掘りかた①



3. SI20 掘りかた②

1. S121 完掘状況



2. S121 土層断面 (東西)



3. S121 土層断面 (南北)







1. S121 掘りかた



2. S121 炉跡検出状況



3. S121 炉跡完掘状況

1. S122 完備状況



2. S122 土層断面



3. S122 掘りかた





1. SI22 カマド完備状況



2. SI22 カマド土層断面  
(東西)



3. SI22 カマド土層断面  
(南北)

1. S123 完掘状況



2. S124 完掘状況



3. S124 土層断面



写真図版74

塚  
向  
II  
遺  
跡



1. SI25 完掘状況



2. SI25 土層断面



3. SI25 掘りかた

1. SI25 カマド



2. SI25 カマド煙道



3. SI25 カマド土層断面



写真図版76

堰向Ⅱ遺跡



1. Si26 検出状況



2. Si26 発掘状況



3. Si26 掘りかた

1. S126 土層断面①



2. S126 土層断面②



3. S126 土層断面③







1. S126 カマド



2. S126 カマド断ち割り



3. S126 旧カマド

1. Si26 B完掘状況



2. Si26 B土層断面



3. Si26 B掘りかた





1. SI26 B遺物出土状況  
①



2. SI26 B遺物出土状況  
②



3. SI26 Bナベ出土状況

1. S127 完掘状況



2. S127 土層断面



3. S127 B 完掘状況

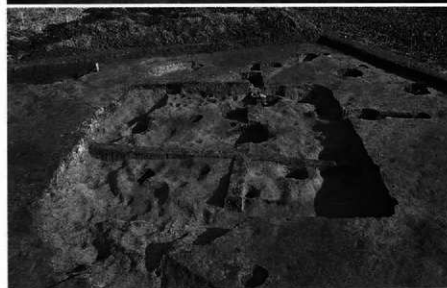




1. S128 完掘状況



2. S128 土層断面



3. S128 掘りかた

1. S128 カマド①  
支脚が2ヶ所ある  
二つ掛け用のカマド



2. S128 カマド②



3. S128 カマド袖断ち  
割り





1. SI29 完掘状況



2. SI29 掘りかた



3. SI30 完掘状況

1. S130 カマド完備状況



2. S130 カマド土層断面



3. S130 完備状況







1. SI38 完掘状況



2. SI38 カマド土層断面



3. SI39 完掘状況

1. SE01 完掘状況



2. SE01 土層断面



3. SE02 完掘状況





1. SB01 完掘状況



2. SB02 完掘状況



3. SB03 完掘状況

1. SD01・02 完掘状況



2. SD03 完掘状況



3. SD04 完掘状況





1. SD05 土層断面



2. SD06 土層断面



3. SD07・08 完掘状況

1. SK04 土層断面



2. SK04 下層遺物出土  
状況

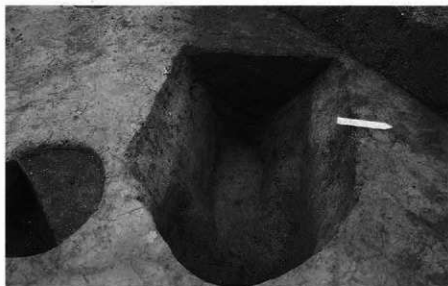


3. SK04 上層遺物出土  
状況



写真図版92

堀向Ⅱ遺跡



1. SK20 土層断面



2. SK27 遺物出土状況



3. SK29 完掘状況

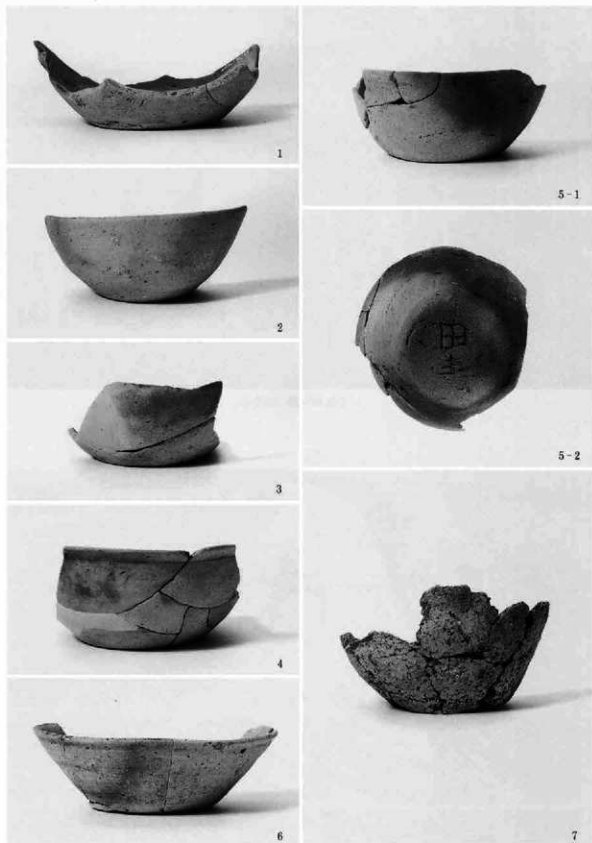


1. D区南全景（南から）

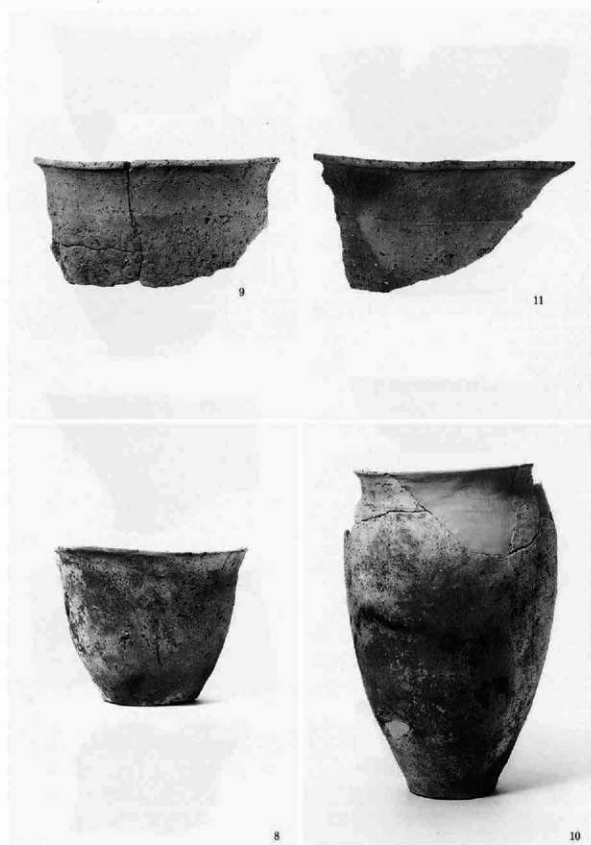


2. D区北全景（北から）



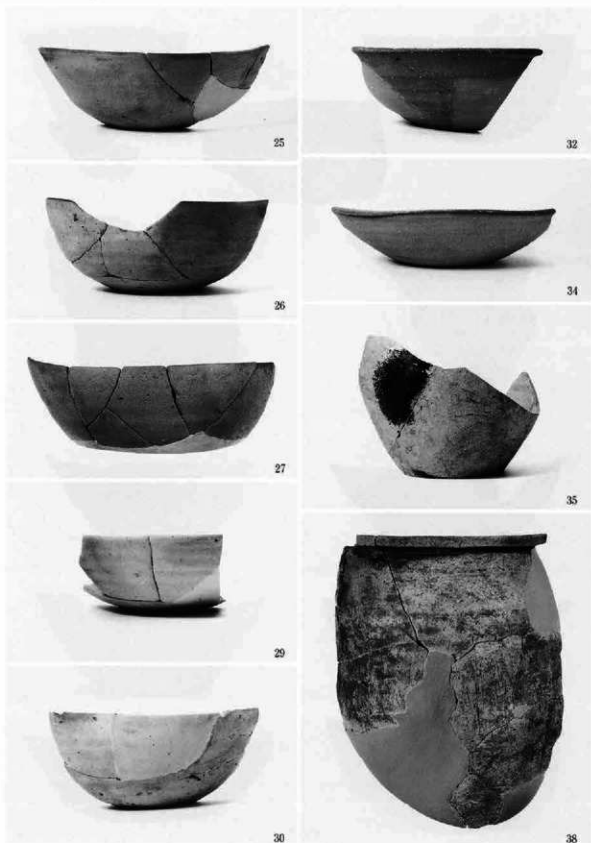


SI01 出土土器①

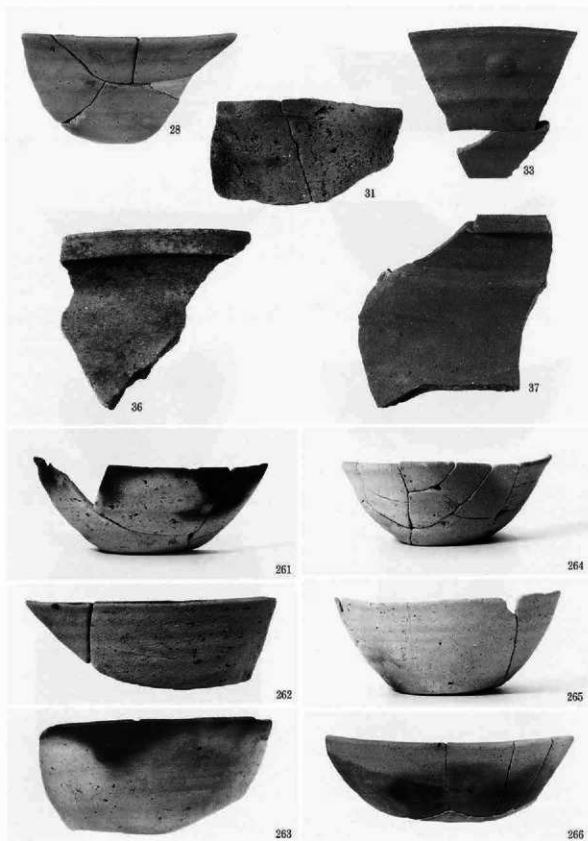


S101 出土土器②





S104 出土土器





267



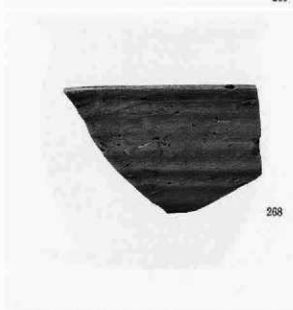
270



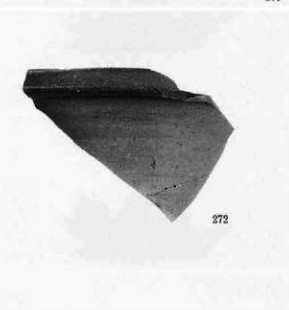
269



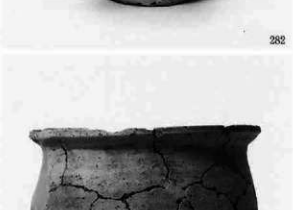
271

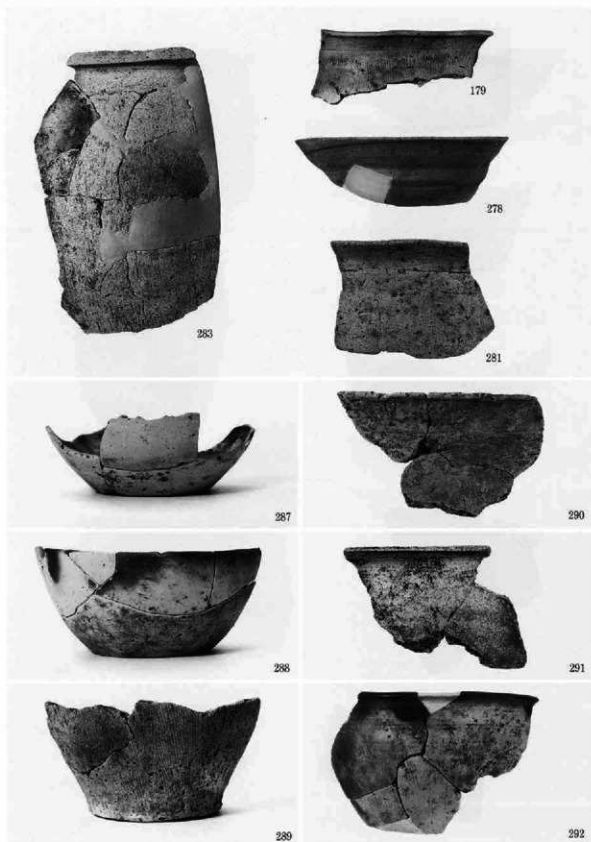


268

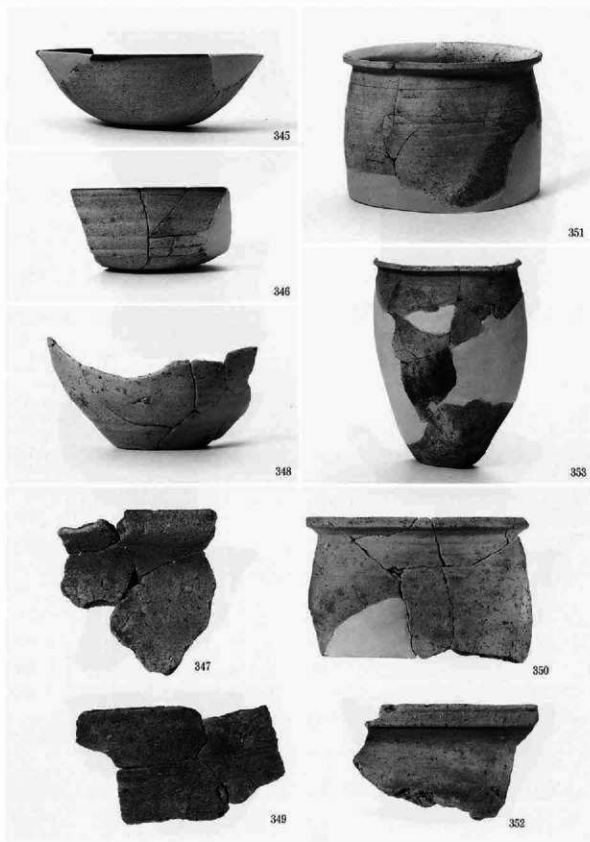


272

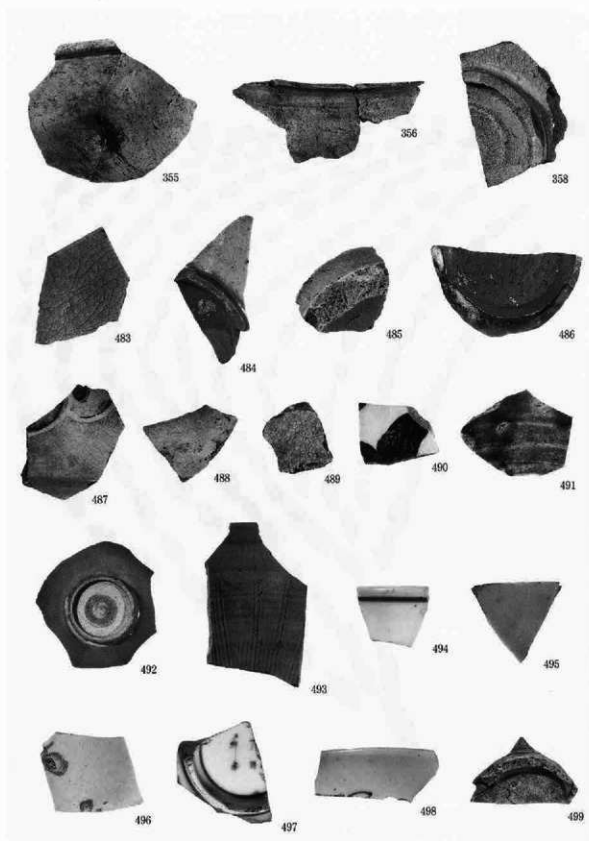






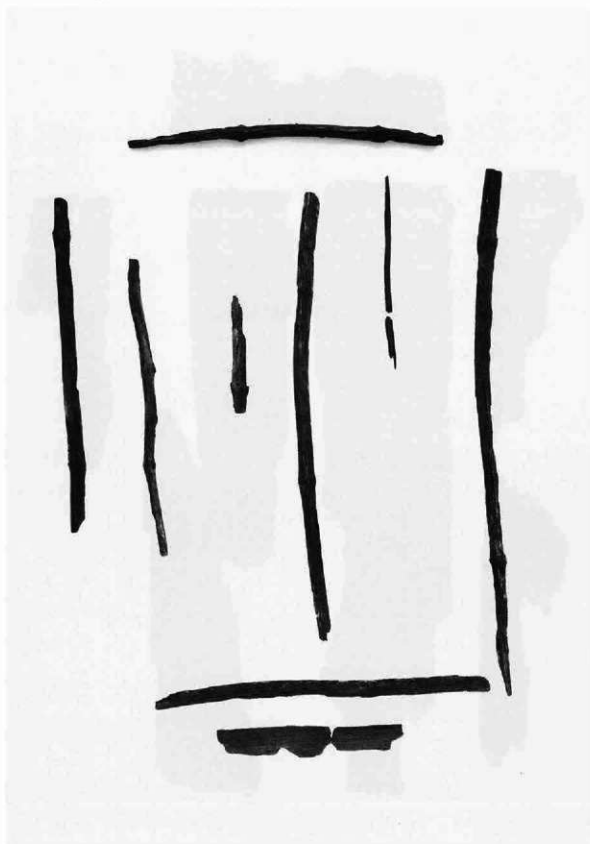


S110 出土土器

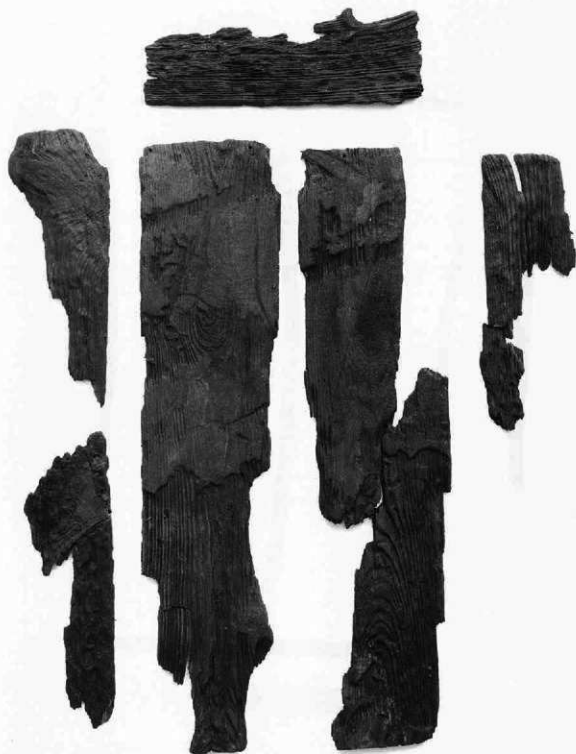


Pit・遺構外出土遺物

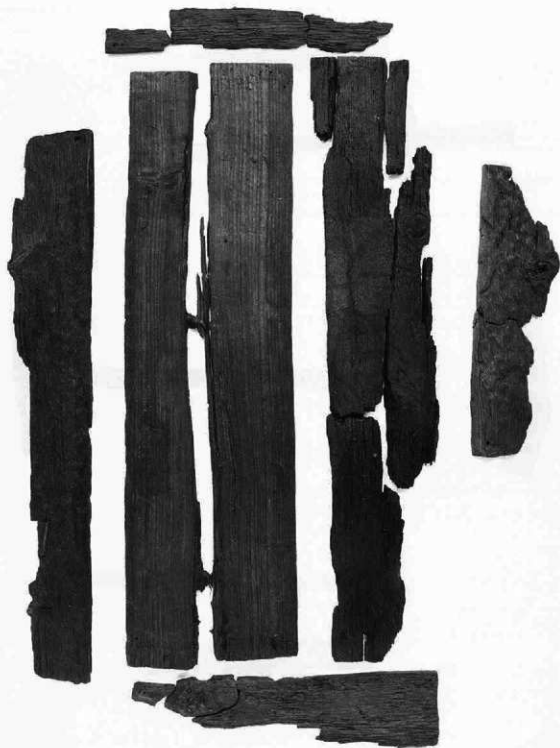




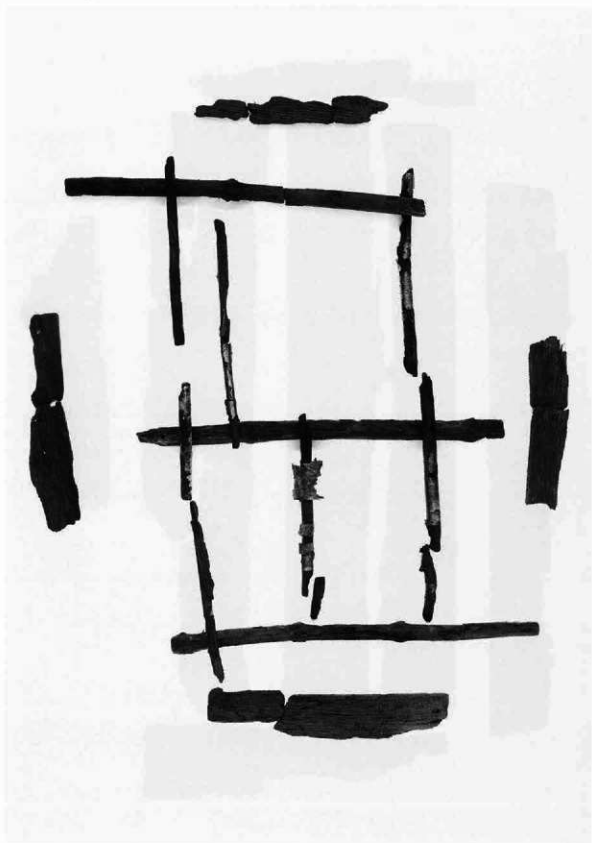
S203 出土棺材



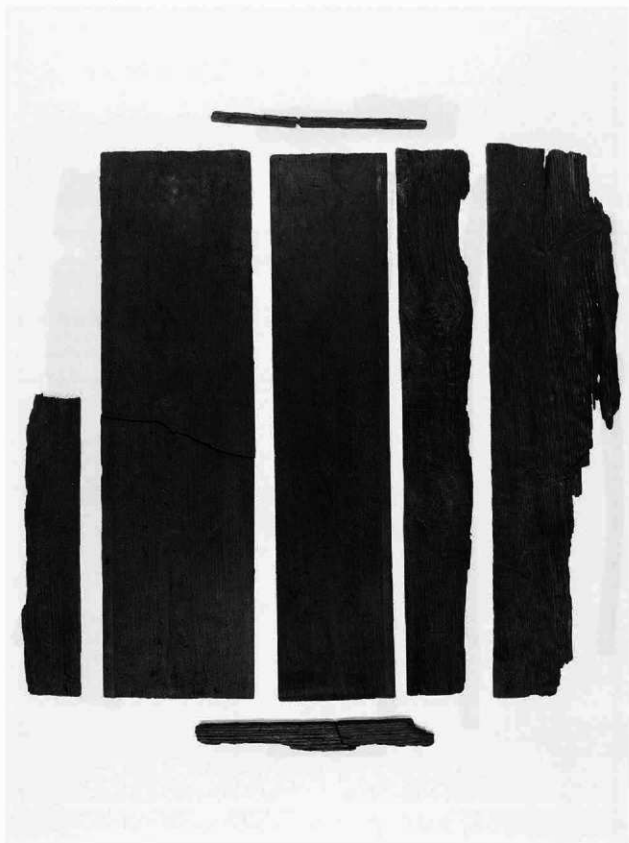
SZ04 出土棺材



SZ05 出土棺材



SZ06 出土棺材

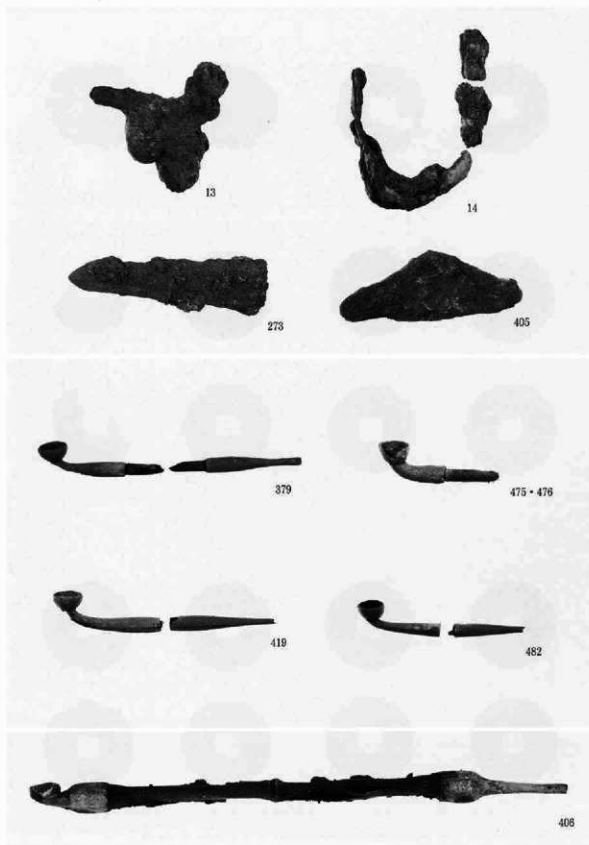


SZ07 出土棺材

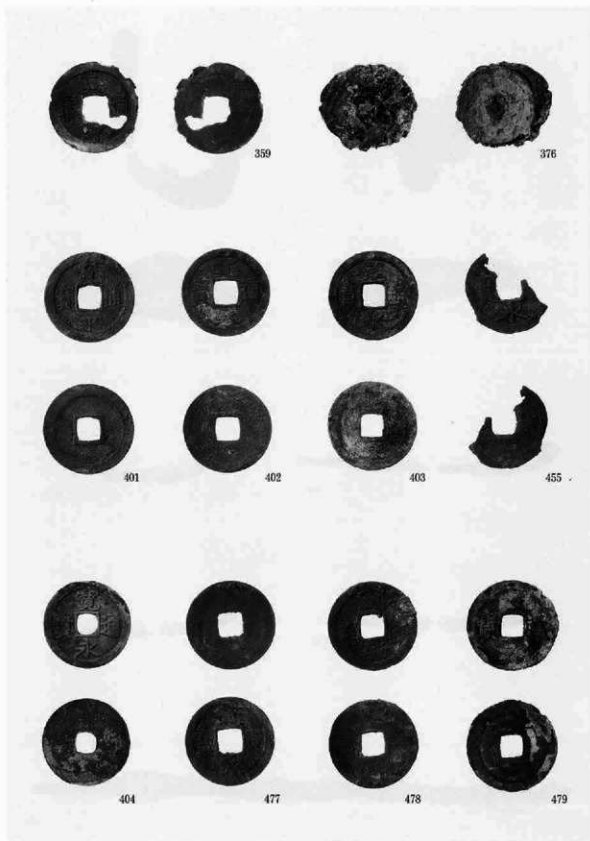


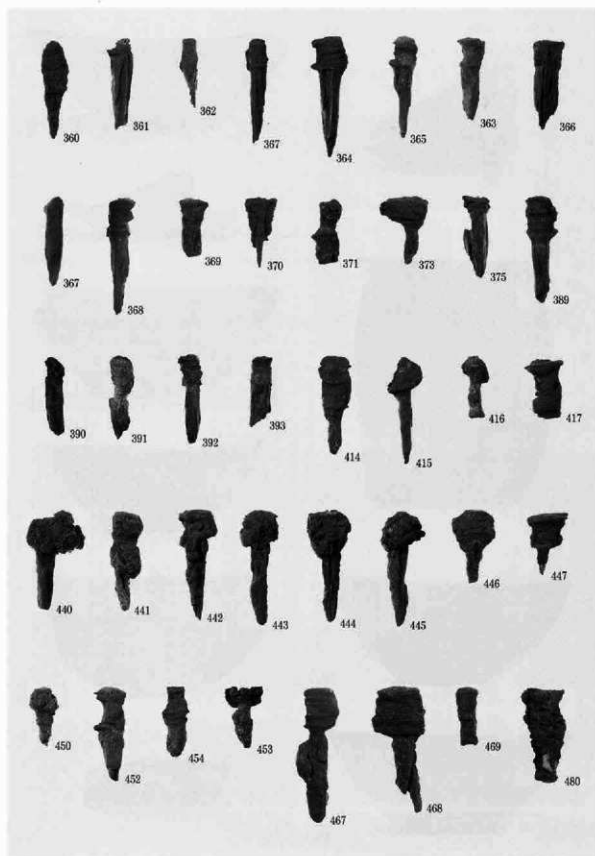


SZ09 出土棺材

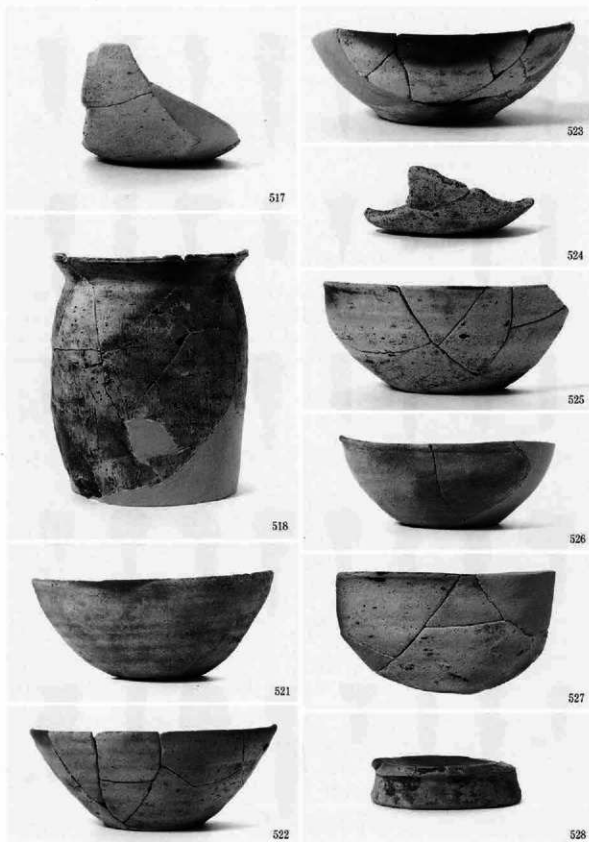


出土金属製品

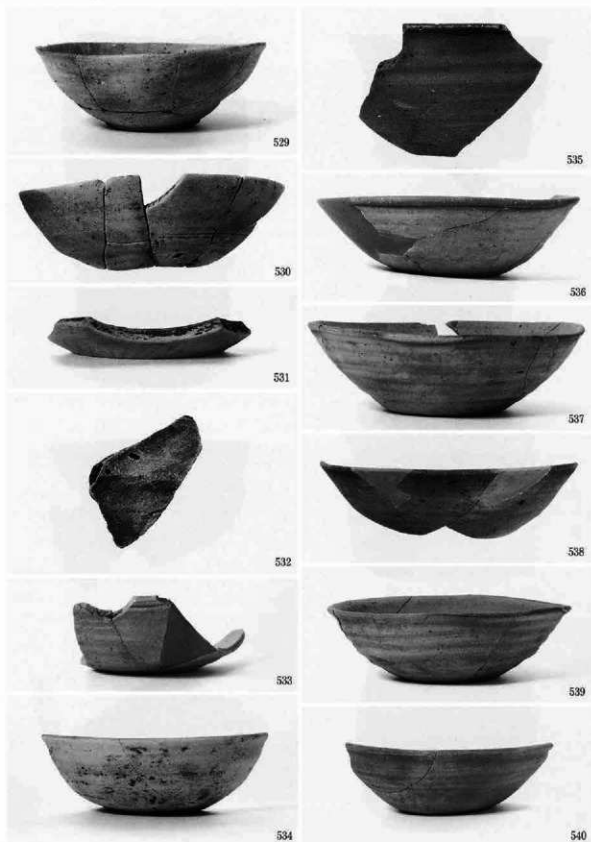




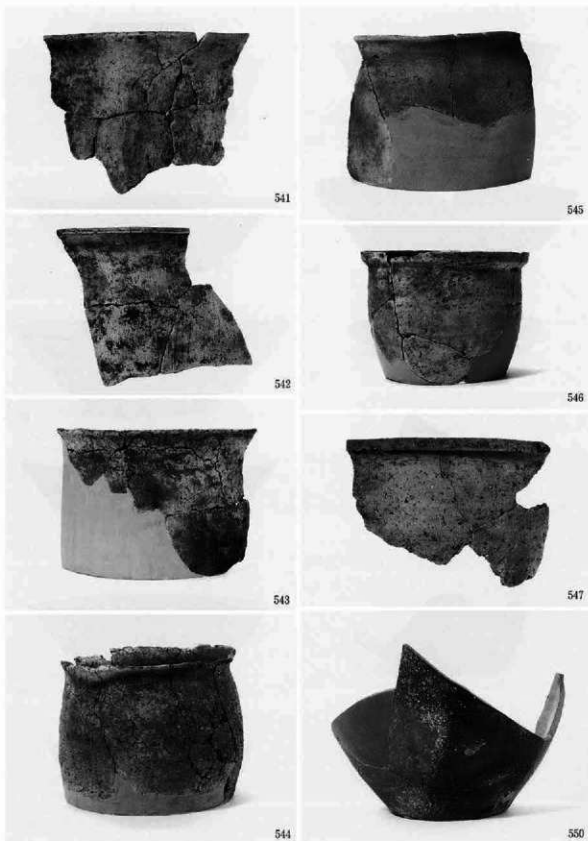
鉄釘

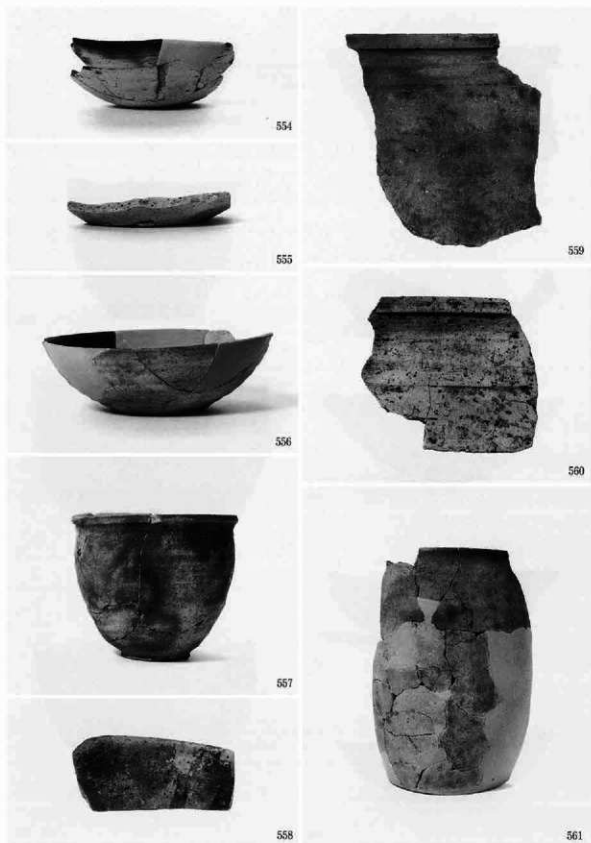


SI01 出土土器

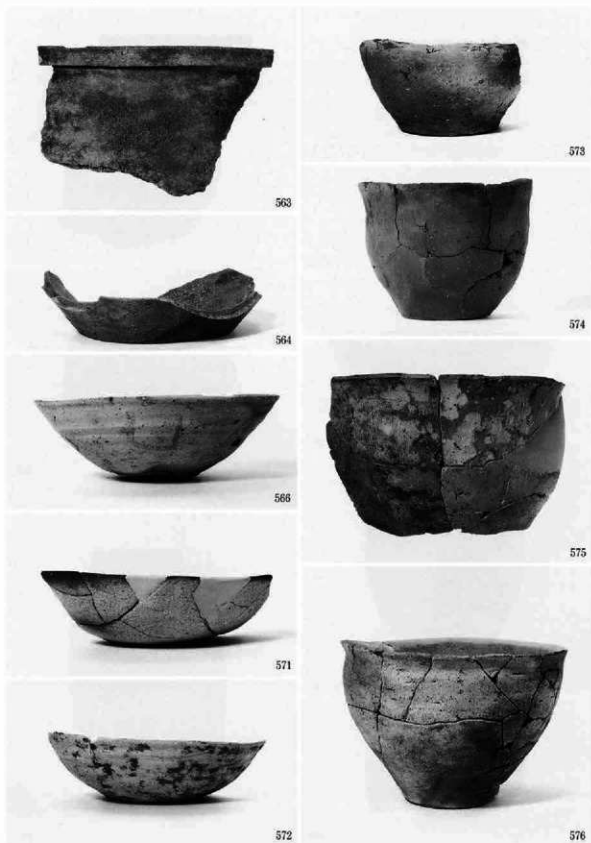


S103 ①出土土器

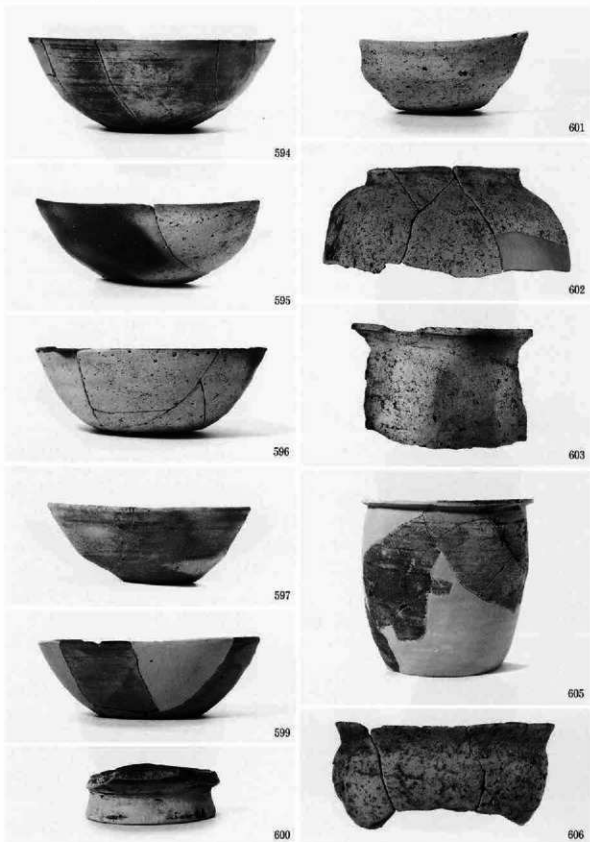




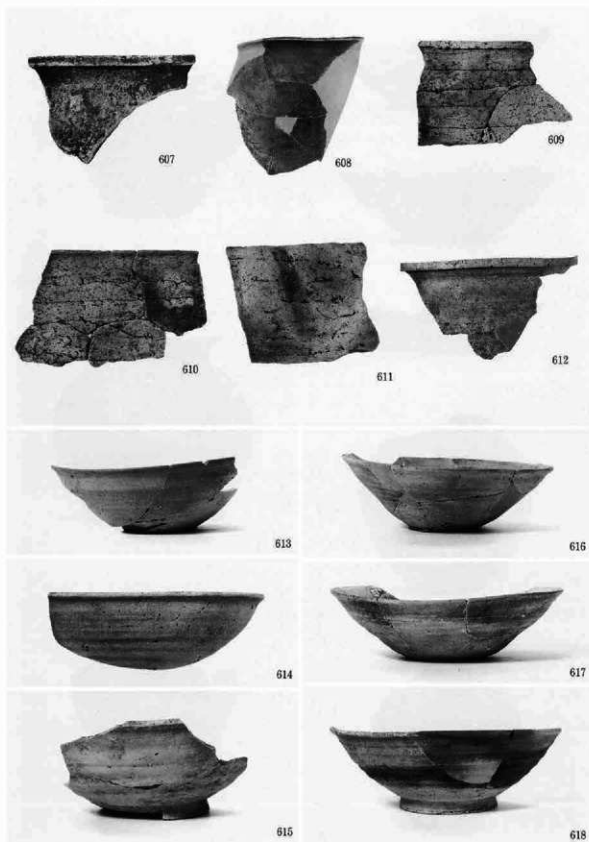








S118 出土土器①



S18 出土土器②





623



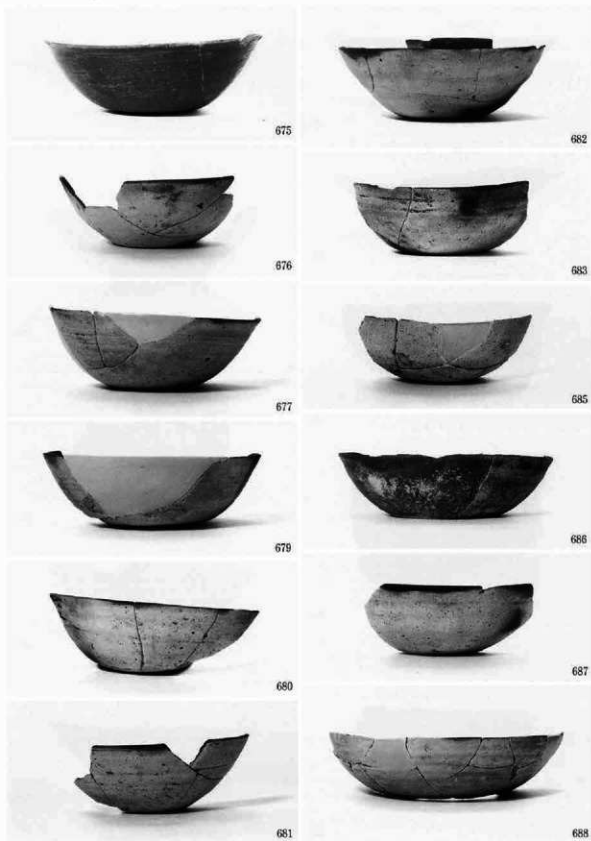
628

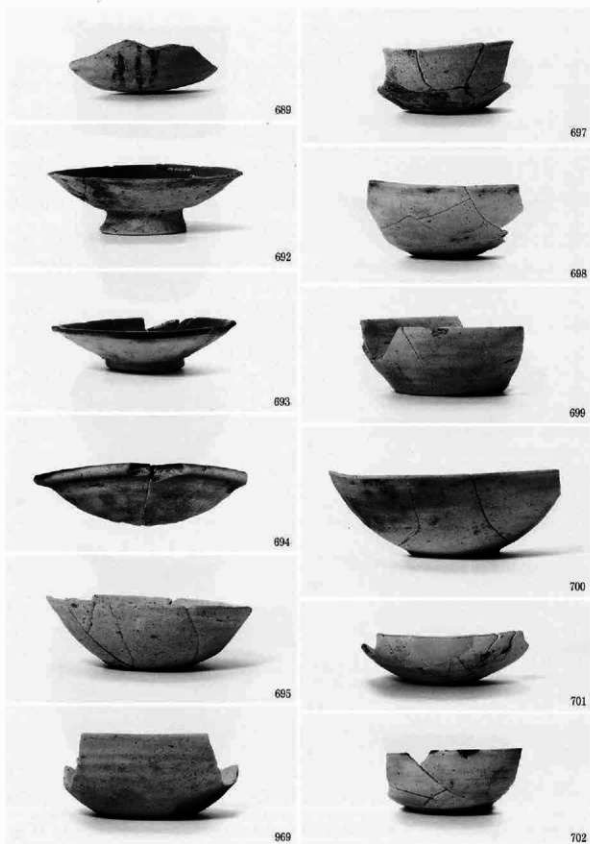
SI18 出土土器④



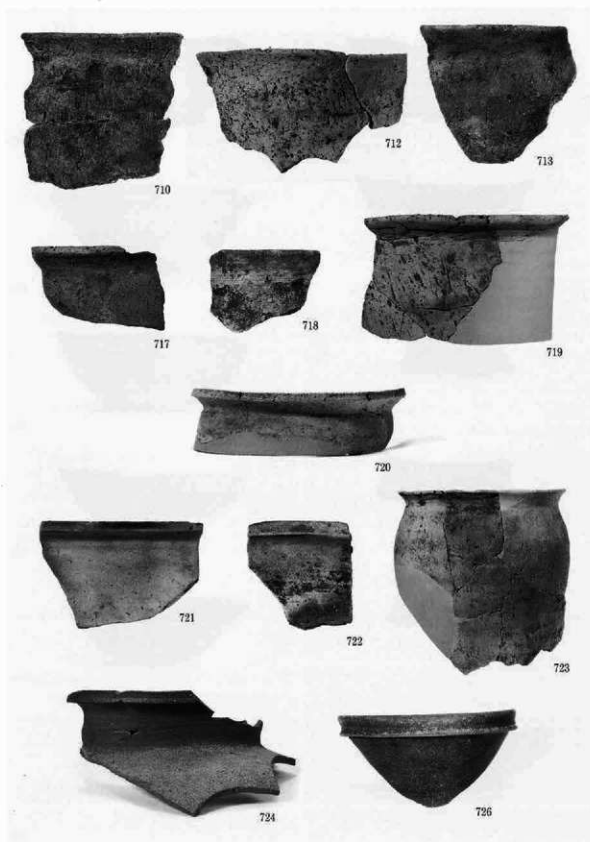






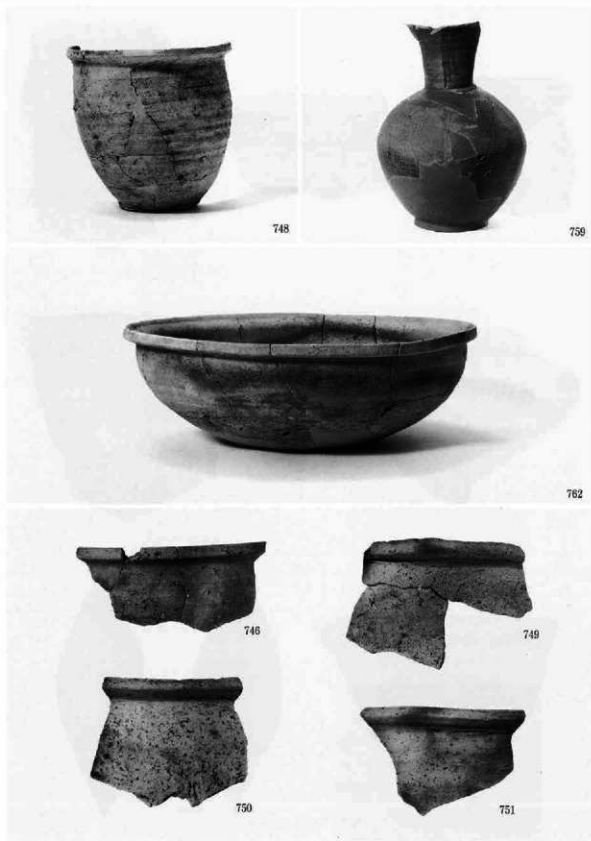




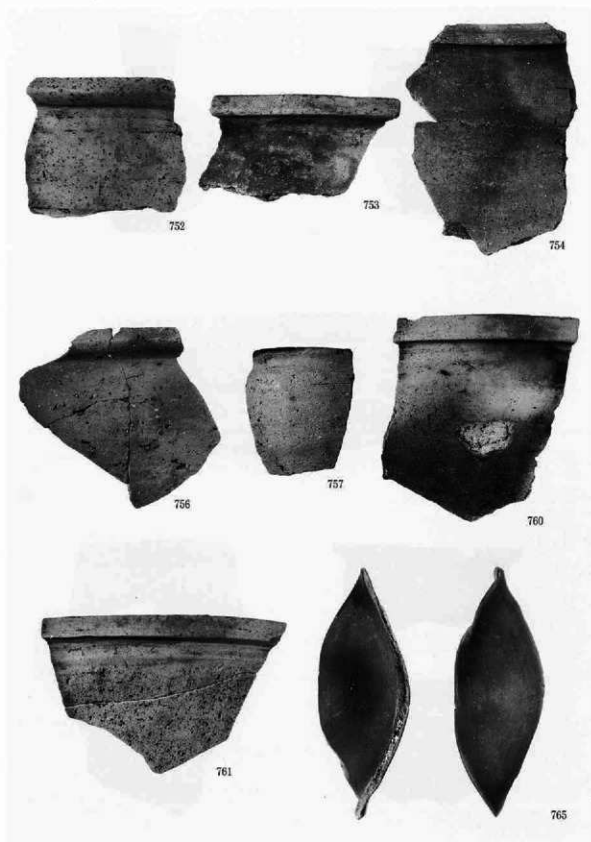


SI26 出土土器④

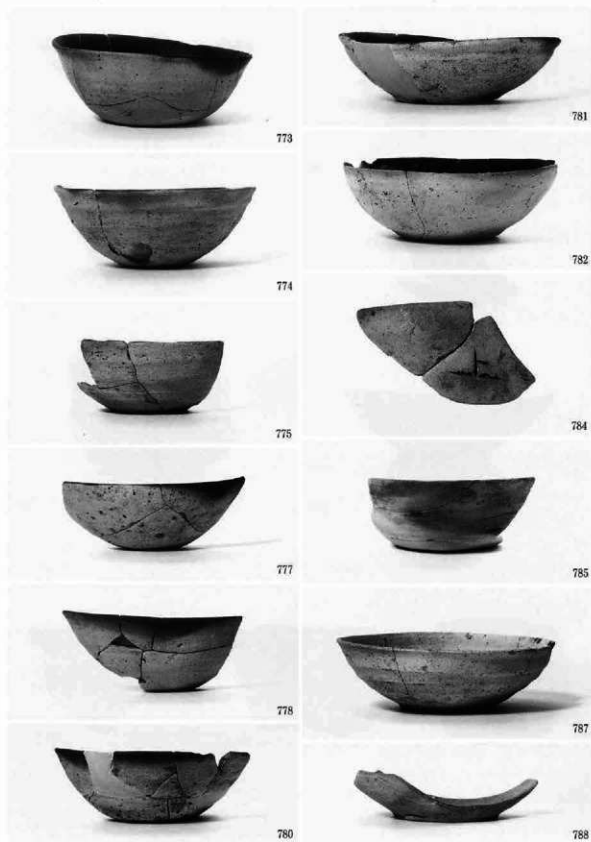




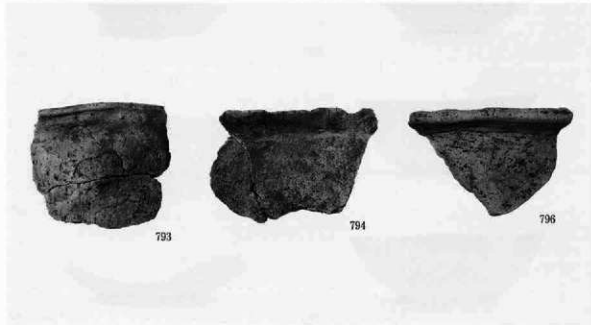
SI26B出土土器②

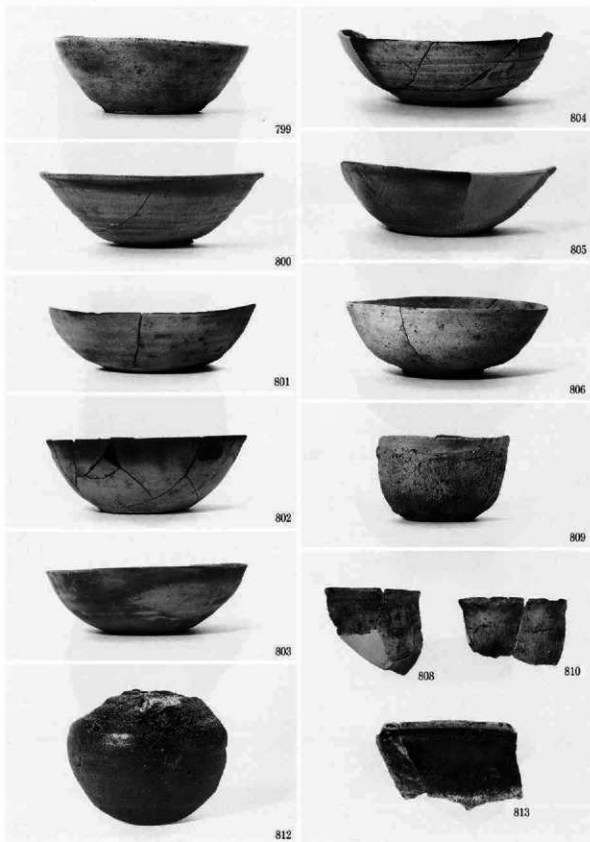


SI26B出土土器③









SI29・30 出土土器



866



815



816



817



818



819



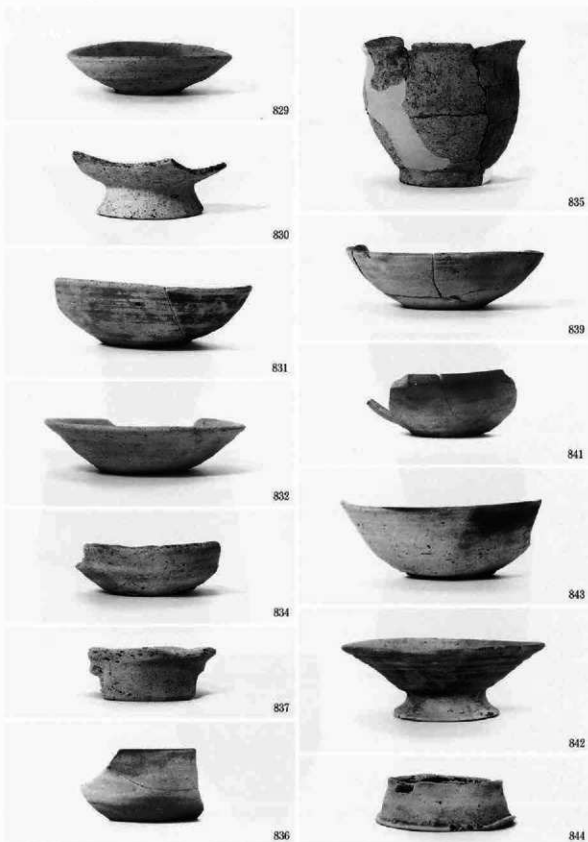
820



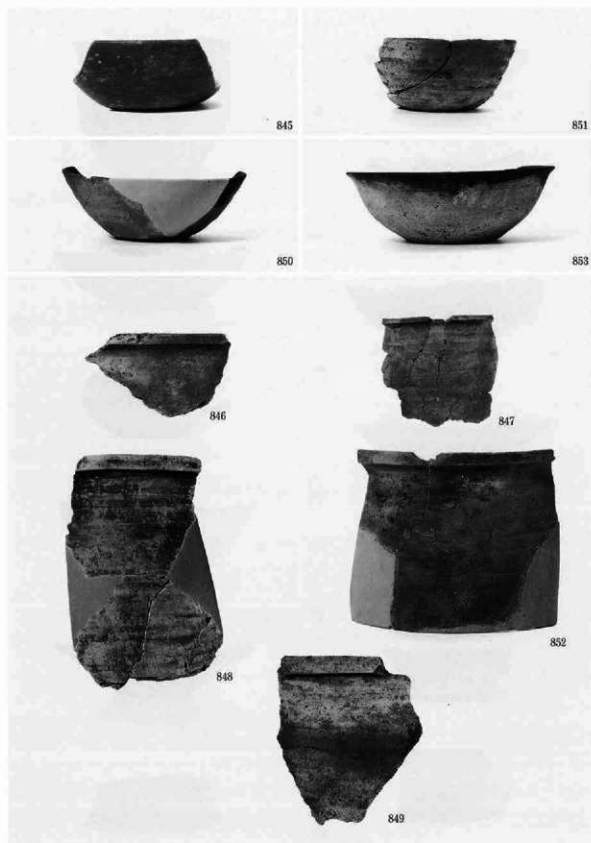
821



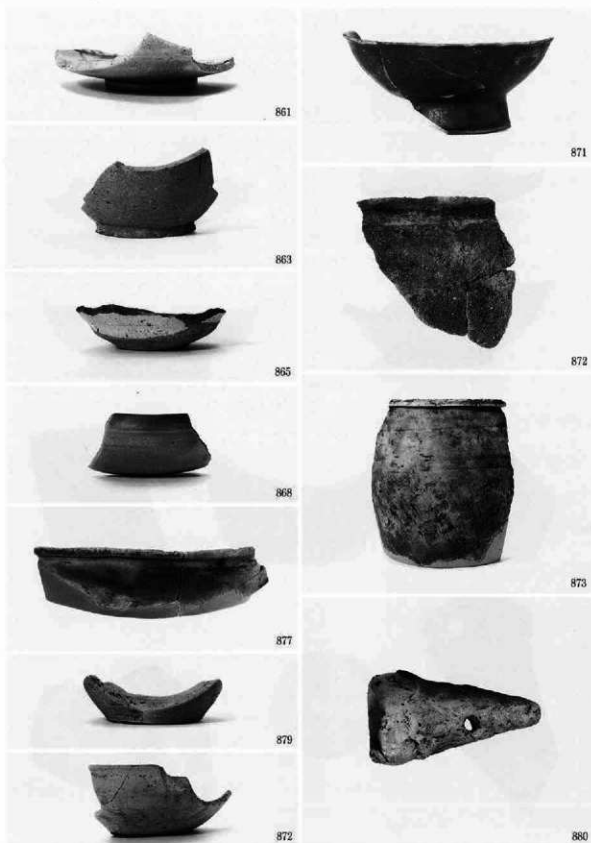
867



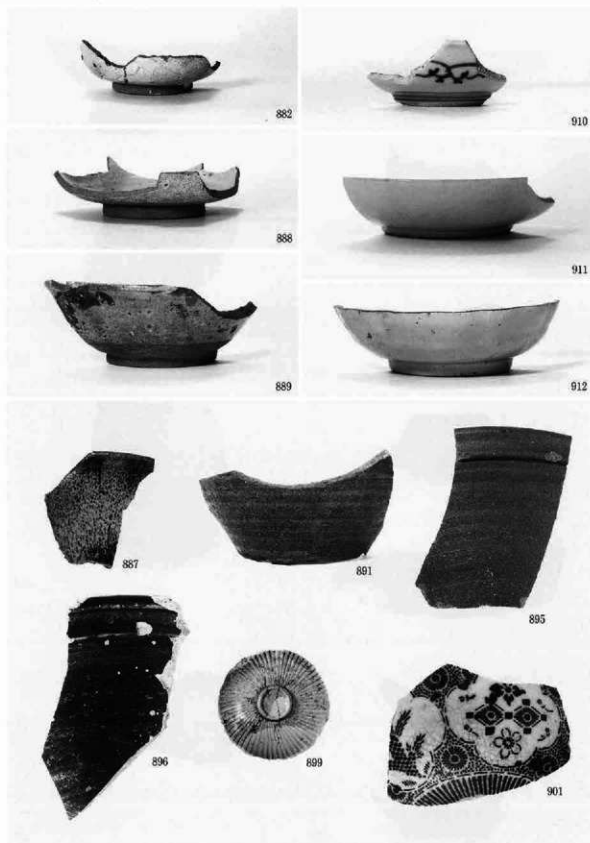
SK 出土土器①



SK 出土土器②



SD04・SE01・遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



519



770



760



814



568



825



921



553



SI21 出土鍛造剥片・粒状滓類

出土鉄製品

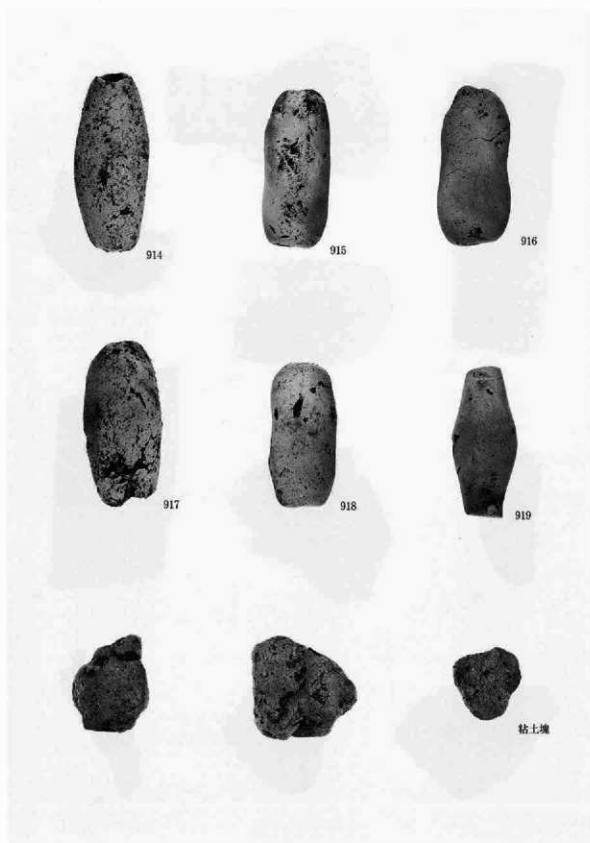




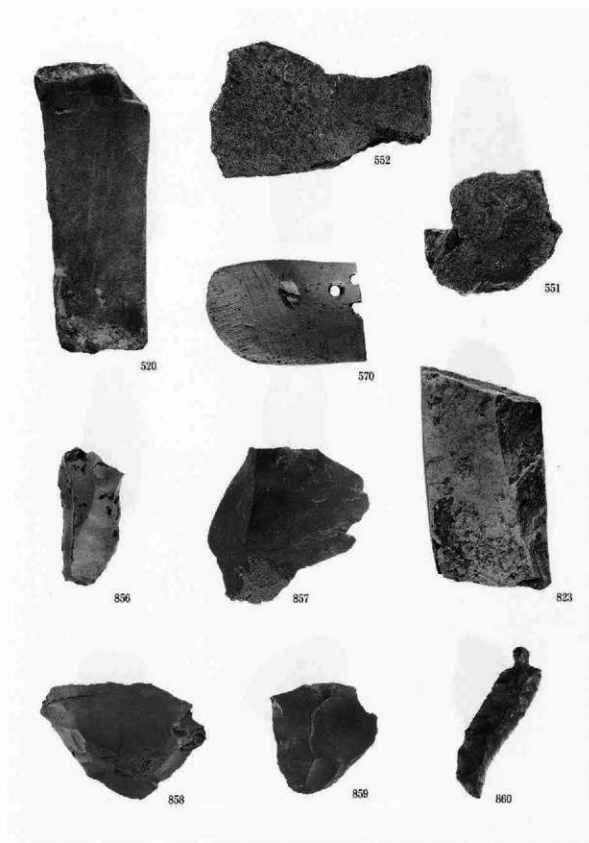
766



S126 B 出土陶硯



出土土製品



出土石器

# 報告書抄録

ふりがな	にしかわめ・せきむかいにいせきはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	西川目・塚向Ⅱ遺跡発掘調査報告書								
シリーズ名									
副書名	県営ほ場整備事業二子地区関連遺跡発掘調査								
巻次									
シリーズ番号	第464集								
編著者名	西澤正晴(編)・小針大志 赤沼英男 吉川純子 榎ハリノサベイ 岐阜環境研究所								
編集機関	岐阜手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市ト飯門11地別185番地 TEL 019-638-9001								
発行年月日	西暦 2005年2月28日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇〇°	東経 〇〇°	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
西川目遺跡	北上市二子町 西川目66	03206	ME56-1101	39度 19分 5秒	141度 8分 2秒	2003.04.09 ～ 2003.07.11	2,000㎡	県営ほ場整備 事業	
塚向Ⅱ遺跡	北上市二子町 南田8	03206	ME56-0189	39度 19分 9秒	141度 7分 57秒	2003.07.14 ～ 2003.11.03	3,200㎡		
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
西川目遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代 江戸時代	竪穴住居跡	9	土師器	平安時代の崩付建物跡や 総柱式建物跡が付随した 大規模な集落跡。 硯や緑釉陶器などの遺物 が出土。			
			掘立柱建物跡	6	須恵器				
			溝跡	5	縄文土器				
			土坑	5	鉄製品(鉄滓・鍛造屑)				
			水山跡	1	片を含む)				
			墓墳	10	石器				
			ピット・槽跡		土製品(硯・土鏝など)				
			塚向Ⅱ遺跡				竪穴住居跡	46	陶磁器(近世・古代鉄 釉・灰釉陶器を含む)
							掘立柱建物跡	3	
							溝跡	11	
土坑	57								
ピット など									

平成16年度 栃岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長 相 原 康 二 副 所 長 平 野 允 苗

(答習課)

課 長 長 垂 澤 正 吾  
課 長 補 佐 小 田 島 宏 道  
主 任 主 任 中 嶋 嶋 賢 一  
主 事 幸 子

副 所 長 高 橋 清 助  
常 務 伊 藤 泉 治 美  
伊 藤 麗 滋 子

(調査第一課)

課 長 三 浦 謙 一  
課 長 補 佐 高 金 子 義 昭 介  
文化財専門員 水 上 明 博  
文化財調査員 阿 部 勝 剛  
" 杉 沢 昭 太郎  
" (尊之御所支援施設) 浩 二 郎  
" 村 上 拓  
" 戸 根 貴 之  
" 八 木 勝 枝  
" 丸 山 清 治  
" 米 田 寛 敷  
" 北 山 原 弘 征  
" 村 田 淳 臣  
期限付調査員 石 崎 高 裕  
" 立 花 野 裕  
" 新 井 田 え り 子

(調査第二課)

課 長 佐 々 木 清 文  
主 幹 兼 課 長 補 佐 中 川 重 紀  
文化財専門員 小 山 内 透  
(県教委研修派遣) 金 子 佐 知 子  
" 演 田 直 宏  
" 羽 柴 田 直 人  
文化財調査員 吉 田 允  
" 阿 部 徳 幸  
" 早 坂 淳  
" 小 憲 松 岩 也  
" 龜 崎 澤 行  
" 鈴 鈴 新 林 妻 裕 明  
" 星 山 妻 伸 也  
" 西 丸 澤 正 臣  
" 丸 山 正 置  
" 村 木 敬  
" 福 北 須 村 原 正 忠  
" 川 又 村 繪 大  
期限付調査員 小 針 大 志  
(6月退職)

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集

## 西川日・堰向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

県営巨場整備事業二子地区関連遺跡発掘調査

印刷 平成17年 2月21日

発行 平成17年 2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 0853 盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020-0066 盛岡市上山1丁目6番49号

電話 (019) 653-4151

FAX (019) 654-0435

